松山市文化財調査報告書 71

岩崎遺跡

—本文編—

1998

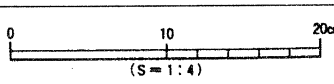
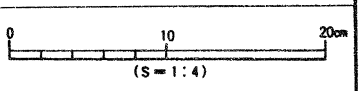
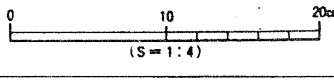
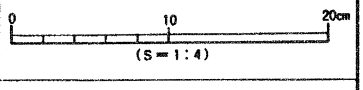
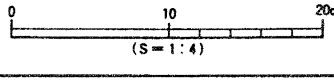
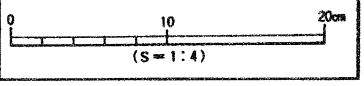
松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

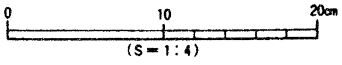
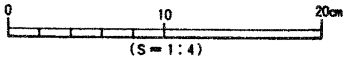
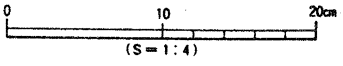
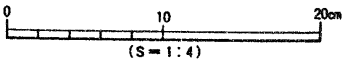
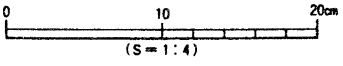
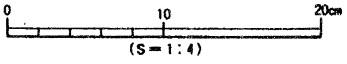
『岩崎遺跡－本文編－』 正誤表

No.1

頁	行数	誤	正
表紙	下	１９９８	１９９９
中表紙	下	１９９８	１９９９
26	23行目	及び観察表	トル
46	図右上のスケール		
64	27行目	なお、各溝～に記す。	トル
83	図右下	ⅡB-① 灰黄褐色(10YR6/2)土	ⅡB-② 灰黄褐色(10YR6/2)土
124	４行目	５ＹＲ５/３	５Ｙ５/３
145	図右下	Ⅷc-② 灰白色(7.5Y7/1)砂礫	Ⅷc-② 灰白色(5Y8/1)砂礫
	図右下	Ⅷc-③ 灰白色(5Y8/1)砂礫	Ⅷc-③ 灰白色(7.5Y7/1)砂礫
147	図中央右	『SXV401』は2箇所記載	1箇所をトル
	図中央右	『SXV402』は2箇所記載	1箇所をトル
	図中央右	『SXV403』は2箇所記載	1箇所をトル
	図右下	Ⅷc-② 灰白色(7.5Y7/1)砂礫	Ⅷc-② 灰白色(5Y8/1)砂礫
182	図中央	○焼土、赤刷	トル
279	図左	Ａ Ａ′ Ｂ Ｂ′ Ｃ Ｃ′	Ａ′Ａ Ｂ′Ｂ Ｃ′Ｃ
294	14行目	５Ｙ８/１	５Ｙ６/２
297	図右上	『SXⅦ101』は2箇所記載	1箇所をトル
	図中央下	Ⅷc-③	Ⅷc-④
	図右下	Ⅷc-③	Ⅷc-④
	図右下	Ⅷc-② 灰白色(7.5Y7/1)砂礫	Ⅷc-② 灰白色(5Y8/1)砂礫
	図右下	Ⅷc-③ 灰白色(5Y8/1)砂礫	Ⅷc-④ 灰白色(5Y6/2)砂礫
299	図左上	Ⅷc-③	Ⅷc-④
	図左下	Ⅷc-③ 灰白色(5Y8/1)砂礫	Ⅷc-④ 灰白色(5Y6/2)砂礫
316	図右上のスケール		
321	図左下のスケール		

『岩崎遺跡－本文編－』 正誤表

No.2

頁	行数	誤	正
334	図左下の実測図		VI268
381	図右上のスケール		
	図左下のスケール		
384	図中央のスケール		
391	図中央	ＳＫⅥ11	ＳＫⅥ113
402	図左下	Ⅴ465・473	Ⅵ465・473
427	図右上	焼土と炭化物の混合 (2箇所記載)	トル
511	図左下	(Ｓ＝１：３)	(Ｓ＝１：６)

『岩崎遺跡－図版編－』 正誤表

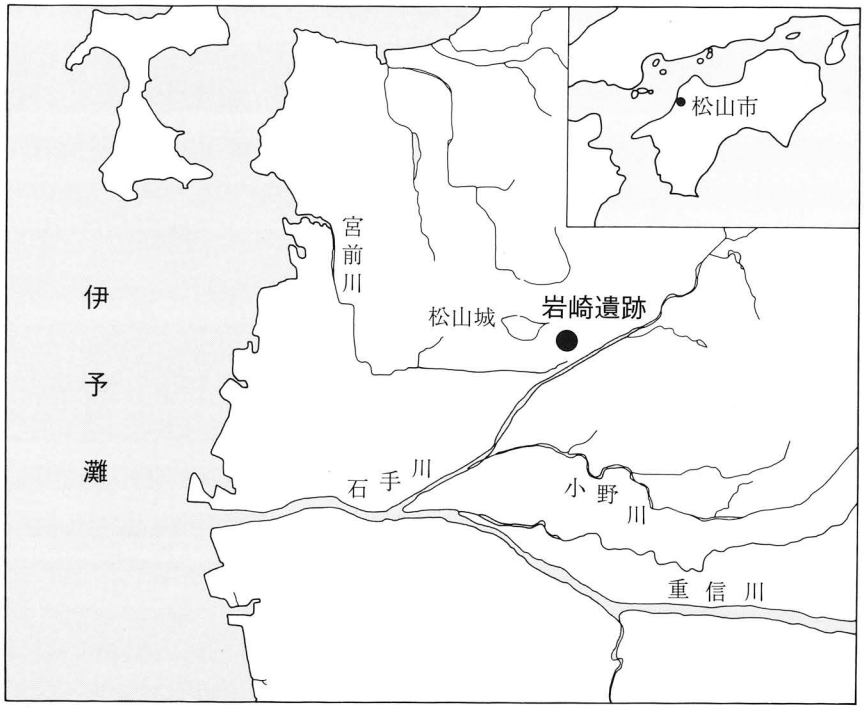
頁	行 数	誤	正
表 紙	下	１９９８	１９９９
中表紙	下	１９９８	１９９９

注１．スケールの誤りは、正しい図をシールとして添付。

２．Ｐ334、第225図左下の実測図は、シールとして添付。

岩崎遺跡

—本文編—

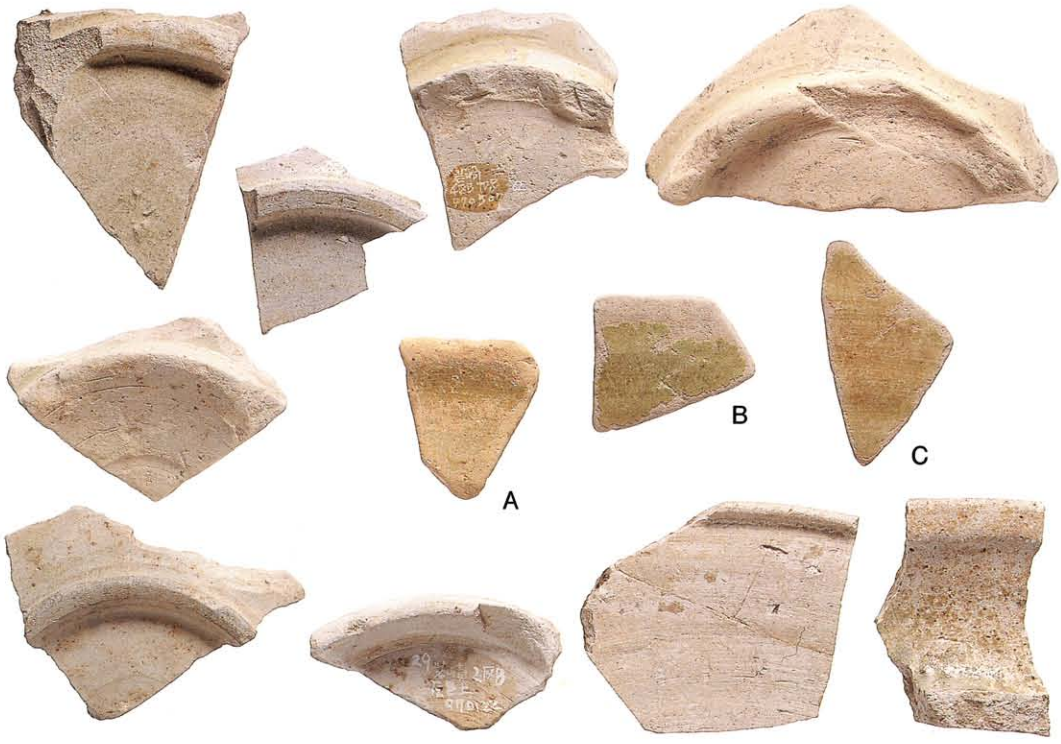


1998

松山市教育委員会
財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版１　　調査地遠景（南より）

巻頭図版 2　　土　馬



巻頭図版 3　　施 釉 陶 器

序

松山城の北側一帯には、愛媛県下を代表する弥生時代集落の道後城北遺跡群が展開しています。今回、報告します岩崎遺跡は、道後城北遺跡群東部の閑静な住宅街に位置しています。この地域は、道後今市遺跡や道後湯築城址をはじめとする縄文時代晩期から中世までの複合遺跡であることが、近年の調査で明らかになってきています。

本調査においては、弥生時代から中世までの遺構や遺物が多数みつかりました。弥生時代では、前期末から中期初頭に時期比定される３条の大溝や185基の土坑が検出され、当時の状況や集落のしくみを解明する貴重な手がかりを得ることができました。古代ではＬ字形に折れ曲がる溝が検出され、溝内からは畿内産土師器や硯のほか、愛媛県内で２例目の発見となる土馬（小型土製馬）が出土しています。また、中世では主に14・15世紀頃の建物址や土坑のほか、水田址や畑址などがみつかっています。これらの遺構や遺物の検出は、道後城北遺跡群東部地域における古代・中世集落の景観を復元するうえで貴重な資料となるものです。

本書の刊行にあたり、発掘調査についてご指導を頂きました関係各位ならびに関係機関には厚くお礼を申し上げます。今後とも埋蔵文化財の発掘調査に関し、なお一層のご指導、ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

また、本書が埋蔵文化財調査研究の一助となり、さらには文化財保護、生涯教育の向上に寄与できれば幸いです。

平成11年３月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　田　中　誠　一

例　　言

1．本書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成８年６月から平成10年３月に実施した松山環状線（岩崎）道路建設に伴う事前の発掘調査報告書である。

2．本書報告の遺構は呼称名を略号化して記述した。竪穴式住居址：竪穴、掘立柱建物址：掘立、溝：ＳＤ、自然流路：ＳＲ、土坑：ＳＫ、ピット：ＳＰ、土器溜まり：ＳＸである。

3．本書で使用した標高数値は海抜標高を示し、方位はすべて国土座標を基準とした真北である。

4．本書報告の遺構埋土・土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務所監修の『新版標準土色帖』（1996）に準拠した。

5．遺構の実測は宮内慎一の責任のもと、相原秀仁が中心に行い、遺構の撮影は宮内、相原、大西朋子が行った。遺物撮影と図版作成は大西が行った。

6．本書報告の遺構図の縮尺は竪穴式住居址、掘立柱建物址は1/60、土坑は1/30で統一し、他は縮分値をスケール下に注記した。遺物の実測図は縄文土器、弥生土器は1/4、土師器、須恵器は1/3、石製品、鉄製品は1/3、土製品は1/2を原則とし、他は縮分値をスケール下に注記した。

7．遺物の実測・製図、遺構の製図は宮内、相原、田丸竜馬、水口あをい、森田利恵、越智令子、田崎真理、中村紫、山下満佐子、平岡直美、大西陽子、西本三枝、日之西美春が行った。

8．本書の執筆は、第５・６・８章を相原が担当し、他は宮内が執筆した。浄書は宮内の指導のもと、中村紫が担当した。

9．科学分析では、株式会社古環境研究所に珪酸体や花粉及び種実、元興寺文化財研究所に鉄製品の分析・鑑定を頂いた。なお、分析に使用した試料番号は図中に黒丸に白字で表示した。

10．調査及び報告書作成においては、愛媛大学下條信行、松原弘宣、平井幸弘、川岡勉、田崎博之、村上恭通、奈良国立文化財研究所松井章、奈良国立博物館林部均、高橋昭彦、下関市立博物館伊東昭雄の諸先生方にご指導、ご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。

11．本書の編集は宮内が行い、梅木謙一、水口あをいの協力を得た。

12．本書で報告した遺物・記録類は松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

本 文 目 次

第1章　はじめに ―― 〔宮内〕…… 1
1．調査に至る経緯　2．調査・刊行組織　3．立地・環境
第2章　調査の概要 ―― 〔宮内〕…… 14
1．調査の経緯　2．層　位
第3章　Ⅰ区の調査 ―― 〔宮内〕…… 29
1．調査の経緯　2．層　位　3．中世の遺構と遺物　4．古墳時代～古代の遺構と遺物
5．弥生時代の遺構と遺物　6．小　結
第4章　Ⅱ区の調査 ―― 〔宮内〕…… 51
1．調査の経緯　2．層　位　3．近世の遺構と遺物　4．中世の遺構と遺物
5．古墳時代～古代の遺構と遺物　6．弥生時代の遺構と遺物　7．その他の遺構と遺物
8．小　結
第5章　Ⅲ区の調査 ―― 〔相原〕…… 79
1．調査の経緯　2．層　位　3．中世の遺構と遺物　4．古墳時代～古代の遺構と遺物
5．弥生時代の遺構と遺物　6．その他の遺構と遺物　7．小　結
第6章　Ⅳ区の調査 ―― 〔相原〕…… 121
1．調査の経緯　2．層　位　3．中世の遺構と遺物　4．古墳時代～古代の遺構と遺物
5．弥生時代の遺構と遺物　6．その他の遺構と遺物　7．小　結
第7章　Ⅴ区の調査 ―― 〔宮内〕…… 141
1．調査の経緯　2．層　位　3．弥生時代前期末～中期初頭の遺構と遺物
4．弥生時代中～後期の遺構と遺物　5．古墳時代～古代の遺構と遺物
6．中世の遺構と遺物　7．その他の遺構と遺物　8．小　結
第8章　Ⅵ区の調査 ―― 〔相原〕…… 291
1．調査の経緯　2．層　位　3．弥生時代前期末～中期初頭の遺構と遺物
4．弥生時代中～後期の遺構と遺物　5．古墳時代～古代の遺構と遺物
6．中世の遺構と遺物　7．その他の遺構と遺物　8．小　結
第9章　自然科学分析 ―― 〔(株)古環境研究所〕433
Ⅰ　植物珪酸体分析　Ⅱ　珪藻分析　Ⅲ　花粉分析　Ⅳ　炭化材の樹種同定
Ⅴ　種実同定
第10章　調査の成果 ―― 〔宮内〕…… 453
Ⅰ　地形の変遷　Ⅱ　集落の変遷　Ⅲ　弥生時代前期末～中期初頭の土器
Ⅳ　貝殻施文土器　Ⅴ　弥生時代の搬入品・外来系土器
Ⅵ　弥生時代前期末～中期初頭の石器　Ⅶ　弥生時代前期末～中期初頭の土坑
Ⅷ　弥生時代前期末～中期初頭の集落変化　Ⅸ　古代の土器　Ⅹ　動物遺存体
第11章　おわりに ―― 〔宮内〕…… 518

挿 図 目 次

第1章　はじめに

第 1 図　松山平野の地質図（縮尺1/100,000）…… 3
第 2 図　松山平野の主要遺跡分布図（縮尺1/100,000）…… 4
第 3 図　道後城北地区の遺跡分布図（縮尺1/15,000）…… 7

第2章　調査の概要

第 4 図　調査地測量図（縮尺1/4,000）…… 15
第 5 図　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区測量図・土層柱状図（縮尺1/1,000、1/40）…… 17
第 6 図　Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区測量図・土層柱状図（縮尺1/1,000、1/40）…… 19

第3章　Ⅰ区の調査

第 7 図　Ⅰ区測量図（縮尺1/800）…… 30
第 8 図　Ⅰ区区割図・土層模式図（縮尺1/1,000、1/40）…… 31
第 9 図　Ⅰ区〔第1地区・第2地区〕遺構配置図・土層図（縮尺1/150、1/50）…… 33
第10図　Ⅰ区〔第3地区・第4地区〕遺構配置図・土層図（縮尺1/150、1/50）…… 35
第11図　Ⅰ区水田址・畑址の調査状況図（縮尺1/1,000）…… 38
第12図　ＳＤⅠ401・402測量図（縮尺1/60）…… 41
第13図　第Ⅱ層出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 42
第14図　ＳＲⅠ203出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 43
第15図　古墳時代～古代の遺構配置図（縮尺1/800）…… 44
第16図　ＳＲⅠ101・201・202出土遺物実測図（縮尺1/3）
第17図　弥生時代の遺構配置図（縮尺1/800）…… 45
第18図　ＳＲⅠ001・002及び第Ⅷ層出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 46

第4章　Ⅱ区の調査

第19図　Ⅱ区測量図（縮尺1/800）…… 52
第20図　Ⅱ区区割図・土層模式図（縮尺1/1,000、1/40）…… 53
第21図　Ⅱ区遺構配置図・土層図（縮尺1/150、1/50）…… 55
第22図　Ⅱ区〔第1地区〕遺構配置図（縮尺1/150）…… 57
第23図　ＳＤⅡ201・202測量図（縮尺1/80）…… 59
第24図　ＳＤⅡ201出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 60
第25図　第ⅡＡ-⑧層出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 62
第26図　第ⅡＡ-①層出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 63
第27図　ＳＤⅡ202出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 65
第28図　ＳＤⅡ109・110測量図（縮尺1/60）…… 66
第29図　ＳＤⅡ111測量図・出土遺物実測図（縮尺1/60、1/3）…… 68
第30図　ＳＲⅡ001状況図・出土遺物実測図（縮尺1/800、1/3）…… 69
第31図　ＳＫⅡ201～203測量図（縮尺1/30）…… 70

第32図　第Ⅲ・Ⅳ層及び地点不明出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 71
第33図　ＳＲⅡ201状況図（縮尺1/800）…… 72
第34図　ＳＲⅡ201・第Ⅷ層・トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 73

第5章　Ⅲ区の調査

第35図　Ⅲ区測量図（縮尺1/800）…… 80
第36図　Ⅲ区区割図・土層模式図（縮尺1/1,000、1/40）…… 81
第37図　Ⅲ区〔第1地区・第2地区〕遺構配置図・土層図（縮尺1/150、1/50）…… 83
第38図　Ⅲ区〔第3地区〕遺構配置図・土層図（縮尺1/150、1/50）…… 85
第39図　掘立Ⅲ301～304測量図（縮尺1/60）…… 89
第40図　掘立Ⅲ301～304出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 90
第41図　ＳＡⅢ301測量図（縮尺1/60）…… 91
第42図　ＳＤⅢ301測量図・出土遺物実測図（縮尺1/60、1/3）
第43図　ＳＫ〔中世〕測量図(1)（縮尺1/30）…… 93
第44図　ＳＫ〔中世〕測量図(2)（縮尺1/30）…… 94
第45図　第ⅡＢ-①層出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）…… 96
第46図　第ⅡＢ-①層出土遺物実測図(2)（縮尺1/3）…… 97
第47図　第ⅡＢ-②層出土遺物実測図（縮尺1/3）
第48図　ＳＤⅢ201出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 99
第49図　ＳＫⅢ101・102測量図及び出土遺物実測図（縮尺1/30、1/3）…… 100
第50図　ＳＤⅢ302出土遺物実測図（縮尺1/3）
第51図　ＳＫ〔古墳時代～古代〕測量図(1)（縮尺1/30）…… 103
第52図　ＳＫ〔古墳時代～古代〕測量図(2)（縮尺1/30）…… 105
第53図　ＳＫ出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 106
第54図　ＳＸⅢ201測量図（縮尺1/150）…… 107
第55図　第Ⅲ層出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）…… 108
第56図　第Ⅲ層出土遺物実測図(2)（縮尺1/3、2/3）…… 109
第57図　第Ⅳ層出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）…… 111
第58図　第Ⅳ層出土遺物実測図(2)（縮尺1/3、1/2）…… 112
第59図　第Ⅳ層出土遺物実測図(3)（縮尺1/3）…… 113
第60図　ＳＲⅢ001状況図（縮尺1/800）…… 114
第61図　ＳＲⅢ001・第Ⅷ層出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 115
第62図　トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 116

第6章　Ⅳ区の調査

第63図　Ⅳ区測量図（縮尺1/800）…… 122
第64図　Ⅳ区区割図・土層模式図（縮尺1/1,000、1/40）…… 123
第65図　Ⅳ区遺構配置図・土層図（縮尺1/150、1/50）…… 125
第66図　ＳＫⅣ102測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/3）…… 127
第67図　第ⅡＢ-①層出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 128

第68図　第ⅡB-②層出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 129
第69図　掘立Ⅳ201測量図（縮尺1/60）…… 130
第70図　掘立Ⅳ201出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 131
第71図　ＳＫⅣ101測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/3）
第72図　ＳＸ出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 133
第73図　第Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 134
第74図　第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺1/3、2/3）…… 135
第75図　第Ⅷ層出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 136
第76図　地点不明出土遺物実測図（縮尺1/4、2/3）…… 137

第７章　Ⅴ区の調査

第77図　Ⅴ区測量図（縮尺1/800）…… 142
第78図　Ⅴ区区割図・土層模式図（縮尺1/1,000、1/40）…… 144
第79図　Ⅴ区〔第１地区・第２地区〕遺構配置図・土層図（縮尺1/150、1/50）…… 145
第80図　Ⅴ区〔第３地区・第４地区〕遺構配置図・土層図（縮尺1/150、1/50）…… 147
第81図　ＳＤⅤ202測量図・ベルト土層図（縮尺1/60）…… 152
第82図　ＳＤⅤ202土層図〔上：西壁、中：ベルト、下：東壁〕（縮尺1/60）…… 153
第83図　ＳＤⅤ202下層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 155
第84図　ＳＤⅤ202下層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 156
第85図　ＳＤⅤ202下層出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）…… 157
第86図　ＳＤⅤ202下層出土遺物実測図(4)（縮尺1/4）…… 158
第87図　ＳＤⅤ202下層出土遺物実測図(5)（縮尺1/4、2/3、1/3）…… 159
第88図　ＳＤⅤ202中層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 160
第89図　ＳＤⅤ202中層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 161
第90図　ＳＤⅤ202中層出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）…… 162
第91図　ＳＤⅤ202中層出土遺物実測図(4)（縮尺1/4、1/3）…… 163
第92図　ＳＤⅤ202上層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 164
第93図　ＳＤⅤ202上層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 165
第94図　ＳＤⅤ202上層出土遺物実測図(3)（縮尺1/4、1/3）…… 166
第95図　ＳＤⅤ203測量図（縮尺1/60）…… 167
第96図　ＳＤⅤ203出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 168
第97図　Ⅴ区土坑Ｆ分布図（縮尺1/400）…… 170
第98図　ＳＫⅤ465測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 172
第99図　ＳＫⅤ423測量図（縮尺1/30）…… 173
第100図　ＳＫⅤ204測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、1/3）…… 174
第101図　土坑Ｆ出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 175
第102図　Ⅴ区土坑Ｅ分布図（縮尺1/400）…… 176
第103図　ＳＫⅤ463測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 178
第104図　ＳＫⅤ426測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 179

第105図　Ⅴ区土坑Ｄ分布図（縮尺1/400）…… 180
第106図　ＳＫＶ424測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 182
第107図　ＳＫＶ427測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 184
第108図　ＳＫＶ304測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 185
第109図　ＳＫＶ207・210～212測量図（縮尺1/30）…… 187
第110図　ＳＫＶ207・210～212出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 188
第111図　ＳＫＶ215測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 189
第112図　ＳＫＶ216測量図（縮尺1/30）…… 191
第113図　ＳＫＶ303測量図（縮尺1/30）
第114図　ＳＫＶ457・462測量図（縮尺1/30）…… 192
第115図　ＳＫＶ457・462出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 193
第116図　ＳＫＶ420・444出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 194
第117図　Ⅴ区土坑Ｃ分布図（縮尺1/400）…… 195
第118図　ＳＫＶ201測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、1/3）…… 198
第119図　ＳＫＶ437測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、1/3）…… 199
第120図　ＳＫＶ223・302・314・478測量図（縮尺1/30）…… 201
第121図　ＳＫＶ223・302・314出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 202
第122図　ＳＫＶ221測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 203
第123図　ＳＫＶ425測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、2/3）…… 204
第124図　ＳＫＶ222・448・464・479測量図（縮尺1/30）…… 205
第125図　ＳＫＶ222・448・464・479出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 206
第126図　ＳＫＶ310測量図（縮尺1/30）…… 207
第127図　ＳＫＶ310出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 208
第128図　ＳＫＶ461出土遺物実測図（縮尺1/4）
第129図　Ⅴ区土坑Ｂ分布図（縮尺1/400）…… 209
第130図　ＳＫＶ460測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 212
第131図　ＳＫＶ202測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 213
第132図　ＳＫＶ217測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、2/3）…… 214
第133図　ＳＫＶ306測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 215
第134図　ＳＫＶ309測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 216
第135図　ＳＫＶ214出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 217
第136図　ＳＫＶ218測量図（縮尺1/30）…… 218
第137図　ＳＫＶ218出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 219
第138図　ＳＫＶ305測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 220
第139図　ＳＫＶ319測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 221
第140図　ＳＫＶ317・416・438・441測量図（縮尺1/30）…… 223
第141図　ＳＫＶ317・416・441出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 224
第142図　ＳＫＶ411測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 225

第143図　ＳＫＶ432測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 226
第144図　ＳＫＶ433測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、1/3）…… 227
第145図　ＳＫＶ414･439測量図（縮尺1/30）…… 229
第146図　ＳＫＶ436・472・473測量図（縮尺1/30）…… 230
第147図　Ｖ区土坑Ａ分布図（縮尺1/400）…… 232
第148図　ＳＫＶ417測量図（縮尺1/30）…… 233
第149図　ＳＫＶ445測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 234
第150図　ＳＫＶ487測量図（縮尺1/30）…… 235
第151図　ＳＫＶ487出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 236
第152図　ＳＸＶ201～203出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3、2/3）…… 238
第153図　ＳＸＶ301～304出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 240
第154図　ＳＸＶ305出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 241
第155図　ＳＸＶ401～403出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 242
第156図　ＳＰＶ108測量図（縮尺1/20）…… 243
第157図　ＳＰＶ108出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 244
第158図　ＳＰ出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 245
第159図　第Ⅵ層出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 246
第160図　Ｖ区〔弥生時代中～後期〕遺構配置図（縮尺1/400）…… 248
第161図　ＳＫＶ203測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 249
第162図　ＳＫＶ301測量図（縮尺1/30）…… 250
第163図　ＳＫＶ435測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）
第164図　ＳＫＶ405測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 251
第165図　ＳＫＶ406測量図（縮尺1/30）…… 252
第166図　第Ⅴ層出土遺物実測図（縮尺1/4、2/3）…… 253
第167図　Ｖ区〔古墳時代～古代〕遺構配置図（縮尺1/600）…… 254
第168図　ＳＤＶ201測量図（縮尺1/100）…… 256
第169図　ＳＤＶ201出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）…… 258
第170図　ＳＤＶ201出土遺物実測図(2)（縮尺1/3）…… 259
第171図　ＳＤＶ201出土遺物実測図(3)（縮尺1/3）…… 260
第172図　ＳＤＶ201出土遺物実測図(4)（縮尺1/4、1/3）…… 261
第173図　ＳＤＶ401測量図（縮尺1/60）…… 262
第174図　ＳＤＶ401出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）…… 264
第175図　ＳＤＶ401出土遺物実測図(2)（縮尺1/3）…… 265
第176図　ＳＤＶ103測量図（縮尺1/60）…… 266
第177図　ＳＤＶ103出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 267
第178図　ＳＫＶ418測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/3）…… 268
第179図　ＳＫＶ451測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/3）
第180図　ＳＫＶ413測量図（縮尺1/30）…… 270

第181図　ＳＫＶ475測量図（縮尺1/30）
第182図　ＳＫＶ440測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/3）…… 271
第183図　ＳＫＶ443測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/3）…… 272
第184図　第Ⅲ層出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）…… 273
第185図　第Ⅲ層出土遺物実測図(2)（縮尺1/3、2/3）…… 274
第186図　第Ⅳ層出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）…… 275
第187図　第Ⅳ層出土遺物実測図(2)（縮尺1/3）…… 276
第188図　Ⅴ区〔中世〕遺構配置図（縮尺1/600）…… 278
第189図　ＳＤＶ301測量図（縮尺1/60）…… 279
第190図　ＳＫＶ101・102・311・318測量図（縮尺1/30）…… 280
第191図　第ⅡＢ-②層出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 281
第192図　地点不明出土遺物実測図（縮尺1/3、2/3、1/1）…… 283

第８章　Ⅵ区の調査

第193図　Ⅵ区測量図（縮尺1/800）…… 292
第194図　Ⅵ区区割図・土層模式図（縮尺1/1,000、1/40）…… 295
第195図　Ⅵ区〔第１地区・第２地区〕遺構配置図・土層図（縮尺1/150、1/50）…… 297
第196図　Ⅵ区〔第３地区〕遺構配置図・土層図（縮尺1/150、1/50）…… 299
第197図　ＳＤⅥ104測量図・ベルト土層図（縮尺1/60）…… 301
第198図　ＳＤⅥ104土層図〔上：西壁、中：ベルト、下：東壁〕（縮尺1/60）…… 302
第199図　ＳＤⅥ104下層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 305
第200図　ＳＤⅥ104下層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 306
第201図　ＳＤⅥ104下層出土遺物実測図(3)（縮尺1/4、2/3）…… 307
第202図　ＳＤⅥ104中層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 308
第203図　ＳＤⅥ104中層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 309
第204図　ＳＤⅥ104中層出土遺物実測図(3)（縮尺1/4、1/3）…… 310
第205図　ＳＤⅥ104上層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 312
第206図　ＳＤⅥ104上層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 313
第207図　ＳＤⅥ104上層出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）…… 314
第208図　ＳＤⅥ104上層出土遺物実測図(4)（縮尺1/4）…… 315
第209図　ＳＤⅥ104上層出土遺物実測図(5)（縮尺1/4、1/3）…… 316
第210図　ＳＤⅥ104地点不明出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 317
第211図　ＳＤⅥ105測量図（縮尺1/60）…… 318
第212図　ＳＤⅥ105土層図〔上：西壁、中：ベルト、下：東壁〕（縮尺1/60）…… 319
第213図　ＳＤⅥ105下層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 321
第214図　ＳＤⅥ105下層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 322
第215図　ＳＤⅥ105中層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 325
第216図　ＳＤⅥ105中層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 326
第217図　ＳＤⅥ105中層出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）…… 327

第218図　ＳＤⅥ105中層出土遺物実測図(4)（縮尺1/4）…… 328
第219図　ＳＤⅥ105中層出土遺物実測図(5)（縮尺1/4）…… 329
第220図　ＳＤⅥ105中層出土遺物実測図(6)（縮尺1/4）…… 330
第221図　ＳＤⅥ105中層出土遺物実測図(7)（縮尺1/3）…… 331
第222図　ＳＤⅥ105上層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 332
第223図　ＳＤⅥ105上層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 333
第224図　ＳＤⅥ105上層出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）…… 334
第225図　ＳＤⅥ105地点不明出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）
第226図　Ⅵ区土坑Ｅ分布図（縮尺1/400）…… 337
第227図　ＳＫⅥ172測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 338
第228図　ＳＫⅥ129測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 339
第229図　ＳＫⅥ193測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 340
第230図　ＳＫⅥ174測量図（縮尺1/30）
第231図　Ⅵ区土坑Ｄ分布図（縮尺1/400）…… 342
第232図　ＳＫⅥ143･202測量図（縮尺1/30）…… 343
第233図　ＳＫⅥ178測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 344
第234図　ＳＫⅥ123測量図（縮尺1/30）
第235図　ＳＫⅥ126測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 345
第236図　ＳＫⅥ134測量図（縮尺1/30）…… 346
第237図　ＳＫⅥ139測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、2/3）
第238図　ＳＫⅥ195測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 347
第239図　ＳＫⅥ305測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 348
第240図　ＳＫⅥ308測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）
第241図　Ⅵ区土坑Ｃ分布図（縮尺1/400）…… 350
第242図　ＳＫⅥ144測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、1/3）…… 351
第243図　ＳＫⅥ160測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 352
第244図　ＳＫⅥ140・162測量図（縮尺1/30）…… 353
第245図　ＳＫⅥ130測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 354
第246図　ＳＫⅥ153測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 355
第247図　ＳＫⅥ182測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 356
第248図　ＳＫⅥ205測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 358
第249図　ＳＫⅥ166測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 359
第250図　ＳＫⅥ163測量図（縮尺1/30）
第251図　ＳＫⅥ187測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、1/3）…… 360
第252図　Ⅵ区土坑Ｂ分布図（縮尺1/400）…… 362
第253図　ＳＫⅥ183測量図（縮尺1/30）…… 363
第254図　ＳＫⅥ183出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 364
第255図　ＳＫⅥ179測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 365

第256図　ＳＫⅥ158測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、1/3）…… 366
第257図　ＳＫⅥ204測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 368
第258図　ＳＫⅥ117･133･138測量図（縮尺1/30）…… 369
第259図　ＳＫⅥ141測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 370
第260図　ＳＫⅥ190測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、2/3）…… 371
第261図　ＳＫⅥ180測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、1/3）…… 372
第262図　ＳＫⅥ189測量図（縮尺1/30）…… 373
第263図　ＳＫⅥ189出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 374
第264図　ＳＫⅥ121・154測量図（縮尺1/30）…… 375
第265図　Ⅵ区土坑Ａ分布図（縮尺1/400）…… 377
第266図　ＳＫⅥ167測量図（縮尺1/30）…… 378
第267図　ＳＫⅥ119測量図（縮尺1/30）…… 379
第268図　ＳＫⅥ124測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）
第269図　ＳＫⅥ157測量図（縮尺1/30）…… 380
第270図　ＳＫⅥ191測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 381
第271図　ＳＫⅥ164測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）
第272図　ＳＫⅥ122測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 382
第273図　ＳＫⅥ176測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、1/3）…… 383
第274図　ＳＫⅥ177・194出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3、2/3）…… 384
第275図　ＳＫⅥ192測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 386
第276図　ＳＫⅥ199測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、1/3）…… 387
第277図　ＳＸⅥ101出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 388
第278図　第Ⅵ層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 389
第279図　第Ⅵ層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4、1/3、2/3）…… 390
第280図　Ⅵ区〔第１地区〕遺構配置図（第Ⅵ層上面）（縮尺1/150）…… 391
第281図　ＳＢⅥ101測量図（縮尺1/50）…… 393
第282図　ＳＢⅥ101出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 394
第283図　ＳＢⅥ102測量図・出土遺物実測図（縮尺1/50、1/4）…… 395
第284図　ＳＢⅥ103測量図・炉②測量図（縮尺1/50、1/20）…… 397
第285図　ＳＢⅥ103出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3、2/3）…… 399
第286図　ＳＤⅥ101・102出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 400
第287図　ＳＤⅥ103測量図（縮尺1/60）…… 401
第288図　ＳＤⅥ103出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 402
第289図　ＳＤⅥ103出土遺物実測図(2)（縮尺1/4、1/3）…… 403
第290図　ＳＫⅥ115測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 404
第291図　ＳＫⅥ159・207測量図及び出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 405
第292図　ＳＫⅥ168測量図（縮尺1/30）…… 406
第293図　第Ⅴ層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 408

第294図　第Ⅴ層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 409
第295図　第Ⅴ層出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）…… 410
第296図　第Ⅴ層出土遺物実測図(4)（縮尺1/4）…… 411
第297図　第Ⅴ層出土遺物実測図(5)（縮尺1/4）…… 412
第298図　第Ⅴ層出土遺物実測図(6)（縮尺1/4、1/2）…… 413
第299図　第Ⅴ・Ⅵ層出土遺物実測図(1)（縮尺2/3、1/3）…… 414
第300図　第Ⅴ・Ⅵ層出土遺物実測図(2)（縮尺2/3）…… 415
第301図　ＳＤⅥ303出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 416
第302図　ＳＫⅥ112・161測量図（縮尺1/30）…… 417
第303図　ＳＫⅥ307測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/3）…… 418
第304図　ＳＫⅥ107・110・111測量図（縮尺1/30）…… 419
第305図　第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 420
第306図　Ⅵ区〔第１地区〕遺構配置図（第Ⅴ層上面）（縮尺1/150）…… 421
第307図　掘立Ⅵ101測量図（縮尺1/60）…… 422
第308図　掘立Ⅵ102・103測量図（縮尺1/60）…… 423
第309図　ＳＤⅥ201測量図（縮尺1/60）…… 424
第310図　ＳＤⅥ201出土遺物実測図（縮尺1/3、2/3）…… 425
第311図　ＳＤⅥ302出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 426
第312図　ＳＫⅥ101・102・302・304測量図（縮尺1/30）…… 427
第313図　ＳＫⅥ302・304出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 428
第314図　ピット出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 429

第９章　自然科学分析

第315図　Ⅰ区第1地区における植物珪酸体分析結果 …… 436
第316図　植物珪酸体の顕微鏡写真(1)…… 437
第317図　植物珪酸体の顕微鏡写真(2)…… 438
第318図　Ⅵ区ＳＤⅥ105における主要珪藻ダイアグラム …… 441
第319図　珪藻の顕微鏡写真(1)…… 442
第320図　珪藻の顕微鏡写真(2)…… 443
第321図　花粉・胞子遺体の顕微鏡写真 …… 446
第322図　岩崎遺跡出土炭化材の顕微鏡写真 …… 450
第323図　岩崎遺跡出土の種実写真 …… 452

第10章　調査の成果

第324図　岩崎遺跡の土層堆積図（縮尺1/1,500、1/100）…… 455
第325図　岩崎遺跡の集落変遷図(1)（縮尺1/1,500）
第326図　岩崎遺跡の集落変遷図(2)（縮尺1/1,500）…… 457
第327図　ＳＤⅤ202・ＳＤⅥ104・ＳＤⅥ105出土の弥生土器（縮尺1/8）…… 467
第328図　古相の土器群（縮尺1/8）…… 477
第329図　中相の土器群（縮尺1/8）…… 478

第330図　新相の土器群（縮尺1/8）…… 479
第331図　岩崎遺跡出土の貝殻施文土器（縮尺1/6）…… 482
第332図　岩崎遺跡出土の搬入品・外来系土器（縮尺1/8）…… 486
第333図　溝出土の石器（縮尺1/6、1/10）…… 490
第334図　土坑出土の石器（縮尺1/8、1/10）…… 491
第335図　貯蔵穴の断面形態分類…… 495
第336図　貯蔵穴一覧…… 497
第337図　溝・土坑変遷図(1)（縮尺1/800）…… 505
第338図　溝・土坑変遷図(2)（縮尺1/800）…… 506
第339図　岩崎遺跡出土の暗文土師器（縮尺1/6）…… 511
第340図　岩崎遺跡出土の施釉陶器（縮尺1/3）…… 513

表　目　次

第1章　はじめに
表 1　道後城北地区の遺跡一覧
第2章　調査の概要
表 2　調査区一覧
表 3　検出遺構一覧
第3章　Ⅰ区の調査
表 4　調査地区一覧
表 5　Ⅰ区遺構一覧
第4章　Ⅱ区の調査
表 6　調査地区一覧
表 7　Ⅱ区遺構一覧
第5章　Ⅲ区の調査
表 8　調査地区一覧
表 9　Ⅲ区遺構一覧
第6章　Ⅳ区の調査
表 10　調査地区一覧
表 11　Ⅳ区遺構一覧
第7章　Ⅴ区の調査
表 12　調査地区一覧
表 13　Ⅴ区遺構一覧
表 14　埋土別土坑一覧
表 15　土坑Ｆ一覧
表 16　土坑Ｅ一覧
表 17　土坑Ｄ一覧
表 18　土坑Ｃ一覧
表 19　土坑Ｂ一覧
表 20　土坑Ａ一覧
表 21　ＳＫ〔弥生中期～後期〕一覧
表 22　ピット一覧
第8章　Ⅵ区の調査
表 23　調査地区一覧
表 24　Ⅵ区遺構一覧
表 25　埋土別土坑一覧
表 26　土坑Ｅ一覧
表 27　土坑Ｄ一覧
表 28　土坑Ｃ一覧
表 29　土坑Ｂ一覧
表 30　土坑Ａ一覧
第9章　自然科学分析
表 31　岩崎遺跡における植物珪酸体分析結果
表 32　植物珪酸体の顕微鏡写真一覧
表 33　岩崎遺跡における珪藻分析結果
表 34　Ⅰ区第1地区における花粉分析結果
表 35　Ⅵ区ＳＤⅥ105における花粉分析結果
表 36　岩崎遺跡出土炭化材一覧
表 37　岩崎遺跡出土炭化材の樹種同定結果

表 38　種実同定結果

第10章　調査の成果

表 39　岩崎遺跡における地理的変遷
表 40　器種構成と分類
表 41　甕形土器の施文一覧
表 42　壺形土器の施文一覧
表 43　溝出土土器の沈線文技法一覧
表 44　土坑出土土器の沈線文技法一覧
表 45　前期末～中期初頭の土器様相
表 46　岩崎遺跡出土の貝殻施文土器一覧
表 47　岩崎遺跡出土の搬入品・外来系土器一覧
表 48　溝・土坑出土の石器組成
表 49　溝・土坑出土の石器一覧
表 50　貯蔵穴一覧
表 51　貯蔵穴分類
表 52　断面形態別一覧
表 53　堆積状況別一覧
表 54　集落変遷と土器編年
表 55　岩崎遺跡出土の暗文土師器一覧
表 56　岩崎遺跡出土の施釉陶器一覧
表 57　緑釉陶器一覧
表 58　岩崎遺跡出土の動物遺存体一覧
表 59　分布・立会・確認調査一覧

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

1995（平成７）年３月、松山市道路部街路建設課より、松山環状線（岩崎）道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

確認願いが申請された松山市持田町１丁目、岩崎町２丁目は松山平野でも有数の遺跡地帯である『道後城北遺跡群』内に所在する。申請地の北東には中世、河野氏の築城とされる湯築城址、西方には弥生時代の拠点的集落である文京遺跡や松山大学構内遺跡、南方には石手川を隔てて弥生時代後期から古墳時代の集落関連遺構が多数確認されている束本遺跡や樽味遺跡などが存在する。

したがって、文化教育課は、工事予定地内の埋蔵文化財の調査について協議を行った。その結果、事前に試掘調査を実施することになった。

試掘調査は、1996（平成８）年４月２日～５月10日の間に実施した。申請地内に15本のトレンチを設定し、土層観察や遺構・遺物の確認を行った。調査では、申請地の南方部分は近現代の撹乱が著しく、遺構・遺物はほとんど残っていなかったが、それ以外の地域では弥生時代から中世までの遺物包含層が存在していることを確認した。

この結果を受け、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）及び文化教育課と申請者の三者は協議を重ね、埋蔵文化財を確認した地域を対象として、発掘調査を実施することになった。

調査は、弥生時代から中世までの集落構造解明や古地形・古環境復元を主目的とし、埋文センターが主体となり、文化教育課と申請者の協力のもと、1996（平成８）年６月３日より開始した。

2．調査・刊行組織

調 査 地　松山市持田町１丁目・岩崎町２丁目

遺 跡 名　岩崎遺跡

調査期間　野外調査　1996（平成８）年６月３日～1998（平成10）年３月31日

室内整理　1998（平成10）年４月１日～1999（平成11）年３月31日

調査面積　13,000㎡

【調査組織】（平成８・９年度）

松山市教育委員会	教育長	池田　尚郷
生涯教育部	部長	三好　俊彦
	次長	丹下　正勝
文化教育課	課長	松平　泰定
（財）松山市生涯学習振興財団	理事長	田中　誠一
	事務局長	池田　秀雄
	事務局次長	丹下　正勝（平成８年度）
		河口　雄三（平成９年度）

埋蔵文化財センター	所長	河口	雄三
	次長	田所	延行
	調査係長	田城	武志
	調査主任	栗田	正芳（文化教育課職員）
調査担当	調査員	宮内	慎一
		相原	秀仁

【刊行組織】（平成10年度）（平成11年３月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	池田	尚郷
事務局	局長	大野	嘉幸
	次長	岩本	一夫
	次長	丹下	正勝
文化教育課	課長	松平	泰定
（財）松山市生涯学習振興財団	理事長	田中	誠一
	事務局長	池田	秀雄
	事務局次長	河口	雄三
埋蔵文化財センター	所長	河口	雄三
	次長	田所	延行
	調査係長	田城	武志
	調査主任	栗田	正芳（文化教育課職員）

【調査指導】

発掘調査：下條信行・松原弘宣・平井幸弘・川岡勉・田崎博之（愛媛大学）
大山正風・中野良一・柴田圭子（財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター）

室内整理：鉄製品分析－村上恭通（愛媛大学）
財団法人元興寺文化財研究所
動物遺存体分析－松井章（奈良国立文化財研究所）
土壌分析－株式会社古環境研究所
暗文土師器分析－林部均・高橋昭彦（奈良国立博物館）
貝殻施文土器分析－伊東昭雄（下関市立博物館）

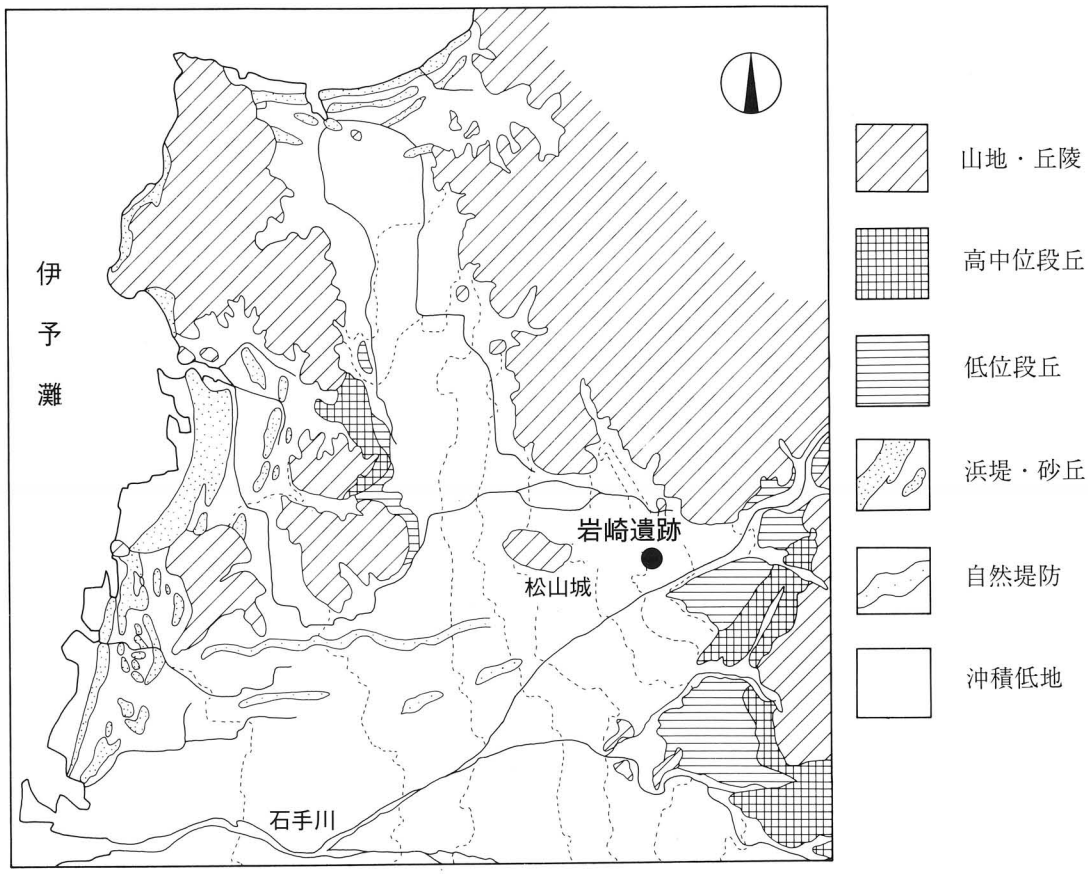
3．立地・環境

(1) 立　　地（第1図）

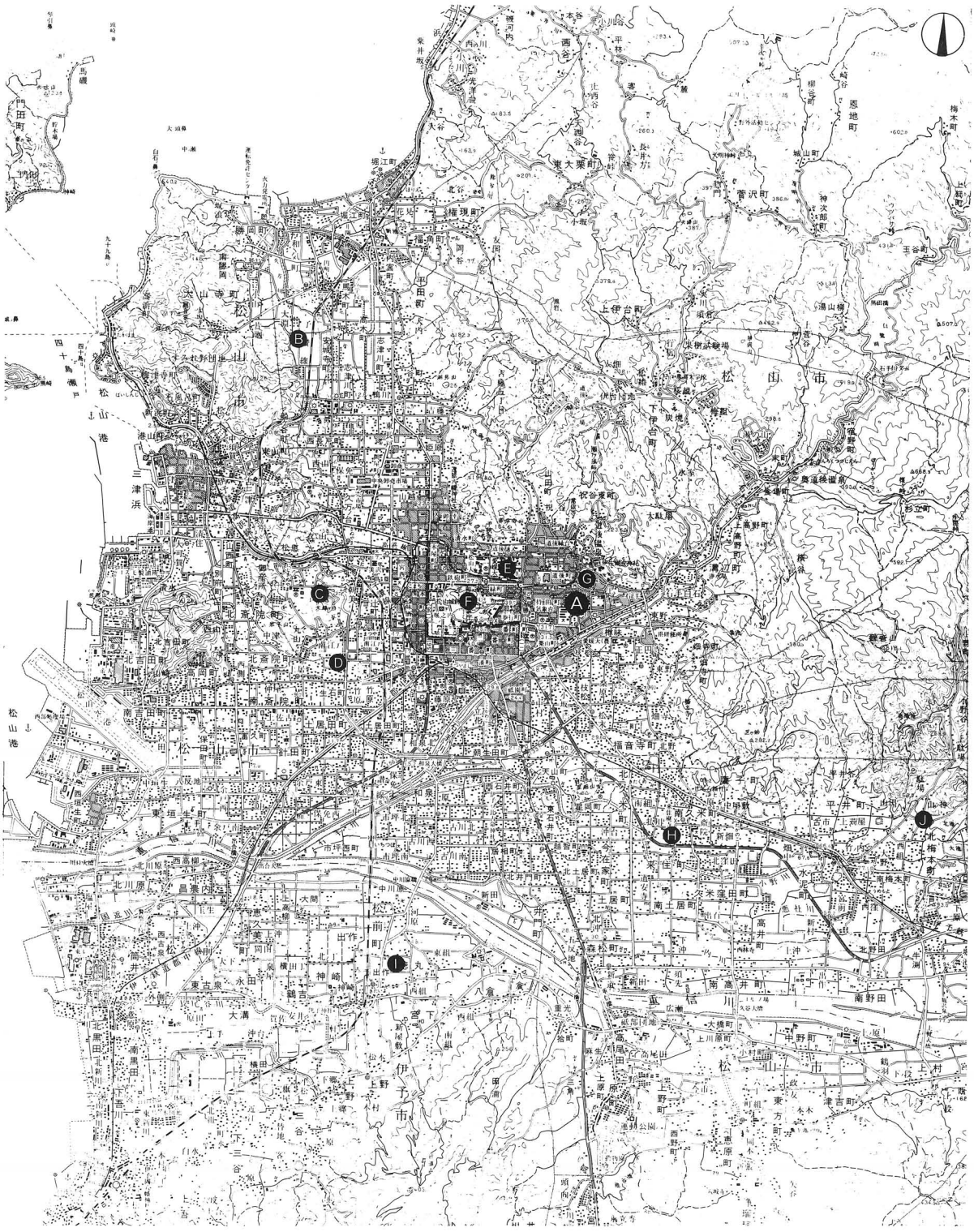
松山平野は、伊予灘と燧灘とに挟まれた高縄半島の南西部に位置する。高縄半島中央部には半島の最高峰、東三方ヶ森にはじまり、北西には伊之子山・北三方ヶ森・高縄山からなる高縄山系が形成されている。高縄山系は西南日本内帯の領家変成岩帯に属し、主に中生代に貫入した石英斑岩脈を伴う花崗閃緑岩より構成されている。松山平野は、高縄半島中央部を南北に走る、高縄山地に源を発する石手川と重信川とによって形成された沖積平野である。

このうち、岩崎遺跡を含む平野北東部は、石手川の氾濫に起因する半径約4㎞の扇状地と、その裾に広がる沖積低地から形成されている。石手川扇状地は、右岸では洪積層を基盤とし、その上面を覆うように縄文海進後に形成された沖積層が堆積し、現在の地形を形成している。

岩崎遺跡は、この扇状地の扇央付近に位置し、分離独立丘陵である湯築城址と城山（勝山）とを結ぶ緩傾斜地上に立地する。遺跡中心部の絶対位置は、北緯33°50′16″～33°50′40″、東経132°47′13″である。この地域は「道後城北地区」と呼称され、松山平野の中でも有数の遺跡地帯として知られている。道後城北地区は、地理的な条件や遺跡の性格などから城北地区、祝谷地区、道後地区の3地区に区分され、本遺跡はこのうちの道後地区に所在している。道後地区は愛媛県民文化会館周辺の平野部や、平野部から東へ向かう丘陵部からなる。



第1図　松山平野の地質図（縮尺1/100,000）



第２図　松山平野の主要遺跡分布図（縮尺1/100,000）

ボーリング調査による地形環境復元では、道後城北地区は縄文時代後期以降、大規模な河川の氾濫などはなく、安定した地形環境にあり、部分的には小規模な河川流動による粗粒堆積物が確認されている。

(2) 環　　境（第３図・表１）

岩崎遺跡を含む松山城の北東部地域は道後城北遺跡群と称され、文京遺跡や道後今市遺跡をはじめとする数多くの遺跡が存在する。ここでは近年、発掘調査された遺跡を中心に、その概要を説明する。

旧石器時代

この地域での旧石器時代遺物の出土は、祝谷丸山遺跡㊾が知られている。出土地は丸山川左岸の標高120ｍの丘陵部で、採集遺物として細石核や細石刃などが報告されている。当地域に限らず、現在までのところ、松山平野では調査事例はなく、旧石器時代の明確な遺構は発見されていない。

縄文時代

古くから知られる遺跡には道後冠山遺跡❾・土居壇遺跡❿・土居窪遺跡⓫があり、後期から晩期にかけての縁帯文土器や注口土器が出土している。近年の調査では、道後樋又（ＲＮＢ）遺跡㊺にて縄文後期前葉と晩期後葉の包含層が層位的に確認されている。文京遺跡11次調査㊳では、後期の屋外炉が、持田町３丁目遺跡❹や道後今市遺跡10次調査㉑では晩期の土坑が検出されている。

このように縄文時代後・晩期には道後城北地区は安定した地盤をもち、縄文人達が生活を営んでいたことがわかる。

弥生時代

前期では、御幸寺山東麓遺跡㊻から綾杉文の描かれた壺が出土している。また、愛媛県の弥生前期の標識土器として著名な持田式土器が出土した持田町遺跡❸が古くから知られている。近年の調査では、文京遺跡4次調査㉛にて前期前半の円形竪穴式住居址が、前期後半では持田町３丁目遺跡から土壙墓24基と土器棺９基が検出されている。

前期末から中期前半までの遺跡には、道後姫塚遺跡❽や道後鷺谷遺跡㉕などがあり、扇状地から丘陵部へと遺跡が広がっていく。中期中葉になると、遺跡の分布は丘陵部に数多く散見されるようになる。祝谷大地ヶ田遺跡㊼や祝谷六丁場遺跡㊿、祝谷六丁目遺跡(71)などが代表例である。このうち祝谷六丁場遺跡では、平形銅剣１口が埋納状態で確認されている。道後城北遺跡群内では、祝谷六丁場遺跡を除く３ヶ所で21口の平形銅剣が発見されている。その内訳は、道後一万銅剣出土地㊹から10口、（伝）樋又銅剣出土地㉔から８口、道後湯月銅剣出土地❻からは３口が出土している。さらに、分銅形土製品も県内出土数の約６割が出土している。このように、道後城北遺跡群は、弥生時代において平野内の拠点的な集落遺跡として位置付けられている。

中期後半から後期前半には、集落が丘陵部から扇状地低位部に移行する。さらに、後期中葉から末には西方への集落移動が認められる。松山大学構内遺跡２次調査地㊽、同3次調査地㊾や松山北高等学校遺跡㊷からは該期の竪穴式住居址が確認され、若草町遺跡２次調査地㊽では後期後半の土器が、大溝から大量に出土している。弥生時代末から古墳時代初頭には、若草町遺跡1次調査地㊼から舶載の重圏日光鏡が、文京遺跡10次調査地㊲からも舶載鏡片が出土している。この時期においても、道後城北地区は平野内で主導的な地位にあったものといえる。

古墳時代

古墳時代の集落は、弥生時代に引き続き、扇状地面を中心として展開する。古墳時代前期の遺跡は少ないが、中～後期になると急増する。松山大学構内遺跡や持田町３丁目遺跡、文京遺跡13次調査㊵・同14次調査㊶、祝谷アイリ遺跡㉒では竪穴式住居址や土坑が確認されている。平野部背後の丘陵部には数多くの古墳群が分布している。祝谷古墳群・御幸寺山古墳群・常信寺古墳群・桜谷古墳群などの後期古墳が造営されるが、調査例は少なく、詳細は不明な点が多い。

古　代

古代の遺跡は、調査例が極めて少ない。道後今市遺跡９次調査地⑳からは包含層中より、該期の遺物が少量出土しているほか、道後樋又遺跡２次調査地㊻では自然流路が報告されている。古くは石手川近くの内代廃寺❼や湯ノ町廃寺㉖から白鳳期の瓦が出土している。

中　世

14世紀には、松山平野を支配した河野氏の築城である湯築城址❺が独立丘陵部に立地する。湯築城址からは二重に巡らされた塀、土塁、礫石建物などが確認されている。また、道後今市遺跡４次調査地⓯や同10次調査地㉑では13～16世紀代の掘立柱建物址が、同３次調査地⓮では備前甕を使用した甕棺墓が確認されている。このほか、道後今市遺跡９次調査地では水田址が検出されている。

【参考文献】

平井幸弘　1989「石手川扇状地城北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境」『Ｓｅｒｉｅｓ Ⅲ Ｎａｔｕｒａｌ Ｓｃｉｅｎｃｅ Ｖｏｌ.９』
1993「風景のなかの自然地理」古今書院

宮本一夫　1989「道後平野における弥生時代開始期の動向」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室

道後城北地区の遺跡一覧（表１）　－ 凡例 －

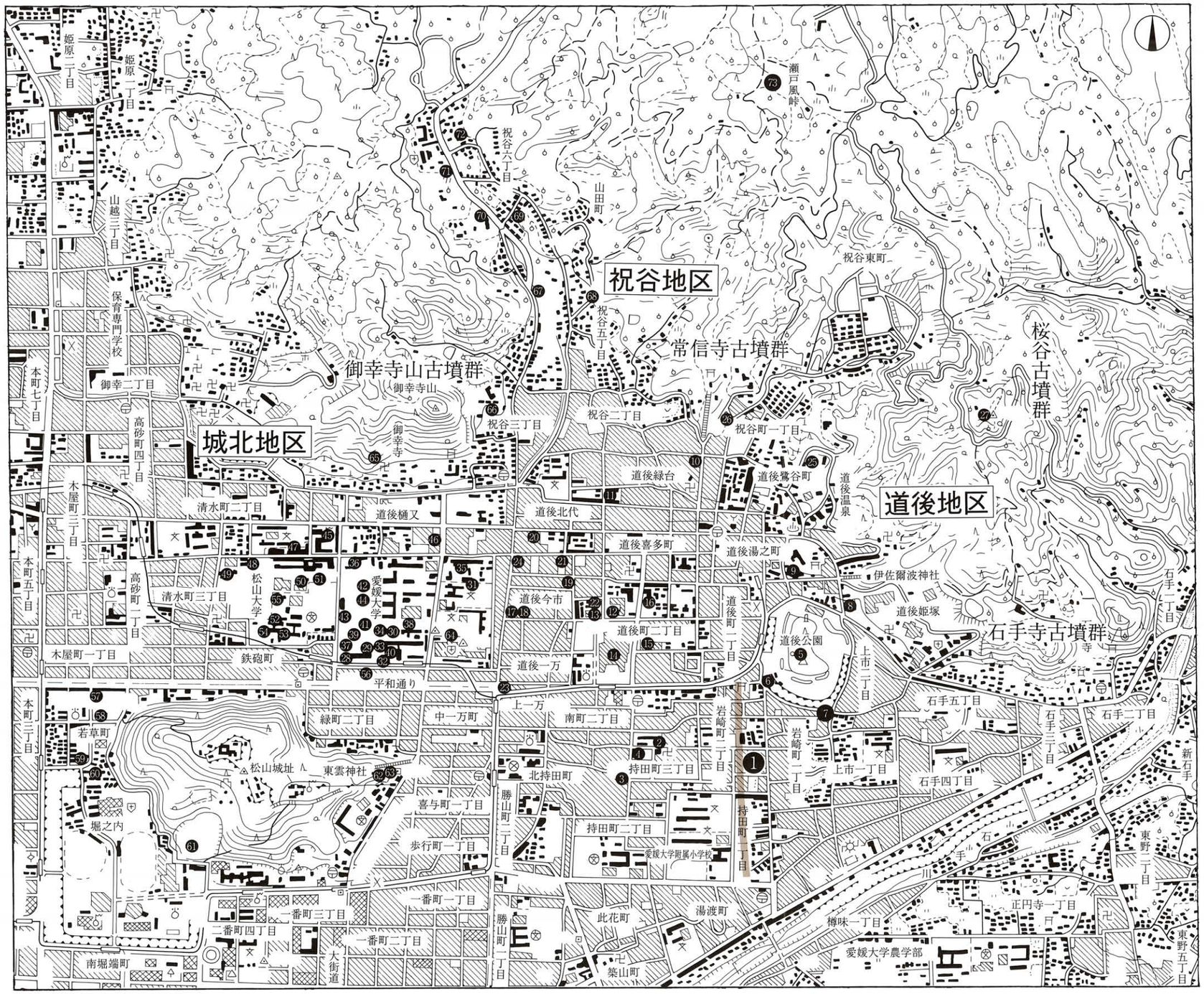
(1) 一覧表に使用した資料は1999（平成11）年３月時点のものである。

(2) 時代欄の項目の略記は以下のとおりである。
◎：遺構・遺物、○：遺構、△：遺物が出土している場合である。

(3) 遺構・遺物欄では一部を略号で記入した。
遺構欄＝竪穴：竪穴式住居址、掘立：掘立柱建物址、柱：柱穴
遺物欄＝縄：縄文土器、弥：弥生土器、土：土師器、須：須恵器、分銅：分銅形土製品、絵画：絵画土器、緑釉：緑釉陶器、灰釉：灰釉陶器

(4) 備考欄には各遺跡に関する報告書及び参考文献の番号を記した。

(5) 番号欄のナンバーは「第３図道後城北地区の遺跡分布図」中のものを指す。



1 岩崎遺跡
2 岩崎町遺跡（確認）
3 持田町遺跡（確認）
4 持田町３丁目遺跡
5 道後湯築城址
6 道後湯月銅剣出土地（確認）
7 内代廃寺
8 道後姫塚遺跡
9 道後冠山遺跡
10 土居壇遺跡（確認）
11 土居窪遺跡
12 道後今市遺跡〔１次調査〕
13 道後今市遺跡〔２次調査〕
14 道後今市遺跡〔３次調査〕
15 道後今市遺跡〔４次調査〕
16 道後今市遺跡〔５次調査〕
17 道後今市遺跡〔６次調査〕
18 道後今市遺跡〔７次調査〕
19 道後今市遺跡〔８次調査〕
20 道後今市遺跡〔９次調査〕
21 道後今市遺跡〔10次調査〕
22 道後今市遺跡〔11次調査〕
23 道後一万遺跡
24 道後樋又銅剣出土地
25 道後鷺谷遺跡
26 湯之町廃寺
27 桜谷古墳
28 文京遺跡〔１次調査〕
29 文京遺跡〔２次調査〕
30 文京遺跡〔３次調査〕
31 文京遺跡〔４次調査〕
32 文京遺跡〔５次調査〕
33 文京遺跡〔６次調査〕
34 文京遺跡〔７次調査〕
35 文京遺跡〔８次調査〕
36 文京遺跡〔９次調査〕
37 文京遺跡〔10次調査〕
38 文京遺跡〔11次調査〕
39 文京遺跡〔12次調査〕
40 文京遺跡〔13次調査〕
41 文京遺跡〔14次調査〕
42 文京遺跡〔15次調査〕
43 文京遺跡〔16次調査〕
44 文京遺跡〔17次調査〕
45 道後樋又（ＲＮＢ）遺跡
46 道後樋又遺跡〔２次調査〕
47 松山大学構内遺跡〔１次調査〕
48 松山大学構内遺跡〔２次調査〕
49 松山大学構内遺跡〔３次調査〕
50 松山大学構内遺跡〔４次調査〕（確認）
51 松山大学構内遺跡〔５次調査〕
52 松山北高等学校遺跡〔１次調査〕
53 松山北高等学校遺跡〔２次調査〕
54 松山北高等学校遺跡〔３次調査〕
55 松山北高等学校遺跡〔４次調査〕
56 平和通り遺跡
57 若草町遺跡〔１次調査〕
58 若草町遺跡〔２次調査〕
59 若草町遺跡〔３次調査〕
60 カキツバタ遺跡
61 松山城二ノ丸〔１～３次調査〕
62 東雲遺跡
63 東雲神社古墳
64 道後一万銅剣出土地
65 御幸寺山古墳
66 御幸寺山東麓遺跡
67 祝谷大地ケ田遺跡
68 祝谷本村遺跡
69 祝谷丸山遺跡
70 祝谷六丁場遺跡
71 祝谷六丁目遺跡
72 祝谷アイリ遺跡
73 瀬戸風峠遺跡

第３図　道後城北地区の遺跡分布図（縮尺1/15,000）

〔参考文献〕

① 松山市史料集編集委員会　1980　松山市史料集第１巻　考古編
② 松山市史料集編集委員会　1986　松山市史料集第２巻　考古編Ⅱ
③ 愛媛県史編さん委員会　1980　愛媛県史資料編考古
④ 古代学協会四国支部　1988 「松山市道後城北の弥生集落をめぐって」（シンポジウム資料）
⑤ 真鍋昭文他　1995 『持田町３丁目遺跡』埋蔵文化財調査報告書第58集
⑥ 中野良一他　1998 『湯築城跡』埋蔵文化財調査報告書第66集
⑦ 阪本安光　1992 『道後姫塚遺跡』愛媛県教育委員会
⑧ 岡田敏彦他　1985 『道後今市遺跡』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
⑨ 梅木謙一・宮内慎一　1992 『道後城北遺跡群』松山市文化財調査報告書30
⑩ 重松佳久　1990 「道後今市遺跡７次調査概要」松山市教育委員会
⑪ 梅木謙一　1994 『道後城北遺跡群Ⅱ』松山市文化財調査報告書37
⑫ 多田仁他　1994 『道後今市遺跡Ｘ』埋蔵文化財調査報告書第53集
⑬ 作田一耕・村田治夫　1997 『道後一万遺跡』埋蔵文化財調査報告書第65集
⑭ 西尾幸則　1976 『文京遺跡』松山市文化財調査報告書11
⑮ 栗田茂敏　1992 『文京遺跡－第２・３・５次調査－』松山市文化財調査報告書28
⑯ 宮本一夫　1990 『文京遺跡第８・９・11次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ
⑰ 宮本一夫　1991 『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ
⑱ 田崎博之　1997 『愛媛大学構内遺跡調査集報Ⅰ』愛媛大学埋蔵文化財報告Ⅴ
⑲ 愛媛大学埋蔵文化財調査室　1998 「文京遺跡シンポジウム－弥生大集落の解明－」
⑳ 梅木謙一　1991 『松山大学構内遺跡－第２次調査－』松山市文化財調査報告書20
㉑ 宮内慎一　1995 『松山大学構内遺跡Ⅱ－第３次調査－』松山市文化財調査報告書49
㉒ 梅木謙一　1998 『松山大学構内遺跡Ⅲ－第４・５次調査－』松山市文化財調査報告書68
㉓ 愛媛県教育委員会　1981 『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書』
㉔ 真鍋昭文・伊藤直子　1995 『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書２』埋蔵文化財調査報告書第55集
㉕ 土井光一郎・伊藤祐三　1996 『若草町遺跡Ⅱ』埋蔵文化財調査報告書第60集
㉖ 宮崎泰好　1991 『祝谷六丁場遺跡』松山市文化財調査報告書24
㉗ 梅木謙一　1992 『祝谷アイリ遺跡』松山市文化財調査報告書25
㉘ 西尾幸則他　1987 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会
㉙ 西尾幸則他　1989 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
㉚ 田城武志・栗田茂敏　1991 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会
㉛ 田城武志　1992 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
㉜ 梅木謙一　1993 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
㉝ 栗田正芳　1994 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター・松山市教育委員会
㉞ 田城武志・相原浩二　1995 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター・松山市教育委員会
㉟ 田城武志・宮内慎一　1996 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター・松山市教育委員会
㊱ 田城武志・山之内志郎　1997 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター・松山市教育委員会
㊲ 田城武志・小玉亜紀子　1998 『松山市埋蔵文化財調査年報Ｘ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター・松山市教育委員会

表１　道後城北地区の遺跡一覧

番号	時代 / 遺跡名	旧石器	縄文						弥生			古墳			古代	中世	近世
			草創	草	前	中	後	晩	前	中	後	前	中	後			
1	岩崎遺跡						△	△	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎	○
2	岩崎町遺跡（確認）								△								
3	持田町遺跡（確認）								△								
4	持田町三丁目遺跡							◎	◎					◎		△	△
5	道後湯築城址							△	△	△	△		△	△	△	◎	◎
6	道後湯月銅剣出土地(確認)																
7	内代廃寺														△		
8	道後姫塚遺跡								◎		◎			◎			
9	道後冠山遺跡							△	△								
10	土居壇遺跡（確認）						△	△							△		
11	土居窪遺跡						△			△							
12	道後今市遺跡〔１次〕							△	◎	◎			◎	◎	△		
13	〃　〔２次〕									◎			△	◎		◎	
14	〃　〔３次〕								○				◎	◎		◎	
15	〃　〔４次〕								○	◎				◎		◎	
16	〃　〔５次〕								○			△				◎	
17	〃　〔６次〕									△	△		○				
18	〃　〔７次〕										△			◎			
19	〃　〔８次〕							△	△					△		△	
20	〃　〔９次〕								△	△	△		△	△	◎	◎	
21	〃　〔10次〕						△	◎	◎					△		◎	
22	〃　〔11次〕							△	○								
23	道後一万遺跡						△			◎						△	△
24	道後樋又銅剣出土地(確認)																
25	道後鷺谷遺跡								△	△	△			△		△	
26	湯之町廃寺（確認）														△		
27	桜谷古墳													○			
28	文京遺跡〔１次〕									◎							
29	〃　〔２次〕							△		◎	◎			△			
30	〃　〔３次〕									◎	◎		△	△			
31	〃　〔４次〕					△			◎	◎					○		
32	〃　〔５次〕									◎	△			○			
33	〃　〔６次〕										△						
34	〃　〔７次〕									◎							
35	〃　〔８次〕						△	◎	◎				○	◎		△	
36	〃　〔９次〕						△	△						△		◎	△
37	〃　〔10次〕						△	△		◎	◎			△	◎	◎	

(1)

遺構	遺物	参考文献	番号
弥生／竪穴・溝・土坑、古墳／土坑、古代／掘立・溝・土坑、中世／掘立・柵・溝・土坑・水田・畑、近世／溝	縄・弥・土・須・緑釉・灰釉・輸入陶磁・分銅・土馬・石器・鉄器・木器・臼玉・ガラス玉・種子・骨	㉟・㊱	1
	弥	④	2
	弥	①・②・③・④	3
縄文／土坑、弥生／土壙墓・土器棺、古墳／竪穴・土坑・柱	縄・弥・土・須・輸入陶磁・瓦器・石器・石剣・鉄器・管玉・臼玉・ガラス玉・勾玉	⑤	4
		⑥	5
	平形銅剣３口	①・②・③	6
	瓦	③	7
弥生／土坑・土壙墓、古墳／竪穴・土坑	弥・土・須・石	⑦	8
	縄・弥	①・②・③	9
	縄・瓦	③	10
	縄・弥・石器・木器・種子	③	11
弥生／土坑	縄・弥・土・須・石器	②・⑧	12
弥生／土坑、古墳／土坑、古代／土坑、中世／土坑・柱	弥・土・須・古銭・石器	②・⑧	13
弥生／竪穴・土坑、古墳／竪穴・土坑、中世／溝・土坑・甕棺墓	弥・土・須・輸入陶磁・陶磁・石器・銅鏡・古銭	②・⑧	14
弥生／竪穴・土坑、古墳／竪穴、中世／掘立・柵列	弥・土・須・瓦器・輸入陶磁	②・⑧	15
弥生／竪穴・土坑、中世／墳墓	弥・土・瓦・石器	②・⑧	16
古墳／竪穴	弥・土・須・石器	⑨・㉚	17
古墳／竪穴・掘立・溝・土坑	弥・土・須・石器	⑩	18
弥生／流路	縄・弥・土・須・陶磁器	⑨	19
中世／水田（鋤溝・足跡）	弥・土・須・瓦器・緑釉・輸入陶磁	⑪・㉜	20
縄文／土坑、弥生／溝・土坑・柱、中世／掘立・柵列・溝・土坑・柱	弥・土・須・輸入陶磁・中国銅銭・瓦	⑫	21
弥生／竪穴・溝・柱	弥・石器	㊱	22
弥生／土坑・溝・柱	縄・弥・土・陶磁・石器・土玉・分銅	⑬	23
	平形銅剣８口	①・②・③	24
	弥・土・須・人面形土製品・石器	⑪・㉙	25
	瓦	①・②・③	26
古墳／竪穴石室・箱式石棺・土壙墓	土・須・鉄鏃・刀子	①・②・③	27
弥生／竪穴・溝・土坑	弥	①・②・③・⑭	28
弥生／竪穴・掘立・溝・円形周溝・土坑・柱	縄・弥・土・須・石器	①・②・③・⑮	29
弥生／竪穴・掘立・方形周溝・土坑	弥・土・須・石器・鉄器・分銅・絵画	①・②・③・⑮	30
弥生／竪穴・土坑、古代／流路	縄・弥・土・須・分銅・石器	①・②・③・⑨	31
弥生／竪穴、古墳／掘立・柵列	弥・土・須・石器	①・②・③・⑮	32
弥生／流路、柱	弥		33
弥生／竪穴・掘立	弥		34
縄文／流路、弥生／流路・土坑、古墳／流路	縄・弥・土・須・石器	⑯	35
中世／溝	縄・弥・土・須	⑯	36
弥生／竪穴・掘立・溝・円形周溝・土坑・柱	縄・弥・土・須・石器・輸入陶磁・銅鏡・管玉・分銅	⑰	37

道後城北地区の遺跡一覧

番号	時代 / 遺跡名	旧石器	縄文						弥生			古墳			古代	中世	近世
			草創	草	前	中	後	晩	前	中	後	前	中	後			
38	文京遺跡〔11次〕						◎	△		◎	△			◎		◎	
39	〃 〔12次〕									◎	◎			◎			
40	〃 〔13次〕																
41	〃 〔14次〕																
42	〃 〔15次〕																
43	〃 〔16次〕									◎							
44	〃 〔17次〕																
45	道後樋又（ＲＮＢ）遺跡						△	△	△					○			
46	道後樋又遺跡〔２次〕							◎	◎	◎				◎		◎	
47	松山大学構内遺跡〔１次〕										△					△	
48	〃 〔２次〕							△	△	△	◎	○	◎	◎	△	△	
49	〃 〔３次〕							△		◎	◎	◎		◎	◎	△	
50	〃 〔４次〕(確認)													○			
51	〃 〔５次〕							△	○					○	○	◎	◎
52	松山北高等学校遺跡〔１次〕										◎	◎		△			
53	〃 〔２次〕								△	△	◎	◎		△	◎		
54	〃 〔３次〕									△	◎	◎					
55	〃 〔４次〕						△	△		○	△	△		△	△	△	△
56	平和通り遺跡									△	△						
57	若草町遺跡〔１次〕									△	◎	◎		△	△	△	△
58	〃 〔２次〕										◎			◎		◎	◎
59	〃 〔３次〕									△	◎			◎	△	△	△
60	カキツバタ遺跡									△	◎	◎					
61	松山城二ノ丸〔１～３次〕										△			△	△	△	◎
62	東雲遺跡									◎							
63	東雲神社古墳									△							
64	道後一万銅剣出土地(確認)																
65	御幸寺山古墳													○			
66	御幸寺山東麓遺跡								△	△							
67	祝谷大地ヶ田遺跡									△			△			△	
68	祝谷本村遺跡								△	△				◎		◎	
69	祝谷丸山遺跡	△															
70	祝谷六丁場遺跡									◎	◎			◎	△	△	
71	祝谷六丁目遺跡									◎							
72	祝谷アイリ遺跡							△		◎	◎			◎	△		
73	瀬戸風峠遺跡													○	○		

(2)

遺　　構	遺　　物	参考文献	番号
縄文／屋外炉、弥生／溝・土坑・柱、古墳／溝、中世／溝・柱	縄・弥・土・須・石器・分銅	⑯	38
弥生／竪穴・掘立・溝・土坑、古墳／竪穴・溝	弥・土・須・石器・鉄器・骨	⑱・⑲	39
		⑱	40
		⑱	41
			42
弥生／溝・土坑	埴輪		43
			44
古墳／溝・柱	縄・弥・土・須	㉙	45
縄文／土坑・流路、弥生／流路、古墳／流路、中世／土坑・流路	縄・弥・土・須	⑨・㉛	46
	弥・土・須	⑳	47
弥生／竪穴、古墳／竪穴・掘立・溝・土坑・柱	縄・弥・土・須・石器・ガラス玉	⑳・㉚	48
弥生／竪穴・溝・流路・土坑・柱、古墳／竪穴・掘立・溝・土坑、古代／掘立・溝・土坑	縄・弥・土・須・ガラス玉・石器・鉄器・分銅・種子・骨	㉑・㉝	49
古墳／流路	土・須	㉒	50
弥生／流路、古墳／流路、古代／流路・土坑、中世／流路・土坑	縄・弥・土・須・石器	㉒	51
弥生／竪穴、古墳／竪穴	弥・土・須・石器	②・③・㉓	52
弥生／竪穴、古墳／竪穴、古代／掘立	弥・土・須・石器・鉄器・瓦	②・③・㉓	53
弥生／竪穴、古墳／竪穴・掘立	弥・土・石器・銅鏃・絵画	㉔	54
弥生／流路	縄・弥・土・須・瓦・陶磁・輸入陶磁・石器・匂玉	㉔	55
	弥	④	56
弥生／竪穴・周溝・土坑、古墳／竪穴・溝・土坑・柱	弥・土・須・鏡	㉚	57
弥生／竪穴・土坑・円形周溝、古墳／横穴石室・竪穴・溝、中世／溝、近世／礎石建物・溝・井戸	弥・土・須・陶磁・輸入陶磁・石器・鉄器・埴輪・耳環・土玉・管玉・丸玉	㉕	58
弥生／周溝・土坑、古墳／竪穴・周溝・土坑・柱	弥・土・須・瓦・陶磁器・古銭	㉝	59
弥生／壺棺墓	弥・土・須	④	60
近世／表御殿・大井戸	弥・土・須・瓦・陶磁器・輸入陶磁	㉘	61
弥生／土坑	弥・絵画	③	62
古墳／竪穴石室	弥・土・須・埴輪・ガラス玉	③	63
	平形銅剣10口	①・②・③	64
古墳／横穴石室	土・須	③	65
	弥・分銅	③	66
	弥・土	⑪・㉙	67
古墳／土坑、中世／掘立・土坑	弥・土・須・石器	⑨・㉚	68
	細石核・細石刃・掻器	①・②・③	69
弥生／竪穴・溝・土坑・井戸・柱、古墳／溝	弥・土・須・石器・鉄器・木器・分銅・平形銅剣１口	㉖・㉙	70
弥生／竪穴、土壙墓	弥	①・②・③	71
弥生／竪穴・土坑・井戸、古墳／竪穴・掘立・溝・土坑	縄・弥・土・須・分銅・石器	㉗・㉛	72
古墳／横穴石室・箱式石棺・石蓋土壙墓、古代／横穴石室	土・須・鉄器・馬具・耳環・ガラス玉・切子玉・管玉・匂玉	㉞・㉟・㊱	73

第2章　調査の概要

1．調査の経緯（第4図・表2）

調査地は、松山市持田町1丁目から岩崎町2丁目までに位置し、道路幅18m、道路全長約700m、対象面積は約13,000㎡である。調査地南端は松山市道317号線、北端は県道188号線（道路公園線）に接続する。

調査に先立って実施した試掘調査の結果、調査地南側の地域（面積3,500㎡－未調査区）は近現代の撹乱が激しく、そのため本格調査はこの地域を除く土地を対象地域とした。

これまでに、松山市持田町・岩崎町内においては、数度の確認調査は行われているが、発掘調査は1例にすぎない。持田町内では調査地の西方200mに持田町3丁目遺跡があり、弥生時代前期の土壙墓群や古墳時代の集落関連遺構が確認されている。なお、岩崎町内では、調査地北西100mの地点に岩崎町遺跡があり、弥生時代前期の土器が採集されている。

今回の調査では、遺跡名の決定は埋文センター内で協議を行った。その結果、道路改良工事名を踏襲し「岩崎遺跡」として調査を実施することになった。

調査　岩崎遺跡の発掘調査は、平成8年度と9年度の2年間にわたって実施した。

工事の工程と調査の進行上、主に調査地内を東西に横切る生活道路によって区割りを行った。区割りは調査地内を6つの区に分け、南側より順にⅠ区・Ⅱ区･･･Ⅵ区とし、さらには各区を細分区し、それぞれに地区名を付けた。Ⅰ区は南側から順に第1地区・第2地区････第4地区、Ⅱ区は第1・第2地区、Ⅲ区は第1～第3地区、Ⅳ区は第1・第2地区、Ⅴ区は第1～第4地区、Ⅵ区は第1～第3地区である。

発掘調査は、平成8年度が調査地の南半部Ⅰ区～Ⅲ区、平成9年度は北半部Ⅳ区～Ⅵ区を調査対象区とした。基本的には調査地の南側から北側に向けて調査を進めたが、排土置場や重機の搬入などの都合上、一部の地区は前述のとおりではない。

また、国土座標第Ⅳ座標系基準点から調査地内に座標点を移動し、これを基準とした5m方眼のグリット割りを設定した。グリットは区毎に東から西へA・B・C・D・E、南から北へ1・2・3･････60とし、A1～E60区といった呼称名を付けた。グリットは、特に検出遺構の位置表示や、包含層掘り下げの際の遺物の取り上げなどに利用した。

調査は重機により表土層を除去し、その後人力で包含層を掘り下げながら遺構と遺物を検出し、測量及び写真撮影などの観察・記録作業を実施した。さらには、年度毎に上空からセスナ機による航空撮影をも実施した。出土遺物は、主な遺構に限り測量図（縮尺1/20）を作成し、その他はドット方式で取り上げた。なお、包含層出土遺物はグリット単位で、層位毎に取り上げた。このほか、土壌サンプルの採取や基本土層の剥ぎ取りなども行った。

整理　整理作業は、平成9年度から発掘調査に並行して、遺構図の合成や遺物の実測を行った。平成10年度からは埋蔵文化財センターにて、本格的な整理作業と報告書作成作業を実施した。

説明会　発掘調査中には、2度の遺跡説明会を開催した。第1回の説明会〔平成9年3月22日（土）〕は主にⅠ区とⅡ区を対象とし、水田址や畑址、稲作の伝来などについての説明を行った。第2回の説明会〔平成10年1月27日（土）〕では、Ⅴ区とⅥ区で検出した溝や土坑と、出土した遺物の説明を行った。それぞれの説明会では、地域住民や考古学ファンをはじめ、松山市道路部街路建設課や松山市教育委員会の関係者など総勢300人に及ぶ参加者を得て、埋蔵文化財に対する意識の高揚がはかられた。

第4図　調査地測量図（縮尺1/4,000）

表２　調査区一覧

調査年度	調査区	調査面積(㎡)	調　査　期　間	所在地（松山市）
平成８年度	Ⅰ区	2,204	平成８年６月３日～平成９年３月27日	持田町1丁目3－20～4－12
	Ⅱ区	1,200	平成８年８月21日～平成９年３月20日	岩崎町2丁目1－10～1－18
	Ⅲ区	1,620	平成８年10月21日～平成９年３月31日	岩崎町2丁目4－13～4－22
平成９年度	Ⅳ区	936	平成９年４月１日～　同年　８月７日	岩崎町2丁目6－10
	Ⅴ区	1,872	平成９年９月１日～平成10年３月27日	岩崎町2丁目6－17～9－18
	Ⅵ区	1,440	平成９年７月14日～平成10年３月31日	岩崎町2丁目10－10～12－10

検討会　発掘調査と整理作業中には、数度の検討会を開催した。発掘調査中は、愛媛大学より４名の先生方〔下條信行・田崎博之・川岡勉・平井幸弘〕、(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センターより中野良一氏を招き、調査方法、検出遺構や遺物に関する検討と分析を行った。整理作業時には、報告書を作成するにあたり、様々な問題点や疑問点が生じたため、愛媛大学より前述の４名の先生方と、松原弘宣・村上恭通の両先生、(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センターから大山正風・柴田圭子の両名を招き、層位や地形復元、遺構と遺物の検討会を3度開催した。これらの検討会により、発掘調査及び整理作業は円滑に遂行することができた。

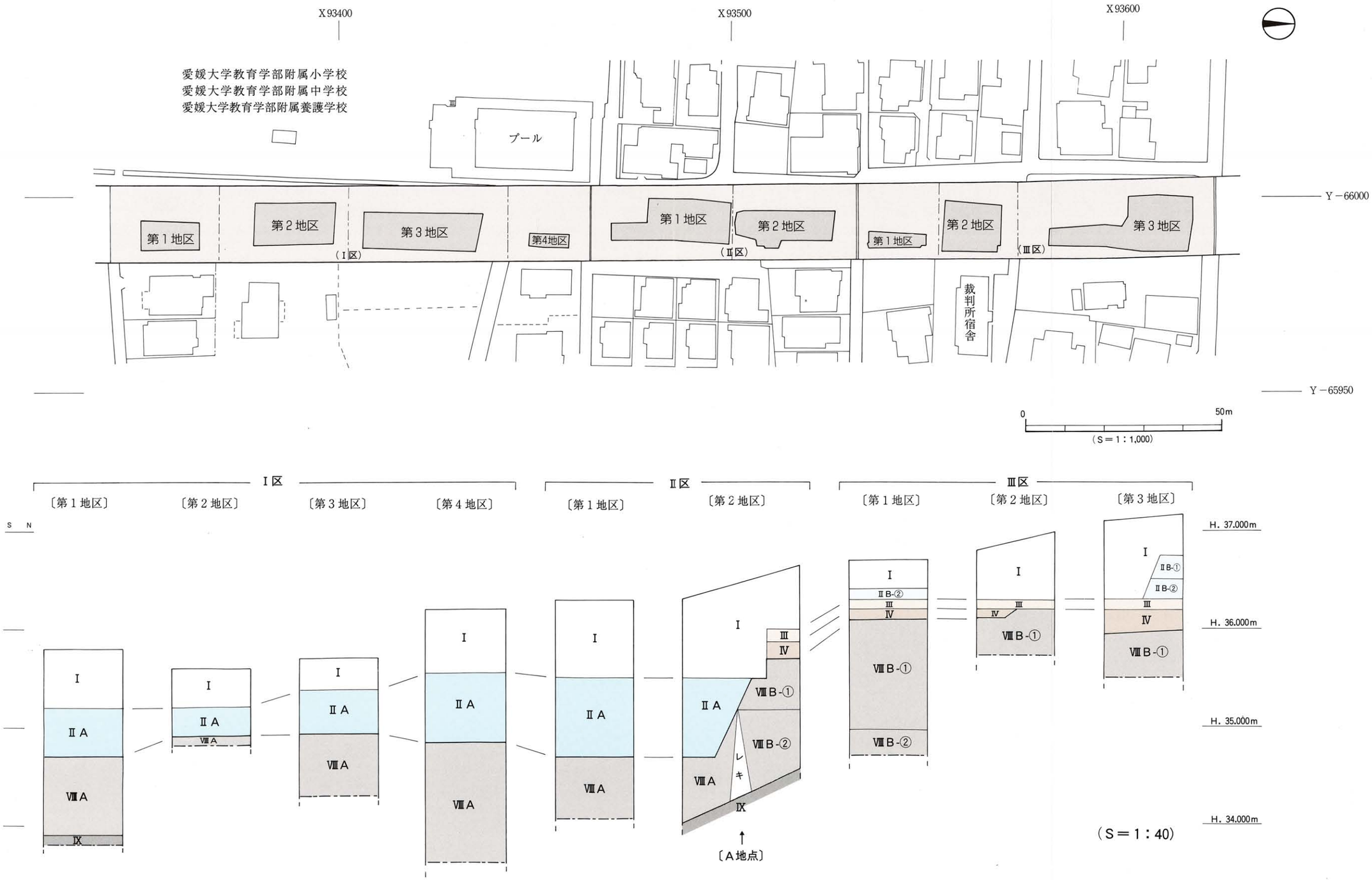
２．層　　位

(1)　基本層位（第５・６図）

調査地の基本層位は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層灰～オリーブ灰色土、第Ⅲ層褐灰色土、第Ⅳ層灰オリーブ色土、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層黒褐色土と黄色土との混合土、第Ⅶ層明黄褐色シルト、第Ⅷ層灰～灰白色砂礫層、第Ⅸ層礫層である。現況では、調査地の南側Ⅰ区が最も低く、Ⅱ区からⅣ区にかけて徐々に高くなり、調査地の北側Ⅴ区のあたりでさらに高くなっている。標高を測量すると、Ⅰ区が35.7～36.2m、Ⅴ区で37.9～38.2m、Ⅵ区が38.0mになる。

第Ⅰ層－近現代の造成に伴う客土と農耕にかかわる耕作土である。調査区全域で検出する。地表下30～110cmまで開発が行われている。

第Ⅱ層－第Ⅱ層は調査地の南側、Ⅱ区第２地区のＡ地点を境にして、南北での堆積状況が異なっている。調査地Ⅰ区南端からＡ地点までは、第Ⅱ層は水田耕作に伴う土壌（ⅡＡ層）で、層厚30～80cmを測り、ⅡＡ層は14層（ⅡＡ-①～ⅡＡ-⑭）に分層した。このうち、ⅡＡ-③・ⅡＡ-⑧・ⅡＡ-⑫層の上面は水田面、ⅡＡ-⑬層上面は畑面になる。いずれも灰～灰白色を呈する洪水砂で埋没している。ⅡＡ層中からは土師器、東播系須恵器、備前焼、輸入陶磁器などが出土している。



第５図　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区測量図・土層柱状図

第６図　Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区測量図・土層柱状図

一方、A地点よりⅥ区までは、中世、主に14～15世紀代の遺物を含む包含層（ⅡB層）になる。調査地の中央部、Ⅲ区第3地区が最も厚い堆積をなし、層厚40cmを測るが、他の区では10～20cm程度の堆積である。A地点より北側で検出したⅡB層は2層に分層でき、ⅡB-①層灰黄色（2.5Y6/2）砂質土、ⅡB-②層は灰黄褐色（10YR6/2）土である。ⅡB-①層はⅢ区とⅣ区に限られる。

第Ⅲ層－第Ⅲ層は前述したA地点から北側のほぼ全域で検出した。層厚は10～20cmを測り、調査地北側Ⅴ区のあたりが最も厚い堆積をなす。本層上面はⅡ区からⅣ区にかけてわずかに高くなるが、Ⅴ区の第2地区付近でさらに高くなる。本層上面の標高を測量すると、Ⅱ区からⅣ区までは36.2～36.5mであるが、Ⅴ区では37.5m前後となる。本層中からは、主に古代（8～11世紀）に比定される遺物が出土している。このうち、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区で緑釉陶器9点、Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ区で灰釉陶器3点が出土している。

第Ⅳ層－第Ⅳ層は第Ⅲ層と同様に、A地点から北側の地域で検出した。Ⅲ区からⅣ区までは厚く堆積しており、最大で80cmの堆積を測る。その他の区では5～15cmの堆積にとどまる。本層中からは、主に古墳時代（6～7世紀）に比定される遺物が出土している。

第Ⅴ層－第Ⅴ層は調査地の北側、Ⅴ区のB地点から北側のほぼ全域で検出した。層厚は10～25cmを測る。粘性が強い土壌で、土壌中には炭化物や炭化種実が点在している。本層上面は起伏があり、Ⅴ区の中央部付近とⅥ区の中央部付近では高くなる。Ⅴ区の北側及びⅥ区の南側からは後期の遺物が多量に出土している。B地点より南側では第Ⅴ層は検出されなかった。

第Ⅵ層－第Ⅵ層は調査地の北側、B地点からⅥ区第1地区の間で検出した。層厚は5～10cmを測る。第Ⅴ層に黄色土が斑点状に混入する土壌で、第Ⅴ層と同様に粘性が強い。本層中からは、主に弥生時代前期末から中期初頭までに時期比定される遺物が出土している。

第Ⅶ層－第Ⅶ層は第Ⅴ・Ⅵ層と同様に、調査地の北側、B地点から北側の全域で検出した。層厚は15～80cmを測る。土質の違いで2層に分層した。Ⅶ①層はシルト質の土壌で、Ⅶ②層は径2～3㎜大の砂を多く含む土壌になる。本層上面の標高は、Ⅴ区第3・4地区及び、Ⅵ区第2・3地区が最も高く37.0m、Ⅴ区第1地区とⅥ区第1地区が最も低く36.8mである。

さて、文京遺跡や松山大学構内遺跡をはじめとする道後城北地区では、弥生時代遺構の最終検出面は黄色シルト上面で、この層は縄文時代後期前半～晩期の包含層である。第Ⅶ層は色調や土質、検出状況などがこの黄色シルトに酷似していることから、同一のものと考えられる。しかしながら、本調査では第Ⅶ層中からの遺物の出土はない。

ところで、第Ⅷ層以下の土層は、各調査区の調査壁沿いに設定した幅1m前後のトレンチによる土層観察の結果、確認したものである。各トレンチは、現地表下3mの地点を基準に掘削した。ただし、調査区毎で周辺の状況が異なることから、危険を伴う箇所もあり、必ずしもすべてのトレンチが同じ深さではない。

第Ⅷ層－第Ⅷ層は砂層と砂礫層で、調査区ほぼ全域で検出した。第Ⅷ層上面は、調査地Ⅰ区南端から、Ⅱ区第2地区中央部付近、A地点までは標高35m前後を測るが、A地点で約1m高くなる。その後、Ⅵ区までは徐々に高くなり、Ⅵ区北端では標高約37mとなる。発掘調査時は、第Ⅷ層を単一層として取り扱った。

その後、調査の後半及び整理作業で検討会を実施した結果、調査地Ⅰ区南端からⅣ区までと、Ⅴ区からⅥ区までとは時代の異なる砂層と砂礫層であることが判明した。さらに、第Ⅷ層中から出土した遺物から、Ⅰ区からA地点までと、A地点からⅣ区までは異なる時期に堆積した土層をもつことが明らかになった。Ⅳ区の北側第2地区とⅤ区の南端第1地区とは、約14m離れており、おそらく、この間で第Ⅷ層の堆積状況が変化しているものと考えられる。したがって、Ⅰ区南端からA地点までをⅧA層、A地点からⅣ区までをⅧB層、Ⅴ区からⅥ区北端までをⅧC層として、各層の説明を行う。

ⅧA層：Ⅰ区南端からA地点までに堆積する灰白色（7.5Y7/1）の砂礫層である。層厚70～120cmを測る。砂礫層を構成する礫は、礫径10～20cmを測り、礫と礫の間には灰色の粗砂が混入する。礫はほとんどが丸味を帯びた円礫である。堆積状況や礫径、円磨度などから、ⅧA層は石手川の本流に伴う砂礫と考えられる。Ⅰ区第2地区では、本層上面に12世紀後半の流路があり、ⅡA層が覆うことから、ⅧA層は、およそ13世紀頃までに堆積した砂礫層である。

ⅧB層：A地点からⅣ区北端までに堆積する灰白色（7.5Y8/2）～オリーブ褐色（2.5Y4/6）の砂礫層で、ⅧB層上面はやや起伏がある。ⅧB層下面はⅡ区第2地区で検出したにすぎず、層厚は明確にはわからないが、現況では140cm前後を測る。礫径や堆積状況などからⅧB層は石手川の氾濫に伴う河川氾濫堆積物と考えられる。出土遺物や堆積物の違いから2種類に分類される（ⅧB-①層・ⅧB-②層）。

ⅧB-①層は、Ⅲ区第2地区を除くほぼ全域に堆積する灰白色（7.5Y8/2）の砂礫層である。層厚30～90cmを測る。礫径は最大径10×20cm、最小径3×5cm、径5×10cm大の礫が大半を占める。礫と礫の間には灰色の礫と1～3cm大の小礫が混入する。本層中からは、弥生時代中期中葉～後半の土器片が少量出土している。

ⅧB-②層は、Ⅱ区とⅢ区第1地区、Ⅳ区第2地区で検出したオリーブ褐色（2.5Y4/6）の砂礫層で、層厚20～70cmを測る。礫径は最大径10×20cm、最小径5×10cm、径10×15cm大の礫が密集する。礫と礫の間には、灰色の粗砂と1～3cm大の小礫が混入する。本層中からは、弥生時代前期末～中期初頭の土器片が少量出土している。

ⅧB層上面には第Ⅳ層が覆うことから、ⅧB層は古墳時代後期、6世紀頃までに堆積した堆積物である。

ⅧC層：Ⅴ区南端からⅥ区北端までに堆積する砂層と砂礫層である。層厚30～180cm前後を測る。本層上面は起伏に富み、Ⅴ区第2地区より北側では第Ⅶ層が覆う。堆積物や堆積状況から、ⅧB層と同様、石手川の氾濫に伴う河川氾濫堆積物と考えられる。本層中からの遺物の出土はない。礫径やマトリクスの違いから、4種類に分類される（ⅧC-①・ⅧC-②・ⅧC-③・ⅧC-④層）。

ⅧC-①層は、Ⅴ・Ⅵ区のほぼ全域に堆積する灰色（7.5Y8/1）～オリーブ色（5Y5/4）の微砂と径5cm大の砂礫層である。ⅧC-①層上面は起伏に富み、Ⅴ区南端からⅥ区北端にかけて高くなる。Ⅴ区南端では標高36.3m、Ⅵ区北端では37m前後となる。層厚は20～140cmを測り、Ⅴ区北端、第4地区が最も厚い堆積をなす。

Ⅷ C-②層は、Ⅴ区第２・３・４地区とⅥ区第１地区南半部に堆積する灰白色（5Y8/1）の砂礫層である。Ⅷ C-②層上面はⅧ C-①層が覆い、下面は第Ⅸ層である。現況で層厚120㎝前後である。本層上面はやや起伏があり、Ⅴ区からⅥ区に向けて徐々に高くなり、Ⅴ区第４地区で標高35.1m、Ⅵ区第1地区で標高35.8mとなる。礫径は最大径10×20㎝、最小径３×５㎝、径５×10㎝大の礫が大半を占め、礫と礫の間には灰色の粗砂と１～３㎝大の小礫が混入する。

Ⅷ C-③層は、Ⅴ区第１・第２地区に堆積する灰白色（7.5Y8/1）の砂礫層である。Ⅷ C-③層上面はⅧ C-①層が覆い、下面は第Ⅸ層である。礫径は最大径10×20㎝、最小径３×５㎝、径５×10㎝大の礫が大半を占める。礫と礫の間には灰色の砂が混入する。層厚は約１mを測る。

Ⅷ C-④層は、Ⅵ区第１地区北半部と第２・３地区に堆積する灰オリーブ色（5Y6/2）の砂礫層である。Ⅷ C-④層上面は、Ⅷ C-①層が覆い、下面は第Ⅸ層である。径５×10㎝大の円礫が密集し、礫と礫の間には灰色の粗砂が混入する。現況で層厚30～80㎝を測る。

Ⅷ C層からは遺物の出土はないが、第Ⅶ層（縄文時代後期）が覆うことから、縄文時代後期以前に堆積した堆積物である。

第Ⅸ層－第Ⅸ層はⅢ・Ⅳ区を除く区で検出した礫層である。第Ⅸ層上面の標高は、Ⅰ区第１地区が最も低く34.2m前後、北側に向けてやや高くなりⅡ区では34.8m前後、Ⅴ区では35.2m前後、Ⅵ区では36.0m前後となる。本層上位には、黒色化したクサリ礫が確認された。礫はやや角張った花崗岩からなり、径15～30㎝大のものが密集しており、一部風化した礫もある。礫と礫の間には、灰色の粗砂が混入する。礫の種類や大きさ、円磨度から、最終氷期の石手川の洪積礫層と考えられる。

(2) 遺構・遺物（表３）

本調査では、縄文時代後期から中・近世までの遺構と遺物を確認した。以下、時代別に検出した遺構と遺物の概要を説明する。

１）縄文時代

縄文時代の遺構は未検出である。遺物は、Ⅴ・Ⅵ区の弥生時代前期末～中期初頭の溝や土坑、土器溜まりと第Ⅵ層中より、縄文時代後期と晩期の土器片が６点出土したに限られる。

２）弥生時代

① 前期

弥生時代前期の遺構は、調査地の北側、Ⅴ・Ⅵ区に集中しており、溝4条と土坑185基がある。これらの遺構は遺物から判断すると、前期末から中期初頭頃までのもので、いずれも短期間に構築し、埋没したものである。各遺構内からは完形品の土器類をはじめ、石庖丁の未製品や石斧・砥石などが出土し、出土量はテンバコ（44×60×14㎝）約200箱分に及ぶ。特に、溝ＳＤⅥ105内からは、分銅形土製品が出土しており、現在のところ最も古い時期の資料である。

これらの遺構を覆う第Ⅵ層は該期の遺物包含層であり、テンバコ約20箱分の遺物が出土した。このほか、Ⅱ区～Ⅳ区の第Ⅷ B層の砂礫層及び流路内からも、該期の遺物が数点出土している。

② 中期～後期

弥生時代中期後半から後期前葉までの遺構はⅤ・Ⅵ区にあり、竪穴式住居址３棟、溝３条、土坑14基がある。これらの遺構を覆う第Ⅴ層は、弥生時代中期中葉から後期後半の遺物を含む包含層であり、テンバコ約100箱分の遺物が出土している。このほか、Ⅱ区～Ⅳ区の第ⅧＢ層中や流路内からも該期の遺物が出土している。

３）古墳時代

古墳時代の遺構は、他の時代の遺構に比べ最も少ない検出数となり、溝２条、土坑９基、自然流路２条である。なお、第Ⅳ層は主に古墳時代後期の遺物を包含しており、テンバコ10箱分の遺物が出土している。

４）古代

古代の遺構は調査地の全域にあり、掘立柱建物址１棟、溝７条、土坑28基、自然流路２条である。掘立柱建物址は10世紀、溝ＳＤＶ201・Ⅴ401は８世紀中～後半、土坑と流路は主に８世紀代の遺構になる。特に、ＳＤＶ201内からは硯の破片や暗文土師器のほか、土馬が出土している。

また、第Ⅲ層は７～11世紀代の遺物包含層になる。本層中からは、９世紀後半～10世紀前半の緑釉陶器・灰釉陶器（京都産）があわせて12点出土した。遺物の出土量はテンバコ約30箱分である。

５）中世

中世の遺構は調査地全域にあり、掘立柱建物址７棟、溝23条、土坑22基、柵列１基、流路１条、水田址３面、畑址１面である。掘立柱建物址、溝、土坑は、主に13～15世紀代の遺構であり、道後湯築城築城以前のものである。一方、水田址や畑址は古いもので12～13世紀、新しいものでは15世紀後半以前になる。遺物は、遺構内及び第Ⅱ層中から土師器の坏・皿・土釜、東播系コネ鉢、備前焼のすり鉢のほか、青磁や白磁といった輸入陶磁器があり、出土量はテンバコ20箱分となる。

６）近世

近世の遺構はⅡ区の溝１条（ＳＤⅡ101）である。溝内からは土師器の皿・坏、肥前焼の椀などがテンバコ１箱分出土した。

今回の調査で検出した遺構は、表３にみられるように、弥生時代は調査地北側のⅤ・Ⅵ区、古墳時代～古代は調査地中央部Ⅲ・Ⅳ区に集中しており、中世では調査地ほぼ全域に認められる。

検出した遺構は、竪穴式住居址３棟、掘立柱建物址８棟、柵列１条、溝40条、自然流路９条、土坑259基、ピット762基、水田址３面、畑址１面である。

表3　検出遺構一覧

区 / 時代	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
弥生時代前期末～中期初頭					溝　2条 土坑　100基	溝　2条 土坑　85基
弥生時代中期～後期	流路　2条	流路　1条	流路　1条		土坑　10基	竪穴　3棟 溝　3条 土坑　4基
古墳時代	流路　2条		溝　1条 土坑　1基	土坑　1基	土坑　4基	溝　1条 土坑　3基
古　代	流路　1条	溝　1条 流路　1条 土坑　3基	溝　1条 土坑　15基	掘立　1棟 溝　1条	溝　3条 土坑　4基	溝　1条 土坑　7基
中　世	水田　3面 畑　1面 溝　2条 流路　1条	水田　3面 溝　11条	掘立　4棟 柵列　1条 溝　2条 土坑　8基	土坑　2基	溝　3条 土坑　4基	掘立　4棟 溝　5条 土坑　8基
近　世		溝　1条				

－ 凡　　例 －

1．本報告書では、Ⅰ区からⅥ区までで検出した遺構・遺物を、各区毎に第３章Ⅰ区の調査、第４章Ⅱ区の調査、第５章Ⅲ区の調査、第６章Ⅳ区の調査、第７章Ⅴ区の調査、第８章Ⅵ区の調査として掲載している。さらに、各区において、最も多く検出した時期の遺構・遺物を各項の最初に記載し、以下、時期毎に報告を行っている。なお、時期の特定できない遺構・遺物は「その他の遺構と遺物」として取り扱っている。

2．本報告書では、検出した遺構・遺物を以下のようにして掲載している。遺構は遺構番号を４ケタとし、千の位には区名（Ⅰ～Ⅵ区）、百の位には地区名（第１～第４地区）を付けて表記している。ただし、ピット（ＳＰ）は千の位には区名を付けているが、地区名は省略している。なお、ピット番号は第1地区から順に001、002……といった通し番号を付けている。また、自然流路（ＳＲ）のうち、同じ区において、地区は異なるが、同一の流路と判断したものはピットと同様、地区名を省略している。

遺物は遺物番号を４ケタとし、千の位には区名（Ⅰ～Ⅵ区）を付けて表記している。

例）〔遺構〕ＳＫⅤ２１８…　Ⅴ区第２地区検出の18番土坑

区　地区　番号

ＳＰⅢ０１２…　Ⅲ区検出の12番ピット　　ＳＲⅢ００２･･･Ⅲ区検出の２号流路

区　番号　　区　番号

〔遺物〕Ⅲ１２３……　Ⅲ区出土の123番遺物

区　番号

3．本報告書掲載の遺物のうち、施釉陶器（緑釉・灰釉）と輸入陶磁器（青磁・白磁）は、断面図の表示にて、他の遺物と区別している。施釉陶器は断面図にスミアミ10％、輸入陶磁器はスミアミ20％を抽入している。

4．遺物の本文及び観察表には、弥生土器に施文された沈線文を以下のようにして記載している。

例）ヘラ状工具により、１本ずつ施文された沈線文→ヘラ（描き）沈線文、クシ状工具により施文された沈線文→クシ（描き）沈線文、２条１組の工具により施文された沈線文→２条１組の工具による沈線文、または沈線文（２条１組）、単位は不明であるが、２条以上を１組とした工具により施文された沈線文→沈線文

5．土器に施された押圧文は、以下のように区別して記載している。

例）指おさえによる押圧文→指頭押圧、工具による押圧文→押圧

第３章

Ｉ区の調査

第3章　Ⅰ区の調査

1．調査の経緯（第7図、図版3）

Ⅰ区は、調査地の南部に位置する。調査以前は既存宅地や水田であった。調査対象地は持田町1丁目3－20から4－12までの間、幅18m、長さ123m、調査対象面積2,204㎡である。国土座標は、X93343～93465、Y－65983～－66003の地域になる。Ⅰ区周縁は道路が狭く、排土搬出用の車両が通行できないため、排土置き場は調査区内及び隣接する調査区を使用した。調査区内には、調査中も東西方向の生活道路が3本通っており、Ⅰ区の地区割りはそれらの道路や水田、宅地の境界で設定した。地区名は南から北に向かって第1地区、第2地区、第3地区、第4地区とした。以下、調査工程を略記する。なお、各地区の調査面積と調査期間は表4のとおりである。

〔調査工程〕

① 調査は第2地区から着手し、第1地区、第3地区、第4地区はほぼ同時進行である。

② 各調査区の表土は、重機を使用して除去した。遺構は第1地区から畝溝、第2地区からは自然流路、第3地区と第4地区からは水田址、溝、足跡を検出した。

③ 各調査区の遺構を掘り下げ、測量と写真などの記録をとる。

④ 平成9年3月22日、一般市民を対象とした現地説明会を行う。

⑤ 各調査区には東壁、北壁、南壁に深掘りトレンチを設定し、旧地形の復元に努める。

表4　調査地区一覧

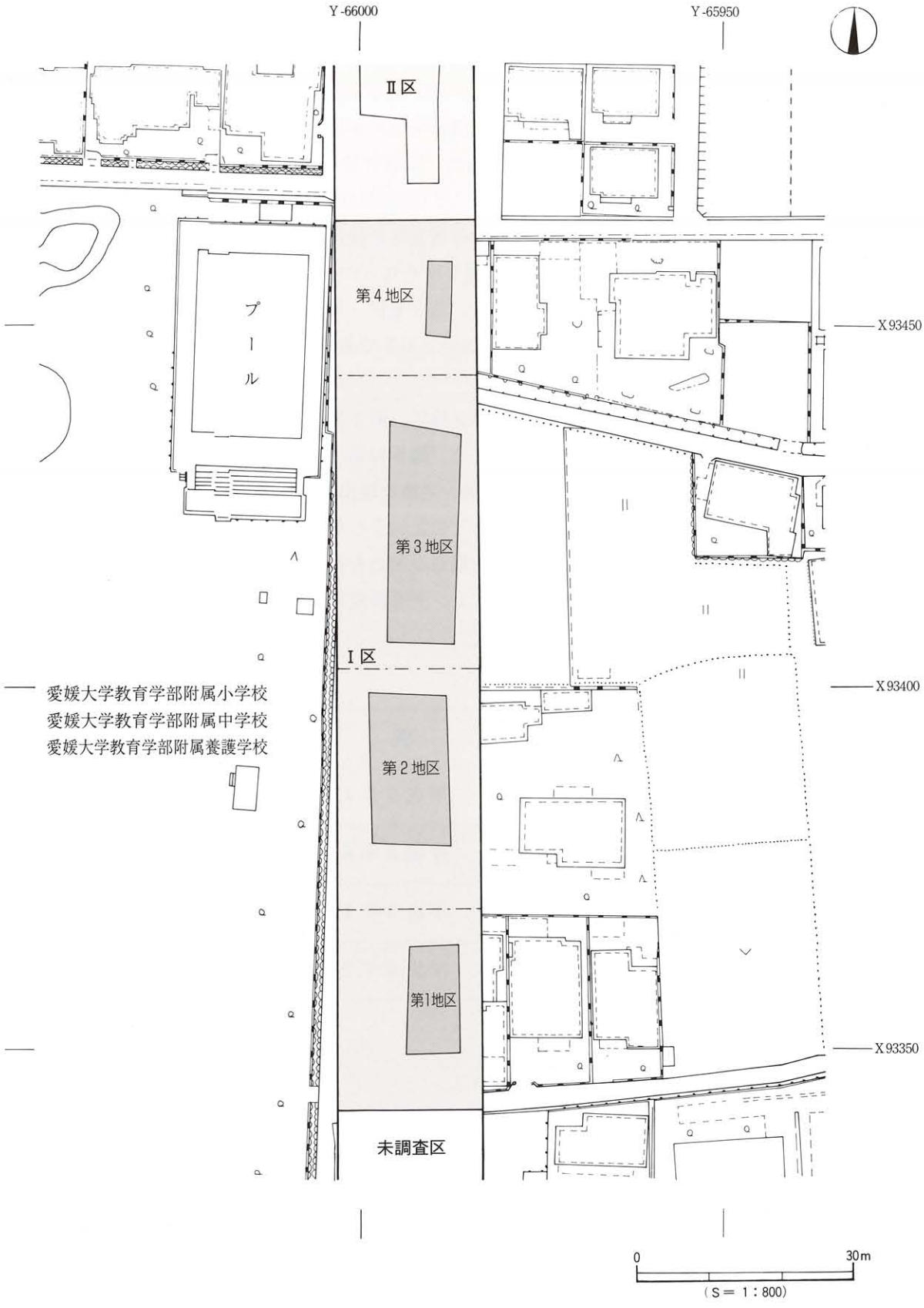
地　区	対象面積（㎡）	調　査　期　間
1	486	平成9年1月16日～平成9年3月17日
2	594	平成8年6月3日～平成8年9月12日
3	720	平成9年1月20日～平成9年3月20日
4	414	平成9年2月19日～平成9年3月27日

2．層　位

(1) 基本層位（第8図、図版3～5）

Ⅰ区では第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅷ層、第Ⅸ層を検出し、第Ⅲ層～第Ⅶ層は未検出である。

第Ⅱ層は水田や畑などの耕作に伴う土壌で、第2章で説明した第ⅡA層に相当する。調査では水田面3面と畑址1面及び、溝2条と自然流路6条を確認した。水田址は土層上位から順に水田1、水田2、水田3と呼称した。現況ではⅠ区の中央部、第2・3地区がやや低くなり、第1地区の標高は、35.9m、第2地区は35.5～35.7m、第3地区は35.8m、第4地区は36.1mになる。


Y-66000
Y-65950
Ⅱ区
第4地区
プール
第3地区
Ⅰ区
第2地区
第1地区
未調査区
X93450
X93400
X93350
愛媛大学教育学部附属小学校
愛媛大学教育学部附属中学校
愛媛大学教育学部附属養護学校
0
30m
(S＝1：800)

第7図　Ⅰ区測量図

第Ⅰ層－近現代の造成土及び水田耕作に伴う耕土である。第１地区は層厚60～80cm、第２地区は層厚30～50cm、第３地区は層厚20cm、第４地区は層厚50cmを測る。

第Ⅱ層－層厚15～80cmを測り、14層に分層した（ⅡA-①～ⅡA-⑭層）。このうちⅡA-③・ⅡA-⑧・ⅡA-⑫層は水田土壌、ⅡA-⑬層は畑土壌である。

ⅡA-①層：黄色（2.5Y8/6）粘質土で、Ⅰ区全域にみられる。層厚5～20cmを測る。

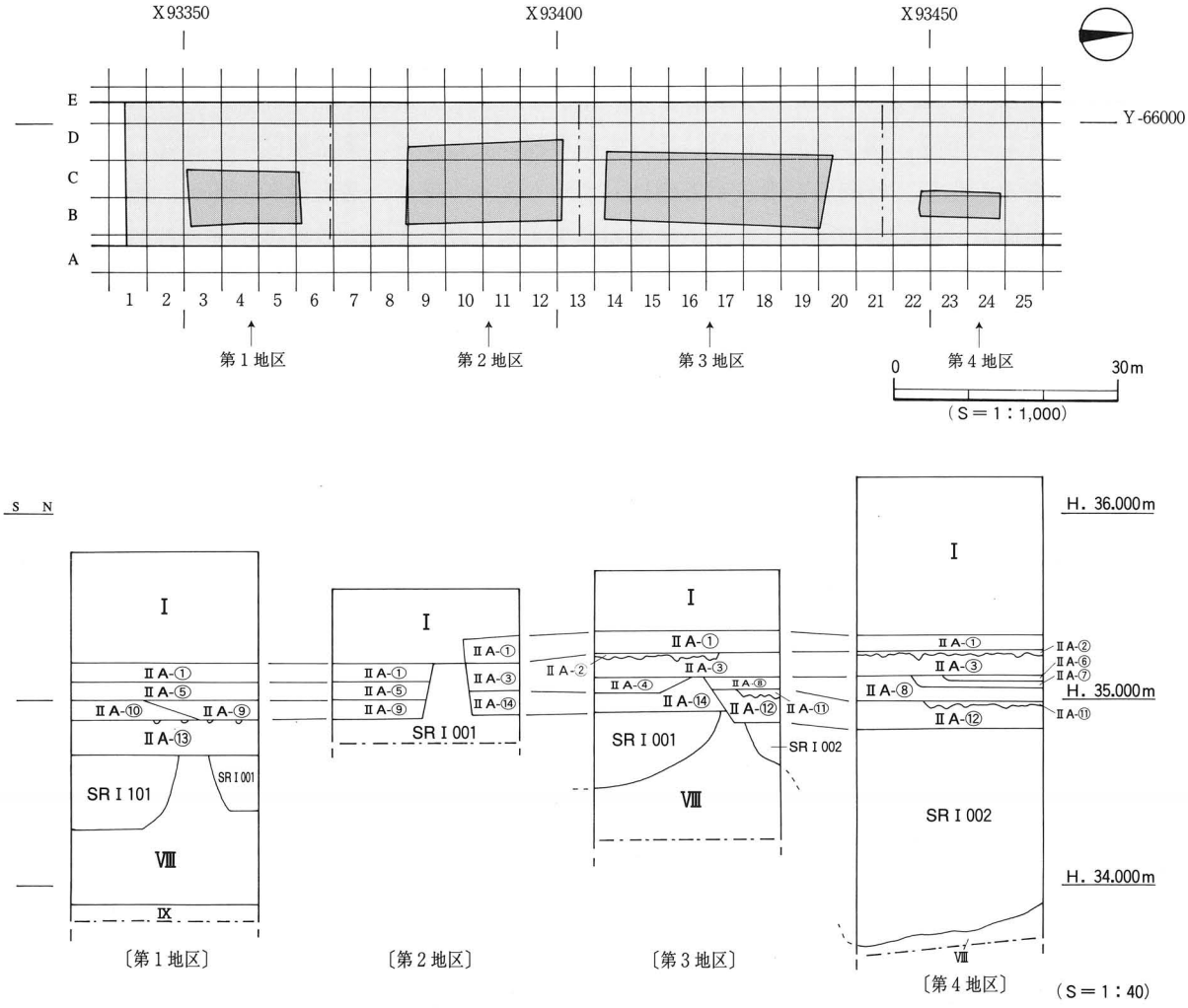
ⅡA-②層：灰白色（10Y8/1）微砂で、水田1の足跡や鋤跡を覆う土壌である。第３地区と第４地区でみられ、層厚２～５cmを測る。

ⅡA-③層：灰白色（7.5Y7/2）粘質土で、水田土壌（水田1）である。第２地区の北端から第３・４地区までにみられる。層厚５～18cmを測る。

ⅡA-④層：黄色（2.5Y8/6）粘質土で、第３地区に限られる。ⅡA-③層下面での検出であり、層厚３～５cmを測る。

ⅡA-⑤層：灰白色（10Y8/2）土で、第1地区と第２地区南半部にみられる。ⅡA-①層下面での検出であり、層厚５～10cmを測る。

ⅡA-⑥層：灰オリーブ色（5Y5/3）粘質土で、第４地区に限られる。ⅡA-③層下面での検出であり、層厚３～５cmを測る。



第８図　Ⅰ区区割図・土層模式図

ⅡA-⑦層：灰白色（7.5Y8/2）粗砂で、水田2を覆う土壌である。第4地区に限られ、層厚3～5cmを測る。

ⅡA-⑧層：鈍い褐色（7.5YR5/4）粘質土で、水田土壌（水田2）である。第3地区の北端と第4地区でみられ、層厚5～30cmを測る。本層中からは、13世紀代に比定される土師器と瓦器椀の小片が出土している。

ⅡA-⑨層：灰白色（7.5Y8/2）土で、第1地区と第2地区南半部にみられる。ⅡA-⑤層下面での検出であり、層厚5～15cmを測る。

ⅡA-⑩層：暗青灰色（5BG3/1）土で、第1地区に限られる。ⅡA-⑨層下面での検出であり、層厚5～10cmを測る。

ⅡA-⑪層：灰白色（10Y7/1）砂で、水田3を覆う土壌である。第3地区の北端と第4地区でみられ、層厚5～8cmを測る。

ⅡA-⑫層：灰白色（5Y8/1）粘質土で、水田土壌（水田3）である。第3地区の北端と第4地区でみられ、層厚5～20cmを測る。

ⅡA-⑬層：灰オリーブ色（5Y7/3）土で、畑土壌である。第1地区に限られ、層厚5～15cmを測る。本層中からは、12～13世紀に比定される土師器と須恵器が出土している。

ⅡA-⑭層：灰オリーブ色（5Y5/3）土で、第2地区の北側と第3地区でみられる。第Ⅷ層上面に堆積する土層で、層厚5～10cmを測る。

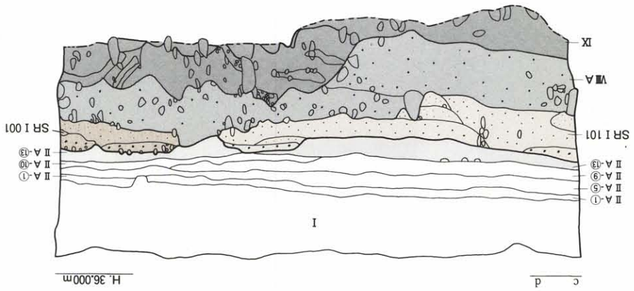
第Ⅷ層－灰白色（7.5Y7/1）を呈する砂礫層で、第2地区を除く全域でみられる。ただし、第2地区のトレンチは、深さが他の地区に比べてやや浅いことから、第2地区でも存在しているものと考えられる。砂礫層を構成する礫はいずれも丸味を帯び、最大径10×20cm、最小径3×5cmを測る。礫と礫の間には灰色の粗砂が混入する。礫の大きさや堆積状況から、石手川本流を構成する砂礫層と考えられ、Ⅱ区に続くものである。第2章で説明した第ⅧA層に相当する。第ⅧA層上面は、第1地区の中央部と第3地区の北端でやや高くなる。層厚は最大で60cmを測る。堆積の範囲は、堆積状況から南北150m（Ⅱ区を含む）である。本層中からは弥生時代前期末～中期初頭の土器片が少量出土している。

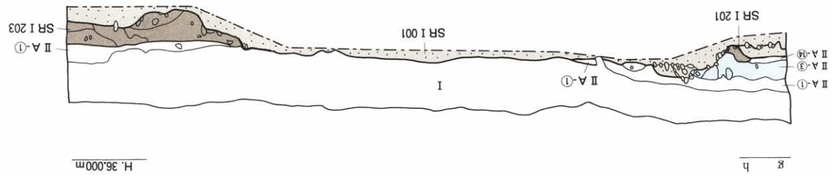
第Ⅸ層－第1地区の最下部に検出が限られた土層で、石手川の洪積礫層である。本層上面は地表下2.1～2.2mの地点にあり、標高は34.0～34.2mである。礫層を構成する礫は花崗岩からなり、最大径10×30cm、最小径3×5cmを測る。礫全体は丸味を帯び、礫と礫との間には灰色の粗砂が混入する。礫層上位には、クサリ礫が厚さ10cm程度みられる。

(2) 検出遺構と遺物（第9・10図、表5）

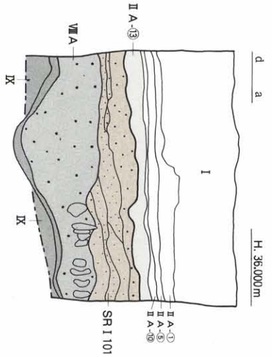
Ⅰ区の調査では、弥生時代から中世までの遺構と遺物を検出した。

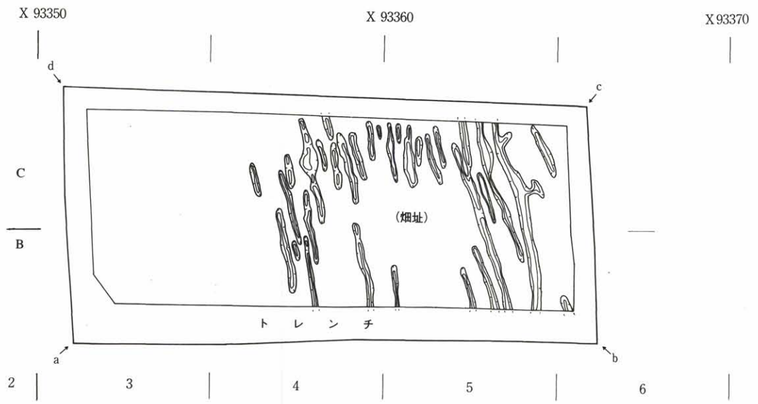
弥生時代から古代までの遺構は、第Ⅷ層上面で検出したものである。すべて自然流路で、弥生時代の流路は2条、古墳時代の流路は2条、古代の流路は1条である。中世の遺構は12世紀後半～15世紀後半のもので、水田址（3面）、畑址（1面）、溝2条、自然流路1条である。各地区で検出した遺構は表5にまとめた。なお、自然流路のうち、弥生時代の流路は二つ以上の地区にまたがって検出されており、ここでは他の流路とは異なり、SRI001、SRI002というように地区名を省略して記述している。調査では、調査区内を5m四方のグリットに分けた。調査区東側から西側へA・B・C・D・E、南側から北側へ1・2・3……25とし、A1～E25といったグリット名を付けた（第8図）。

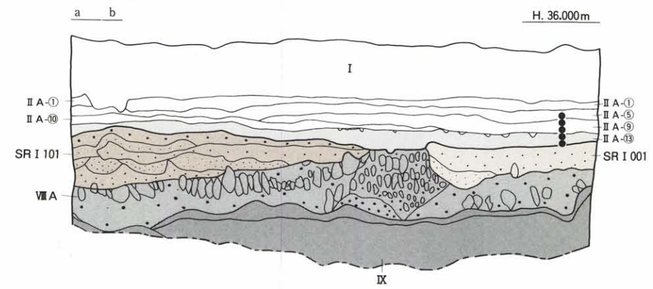




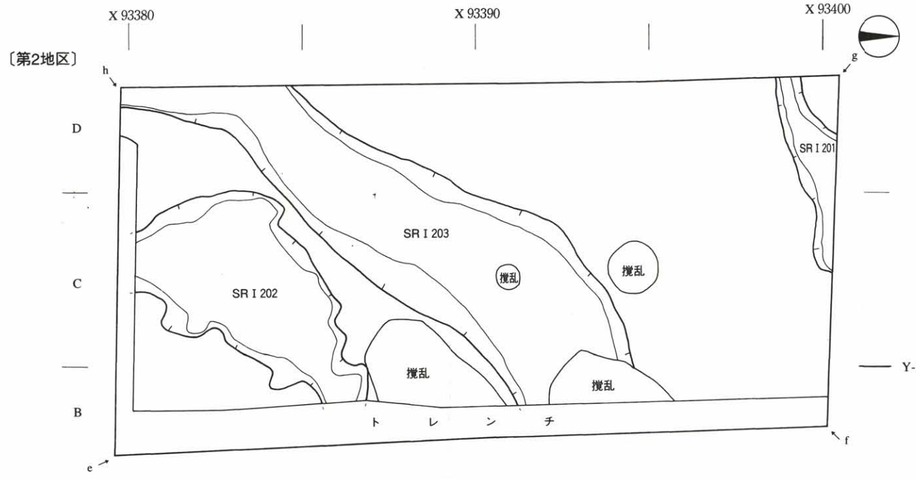
〔第1地区〕

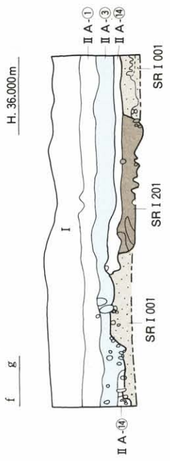


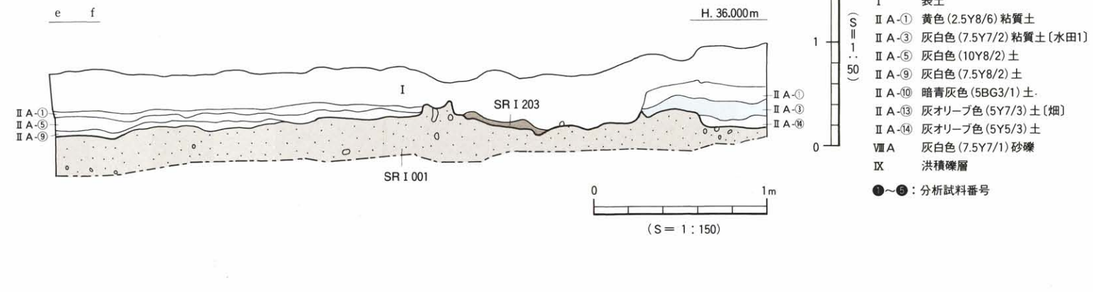




〔第2地区〕

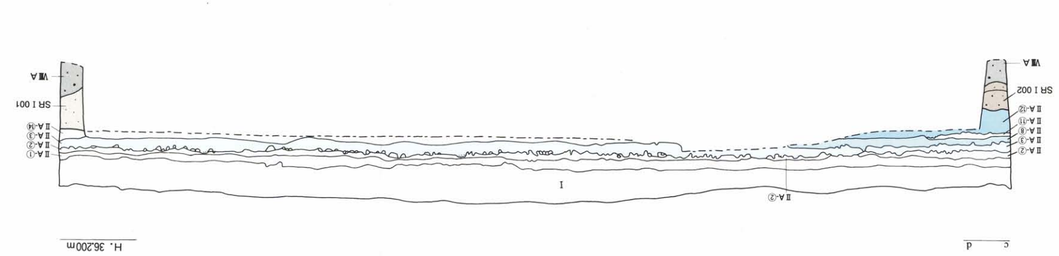




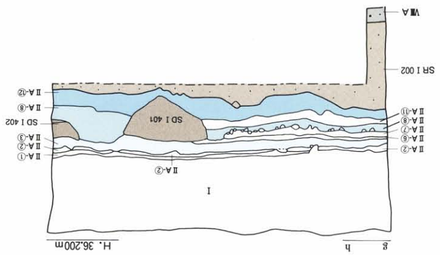


※ 遺構配置図、土層図の縮尺は平面が1/150、断面の深さは1/50である。

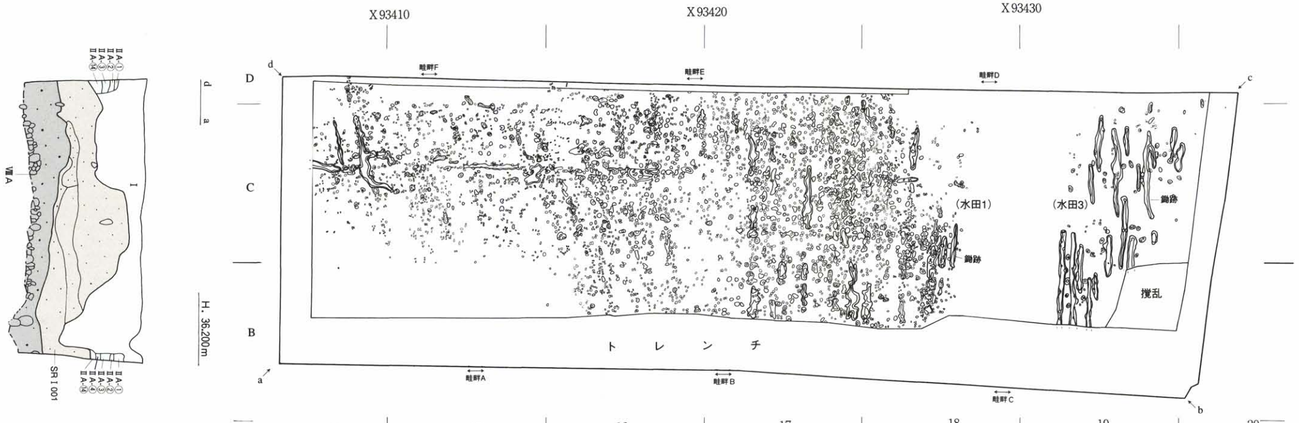
第９図　Ⅰ区〔第１地区・第２地区〕遺構配置図・土層図

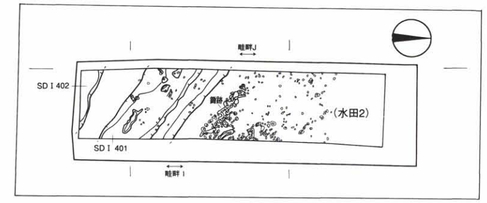


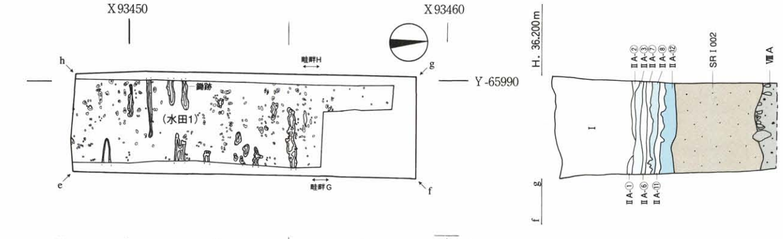
〔第4地区〕

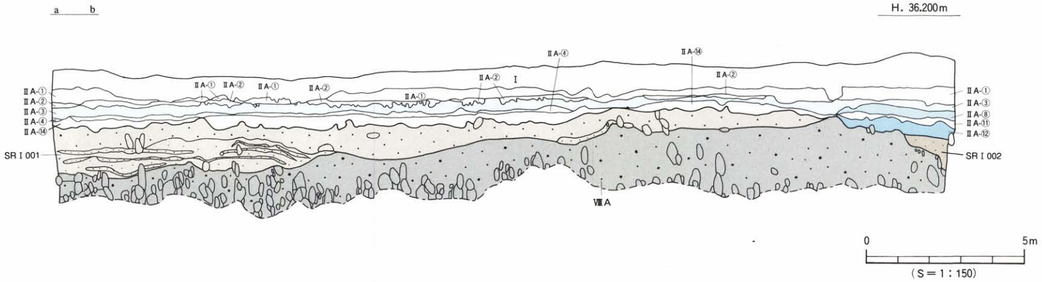


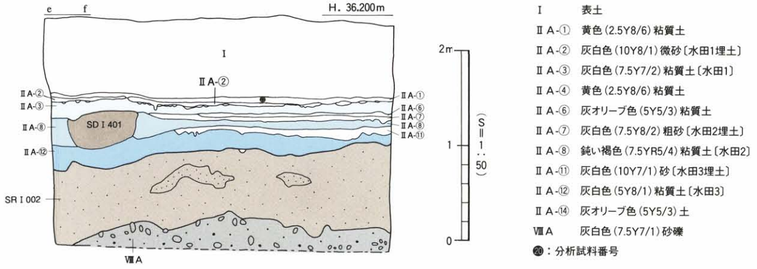
〔第3地区〕











I　表土
Ⅱ A-① 黄色 (2.5Y8/6) 粘質土
Ⅱ A-② 灰白色 (10Y8/1) 微砂〔水田1埋土〕
Ⅱ A-③ 灰白色 (7.5Y7/2) 粘質土〔水田1〕
Ⅱ A-④ 黄色 (2.5Y8/6) 粘質土
Ⅱ A-⑥ 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘質土
Ⅱ A-⑦ 灰白色 (7.5Y8/2) 粗砂〔水田2埋土〕
Ⅱ A-⑧ 鈍い褐色 (7.5YR5/4) 粘質土〔水田2〕
Ⅱ A-⑪ 灰白色 (10Y7/1) 砂〔水田3埋土〕
Ⅱ A-⑫ 灰白色 (5Y8/1) 粘質土〔水田3〕
Ⅱ A-⑭ 灰オリーブ色 (5Y5/3) 土
Ⅶ A 灰白色 (7.5Y7/1) 砂礫
㉘：分析試料番号

第10図　Ⅰ区〔第3地区・第4地区〕遺構配置図・土層図

表５　Ｉ区遺構一覧

地区 / 時代	第１地区	第２地区	第３地区	第４地区
弥生中期後半	←	ＳＲＩ001	→ ←	ＳＲＩ002 →
古　墳	ＳＲＩ101	ＳＲＩ201		
古　代		ＳＲＩ202（11世紀）		
中　世	畑址（12～13世紀）	ＳＲＩ203（12世紀後半） ←	水田１（15世紀後半以前） ←	ＳＤＩ401（13～15世紀） ＳＤＩ402（13～15世紀） →
			← 水田２（13～15世紀後半） ← 水田３（13世紀以前）	→

３．中世の遺構と遺物

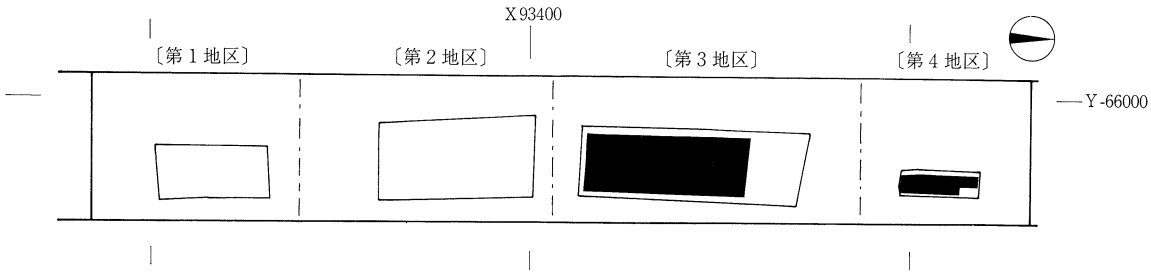
中世の遺構は水田址３面、畑址１面、溝２条と自然流路1条を検出した。このうち、溝２条は水田に関連するものと考えられ、ここでは、水田址の説明の際に合わせて記述している。

(1)　水田址（図版６～８）

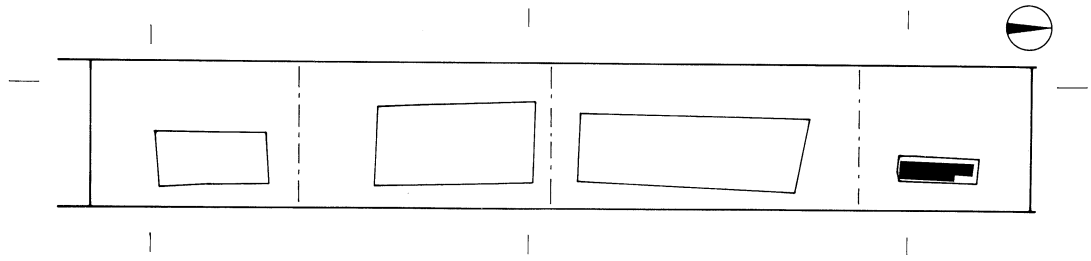
水田址はＩ区の北半部、第２・第３・第４地区で検出し、第２地区では１面、第３地区と第４地区ではそれぞれ３面の水田址を確認した。３面の水田址は、時期の新しいものから水田１、水田２、水田３とした。なお、発掘調査では水田の有無を見落としていた地区や、試掘調査の際に、既に水田面を掘削した箇所があり、Ｉ区全域を対象とした平面調査は実施していない。平面調査を実施した範囲は第11図のとおりである。水田１は第３地区北側のＢ19～Ｄ20区を除く地域と、第４地区全域で平面調査を実施した。水田２は第４地区、水田３は第２地区北側のＢ19～Ｄ20区に調査範囲が限られた。平面調査では、鋤跡状遺構や足跡を検出し、畦畔や水路は検出することができなかった。一方、調査壁の土層観察では、畦畔を一部検出することができた。ここでは調査時の工程を記述した後、水田１～３を説明する。

〔調査工程〕

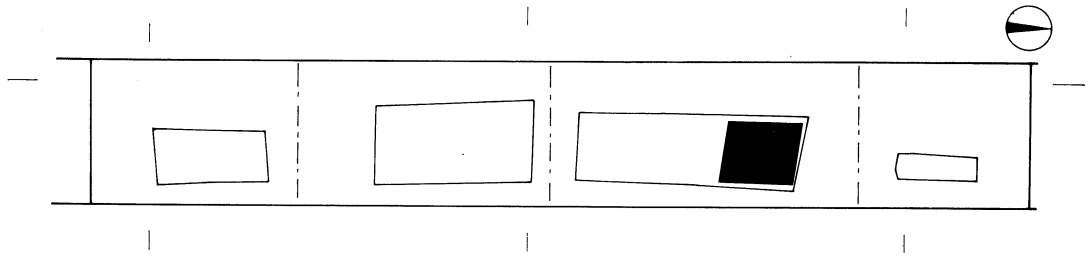
第３地区：調査は第３地区から開始し、表土からⅡＡ-①層までを重機で掘削した。ⅡＡ-③層上面では調査区北側を除く地域（Ｂ14～Ｄ18区）で、溝状の遺構と足跡を検出した。調査区中央部、Ｂ17～Ｄ18区付近では、真北方向にほぼ平行する南北方向の溝を５条と、真北方向に直交する東西方向の溝を23条検出した。また、調査区中央より南側、Ｂ14～Ｄ16区では真北方向の溝を４条と、北北東－南南西方向の溝を１条、東西方向（やや北東－南西方向）の溝を13条検出した。



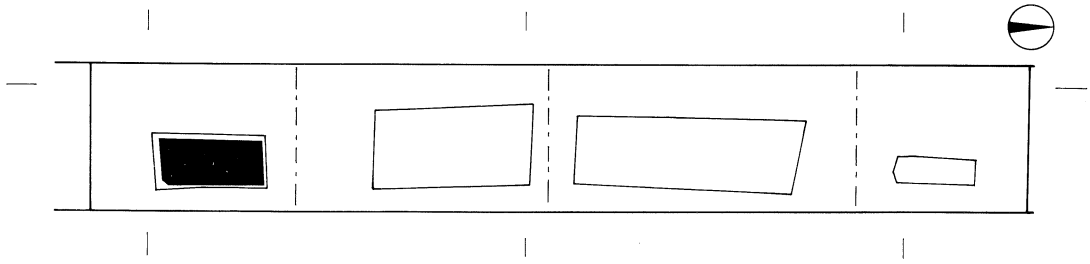
（Ⅰ）水　田　1



（Ⅱ）水　田　2



（Ⅲ）水　田　3



（Ⅳ）畑　　址

▒：調査範囲

0　30m
（S＝1：1,000）

第11図　Ⅰ区水田址・畑址の調査状況図

溝の調査は、上場を測量した後、掘り下げを行った。掘り下げは数mmで終わるものが多く（最深部3cm）、溝の両壁体はその多くが消失し、小穴が点在する状況であった。この時点で、高所作業車により検出状況写真を撮影した。小穴及び足跡を掘り下げた後、1m角の測量用網を使ってこれらの遺構の測量を行った。

調査区北側、B19～D20区では調査壁の土層観察により、もう1面の水田址を確認した（水田3）。そこでⅡA-⑧層を掘り下げ、ⅡA-⑫層上面にて溝状遺構と足跡を検出した。溝の方位はいずれも真北方向に直交する東西方向を示し、大小18条を検出した。続いて、溝と足跡を掘り下げ、測量図を作成した。溝は深さ5cm程度であった。

第4地区：第3地区に引き続き、第4地区の調査を実施した。重機にてⅡA-①層までを掘り下げ、ⅡA-③層上面にて第3地区と同様に、溝状の遺構と足跡を検出した。溝は調査区の北側、B・C24区を除く地域にみられ、真北方向に直交する東西方向の溝17条を検出した。溝の上場を測量した後、掘り下げを行ったが、半数の溝は痕跡をとどめるにすぎなかった。高所作業車で検出状況写真を撮影し、1m角の測量用網を使用して、遺構の測量図を作成した。

引き続き、ⅡA-②層以下の掘り下げを行った。その結果、ⅡA-⑧層（水田2）上面にて、溝2条（SDI401・402）と足跡を検出した。このうち、溝SDI401の基底面では、小溝と足跡を検出したが、埋土はⅡA-⑧層上面で検出した足跡埋土とは明らかに異なっていた。

その後、調査はⅡA-⑧層を掘り下げ、遺物の取り上げを行った。ⅡA-⑧層中からは、主に13世紀代の遺物が出土した。調査はこの層で終了し、ⅡA-⑪・ⅡA-⑫層は掘り下げをしていない。なお、土層断面からはⅡA-⑫層上面にも水田らしき砂の層（ⅡA-⑪層）を確認したため、水田は3面が存在していたものと考えられる。

第2地区：第2地区はI区の調査の中で、最初に調査を実施した地区である。調査時は水田の有無を見落としていたため、平面調査は実施していない。ただし、整理作業では調査区の北端、B12～D13区の土層断面にてⅡA-③層（水田1）を確認している。

〔概　要〕

水田1：水田1はⅡA-③層〔灰白色（7.5Y7/2）粘質土〕を基盤土壌とし、ⅡA-②層〔灰白色（10Y8/1）微砂〕で覆われる。検出地区は第2地区の北端と第3地区、第4地区である。畦畔は、平面調査では検出しておらず、調査区東西の土層壁にて、調査時と整理作業中に検出及び畦畔と判断した。

畦畔は第3地区東壁にて3箇所（畦畔A・B・C）、西壁にて3箇所（畦畔D・E・F）、第4地区東壁にて1箇所（畦畔G）、西壁にて1箇所（畦畔H）を確認した。規模は幅25～58cm、高さ4～5cmで、畦畔の間隔はA－B間6.5m、B－C間7.9m、D－E間8.9m、E－F間8.1mとなる。なお、調査区南壁・北壁では畦畔は検出できなかった。

鋤跡状遺構は第3地区と第4地区で検出した。第3地区は、調査区中央部より北側では南北方向に平行及び直交するように掘られているが、南側では東西方向のものは、方位をやや北東－南西方向にとる。第4地区ではすべて真北方向に直交する。規模は幅12～30cm、深さ3～5cmで、埋土は灰白色（7.5Y8/1）微砂に白色砂粒を含む。鋤跡状遺構内からは、遺物は出土していない。

足跡は鋤跡状遺構と同様、第3地区と第4地区で検出した。足跡総数は2,501ヶで、第3地区では2,416ヶ、第4地区では85ヶを検出した。このうち牛と考えられる足跡は856ヶあり、第3地区では824ヶ、第4地区では32ヶとなる。なお、牛の足跡は鋤跡状遺構に沿うように検出された。牛の足跡

は、「ハ」の字状に残っており、規模は幅１～３cm、長さ５～10cm、深さ１～２cmである。他の足跡の規模は、幅３～７cm、長さ５～12cm、深さ３～４cmである。埋土はⅡA-②層と同様の灰白色（10Y8/1）微砂である。足跡内からは、遺物は出土していない。

水田１の形状は、鋤跡状遺構や足跡、畦畔の検出状況から、第３地区の中央部より北側と第４地区では真北方向に沿うような方形状の区画をなし、第３地区中央部より南側では、やや北東－南西方向に区画された台形状の区画をなすものと推測される。畦畔の状況から、水田1は８～９mの区画規模をもつものと考えられる。水田1を覆う土壌であるⅡA-①層中からは、主に14～15世紀後半の遺物が出土している。

時期：出土遺物から水田1の時期は、下限を15世紀後半とする。

水田２：水田２は、ⅡA-⑧層〔鈍い褐色（7.5YR5/4）粘質土〕を基盤土壌とし、ⅡA-⑦層〔灰白色（7.5Y8/2）粗砂〕で覆われる。検出地区は第３地区の北側、B19～D20区と第４地区である。ただし、第３地区は試掘調査の際にⅡA-⑧層までを掘削しており、平面調査は実施できなかった。畦畔は平面調査では検出しておらず、調査区東西の土層壁にて、調査時と整理作業中に検出及び畦畔と判断した。

畦畔は第４地区東壁にて１箇所（畦畔Ⅰ）、西壁にて１箇所（畦畔Ｊ）を確認した。規模は幅40～60cm、高さ２～４cmである。なお、調査区南壁・北壁では畦畔は検出できなかった。

畦畔Ⅰ－Ｊに沿うように鋤跡状遺構が検出された。北西－南東方向に掘られており、規模は幅10～20cm、深さ３～５cmで、埋土は灰白色（7.5Y8/2）粗砂に白色砂粒を含む。鋤跡状遺構内からの遺物の出土はない。

足跡は72ヶを検出した。このうち、牛と考えられる足跡は18ヶある。牛の足跡は水田１と同様、「ハ」の字状に残っており、規模は幅１～３cm、長さ５～10cm、深さ１～３cmである。他の足跡の規模は、幅３～７cm、長さ３～20cm、深さ３～５cmである。埋土はⅡA-⑦層と同様、灰白色（7.5Y8/2）粗砂である。足跡内からは遺物は出土していない。

水田２の形状は畦畔や鋤跡状遺構の検出状況から、北西－南東方向に区画された水田であると推測されるが、その単位は不明である。なお、水田２土壌であるⅡA-⑧層中からは、主に13世紀代の遺物が出土している。

第ⅡA-⑧層出土遺物（第13図－Ⅰ001）

Ⅰ001は和泉型瓦器椀で、体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸味を帯びる。13世紀前半。

時期：出土遺物と水田１の時期から、水田２の時期は13世紀～15世紀後半とする。

水田３：水田３はⅡA-⑫層〔灰白色（5Y8/1）粘質土〕を基盤土壌とし、ⅡA-⑪層〔灰白色（10Y7/1）砂〕で覆われる。検出地区は、第３地区北側と第４地区である。ただし、第４地区は調査区の土層壁にて確認したもので、平面調査は実施していない。

畦畔は、平面調査及び調査壁の土層観察においても検出できなかった。鋤跡状遺構は第３地区の北側、B19～D20区で検出した。南北方向に直交する東西方向のもので、規模は幅８～30cm、深さ３～５cmである。埋土は灰白色（10Y7/1）砂に白色砂粒を含む。鋤跡状遺構内からは、遺物は出土していない。

足跡は124ヶを検出した。このうち、牛と考えられる足跡は10ヶである。牛の足跡は「ハ」の字状に残っており、規模は幅１～３㎝、長さ６～10㎝、深さ１～３㎝である。他の足跡は、幅３～６㎝、長さ５～15㎝、深さ３～５㎝である。足跡埋土はⅡA-⑪層と同様、灰白色（10Y7/1）砂である。足跡内からは、遺物は出土していない。

水田３の形状は定かではないが、鋤跡状遺構の検出状況から、真北方向に等しい区画をなすものと推測される。

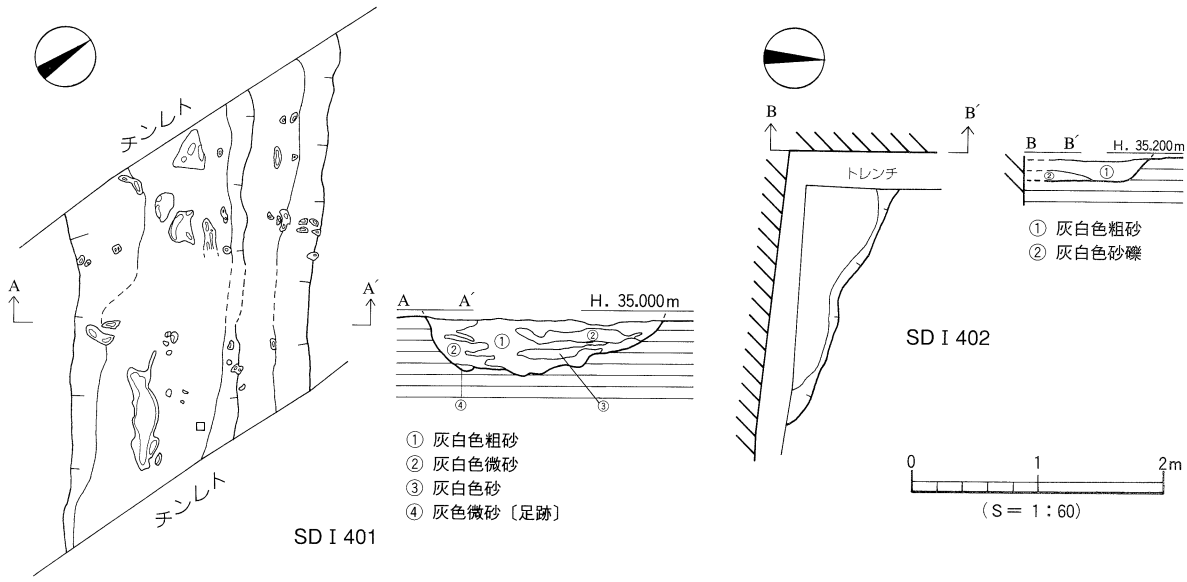
時期：水田３の時期は水田２土壌であるⅡA-⑧層が覆うことから、下限を13世紀代とする。

水田１・２・３のほか、水田址に関連すると考えられる遺構には溝２条（ＳＤＩ401・Ｉ402）がある。水田２の畦畔Ｉ－Ｊに対して並行に掘られていることや、溝の埋土が水田２を覆う土壌（ⅡA-⑦層）と類似することから、これら２条の溝は水田2に伴う遺構の可能性が高い。

ＳＤＩ401（第12図、図版8）

第４地区中央部やや南寄り、Ｂ22～Ｃ23区のⅡA-⑧層上面にて検出した溝で、幅1.88～2.20m、深さ40㎝を測る。断面形態は「Ｕ」字状を呈するが、溝北壁側には一部テラス状の平坦面をもつ。溝の埋土は鋤跡状遺構の埋土と同様、灰白色（7.5Y8/1）粗砂で、２～３㎝大の小礫と灰色砂粒を含む。溝基底面はやや凹凸があり、溝基底面からは小溝と足跡、溝壁体からは足跡を検出した。壁体部分の足跡は、溝の埋土と同様に灰白色の粗砂で埋没する。一方、基底面で検出した小溝や足跡は溝の埋土とは異なり、灰白色の砂で埋没する。水田３を覆う土壌であるⅡA-⑪層（灰白色砂）に埋土が類似することから、水田３に伴う遺構の可能性がある。堆積状況からは比較的急な水の流れが考えられる。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、明確な時期判断はしかねるが、水田１土壌であるⅡA-③層が覆うことから、溝の時期は13世紀以降、15世紀以前となる。



第12図　ＳＤＩ401･402測量図

ＳＤⅠ402（第12図、図版8）

第４地区南端、Ｂ・Ｃ22区にてＳＤⅠ401と並行して検出した溝である。規模は検出幅75㎝、深さ15㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰白色（7.5Y8/1）粗砂に白色砂粒を含む。溝基底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、明確な時期判断はしかねるが、埋土がＳＤⅠ401と酷似することや検出層位から、溝の時期は13世紀以降、15世紀以前となる。

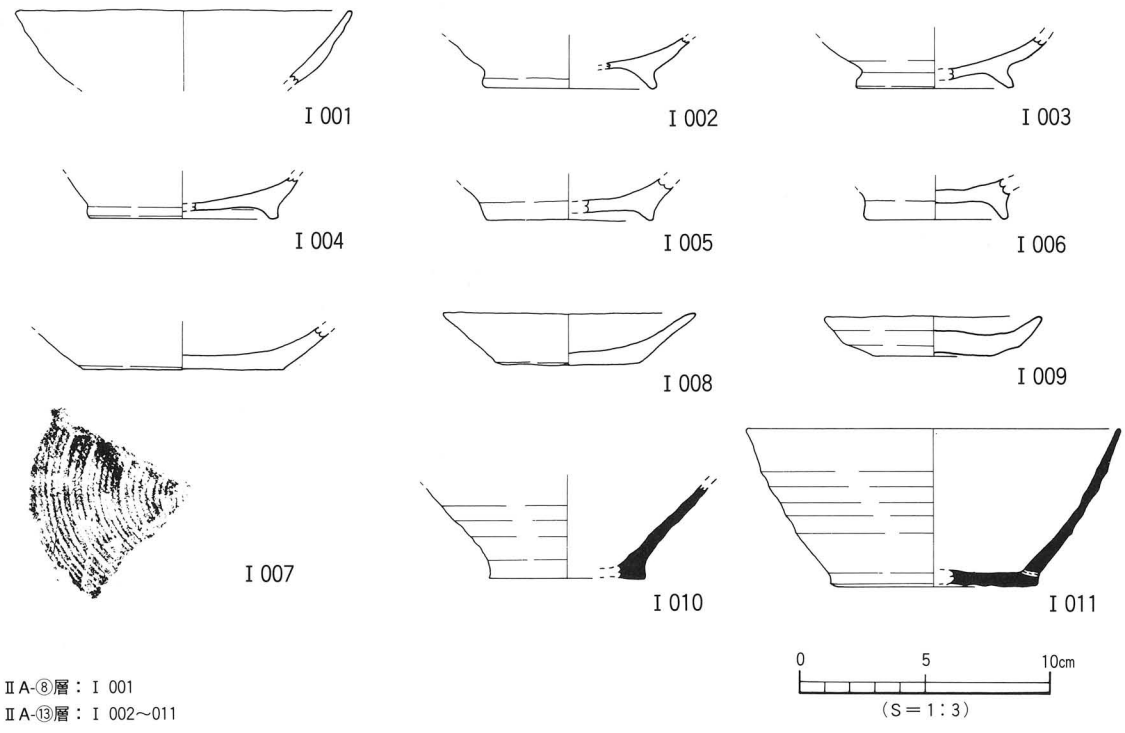
(2) 畑　　址（図版９）

畑址はⅠ区の南側、第１地区のⅡＡ-⑬層上面にて大小30条の畝溝を検出した。畝溝はすべて北東－南西方向のもので、Ｅ－10°－Ｎに方位をとる。溝幅は20～40㎝で、深さは４～６㎝を測る。第１地区南側のＢ・Ｃ３区では、畝溝は検出されなかったが、調査地区内では南側に向かって、畝の深さが浅くなることから、本来は存在していたものと推測される。畝溝からは遺物は出土していない。ただし、畑土壌であるⅡＡ-⑬層中からは12～13世紀の土師器と須恵器の小片が多数出土している。

第ⅡＡ-⑬層出土遺物（第13図－Ⅰ002～011、図版10）

Ⅰ002～006は土師器椀の底部である。すべて貼り付けによる輪高台をもち、高台は断面三角形状を呈する。底部調整は磨滅が著しく不明なものが多いが、Ⅰ006のみ回転糸切り痕が残る。Ⅰ007は土師器坏で、体部は内湾気味に立ち上がり、底部の切り離しは回転糸切り技法による。Ⅰ008･009は土師器皿で、体部はⅠ008が直線的に立ち上がり、Ⅰ009はやや内湾する。底部調整はⅠ008は不明であるが、Ⅰ009は回転糸切り痕がわずかに残る。Ⅰ010･011は須恵器坏である。円盤高台の坏で、底部調整はⅠ010は不明であるが、Ⅰ011は回転糸切りになる。13世紀。

時期：出土した遺物の特徴から、畑址の時期は上限を12～13世紀とし、下限は明確でない。



第13図　第Ⅱ層出土遺物実測図

(3) 自然流路

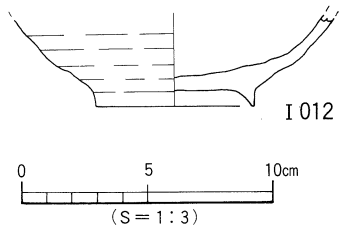
Ⅰ区の中央部やや南寄り、第２地区にて自然流路１条を検出した。

ＳＲＩ203（第９図、図版９）

第２地区の中央部、Ｂ11～Ｄ９区にて検出した流路である。流路壁体及び基底面は、流路ＳＲＩ001（弥生中期後半）に達しており、流路上面はⅡＡ-①層が覆う。規模は検出幅2.2～4.1m、深さ20cmを測る。断面形態は浅い「Ｕ」字状を呈し、埋土は灰白色（10Ｙ7/1）の粗砂である。流路基底面は凹凸が著しい。遺物は土師器片が数点出土した。このうち、埋土中位から出土した土師器椀１点を図化した。

出土遺物（第14図、図版10）

Ⅰ012は土師器椀である。貼り付けによる輪高台をもつ。高台は断面三角形状を呈する。体部は内湾気味に立ち上がる。底部調整は磨滅のため不明である。12世紀後半。



第14図　ＳＲＩ203出土遺物実測図

時期：検出層位や出土遺物の特徴から、ＳＲＩ203は12世紀後半の流路とする。

４．古墳時代～古代の遺構と遺物

Ⅰ区では、古墳時代～古代の遺構は自然流路３条を確認した。

古墳時代の遺構は第１地区でＳＲＩ101を、第２地区でＳＲＩ201を検出した。また、古代の遺構は第２地区でＳＲＩ202を検出している。

(1) 自然流路

ＳＲＩ202（第９図、図版９）

第２地区の南側、Ｂ10～Ｃ９区で検出した。流路東端は消失し、西端は調査区外に続く。流路基底面及び壁体はＳＲＩ001（弥生中期後半）に達し、流路の上面はⅡＡ-⑨層が覆う。規模は幅1.0～4.0m、深さ15～20cmを測る。断面形態は浅い「Ｕ」字状を呈し、埋土は灰白色（10Ｙ7/1）の粗砂である。流路基底面は凹凸が著しい。流路内からは土師器片が数点出土したが、いずれも磨滅が著しい。

出土遺物（第16図－Ⅰ013･014、図版10）

Ⅰ013・014は土師器坏の底部である。円盤高台の坏で、窄まりながら突出する底部をもつ。底部の切り離しは磨滅のため不明である。

時期：出土した遺物の特徴から、ＳＲＩ202は11世紀代の流路とする。

ＳＲＩ201（第９図、図版９）

第２地区の北西隅、Ｃ・Ｄ12区で検出した北東－南西方向の流路である。流路基底面はＳＲＩ001（弥生中期後半）に達し、流路上面はⅡＡ-⑭層が覆う。規模は検出幅0.6～1.2m、深さ15～20cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰白色（5Ｙ8/1）の粗砂である。流路内からは、土師器と須恵器の小片が数点出土した。図化しうるものは１点である。

出土遺物（第16図－Ⅰ015、図版10）

Ⅰ015は須恵器坏蓋である。断面三角形の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する凹面をなす。

時期：出土した須恵器の特徴から、ＳＲⅠ201は古墳時代後期、６世紀前半の流路とする。

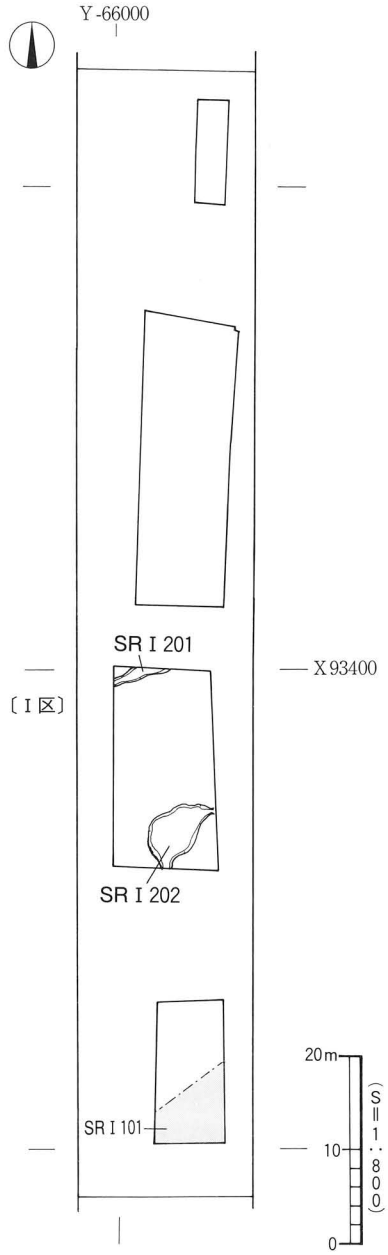
ＳＲⅠ101（第９・15図）

第１地区の南側、東西壁及び南壁の土層観察により確認した流路である。流路上面はⅡＡ-⑬層が覆う。流路の推定範囲は第15図に掲載している。北東－南西方向に流れる流路で、規模は検出幅7.0ｍ、深さ30～50㎝を測る。埋土は浅黄色（2.5Y7/3）の砂層で、粗砂・細砂・微砂が互層堆積をなす。堆積状況から流れの速い流路と判断される。流路内からは土師器と須恵器の小片が数点出土した。図化しうるものは１点である。

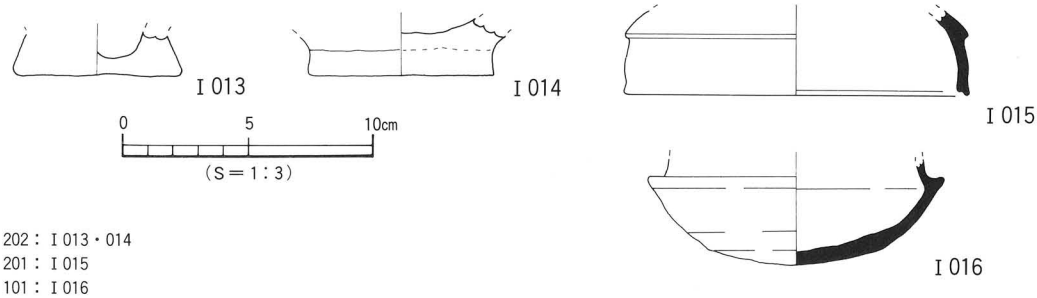
出土遺物（第16図－Ⅰ016）

Ⅰ016は須恵器坏身である。たちあがりの一部を欠損する。受部は上外方に短く延び、底部は丸底である。底部中位付近まで回転ヘラケズリ調整を施す。

時期：出土した須恵器の特徴から、ＳＲⅠ101は古墳時代後期、６世紀前半の流路とする。



第15図　古墳時代～古代の遺構配置図



SRⅠ202：Ⅰ013・014
SRⅠ201：Ⅰ015
SRⅠ101：Ⅰ016

第16図　ＳＲⅠ101・201・202出土遺物実測図

5．弥生時代の遺構と遺物

Ⅰ区では、平面調査において弥生時代の遺構は未検出であるが、調査壁の土層観察により、２条の自然流路を確認した。また、第Ⅷ層中からは弥生時代の遺物が少量出土している。

(1) 自然流路

ＳＲＩ001（第17図）

第１地区の東西壁と北壁、第２地区の全調査壁、第３地区の南壁と東壁で確認した流路である。ただし、第３地区では西壁沿いのトレンチは部分的な設定のため、第３地区の検出は一部分となる。流路上面はⅡＡ-⑬層とⅡＡ-⑭層とが覆う。ＳＲＩ001の推定範囲は第17図に掲載した。規模は推定検出幅65m、深さ20～40cmを測る。埋土は灰白色（7.5Y8/2）の砂礫層で、流路上位には径５～15cm大の円礫が密集している。流路は検出状況から、北東－南西方向に流れたものと判断される。流路内からは、弥生時代中期後半に時期比定される土器片が数点出土した。図化しうるものは１点である。

出土遺物（第18図－Ｉ017、図版10）

Ｉ017は高坏形土器の脚部片。柱部にはクシ描き沈線文６条、脚中位には貫通する矢羽根透かし、脚裾部と脚端面にはそれぞれ凹線文1条を施す。

時期：出土した遺物の特徴より、ＳＲＩ001は弥生時代中期後半の流路とする。

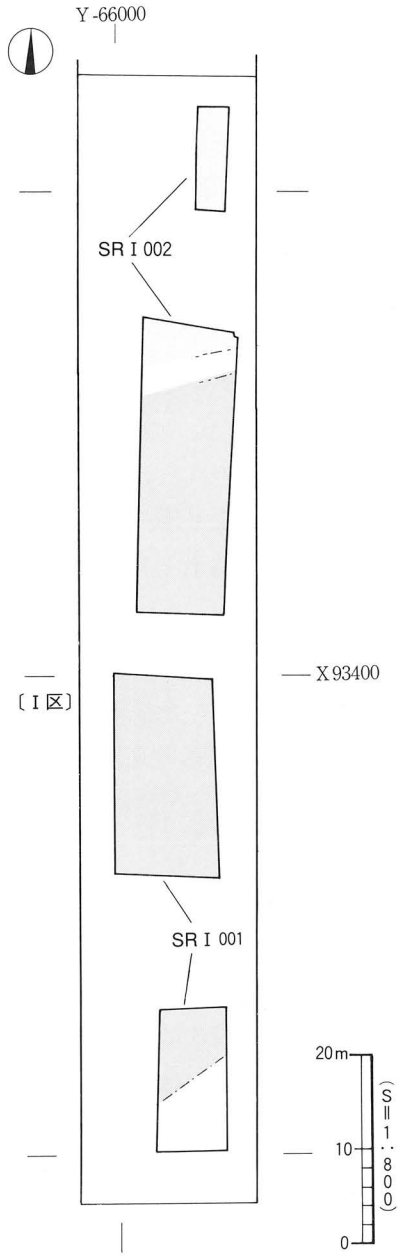
ＳＲＩ002（第17図）

第３地区と第４地区の東壁・西壁・北壁で確認した流路である。ＳＲＩ001と同様、第３地区は一部分、第４地区ではほぼ全域に存在しているものと考えられる。流路上面は水田３土壌であるⅡＡ-⑫層が覆う。ＳＲＩ002の推定範囲は第17図に掲載した。規模は推定検出幅29m、深さ80cmを測る。埋土は淡黄色（5Y8/4）の砂層で、灰色の粗砂と微砂とが互層堆積をなす。検出状況から、東西方向に流れる流路と判断される。流路内からは、弥生時代中期後半に時期比定される土器片が少量出土した。図化しうるものを１点掲載した。

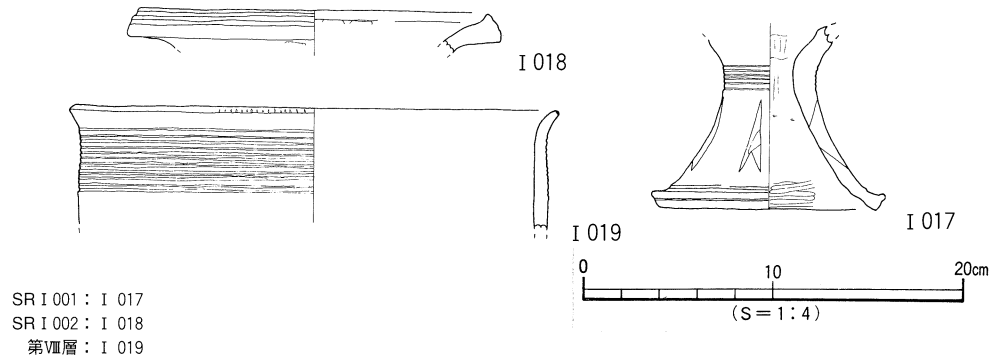
出土遺物（第18図－Ｉ018）

Ｉ018は壺形土器の口縁部片。口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に凹線文２条を施す。

時期：出土した遺物の特徴より、ＳＲＩ002は弥生時代中期後半の流路とする。



第17図　弥生時代の遺構配置図



第18図　ＳＲⅠ001･002及び第Ⅷ層出土遺物実測図

⑵　第Ⅷ層出土遺物（第18図－Ⅰ019、図版10）

第１地区の第Ⅷ層中からは、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される土器片が数点出土した。このうち、１点を第18図に掲載した。

Ⅰ019は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。口縁端面には刻目、胴部には２条１組の工具による沈線文12条を施す。

6．小　　結

Ⅰ区では、中世の水田址と畑址、弥生時代～古代の自然流路を検出し、石手川の礫層をも確認した。

⑴　層　　位

Ⅰ区では基本層位のうち、第Ⅰ層・第Ⅱ層・第Ⅷ層・第Ⅸ層を検出したが、第Ⅲ～第Ⅶ層は検出できなかった。また、第Ⅱ層の下面では自然流路が６条検出され、Ⅰ区の南側、第１地区では最終氷期の石手川の礫と考えられる洪積礫層を確認した。地表下約1.6ｍの地点で検出したもので、人頭大の礫が密集していた。

第Ⅱ層は土色や土質の違いから14層に細分され、ⅡＡ-③層・ⅡＡ-⑧層・ⅡＡ-⑫層は水田、ⅡＡ-⑬層は畑に利用されていた。遺物はⅡＡ-①層中から主に14～15世紀後半の土器が、ⅡＡ-⑧層（水田２土壌）からは13世紀代の瓦器椀、ⅡＡ-⑬層（畑土壌）からは主に12～13世紀の土師器と須恵器が出土している。

⑵　遺構・遺物

１）中世：中世の遺構は、水田址と畑址が特筆すべきものである。水田址は３面を確認したが、平面調査では足跡や鋤跡を検出し、畦畔は調査壁の土層観察により確認することになった。

最も古い時期の水田３は、第３地区の北側と第４地区で検出したが、第４地区では土層壁での確認にとどまった。水田土壌は灰白色粘質土であり、やや白色を帯びる灰白色の砂で埋没している。水田３を覆う土壌であるⅡＡ-⑧層中からは13世紀代の遺物が出土している。

次に、水田２は第３地区の北側と第４地区で検出した。このうち、第３地区は調査壁の土層観察による確認にとどまる。足跡・鋤跡・畦畔を検出したが、畦畔は土層壁での確認である。水田土壌はⅡＡ-⑧層（鈍い褐色粘質土）で、鋤跡は北西－南東方向にみられ、足跡や鋤跡は灰白色の粗砂で埋没している。また、第４地区の南側で検出した溝ＳＤⅠ401とＳＤⅠ402は鋤跡とほぼ同じ方位をとる溝

で、埋土中に砂を多く含むことから、水田２に伴う水路の可能性がある。

水田１は、第２地区の北側から第４地区までの範囲で検出した。水田２と同様、足跡や鋤跡は平面調査で検出したが、畦畔は土層壁での確認である。鋤跡の方向から判断すると、真北に等しい方向に区画された水田と、やや北東－南西方向に方位をとる水田の２種類が存在していたようである。また、水田の規模は畦畔の間隔から、およそ８～９ｍとみられる。水田土壌はⅡＡ-③層（灰白色粘質土）であり、足跡・鋤跡は灰白色の微砂で埋没している。水田1の上面にはⅡＡ-①層が覆い、Ⅱ Ａ-①層中からは主に15世紀後半頃の遺物が出土している。

以上のことから、水田1は15世紀後半以前、水田２は13～15世紀、水田３は12～13世紀に作られ、３面の水田址はいずれも洪水砂で埋没したものと推測される。

畑址は、第１地区で検出した。畑土壌はⅡＡ-⑬層（灰オリーブ色土）であり、本層上面にて東西方向の畝溝を検出したが、畝は、平面調査及び調査壁の土層観察においても確認できなかった。畝溝は灰白色の砂で埋没している。明確な時期判断はしかねるが、ⅡＡ-⑬層中からは、主に12～13世紀代の遺物が出土していることから、畑はそれ以降に作られたものと考えられる。土壌分析の結果、ⅡＡ-⑬層中からプラントオパールが検出されている。このことから、第１地区は畑だけでなく水田として利用された時期があったようである。つまり、現代でも行われている二毛作が、当時行われていたものと推測される。

２）古墳時代～古代：古墳時代から古代の遺構には、自然流路３条がある。すべて北東－南西方向に流れる流路で、ＳＲＩ101とＳＲＩ201は６世紀前半、ＳＲＩ202は11世紀代に時期比定される。埋土の状況から、ＳＲＩ101は流水が激しかったことがわかる。

３）弥生時代：弥生時代の遺構には自然流路2条がある。両者共に調査壁の土層観察により確認したもので、ＳＲＩ001・ＳＲＩ002共に弥生時代中期後半の流路で、北東－南西方向に流れていたものと推測される。このほか、第Ⅷ層中からは、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される遺物が少量ではあるが出土している。

以上、Ｉ区では検出遺構や層位から、11世紀以前には多数の流路が流れていたものと推測される。その後、12世紀になり土地が安定化するのに伴って、人々は水田や畑を営むようになる。特に、水田は少なくとも３時期に存在し、12～15世紀後半まで作られることになる。一方では、柱穴や土坑などの居住に関連する資料は全く検出されていない。Ｉ区は、中世においては居住域としてではなく、生産域として土地利用されていたことが判明した。

第４章

Ⅱ区の調査

第4章　Ⅱ区の調査

1．調査の経緯（第19図、図版11）

Ⅱ区は、調査地の中央部南寄りに位置する。調査以前は既存宅地であった。調査対象地は岩崎町2丁目1－10から1－18までの間、幅18m、長さ67m、調査対象面積1,200㎡である。国土座標はX 93465～93532、Y-65984～-66003の地域になる。Ⅱ区は住宅密集地帯であることから、周縁部は道路が狭く、排土搬出用の車両が通行できなかった。そのため、排土置き場はそれぞれ隣接する調査区を使用した。調査区は排土置き場を確保した上で、南から北に向かって第1地区と第2地区に区分した。調査区の西側には、調査地全体を通して南北方向の生活道路がある。この道路は自転車や歩行者が多く、安全面には細心の注意を払った。以下、調査工程を略記する。なお、各地区の調査面積と調査期間は表6のとおりである。

〔調査工程〕

① 調査は第1地区、第2地区の順番で行った。第1地区の調査中には第2地区を排土置き場として使用し、第2地区の調査中には第1地区を排土置き場として使用した。

② 第1地区は、第Ⅰ層と第Ⅱ層の途中までを重機によって除去した。第Ⅱ層中からは水田に伴う溝や鋤跡状遺構、足跡を検出した。

③ 溝や足跡の掘り下げを行った後、各遺構の測量、完掘写真などの記録をとる。

④ 第1地区の調査中に、地元テレビ局から取材を受ける。

⑤ 第1地区の調査終了後、埋め戻しをする。同時に、重機により第2地区の掘削を行う。

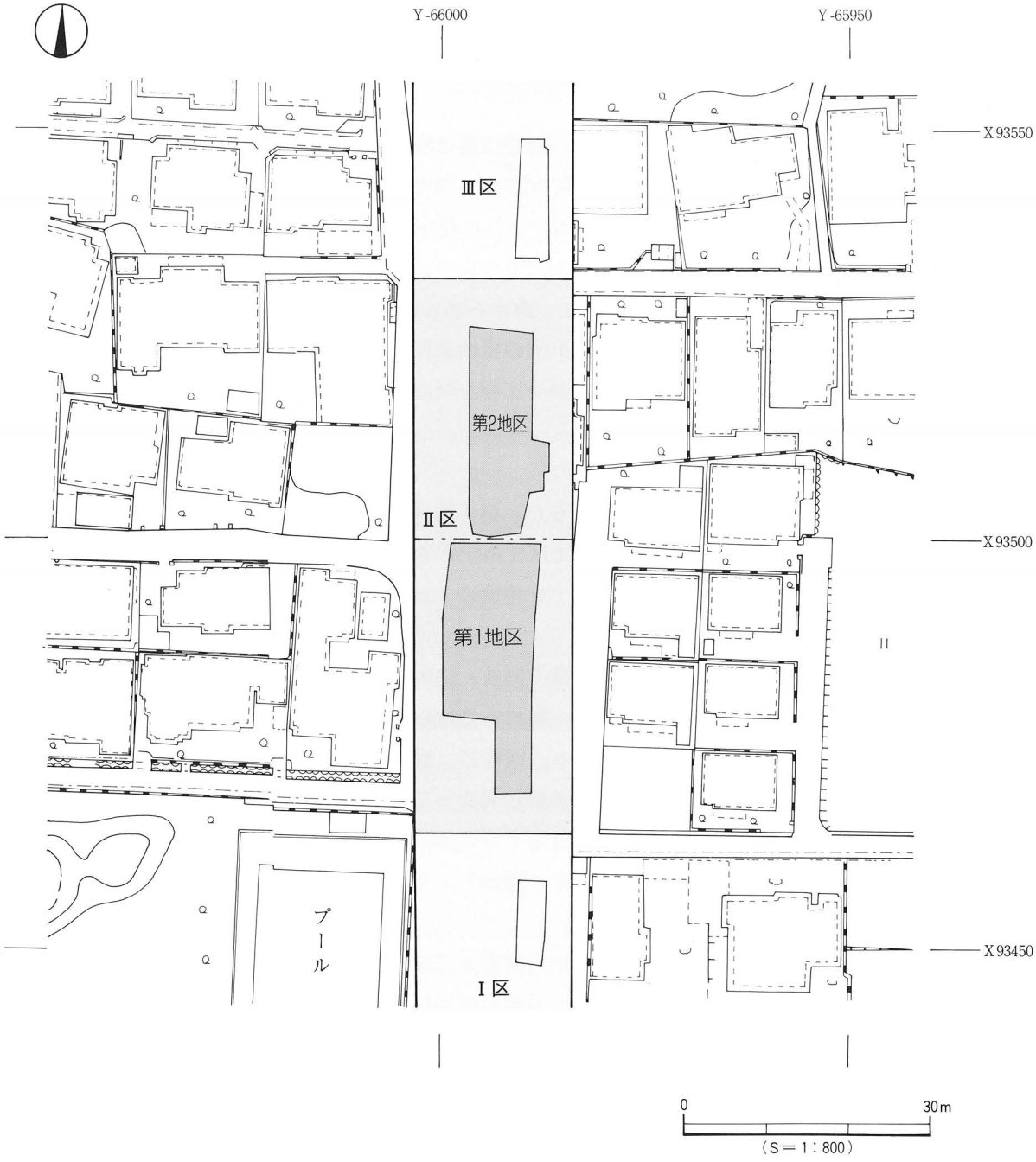
⑥ 第2地区は、調査区北部と南部とでは地形が異なっている。調査地の南部は重機にて第Ⅰ層を除去し、第Ⅱ層中では溝と足跡を、第Ⅱ層下では砂礫層を検出した。一方、北部では、第Ⅰ層と第Ⅱ層を除去した後、第Ⅲ層と第Ⅳ層を検出し、第Ⅳ層下では砂礫層を検出した。遺構は第Ⅳ層上面にて土坑やピットを検出した。

⑦ 第2地区の調査中には旧地形と、水田址の調査方法などについての検討会を行った。

⑧ 調査壁沿いに深掘りトレンチを設定し、旧地形復元に努める。

表6　調査地区一覧

地　区	対象面積（㎡）	調　査　期　間
1	594	平成8年8月21日～平成8年11月13日
2	606	平成8年11月19日～平成9年3月20日



第19図　Ⅱ区測量図

2．層　　位

(1)　基本層位（第20図、図版11・12）

Ⅱ区は第１・第２地区共に調査以前は既存宅地であった。現況では第１地区から第２地区に向けてやや高くなり、第１地区南端では標高36.3m、第２地区北端では標高36.8mになる。基本層位は第Ⅰ層から第Ⅳ層、第Ⅷ層、第Ⅸ層を検出し、第Ⅴ層から第Ⅶ層までは未検出である。また、Ⅱ区ではⅠ区から続く水田土壌を検出したため、第Ⅱ層はⅠ区で付けた土層番号を踏襲した。

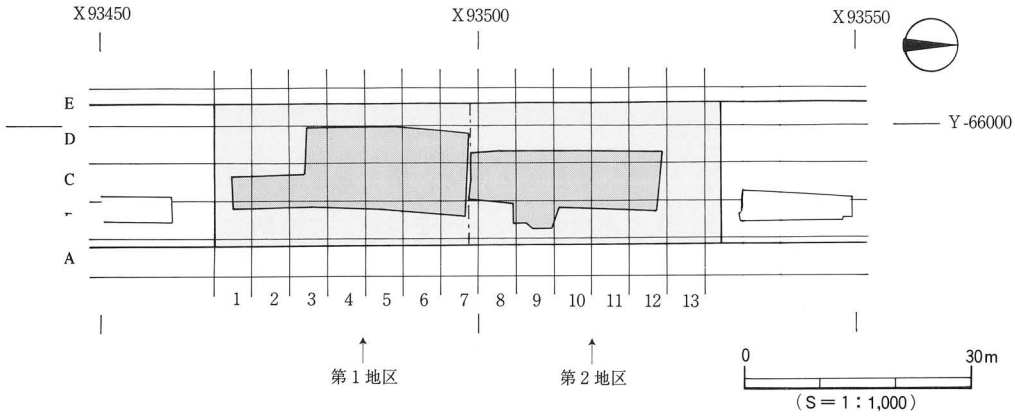
第Ⅰ層－近現代の造成に伴う客土で、地表下60～80cmまで開発が行われている。

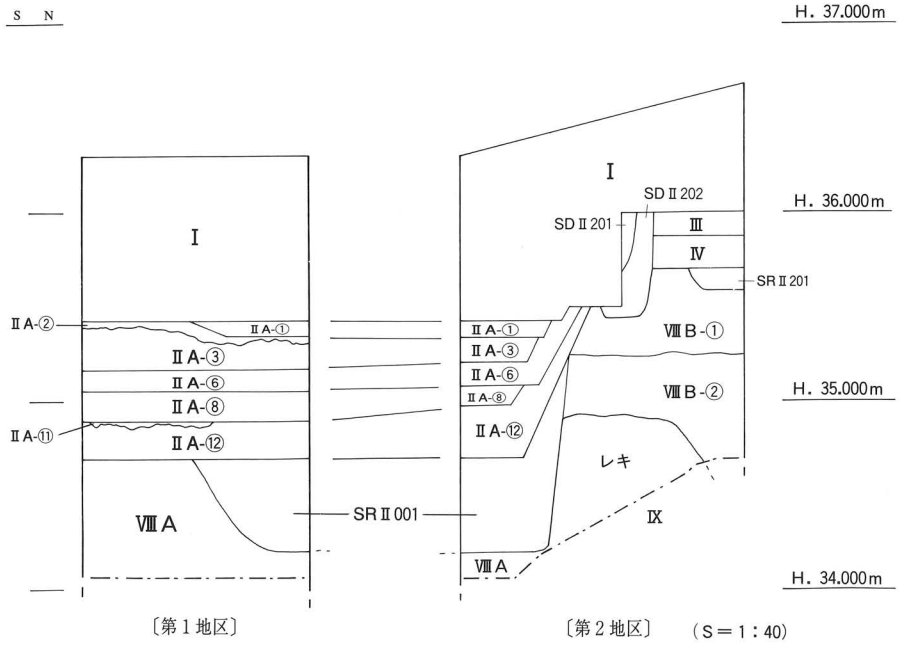
第Ⅱ層－第Ⅱ層は水田に関係する土壌であり、第２章層位で説明した第ⅡＡ層にあたる。層厚60～80cmを測る。Ⅰ区で検出した第ⅡＡ層（ⅡＡ-①～⑭層）のうち、Ⅱ区では８層（ⅡＡ-①～③・⑥～⑧・⑪・⑫層）を検出している。

ⅡＡ-①層：黄色（2.5Y8/6）粘質土で、第１地区全域と第２地区南半部にみられる。層厚５～10cmを測る。本層中からは、14世紀から15世紀後半までに時期比定される土師器、東播系須恵器、備前焼すり鉢が出土している。

ⅡＡ-②層：灰白色（10Y8/1）微砂で、第１地区に限られる。水田１の足跡や鋤跡を覆う土壌で、層厚３～８cmを測る。

ⅡＡ-③層：灰白色（7.5Y7/2）粘質土で、水田土壌（水田１）である。第１地区全域と第２地区南半部とにみられ、層厚10～20cmを測る。本層上面は、第１地区から第２地区に向けて緩傾斜をなす（比高差５cm）。





第20図　Ⅱ区区割図・土層模式図

ⅡA-⑥層：灰オリーブ色（5Y5/3）粘質土で、第1地区全域と第2地区南側とにみられる。層厚6～12cmを測る。

ⅡA-⑦層：灰白色（7.5Y8/2）粗砂で、水田2を覆う土壌である。第1地区西半部に限られる。調査時は本層の存在を見落としていたため、平面調査は実施していない。調査壁の土層観察により確認したもので、層厚10～16cmを測る。

ⅡA-⑧層：鈍い褐色（7.5YR5/4）粘質土で、水田土壌（水田2）である。第1地区全域と第2地区南半部とにみられ、層厚10～15cmを測る。本層上面は、第1地区から第2地区に向けて緩傾斜をなす（比高差5cm）。本層中からは、主に13世紀代の土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器（青磁・白磁）が出土している。

ⅡA-⑪層：灰白色（10Y7/1）砂で、水田3を覆う土壌である。第1地区に限られ、層厚10～30cmを測る。

ⅡA-⑫層：灰白色（5Y8/1）粘質土で、水田土壌（水田3）である。第1地区全域と第2地区南半部とにみられ、層厚10～30cmを測る。本層上面は、第1地区南側から北側に向けて低くなるが、第2地区の南半部ではやや高くなる。

第Ⅲ層－褐灰色（7.5YR4/1）土で、第2地区北半部に限られる。ほぼ水平堆積をなし、層厚3～10cmを測る。本層中からは、主に古代（7～10世紀）に時期比定される土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。

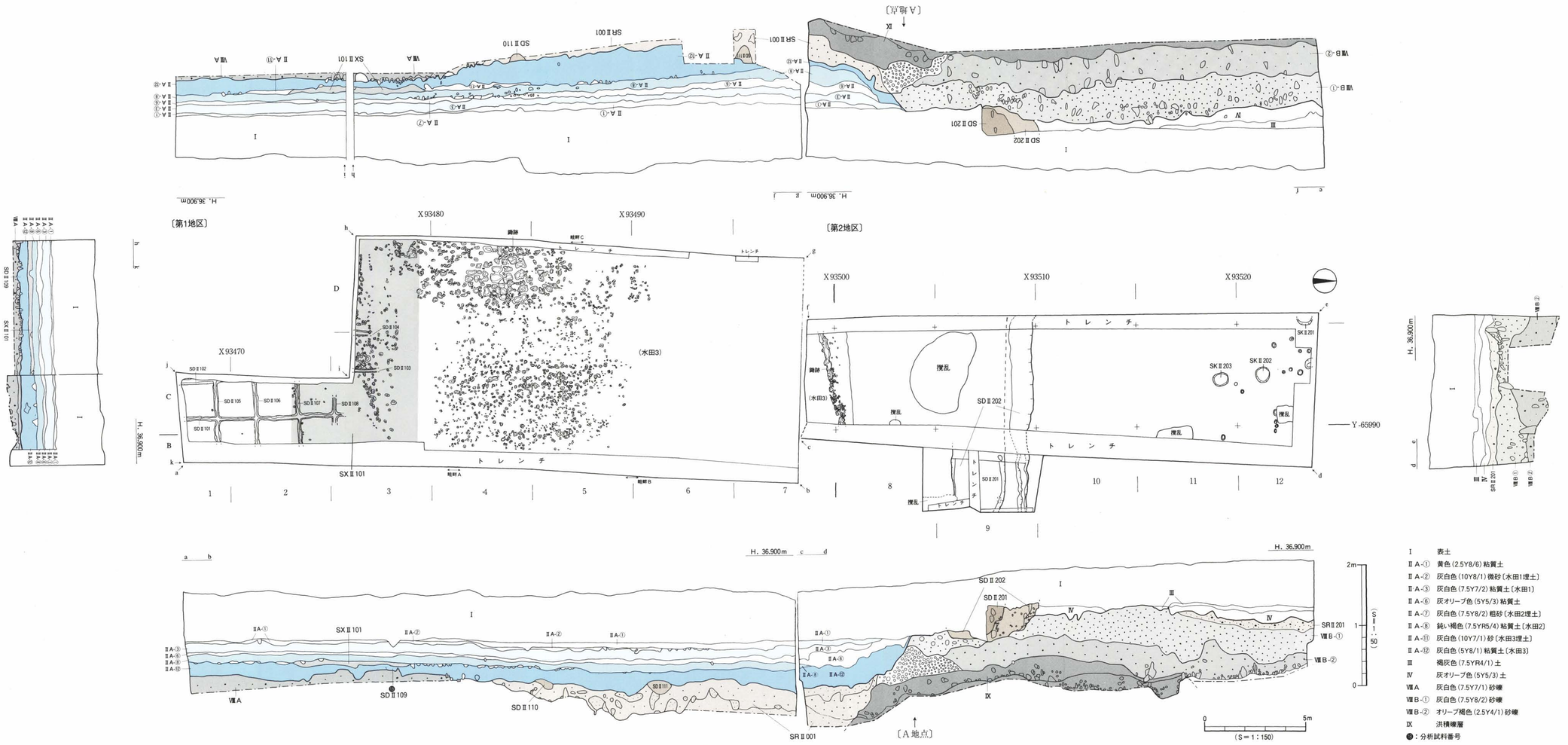
第Ⅳ層－灰オリーブ色（5Y5/3）土で、第Ⅲ層と同様、第2地区北半部に限られる。層厚5～10cmを測る。本層中からは、主に古墳時代（6～7世紀）に時期比定される土師器と須恵器が出土している。

第Ⅷ層－灰白色を呈する砂礫層である。本層上面は第1地区では起伏がみられ、第2地区の中央部南寄り（A地点）ではやや高くなり、比高差1.4mを測る。堆積物や堆積状況から、A地点を境にして北側と南側では第Ⅷ層の様相が異なっている。A地点より南側地域は、Ⅰ区から続く石手川本流を構成する砂礫層であり、北側地域は石手川の氾濫によって堆積した砂礫層である。A地点より南側地域の砂礫層は、Ⅰ区で検出したⅧA層に相当し、A地点より北側地域の砂礫層は、第2章層位で説明したⅧB層に相当する。ⅧB層は堆積物や出土遺物の違いから、2種類に分類される（ⅧB-①・ⅧB-②）。

Ⅷ　A　層：灰白色（7.5Y7/1）の砂礫層である。ⅧA層上面は起伏に富み、第1地区南半部では、第ⅡA-⑫層が覆い、第1地区北半部と第2地区南端では、古代の流路（SRⅡ001）がⅧA層上面で検出された。ⅧA層下面は未検出である。

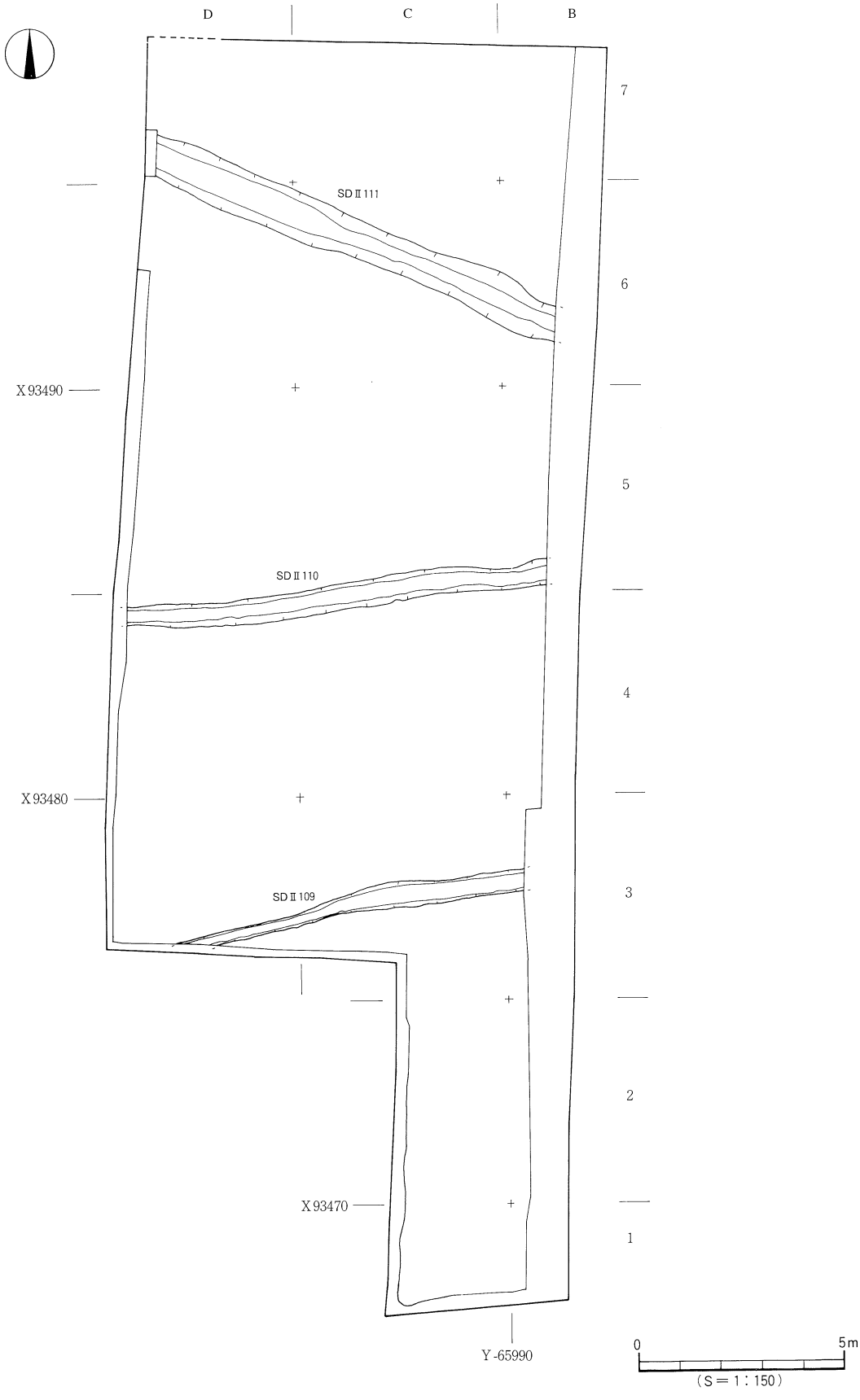
ⅧB-①層：灰白色（7.5Y8/2）の砂礫層で、層厚30～80cmを測る。本層上面は第Ⅳ層が覆う。礫は最大径10×20cm、最小径3×5cmのものがあり、径5～10cm大の礫が大半を占める。礫と礫の間には灰色の砂と1～3cm大の小礫が混入する。本層中からは、弥生時代中期中葉～後半の土器片が少量出土している。

ⅧB-②層：オリーブ褐色（2.5Y4/1）の砂礫層で、層厚30×60cmを測る。本層上面はⅧB-①層が覆い、下面は第Ⅸ層である。礫は最大径10×20cm、最小径5×10cmのものがあり、径10×15cm大の礫が密集する。礫と礫の間には灰色の粗砂と、1～3cm大の小礫が混入する。本層中からは、弥生時代前期末～中期初頭の土器片が少量出土している。



I　表土
Ⅱ A-① 黄色 (2.5Y8/6) 粘質土
Ⅱ A-② 灰白色 (10Y8/1) 微砂〔水田1埋土〕
Ⅱ A-③ 灰白色 (7.5Y7/2) 粘質土〔水田1〕
Ⅱ A-⑥ 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘質土
Ⅱ A-⑦ 灰白色 (7.5Y8/2) 粗砂〔水田2埋土〕
Ⅱ A-⑧ 鈍い褐色 (7.5YR5/4) 粘質土〔水田2〕
Ⅱ A-⑪ 灰白色 (10Y7/1) 砂〔水田3埋土〕
Ⅱ A-⑫ 灰白色 (5Y8/1) 粘質土〔水田3〕
Ⅲ　褐灰色 (7.5YR4/1) 土
Ⅳ　灰オリーブ色 (5Y5/3) 土
Ⅷ A　灰白色 (7.5Y7/1) 砂礫
Ⅷ B-① 灰白色 (7.5Y8/2) 砂礫
Ⅷ B-② オリーブ褐色 (2.5Y4/1) 砂礫
Ⅸ　洪積礫層
●：分析試料番号

第21図　Ⅱ区遺構配置図・土層図



第22図　Ⅱ区〔第１地区〕遺構配置図

第Ⅸ層－第２地区の最下部で検出した石手川の洪積礫層である。本層上面は地表下1.5m、標高35.1m前後である。Ⅰ区のそれに比べ80～90cmほど高くなっている。第Ⅸ層上面にはＡ地点に高さ50～60cm、幅２mの礫の高まりが認められる。径10×15cm程度の礫がぎっしりと密集し、礫と礫の間には粗砂が混入している。堆積時期は定かではないが、第Ⅸ層に関連する可能性がある。

(2) 検出遺構と遺物（第21・22図、図版13）

Ⅱ区の調査では、弥生時代から近世までの遺構と遺物を検出した。

弥生時代の遺構は自然流路１条である。古墳時代の遺構は検出していない。古代の遺構は溝１条、自然流路１条、土坑３基である。中世の遺構は12世紀～15世紀後半のもので、水田址（３面）と、溝11条（ＳＤⅡ101～108・110・111、ＳＤⅡ202）がある。近世の遺構は溝１条（ＳＤⅡ201）である。

各地区で検出した遺構は、表７にまとめた。

なお、調査では調査区内を５m四方のグリットに分けた。調査区東側から西側へ、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ、南側から北側へ１・２・３……13とし、Ａ１～Ｅ13といったグリット名を付けた（第20図）。

表7　Ⅱ区遺構一覧

時代＼地区	第１地区	第２地区
弥生時代		ＳＲⅡ201（後期）
古墳時代		
古代	ＳＤⅡ111（11世紀） ←― ＳＲⅡ001 ―→（８世紀）	ＳＫⅡ201～Ⅱ203（８世紀以降）
中世	ＳＤⅡ109（13世紀以前） ＳＤⅡ110（13世紀以前） ＳＤⅡ101～Ⅱ108（13世紀以降） ←― 水田１ ―→（15世紀後半以前） ←― 水田２ ―→（13～15世紀後半） ←― 水田３ ―→（13世紀以前）	ＳＤⅡ202（16世紀前半以前）
近世		ＳＤⅡ201（18世紀）

3．近世の遺構と遺物

近世の遺構は、溝１条を検出した。

(1) 溝

ＳＤⅡ201（第23図、図版14）

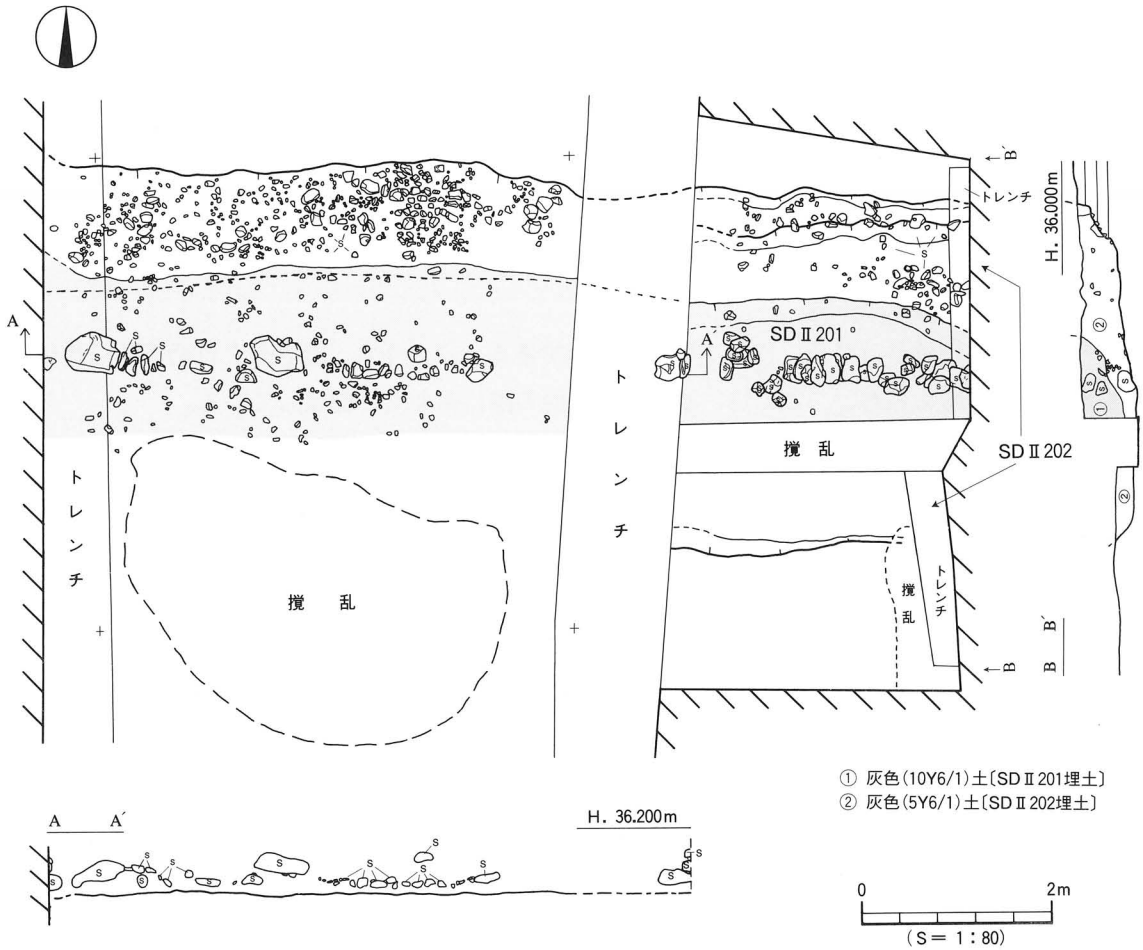
ＳＤⅡ201は、第２地区の中央部やや南寄り、Ｂ９～Ｄ９区で検出した溝で、ＳＤⅡ202（中世）を切る。溝上面、西半部及び南側壁体は近現代の造成により削平されている。調査壁の土層観察により、ほぼ真北に直交した東西方向に延びる溝である。規模は検出幅1.30ｍ、深さ42㎝を測る。断面形態は「Ｕ」字状を呈し、埋土は灰色（10Ｙ6/1）土で、埋土中に砂を少量含む。溝基底面と壁体は、ＳＤⅡ202になる。

溝内からは、最大径15×30㎝、最小径５×10㎝大の角礫が東西方向に並列した状態で検出され、礫は平坦面を南側にして、２～３段積まれている。このほか、径５㎝～拳大の円礫が、溝全体に点在している。溝の性格は断定しえないが、礫の状況から石組み溝の可能性がある。

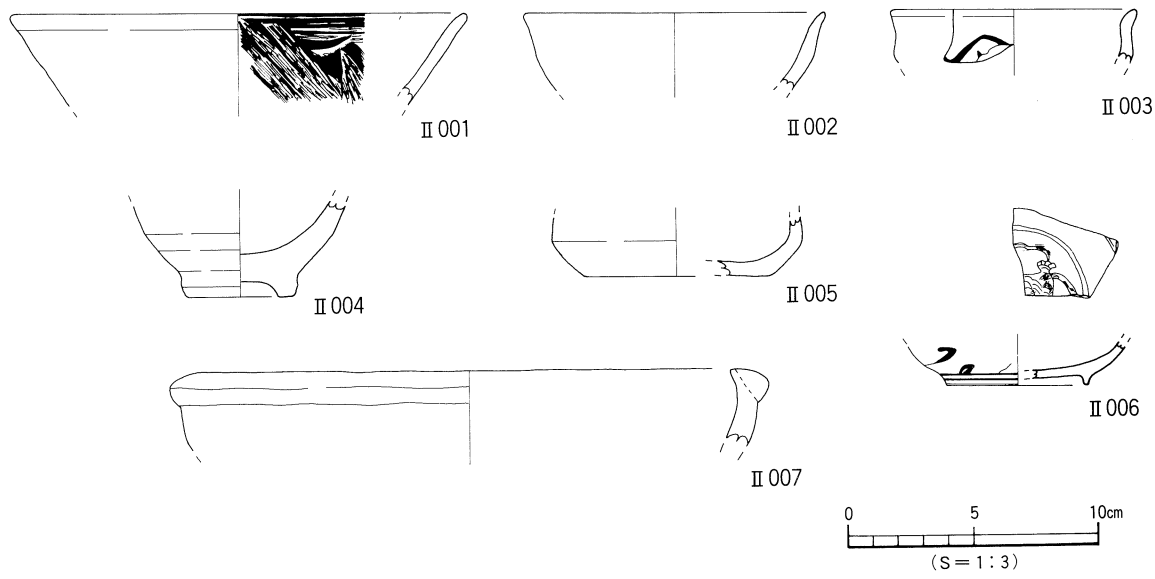
遺物は土師器、肥前焼、青華皿の小片が出土している。

出土遺物（第24図、図版17）

磁器（Ⅱ001～006）Ⅱ001～005は肥前焼の磁器である。Ⅱ001～003は碗の口縁部片で、口縁端部はやや外反する。Ⅱ003は体部外面に文様を施す。Ⅱ004は底部片。高台は削り出しによって作られる。



第23図　ＳＤⅡ201･202測量図



第24図　ＳＤⅡ201出土遺物実測図

釉は濁った灰白色を呈するが、腰部付近から下は無釉である。Ⅱ005は器種不明品。Ⅱ006は中国産の青華皿である。高台は直立気味に削り出されている。全面施釉後、畳付きの釉は拭き取られている。砂敷き焼成されており、高台内側にはわずかに砂が付着している。高台内中央部には文様の一端がみられる。見込みには龍文が描かれており、見込み外縁には２条の圏線が巡る。16世紀後半。

土師器（Ⅱ007）Ⅱ007は土師器のこね鉢である。口縁部は丸味のある断面三角形の粘土紐を貼り付けて成形される。

時期：出土した遺物の特徴から、ＳＤⅡ201は近世、18世紀代の溝とする。

４．中世の遺構と遺物

中世の遺構は水田址と溝11条、性格不明遺構１基である。このうち、溝８条と性格不明遺構は水田に関連するものと考えられ、ここでは、水田址の説明の際にあわせて記述している。

(1)　水田址（図版15・16）

水田址は、Ⅱ区第１地区中央部付近と第２地区の南端で検出した。３面の水田址を確認したが、これらはⅠ区で検出した水田址と同じものである。平面調査では１面（水田３）のみを確認し、鋤跡状遺構や足跡を検出した。畦畔は、調査壁の土層観察により確認したものである。このほか、水田に関連すると考えられる溝８条（ＳＤⅡ101～Ⅱ108）と性格不明遺構（ＳＸⅡ101）を検出している。ここでは調査時の工程を記述した後、内容について説明する。

〔調査工程〕

第１地区：調査は第１地区から開始した。土層の掘削では水田を見落としたため、３面の水田址のうち上位２面（水田１・水田２）は平面調査は実施していない。調査では、表土からⅡＡ-⑦層までを重機により掘削した。その後は、人力によりⅡＡ-⑧層の掘り下げを行った。続いて、ⅡＡ-⑫層上面にて遺構検出を行った。調査区の南側、Ｂ１～Ｄ３区では南北方向に４条（ＳＤⅡ101～104）、東西方向に４条（ＳＤⅡ105～108）の小溝を検出し、調査区の中央部付近、Ｂ３～Ｄ６区では鋤跡状遺

構と足跡を検出した。また、調査区中央部やや南寄り、Ｂ２～Ｄ３区では東西方向に幅5.5m前後の灰褐色土の広がり（ＳＸⅡ101）を検出した。前述した小溝の一部は、ＳＸⅡ101の上面にて検出したものである。

遺構の調査は、はじめに小溝の掘り下げと測量をし、その後、ＳＸⅡ101の掘り下げと測量を行った。その結果、ＳＸⅡ101を除去した後、ＳＸⅡ101下面からは多数の足跡を検出した。これらの足跡は灰色の砂で埋没しており、調査区中央部付近で検出した足跡と同じ埋土であった。

次に、足跡や鋤跡の掘り下げを行い、１m角の測量用網を使って測量図を作成した。その後、水田３土壌であるⅡA-⑫層の掘り下げを行った。ⅡA-⑫層掘り下げ後、第Ⅷ A層上面にて溝１条（ＳＤⅡ109）、古代の流路ＳＲⅡ001上面にて溝２条（ＳＤⅡ110・Ⅱ111）を検出した。

第２地区：第１地区の調査を終了後、第２地区の調査を開始した。まず、重機により表土層を地表下60cmまで掘削した。その際に、調査区の北側、Ｂ10～Ｄ12区では基本土層の第Ⅲ層を検出し、南側では表土層が残存しており、さらに20cm程度の掘削を行った。その結果、調査区中央部付近では東西方向の溝１条を検出し、溝の南側ではⅡA-①層を検出した。ⅡA-①層からⅡA-⑧層までを人力で掘り下げ、ⅡA-⑫層上面にて足跡や鋤跡を検出した。

〔概　要〕

水田３：水田３はⅡA-⑫層〔灰白色（5Y8/1）粘質土〕を基盤土壌とし、ⅡA-⑪層〔灰白色（10Y7/1）砂〕と水田２土壌であるⅡA-⑧層とで覆われる。検出地区は、第１地区中央部付近と第２地区南端である。検出層位や埋土から、Ｉ区で検出した水田３と同じものと考えられる。畦畔は平面調査では検出しておらず、調査区東西壁の土層観察と整理作業において畦畔と判断した。

畦畔は第１地区東壁で２箇所（畦畔Ａ・Ｂ）、西壁で１箇所（畦畔Ｃ）あり、規模は幅40～60cm、高さ３～６cmである。なお、第２地区と調査区南北壁では畦畔は検出できなかった。

鋤跡状遺構は、第１地区の西半部と第２地区とで検出した。規模は幅20～25cm、深さ３～５cmで、埋土は灰白色砂に白色砂粒を含む。鋤跡状遺構内からは、遺物は出土していない。

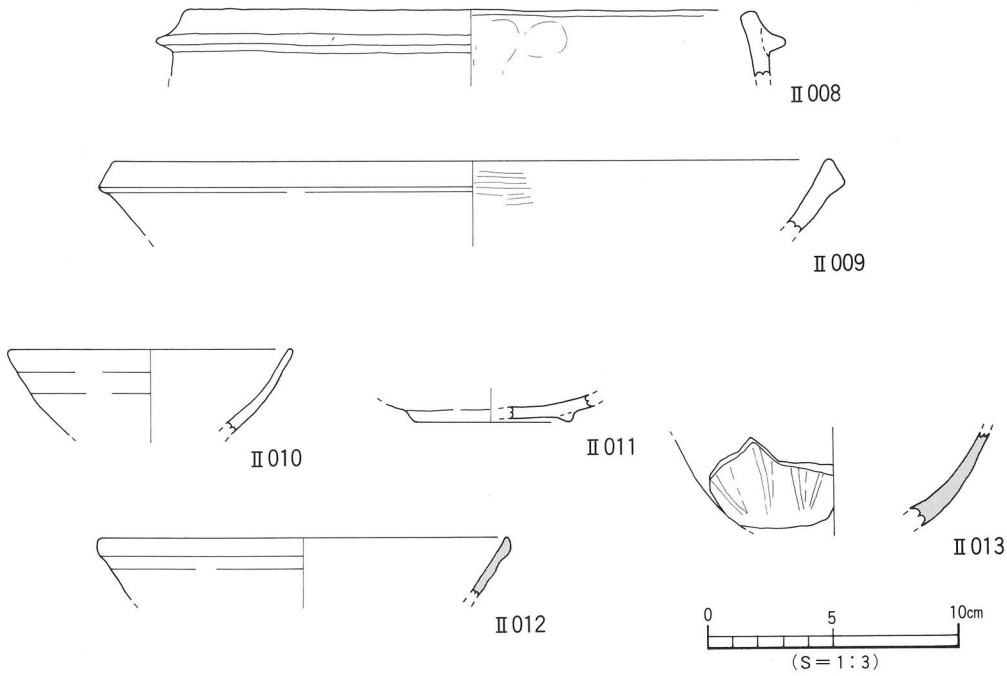
足跡は546ヶを検出した。このうち、牛と考えられる足跡は62ヶある。足跡の規模は幅３～20cm、長さ３～25cm、深さ３～５cmである。埋土はⅡA-⑪層と同様の灰白色砂である。足跡内からは、遺物は出土していない。特に、第２地区では牛の足跡は真北よりやや西に振った方位で、東西方向に移動している状況がみられ、それと並行して鋤跡状遺構が部分的に残存している。

時期：水田３の時期は水田２土壌であるⅡA-⑧層が覆うことから、下限を13世紀代とする。

水田２：水田２はⅡA-⑧層〔鈍い褐色（7.5YR5/4）粘質土〕を基盤土壌とし、ⅡA-⑦層〔灰白色（7.5Y8/2）粗砂〕と水田１土壌であるⅡA-③層とで覆われる。検出地区は第１地区に限られるが、平面調査は実施しておらず、調査壁の土層観察により確認したにとどまる。畦畔や水路は確認できなかった。なお、水田２土壌であるⅡA-⑧層中からは、土師器や輸入陶磁器の小片が出土している。

第ⅡA-⑧層出土遺物（第25図、図版17）

Ⅱ008は土師器の釜である。口縁部は直立し、口縁端部は内傾する。口唇部から下がった位置に断面三角形状の鍔が付く。外面はヨコナデ、内面はナデ調整を施す。Ⅱ009は土師器のこね鉢で、口縁部は下方にやや拡張し、口縁端面はナデにより凹む。Ⅱ010は土師器坏である。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。Ⅱ011は土師器椀で、貼り付けによる断面三角形状の低い高台が



第25図　第ⅡA-⑧層出土遺物実測図

付く。Ⅱ012は白磁椀である。玉縁状口縁で、釉調は水色味を帯び、透明感のある白色を呈する。横田・森田氏編年のⅡ類に比定される。Ⅱ013は龍泉窯系青磁椀である。体部は内湾し、外面に蓮弁文をもつ。森田・横田氏編年のⅢ類に比定される。釉調は濃緑色である。胎土は緻密で、灰白色系の色調をもつ。

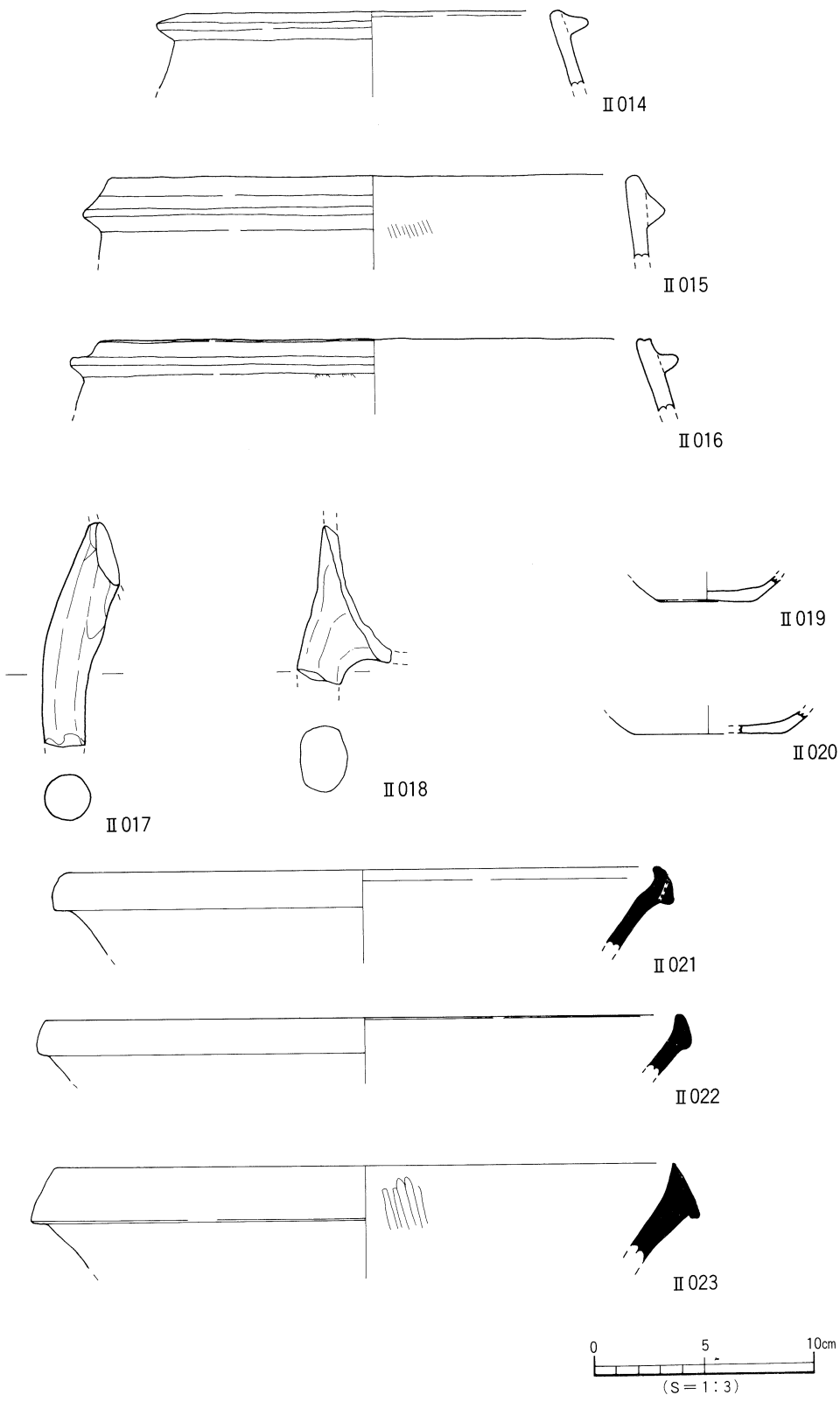
時期：出土遺物と水田１の時期から、水田２の時期は13～15世紀後半とする。

水田１：水田１はⅡA-③層〔灰白色（7.5Y7/2）粘質土〕を基盤土壌とし、ⅡA-②層〔灰白色（10Y8/1）微砂〕とⅡA-①層とで覆われる。検出地区は第１地区全域と第２地区南端である。水田２と同様、平面調査は実施しておらず、調査壁の土層観察により確認したにとどまる。畦畔や水路は確認できなかった。なお、水田１土壌を覆うⅡA-①層中からは、土師器や須恵器の小片と、備前焼の小片が出土している。

第ⅡA-①層出土遺物（第26図、図版17）

Ⅱ014～016は土師器の釜で、口縁部は直立し、口縁端部は面をもつ。Ⅱ016は口縁端面に１条の沈線が巡る。鍔は口唇部に接して貼り付けるもの（Ⅱ014）と、口唇部より下がった位置に貼り付けるもの（Ⅱ015・016）とがある。Ⅱ015は鍔と胴部外面に、煤が付着する。Ⅱ017・018は土師器の釜または鍋の脚部片で、基部から脚部にかけてなだらかに屈曲する。指頭圧痕とナデにより成形される。14～15世紀。Ⅱ019・020は土師器皿で、体部は内湾気味に立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りによる。Ⅱ021・022は東播系の須恵器こね鉢で、口縁部は上下方に拡張され、口縁端面は丸味をおびる。14世紀後半。Ⅱ023は備前焼のすり鉢で、口縁部は上下方に拡張され、口縁端部は尖る。内面に５条の条線が残る。15世紀後半。

時期：水田１を覆うⅡA-①層から出土した遺物から、水田１の時期は下限を15世紀後半頃とする。



第26図　第ⅡA-①層出土遺物実測図

水田１・２・３のほか、水田址に関連すると考えられる遺構に性格不明遺構（ＳＸⅡ101）と溝８条（ＳＤⅡ101～Ⅱ108）がある。溝は形状や埋土、検出状況から、同時期に掘削されたものと考えられ、ここでは、８条の溝をまとめて説明する。

１）性格不明遺構

ＳＸⅡ101（第21図）

第１地区の中央部南寄り、Ｂ２～Ｄ３区のⅡＡ-⑫層上面で検出した。ⅡＡ-⑧層が覆い、調査区外に続く。灰褐色（7.5ＹＲ6/2）の堆積土で、検出幅5.4～5.5m、厚さ10㎝を測る。堆積土は叩きしめられたように非常に硬いものである。ＳＸⅡ101上面には小溝（ＳＤⅡ101・103・104・107・108）が、下面には水田３に伴う足跡が検出された。ＳＸⅡ101は真北に直交するように東西方向に方位をとり、小溝の方向に並行する。ＳＸⅡ101内からの遺物の出土はない。検出状況から、水田に伴う農道もしくは畦畔の可能性がある。

時期：ⅡＡ-⑧層が覆うことと、ＳＸⅡ101下面に水田３が存在することから、ＳＸⅡ101は水田３埋没以後、水田２埋没以前、13～15世紀の遺構とする。

２）溝

ＳＤⅡ101～Ⅱ108（第21図）

第１地区の南側、Ｂ１～Ｃ３区で検出した。南北方向の溝４条（ＳＤⅡ101～Ⅱ104）と東西方向の溝４条（ＳＤⅡ105～Ⅱ108）である。いずれも、ⅡＡ-⑧層が覆い、ＳＤⅡ103・Ⅱ104・Ⅱ108はＳＸⅡ101上面、その他はⅡＡ-⑫層上面で検出した。それぞれの溝はほぼ直交し、南北方向の溝は真北より２°ほど西に方位を振っている。

溝の規模は幅15～30㎝、深さは４～６㎝である。断面形態はすべて皿状を呈し、埋土は灰白色（5Ｙ8/1）の砂質土である。８条の溝のうち、検出状況からＳＤⅡ102とＳＤⅡ103は同一の溝となる。溝と溝との間隔は、南北方向ではＳＤⅡ105－ＳＤⅡ106間が1.70m、ＳＤⅡ106－ＳＤⅡ107間が1.85～1.90m、ＳＤⅡ107－ＳＤⅡ108間が1.60mとなり、東西方向ではＳＤⅡ101－ＳＤⅡ102間が1.60mになる。溝と溝で囲まれた地域はほぼ方形を呈し、１区画の面積は2.70㎡前後である。溝内からの遺物の出土はない。

これら８条の溝は、埋土や断面形態、検出状況から、同じ性格をもち、同時期に存在していたものとみられる。溝の性格は水田の水路、もしくは何らかの地割りの溝と考えられる。なお、各溝についての詳細は一覧表に記す。

時期：明確な時期判断はしかねるが、ＳＸⅡ101上面で一部の溝は検出されたことから、少なくとも水田３埋没以降に掘削されたものであり、ⅡＡ-⑧層堆積以前に埋没している。よって、これら８条の溝の時期は13世紀以降、15世紀以前となる。

⑵　溝

溝は第２地区の中央部付近で１条（ＳＤⅡ202）、第１地区中央部とやや南寄りの地点で２条（ＳＤⅡ109・ＳＤⅡ110）を検出した。ＳＤⅡ202は第Ⅳ層上面、ＳＤⅡ109とＳＤⅡ110は水田３土壌であるⅡＡ-⑫層除去後、第ⅧＡ層上面にて検出した。

ＳＤⅡ202（第23図、図版14）

第２地区の中央部南寄り、Ｂ９～Ｄ９区で検出した東西方向の溝である。溝上位には、近世の溝ＳＤⅡ201を検出した。調査当初は、溝の南側壁体が近現代坑に削平されていたため、形状は不明であった。そのため、調査区を東側へ５ｍ拡張し、拡張部分にて溝の両壁体を確認した。溝の北側壁体は第Ⅳ層上面での検出であり、南側壁体は第Ⅷ層-①層上面での検出となる。なお、溝南半部は近現代坑に削平されており、深さ10cmの遺存である。

溝の規模は、検出幅3.65～3.95m、検出長11.80m、深さは最深部で56cmを測る。断面形態は「Ｕ」字状を呈し、埋土は灰色（5Y6/1）土で砂と径１～５cm大の礫が混入する。溝壁体と基底面は第Ⅷ層-①層に達する。溝基底面は東から西へわずかに傾斜をなす（比高差３cm）。溝の埋土と検出状況から、その性格は溝の南側に展開する水田へ取水するための基幹水路と考えられる。

遺物は、埋土中より土師器皿や土釜片が出土している。

出土遺物（第27図、図版17）

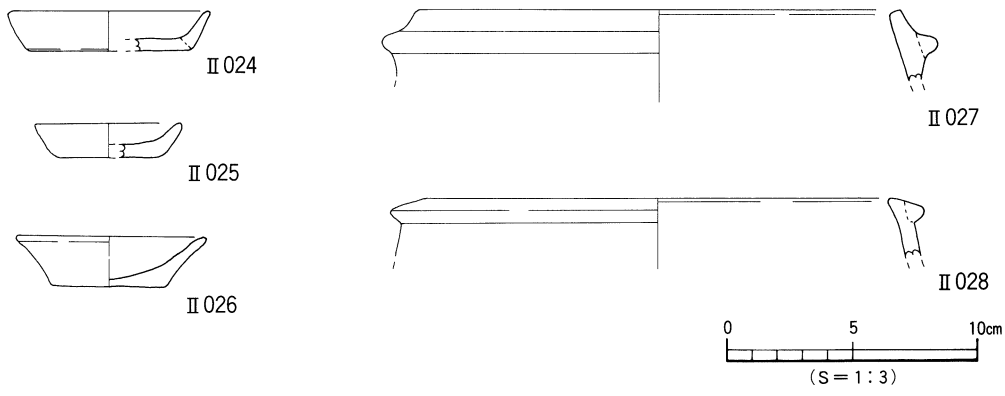
Ⅱ024～026は土師器皿である。Ⅱ024・025は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。磨滅が著しく、口縁部と底部の調整は不明である。Ⅱ026は体部が外反して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁端部に煤が付着することから、灯明皿として使用されたものであろう。底部調整は回転ヘラ切り後、ナデ調整を施す。Ⅱ027は瓦質の釜である。口唇部から１cmほど下がった位置に、丸味のある断面三角形状の鍔を貼り付ける。口縁端部は内傾する。Ⅱ028は土師器の土釜である。口唇部に連続して、断面三角形状の短い鍔を貼り付ける。

時期：出土した遺物の特徴とＳＤⅡ201との切り合い関係から、ＳＤⅡ202は下限を15世紀後半とする。

ＳＤⅡ109（第22・28図、図版16）

第１地区の南側、Ｂ３～Ｄ３地区で検出した東西方向の溝である。溝両端は調査区外に続く。第Ⅷ層Ａ層上面での検出であり、ⅡＡ-⑫層が覆う。規模は幅25～60cm、検出長8.60m、深さ８～11cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰白色（5Y8/1）の粗砂である。溝基底面はほぼ平坦であり、溝内からの遺物の出土はない。

時期：溝内からの遺物の出土はなく、明確な時期判断はしかねるが、ⅡＡ-⑫層が覆うことから、ＳＤⅡ109は下限を13世紀代とする。

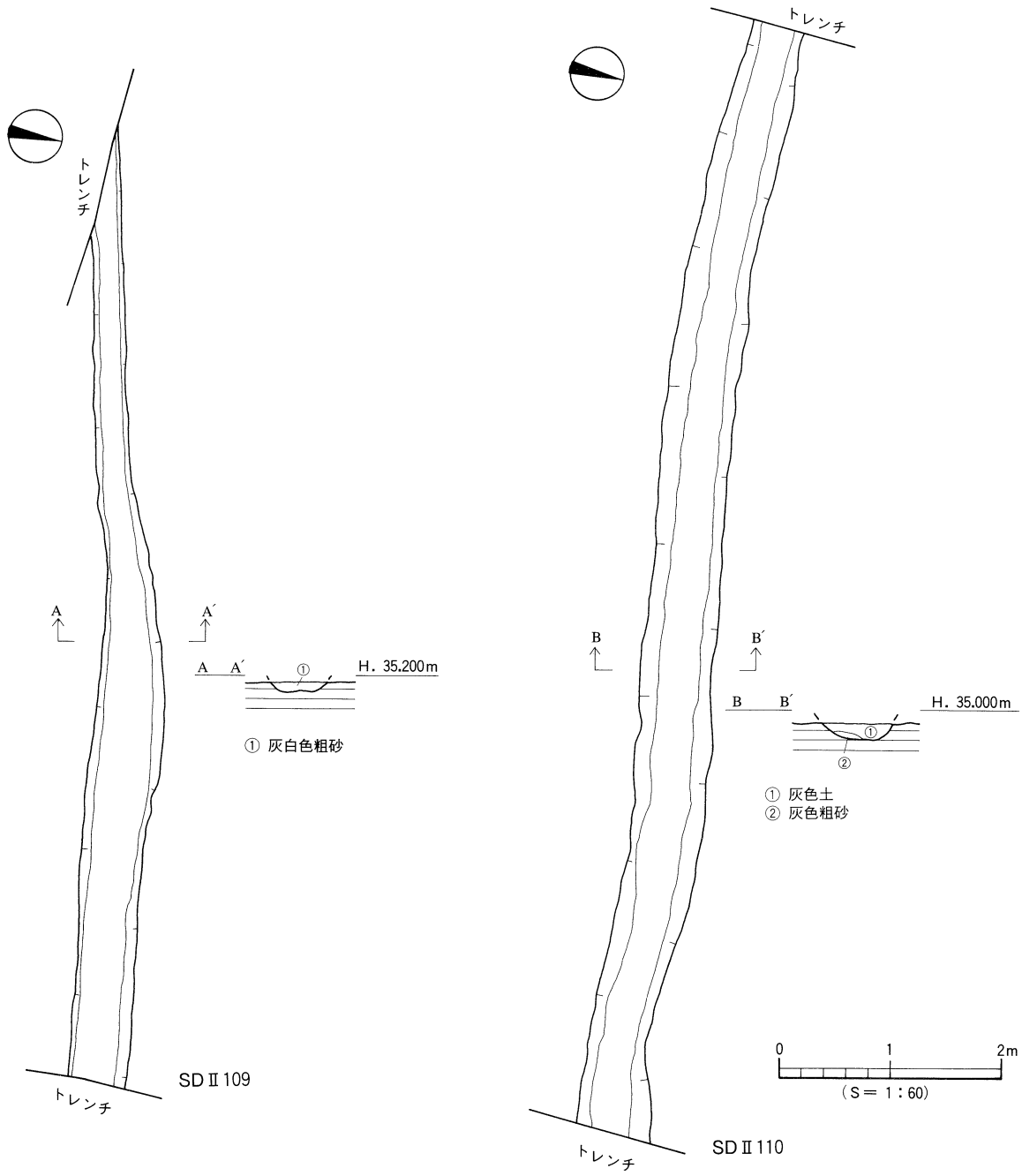


第27図　ＳＤⅡ202出土遺物実測図

ＳＤⅡ110（第22・28図、図版16）

第１地区の中央部、Ｂ５～Ｄ４区で検出した東西方向の溝である。溝の両端は調査区外に続く。古代の流路であるＳＲⅡ001上面での検出であり、ⅡＡ-⑫層が覆う。規模は幅45～60㎝、検出長10.10ｍ、深さ10～15㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰色（7.5Ｙ6/1）土で、溝中央部基底面では灰色の粗砂が部分的に堆積する。溝基底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：溝内からの遺物の出土はなく、明確な時期判断はしかねるが、ⅡＡ-⑫層が覆うことから、ＳＤⅡ110は13世紀以前の溝とする。



第28図　ＳＤⅡ109・110測量図

5．古墳時代～古代の遺構と遺物

Ⅱ区では、古墳時代の遺構は未検出である。古代の遺構は溝１条、自然流路１条、土坑３基である。このうち、自然流路は平面調査は実施しておらず、調査壁の土層観察により確認したものである。このほか、第Ⅲ層と第Ⅳ層中からは、古墳時代後期から古代までに時期比定される遺物が出土している。

(1) 溝

ＳＤⅡ111（第22・29図、図版16）

第１地区の北側、Ｂ６～Ｄ７区で検出した北西-南東方向の溝である。規模は幅0.80～1.10m、検出長11.00m、深さは18～20cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、溝基底面はほぼ平坦である。埋土は灰色（5Y7/1）土で、埋土下位にて５cm～拳大の礫が散在する。溝内からは、土師器片が数点出土した。

出土遺物（第29図）

Ⅱ029・030は土師器坏である。円盤高台で、窄まりながら突出する底部をもつ。底部調整はⅡ030は不明であるが、Ⅱ029は回転ヘラ切りの後、ナデ調整を施す。Ⅱ031は土師器皿である。底部は平底で、体部はわずかに内湾する。底部調整は、回転ヘラ切り未調整である。

時期：出土した遺物の特徴と、ⅡＡ-⑫層が覆うことから、ＳＤⅡ111は11世紀代の溝とする。

(2) 自然流路

ＳＲⅡ001（第21・30図）

第１地区の東壁、西壁及び北壁、第２地区の東壁と西壁で確認した流路である。流路上面はⅡＡ-⑫層が覆い、下面は第ⅧＡ層に達する。流路の想定範囲を第30図に掲載した。規模は検出幅21～22m、深さ20～50cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色（7.5Y5/1）粗砂であり、灰色微砂がブロック状に混入する。流路基底面は東から西へわずかに傾斜をなす（比高差５cm）。流路内からは土師器片と須恵器片が数点出土した。

出土遺物（第30図、図版17）

Ⅱ032は須恵器坏蓋のつまみである。中央部が突出する宝珠様つまみをもつ。Ⅱ033は須恵器皿で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁端部は内側に巻き込む形状をなし、口縁端部内面には沈線状の凹みが巡る。Ⅱ034は須恵器甕で、口頸部は外反し、口縁上端は平坦面をもつ。Ⅱ035は須恵器壺の胴部片。扁球形の胴部で、口縁部は欠損する。器種は短頸壺であろう。

時期：出土した遺物の特徴から、ＳＲⅡ001は８～９世紀代の流路とする。

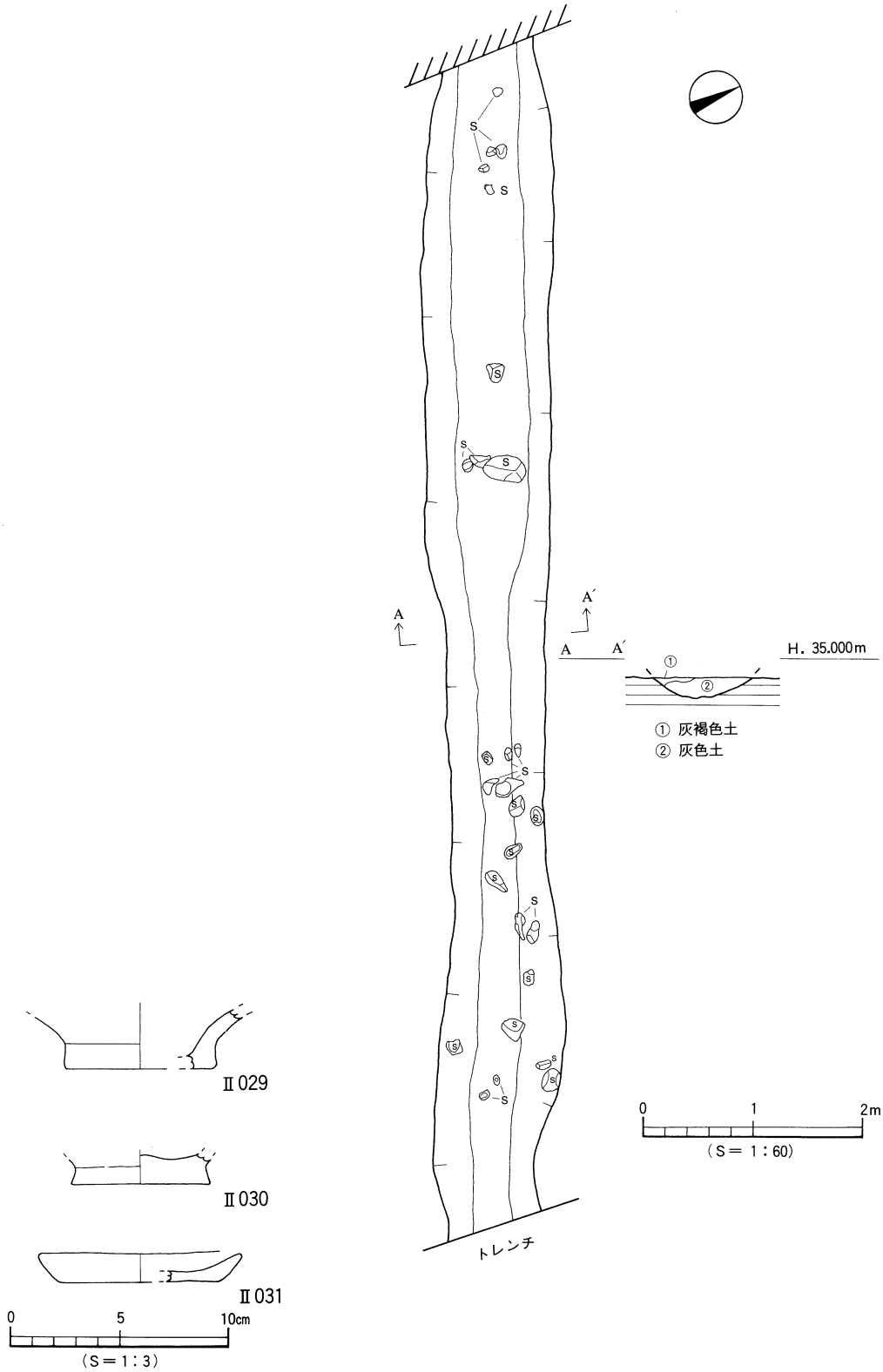
(3) 土　坑

Ⅱ区では３基の土坑を検出した。すべてが第２地区北側にあり、第Ⅳ層上面での検出である。

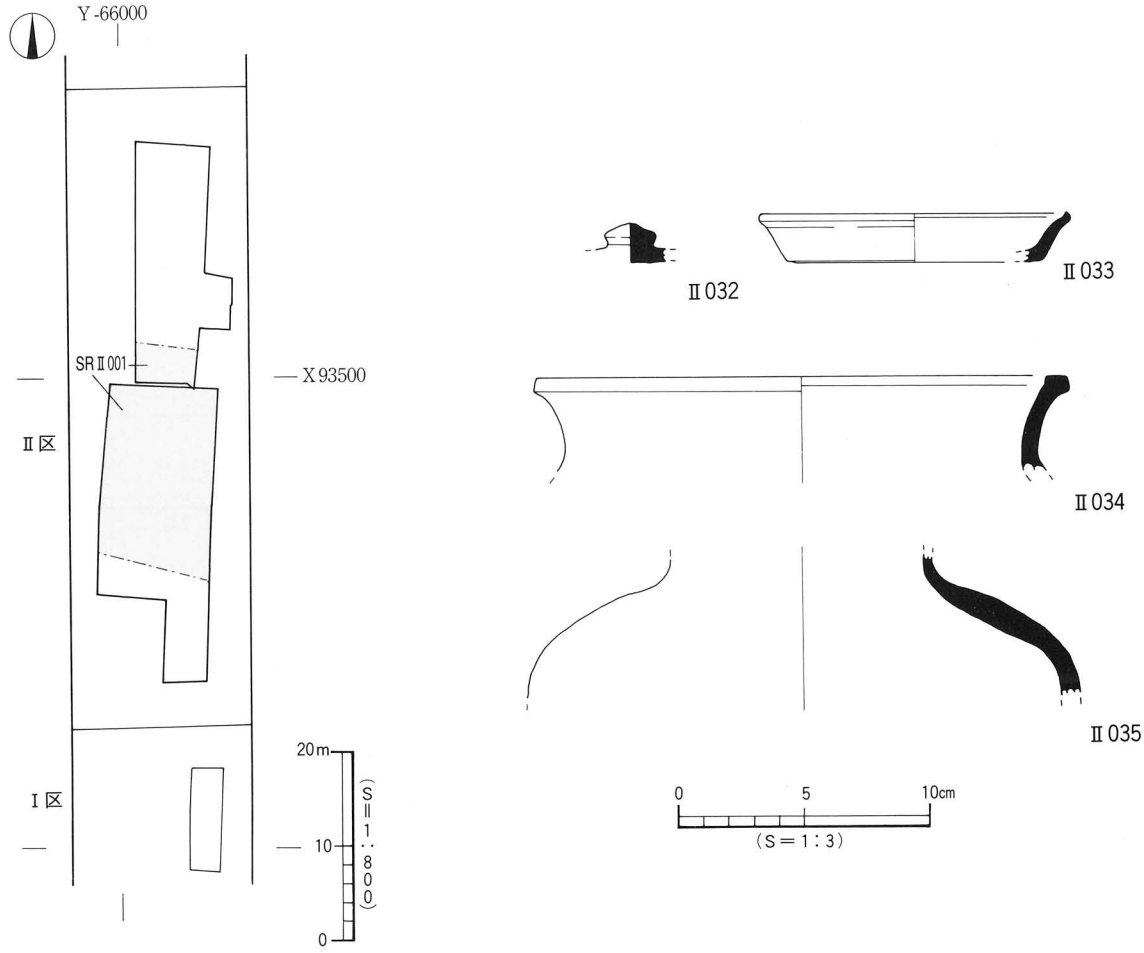
ＳＫⅡ201（第31図）

第２地区北西隅、Ｃ・Ｄ12区で検出した土坑である。土坑西半部は調査区外に続く。平面形態は円形を呈するものと考えら、規模は東西検出長32cm、南北検出長72cm、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は第Ⅲ層と同様、褐灰色土である。土坑基底面は平坦である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期判断はしかねるが、第Ⅲ層で埋没することから、ＳＫⅡ201は古代の遺構とする。



第29図　ＳＤⅡ111測量図・出土遺物実測図



第30図　ＳＲⅡ001状況図・出土遺物実測図

ＳＫⅡ202（第31図）

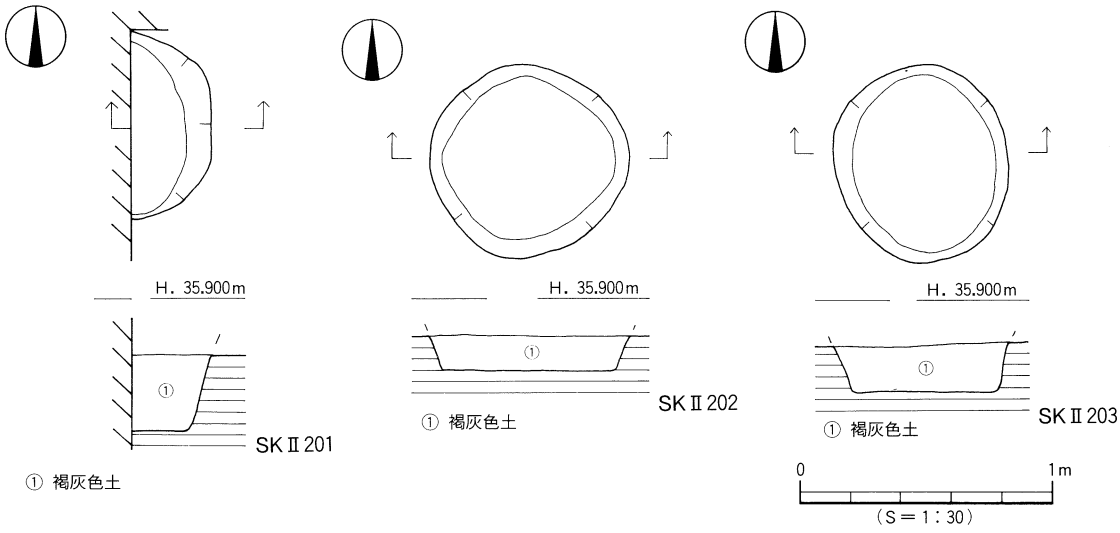
第２地区北側、Ｃ12区で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、規模は径70～80cm、深さ10～12cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈する。埋土は第Ⅲ層と同様の褐灰色土である。土坑基底面はほぼ平坦である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期判断はしかねるが、第Ⅲ層で埋没することから、ＳＫⅡ202は古代の遺構とする。

ＳＫⅡ203（第31図）

第２地区北側、Ｃ11区で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径85cm、短径70cm、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は第Ⅲ層と同様の褐灰色土である。土坑基底面はほぼ平坦である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期判断はしかねるが、第Ⅲ層で埋没することから、ＳＫⅡ203は古代の遺構とする。



第31図　ＳＫⅡ201～203測量図

(4)　第Ⅲ層・第Ⅳ層・地点不明出土遺物（第32図、図版18）

Ⅱ区では第Ⅲ層と第Ⅳ層中から、古墳時代から古代の遺物が出土した。第Ⅲ層中からは古代、第Ⅳ層中からは古墳時代の遺物が主に出土している。このうち第Ⅲ層中からは灰釉陶器の出土がある。なお、古墳時代から古代の遺物で出土地点が明確でない資料を、この項の最後で掲載する。

1）第Ⅲ層出土遺物（Ⅱ036～043）

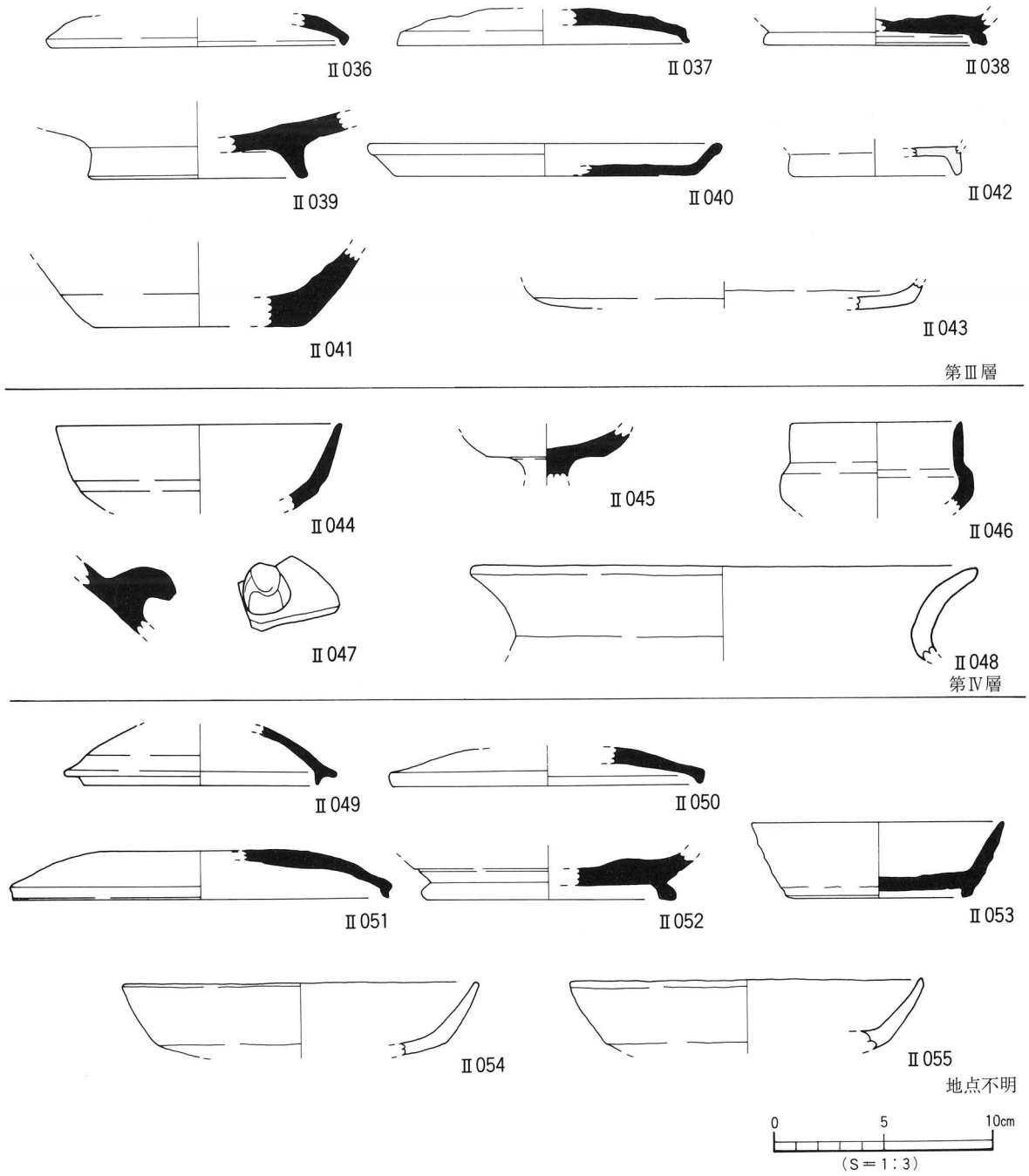
Ⅱ036・037は須恵器坏蓋。天井部は扁平で、口縁部は下方に垂下するもの（Ⅱ036）と、下外方に下がるもの（Ⅱ037）とがある。Ⅱ037の口縁端面はわずかに尖る。Ⅱ038は須恵器坏。高台は底体部境界付近に付き、高台接地面は凹む。Ⅱ039は台付鉢と考えられ、高台は比較的高く、下外方に開く。Ⅱ040は須恵器皿で、体部は直立し、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめ、底部は平底になる。Ⅱ041は壺の底部である。Ⅱ042は灰釉陶器の椀である。貼り付けの高台は下外方へ開き、端部外面を丸くやや内方へおさめる。胎土は緻密であり、精良な灰白色を呈し、焼成は硬質である。釉は高台外面と底部内面にわずかに残る。釉調は淡緑灰色である。調整は内外面共に回転ナデ調整である。Ⅱ043は土師器の皿になる。

2）第Ⅳ層出土遺物（Ⅱ044～048）

Ⅱ044は須恵器坏で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。Ⅱ045は須恵器高坏で、脚基部は細い。Ⅱ046は須恵器小壺で、口縁部は直立し、端部は尖り気味になる。Ⅱ047は提瓶の把手部分と考えられる。Ⅱ048は土師器甕で、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。

3）出土地点不明遺物（Ⅱ049～055）

Ⅱ049～051は須恵器坏蓋。Ⅱ049はかえりが口縁部より下がり、端部は尖る。Ⅱ050・051は扁平な天井部をもち、口縁部は下方に垂下する。Ⅱ052・053は須恵器坏である。高台付の坏で、Ⅱ053は高台が底体部境界に付く。体部は直線的に立ち上がる。Ⅱ054・055は土師器坏で、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部はⅡ054が丸く仕上げ、Ⅱ055は尖る。Ⅱ055の口縁端部外面には弱い稜をもつ。なお、Ⅱ055は内外面共に赤色塗彩がはげた痕跡が認められる。



第32図　第Ⅲ・Ⅳ層及び地点不明出土遺物実測図

6．弥生時代の遺構と遺物

Ⅱ区では、弥生時代の遺構は調査壁の土層観察により自然流路１条（ＳＲⅡ201）を検出した。また、第Ⅷ B 層と、調査壁沿いのトレンチ内から、該期の遺物が出土している。

(1)　自然流路

ＳＲⅡ201（第21・33図）

第２地区の北東隅、B11～C12区で確認した自然流路である。平面調査を実施しておらず、調査区東壁と北壁の土層観察により確認した流路である。流路の想定範囲は第33図に掲載した。

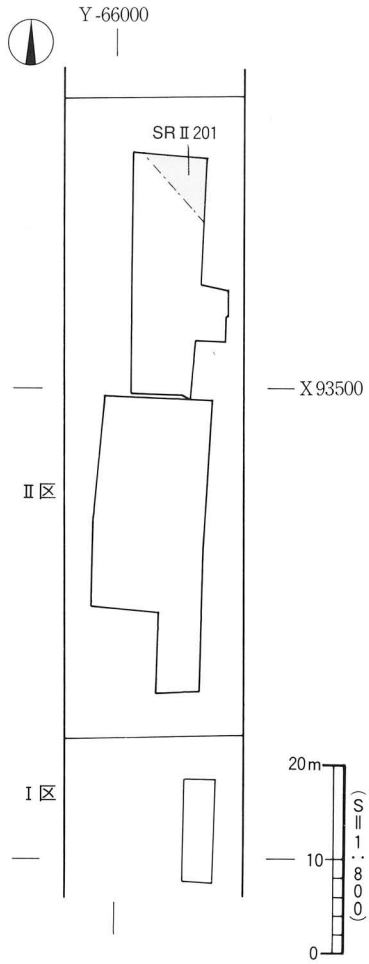
ＳＲⅡ201は第Ⅳ層に覆われ、下面は第Ⅷ B-①層に達する。規模は検出幅5.0ｍ、深さ20㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色（7.5Y6/1）砂であるが、埋土中に３～５㎝大の小礫を少量含む。流路は北西-南東方向に方位をとるが、検出範囲がわずかであるため、流路の方向は定かでない。

遺物は埋土中より、弥生時代後期に時期比定される甕形土器と鉢形土器の小片が出土している。

出土遺物（第34図－Ⅱ056・057、図版18）

Ⅱ056は「く」の字状口縁を呈する甕形土器。口縁端部は「コ」字状に仕上げ、口縁内面に稜をもつ。Ⅱ057は鉢形土器の底部で、平底となる。

時期：出土した弥生土器の特徴から、ＳＲⅡ201は弥生時代後期後半の流路とする。



第33図　ＳＲⅡ201状況図

(2)　第Ⅷ B 層出土遺物（第34図、図版18）

第２地区の中央部、Ａ地点から北側の地域で確認した第Ⅷ B 層には、弥生時代の遺物が包含されていた。第Ⅷ B 層は石手川の氾濫による河川氾濫堆積物で、２種類の堆積物（Ⅷ B-①・Ⅷ B-②）に分類される。このうちⅧ B-②層中からは弥生時代前期末～中期初頭、Ⅷ B-①層中からは中期中葉～後半に時期比定される遺物が出土している。

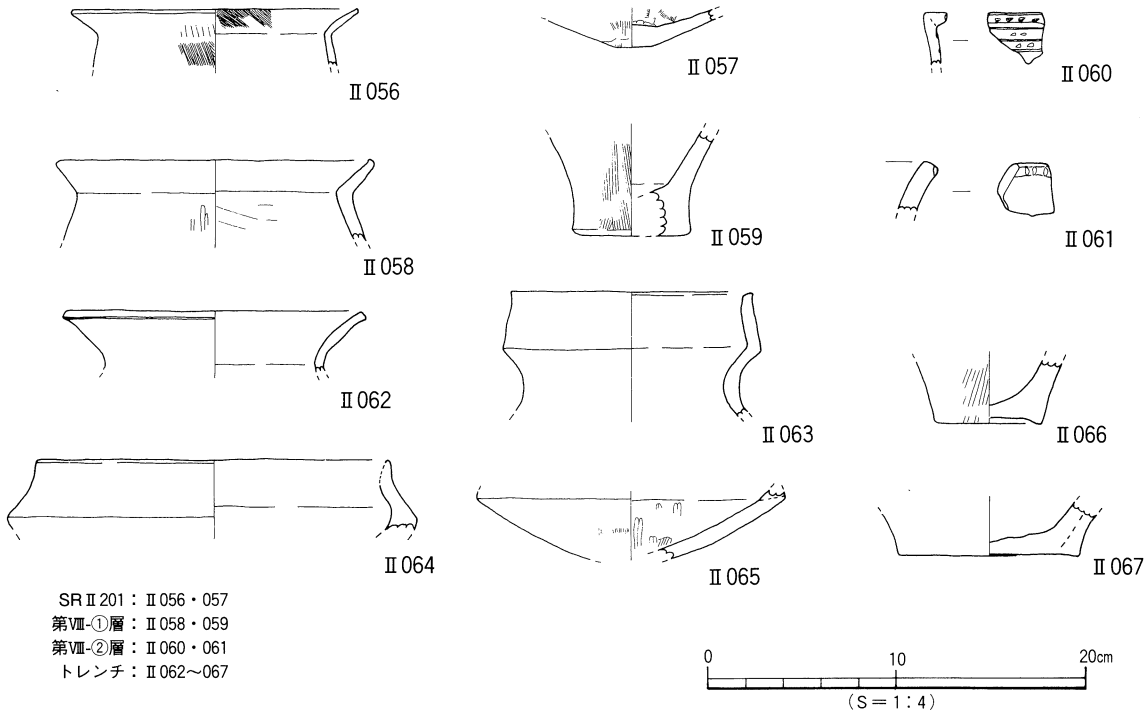
１）**Ⅷ B-①層出土品**（Ⅱ058・059）：Ⅱ058は「く」の字状口縁を呈する甕形土器。口頸部境には内外面共に不明瞭な稜をもつ。Ⅱ059は甕形土器の底部。器壁は厚い。

２）**Ⅷ B-②層出土品**（Ⅱ060・061）：Ⅱ060は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。口縁端面には刻目、胴部には沈線文と刺突文を施す。Ⅱ061は壺形土器の口縁部片。口縁端面下端部には刻目を施す。

(3)　トレンチ出土遺物（第34図、図版18）

自然流路や第Ⅷ層のほかに、調査壁沿いに設定したトレンチ内からは、出土地点や層位が不明な弥生時代の遺物が出土している。これらの遺物は、本来は流路や第Ⅷ層に伴うものと推測される。いずれも小片であり、磨滅が著しい。

Ⅱ062は甕形土器。「く」の字状口縁で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。Ⅱ063・064は複合口縁壺。口縁部は内傾した後直立し、口縁端部は内傾するもの（Ⅱ063）と尖るもの（Ⅱ064）とがある。Ⅱ065は高坏形土器の坏部。擬口縁を看取する。Ⅱ066は甕形土器、Ⅱ067は壺形土器の底部。Ⅱ066はやや上げ底、Ⅱ067は平底となる。なお、Ⅱ067の底部外面には籾圧痕が残る。



第34図　ＳＲⅡ201・第Ⅷ層・トレンチ出土遺物実測図

7．その他の遺構と遺物

Ⅱ区では、第Ⅳ層上面にてピット１５基を検出した。ピット内からの遺物の出土はなく、時期特定は困難であるため、ここでは「その他の遺構と遺物」として取り扱っている。

ピットはすべて第２地区北半部で検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は最小径20～25cm、最大径40～50cmである。埋土の違いにより２種類に分類される（Ａ・Ｂ類）。Ａ類は埋土が灰色土のピットで、３基がある。Ｂ類は埋土が第Ⅲ層と同様の褐灰色土のピットで、12基がある。出土遺物はなく、ピット埋土からあえて時期を求めるならば、Ａ類は中世、Ｂ類は古代の可能性が高い。

8．小　　結

Ⅱ区の調査では、弥生時代前期末から近世までの遺構と遺物を確認した。層位では、第Ⅰ層から第Ⅳ層と第Ⅷ層・第Ⅸ層をそれぞれ検出した。

(1) 層　　位

Ⅱ区は、第１地区と第２地区とで土層の堆積状況がやや異なっている。第１地区は、第Ⅰ層下には水田土壌の第ⅡＡ層が層厚50～70cmの堆積をなし、第ⅡＡ層下には第Ⅷ層を検出した。この堆積状況はⅠ区と同様である。一方、第２地区は調査区中央部付近、Ａ地点から南側では第１地区と同様に、第Ⅰ層下に水田土壌の第ⅡＡ層が検出されたが、北側では第ⅡＡ層は検出されず、第Ⅲ層と第Ⅳ層がそれぞれ層厚10～15cmの堆積をなしていた。

また、Ⅱ区最下部の堆積状況は、第２地区中央部付近に石手川の洪積礫層（第Ⅸ層）を確認した。礫層南端上面には長さ約２ｍ、高さ50～60cmの礫（５cm～拳大）の密集する箇所がみられる（Ａ地点）。

Ａ地点を境にして、南側の地域（第１地区と第２地区の南端）では、第ⅡＡ層下に第Ⅷ層を検出した。この第Ⅷ層は礫径や堆積状況などから、Ⅰ区で検出された石手川の本流に伴う砂礫層（第ⅧＡ層）と同じものと考えられる。

一方、Ａ地点から北側の地域では、第Ⅳ層下に第ⅧＢ層を検出した。第ⅧＢ層は堆積状況から、石手川の氾濫に伴う堆積物と考えられる。これら２種類の堆積物から構成される第Ⅷ層上面は、第１地区ではわずかに凹凸はみられるものの、比較的水平になっているが、第２地区の南端、前述したＡ地点付近では高くなり、第２地区の北側へ向けて緩やかに傾斜する。第１地区と第２地区の第Ⅷ層上面の比高差は70～140cmを測る。土層の堆積状況をみると、第Ⅷ層の堆積状況の差が、第Ⅲ層と第Ⅳ層の堆積に大きな影響を与えることになっている。

(2) 遺構・遺物

Ⅱ区で検出した遺構は、弥生時代後期から近世までのものである。

１）近世：近世の遺構は、第２地区のほぼ中央部に、東西方向の溝ＳＤⅡ201を検出した。溝の方位は真北にほぼ直交する。溝内には拳～人頭大の角礫が２～３段積まれており、石組みの溝の可能性がある。また、溝内からは国内産と中国産の磁器がそれぞれ出土している。国内産磁器は主に肥前焼であり、18世紀代に時期比定される。中国産磁器は青華皿が１点出土しており、16世紀後半に時期比定される。

２）中世：中世では、水田址と溝ＳＤⅡ202が注目すべき遺構である。水田址はⅠ区から続くものであり、少なくとも３面の水田面を確認した。水田は13～15世紀後半までに作られたものと考えられる。水田に関連して、ＳＤⅡ202の存在がクローズアップされる。ＳＤⅡ202は、Ⅰ区やⅡ区に展開する水田へ取水するための基幹水路としておく。

また、水田３土壌のⅡＡ-⑫層下では２条の溝を検出した。ＳＤⅡ109とＳＤⅡ110は埋土が類似することから、ほぼ同時期に存在していたものとみられるが、溝の性格は特定できなかった。

このほか、第１地区の南端では８条の溝を検出した。検出幅15～30cm、深さ４～６cmの小溝であり、それぞれが東西・南北方向に直交する。すべての溝が同一の埋土で埋没していることから、同時期に存在していたものであろう。検出層位から、少なくとも水田３（13世紀）埋没以降の溝になる。Ⅰ区とⅡ区では、このような形状をなす溝は検出されておらず、性格は定かでない。

ＳＤⅡ202と水田土壌内からは、15世紀後半頃の遺物が出土している。このうち、水田１を覆うⅡＡ-①層中からは土師器、東播系須恵器（14世紀後半）、備前焼のすり鉢（15世紀後半）が出土している。また、水田２土壌のⅡＡ-⑧層中からは、主に13世紀代の土師器土釜、瓦器椀、輸入陶磁器〔龍泉窯系青磁椀Ⅲ類（Ⅱ023）、白磁椀Ⅱ類（Ⅱ022）〕が出土している。貿易陶磁器の出土例は松山平野では少なく、稀少資料となる。

３）古代：古代の遺構は土坑３基と自然流路１条である。

土坑は径80cm前後の円～楕円形状を呈する。土坑内から遺物の出土はなく、明確な時期判断はしかねるが、第Ⅲ層で埋没していることから、古代の遺構としておく。自然流路ＳＲⅡ001は、調査壁の土層観察により確認したものである。東西方向の流路で、主に８・９世紀代の遺物を含む。

遺物は、ＳＤⅡ111内より11世紀代の土師器、ＳＲⅡ001内より８・９世紀代の須恵器が出土している。このほか、第Ⅲ層中より灰釉陶器（Ⅱ042）〔９世紀後半〕が１点出土している。松山平野では、

9世紀後半の資料は初例になる。

4）古墳時代：古墳時代の遺構は未検出である。遺物は、第Ⅳ層中より6～7世紀代の土師器・須恵器が少量出土している。これは、調査地の西方に所在する持田町3丁目遺跡の関連資料になる。

5）弥生時代：弥生時代の遺構は、平面調査では検出していないが、調査壁の土層観察により、第2地区の北東隅で自然流路ＳＲⅡ201を確認することができた。北西-南東方向の流路である（全容は不明）。遺物は、ＳＲⅡ201内より弥生時代後期の甕形土器や鉢形土器の小片が出土している。第ⅧＢ層からは弥生時代前期末～中期初頭と、中期中葉～後半の土器片が数点出土している。これは、後述するⅤ・Ⅵ区に起因する資料である。

以上、Ⅱ区は検出遺構や層位から、弥生時代には河川や流路が流れる状況であり、北半部に限り、古墳時代になりようやく土地が安定する。古代では、北半部は引き続き土地が安定しているが、南半部ではこの時点まで河川や流路が流れる状況にある。その後、中世（12世紀頃）になり、南半部は土地が安定化し、人々が水田を営むようになる。

このように、Ⅱ区の北半部と南半部では土地の利用方法が異なっており、機能面でみると別々のエリアが存在していたものとみられる。

第５章

Ⅲ区の調査

第5章　Ⅲ区の調査

1．調査の経緯（第35図、図版19）

Ⅲ区は、調査地の中央部に位置し、松山市岩崎町2丁目4－13から4－22までの間、幅18m、長さ90mが調査対象地である。調査対象面積は1,620㎡で、国土座標はX93532～93623、Y-65984～-66005になる。Ⅲ区は調査以前は既存宅地であった。調査区内には、調査中も東西方向に生活道路が横断し、住宅の存在する箇所があった。調査区は、それらの生活道路や宅地の境界を利用し、南から第1地区、第2地区、第3地区の3地区に小区分した。排土置き場は、調査区内や隣接する調査区を使用した。第3地区については、調査事務所が調査区内にあったため、他の地区に比べ、調査面積は狭いものになった。調査時は、家屋が現存している箇所があったため、取り壊した箇所から順次調査を実施した。そのため、第1地区と第3地区では、調査期間が重複している。第2地区の調査は、既存宅地の取り壊しが遅れたため、平成9年度の6月から8月の2カ月間で実施した。以下、調査工程を略記する。なお、各地区の調査面積と調査期間は表8のとおりである。

〔調査工程〕

① 調査は第3地区→第1地区→第2地区の順で行った。第1地区と第3地区は試掘調査のデータをもとに、重機にて表土から第Ⅲ層までを除去し、第Ⅳ層上面にて遺構検出を行う。

② 第3地区からは掘立柱建物址、柵列、溝、土坑などの遺構を多数検出したが、第1地区からは土坑4基を検出したにとどまった。そのため、作業員を第3地区に多数導入して、調査を進めた。

③ 各遺構の掘り下げを行った後、測量と完掘状況写真を撮影した。

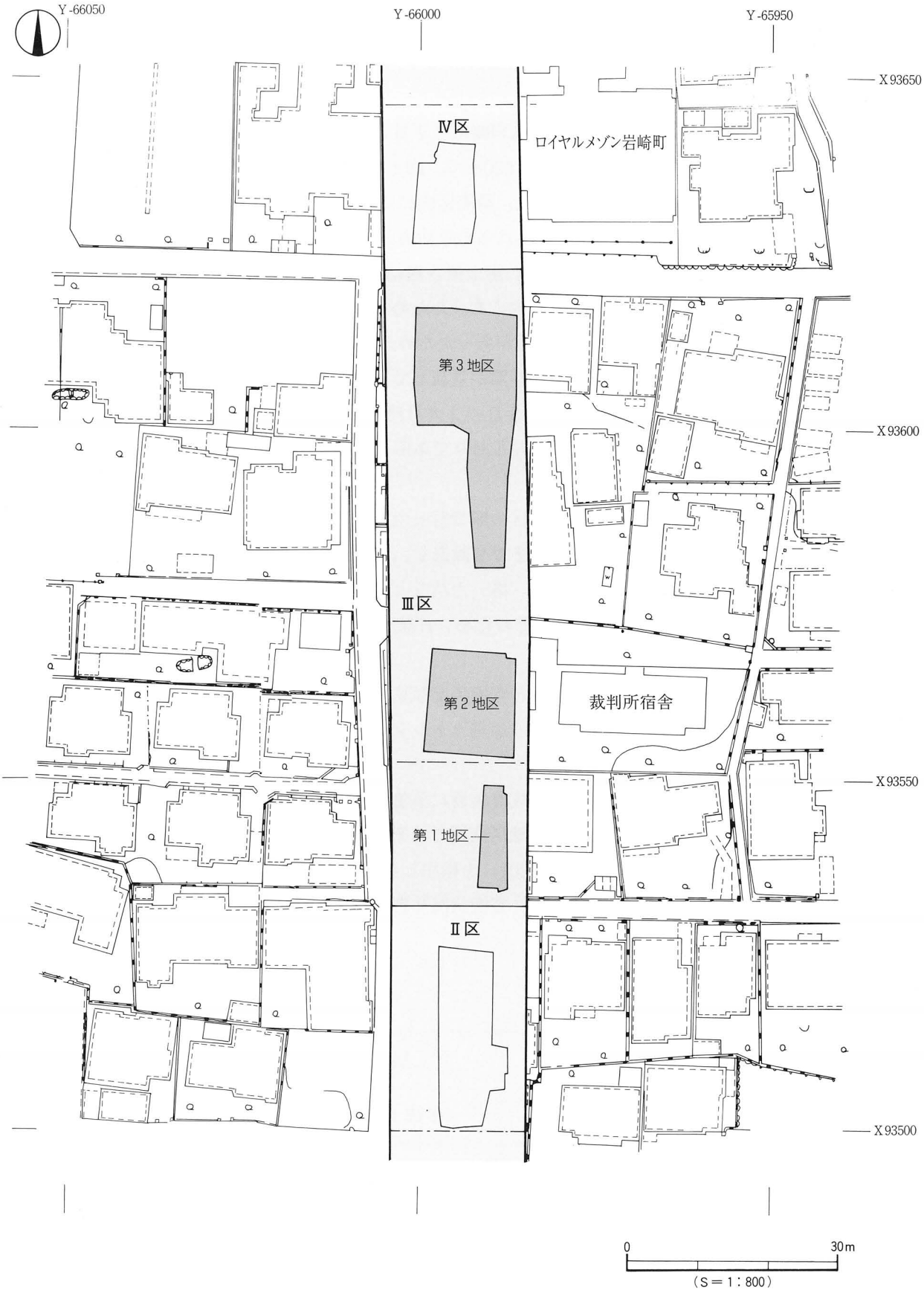
④ 各調査区の東壁と、調査壁に直交する深掘りトレンチを設定し、第Ⅳ層以下の土層確認を行った。

⑤ 第2地区の調査は前述のとおり、平成9年度に実施した。重機にて第Ⅲ層まで除去した後、遺構検出を行った。第2地区は、調査地区南端では第Ⅳ層を検出したが、中央部は第Ⅷ層が露出し、北側では性格不明遺構（ＳＸⅡ201）を検出した。

⑥ 各遺構の掘り下げと測量を行った後、完掘状況写真を撮影した。

表8　調査地区一覧

地　区	対象面積（㎡）	調　査　期　間
1	354	平成8年11月1日～平成9年3月11日
2	390	平成9年6月13日～平成9年8月5日
3	876	平成8年10月21日～平成8年12月20日


Y-66050
Y-66000
Y-65950
X93650
X93600
X93550
X93500
Ⅳ区
ロイヤルメゾン岩崎町
第３地区
Ⅲ区
第２地区
裁判所宿舎
第１地区
Ⅱ区
0
30m
（S＝1：800）

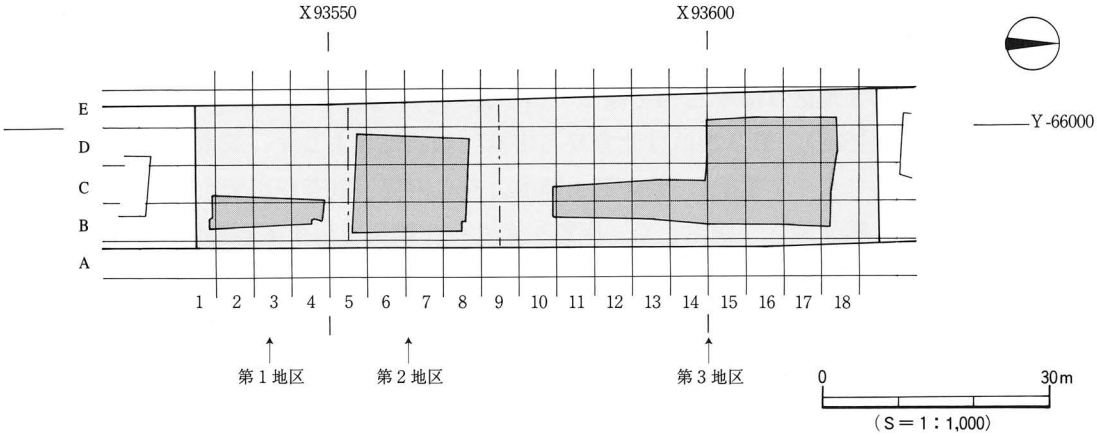
第35図　Ⅲ区測量図

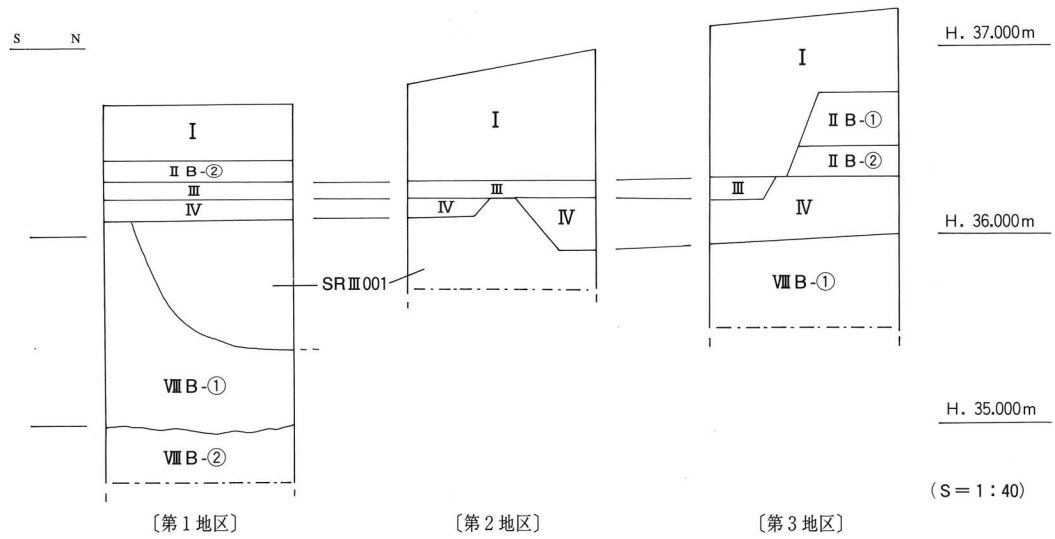
2．層　　位（第36図、図版19・20）

(1) 基本層位

Ⅲ区は、第１・第２・第３地区共に調査以前は既存宅地であった。現況では調査区北側、第３地区が最も高く、南側第１地区に向かって緩傾斜をなす。現地表面の標高は第１地区が36.７ｍ、第３地区が37.２ｍである。

基本層位は、第Ⅰ層から第Ⅳ層と第Ⅷ層を検出し、第Ⅴ層から第Ⅶ層は確認されなかった。第Ⅰ層は近現代の造成や農耕にかかわる客土である。第Ⅱ層は灰黄～灰黄褐色土で、主に中世の遺物を含む包含層である。第Ⅲ層は褐灰色土で、古代の遺物を含む包含層である。第Ⅳ層は灰オリーブ色土で、古墳時代～古代、主に６世紀から８世紀までの遺物を含む包含層である。第Ⅷ層は砂礫層（河川氾濫堆積物）である。第Ⅷ層は第１地区から第３地区までの東壁と南壁に設定した深掘りトレンチの土層観察で確認されたものである。各トレンチの深さは、第Ⅳ層直下より２ｍの地点を基準に掘削を行った。ただし、各調査地区で周辺の状況が異なることから、必ずしもすべてのトレンチが同じ深さでない。





第36図　Ⅲ区区割図・土層模式図

第Ⅰ層－第１地区は層厚30cm、第２地区は層厚65cm、第３地区は層厚85cmを測る。第３地区が最も厚く堆積する。第１地区から第３地区に向かって傾斜堆積をなす（比高差55cm）。

第Ⅱ層－第Ⅱ層は、中世の遺物を含む土壌で、第２章層位で説明した第ⅡＢ層にあたる。層厚30～50cmを測る。土色と砂粒の混入量の違いにより２層に分層される（ⅡＢ-①、ⅡＢ-②層）。

ⅡＢ-①層：灰黄色（2.5Y6/2）砂質土で、第１地区の全域と、第３地区の中央部で検出した。第１地区は層厚15cm、第３地区は層厚40cmを測る。第１地区は南東から北西に向かって傾斜堆積をなす（比高差８cm）。第３地区は南から北に向かって傾斜堆積をなす（比高差36cm）。遺物は13～15世紀の土師器、東播系須恵器、輸入陶磁器が出土した。

ⅡＢ-②層：灰黄褐色（10ＹＲ6/2）土で、第３地区の南東部を除く、調査区ほぼ全域で検出した。層厚は19cmを測る。南から北に向かって傾斜堆積をなす（比高差5cm）。遺物は土師器（13世紀）が出土した。

第Ⅲ層－褐灰色（7.5ＹＲ4/1）土で、第１地区・第２地区の全域と、第３地区の南東隅で検出した。第１地区は層厚24cm、第２地区は層厚8cm、第３地区は層厚15cmを測る。第１地区は南東から北西に向かって傾斜堆積をなし（比高差11cm）、第２地区は北東から南東に向かって傾斜堆積をなす（比高差15cm）。遺物は土師器、須恵器（７～10世紀）のほか、緑釉陶器が出土した。

第Ⅳ層－灰オリーブ色（5Y5/3）土で、Ⅲ区全域で検出した。第１地区は層厚17cm、第２地区は層厚30cm、第３地区は層厚72cmを測る。第１地区と第２地区は南東から北西に傾斜堆積をなす（比高差15cm）。第３地区は北東から南西に傾斜堆積をなす（比高差15cm）。遺物は土師器、須恵器（６～７世紀）、分銅形土製品、有孔円板、鉄斧が出土した。

第Ⅷ層－第１地区と第３地区で検出した。灰色～オリーブ褐色を呈する砂礫層である。調査壁沿いに設定したトレンチの土層観察により確認したものである。堆積物や堆積状況から石手川の氾濫による河川氾濫堆積物と考えられ、第2章で説明したⅧＢ層に相当する。堆積物の違いから2種類に分けられる（ⅧＢ-①、ⅧＢ-②層）。

ⅧＢ-①層：第１地区と第３地区で見られるもので、層厚0.5～１ｍを測る。灰白色（7.5Y8/2）の砂礫層で、礫径は最大で10×20cm、最小で5×10cmを測り、径10×15cm大の礫が大半を占める。礫と礫の間には、灰色の砂と小礫とが混入する。礫径やマトリックスの状況などから、Ⅱ区で検出したⅧＢ-①層と同じ堆積物と考えられる。本層中からは、弥生時代中期～後期の土器片が少量出土している。

ⅧＢ-②層：第１地区に限られ、上面はⅧＢ-①層が覆う。オリーブ褐色（2.5Y4/6）を呈する砂礫層からなり、礫径は最大で10×20cm、最小で3×5cmを測り、径5×10cm大の礫が密集している。礫と礫の間には粗砂が混入する。ⅧＢ-①層と同様、Ⅲ区検出のⅧＢ-②層は、Ⅱ区検出のⅧＢ-②層と同じ堆積物と考えられる。本層中からは、弥生時代前期末～中期初頭の土器片が少量出土している。

(2)　検出遺構・遺物（第37・38図、図版21）

Ⅲ区の調査では、弥生時代から中世までの遺構と遺物を検出した。

弥生時代の遺構は自然流路１条（ＳＲⅢ001）を検出した。遺物は第Ⅷ層中より、弥生時代前期末～中期初頭、中期中葉～後期の土器が出土した。古墳時代は溝１条と土坑１基、古代は溝１条、土坑15基、性格不明遺構１基、中世は掘立柱建物址４棟、柵列１条、溝２条、土坑８基を検出した。

各地区で検出した遺構を表９にまとめた。

〔第1地区〕

〔第2地区〕

※ 遺構配置図、土層図の縮尺は平面が1/150、断面の深さは1/50である。

第37図　Ⅲ区〔第１地区・第２地区〕遺構配置図・土層図

第38図　Ⅲ区〔第３地区〕遺構配置図・土層図

なお、調査にあたり調査区内を５ｍ四方のグリットに分けた。調査区の東から西へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ、南から北へ１・２……18とし、Ａ１～Ｅ18といったグリット名を付した（第36図）。

表9　Ⅲ区遺構一覧

地区／時代	第１地区	第２地区	第３地区
弥生時代	←――― ＳＲⅢ001（後期） ―――→		
古墳時代	ＳＫⅢ102（後期）	ＳＤⅢ201（７世紀）	
古　代	ＳＫⅢ101（古代） ＳＫⅢ104（古代）	ＳＫⅢ201～208（古代） ＳＸⅢ201（古代）	ＳＫⅢ303（古代） ＳＫⅢ305（古代） ＳＫⅢ307（古代） ＳＫⅢ308（古代） ＳＫⅢ312（古代） ＳＤⅢ302（８世紀）
中　世	ＳＫⅢ103（13世紀）		ＳＫⅢ302（14世紀） ＳＫⅢ304（14世紀） ＳＫⅢ306（13世紀） ＳＫⅢ309～311（14世紀） ＳＫⅢ313（14世紀） ＳＤⅢ301（14世紀） ＳＤⅢ303（14世紀） ＳＡⅢ301（14世紀） 掘立Ⅲ301～304（14世紀）

3．中世の遺構と遺物

中世の遺構は、掘立柱建物址４棟、柵列１条、溝２条、土坑８基である。すべて第Ⅳ層上面での検出である。

⑴　掘立柱建物址

掘立Ⅲ301（第39図、図版21・22）

第３地区中央部、C16区に位置する。建物北東隅の柱穴はＳＫⅢ303（古代）と重複し、平面調査では未検出である。１間×２間の南北棟で、建物方位はほぼ真北になる。規模は桁行長2.63m、梁行長1.65m、柱穴間隔は桁間1.3～1.4mを測る。柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径17～36cm、深さ26～52cmを測る。埋土は暗灰色土単層である。遺物は柱穴内から土師器片と、フイゴの羽口が出土した。。

出土遺物（第40図－Ⅲ001～003、図版23）

Ⅲ001～003はＳＰ④出土品。Ⅲ001は土師器坏である。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。Ⅲ002は完形の土師器皿である。口径7.4cm、底径3.8cm、器高1.7cmを測る。体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。底部はやや突出し、底部の切り離しは回転糸切り技法による。器面調整は磨滅のため不明であるが、底部外面には板状圧痕が残る。Ⅲ003はフイゴの羽口である。推定外径9.0cm、推定内径2.2cm、壁厚3.5cmを測る。内面は赤褐色を呈し、胎土は粗く、１～６mm大の石英・長石を多量に含む。外面には、煤と鉄滓が付着している。鉄滓は還元化して暗紫灰色を呈している。さらに胴部外面も熱を受け、青灰色や灰白色に変化している。

時期：出土した遺物の特徴から、掘立Ⅲ301は14世紀代の建物址とする。

掘立Ⅲ302（第39図、図版21）

第３地区の中央部、C15区に位置する。１間×２間の南北棟で、掘立Ⅲ301とほぼ等しい建物方位をとる。規模は桁行長3.19m、梁行長1.68m、柱穴間隔は桁間1.3～1.9mを測る。柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径17～42cm、深さ20～50cmを測る。埋土は暗灰色土単層である。遺物は柱穴内から、土師器片が数点出土した。

出土遺物（第40図－Ⅲ004）

Ⅲ004は建物東側中央の柱穴、ＳＰ⑤出土の土師器坏である。口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。内外面共に、調整は磨滅のため不明である。

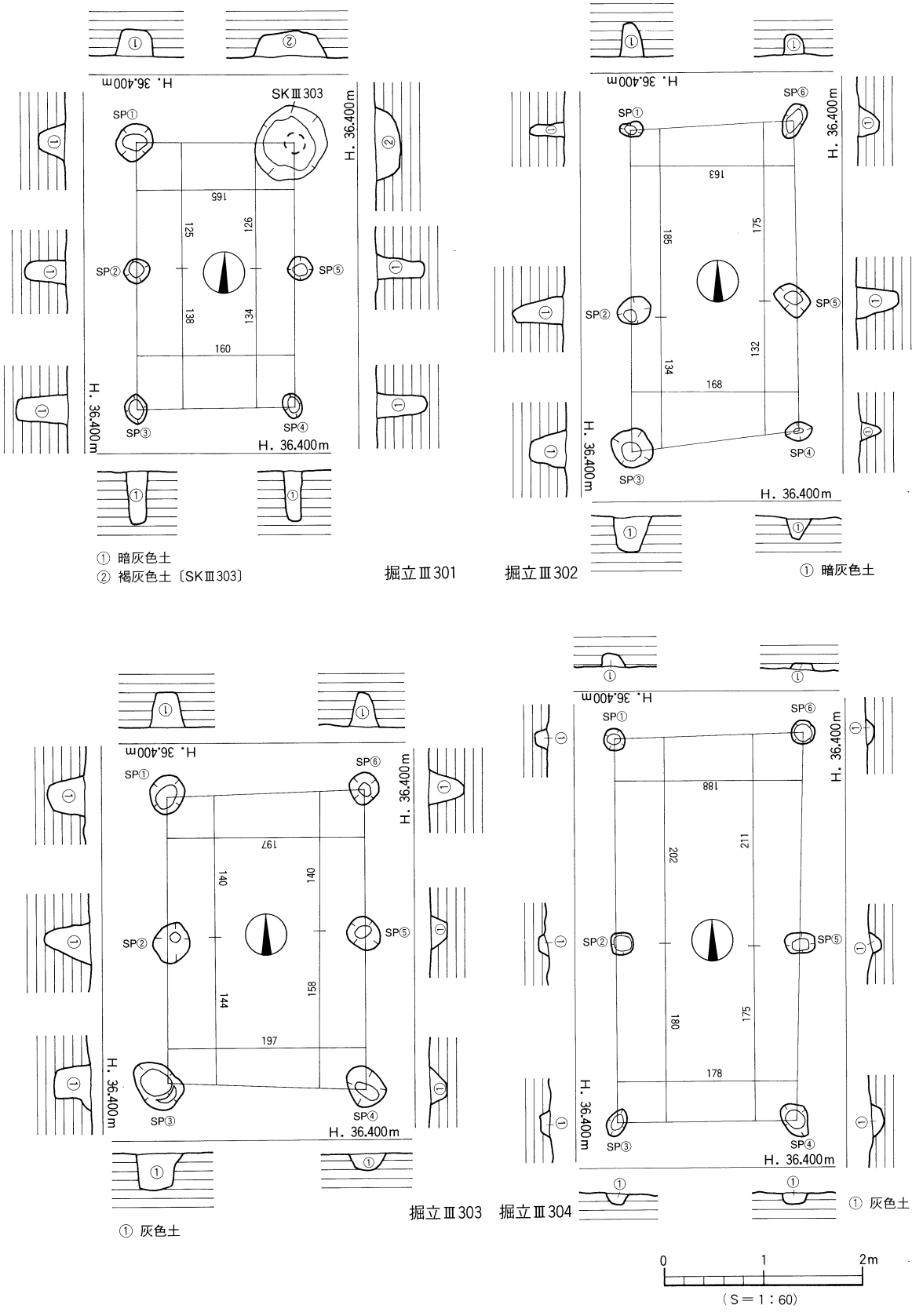
時期：出土した遺物の特徴と、柱穴埋土、建物方位が掘立Ⅲ301と酷似することから、掘立Ⅲ302は14世紀代の建物址とする。

掘立Ⅲ303（第39図、図版21）

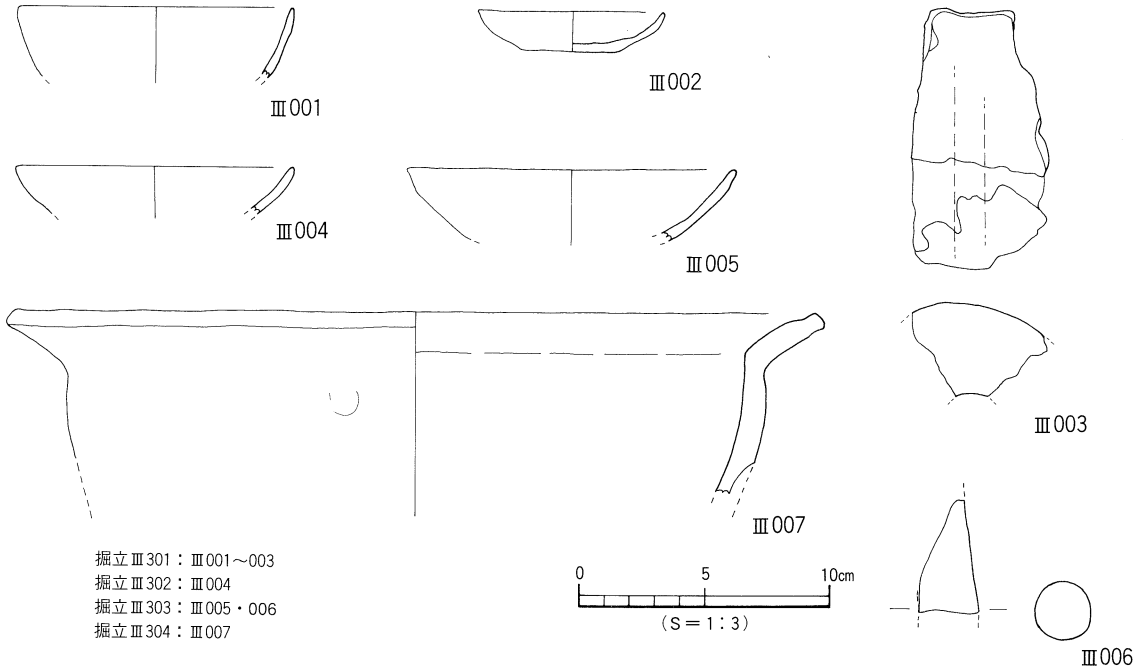
第３地区の中央部、C・D15区に位置する。１間×２間の南北棟で、建物方位をほぼ真北にとる。規模は桁行長2.98m、梁行長1.97m、柱穴間隔は桁間1.4～1.6mを測る。柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径28～52cm、深さ17～45cmを測る。埋土は灰色土単層である。遺物は柱穴内から、土師器片が数点出土した。

出土遺物（第40図－Ⅲ005・006）

Ⅲ005・006は建物南西隅の柱穴ＳＰ③出土品。Ⅲ005は土師器の坏である。体部上位でわずかに屈



第39図　掘立Ⅲ301～304測量図



第40図　掘立Ⅲ301～304出土遺物実測図

曲し、口縁端部は丸く仕上げる。Ⅲ006は土釜もしくは土鍋の脚部片である。外面はナデ調整を施す。

時期：出土した遺物の特徴から、掘立Ⅲ303は14世紀代の建物址とする。

掘立Ⅲ304（第39図、図版21）

第３地区の南側、Ｂ13～Ｃ14区に位置する。第３地区検出の掘立柱建物址の中では、最も規模の大きな建物址である。１間×２間の南北棟で、建物方位をＮ－2°30′－Ｅにとる。規模は桁行長3.86m、梁行長1.88m、柱穴間隔は桁間1.8～2.1mを測る。柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径19～38cm、深さ7～21cmを測る。埋土は灰色土で、遺物は柱穴内から、土師器片が数点出土した。

出土遺物（第40図－Ⅲ007）

Ⅲ007は建物西側中央の柱穴、ＳＰ②出土の土鍋である。口縁部は外反し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。口縁端部内面はナデにより凹む。

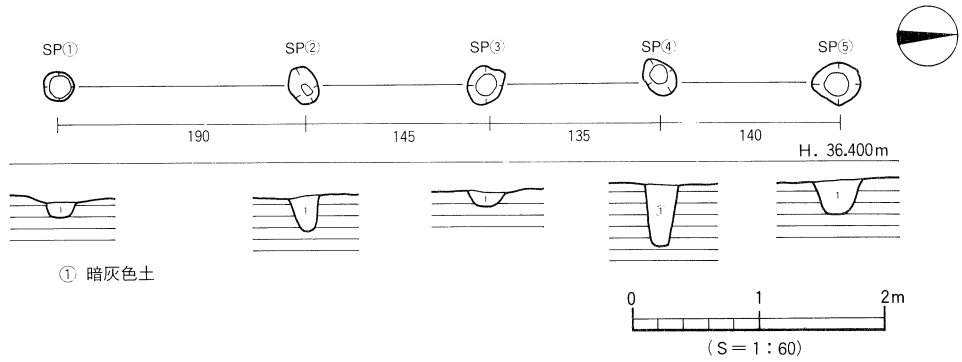
時期：出土した遺物の特徴と、柱穴埋土が掘立Ⅲ303と酷似することから、掘立Ⅲ304は14世紀代の建物址とする。

(2) 柵　　列

ＳＡⅢ301（第41図、図版21）

第３地区の北側、Ｂ15～Ｃ16区に位置する。ＳＰ①～ＳＰ⑤の５基の柱穴で構成される。南北方向に１直線に並ぶため柵列と判断した。方位はほぼ真北方向にとる。各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径25～37cm、深さ10～46cmを測る。柱穴間隔はＳＰ①－ＳＰ②が1.90m、ＳＰ②－ＳＰ③が1.45m、ＳＰ③－ＳＰ④が1.35m、ＳＰ④－ＳＰ⑤が1.40mとなり、全長6.1mを測る。柱穴埋土は暗灰色土単層である。遺物は柱穴内から土師器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土した遺物の特徴と柱穴埋土が、後述するが溝ＳＤⅢ303（14世紀代）の埋土に類似する



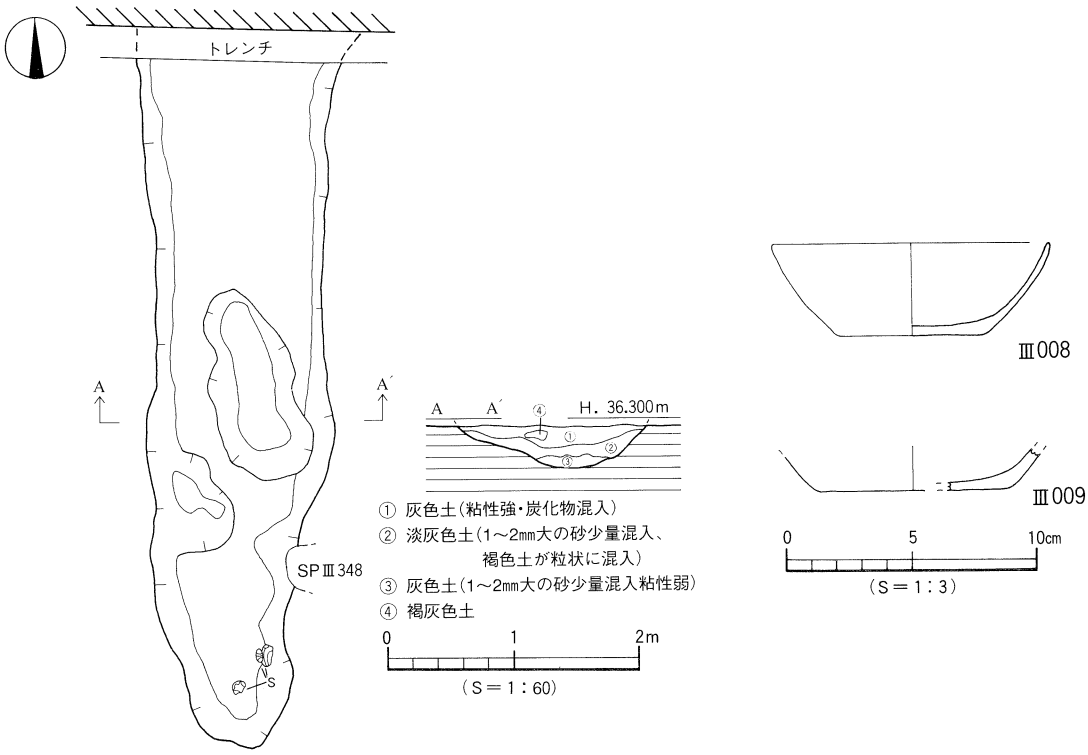
第41図　ＳＡⅢ301測量図

ことから、ＳＡⅢ301は14世紀代の遺構とする。

(3) 溝

ＳＤⅢ301（第42図、図版21）

第３地区の北部、Ｃ17～Ｄ18区に位置する。第Ⅳ層を切り、第ⅡＢ-②層が覆う。溝南東部はＳＰⅢ348に切られ、北側は調査区外に続く。溝基底面は南から北に傾斜する（比高差６㎝）。規模は、検出長5.40m、幅0.90～1.50m、深さ10～33㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は３層に分かれ、①層は灰色土（炭化物混入）、②層は淡灰色土、③層は灰色土（１～２㎜大の砂混入）である。①層中には褐灰色土がブロック状に混入する。遺物は③層中から、土師器の坏、Ⅲが出土した。



第42図　ＳＤⅢ301測量図・出土遺物実測図

出土遺物（図版23）

Ⅲ008・009は③層出土品。Ⅲ008は復元完形品の坏である。口径11.0cm、底径5.6cm、器高3.7cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。磨滅のため底部の切り離しは不明である。Ⅲ009は皿である。磨滅のため底部の切り離しは不明である。内外面共にナデ調整を施す。

時期：出土した遺物の特徴から、ＳＤⅢ301は14世紀代の溝とする。

ＳＤⅢ303（第38図）

第３地区の北部、D17・18区に位置する。ＳＫⅢ310とＳＰⅢ382に切られる。溝基底面は南から北に傾斜する（比高差９cm）。規模は長さ2.15m、幅30～42cm、深さ23cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰色土単層である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＤⅢ301と類似することから、ＳＤⅢ303は14世紀代の溝とする。

(4) 土　　坑

Ⅳ区で検出した中世の土坑は8基である。いずれの土坑内からも遺物の出土はなく、時期特定は困難である。掘立柱建物柱穴と埋土が類似することや、第ⅡＢ-②層で埋没していることから、13～14世紀代の遺構と考えられる。

ＳＫⅢ103（第43図）

第１地区の南部、Ｂ２区に位置する。第Ⅳ層上面での検出であり、基底面はＳＲⅢ001（弥生時代）に達する。遺構の南側はＳＫⅢ102（古墳時代）を切り、東側はトレンチに切られる。平面形態は不定形状を呈する。規模は、東西検出長85cm、南北検出長34～72cm、深さ47cmを測る。断面形態は舟底状で、埋土は灰黄褐色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：基本土層の第ⅡＢ-②層で埋没していることから、ＳＫⅢ103は13世紀代の遺構とする。

ＳＫⅢ302（第43図）

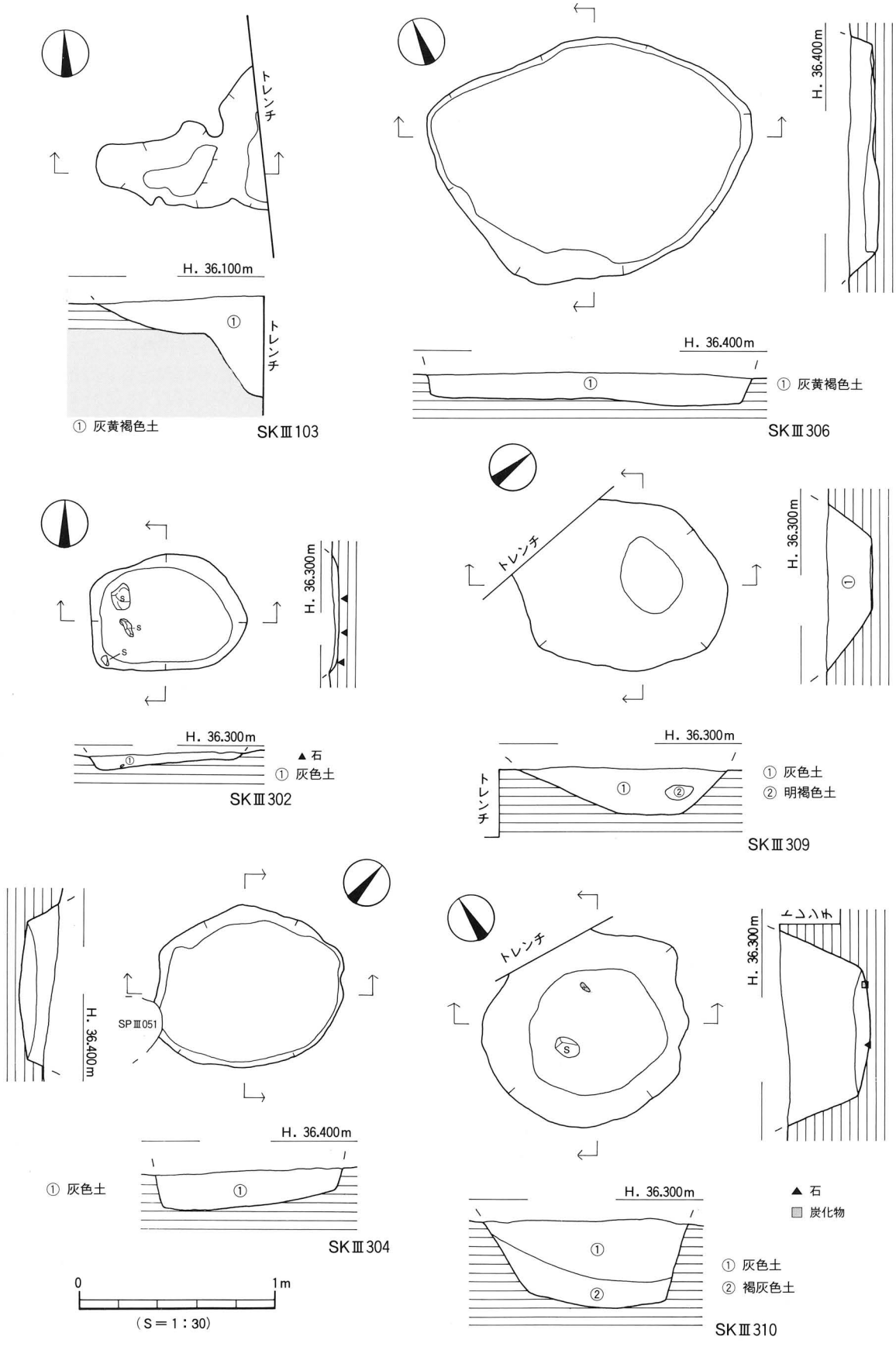
第３地区の中央部、Ｂ・Ｃ16区に位置する。第Ⅳ層上面での検出である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径80cm、短径58cm、深さ９cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は灰色土単層である。基底面からは径5～15cm大の礫が数点出土した。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土が掘立Ⅲ303・Ⅲ304の柱穴埋土と酷似することから、ＳＫⅢ302は14世紀代の遺構とする。

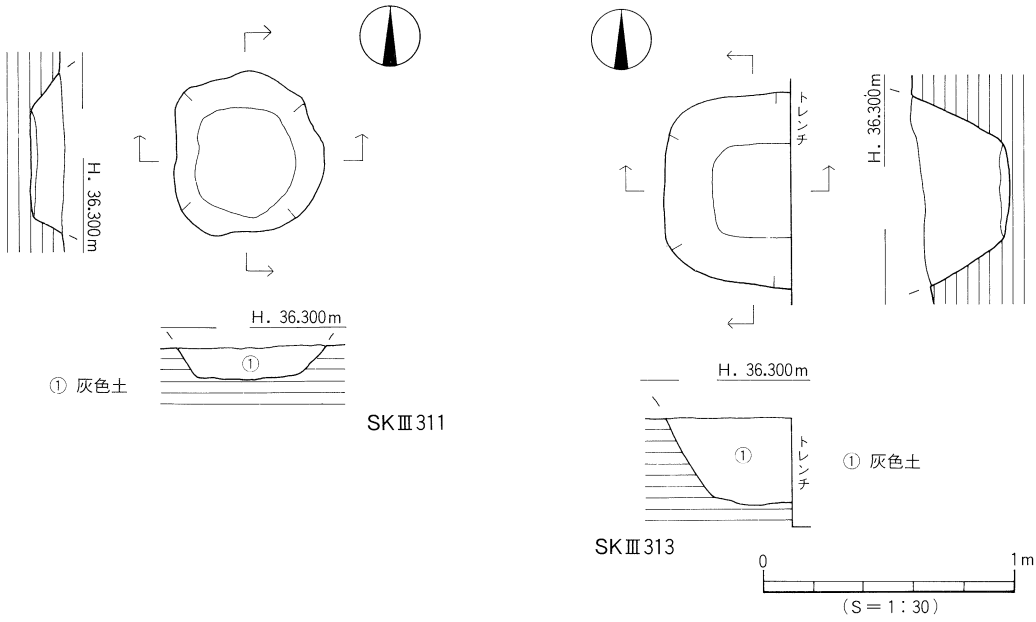
ＳＫⅢ304（第43図）

第３地区の北部、Ｃ17・18区に位置し、ＳＰⅢ051に切られる。第Ⅳ層上面での検出である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径94cm、短径81cm、深さ23cmを測る。断面形態は逆台形状で、埋土は灰色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土が掘立Ⅲ303・Ⅲ304の柱穴埋土と酷似することから、ＳＫⅢ304は14世紀代の遺構とする。



第43図　ＳＫ〔中世〕測量図(1)



第44図　ＳＫ〔中世〕測量図(2)

ＳＫⅢ306（第43図）

第３地区の中央部、Ｄ15区に位置し、ＳＤⅢ302（古代）を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.65m、短径1.23m、深さ16cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は灰黄褐色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土した遺物がなく、時期は特定できない。ＳＤⅢ302を切ることと、第ⅡＢ-②層と同様の灰黄褐色土で埋没することから、ＳＫⅢ306は13世紀代の遺構としておく。

ＳＫⅢ309（第43図）

第３地区の中央部、Ｄ・Ｅ16区に位置する。遺構の南西部はトレンチに切られる。平面形態は不整楕円形を呈するものと考えられ、規模は長径1.07m、短径0.85m、深さ23cmを測る。断面形態は逆台形状で、埋土は灰色土（明褐色土混入）である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土が掘立Ⅲ303・Ⅲ304の柱穴埋土と酷似することから、ＳＫⅢ309は14世紀代の遺構とする。

ＳＫⅢ310（第43図）

第３地区の北部、Ｄ18区に位置し、ＳＤⅢ303を切る。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1.05m、短径1.0m、深さ46cmを測る。断面形態は逆台形状である。埋土は上下２層に分層され、①層は灰色土、②層は褐灰色土である。土坑の基底面付近からは、径10cm大の石が1点出土した。

時期：埋土が掘立Ⅲ303・Ⅲ304の柱穴埋土と酷似することから、ＳＫⅢ310は14世紀代の遺構とする。

ＳＫⅢ311（第44図）

第３地区の中央部、Ｃ16区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径65㎝、短径58㎝、深さ13㎝を測る。断面形態は逆台形状で、埋土は灰色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土が掘立Ⅲ303・Ⅲ304の柱穴埋土と酷似することから、ＳＫⅢ311は14世紀代の遺構とする。

ＳＫⅢ313（第44図）

第３地区の東部、Ｂ15・16区に位置する。遺構の東側はトレンチに切られる。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は、東西検出長50㎝、南北長76㎝、深さ39㎝を測る。断面形態は逆台形状で、埋土は灰色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土が掘立Ⅲ303・Ⅲ304の柱穴と酷似することから、ＳＫⅢ313は14世紀代の遺構とする。

(5) 第Ⅱ層出土遺物

Ⅲ区では、第Ⅱ層中から中世の遺物が出土した。第ⅡＢ-①層からは主に14～15世紀、第ⅡＢ-②層からは13世紀代の遺物が出土している。

１）第ⅡＢ-①層出土遺物（第45・46図、図版23・24）

Ⅲ010～014は第１地区、Ⅲ015～021は第２地区、Ⅲ022～030は第３地区出土品である。

①第１地区出土品（Ⅲ010～014）

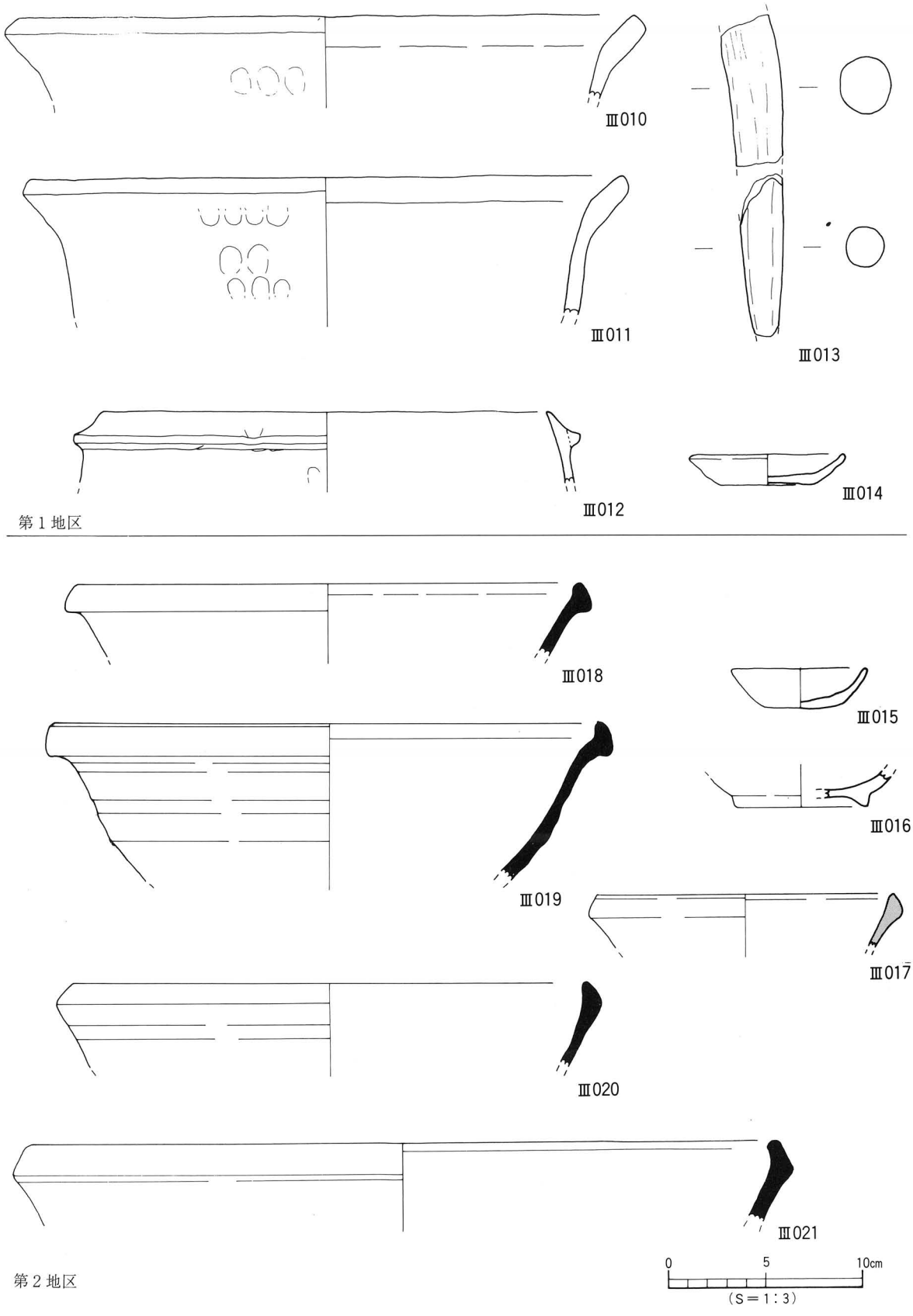
Ⅲ010・011は土師器の土鍋である。口縁部は「く」字状に開き、口縁端部は平坦面をなす。頸部内面には不明瞭な稜をもち、ナデ調整を施す。外面は２次焼成を受けており、指頭圧痕がみられる。Ⅲ012は土釜である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。口唇部から少し下がった部位に、断面三角形状の鍔が付く。内外面共にナデ調整を施す。Ⅲ013は土鍋または土釜の脚部である。手づくねにより成形される。Ⅲ014は土師器皿である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。内外面共にナデ調整を施す。

②第２地区出土品（Ⅲ015～021）

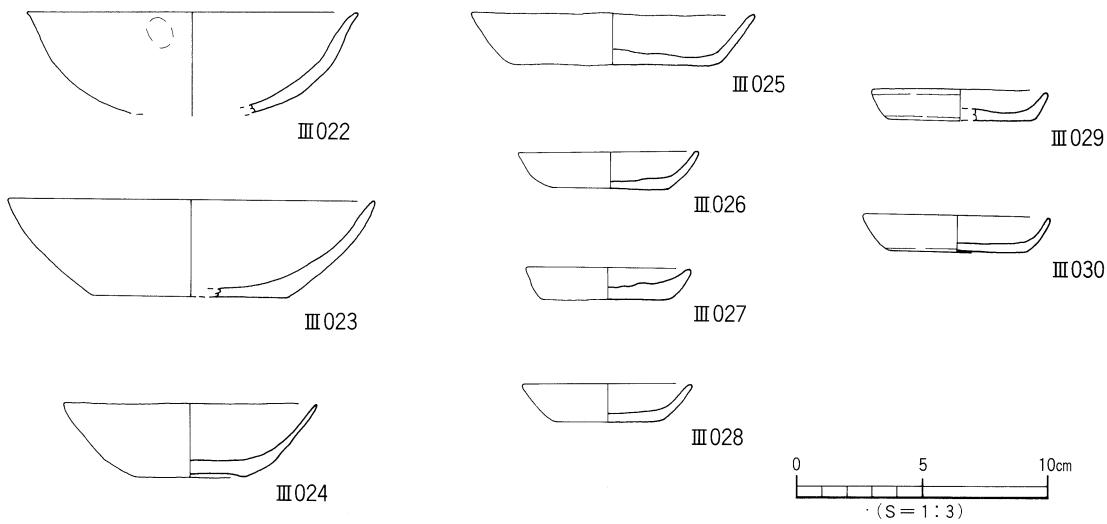
Ⅲ015は土師器皿、Ⅲ016は椀である。Ⅲ015は体部がやや内湾して、口縁部は上外方に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。内外面共にヨコナデ調整を施す。磨滅のため底部の切り離しは不明である。Ⅲ016の底部は断面三角形状の輪高台をもつ。Ⅲ017は白磁椀である。口縁部は玉縁状を呈する。胎土は灰白色を呈し、灰色系のやや暗い透明釉が施釉される。外面には気泡や凹凸がみられる。森田・横田分類のⅣ類に比定される。Ⅲ018～021は東播系のこね鉢である。Ⅲ018・019は口縁部が上下方に肥厚する。内外面共に回転ナデ調整を施す。Ⅲ020・021は口縁部が上方に肥厚し、口縁端部は丸く仕上げ、やや内湾する。内外面に回転ナデ調整を施す。

③第３地区出土品（Ⅲ022～030）

Ⅲ022は瓦質の坏で、口縁部は緩やかに外反する。Ⅲ023～030は土師器。Ⅲ023～025は坏で、Ⅲ023・024は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。Ⅲ025は体部が直線的に上外方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味になる。底部の切り離しは回転糸切り技法による。Ⅲ026～030は皿で、体部は内湾気味に立ち上がるもの（Ⅲ026・028・030）と、直線的に立ち上がるもの（Ⅲ027・029）とがある。口径は6.5～7.3㎝、器高1.2～1.5㎝を測る。底部の切り離しは、Ⅲ027～029が回転糸切り技法によるが、Ⅲ026・030は磨滅のため不明である。なお、Ⅲ026・030の底部外面には板状圧痕が残る。

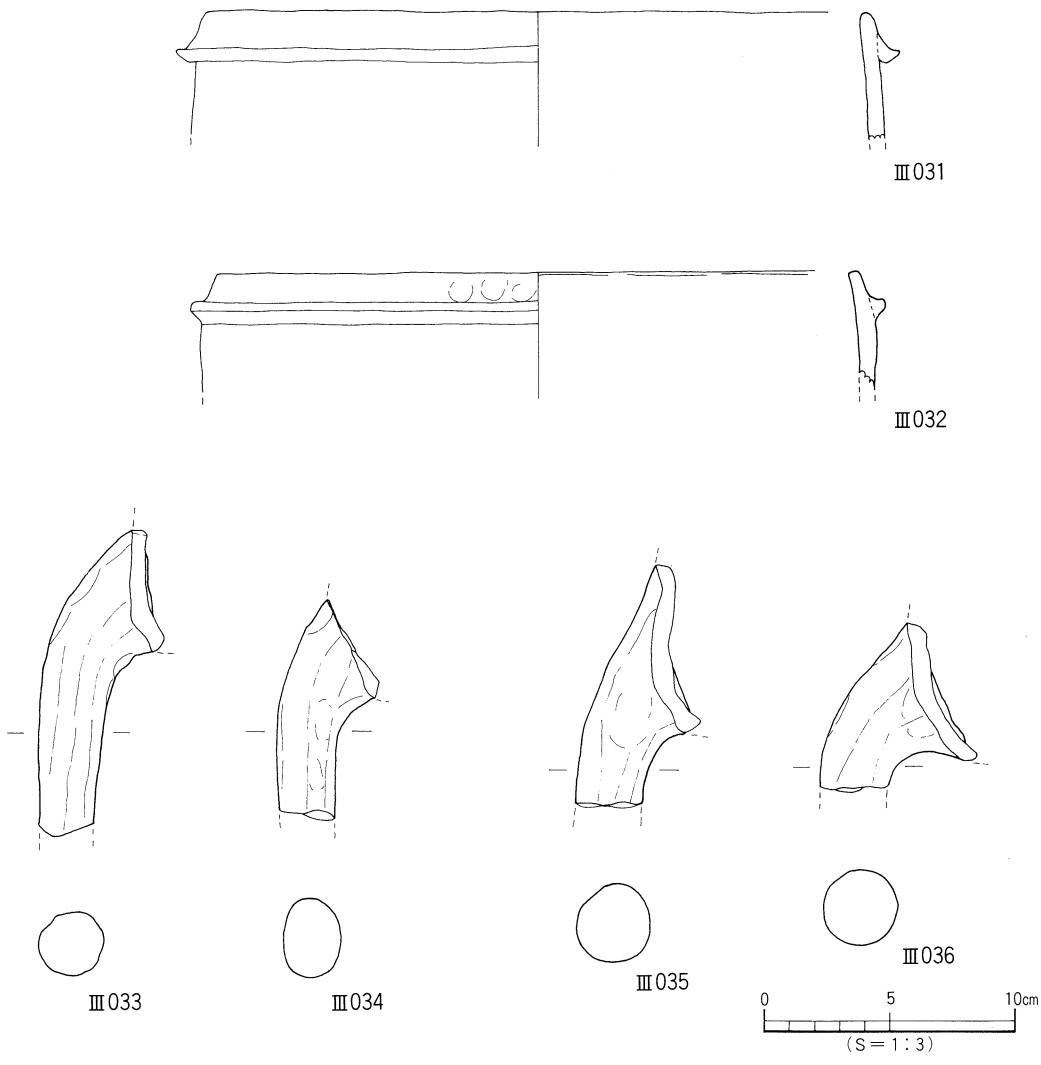


第45図　第ⅡB-①層出土遺物実測図(1)



第３地区

第46図　第ⅡB-①層出土遺物実測図(2)



第47図　第ⅡB-②層出土遺物実測図

2）**第Ⅱ B-②層出土遺物**（第47図、図版24）

Ⅲ031～036はすべて第３地区出土品である。Ⅲ031・032は土釜、Ⅲ033～036は土釜または土鍋の脚部である。Ⅲ031は口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。Ⅲ032は口縁部がやや内湾し、口縁端部は平坦面をなす。口唇部から少し下がった部位に短い鍔が付く。Ⅲ031の外面には煤が付着する。Ⅲ033・035・036は釜本体と脚部の接合部分が残り、観察により接合した位置がわかるものである。脚部の接合位置が中程のものはⅢ033・035、下方のものはⅢ036である。

４．古墳時代～古代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、溝1条と土坑1基、古代の遺構は溝1条、土坑15基、性格不明遺構1基である。遺物は、第Ⅲ層中からは主に古代、第Ⅳ層中からは古墳時代の遺物が出土している。

〔1〕古墳時代

(1)　溝

ＳＤⅢ201（第37図）

第２地区の中央部、Ｂ６～Ｄ６区に位置し、ＳＲⅢ001（弥生時代後期）を切り、第Ⅲ層が覆う。溝は近現代の削平によりそのほとんどが消失しているが、Ｂ６～Ｄ６区にて東西方向に、幅60cmの範囲で遺物がまとまって出土したことと、調査区東壁の土層観察から溝と判断した。溝の東端はトレンチに、西端は近現代坑に切られる。規模は、検出長8.5m、幅63cm、深さ26cmを測る。断面形態はⅢ状を呈し、埋土は褐灰色土単層である。遺物は須恵器片と土師器片が出土した。

出土遺物（第48図、図版24）

須恵器（Ⅲ037～043）Ⅲ037は坏蓋である。口縁部は直立気味に下がり、口縁端部は尖り気味である。内外面共に回転ナデ調整を施す。Ⅲ038は坏身である。たちあがりは低く内傾し、端部は尖る。受部は上外方にのびる。Ⅲ039は瓶、Ⅲ040は直口壺である。Ⅲ040は肩部がやや張り、沈線文間に刺突列点文を施す。Ⅲ041は甕である。口縁部は外反し、口縁端部は珠玉状をなす。頸部外面には「ノ」字状の沈線がある（ヘラ記号か？）。Ⅲ042は横瓶である。外面に平行タタキ後、カキ目調整を施す。Ⅲ043は無蓋高坏である。口縁部は坏底部から屈曲し、やや内湾して立ち上がる。口縁端部は尖り気味である。脚部は緩やかに開き、脚端部は平坦面をなす。坏部外面には沈線１条、脚部中位には２条の沈線と、上下二段の３方向からの透かしを施す。

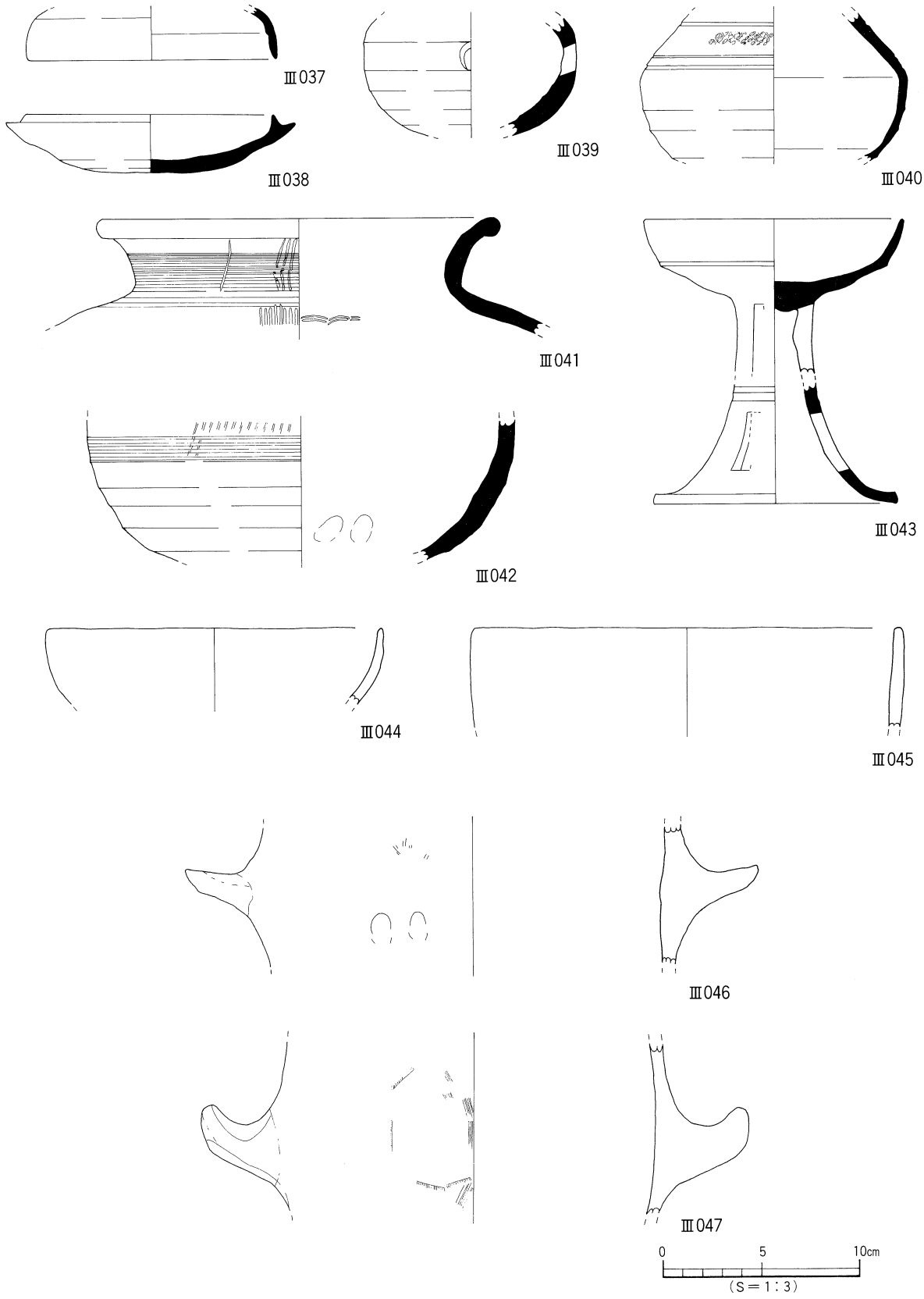
土師器（Ⅲ044～047）Ⅲ044は坏である。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸い。Ⅲ045～047は甑である。Ⅲ045は口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部は丸い。内面にはケズリ後ヨコナデ調整を施す。Ⅲ046・047は把手である。Ⅲ047は上方につまみ上げた後、端部は丸く仕上げる。

時期：出土した遺物の特徴と基本土層の第Ⅲ層（古代）が覆うことから、ＳＤⅢ201は７世紀前半の溝とする

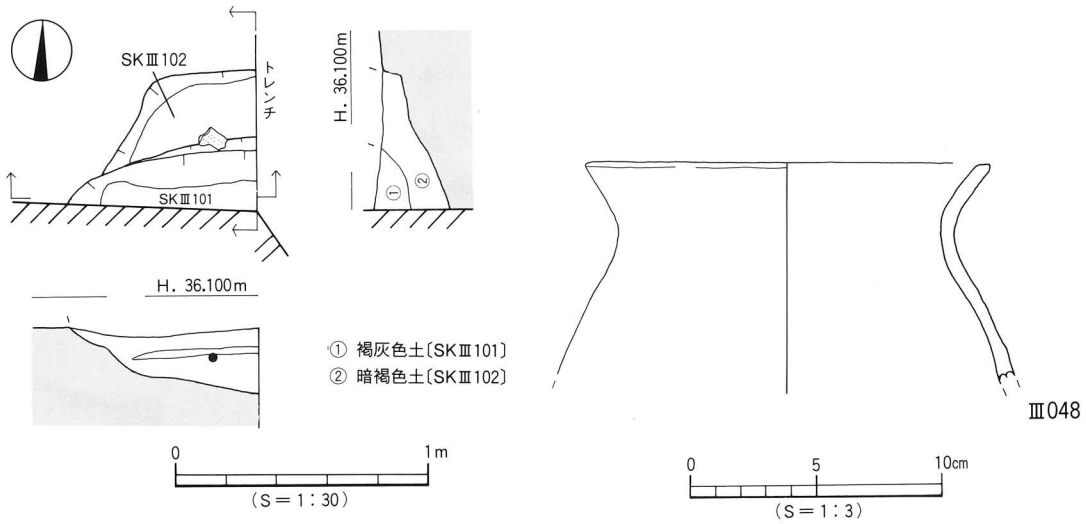
(2)　土　　坑

ＳＫⅢ102（第49図）

第１地区の南部、Ｂ１・２区に位置する。遺構上面は第Ⅳ層が覆い、壁体及び基底面はＳＲⅢ001、または第Ⅷ層に達する。遺構の南側はＳＫⅢ101（古代）、遺構の東側はトレンチに切られる。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長63cm、南北検出長26cm、深さ24cmを測る。断面



第48図　ＳＤⅢ201出土遺物実測図



第49図　ＳＫⅢ101・102測量図及び出土遺物実測図

形態は舟底状を呈し、埋土は暗褐色土の単層である。遺物は埋土上位から、土師器の甕形土器が出土した。

出土遺物

Ⅲ048は土師器の甕である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや内傾する面をなす。

時期：出土した遺物の特徴から、ＳＫⅢ102は古墳時代後期の遺構とする。

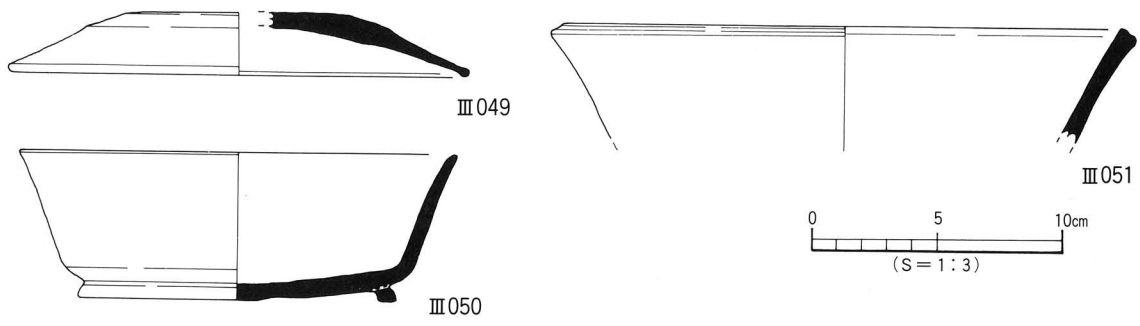
〔2〕古　　代

古代の遺構は、溝１条と土坑15基である。このうち、土坑は平面形態で３種類に分類できる。方形が１基、円形が５基、楕円形が９基となり、形態ごとに記述する。

(1)　溝

ＳＤⅢ302（第38図）

第３地区の中央部、Ｄ15区に位置する。ＳＫⅢ306・ＳＰⅢ368・ＳＰⅢ371に切られ、ＳＫⅢ312を切る。溝基底面は西から東に傾斜する（比高差20㎝）。規模は、検出長3.70ｍ、幅18～36㎝、深さ8～38㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土単層である。遺物は須恵器片が数点出土した。



第50図　ＳＤⅢ302出土遺物実測図

出土遺物（第50図）

Ⅲ049は須恵器坏蓋である。天井部は扁平で、口縁部は下方に垂下し、口縁端部は丸く仕上げる。Ⅲ050は有台坏である。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸く仕上げる。高台は体底部境界より内側に付き、体底部の境界は明瞭な稜をもつ。底部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。Ⅲ051は広口壺である。口縁部は上外方に立ち上がり、口縁端面はやや凹む。内外面には回転ナデ調整を施す。

時期：出土した遺物の特徴から、ＳＤⅢ302は８世紀前半の遺構とする。

(2) 土　坑

１）方形土坑

ＳＫⅢ101（第49図）

第１地区の南部、Ｂ１区に位置する。ＳＫⅢ102（古墳時代）を切り、遺構の東側はトレンチに切られ、南側は調査区外に続く。遺構上面は第Ⅲ層が覆う。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長74cm、南北検出長29cm、深さ15cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐灰色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：基本土層の第Ⅲ層が覆うことから、ＳＫⅢ101は古代以前の遺構とする。

２）円形土坑

ＳＫⅢ201（第51図）

第２地区の北部、Ｃ８区に位置する。第Ⅲ層除去後、ＳＸⅢ201上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径40cm、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐灰色土の単層である。遺物は埋土中にて土師器片が少量出土した。

出土遺物（第53図－Ⅲ052）

Ⅲ052は土師器の坏蓋である。口縁部はわずかに下方に垂下し、口縁端部は尖り気味である。

時期：出土した遺物の特徴から、ＳＫⅢ201は8世紀代の遺構とする。

ＳＫⅢ207（第51図）

第２地区の中央部、Ｂ７区に位置する。第Ⅲ層除去後、ＳＸⅢ201上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径44～46cm、深さ20cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗オリーブ灰色土の単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：基本土層の第Ⅲ層が覆うことから、ＳＫⅢ207は古代以前の遺構とする。

ＳＫⅢ208（第51図）

第２地区の東部、Ｃ７区に位置する。第Ⅲ層除去後、ＳＸⅢ201上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径45～52cm、深さ17cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗オリーブ灰色土の単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＫⅢ207と酷似することや、第Ⅲ層が覆うことから、ＳＫⅢ208は古代以前の遺構とする。

ＳＫⅢ303（第51図）

第３地区の中央部、Ｃ16区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径68～77cm、深さ26cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐灰色土の単層である。壁体及び基底面は第Ⅳ層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＫⅢ201と酷似することから、ＳＫⅢ303は古代の遺構とする。

ＳＫⅢ307（第51図）

第３地区の西部、Ｄ16区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径64cm、深さ27cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐灰色土の単層である。壁体及び基底面は第Ⅳ層である。遺物は埋土中から、土師器片と須恵器片が数点出土した。

出土遺物（第53図－Ⅲ053・054）

Ⅲ053は土師器の皿である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はそのままのびる。口縁端部は丸く仕上げる。Ⅲ054は須恵器甕の口縁部である。口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部はわずかに下方に肥厚する。口縁端部は丸い。

時期：出土した遺物の特徴から、ＳＫⅢ307は古代の遺構とする。

３）楕円形土坑

ＳＫⅢ104（第51図）

第１地区の北部、Ｂ４区に位置する。第Ⅳ層上面での検出であり、壁体下位と基底面はＳＲⅢ001（弥生時代）に達する。遺構の東側はトレンチに切られ、北側は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長21cm、南北検出長46cm、深さ79cmを測る。断面形態は擂鉢状を呈し、埋土は褐灰色土の単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＫⅢ303・307と酷似することから、ＳＫⅢ104は古代の遺構とする。

ＳＫⅢ202（第51図）

第２地区の北部、Ｄ８区に位置し、ＳＫⅢ203に切られる。第Ⅲ層除去後、ＳＸⅢ201上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は長径58cm、短径28cm、深さ17cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐灰色土単層である。遺物は埋土中から、土師器片と須恵器片が数点出土した。

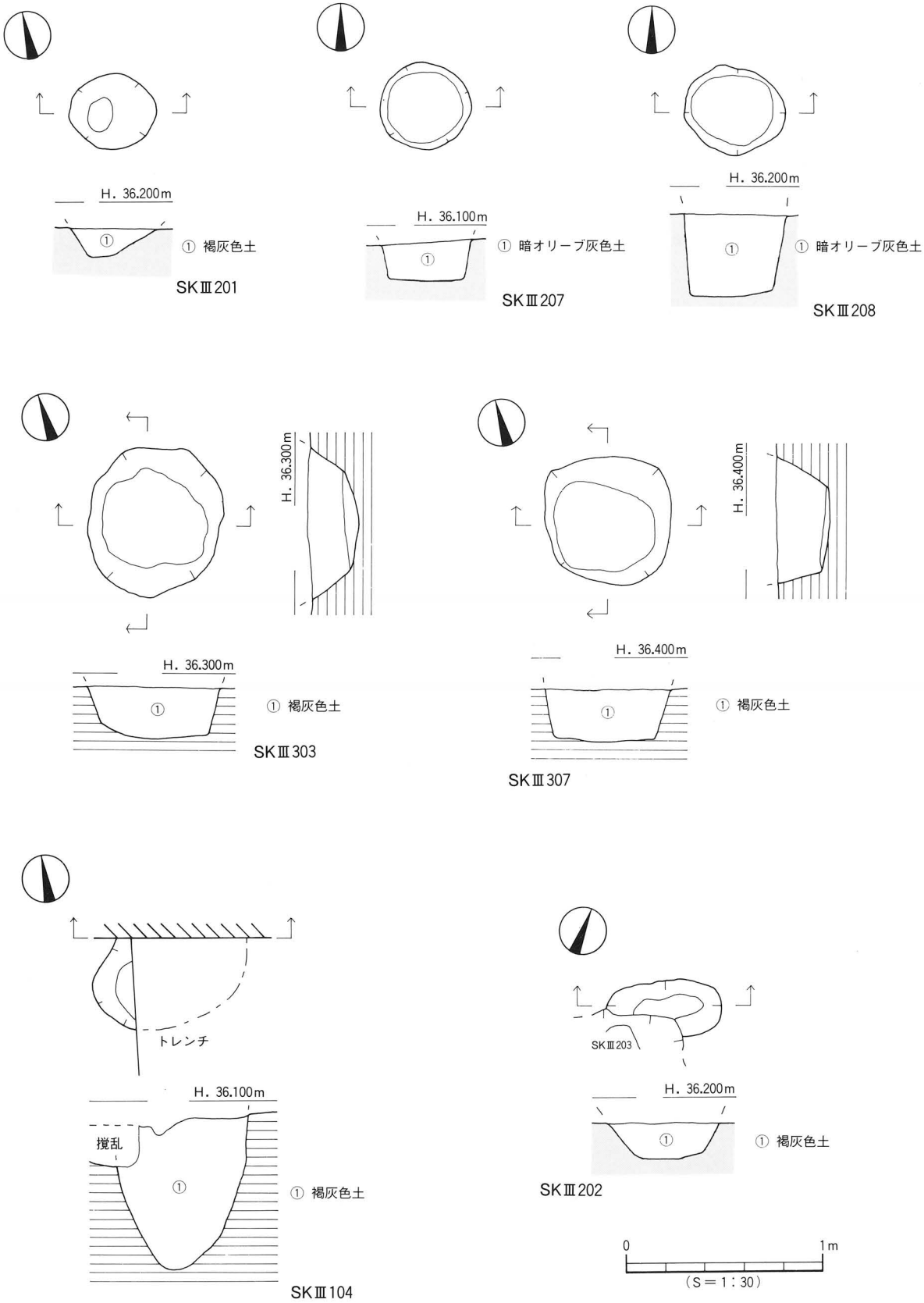
出土遺物（第53図－Ⅲ055～057）

Ⅲ055は土師器甕の口縁部である。口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。Ⅲ056・057は須恵器である。Ⅲ056は有台坏で、体部がやや内湾して立ち上がり、口縁部はそのままのびる。口縁端部は丸い。Ⅲ057は皿で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

時期：出土した遺物の特徴から、ＳＫⅢ202は古代（8世紀）の遺構とする。

ＳＫⅢ203（第52図）

第２地区の北部、Ｄ8区に位置し、ＳＫⅢ202を切る。第Ⅲ層除去後、ＳＸⅢ201上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径75cm、短径70cm、深さ19cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐灰色土の単層である。遺物は埋土中から、土師器片が数点出土した。



第51図　ＳＫ〔古墳時代～古代〕測量図(1)

出土遺物（第53図－Ⅲ058）

Ⅲ058は土師器甕の口縁部である。口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。

時期：出土した遺物の特徴とＳＫⅢ202を切ることから、ＳＫⅢ203は古代の遺構とする。

ＳＫⅢ204（第52図）

第２地区の中央部、Ｃ７区に位置する。第Ⅲ層除去後、ＳＸⅢ201上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径82cm、短径70cm、深さ14cmを測る。断面形態はⅢ状を呈し、埋土は暗オリーブ灰色土の単層である。遺物は埋土の下位から、土師器の細片と小石が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：埋土がＳＫⅢ207・208と酷似することから、ＳＫⅢ204は古代以前の遺構とする。

ＳＫⅢ205（第52図）

第２地区の東部、Ｂ７区に位置する。遺構の東側はトレンチに切られる。第Ⅲ層除去後、ＳＸⅢ201上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長89cm、東西検出長44cm、深さ45cmを測る。断面形態は擂鉢状を呈し、埋土は褐灰色土の単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＫⅢ303・307などと酷似することから、ＳＫⅢ205は古代の遺構とする。

ＳＫⅢ206（第52図）

第２地区の北部、Ｃ８区に位置する。第Ⅲ層除去後、ＳＸⅢ201上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径76cm、短径42cm、深さ13cmを測る。断面形態はⅢ状を呈し、埋土は褐灰色土の単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＫⅢ303・307などと酷似することから、ＳＫⅢ206は古代の遺構とする。

ＳＫⅢ305（第52図）

第３地区の西部、Ｄ15区に位置する。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.0m、短径72cm、深さ14cmを測る。断面形態はⅢ状を呈し、埋土は褐灰色土の単層である。遺物は埋土中から、土師器片が数点出土した。

出土遺物（第53図－Ⅲ059）

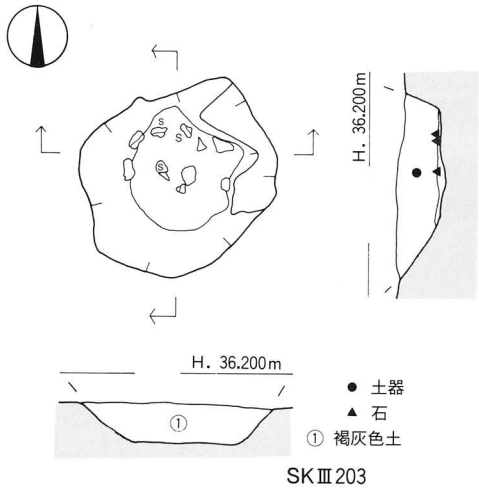
Ⅲ059は土師器坏である。体部は内湾して立ち上がり、内面にハケメ調整を施す。

時期：埋土がＳＫⅢ303やⅢ307などと酷似することから、ＳＫⅢ305は古代の遺構とする。

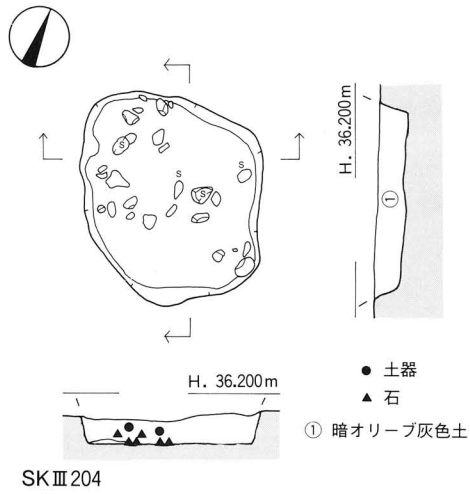
ＳＫⅢ308（第52図、図版22）

第３地区のＣ・Ｄ16区に位置する。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.42m、短径1.22m、深さ26cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐灰色土の単層である。

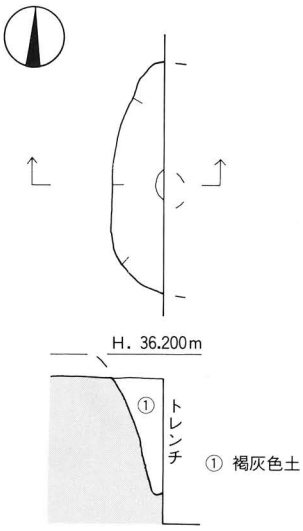
遺物は埋土中位と基底面にて、土師器片、須恵器片、径10cm大の石が１点出土した。



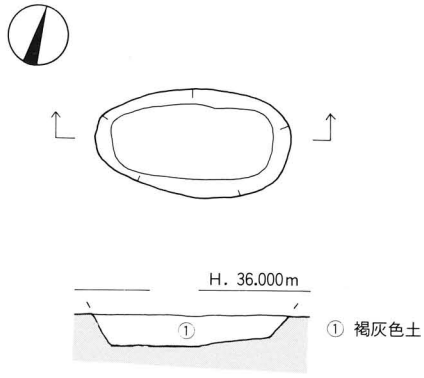
SKⅢ203



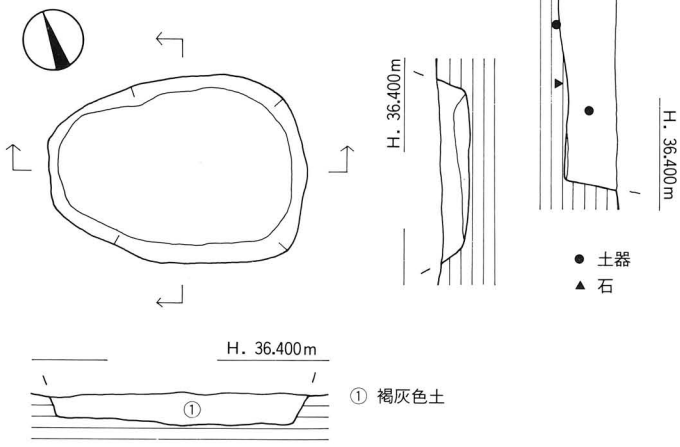
SKⅢ204



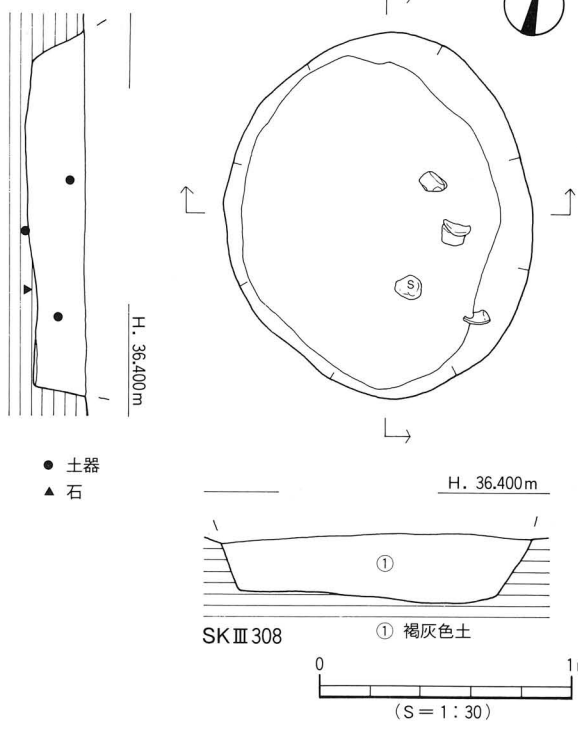
SKⅢ205



SKⅢ206



SKⅢ305



SKⅢ308

第52図　ＳＫ〔古墳時代～古代〕測量図(2)

出土遺物（第53図－Ⅲ060・061、図版24）

Ⅲ060は基底面出土の須恵器坏である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部付近でわずかに外反する。高台は「ハ」字状に開き、高台接地面はやや凹む。Ⅲ061は土師器甕の口縁部である。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部中位にやや厚みをもつ。口縁端部は平坦面をなす。

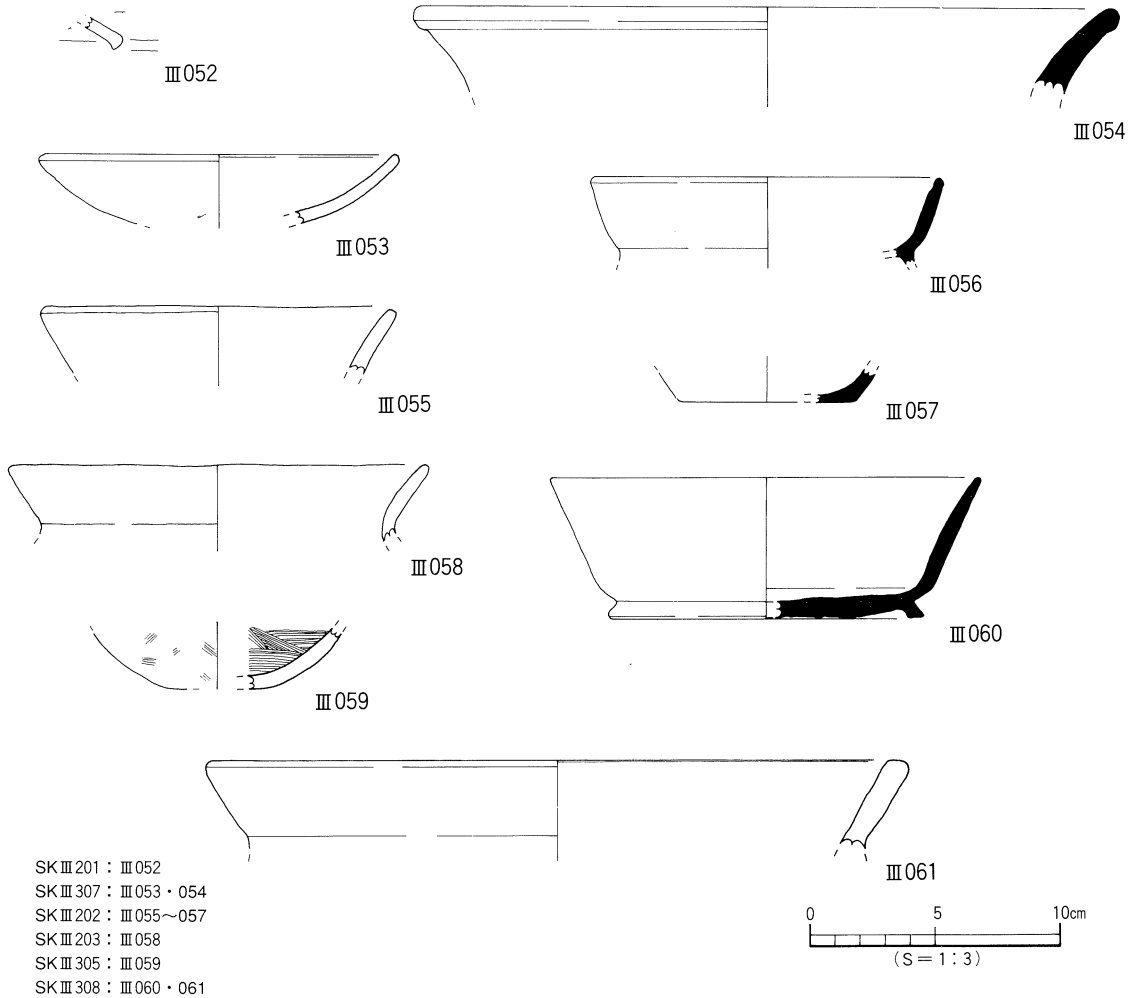
時期：出土した遺物の特徴から、ＳＫⅢ308は8世紀前半の遺構とする。

(3)　性格不明遺構

ＳＸⅢ201（第54図）

第２地区北側、Ｂ７～Ｄ８区に位置する。遺構上面は第Ⅲ層が覆い、下面はＳＲⅢ001に達する。遺構の性格が断定しえないため、性格不明遺構として扱った。平面形態は不定形を呈し、深さ60～80cmを測る。基底面は凹凸が著しい。遺構北西部上面にて、ＳＫⅢ206（古代）を検出した。遺構南側壁体は斜め方向に立ち上がる。埋土は第Ⅳ層に類似する灰オリーブ色（5Y5/3）土単層である。遺構内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、明確な時期判断はしかねるが、第Ⅲ層が覆うことから、ＳＸⅡ201は古代以前の遺構とする。



第53図　ＳＫ出土遺物実測図

〔3〕第Ⅲ層・第Ⅳ層出土遺物

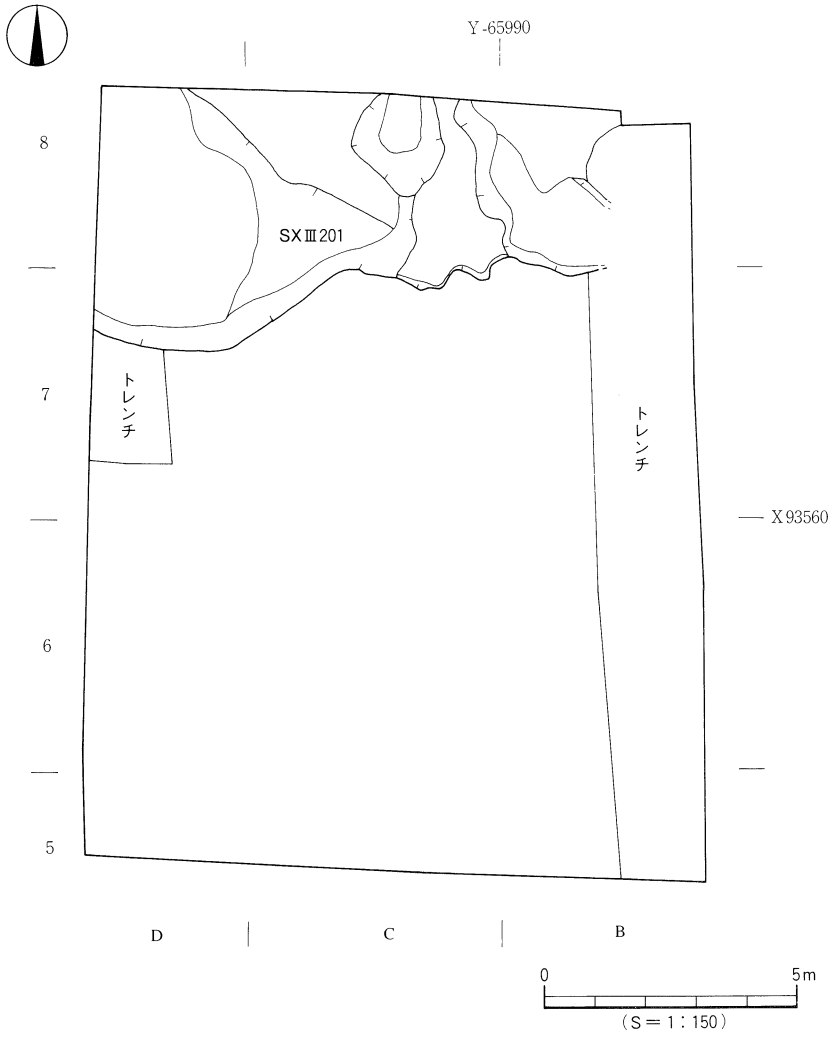
Ⅲ区の調査では、第Ⅲ層と第Ⅳ層中から古墳時代～古代の遺物が出土した。このうち第Ⅲ層中からは、畿内産と考えられる土師器と緑釉陶器が1点ずつ出土している。

1）第Ⅲ層出土遺物（第55・56図、図版25）

Ⅲ062～068は第1地区、Ⅲ069～081は第2地区、Ⅲ082～094は第3地区出土品である。

①第1地区出土品（Ⅲ062～068）

須恵器（Ⅲ062～067）Ⅲ062・063は坏蓋の口縁部で、Ⅲ062は天井部が扁平で、口縁部はなだらかに下がる。口縁部は下方に垂下し、口縁端部は尖り気味である。口縁端面は凹む。Ⅲ063は口縁端部が尖り気味である。口縁内面には断面三角形状の短いかえりが付く。Ⅲ064・065は坏である。Ⅲ064は有台坏で、高台は体底部の境界より内側に付き「ハ」字状に開く。Ⅲ065は口縁部が直線的に上外方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。Ⅲ066は甕である。頸部は外反して、口縁部は水平に延びる。Ⅲ067は短頸壺である。口縁部は短く直立し、口縁端部は丸い。

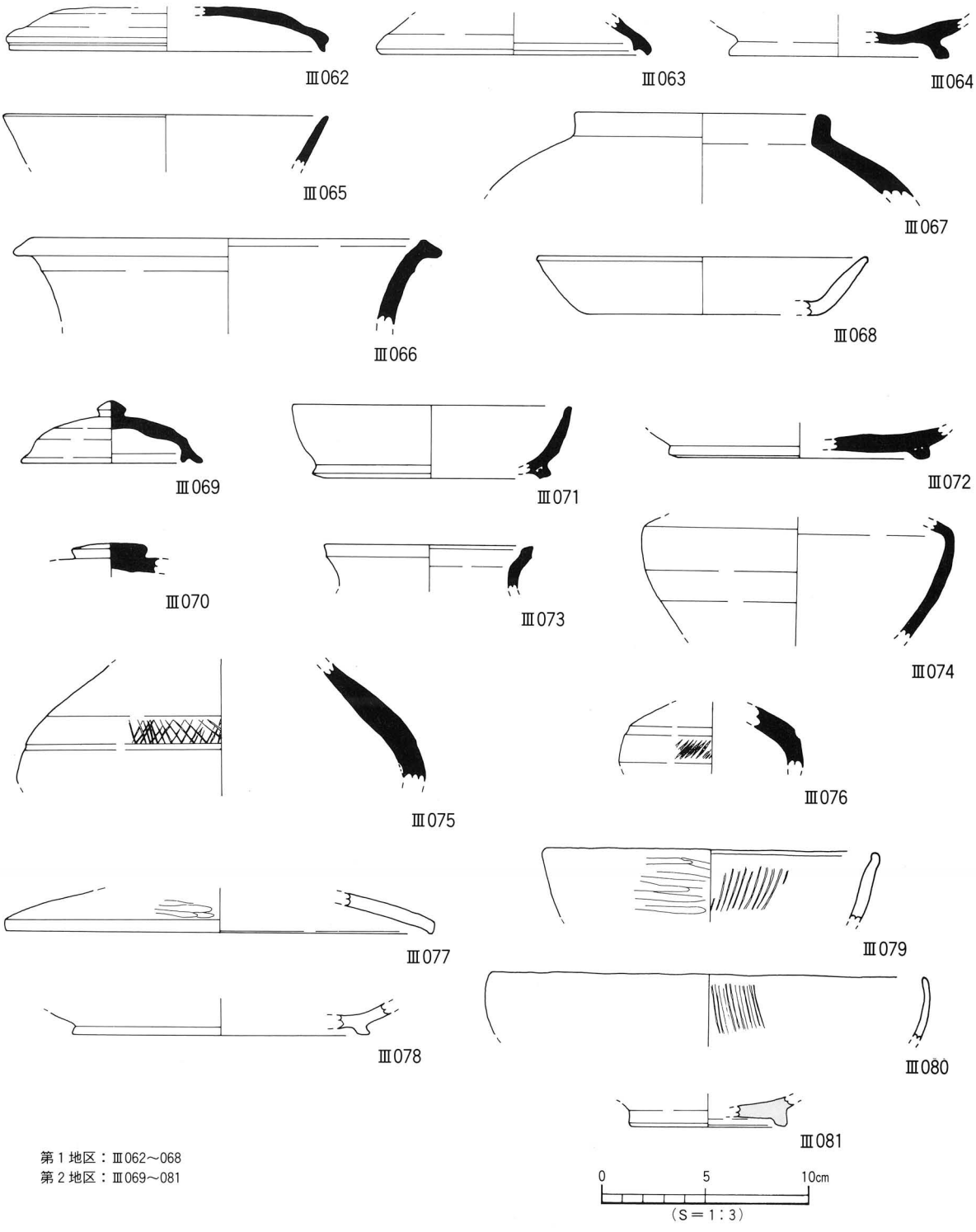


第54図　ＳＸⅢ201測量図

土師器（Ⅲ068）Ⅲ068は坏である。体部は外傾して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。体部中位はやや膨らみをもつ。

②第２地区出土品（Ⅲ069～081）

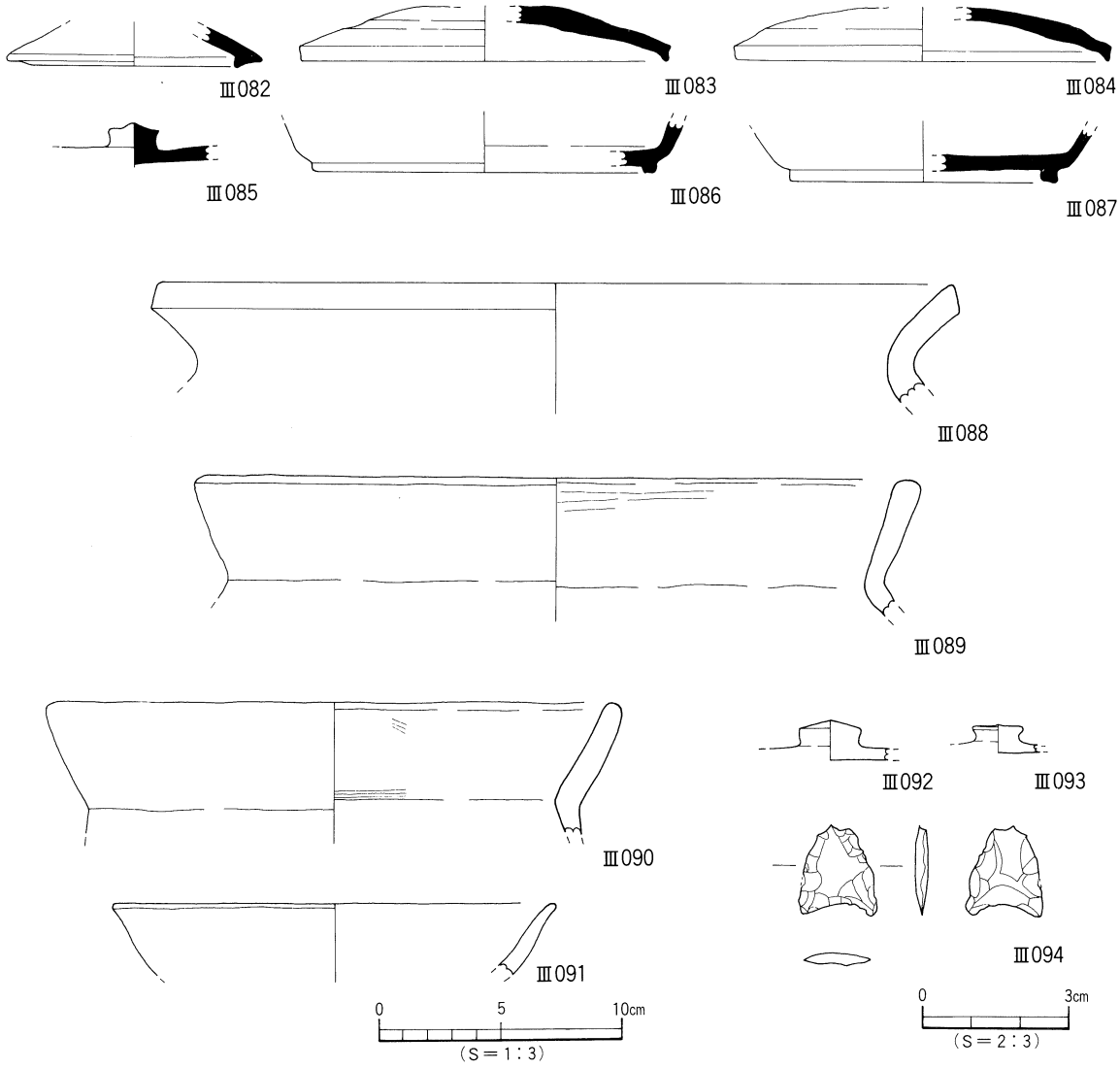
須恵器（Ⅲ069～076）Ⅲ069・070は坏蓋で、Ⅲ069は天井部が笠形で、口縁部は下外方に屈曲する。口縁端部は尖り気味である。かえりは断面三角形で、口縁端部と同じ位置で接地する。Ⅲ070はつま



第55図　第Ⅲ層出土遺物実測図(1)

みで、上部は平坦になる。Ⅲ071・072は有台坏である。Ⅲ071は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。高台は体底部境界付近に付き「ハ」字状に開く。Ⅲ073～075は壺である。Ⅲ073は短頸壺、Ⅲ074・075は長頸壺になる。Ⅲ073は頸部が外反して、口縁部は上方に立ち上がる。口縁端部は内傾し、面をなす。Ⅲ074は肩部が強く張り、内外面には稜をもつ。内面は回転ナデ調整、外面は、底部に回転ヘラケズリ調整を施す。Ⅲ075は肩部の張りが弱く、斜格子目文と沈線1条を施す。Ⅲ076は甕である。体部は扁球形で、沈線文間には刺突列点文を施す。

土師器（Ⅲ077～080）Ⅲ077は坏蓋で、口縁部はやや下方に屈曲し、口縁端部は平坦面をなす。外面には丁寧なヘラミガキ調整を施す。色調は乳赤橙色である。Ⅲ078は有台坏で、貼り付けの輪高台をもち、高台は体底部境より内側に付く。Ⅲ079は坏で、口縁部は直線的に上外方に立ち上がり、口縁内面は内側にやや肥厚する。口縁端部は丸く仕上げる。体部内面には放射状の暗文、外面には横方向のヘラミガキ調整を施す。形態や暗文手法から、畿内産土師器坏Aに相当するものと考えられる（平城Ⅲ式）。Ⅲ080は椀で、口縁部が内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。内面に暗文状の沈線を施す。



第56図　第Ⅲ層出土遺物実測図(2)

緑釉陶器（Ⅲ081）Ⅲ081は緑釉陶器の椀である。断面三角形状の削り出しによる高台をもつ。胎土は灰色を呈し、硬質である。内外面共に薄緑色の釉が施釉される。京都産。9世紀後半。

③第3地区出土品（Ⅲ082～094）

須恵器（Ⅲ082～087）Ⅲ082～085は坏蓋で、Ⅲ082は断面三角形のかえりが付き、かえりは口縁端部より下がる。Ⅲ083・084は天井部が扁平で、口縁部は下方に屈曲し、口縁端部は尖り気味になる。Ⅲ085は擬宝珠様つまみである。Ⅲ086・087は有台坏で、高台は体底部境よりやや内側に付く。高台接地面は凹む。

瓦質土器（Ⅲ088）Ⅲ088は瓦質の甕形土器である。口縁部は外反して、口縁端部は平坦面をなす。

土師器（Ⅲ089～093）Ⅲ089・090は甕形土器である。口縁部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。頸部内外面には不明瞭な稜をもつ。Ⅲ091は坏である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸く仕上げる。Ⅲ092・093はつまみである。Ⅲ092は擬宝珠様つまみで、上部がやや突出する。

石鏃（Ⅲ094）Ⅲ094は正三角形を呈する凹基無茎石鏃である。刃部は一部欠損する。サヌカイト製。

2）**第Ⅳ層出土遺物**（第57～59図、図版25・26）

Ⅲ095～112は第1地区、Ⅲ113～129は第2地区、Ⅲ130～139は第3地区出土品である。

①第1地区出土品（Ⅲ095～112）

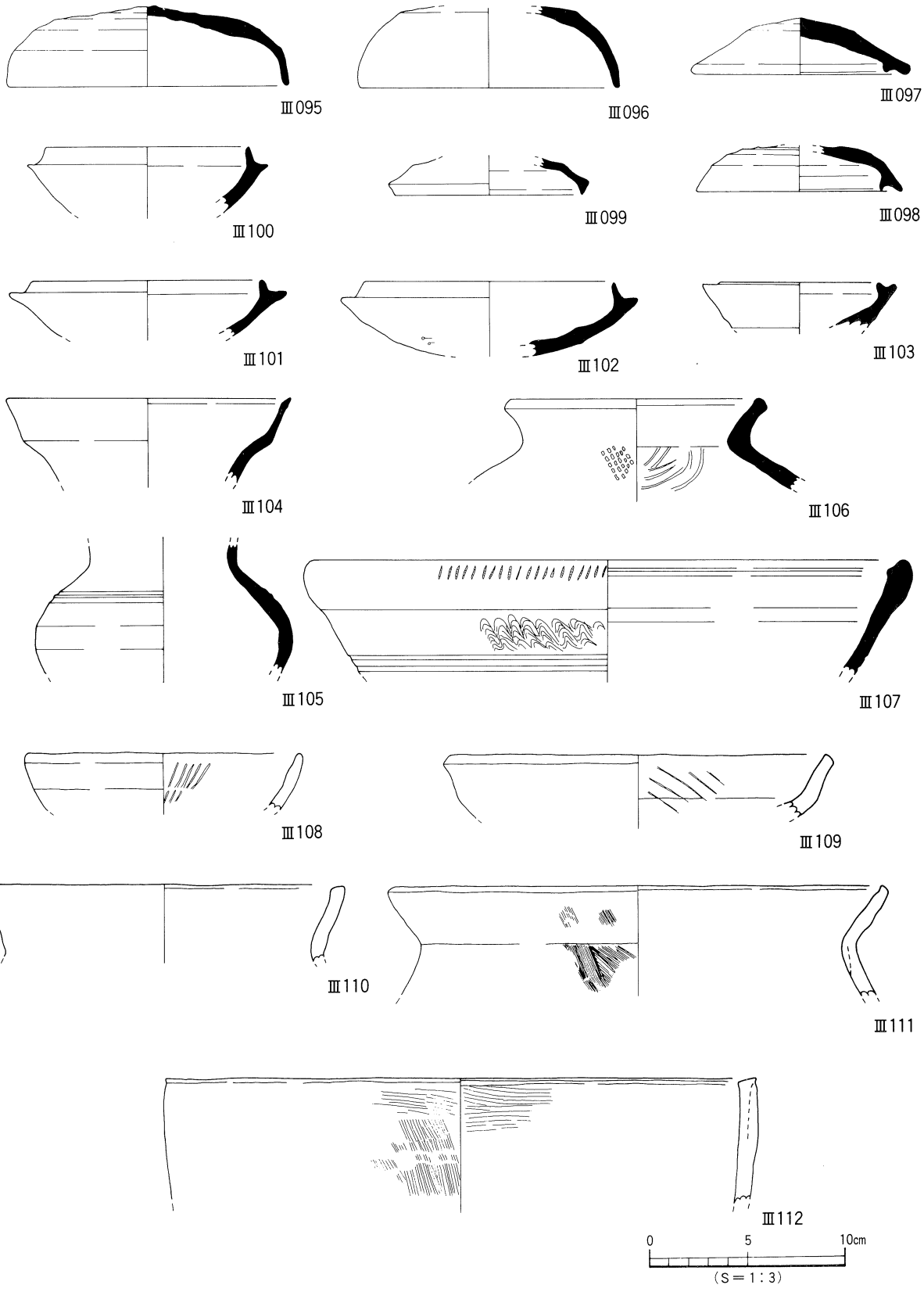
須恵器（Ⅲ095～107）Ⅲ095～099は坏蓋で、Ⅲ095・096は天井部が扁平で、口縁部は丸みをもって直立気味に下がる。口縁端部は丸く仕上げる。Ⅲ097は天井部が笠形で、口縁端部は丸く仕上げる。Ⅲ098は天井部がやや扁平で、口縁部は下外方に下がる。口縁端部は尖り気味である。Ⅲ097・098は断面三角形のかえりが付き、かえりは口縁端部と同じ位置で接地する。Ⅲ099は口縁部が下内方に屈曲し、口縁端部は尖る。Ⅲ100～103は坏身で、Ⅲ100～102は、たちあがりが低く内傾し、端部は尖り気味である。受部は上外方にのびる。Ⅲ103はたちあがりが短く内傾する。Ⅲ104は瓶で、頸部は外反し、口縁部は上外方にのびる。口縁端部は内傾し面をなす。Ⅲ105は長頸壺で、体部は扁球形で、頸部は上方にのびる。肩部に沈線2条を施す。Ⅲ106・107は甕で、Ⅲ106は口縁部は外反し、口縁端部は丸い。胴部内面には円弧タタキ、外面には平行タタキを施す。Ⅲ107は刺突文、波状文、沈線文を施す。

土師器（Ⅲ108～112）Ⅲ108・109は坏で、Ⅲ108は口縁部がわずかに内湾して立ち上がり、口縁端部は丸い。Ⅲ109は体部が内湾して立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は外傾し面をなす。Ⅲ108・109共に体部内面に暗文状の沈線がみられる。Ⅲ110・111は甕形土器で、口縁部は内湾し、Ⅲ110は口縁端部が内傾し、面をなす。口縁部内面には不明瞭な稜をもつ。Ⅲ112は甑で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は平坦面をなす。内外面共にハケメ調整を施す。

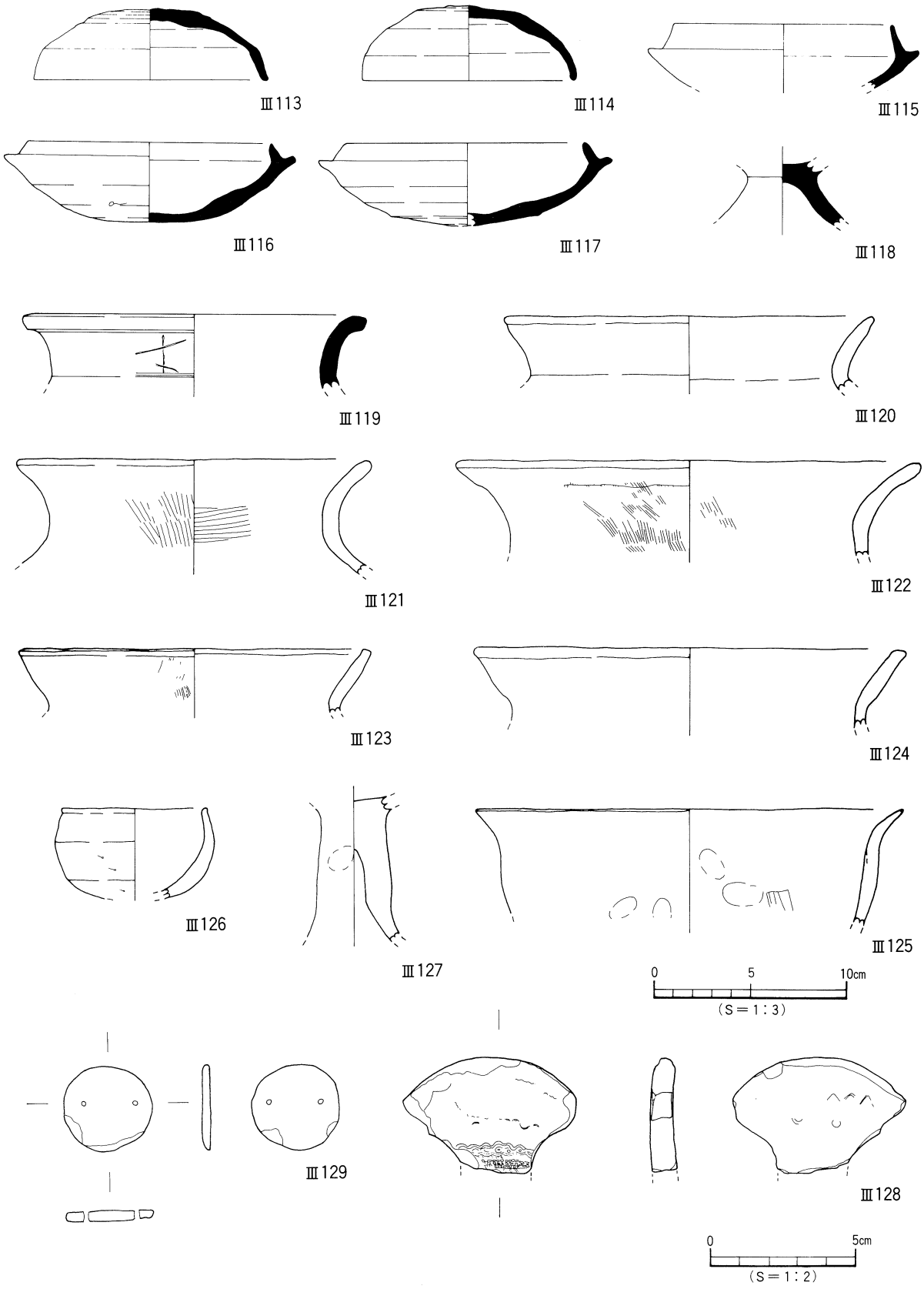
②第2地区出土品（Ⅲ113～129）

須恵器（Ⅲ113～119）Ⅲ113・114は坏蓋で、天井部は丸みをもち、口縁部はなだらかに下がる。口縁端部は丸く仕上げる。Ⅲ115～117は坏身で、Ⅲ115はたちあがりが長く、端部は丸く仕上げる。Ⅲ118は高坏の脚部である。柱部は「ハ」字状に開き、内外面には回転ナデ調整を施す。Ⅲ119は広口壺で、口縁部は外反し、口縁端部は珠玉状に仕上げる。頸部外面には「メ」字状の沈線がある（ヘラ記号か）。

土師器（Ⅲ120～127）Ⅲ120～124は甕形土器で、Ⅲ120～122は口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸く仕上げる。Ⅲ123・124は内湾して立ち上がり、口縁端部は面をなす。Ⅲ125は鉢で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸い。体部内面にはケズリ調整を施す。



第57図　第Ⅳ層出土遺物実測図(1)

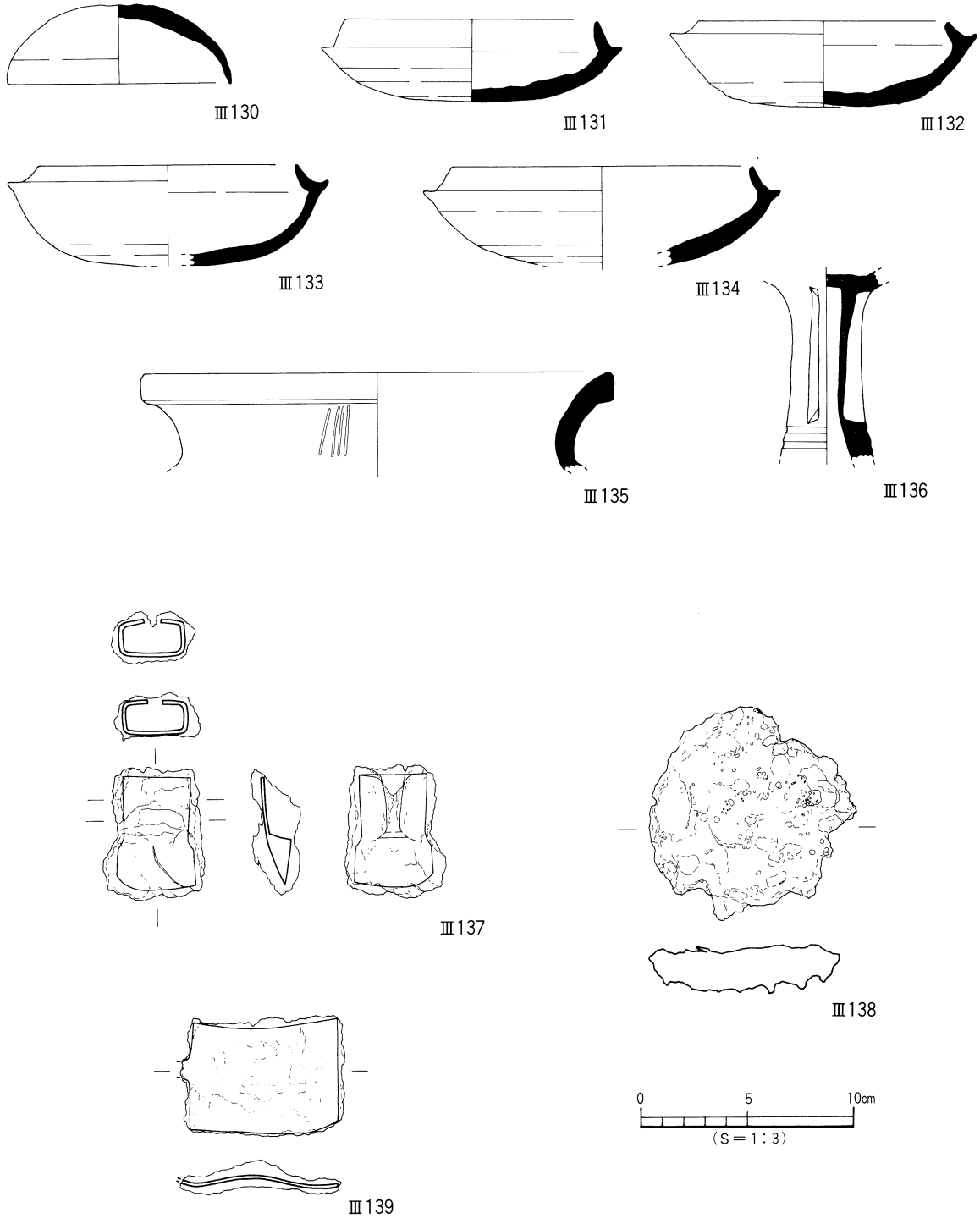


第58図　第Ⅳ層出土遺物実測図(2)

Ⅲ126は椀で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く外反する。Ⅲ127は高坏の脚部である。柱部は円筒状で、内外面はナデ調整を施す。

分銅形土製品（Ⅲ128）Ⅲ128は分銅形土製品の上半部である。形状は円形を呈し、左右にくびれ部をもつ。最大厚は1.2cmを測る。表面には竹管文と刺突文がわずかに残る。

有孔円板（Ⅲ129）Ⅲ129は滑石製の有孔円板である。表・裏面共に丁寧な研磨を施す。径１㎜大の孔を2ヶ穿つ。径2.9cm、厚さ3.2㎜を測る。



第59図　第Ⅳ層出土遺物実測図(3)

③第３地区出土品（Ⅲ130～139）

須恵器（Ⅲ130～136）Ⅲ130は坏蓋で、天井部は丸みをもち、口縁部は緩やかに下方に下がる。口縁端部は内傾する。Ⅲ131～134は坏身で、たちあがりは内傾し、端部は尖り気味である。受部は上外方にのびる。Ⅲ135は広口壺で、口縁部は外反し、口縁端部はやや下方に肥厚する。頸部に平行タタキ調整を施す。Ⅲ136は高坏の脚部である。柱部には沈線２条と3方向からの透かしを施す。

鉄器（Ⅲ137～139）Ⅲ137は袋状鉄斧である。長さ5.2cm、刃部幅3.7cmを測る。全面に錆が厚く付着する。着柄部の横断面形は長方形状を呈する。有肩で、刃部には使用による目減りが認められる。Ⅲ138は椀型滓である。形状は円形を呈し、径9.0～9.5cm、厚さ1.5～1.8cmを測る。表面には径1～2mm大の小さな気泡の痕跡が多くみられ、白色砂粒が部分的に混入する。裏面は、突起状に鉄の垂れた痕跡が残り、器表面は凹凸が著しい。Ⅲ139は板状の鉄斧である。長さ6.8～7.5cm、幅4.8～5.0cm、厚さ1～1.5mmを測る。形状は波状に湾曲し、左側面には一部に突出部をもつ。

５．弥生時代の遺構と遺物

Ⅲ区では、弥生時代の遺構は自然流路1条を検出した。平面調査は実施しておらず、調査壁沿いに設定したトレンチの土層観察により確認したものである。第１地区と第２地区で検出した流路であるため、遺構名は地区名を省略し、ＳＲⅢ001と呼称した。遺物は、第Ⅷ層中及びトレンチ内から、弥生時代前期末～中期初頭及び後期に時期比定される土器が出土している。

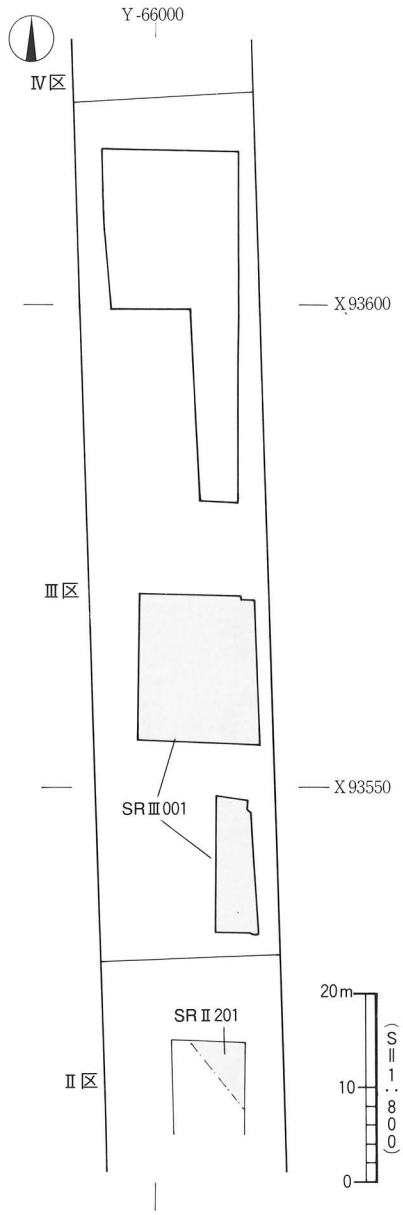
(1)　自然流路

ＳＲⅢ001（第60図）

第１地区と第２地区で検出した自然流路で、調査区ほぼ全域に存在する。流路上面は第Ⅳ層が覆い、流路下面は第Ⅷ層に達する。流路の想定範囲を第60図に掲載した。埋土は灰色（7.5Y6/1）の砂礫層で、2～5cm大の小礫と砂を含む。流路最深部は60cmの堆積を測る。検出状況や堆積物などから、Ⅱ区検出の流路ＳＲⅡ201と同一の流路と考えられ、南東－北西方向に流れているものと推測される。流路内からは弥生土器片が数点出土したが、いずれも磨滅が著しい。

出土遺物（第61図－Ⅲ140～142、図版26）

Ⅲ140は甕形土器である。「く」の字状口縁で、内外面共にハケメ調整を施す。Ⅲ141は壺形土器の頸部片。頸部には凸帯を貼り付け、凸帯上には格子目文を施す。Ⅲ142は壺形土器の底部である。外面にハケメ調整を施す。



第60図　ＳＲⅢ001状況図

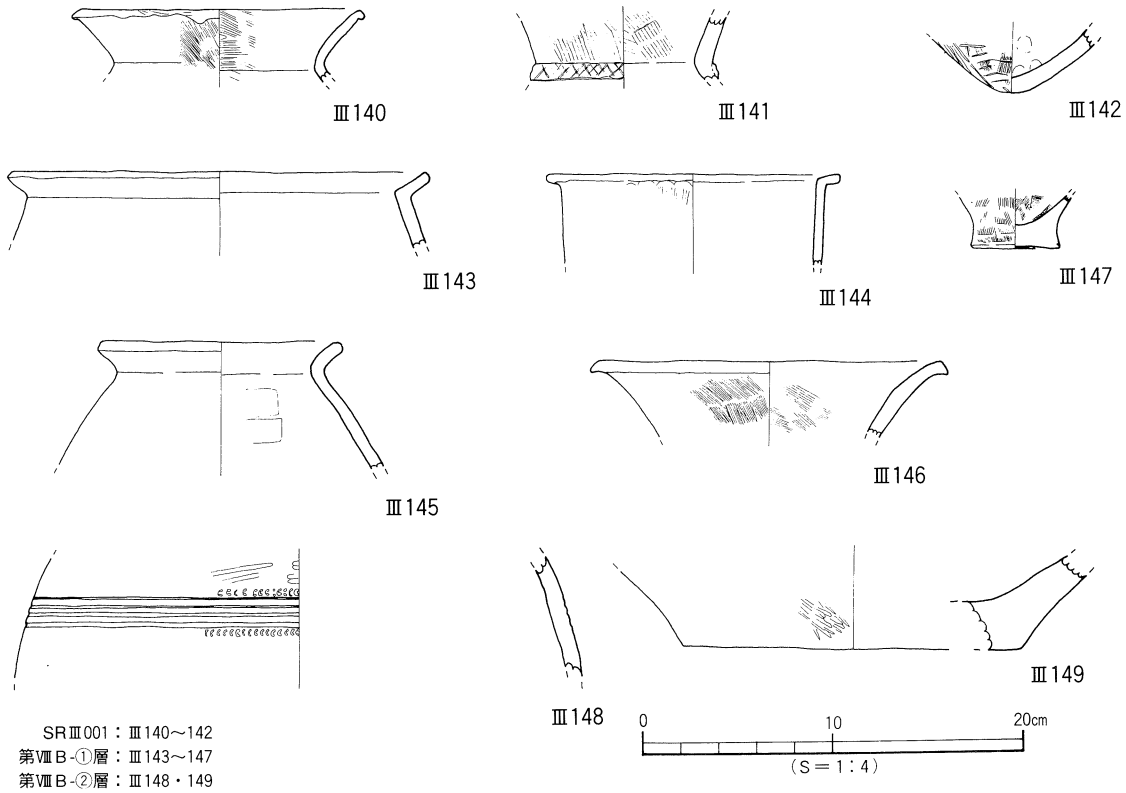
時期：出土した遺物は、弥生時代後期後半の特徴を示している。よって、ＳＲⅢ001は弥生時代後期後半の流路とする。

(2) 第Ⅷ層出土遺物（第61図－Ⅲ143～149、図版26）

第Ⅷ層中からは、弥生時代に時期比定される遺物が数点出土した。Ⅲ区検出の第Ⅷ層は石手川の氾濫により堆積した河川氾濫堆積物である。礫径や堆積状況の違いより2種類の堆積物に分類される（ⅧＢ-①・ⅧＢ-②層）。ⅧＢ-①層は第１地区と第３地区で検出され、灰白色（7.5Y8/2）の砂礫層で構成される。一方、ⅧＢ-②層は第１地区に限られ、上面はⅧＢ-①層が覆う。両者は、検出状況からⅡ区で検出したⅧＢ-①・ⅧＢ-②層にそれぞれ相当するものと考えられる。ⅧＢ-①層中からは主に弥生時代中期～後期、ⅧＢ-②層中からは弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される遺物が出土している。

１）**ⅧＢ-①層出土品**（Ⅲ143～147）：Ⅲ143・144は甕形土器である。Ⅲ143は「く」字状口縁を呈し、口縁部内面には明瞭な稜をもつ。Ⅲ144は逆「Ｌ」字状口縁を呈するもので、胴部は無文である。Ⅲ145は口縁部が緩やかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。Ⅲ146は壺形土器である。頸部は大きく外反し、口縁部は下外方にやや垂下する。内外面は細かなハケメ調整を施す。Ⅲ147は甕形土器の底部で、平底となる。

２）**ⅧＢ-②層出土品**（Ⅲ148・149）：Ⅲ148は壺形土器の胴部片である。沈線文４条と、沈線文の上下にそれぞれ半截竹管文を１列施す。Ⅲ149は壺形土器の底部片で、平底になる。



第61図　ＳＲⅢ001・第Ⅷ層出土遺物実測図

(3)　トレンチ出土遺物（第62図、図版26）

第１地区と第３地区では、トレンチ内から弥生土器が少量出土している。

第１地区出土品（Ⅲ150～153）：Ⅲ150は甕形土器である。口縁部は逆「Ｌ」字状を呈し、口縁部下には断面三角形状の凸帯を貼り付ける。口縁端面と凸帯上には刻目を施す。弥生中期前半。Ⅲ151は複合口縁壺の口縁部である。口縁拡張部にはクシ描き波状文16条（３条１組）を施す。弥生後期。Ⅲ152は壺形土器の胴部である。ヘラ描き沈線文１条以上と刺突文を施す。弥生前期末。Ⅲ153は器台形土器の口縁部である。口縁端部は下方に垂下する。弥生後期。

第３地区出土品（Ⅲ154）：Ⅲ154は支脚形土器である。脚部は緩やかに開き、脚端部は平坦面をなす。外面には叩きを施す。弥生後期。

６．その他の遺構と遺物

Ⅲ区では、第Ⅳ層上面にてピット142基を検出した。ピット内からの遺物は僅少で、時期特定が困難であるため、ここでは、その他の遺構と遺物として取り扱っている。

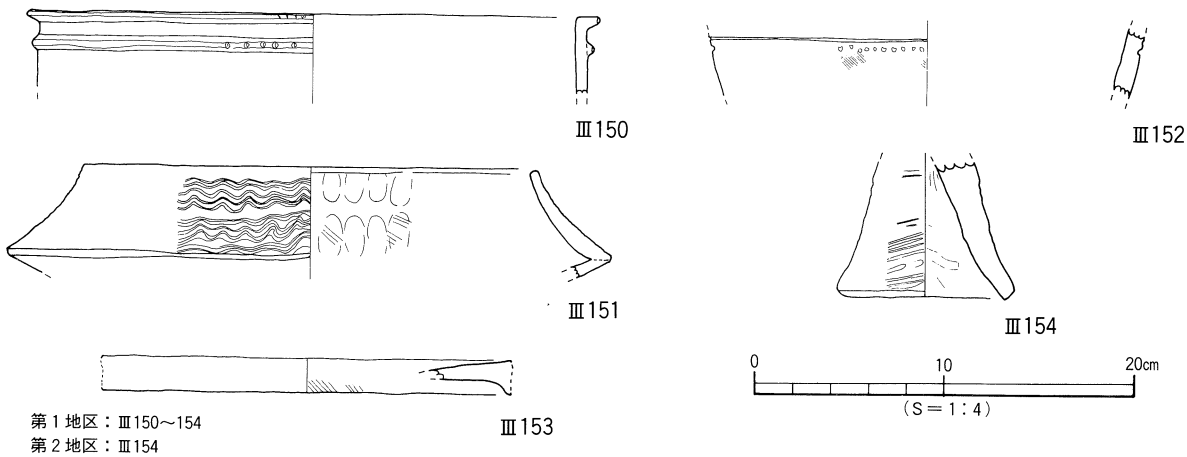
ピットは第１地区では検出されず、第２地区で11基、第３地区で131基を検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は最小径10×15cm、最大径60×80cmである。埋土の違いにより３種類に分類される（Ａ・Ｂ・Ｃ類）。

Ａ類：62基（第２地区－４基、第３地区－58基）あり、埋土は灰色土である。第２地区では調査地区中央やや南寄り、第３地区では調査地区中央部から北側に点在する。

Ｂ類：47基（第２地区－７基、第３地区－40基）あり、埋土は褐灰色土である。第２地区では調査地区南西部、第３地区では調査地区中央部から南側に点在する。

Ｃ類：33基あり、すべて第３地区で検出した。埋土は灰オリーブ色土である。第３地区北半部に点在する。

各ピットは、出土遺物が僅少であるが、埋土からあえて時期を求めるならば、Ａ類は中世、Ｂ類は古代、Ｃ類は古墳時代の可能性が高い。



第62図　トレンチ出土遺物実測図

7．小　結

Ⅲ区の調査では、弥生時代前期末から中世までの遺構と遺物を確認した。層位では、第Ⅰ層から第Ⅳ層と第Ⅷ層を検出した。

(1) 層　位

Ⅲ区では、第Ⅱ層中世、第Ⅲ層古代、第Ⅳ層古墳時代の遺物包含層と第Ⅷ層砂礫層を検出した。

砂礫層は、道後地区の基盤面である洪積礫層の上に形成された、自然流路や河川氾濫堆積物である。自然流路は小規模で、第１地区と第２地区で確認できた。第１地区では第Ⅳ層下面から1.5ｍの地点まで掘り下げたが、Ⅰ区やⅡ区で検出した第Ⅸ層洪積礫層は確認できなかった。

第Ⅷ層上面は、第３地区が最も高く、第１地区に向かって緩傾斜している。このうち、第３地区南部から第２地区北部までと、第３地区北部からⅣ区までは地形が凹んでおり、その地点には第Ⅳ層が厚く堆積していた。一方、砂礫が盛り上がっている第１・第２地区と第３地区中央部では第Ⅳ層の堆積が薄く、遺構検出面である第Ⅳ層上面では、砂礫層が露出する状況にあった。

第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅳ層は砂礫層に起因して、第３地区から第１地区に向かって緩傾斜をなす。第２地区と第３地区南部には、第Ⅱ層が堆積しておらず、これは、近現代の削平によるものである。

(2) 遺構・遺物

Ⅲ区で検出した遺構は、弥生時代後期から中世までのものである。

１）中世：中世の遺構は掘立柱建物址４棟、溝２条、土坑８基、柵列１条を検出した。第３地区検出の掘立柱建物址は１間×２間規模の南北棟で、建物方位をほぼ真北にとる。また、掘立柱建物址の東側では柵列が検出されている。これらの建物は規模が小さいことや、Ⅰ区とⅡ区で水田址や畑址が検出されていることから、農民や一般庶民の住居の可能性を考えている。

調査区の北部で検出したＳＤⅢ301は、ほぼ真北方向に南北に延びる溝が、南側は途中で消滅する。Ⅲ区の北側に隣接するⅣ区ではこの溝は検出されていないため、平面形状は分からない。埋土は砂粒は含んでおらず、溝の性格は現段階では判断できなかった。

２）古代：古代の遺構は溝１条と土坑16基がある。ＳＤⅢ302は検出長４ｍで、北西から南東方向に延びるが、途中で消滅する。埋土は砂粒を含んでおらず、溝の性格は判断できなかった。土坑は、平面形態が円形を呈するものが数多く検出された。ＳＫⅢ308からは８世紀代の高台付坏が出土し、復元すると完形になった。

また、第Ⅲ層中からは７～10世紀代の遺物が出土した。このなかには、畿内産と考えられる土師器（平城Ⅲ式に相当）と緑釉陶器が１点ずつ含まれている。

３）古墳時代：古墳時代の遺構は溝1条と土坑１基がある。ＳＤⅢ201は東西方向に延びる溝である。溝の掘り方は削平により消失し、遺物が溝基底面に沿って出土した。埋土は砂粒は含んでおらず、溝の性格は判断できなかった。

４）弥生時代：弥生時代の遺構は自然流路１条を検出した。ＳＲⅢ001は検出状況から、Ⅱ区検出のＳＲⅡ201と同一の流路と考えられる。流路内からは弥生時代後期後半の遺物が出土している。このほか、第Ⅷ層中からは弥生時代前期末～後期の遺物が少量出土している。

Ⅲ区は、弥生時代には土地が安定しておらず、人々が生活しうる土地ではなかったことがわかる。

第6章

Ⅳ区の調査

第6章　Ⅳ区の調査

1．調査の経緯（第63図、図版27）

Ⅳ区は、調査地の中央部やや北側に位置し、調査以前はマンションの駐車場であった。調査対象地は松山市岩崎町２丁目６－10内にあたり、幅18m、長さ52m、調査対象面積936㎡である。国土座標はX93622～93677、Y-65985～-66006の地域になる。調査区の中央部には東西方向に地下ケーブルが通っていたため、その部分を除いて、南から第１地区、第２地区に小区分した。調査は第２地区、第１地区の順で実施し、排土置き場は各々、第１地区、第２地区を使用した。調査区がマンションに近接していることから、調査中はマンション住人に対しての安全対策には万全を基した。

以下、調査工程を略記する。なお、各地区の調査面積と調査期間は表10のとおりである。

〔調査工程〕

① 調査は第２地区から開始した。重機にて表土から第Ⅲ層までを除去し、第Ⅳ層上面にて遺構検出を行った。その結果、掘立柱建物址や溝、土坑を検出した。

② 遺構の掘り下げを行い、測量や写真などの記録をとる。

③ 第２地区の調査が終了した後、埋め戻しを行い、同時に第１地区の掘削を開始する。

④ 第２地区と同様、第Ⅳ層上面にて遺構検出をした後、各遺構の掘り下げを行う。

⑤ 測量と完掘状況の写真撮影が終了した後、各調査区の東壁とそれに直交する深掘りトレンチを設定し、第Ⅳ層以下の土層確認を行った。

表10　調査地区一覧

地　区	対象面積（㎡）	調　査　期　間
1	450	平成９年４月１日～平成９年６月10日
2	486	平成９年６月11日～平成９年８月７日

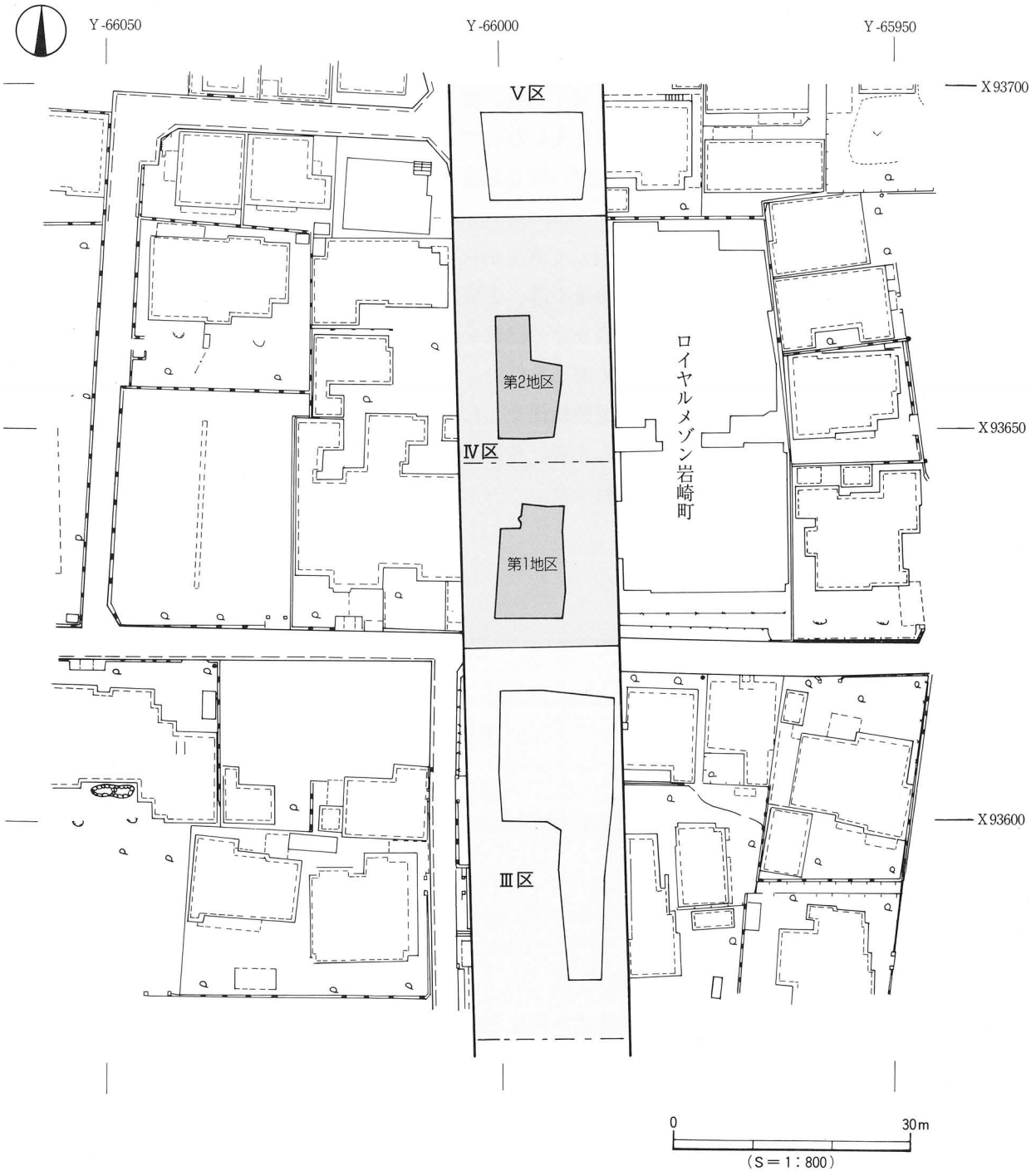
2．層　位

(1) 基本層位（第64図、図版27・28）

Ⅳ区は、第1・第２地区共に調査以前はマンションの駐車場であった。現況では第２地区がわずかに高く、現地表面の標高は、第１地区が37.7ｍ、第２地区が37.8ｍである。

基本層位は、第Ⅰ層から第Ⅳ層と第Ⅷ層を検出し、第Ⅴ層から第Ⅶ層は検出していない。第Ⅰ層は近現代の造成や農耕にかかわる客土である。第Ⅱ層は灰黄～灰黄褐色土で、主に中世の遺物を含む包含層になり、上面は遺構検出面になる。第Ⅲ層は褐灰色土で、古代の遺物を含む包含層になり、上面は遺構検出面になる。第Ⅳ層は灰オリーブ色土で、古墳時代～古代、主に６世紀から８世紀までの遺

物を含む包含層である。第Ⅷ層は砂礫層（河川氾濫堆積物）であり、第ⅧＢ層に相当する。第ⅧＢ層は第１地区と第２地区の東壁及び南壁に、それぞれ幅１ｍ前後の深掘りトレンチを設定し、土層観察の結果、確認されたものである。各トレンチは、地表下３ｍの地点を基準に掘削した。ただし、両地区の周辺状況が異なることから、必ずしもすべてのトレンチが同じ深さではない。



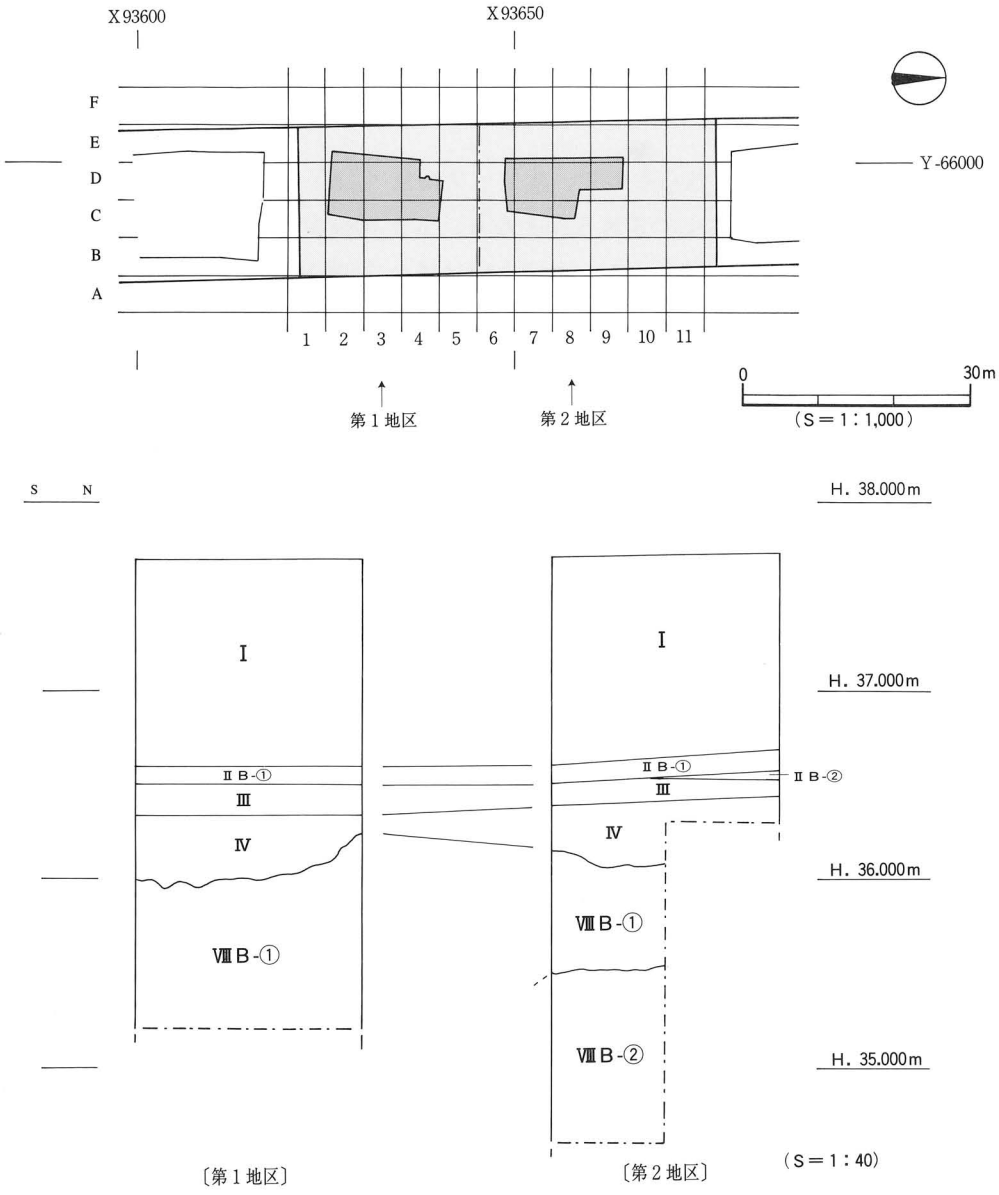
第63図　Ⅳ区測量図

第Ⅰ層－近現代の造成や農耕に伴う客土で、地表下1.1～1.2mまで開発が行われている。Ⅳ区全域で検出した。

第Ⅱ層－第Ⅱ層は中世の遺物を含む土壌で、第２章層位で説明した第ⅡＢ層になる。層厚10～25cmを測る。土色と砂粒の混入量の違いによって、２層に分層される（ⅡＢ-①、ⅡＢ-②層）。

ⅡＢ-①層：灰黄色（2.5Y6/2）砂質土で、Ⅳ区全域で検出した。第１地区は層厚17cm、第２地区は層厚15cmを測る。第１地区では北から南に傾斜堆積をなし（比高差５cm）、第２地区では北東から南西に傾斜堆積をなす（比高差2cm）。本層中からは、13～15世紀代の土師器、須恵器、輸入陶磁器や吉備系の椀の底部が出土している。

ⅡＢ-②層：灰黄褐色（10ＹＲ6/2）土で、第２地区の北部で検出した。層厚８cmを測り、東から西に傾斜堆積をなす（比高差５cm）。本層中からは、13～14世紀代の土師器、須恵器、輸入陶磁器が出土している。



第64図　Ⅳ区区割図・土層模式図

第Ⅲ層－褐灰色（7.5ＹＲ4/1）土で、Ⅳ区全域で検出した。層厚20cmを測り、第１地区、第２地区共に北東から南西に傾斜堆積をなす（比高差18cm）。本層中からは、主に古代の遺物が出土しており、緑釉陶器の出土もある。

第Ⅳ層－灰オリーブ色（5ＹＲ5/3）土で、Ⅳ区全域で検出した。第１地区は層厚45cm、第２地区は層厚70cmを測る。第１地区は北西から南東に傾斜堆積をなし（比高差10cm）、第２地区は北東から南西に傾斜堆積をなす（比高差18cm）。本層中からは、主に古墳時代の遺物が出土したほか、灰釉陶器の出土がある。

第Ⅷ層－灰白色～オリーブ褐色を呈する砂礫層であり、調査壁沿いに設定したトレンチの土層観察により確認したものである。堆積状況からは、石手川の氾濫による河川氾濫堆積物とみられ、第２章層位で説明したⅧＢ層に相当する。堆積物の違いから２種類に分けられる（Ⅷ Ｂ-①、Ⅷ Ｂ-②層）。

Ⅷ Ｂ-①層：灰白色（7.5Ｙ8/2）の砂礫層で、５～10cm大の円礫と粗砂で構成される。第１・第２地区共にみられるもので、層厚80cmを測る。本層上面はやや起伏に富み、第Ⅳ層が覆う。本層中からは、弥生時代中期後半に時期比定される土器片が数点出土している。

Ⅷ Ｂ-②層：第２地区に限られるもので、オリーブ褐色（2.5Ｙ4/6）の砂礫層である。礫径は最大で10×20cm、最小で３×５cmとなり、５×10cm大の礫が大半を占めている。礫と礫の間には粗砂が混入する。本層上面はⅧ Ｂ-①層が覆う。本層中からは、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される土器片が出土しているが、いずれも磨滅が著しい。

(2)　検出遺構・遺物（第65図、図版28・29）

Ⅳ区の調査では、弥生時代から中世までの遺構と遺物を検出した。

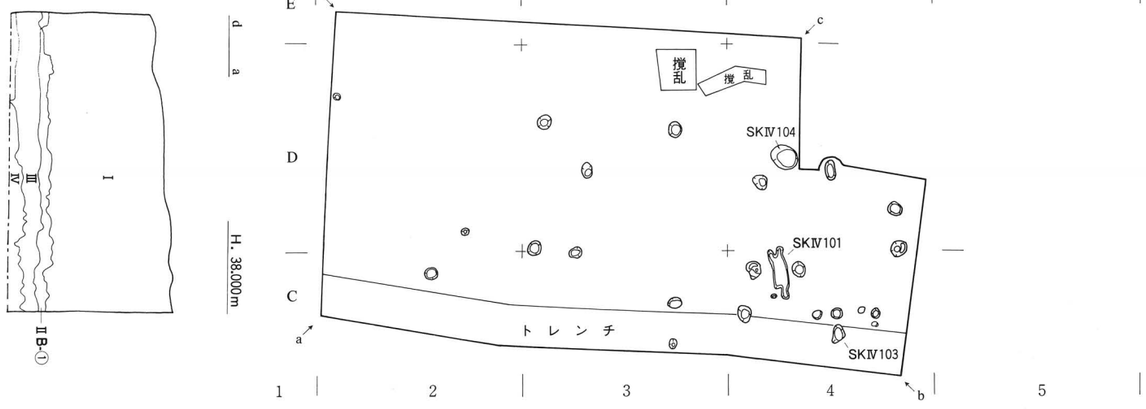
古墳時代の遺構は土坑１基と土器溜まり４基、古代の遺構は掘立柱建物址１棟と溝１条、中世の遺構は土坑２基を検出した。弥生時代の遺構は未検出であるが、第Ⅷ層中からは弥生時代前期末～中期初頭、中期後半に時期比定される遺物が出土している。各地区で検出した遺構を表11にまとめた。

なお、調査では調査区内を５ｍ四方のグリットに分けた。調査区東側から西側へＢ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ、南側から北側へ１・２・３……11とし、Ｂ1～Ｆ11といったグリット名を付けた（第64図）。

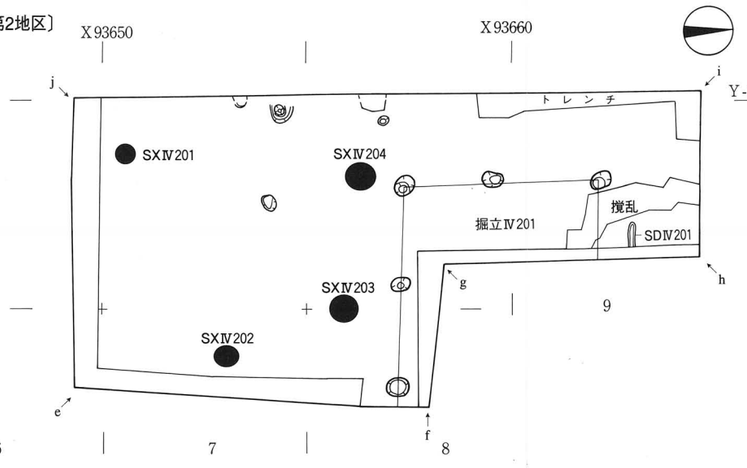
表11　Ⅳ区遺構一覧

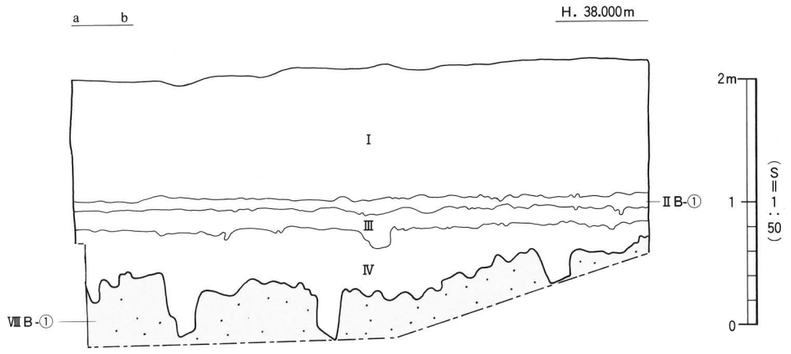
地区／時代	第１地区	第２地区
古墳時代	ＳＫⅣ101（後期）	
古　代		掘立Ⅳ201（10世紀） ＳＤⅣ201（古代）
中　世	ＳＫⅣ102（13世紀） ＳＫⅣ103（13世紀）	

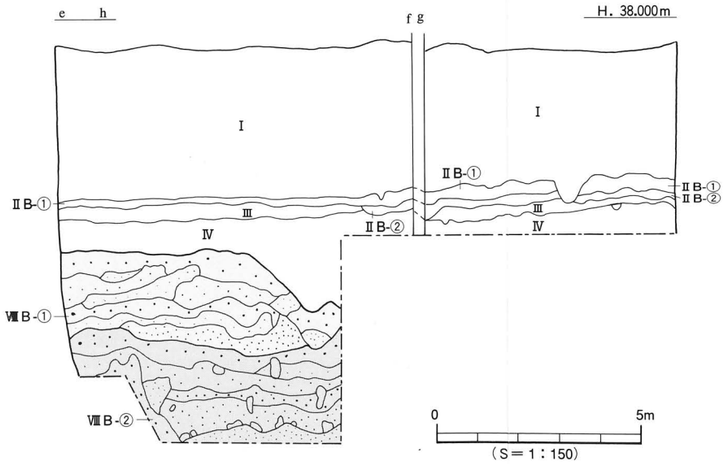
〔第1地区〕



〔第2地区〕







※　遺構配置図、土層図の縮尺は平面が1/150、断面の深さは1/50である。

Ⅰ　表土
ⅡB-①　灰黄色(2.5Y6/2)砂質土
ⅡB-②　灰黄褐色(10YR6/2)土
Ⅲ　褐灰色(7.5YR4/1)土
Ⅳ　灰オリーブ色(5Y5/3)土
ⅧB-①　灰白色(7.5Y8/2)砂礫
ⅧB-②　オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂礫

第65図　Ⅳ区遺構配置図・土層図

3．中世の遺構と遺物

中世の遺構は、第Ⅳ層上面で土坑２基を検出した。

(1) 土　　坑

ＳＫⅣ102（第66図）

第１地区の北東部、Ｃ４区に位置する。平面形態は不整の楕円形を呈し、規模は長径52cm、短径29cm、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色土の単層である。遺物は、埋土中位付近から土師器片と径10cm大の石とが出土した。

出土遺物

Ⅳ001は土師器の坏である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。内外面共にナデ調整を施す。Ⅳ002は土師器の皿である。体部はやや内湾して上外方に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。底部の切り離しは回転糸切り技法による。

時期：出土した遺物の特徴から、ＳＫⅣ102は13世紀代の遺構とする。

ＳＫⅣ103（第65図）

第１地区の北西部、Ｄ４区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径62cm、短径52cm、深さ14cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土はＳＫⅣ102と同様の灰黄褐色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

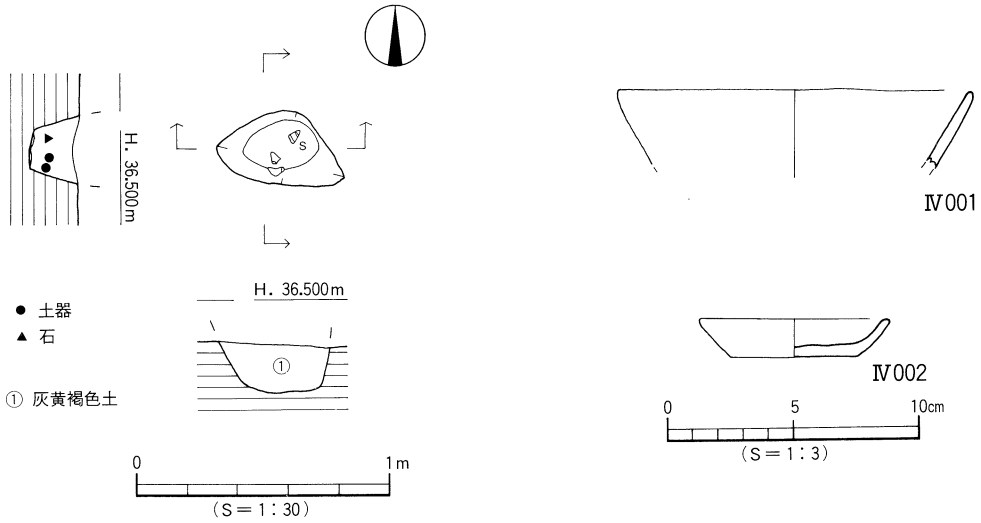
時期：埋土がＳＫⅣ102に酷似することから、ＳＫⅣ103は13世紀代の遺構とする。

(2) 第Ⅱ層出土遺物

Ⅳ区の調査では、第ⅡＢ層から中世の遺物が出土した。すべて第２地区からの出土である。

１）第ⅡＢ-①層出土遺物（第67図、図版30）

瓦質土器（Ⅳ003・004）Ⅳ003は瓦質の土釜である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、口縁端部は丸味をもつ。口縁外面には丸味のある断面三角形状の鍔が付く。Ⅳ004は三足土釜、または土鍋の



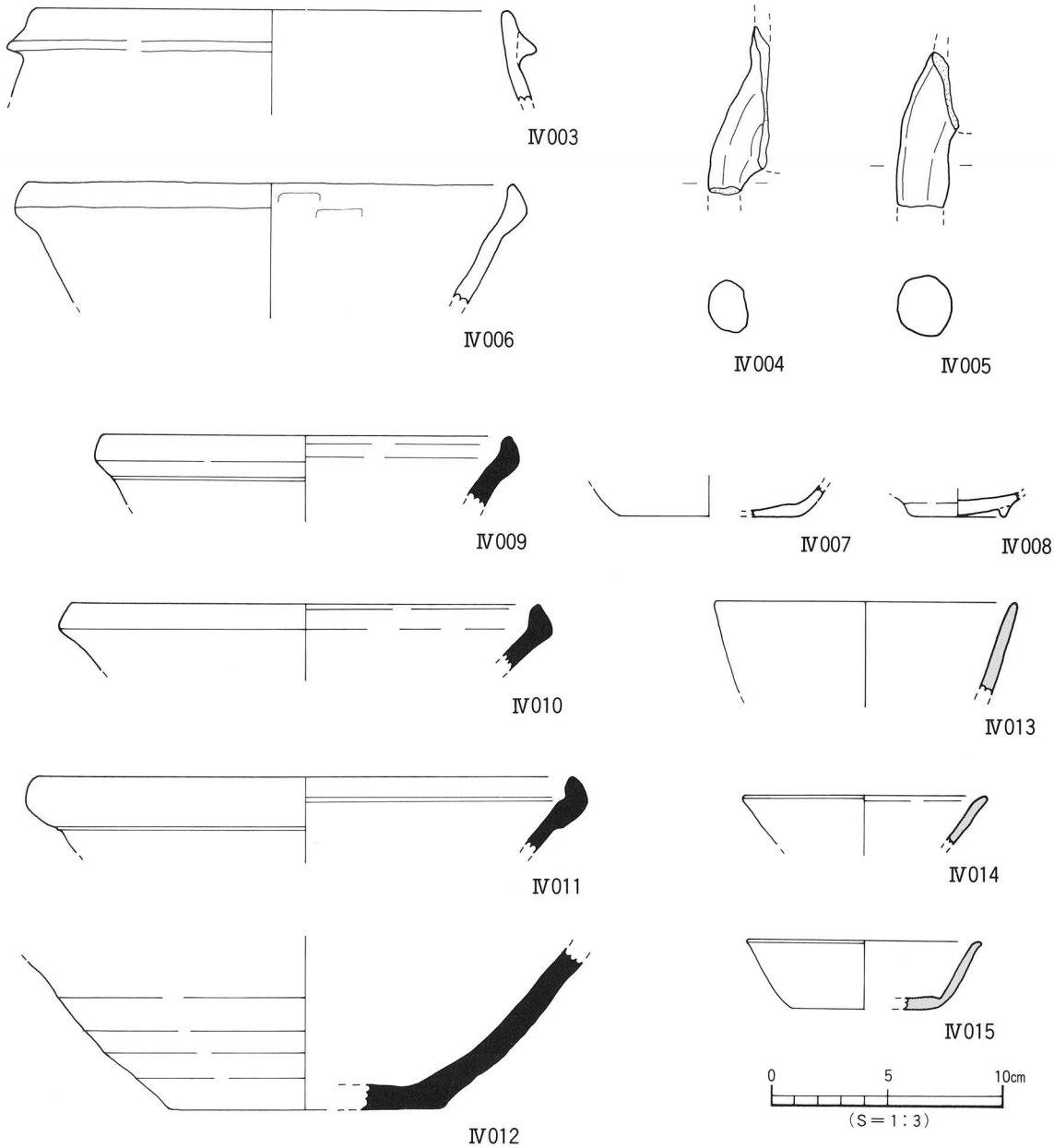
第66図　ＳＫⅣ102測量図・出土遺物実測図

脚部である。指頭押圧とナデによる調整が施されている。

土師器（Ⅳ005～008）Ⅳ005は土釜または土鍋の脚部である。Ⅳ006は土師質のこね鉢である。口縁部が上方に拡張される。Ⅳ007は坏である。底部の切り離しは回転糸切り技法による。Ⅳ008は椀の底部である。断面三角形状の高台を貼り付ける。色調は内外面共に乳黄灰色を呈し、胎土は１～３㎜大の石英・長石を多量に含む。吉備系の椀と思われ、高台径は４㎝を測る。14世紀初頭～15世紀前半。

須恵器（Ⅳ009～012）Ⅳ009～012は東播系のこね鉢である。Ⅳ009～011は口縁部片で、いずれも口縁部が上方に拡張される。Ⅳ012は底部片である。底部の切り離しは回転糸切り技法による。

青磁（Ⅳ013）Ⅳ013は青磁椀の口縁部片である。内外面共に暗緑色の釉が施される。



第67図　第ⅡB-①層出土遺物実測図

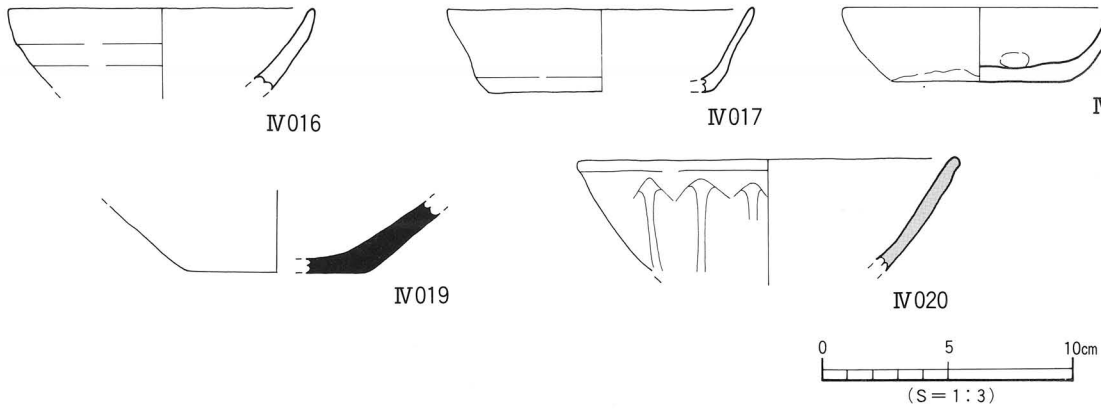
白磁（Ⅳ014・015）Ⅳ014・015は白磁の皿である。口縁部はやや外反し、口縁部内面は釉をかきとる、いわゆる口禿げの皿である。森田・横田氏編年（森田・横田1978）の白磁皿Ⅸ類に比定される。13世紀中頃～14世紀初頭。

2）**第Ⅱ B-②層出土遺物**（第68図、図版30）

土師器（Ⅳ016～018）Ⅳ016～018は土師器坏である。口縁部は内湾し、口縁端部は尖り気味になる。Ⅳ018は底部の切り離しは回転糸切り技法による。

須恵器（Ⅳ019）Ⅳ019は東播系の鉢の底部である。底部の切り離しは回転糸切り技法による。

青磁（Ⅳ020）Ⅳ020は青磁椀の口縁部片である。体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。外面には鎬連弁文を施す。森田・横田氏編年の龍泉窯系青磁椀Ⅲ類に比定される。13世紀中頃～14世紀初頭。



第68図　第Ⅱ B-②層出土遺物実測図

4．古墳時代～古代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、土坑１基と土器溜まり４基、古代の遺構は、掘立柱建物址１棟と溝１条である。すべて第Ⅳ層上面で検出した。

(1)　掘立柱建物址

掘立Ⅳ201（第69図、図版29）

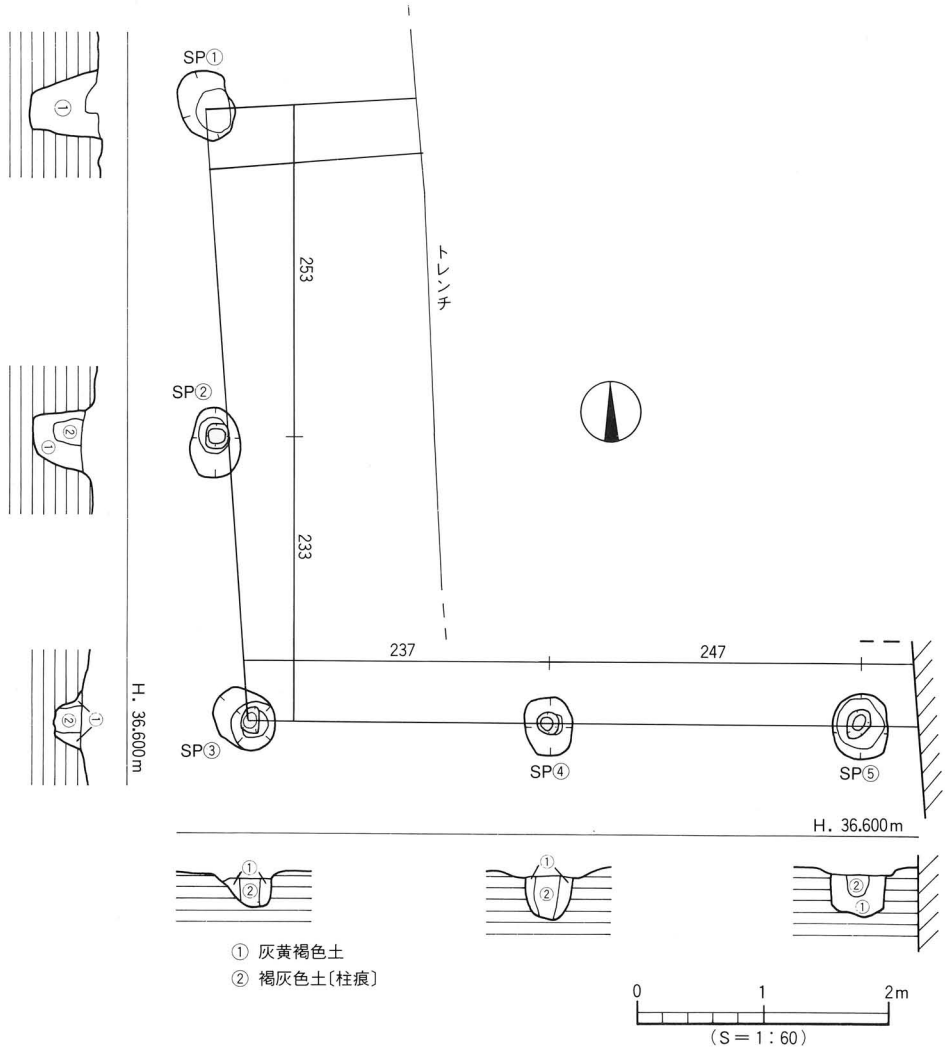
第２地区北部、Ｃ８～Ｄ９区に位置し、建物の東側は調査区外に続く。２間×２間以上の南北棟で、建物方位をＮ－２°－Ｗにとる。規模は桁行長4.86m、梁行長4.84m、柱穴間隔は梁間2.4～2.5m、桁間2.3～2.5mを測る。柱穴の平面形態は楕円形を呈し、規模は径37～56cm、深さ26～62cmを測る。柱穴埋土は灰黄褐色土である。柱痕はＳＰ②・③・④・⑤の柱穴で検出され、径16～18cm、深さ17～35cmを測る。柱痕埋土は褐灰色土である。遺物は、柱穴内より土師器・須恵器・瓦片が出土した。

出土遺物（第70図、図版30）

Ⅳ021・022・029はＳＰ①、Ⅳ025はＳＰ②、Ⅳ023・024・026はＳＰ③、Ⅳ027はＳＰ④、Ⅳ028はＳＰ⑤出土品である。

土師器（Ⅳ021～024）Ⅳ021～024は円盤高台を有する坏の底部である。高台は垂下するもの（Ⅳ021）と、やや外側に突出するもの（Ⅳ022～024）がある。底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。

須恵器（Ⅳ025～028）Ⅳ025～028は坏である。Ⅳ025・026は口縁部がやや外反する。Ⅳ025は体部には１条の沈線が巡る。Ⅳ027は高台が付く坏で、高台は底体部境界付近に付く。



第69図　掘立Ⅳ201測量図

瓦（Ⅳ029）Ⅳ029は平瓦である。凸面には細縄叩き、凹面には布目状痕を残す。硬質で、色調は乳黄～乳橙色を呈する。

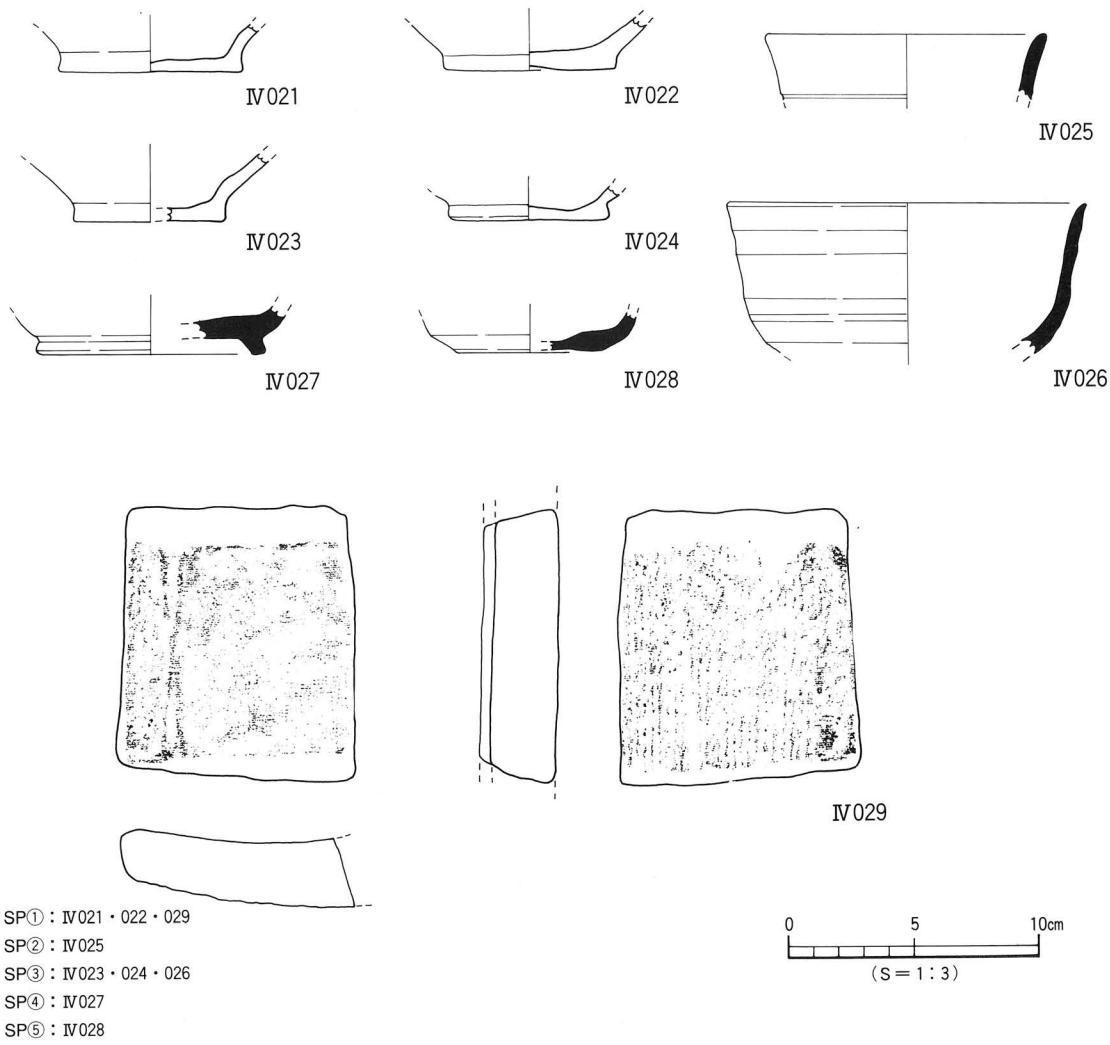
時期：出土した遺物には時期差があるが、土師器の特徴から掘立Ⅳ201は10世紀代の建物址とする。

(2)　溝

ＳＤⅣ201（第65図）

第２地区の北部、Ｄ９区に位置する。溝の東端はトレンチに切られる。溝上面は第Ⅲ層が覆う。溝底は東から西に傾斜をなす（比高差４cm）。規模は、検出長64cm、幅11cm、深さ36cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は褐灰色土の単層である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：基本土層の第Ⅲ層（古代）が覆うことから、ＳＤⅣ201は古代以前の溝とする。

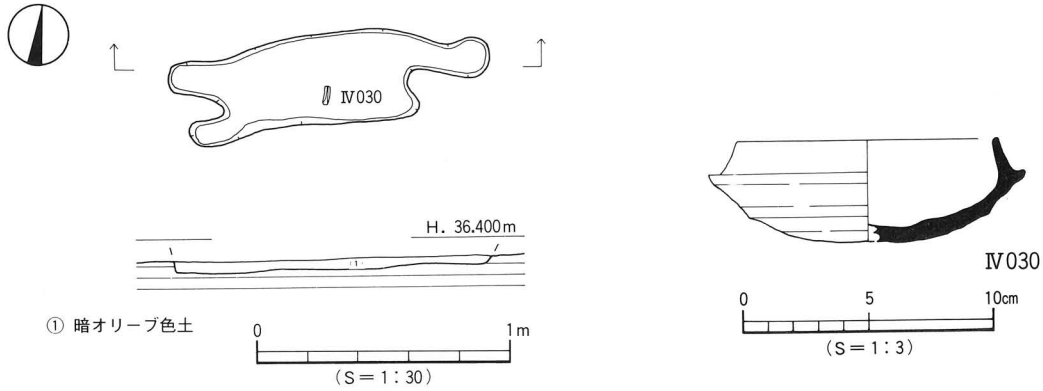


第70図　掘立Ⅳ201出土遺物実測図

(3) 土　　坑

ＳＫⅣ101（第71図）

第１地区の北東部、Ｃ・Ｄ４区に位置する。平面形態は不定形を呈し、規模は長軸1.28ｍ、短軸0.36ｍ、深さ６㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は暗オリーブ色土の単層である。遺物は遺構中央部の埋土中から、須恵器坏身片が１点出土した。



第71図　ＳＫⅣ101測量図・出土遺物実測図

出土遺物

Ⅳ030は須恵器坏身である。たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。受部は短く上外方にのびる。

時期：出土した遺物の特徴から、ＳＫⅣ101は古墳時代後期、６世紀中葉の遺構とする。

(4) 土器溜り（ＳＸ）

第２地区の第Ⅳ層上面では、土器の集中する箇所が４ヶ所でみられた。それぞれＳＸⅣ201～204と名称を付け、範囲を図化した（第65図）。出土した遺物のうち、図化しうるものを第72図に掲載した。いずれも、古墳時代後期に時期比定されるものである。

１）ＳＸⅣ201

第２地区南西部、Ｄ７区に位置する。80×100cmの範囲に、土師器の甕形土器の口縁部が折り重なって出土した。

出土遺物（第72図－Ⅳ031・032）

Ⅳ031・032は外反する口縁部をもつ甕形土器で、口縁端部は丸く仕上げる。

２）ＳＸⅣ202

第２地区南東部、Ｃ７区に位置する。90×100cmの範囲に、土師器の甕形土器や甑形土器と、須恵器坏蓋、坏身片がランダムに重なって出土した。

出土遺物（第72図－Ⅳ033～037）

Ⅳ033・034は土師器の甕形土器で、Ⅳ033は外傾気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部付近で外反し、口縁端部は尖る。外面にハケメ調整、内面にはヨコ方向のヘラケズリを施す。Ⅳ035は甑形土器の把手で、舌状となる。Ⅳ036は須恵器坏蓋、Ⅳ037は坏身片である。

３）ＳＸⅣ203

第２地区中央部やや東寄り、Ｃ８区に位置する。130×140cmの範囲に、土師器片が比較的まとまって出土した。図化しうるものを１点掲載している。

出土遺物（第72図－Ⅳ038）

Ⅳ038は土師器の甕形土器で、口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部付近で外反する。口頸部境には内外面共に弱い稜をもつ。胴部外面にタテ方向の細かなハケメ調整を施す。

４）ＳＸⅣ204

第２地区中央部やや西寄り、Ｄ８区に位置する。140×150cmの範囲に、ＳＸⅣ203と同様、土師器片が比較的まとまって出土した。図化しうるものを１点掲載している。

出土遺物（第72図－Ⅳ039）

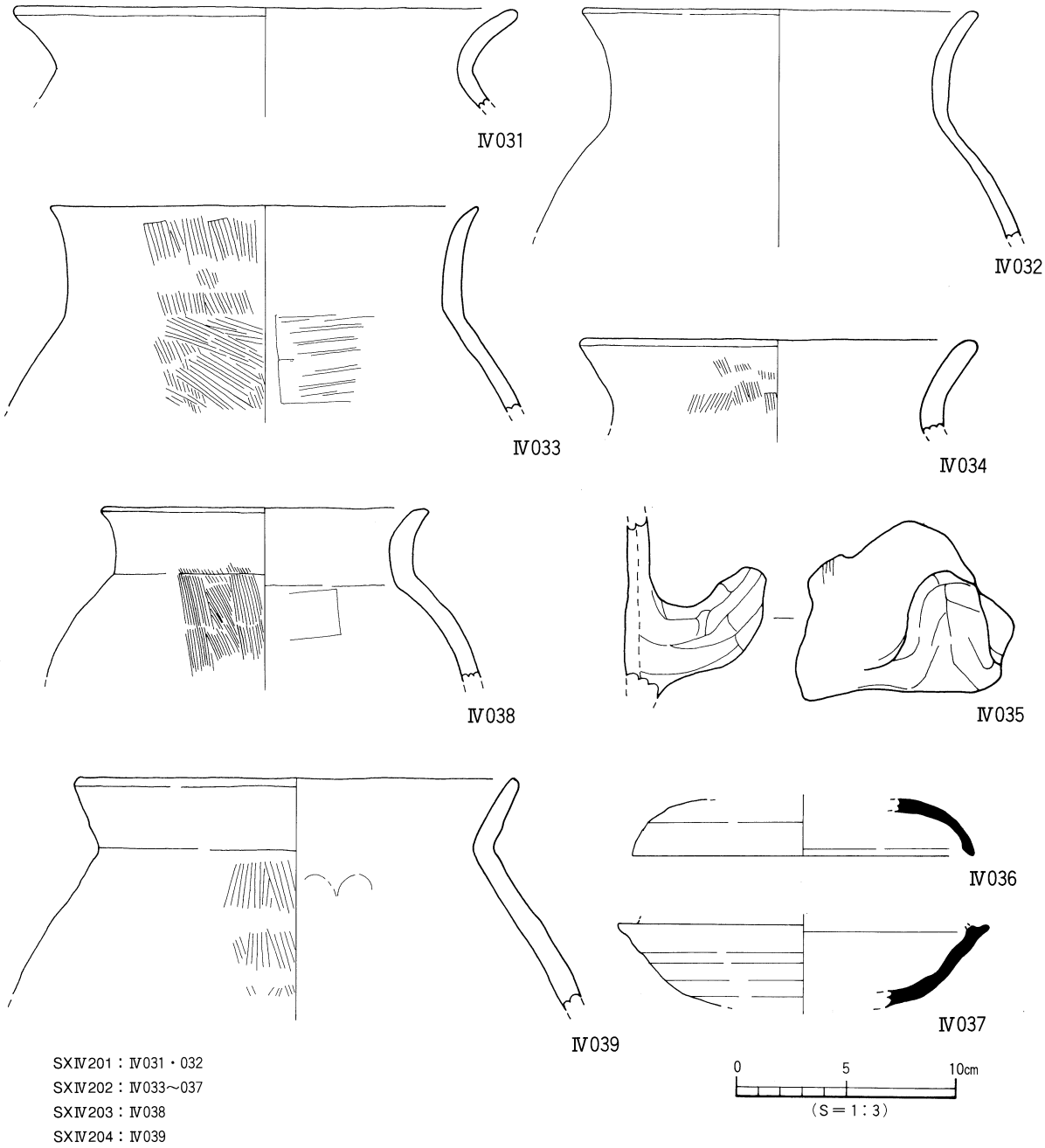
Ⅳ039は土師器の甕形土器で、口縁部は「く」字状に外反し、口縁端部は尖り気味である。口頸部境の外面には弱い稜をもつ。外面にハケメ調整を施す。

(5) 第Ⅲ層・第Ⅳ層出土遺物

Ⅳ区の調査では、第Ⅲ層及び第Ⅳ層中から古墳時代～古代の遺物が出土した。このうち第Ⅲ層中からは土師器、須恵器、緑釉陶器が出土し、第Ⅳ層中からは硯や灰釉陶器が出土している。

１）第Ⅲ層出土遺物（第73図）

Ⅳ040～051は、すべて第２地区からの出土品である。



第72図　ＳＸ出土遺物実測図

土師器（Ⅳ040～045）Ⅳ040～045は土師器の坏で、Ⅳ040は体部が直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。粘土紐の巻き上げ痕が残る。底部はやや丸味をもち、底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。Ⅳ041～045は円盤高台を有する坏で、Ⅳ041・043の底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。

須恵器（Ⅳ046・047）Ⅳ046・047は須恵器坏である。Ⅳ046は体部は内湾して立ち上がるもので、円盤高台を有する。Ⅳ047は高台の付く坏である。高台は低く、底体部境付近に付く。

緑釉陶器（Ⅳ048～051）Ⅳ048～051は椀の底部片である。Ⅳ048～050は削り出しによる輪高台を有する。Ⅳ048は高台内面に段をもつ。Ⅳ051は底部外面が凹む円盤高台をなす。

焼成は硬質のもの（Ⅳ048）、やや硬質のもの（Ⅳ049・051）、軟質のもの（Ⅳ050）がある。底部外面の施釉はすべてに認められず、釉調は淡黄緑色である。調整方法は、内外面共に回転ナデ調整である。すべて京都産で、Ⅳ048～050は10世紀前半、Ⅳ051は９世紀後半～10世紀前半に時期比定される。

２）第Ⅳ層出土遺物（第74図）

Ⅳ052～056は第１地区、Ⅳ057～067は第２地区出土品である。

①第１地区出土品（Ⅳ052～056）

須恵器（Ⅳ052～055）Ⅳ052は坏蓋、Ⅳ053は坏である。Ⅳ054は甕で、口縁端部は珠玉状に仕上げる。Ⅳ055は硯片である。脚部は外反し、脚裾部に１状の凸線が巡る。脚端面は平坦である。柱部には長方形状の透かしをもつ。

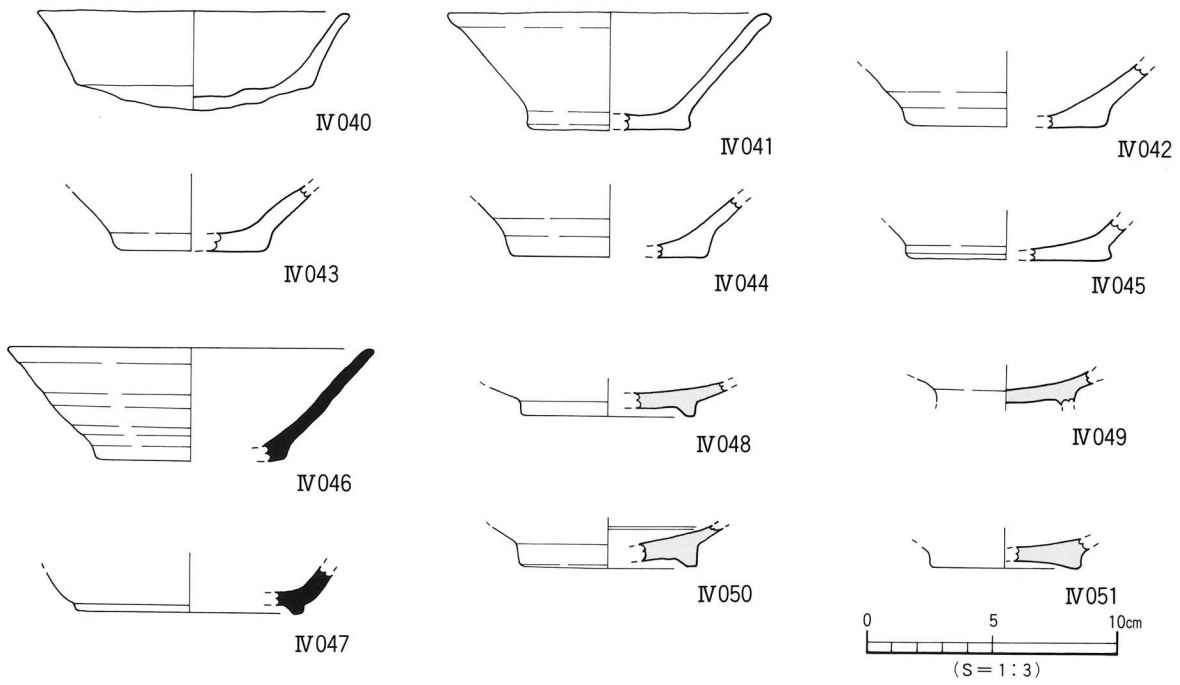
灰釉陶器（Ⅳ056）Ⅳ056は灰釉陶器の皿である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。胎土は灰白色を呈し、焼成は硬質である。施釉は意図的な痕跡は認められない。内外面共に回転ナデ調整を施す。９世紀後半。

②第２地区出土品（Ⅳ057～067）

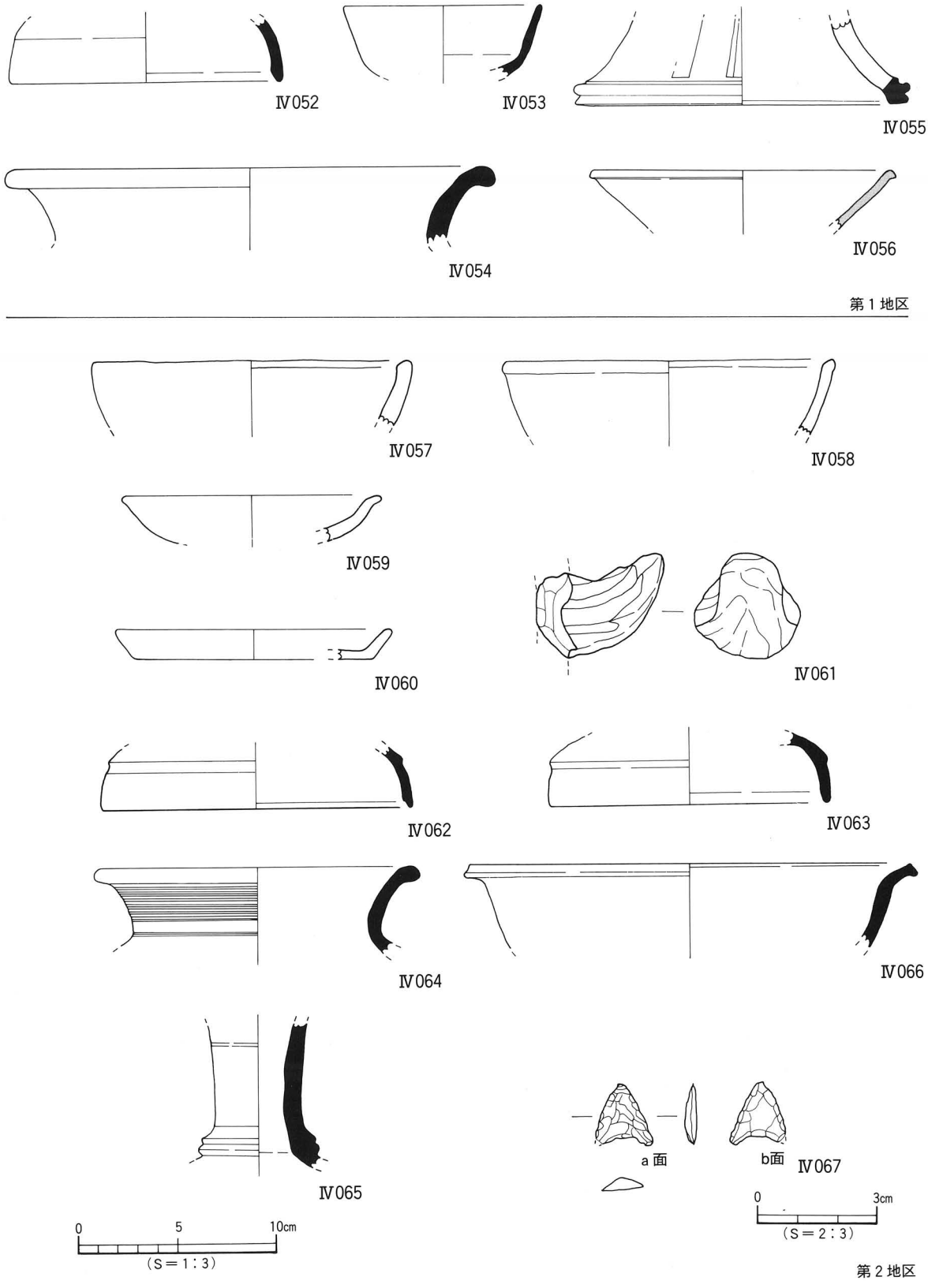
土師器（Ⅳ057～061）Ⅳ057・058は甕形土器で、口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。Ⅳ059・060は皿である。Ⅳ060は口縁部が外反するもので、色調は内外面共に乳赤橙色を呈する。Ⅳ061は甑形土器の把手と思われ、舌状を呈し、差し込みによる接合部が顕著に残る。

須恵器（Ⅳ062～066）Ⅳ062・063は坏蓋で、わずかに稜をもつ。Ⅳ064は甕で、頸部外面に回転カキメ調整を施す。Ⅳ065は長頸壺で、頸胴部境に２条の凸帯をもつ。Ⅳ066は鉢である。口縁部は外反し、口縁端部は上下方に拡張される。

石鏃（Ⅳ067）Ⅳ067は正三角形状の凹基無茎石鏃である。ｂ面には自然面を残す。サヌカイト製。



第73図　第Ⅲ層出土遺物実測図



第74図　第Ⅳ層出土遺物実測図

5．弥生時代の遺構と遺物

Ⅳ区では、弥生時代の遺構は未検出であるが、第Ⅷ層中から当該期の遺物が出土している。第Ⅷ層は石手川の氾濫により堆積した河川氾濫堆積物と考えられるもので、２種類に分かれる（ⅧB-①・ⅧB-②層）。ⅧB-①層中からは弥生時代中期後半、ⅧB-②層中からは弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される土器片が出土した。

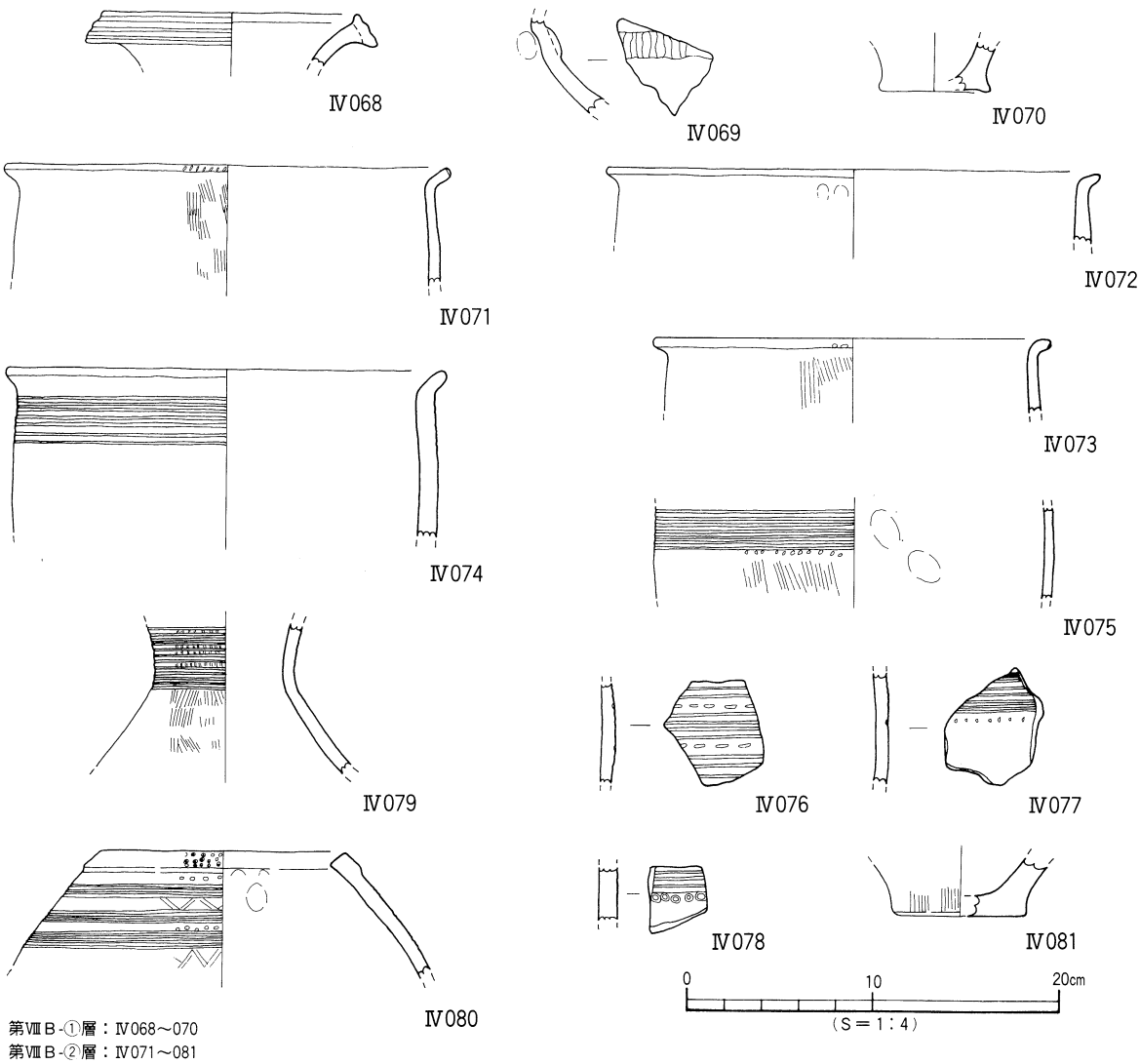
第Ⅷ層出土遺物（第75図）

１）第ⅧB-①層出土遺物（Ⅳ068～070）

Ⅳ068～070は壺形土器。Ⅳ068の口縁端部は上下方に拡張され、口縁端面に凹線文３条を施す。Ⅳ069は頸部片。断面長方形状の凸帯を貼り付け、凸帯上には刻目をもつ。Ⅳ070は底部片で、上げ底となる。

２）第ⅧB-②層出土遺物（Ⅳ071～081）

Ⅳ071～078は甕形土器。Ⅳ071～074は折り曲げにより口縁部を成形するもので、Ⅳ071・073は口縁



第75図　第Ⅷ層出土遺物実測図

端面に刻目をもつ。Ⅳ074は胴部に沈線文６条（２条１組）を施す。Ⅳ075～078は胴部片。Ⅳ075～077は沈線文と刺突文、Ⅳ078は沈線文と竹管文が組み合う。なお、Ⅳ077はクシ描きによる沈線文（４条１組）を施す。Ⅳ079～081は壺形土器。Ⅳ079は頸部に沈線文を施す。Ⅳ080は無頸壺で、口縁部はやや肥厚し、口縁端部は内傾する面をもつ。文様は竹管文と沈線文、山形文（２条１組）が組み合うものである。

６．その他の遺構と遺物

Ⅳ区の調査では、第Ⅳ層上面にてピット28基のほか、出土地点不明の遺物が数点ある。ここでは時期特定が困難なため、その他の遺構と遺物として扱っている。

(1) ピット

Ⅳ区の第Ⅳ層上面にて、ピット28基を検出した。内訳は第１地区にて20基、第２地区で８基である。埋土の違いにより3種類に分類される（Ａ・Ｂ・Ｃ類）。Ａ類は灰色土を埋土にもつピットで12基、Ｂ類は灰黄褐色土を埋土にもつピットで８基、Ｃ類は褐灰色土を埋土にもつピットで８基ある。

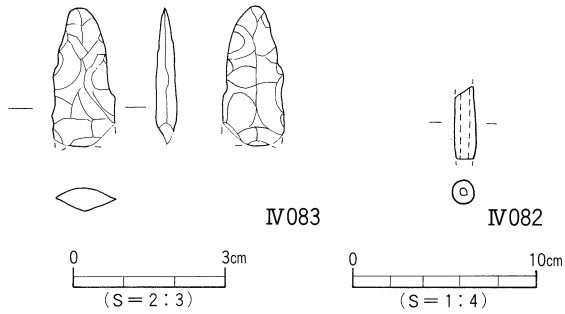
Ａ類は第１地区に点在し、平面形態は円形を呈し、規模は径20～30cmとやや小型である。Ｂ類は第１地区にて４基、第２地区にて４基を検出し、平面形態は円形を呈する。規模は径30～40cm、深さ10cmである。Ｃ類は第１地区で４基、第２地区で４基を検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径40～80cm、深さ20～25cmを測る。いずれのピットからも土器の小片が数点出土したが、明確な時期判断はしかねる。あえて時期を求めるならば、Ａ類とＢ類のピットは中世、Ｃ類のピットは古代の可能性がある。

(2) 地点不明出土遺物（第76図）

Ⅳ区では、試掘調査の際に出土した遺物（Ⅳ082）と重機で掘削中に出土した遺物（Ⅳ083）がある。出土層位や地点が不明なため、地点不明出土遺物として報告する。

土錘（Ⅳ082）Ⅳ082は管状の土錘である。長軸の縦断面形態は円筒状を呈する。

石鏃（Ⅳ083）Ⅳ083は二等辺三角形状の平基無茎石鏃である。サヌカイト製。



第76図　地点不明出土遺物実測図

7．小　結

Ⅳ区の調査では、弥生時代前期末から中世までの遺構と遺物を確認した。層位では、第Ⅰ層から第Ⅳ層と第Ⅷ層を検出した。

(1) 層　位

Ⅳ区では、第Ⅱ層は中世、第Ⅲ層は古代、第Ⅳ層は古墳時代の遺物包含層となり、第Ⅷ層は石手川の氾濫によって堆積した砂礫層（ⅧB層）になる。

砂礫層は河川の氾濫による堆積物で、Ⅲ区検出のⅧB-①・ⅧB-②層である。第２地区では第Ⅳ層下面から1.5mの地点まで掘り下げたが、Ⅲ区と同様に第Ⅸ層は確認できなかった。

第Ⅷ層上面は、第２地区の南部が最も高く、第１地区に向かって傾斜している。第Ⅳ層は第Ⅷ層上面の傾斜に伴い、第１地区が厚く堆積している。第Ⅱ層・第Ⅲ層・第Ⅳ層は第Ⅷ層に起因して、第２地区から第１地区、すなわち北から南に向かって緩傾斜する。

これらの状況から、Ⅳ区は古墳時代以前は流路や小河川が流れる状況にあり、古墳時代後期になり、土壌が安定化したことで、人々が居住し、集落を営むようになったものと考えられる。

(2) 遺構・遺物

Ⅳ区で検出した遺構は、古墳時代後期から中世までのものである。弥生時代の遺構は未検出であるが、第Ⅷ層中より、当該期の遺物が少量出土している。

１）中世：中世の遺構は、土坑２基である。ＳＫⅣ102は平面形態が不整楕円形を呈し、規模は径60cmを測る。土坑内からは完形の土師器皿が出土しており、土壙墓の可能性がある。土坑の時期は、出土遺物から13世紀代とした。Ⅳ区の中世遺構は、Ⅲ区にくらべ検出数が少なく、中世においてⅣ区は遺構密度が希薄な地域であったといえよう。

また、第ⅡB-①層中からは吉備系の椀が出土しており、当時の他地域との交流を考えるうえで好資料となるものである。そのほか、第ⅡB-①層と第ⅡB-②層中からは青磁と白磁の破片が、あわせて４点出土している。

２）古代：古代では、掘立柱建物址が１棟検出されている。２×２間以上を測る正方位の建物址で、出土遺物から平安期（10世紀）の建物址と考えられる。遺物は、第Ⅲ層中から９世紀後半～10世紀前半に時期比定される緑釉陶器や土師器、須恵器、瓦が出土した。これは、Ⅲ区においても同様の状況がみられる。平安時代には、Ⅲ区やⅣ区を中心として岩崎遺跡周辺に、官衙や寺院に伴う施設が存在していた可能性がある。

３）古墳時代：古墳時代の遺構は、土坑１基と土器溜まり4基がある。これらの遺構から出土した遺物は、古墳時代後期に時期比定されるものである。調査地内では住居址は未検出であるが、岩崎遺跡西方にある持田町３丁目遺跡では古墳時代の集落関連遺構が多数検出されている。したがって、これらの遺構は遺跡周辺に広がる古墳時代集落に伴い、存在しているものと推測される。

４）弥生時代：弥生時代の遺構は未検出であるが、第Ⅷ層中からは弥生前期末～中期初頭と中期後半に時期比定される遺物が少量出土している。これらの遺物は、後述するがⅣ区の北側、Ⅴ区やⅥ区に展開する弥生時代集落に起因するものである。

Ⅳ区は、Ⅲ区と同様に弥生時代には土地が安定しておらず、人々が生活しうる土地ではなかったものといえる。

〔参考文献〕

森田勉・横田賢次郎　1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』

第７章

Ｖ区の調査

第7章　Ⅴ区の調査

1．調査の経緯（第77図、図版31）

Ⅴ区は、調査地の北部に位置する。調査以前は既存宅地であった。調査対象地は岩崎町2丁目6－17から9－18までの間、幅18m、長さ104m、調査対象面積は1,872㎡になる。国土座標では、X 93676～93782、Y-65986～-66008の地域になる。調査地は住宅密集地帯で、周縁地の道路は狭く、排土搬出用の車両が通行できないため、排土置き場は調査区内及び隣接する調査区を使用した。調査区内には調査中も東西方向の生活道路3本が通っていたため、それらの道路を利用し、各調査地区を設定した。地区名は南から北に向かって、第1地区、第2地区、第3地区、第4地区とした。調査地の西側には自転車や歩行者の多い南北方向の道路が存在しており、安全面には細心の注意を払った。

調査は現存家屋が存在することから、第1地区、第2地区、第4地区、第3地区の順に、家屋を取り壊した箇所から実施した。以下、調査工程を略記する。なお、各地区の調査面積、調査期間は表12のとおりである。

〔調査工程〕

① 調査は第1地区、第2地区、第4地区、第3地区の順番で行った。なお、第2地区と第4地区は同時進行であった。

② 第1地区は平成9年9月1日、重機にて第Ⅰ層を除去し、第Ⅱ層上面及び第Ⅲ層中から溝や土坑を検出した。第2地区から第4地区は、重機にて第Ⅰ層から第Ⅵ層までを除去し、第Ⅶ層上面で溝や土坑などの遺構を検出した。

③ 第1地区は遺構の掘り下げを行い、測量と完掘写真などの記録を取り、平成9年10月24日、調査を終了する。

④ 第1地区の埋め戻し後、平成9年12月12日には第2地区、平成10年1月6日には第4地区の掘削を行い、調査を開始する。

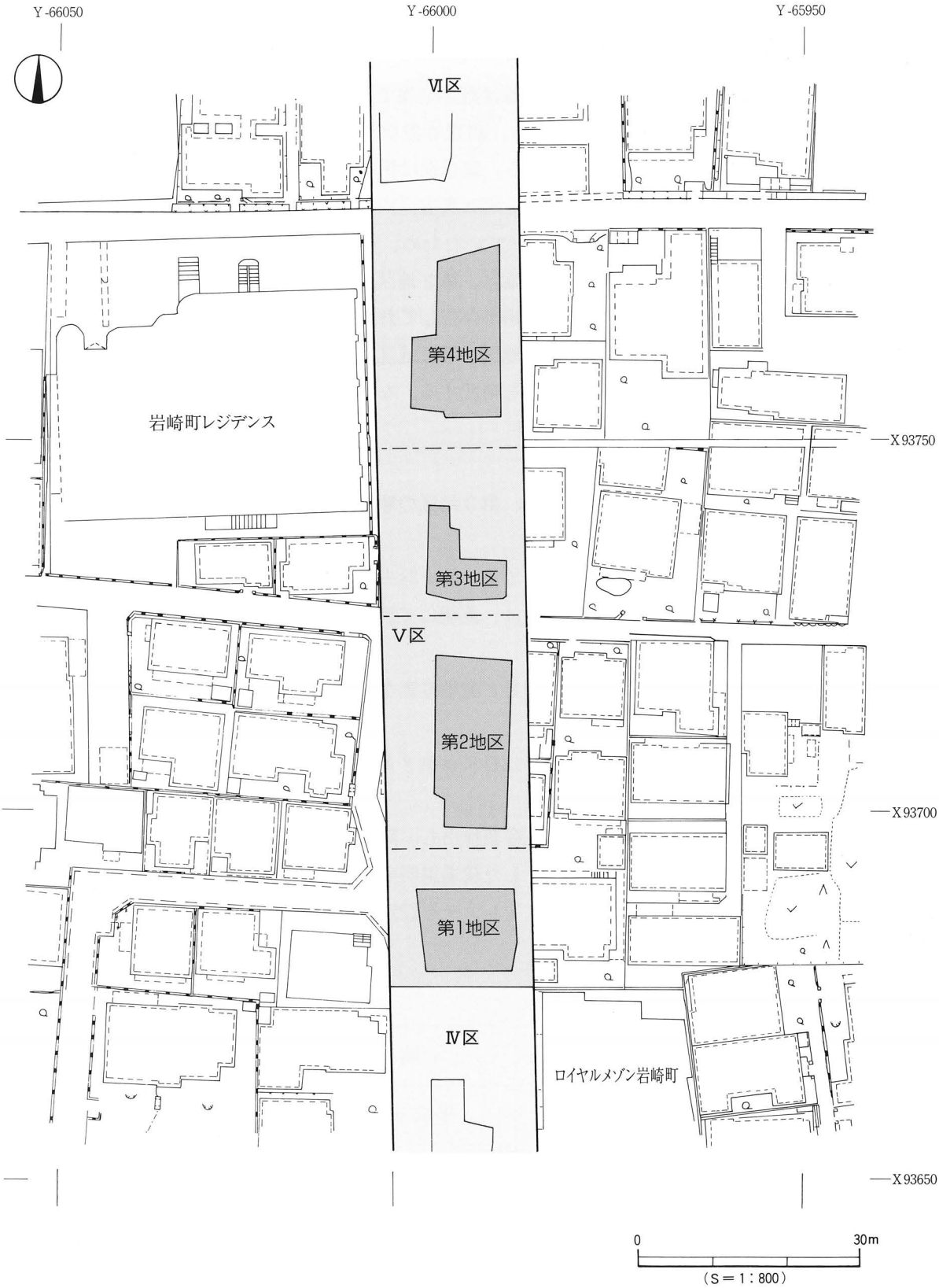
⑤ 第2地区と第4地区からは溝や土坑を多数検出し、両地区を同時に調査を行う。

⑥ 平成10年2月21日、一般市民を対象とした現場説明会を行う。

⑦ 各調査区の東壁、北壁、南壁に深掘りトレンチを設定し、旧地形復元に努める。

表12　調査地区一覧

地　区	対象面積（㎡）	調　査　期　間
1	324	平成9年9月1日～平成9年10月24日
2	558	平成9年12月12日～平成10年3月9日
3	414	平成10年3月4日～平成10年3月27日
4	576	平成10年1月6日～平成10年3月27日


Y-66050
Y-66000
Y-65950
Ⅵ区
第4地区
岩崎町レジデンス
X93750
第3地区
Ⅴ区
第2地区
X93700
第1地区
Ⅳ区
ロイヤルメゾン岩崎町
X93650
0
30m
（S＝1：800）

第77図　Ⅴ区測量図

2．層　　位（第78図、図版31～34）

(1) 基本層位

Ⅴ区は、調査以前はすべて既存宅地であった。現況では第1地区から第4地区に向けて高くなり、第1地区の南側では標高37.7m前後、第4地区の北側では標高38.6m前後である。堆積土層は、基本層位の第Ⅰ層から第Ⅸ層を検出している。

第Ⅰ層－近現代の造成に伴う客土で、地表下0.5～1.0mまで開発が行われている。

第Ⅱ層－Ⅳ区で検出した第ⅡB-②層灰黄褐色（10YR6/2）粘質土が、第1地区と第4地区で検出された。層厚10～20cmを測る。

第Ⅲ層－褐灰色（7.5YR4/1）土で、Ⅴ区全域に堆積する。層厚10～20cmを測る。本層上面は第1地区から第4地区に向けて高くなり、比高差は1.0mである。本層中からは、主に古代に時期比定される遺物が出土しており、このなかには灰釉陶器や緑釉陶器の出土もある。

第Ⅳ層－灰オリーブ色（5Y5/3）土で、第1地区全域と、第2地区の南端及び第4地区の中央部付近のみに堆積する。第1地区では層厚60～90cmを測り、最も厚い堆積をなし、第2・4地区では30cm前後の堆積になる。本層中からは、主に古墳時代の遺物が出土している。

第Ⅴ層－黒褐色（10YR2/2）土で、粘性の強い土壌である。第1地区を除くほぼ全域でみられ、層厚30～50cmを測る。本層上面は第Ⅲ層と同様に、北側へ向けて高くなっている。本層中からは、主に弥生時代中期～後期の遺物が出土している。また、炭化した種子が多数みられ、科学分析の結果、コナラ属の堅果（炭化子葉）であることが判明している。

第Ⅵ層－第Ⅴ層に黄色土が混入するもので、第1地区を除く地域にて部分的に堆積する。層厚10～20cmを測る。本層中からは、主に弥生時代前期末から中期初頭までの遺物が出土している。

第Ⅶ層－明黄褐色（10YR6/8）シルトで、第1地区を除くほぼ全域に堆積する。層厚20～80cmを測る。とりわけ、第2地区の中央部付近から第4地区の中央部付近までが厚い堆積状況をなす。土質の違いで2層に分層される。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅶ①層：明黄褐色シルトで、比較的粘性の強い土壌である。第4地区の北側を除く地域にみられ、層厚20～80cmを測る。

第Ⅶ②層：第Ⅶ①層と色調は同じであるが、土壌内に砂を多く含む。第3地区の北側を除くほぼ全域にみられ、層厚20～60cmを測る。

さて、第Ⅶ層は文京遺跡や松山大学構内遺跡をはじめとする道後城北地区でみられる、弥生時代遺構の最終検出面である黄色シルトに、色調や土質が類似する。このことから、本層は縄文時代後期前半～晩期の遺物包含層とする。

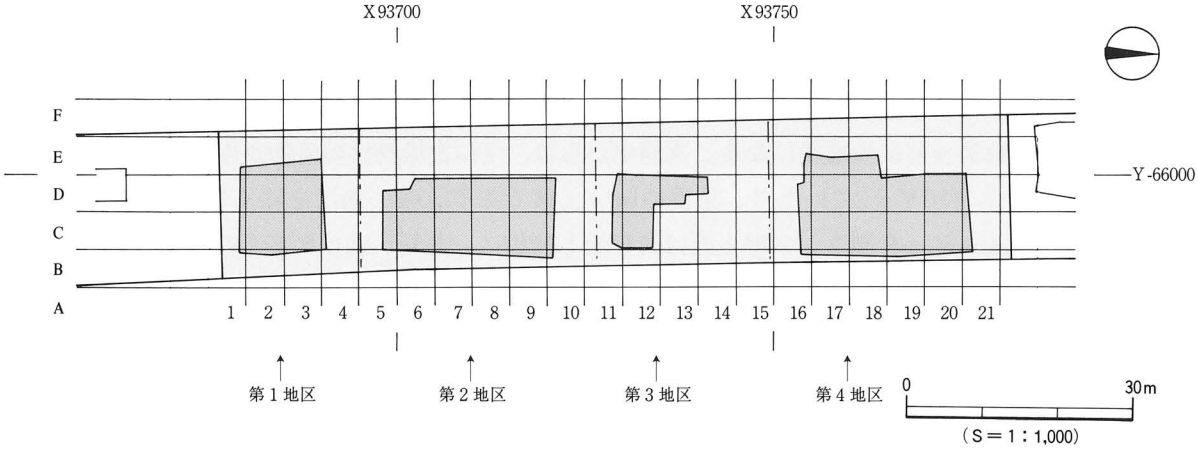
第Ⅷ層－灰～灰白色を呈する砂や砂礫層である。調査壁沿いに設定したトレンチの土層観察で確認した。堆積状況から石手川の氾濫による河川氾濫堆積物とみられる。本層中からの遺物の出土はない。堆積物や堆積状況の違いから、3種類に分けられる（ⅧC-①・ⅧC-②・ⅧC-③層）。

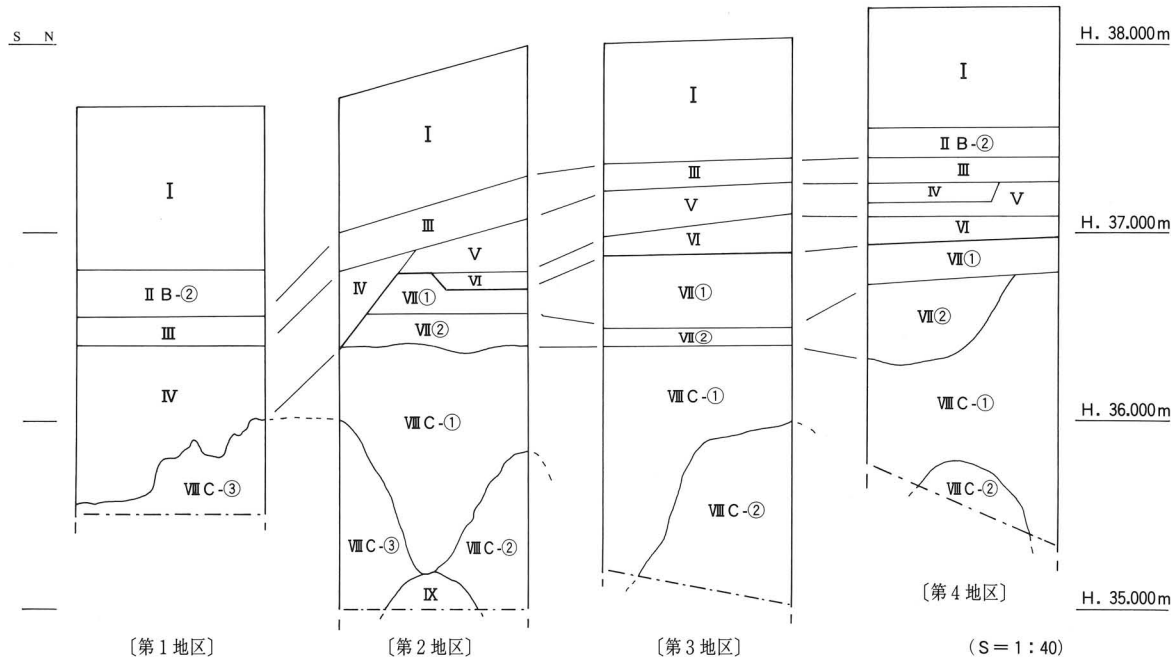
ⅧC-①層：第1地区と第2地区南端を除く全域でみられるもので、第Ⅶ層が覆う。灰色（7.5Y7/1）～オリーブ色（5Y5/4）の微砂と径5～10cm大の円礫からなる。ⅧC-①層上面は起伏に富み、第2地区中央部から第4地区中央部にかけて凹んでいる箇所がある。層厚は第2・3地区で20～140cm、第4地区が最も厚く170cmを測る。

Ⅷ C-②層：第２地区中央部付近から第４地区までにみられるもので、上面はⅧC-①層が覆う。灰白色（5Y8/1）の砂礫層からなり、礫径は最大10×20cm、最小３×５cmで、径５×10cm大の礫が大半を占める。礫と礫の間には、灰色の粗砂と小礫が混入する。

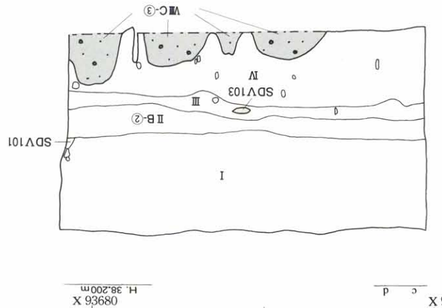
Ⅷ C-③層：第１地区と第２地区南端にみられるもので、上面はⅧC-①層が覆う。灰白色（7.5Y 7/1）の砂礫層からなり、礫径は最大で10×20cm、最小で３×５cm、径５×10cm大の礫が大半を占める。礫と礫の間には灰色の砂が混入する。上面は起伏に富み、下面は未検出であり、現状で層厚１m前後である。

第Ⅸ層－第２地区の最下部でみられる石手川の洪積礫層である。本層上面は地表下約2.5m、標高35.2m前後であり、径20×30cm大の円礫が密集している。

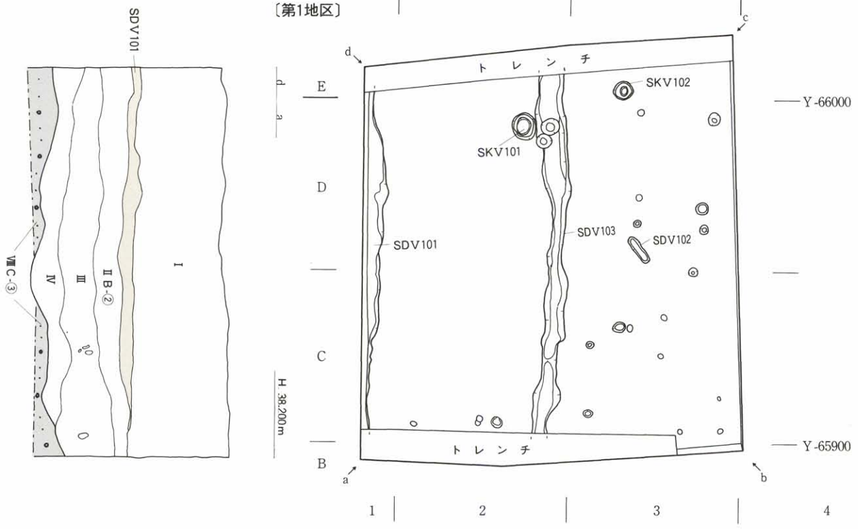




第78図　Ⅴ区区割図・土層模式図

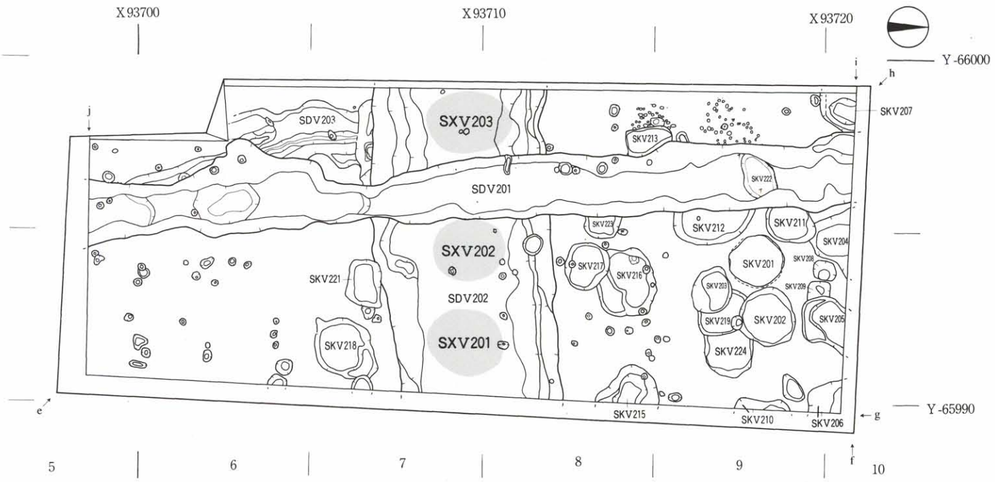


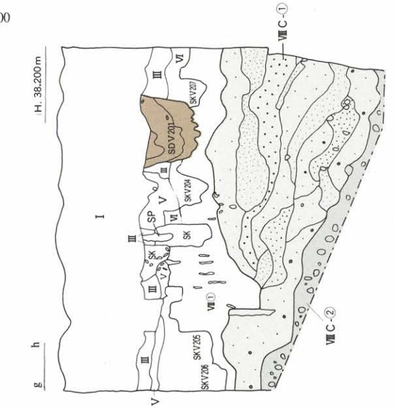
〔第1地区〕

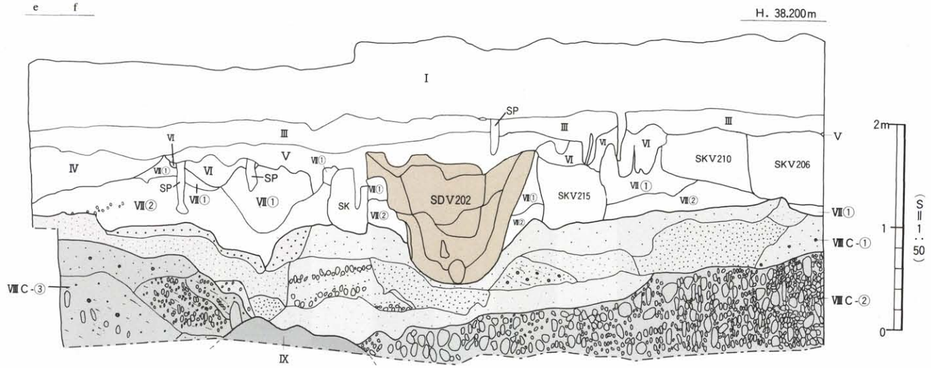


※ 遺構配置図、土層図の縮尺は平面が1/150、断面の深さは1/50である。

〔第2地区〕

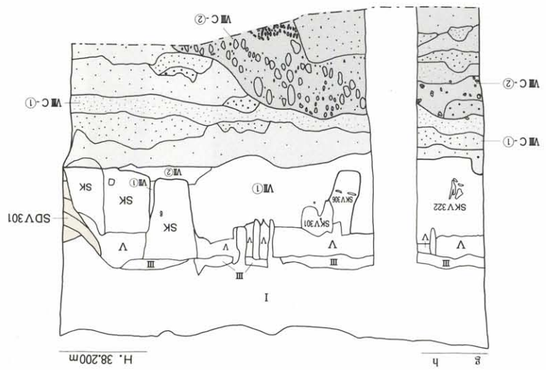


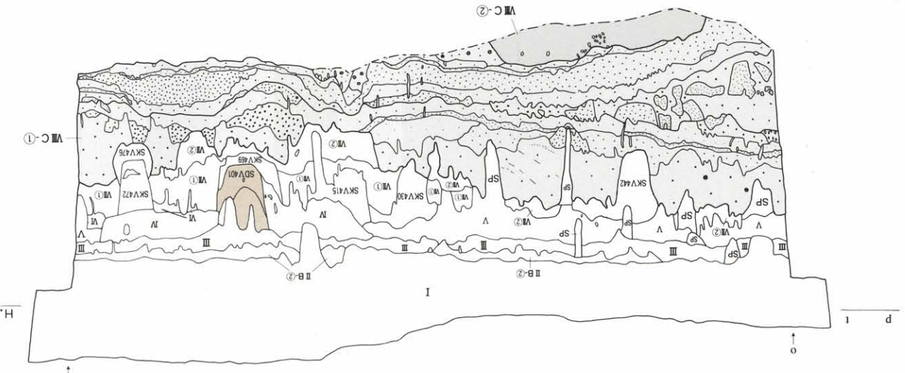




Ⅰ 表土
Ⅱ B-② 灰黄褐色(10YR6/2)土
Ⅲ 褐灰色(7.5YR4/1)土
Ⅳ 灰オリーブ色(5Y5/3)土
Ⅴ 黒褐色(10YR2/2)土
Ⅵ 黒褐色(10YR2/2)土＋明黄褐色(10YR6/8)土
Ⅶ-① 明黄褐色(10YR6/8)シルト
Ⅶ-② 明黄褐色(10YR6/8)シルトに砂が少量混入
Ⅶ C-① 灰色(7.5Y7/1)～オリーブ色(5Y5/4)微砂＋砂礫
Ⅶ C-② 灰白色(7.5Y7/1)砂礫
Ⅶ C-③ 灰白色(5Y8/1)砂礫
Ⅸ 洪積礫層

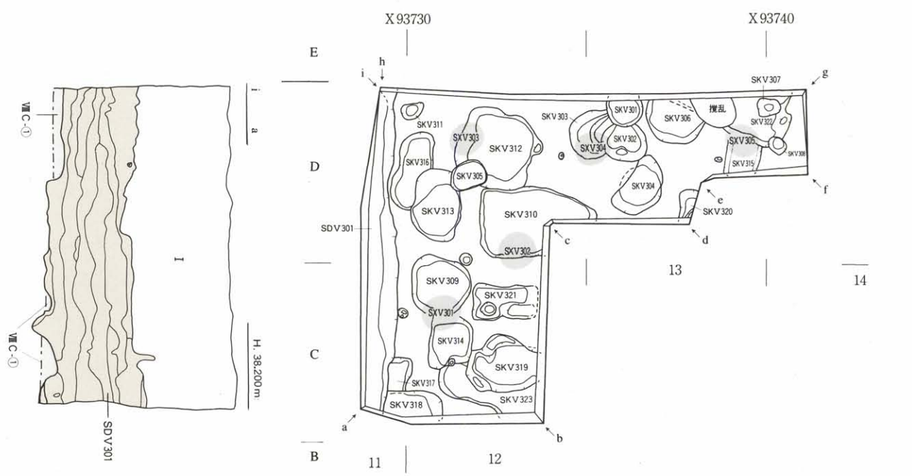
第79図 Ⅴ区〔第1地区・第2地区〕遺構配置図・土層図

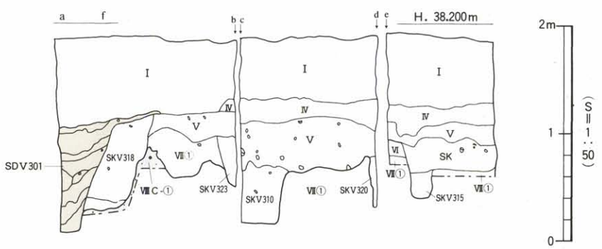


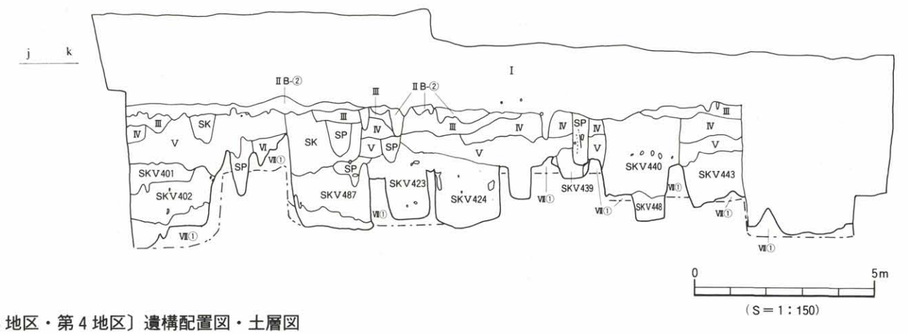


〔第3地区〕

〔第4地区〕







I	表土
ⅡB-②	灰黄褐色(10YR6/2)土
Ⅲ	褐灰色(7.5YR4/1)土
Ⅳ	灰オリーブ色(5Y5/3)土
Ⅴ	黒褐色(10YR2/2)土
Ⅵ	黒褐色(10YR2/2)土＋明黄褐色(10YR6/8)土
Ⅶ①	明黄褐色(10YR6/8)シルト
Ⅶ②	明黄褐色(10YR6/8)シルトに砂が少量混入
ⅧC-①	灰色(7.5Y7/1)～オリーブ色(5Y5/4)微砂＋砂礫
ⅧC-②	灰白色(7.5Y7/1)砂礫

第80図　Ⅴ区〔第3地区・第4地区〕遺構配置図・土層図

(2) 検出遺構・遺物（第79・80図、図版35～37）

Ⅴ区の調査では、縄文時代後期から中世までの遺構と遺物を検出した。

縄文時代の遺構は未検出であるが、弥生時代の遺構、包含層から後期～晩期の深鉢片が出土した。弥生時代では、前期末から中期初頭までの溝２条と土坑100基、中期後半から後期後半までの土坑10基がある。遺物は、溝から前期末～中期初頭の土器が多数出土している。古墳時代の遺構には土坑４基、古代の遺構には溝３条と土坑４基、中世の遺構には溝３条と土坑４基がある。

各地区で検出した遺構は表13にまとめた。このうち、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される土坑は検出数が多く、個別の遺構番号は記載せず、検出個数のみを記した。

なお、第７章では検出した遺構数や出土した遺物量などを考慮し、遺構と遺物の説明は、時代別に以下のように報告している。最初に３．弥生時代前期末～中期初頭、４．弥生時代中期～後期、５．古墳時代～古代、６．中世の遺構と遺物とし、最後に７．その他の遺構と遺物とする。

また、調査にあたり調査区内を５ｍ四方のグリットに分けた。調査区全体を通して東から西へＢ・Ｃ…Ｆ、南から北へ１・２・３…21とし、Ｂ１・Ｂ２…Ｆ21といったグリット名を付けた。

表13　Ⅴ区遺構一覧

地区／時代	第１地区	第２地区	第３地区	第４地区
弥生時代前期末～中期初頭		ＳＤＶ202 ＳＤＶ203 ＳＫ（21基）	ＳＫ（18基）	ＳＫ（61基）
弥生時代中期～後期		ＳＫＶ203 （中期後半）	ＳＫＶ301（中～後期） ＳＫＶ307（後期） ＳＫＶ308（後期）	ＳＫＶ405（後期後半） ＳＫＶ406（後期後半） ＳＫＶ410（後期） ＳＫＶ435（後期後半） ＳＫＶ456（後期） ＳＫＶ467（後期）
古墳時代				ＳＫＶ413（後期） ＳＫＶ418（後期） ＳＫＶ451（後期） ＳＫＶ475（後期）
古代	ＳＤＶ103（８世紀）	〔ＳＤＶ201 ――――（同一の溝）――――		ＳＤＶ401〕（８世紀） ＳＫＶ440（８世紀） ＳＫＶ443（８世紀） ＳＫＶ454（古代） ＳＫＶ485（古代）
中世	ＳＤＶ101（15世紀以降） ＳＤＶ102（15世紀以降） ＳＫＶ101（14世紀以前） ＳＫＶ102（14世紀以前）		ＳＤＶ301（中世） ＳＫＶ311（14世紀以前） ＳＫＶ318（14世紀以前）	

3．弥生時代前期末～中期初頭の遺構と遺物

V区では弥生時代前期末～中期初頭の溝２条、土坑100基、土器溜り９基を検出し、第Ⅵ層中からは該期の遺物が出土している。

(1) 溝

ＳＤＶ202（第81・82図、図版37～39）

第２地区ほぼ中央部、Ｃ７～Ｄ８区で検出した。第Ⅶ層上面での検出であり、第Ⅵ層が一部覆う。後述するが、溝の南側壁体の一部はＳＫＶ221（土坑Ｃ）に切られている。ここでは、発掘調査時の工程をふまえて、溝の構造や溝内から出土した遺物の説明を行う。

１）調査工程

調査では、弥生時代中～後期の遺物包含層である第Ⅴ層を人力で掘り下げ、掘り下げが終了した時点で溝の外観がぼんやりと検出された。同時に、第Ⅵ層が溝を部分的に覆っていることを確認した。その後、第Ⅵ層の掘り下げを進めた。掘り下げ終了後、第Ⅶ層上面にて溝の平面プランを確認した。

はじめに、調査区東壁及び西壁沿いに幅50cm前後のトレンチを設定し、土層観察を行った。次に、溝のほぼ中央部付近に溝に直交する南北方向のトレンチを設定した。東壁、西壁及び中央トレンチの土層観察では、溝の埋土は27層に細分された。堆積状況を観察すると、いずれの土層壁にも溝の中位付近にて、土層の不整合面がみられたことから、土壌堆積中に二次的な掘削（再掘削）が行われたものと判断した。これらのことから、埋土を以下のように大きく３層に分層した。

再掘削以前に堆積した土層を「下層」、再掘削後に堆積した土層を「中層」、溝が埋没する最終段階の土層を「上層」とし、それぞれに土層の掘り下げと遺物の取り上げを行った。掘り下げにおいてはまず、溝の中央部に東西及び南北方向に直交する幅50cm前後のベルトを設定し、続いて、上層部分の掘り下げを開始した。上層からは土器の破片が多数出土した。

上層部分の掘り下げを終了し、中層部分を検出した。中層の範囲は、上面で幅2.7～3.0ｍを測り、厚さは30～50cmの堆積であった。中層からは接合すると完形品になる土器や、大型の土器片が出土した。とりわけ西壁付近からは、大型壺の底部（第91図Ｖ092）がほぼ原型をとどめて出土している。

中層部分の掘り下げを終了し、下層部分を検出した。下層は溝の壁体及び基底面にかけて堆積がみられた。下層掘り下げ時に炭化物が層をなして検出されたが、期間的な余裕がなく、炭化物の広がりは図化せず、掘り下げを進めた。

下層の掘り下げを終了し、溝の壁体及び基底面を検出した。溝の壁体中位付近から基底面までは、第Ⅷ層まで掘られて構築されていることを確認した。

東西・南北方向のベルトを残した状態で、写真撮影を行った。１月22日、溝の埋土を採取し、(株)古環境研究所に土壌分析を依頼した。2月21日、現地説明会をする。ベルトや下層出土の遺物が残った状況で溝の説明を行った。溝の掘り下げが終了した後、完掘状況写真を撮影した。

２）概　　略

ＳＤＶ202検出時の平面形状は、やや北側へ向けて湾曲する。溝の規模は最大幅5.5m、最小幅4.8m、深さは検出面下1.42～1.50ｍである。溝壁体上位は第Ⅶ層明黄褐色シルトであるが、壁体下位及び基底面は第Ⅷ層に及ぶ。断面形態は緩やかな逆台形状を呈し、壁面の傾斜角30～35°を測る。壁体の一

部は水流によりオーバーハングし、くぼんでいる。

溝の埋土は前述したとおり27層（①～㉗層）に細分される。このうち①・②層は「上層」、③～⑤層は「中層」、⑥～㉗層を「下層」として、遺物の取り上げや埋土の掘り下げを行った。

上層は、色調が黒褐色を呈し、粘性の強い土壌である。上層上面での検出幅は3.3～4.2m、層厚は10～15cmを測り、北東－南西方向に堆積する。

中層は、色調が褐色を呈する粘性の強い土壌と明黄褐色シルトからなる。とりわけ、中層中位には明黄褐色シルト（⑤層）が溝中央部よりやや北側に、ほぼ直線状に堆積する。

下層は、色調がオリーブ褐色～灰オリーブ色を呈する土壌である。下層上位はやや粘性の強い土壌であるが、下位は微砂や粗砂を含む土壌になる。上位、下位層共に黄色土が班点状もしくはブロック状に混入している。また、下層中位から下位にかけて、溝の中央部付近には、炭化物の面的な広がりが認められた。少なくとも４面の炭化物層が、断面観察で確認された。

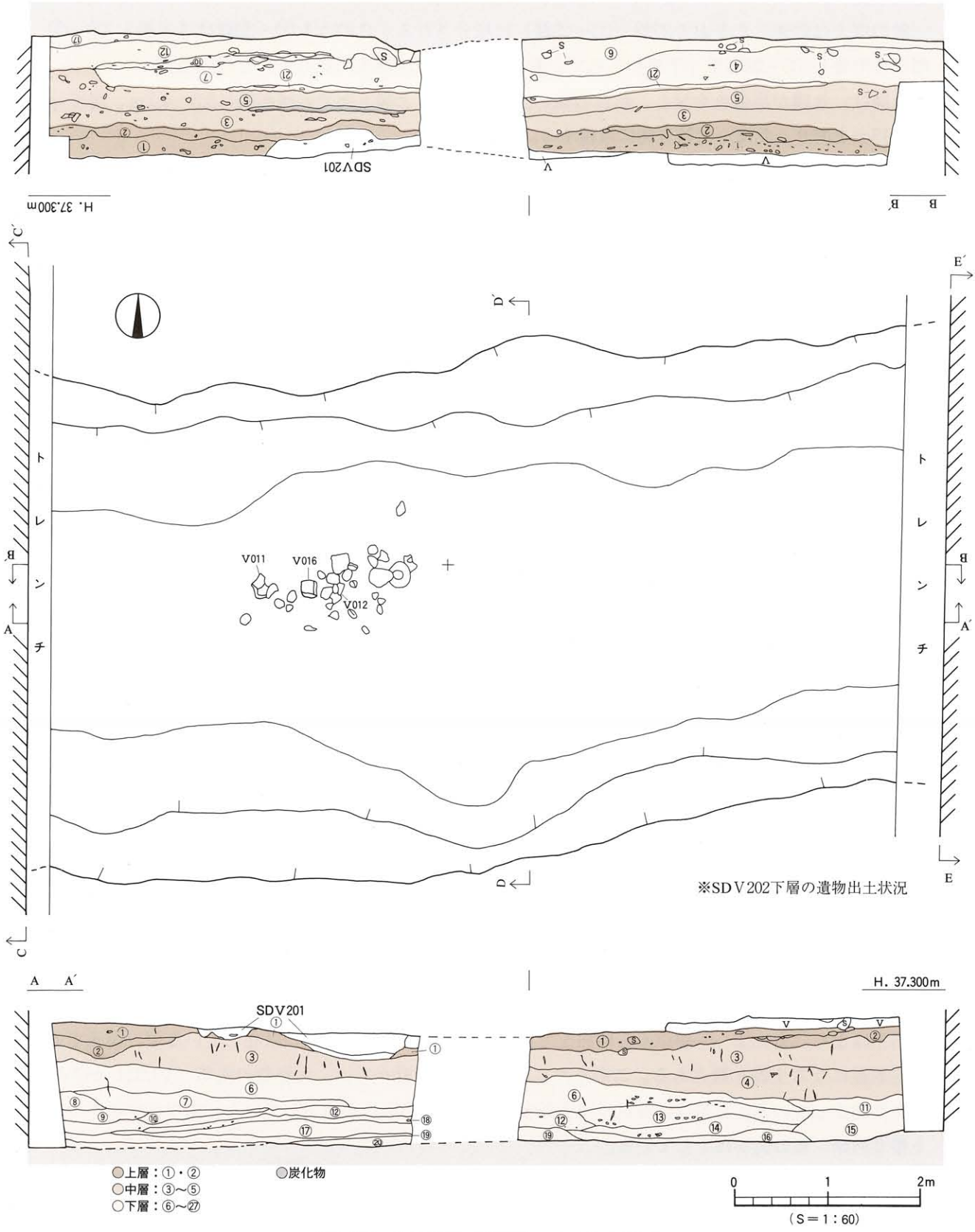
溝の堆積状況は、埋没当初は溝の北側壁体から土砂が堆積し、その後は、溝の両側から土砂が堆積している。特に、下層中には微砂や粗砂を含むことから、下層堆積当時は、溝の内部は滞水状態であったと推測された。

遺物は上層・中層・下層から、それぞれ出土している。土製品は、主に弥生時代前期末～中期初頭に時期比定されるもので、わずかに下層中より縄文土器が出土している。溝内から出土した土製品を観察すると、上・中・下層で時期差はあまり認められず、概ね30～40年の内に、溝は埋没したものと推測される。土器の器種構成は、甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・蓋形土器、ミニチュア品である。器種構成比は、甕形土器46％、壺形土器31％、鉢形土器17％、蓋形土器１％、高坏形土器１％、その他４％となる。また、山口県からの搬入土器の出土もある。

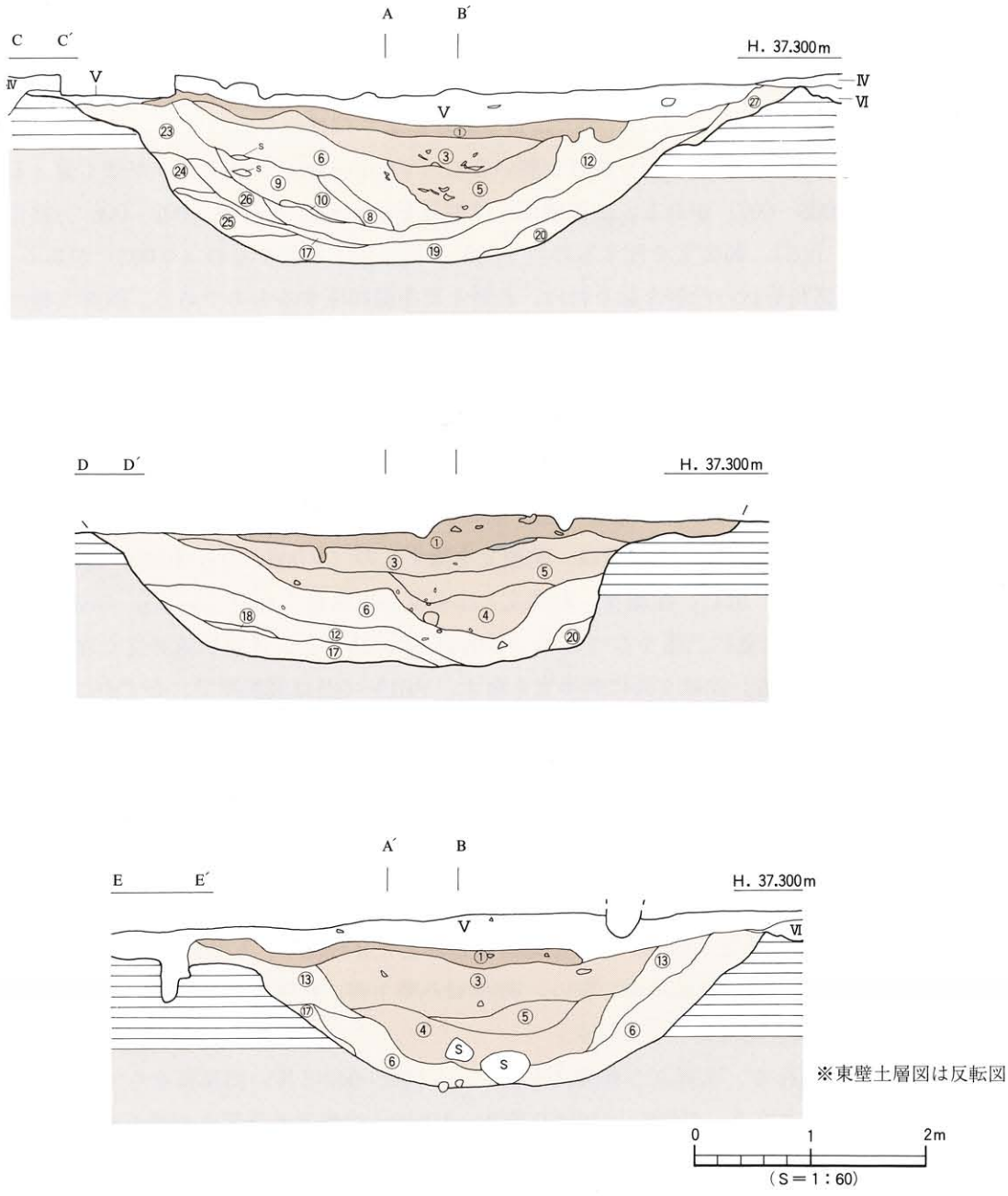
各層における遺物の出土状況は、下層中から比較的大型の土器片が出土している。特に、溝中央部付近に遺物が集中している。基底面付近からは、甕形土器の上半部のみがほぼ完全な形で残っていたり、その場で割れた土器が狭い範囲で出土している。この中には、復元すると完形になる土器が多数ある。いずれの土器も二次的な焼成を受けた痕跡は認められない。特筆すべきは、ヘラ描き沈線文を施した甕形土器（V012）と２条１対の工具で施文された甕形土器（V016）が、溝の基底面付近でほぼ並んだ状態で出土していることである。後者は埋土上位からの混入品とは考えがたく、同時期に両者が存在していたものと判断される。石器は、サヌカイト製の石鏃や打製石庖丁が出土し、調査区東壁の基底面付近からは、径30～50cm大の円礫が２ヶ出土している。このほか、下層中からは骨片が数点出土しており、分析の結果、猪の歯であることが判明している。

中層では下層と同様、溝中央部付近に遺物が集中している。明黄褐色シルト（⑤層）内からは遺物の出土はなく、主に③・④層中からの出土であった。土器は大小の破片が散在しているが、復元すると完形品になる土器も数点ある。このうち、調査区西壁付近からは、大型壺の底部（V092）が③層中より出土している。石器は、柱状片刃石斧と、磨製石剣の破片が出土している。また、中層からも下層と同様、猪の歯が出土している。

上層では、中・下層と比較すると遺物が溝全域に散在し、集中的な出土状況ではない。土器は、大小破片が多数出土しているが、出土量や復元完形品の量は、中・下層に比べ少ない。石器は、緑色片岩製の抉入柱状片刃石斧が出土している。



第81図　ＳＤＶ202測量図・ベルト土層図



※東壁土層図は反転図

【上　層】
① 黒褐色〔7.5YR3/2〕土
② 黒褐色〔7.5YR3/2〕土＋黄色土
【中　層】
③ 褐色〔7.5YR4/6〕土
④ 褐色〔7.5YR4/3〕土(炭化物、焼土混入)
⑤ 明黄褐色〔10YR6/8〕シルト
【下　層】
⑥ オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕土(黄色土が斑点状に混入)
⑦ オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕土
⑧ オリーブ色〔5Y3/1〕土
⑨ 暗灰黄色〔2.5Y4/2〕土
⑩ 灰オリーブ色〔5Y4/2〕土(炭化物混入)
⑪ オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕土(黄色土が少量混入)
⑫ 灰オリーブ色〔5Y5/3〕土(黄色土が斑点状に混入)
⑬ オリーブ褐色〔2.5Y4/6〕土(黄色土が斑点状に混入)
⑭ オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕土(黄色土が斑点状に混入)
⑮ オリーブ褐色〔2.5Y4/6〕土(黄色土がブロック状に混入)
⑯ 灰黄色〔2.5Y6/2〕土(砂混入)
⑰ 灰オリーブ色〔5Y6/2〕粘質土
⑱ 灰オリーブ色〔5Y5/2〕土(炭化物混入)
⑲ 灰オリーブ色〔5Y5/2〕微砂(炭化物混入)
⑳ 灰オリーブ色〔5Y6/2〕砂
㉑ オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕土
㉒ オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕土
㉓ オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕土＋黄色土
㉔ オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕砂
㉕ オリーブ褐色〔2.5Y4/6〕粗砂
㉖ 灰オリーブ色〔5Y5/3〕土
㉗ 灰オリーブ色〔5Y6/2〕土
● 炭化物

第82図　ＳＤＶ202土層図〔上：西壁、中：ベルト、下：東壁〕

ＳＤＶ202下層出土遺物〔第83～87図（Ｖ001～058）、図版47〕

ＳＤＶ202下層からは、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、ミニチュア品の他、縄文土器と石鏃、石庖丁がそれぞれ１点ずつ出土している。

甕形土器（Ｖ001～021）Ｖ001～007は折り曲げにより口縁部を成形する。膨らみをもつ胴部に屈曲・屈折する口縁部をもち、折り曲げが弱いもの（Ｖ001～004）と折り曲げが強く逆「Ｌ」字状を呈するもの（Ｖ005～007）がある。口縁端面には刻目を施すもの（Ｖ001・002・006）、刻目を施さないもの（Ｖ004・005）、刺突文を施すもの（Ｖ007）、指頭押圧を施すもの（Ｖ003）がある。Ｖ003は口縁部下に断面三角形状の凸帯を貼り付け、凸帯上を指頭押圧するものである。胴部文様は無文のもの（Ｖ001・005）、沈線文だけのもの（Ｖ004・006）、沈線文と刺突文が組み合うもの（Ｖ002・007）、沈線文と凸帯文が組み合うもの（Ｖ003）の４種類がある。

Ｖ008～017は粘土紐を貼り付けることで、口縁部を成形する。口縁外面上端に接するもの（Ｖ008～016）と、口縁端部よりやや下がる位置にあるもの（Ｖ017）とがある。前者は口縁部の断面形が三角形状を呈する。口縁端面には刻目を施すもの（Ｖ009～012・014～016）と、刻目を施さないもの（Ｖ008・013）とがある。胴部文様は、沈線文を施すもの（Ｖ008～011・016）、沈線文と刺突文の組み合うもの（Ｖ012～014）、沈線文・刺突文と山形文が組み合うもの（Ｖ015）の3種類がある。口縁端部より下がった位置に凸帯をもつもの（Ｖ017）は、凸帯上に連鎖状刻目文を加えるものである。Ｖ018は胴部片である。沈線文間に刺突文を施す。Ｖ019～021は底部片で、わずかに上げ底となる。

壺形土器（Ｖ022～045）Ｖ022・023は大型品である。短く外反する口縁部をもつ。口縁部内面に断面三角形状の凸帯をもつ。Ｖ023は頸部外面に沈線文４条（２条１組）以上をもつ。

Ｖ024～026は短く外反する口縁部をもつ。Ｖ024・025は頸部に沈線文を施す。Ｖ027～030は外傾する長い口頸部をもつ。いずれも口縁部内面に凸帯をもつ。Ｖ027は口頸部境に径５㎜大の円孔を２ヶ穿つ。Ｖ028の凸帯は全周せず、一部が注口状になる。Ｖ029は凸帯上に押圧を施す。Ｖ030は耳状の把手部をもち、円孔を２ヶ穿つ。凸帯上面には竹管文を２列施す。Ｖ031～033は頸部片である。内面に凸帯をもち、Ｖ032・033は全周しない。Ｖ031は凸帯上面に竹管文を２列施す。Ｖ034は頸胴部片で、頸胴部境にヘラ描き沈線文を１条施す。

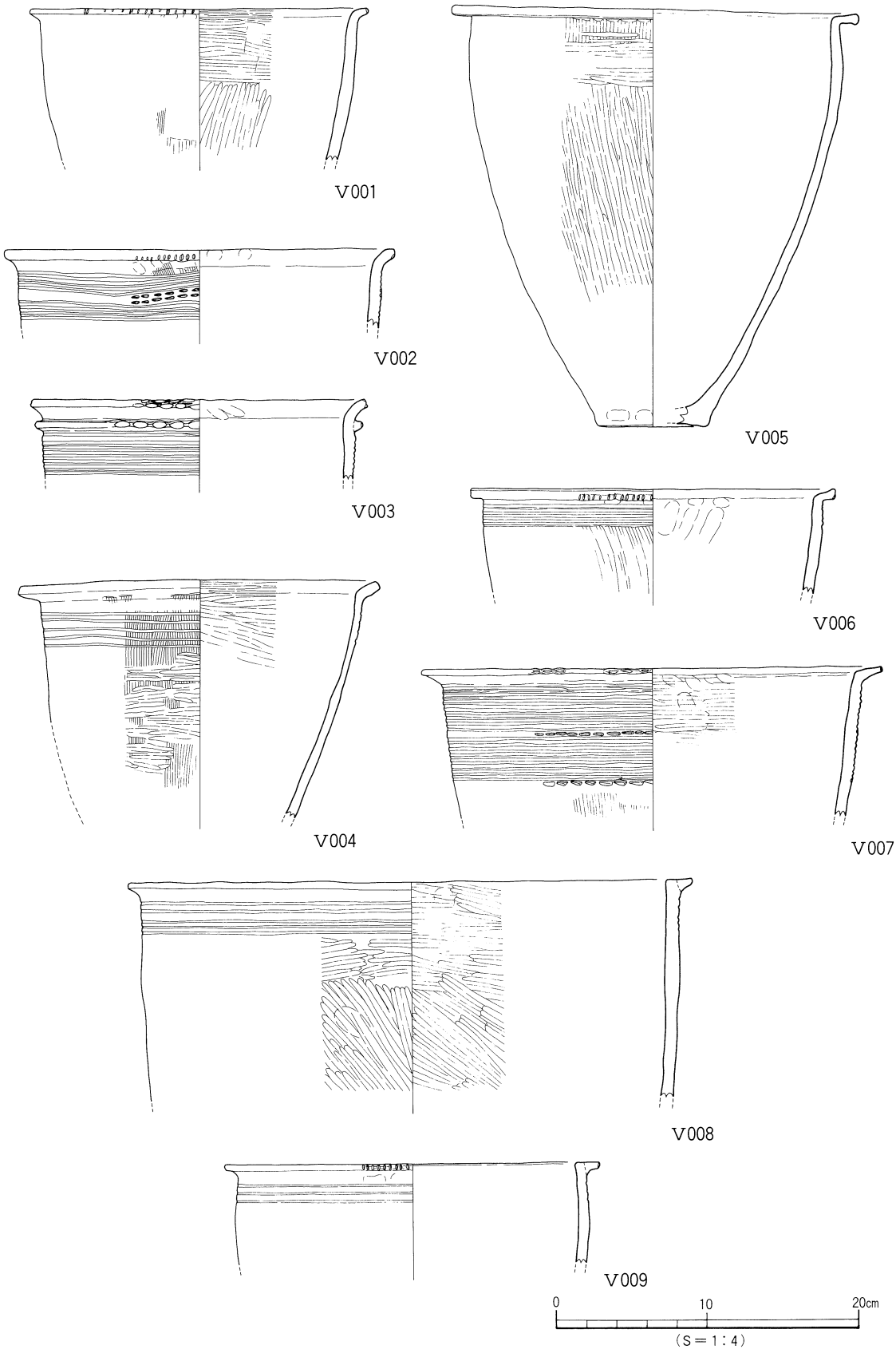
Ｖ035は口頸部片で、沈線文と刺突文を施す。Ｖ036～040は長い口頸部をもつ壺形土器の胴部片、Ｖ036は沈線文と刺突文、Ｖ037・038は凸帯文、Ｖ040は沈線文と凸帯文が組み合う。なお、Ｖ037・038は凸帯上に連鎖状刻目文を施し、Ｖ040は凸帯上にヨコ方向の沈線文と刻目文を施す。

Ｖ041～045は底部片である。Ｖ041～043は平底、Ｖ044・045は上げ底の底部である。Ｖ042の外面には弧状のヘラ描き沈線文がみられる（ヘラ記号か？）。

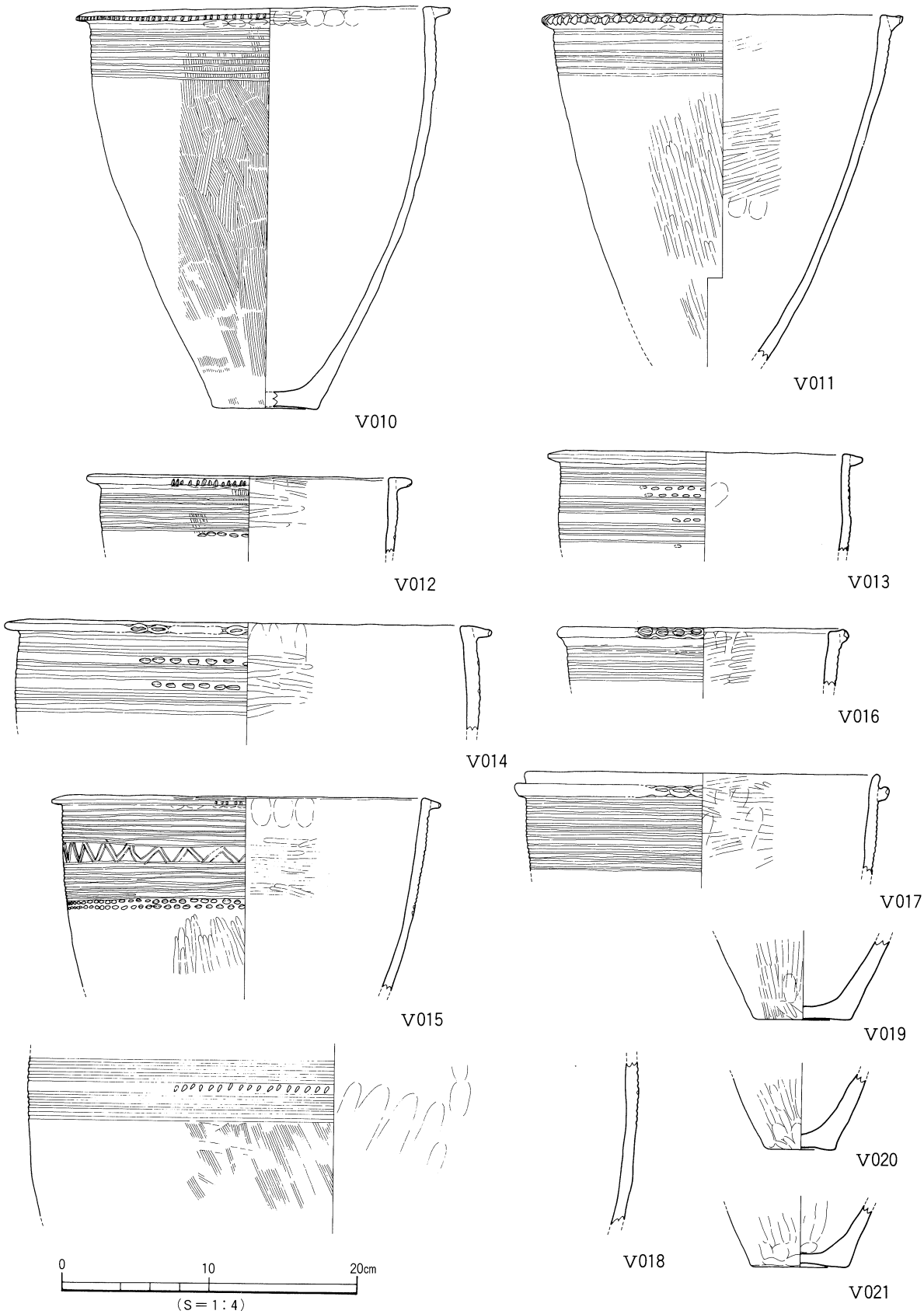
鉢形土器（Ｖ046～052）Ｖ046・047は口縁部が緩やかに外反する。Ｖ048～050は口径が24～35㎝となり、やや大きい法量をもつ。口縁部は貼り付けによる成形技法をとる。なお、Ｖ050は断面長方形状の口縁部となり、搬入品である（山口県）。Ｖ051は貼り付け口縁、Ｖ052は直口口縁のものである。Ｖ051は口縁内面に刻目を施す。Ｖ052は内湾して立ち上がるもので、口縁端部は細く丸い仕上げとなる。

注）連鎖状刻目文は、甕形土器や壺形土器の口縁端部や貼り付け凸帯文上に加えられる刻目で、篦先状の工具で押捺を加え、それを上下に分けて、いわゆる連鎖状に作るものである。

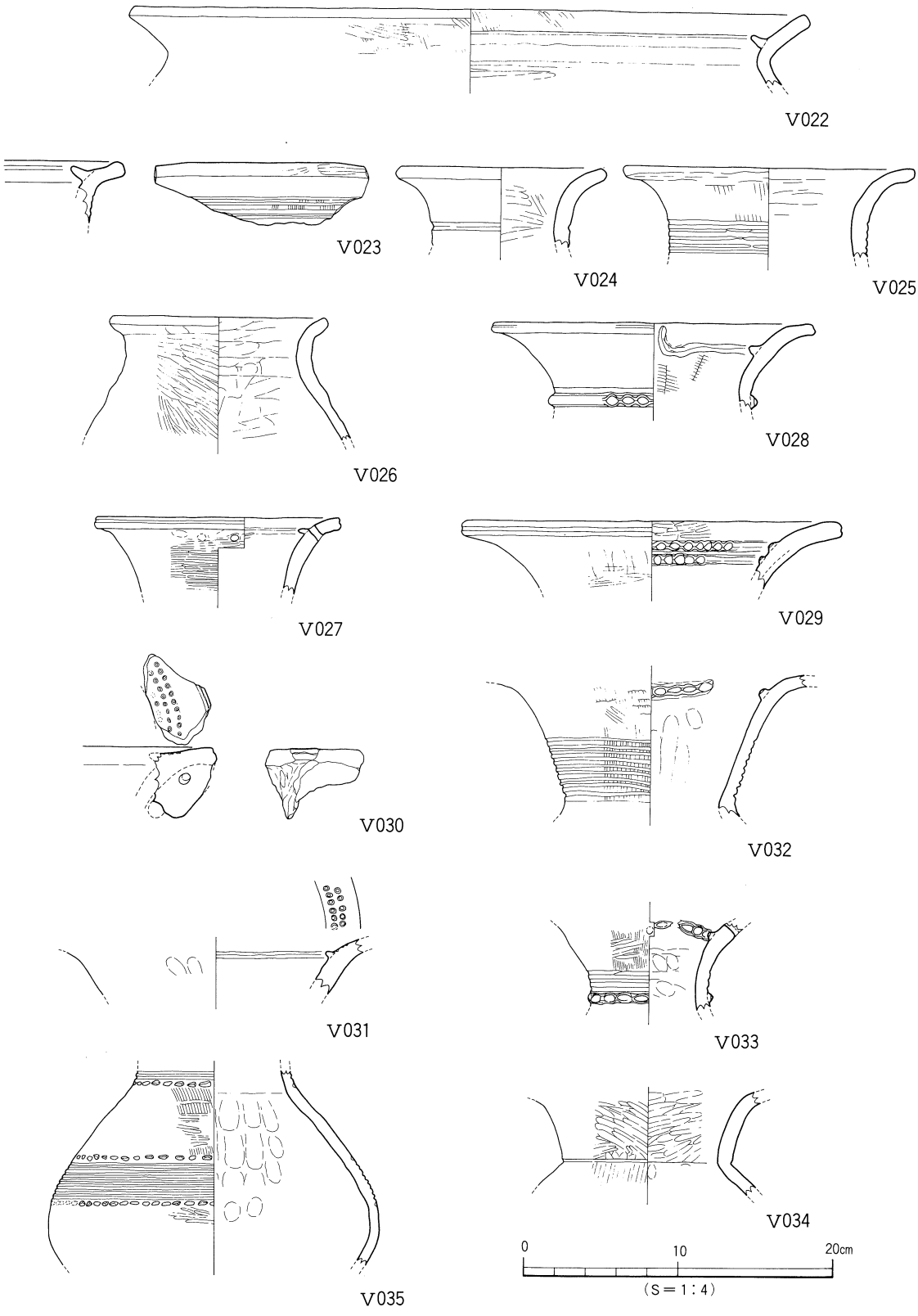
〔文献〕名本二六雄　1990「冠山」『遺跡』32



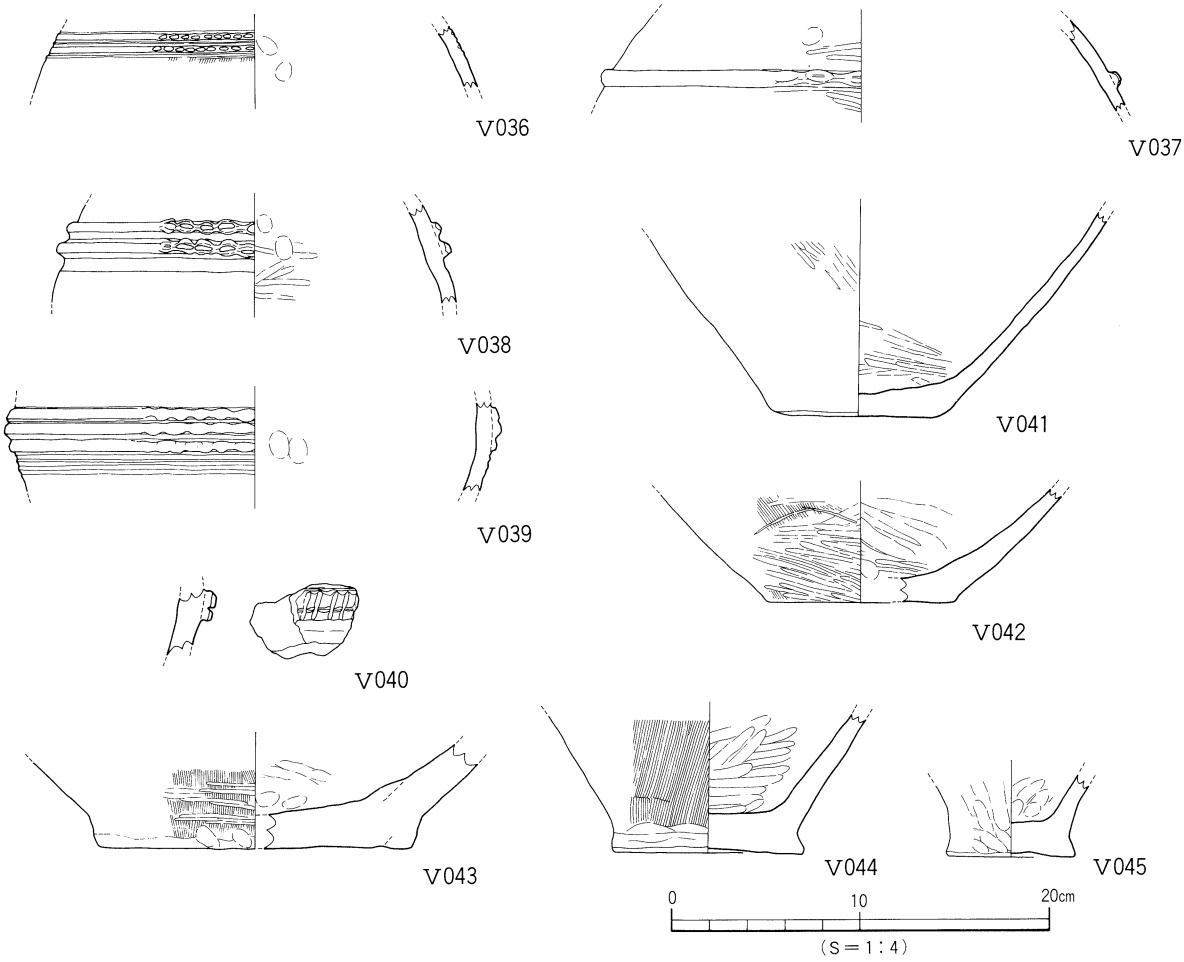
第83図　ＳＤＶ202下層出土遺物実測図(1)



第84図　ＳＤＶ202下層出土遺物実測図(2)



第85図　ＳＤＶ202下層出土遺物実測図(3)



第86図　ＳＤＶ202下層出土遺物実測図(4)

コシキ形土器（Ｖ053）Ｖ053は所謂「コシキ」への転用品である。甕形土器の底部を、焼成後に穿孔したものである。

蓋形土器（Ｖ054）Ｖ054は蓋形土器である。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く仕上げるものである。天井部は中央部が凹む。

ミニチュア品（Ｖ055）Ｖ055はミニチュア品。平底であり、甕形土器のミニチュア品か。

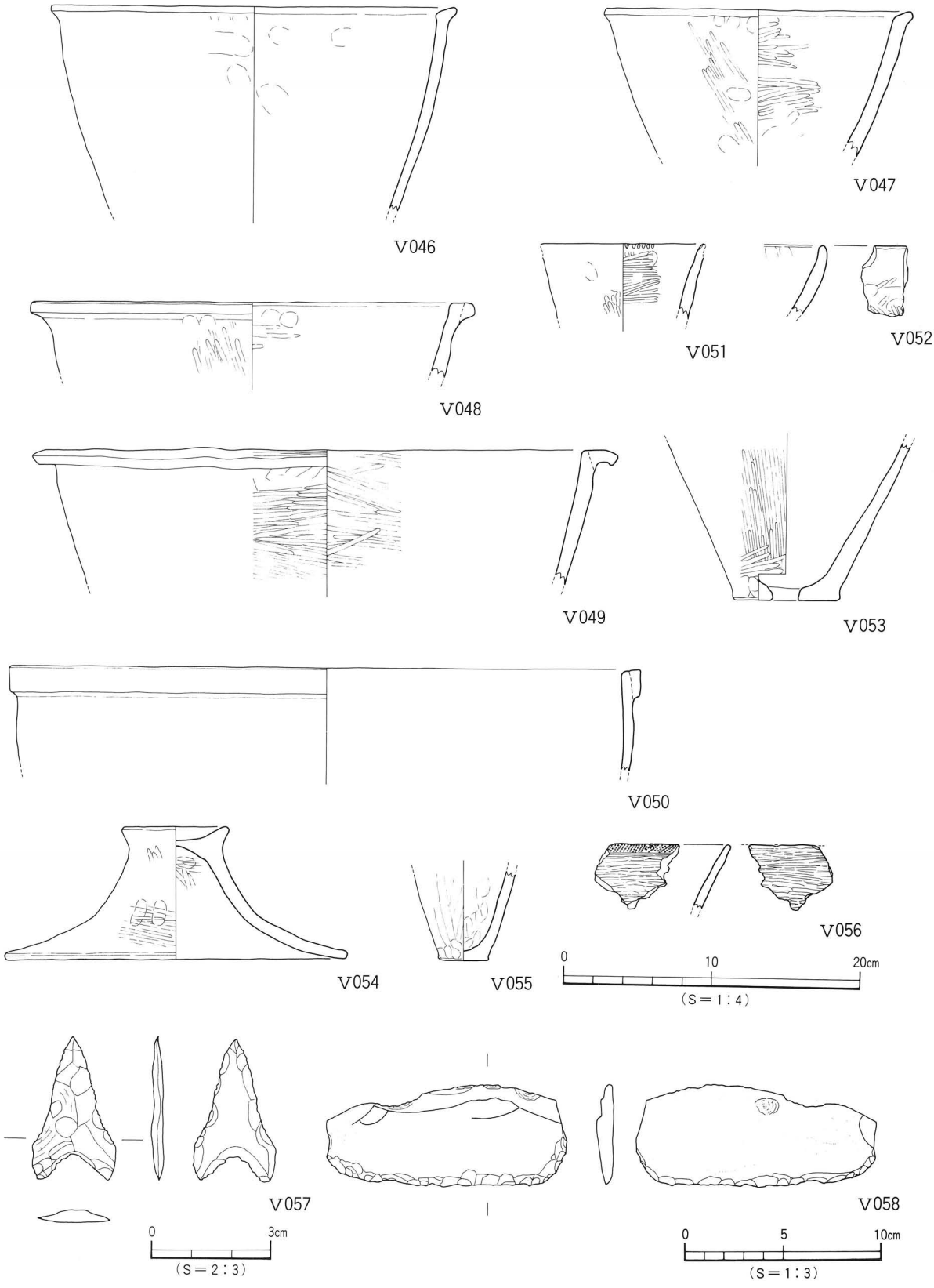
縄文土器（Ｖ056）Ｖ056は縄文時代後期の深鉢の口縁部である。口縁内面にＲＬ（すりけし）縄文を施す。

石鏃（Ｖ057）Ｖ057は凹基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。完形品。サヌカイト製。

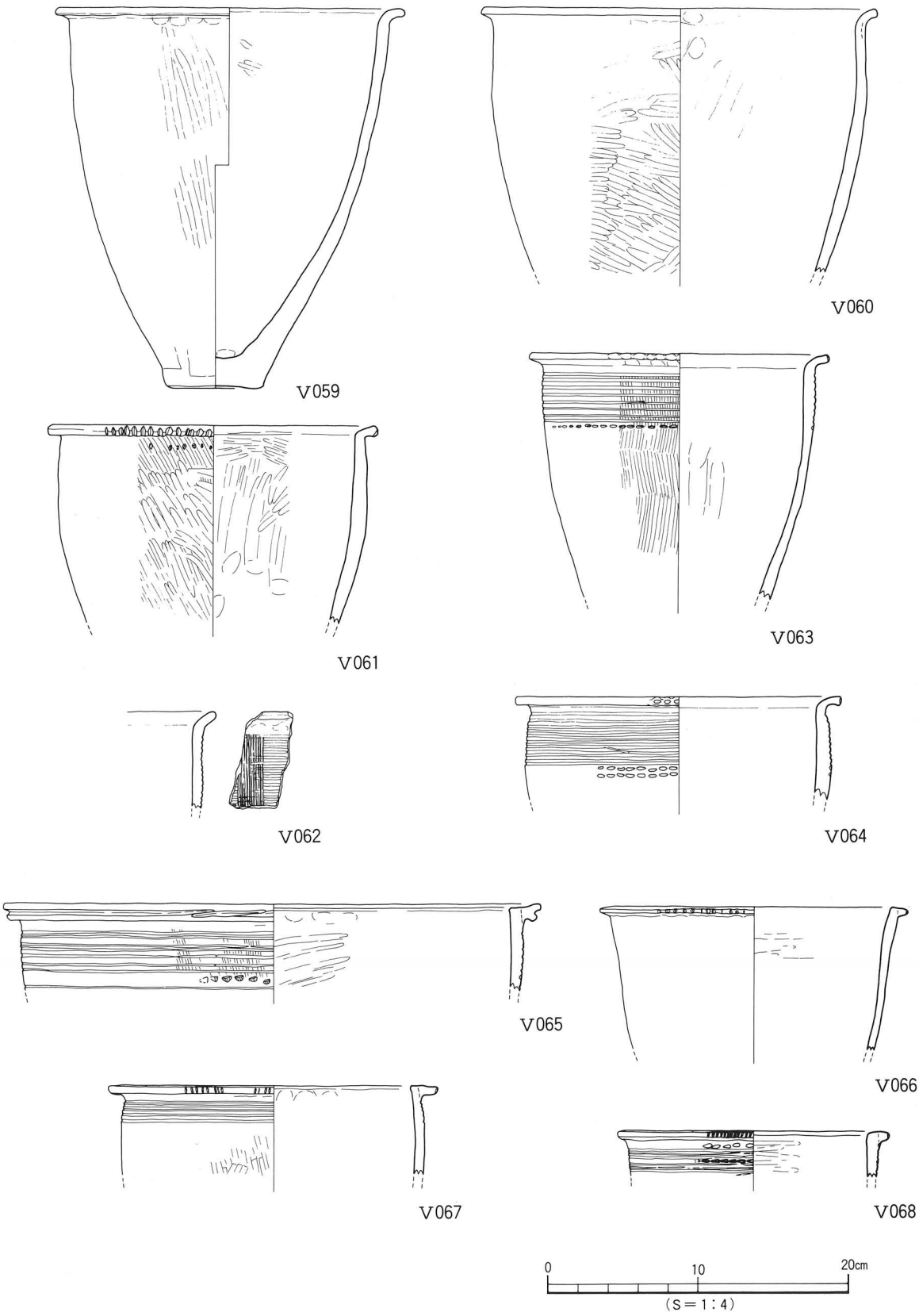
石庖丁（Ｖ058）Ｖ058は打製の石庖丁である。両端は折られており、刃部は敲打、背部には層状の剥離がそのまま残る。完形品。サヌカイト製。

ＳＤＶ202中層出土遺物〔第88～91図（Ｖ059～099）、図版48〕

ＳＤＶ202中層からは、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、蓋形土器、ミニチュア品の他、柱状片刃石斧と石剣がそれぞれ1点ずつ出土している。



第87図　ＳＤＶ202下層出土遺物実測図(5)



第88図　ＳＤＶ202中層出土遺物実測図(1)

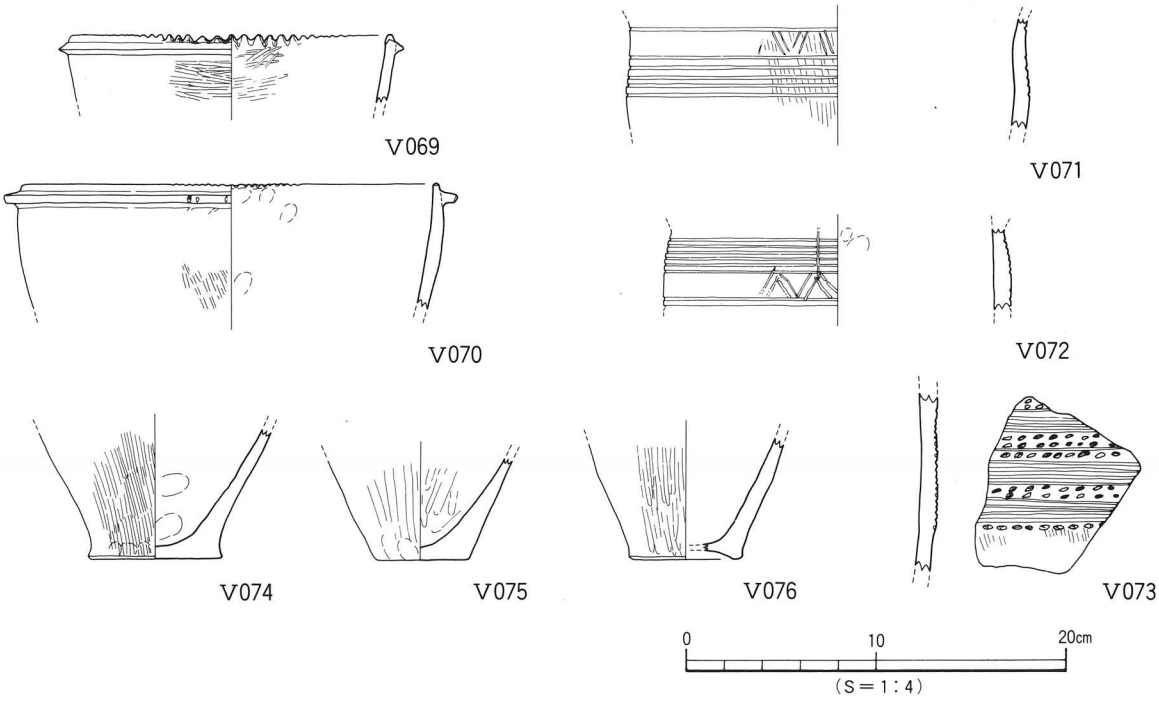
甕形土器（V059～076）V059～064は折り曲げにより口縁部を成形する。折り曲げが弱いもの（V059～063）と折り曲げが強く、口縁部が逆「L」字状を呈するもの（V064）とがある。口縁端面には刻目を施すもの（V061・063・064）と施さないもの（V059・060・062）がある。胴部文様は、無文のもの（V059～061）、沈線文だけのもの（V062）、沈線文と刺突文が組み合うもの（V063・064）の3種類がある。V062はクシ状工具によるタテ方向の沈線文を加え、V061は刻目を施す際の工具痕が胴上位に残る。

V065～070は粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形する。口縁外面上端に接するもの（V065～068）と、口縁端部より下る位置にあるもの（V069・070）とがある。口縁端面には刻目を施すもの（V066～068）と、ヘラ描き沈線文を施すもの（V065）とがある。V069・070は口縁上端面に刻目を施す。胴部文様は無文のもの（V066）、沈線文を施すもの（V067）、沈線文と刺突文が組み合うもの（V065・068）の３種類がある。V071～073は胴部片で、沈線文帯の間に山形文を施すもの（V071・072）と、刺突文を施すもの（V073）とがある。V074～076は底部片で、V074・075は平底、V076は中央部が凹む上げ底である。

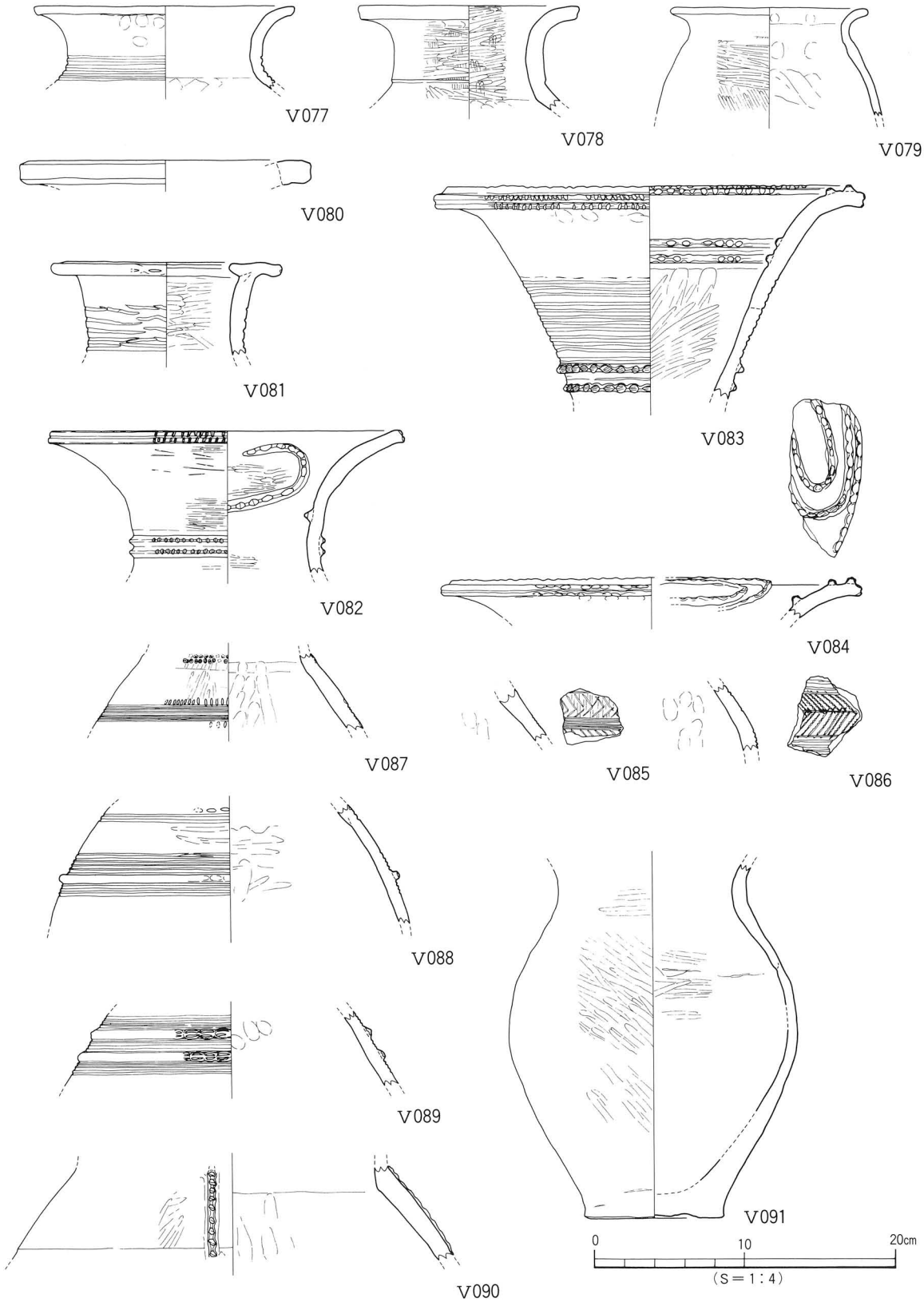
壺形土器（V077～092）V077～081は直立する頸部に、短く外反する口縁部をもつ。V077・081は頸部に沈線文を施す。V079は胴部が長胴になる。V081は口縁部内面に凸帯をもち、頸部に粗雑な沈線文を施す。口縁端面に連鎖状刻目文を施す。V082～084は外傾する長い口頸部をもつ。口縁部内面に凸帯をもち、V082・084は凸帯は全周しない。V082・083の頸部外面に凸帯をもち、V082は凸帯上に刻目、V083は連鎖状刻目文を施す。V085・086は肩部片で、V085はヘラ描き羽状文と沈線文、V086はヘラ描き沈線文と貝殻腹縁による羽状文を施す。V087～090は胴部片で、V087は肩部付近に竹管文、胴部中位に沈線文（３条１組）と刺突文を施す。V088・089は凸帯を施す。V089は凸帯上に連鎖状刻目文２列を施す。V090は刻目をもつ棒状の浮文をもつ。V091・092は底部で、V091はわずかに上げ底、V092は平底となる。

鉢形土器（V093～096）V093は口径35cmを越える法量の大きいものである。V094・095は短く外反する口縁部をもつ。V096は脚台付鉢で、脚部は低脚となる。

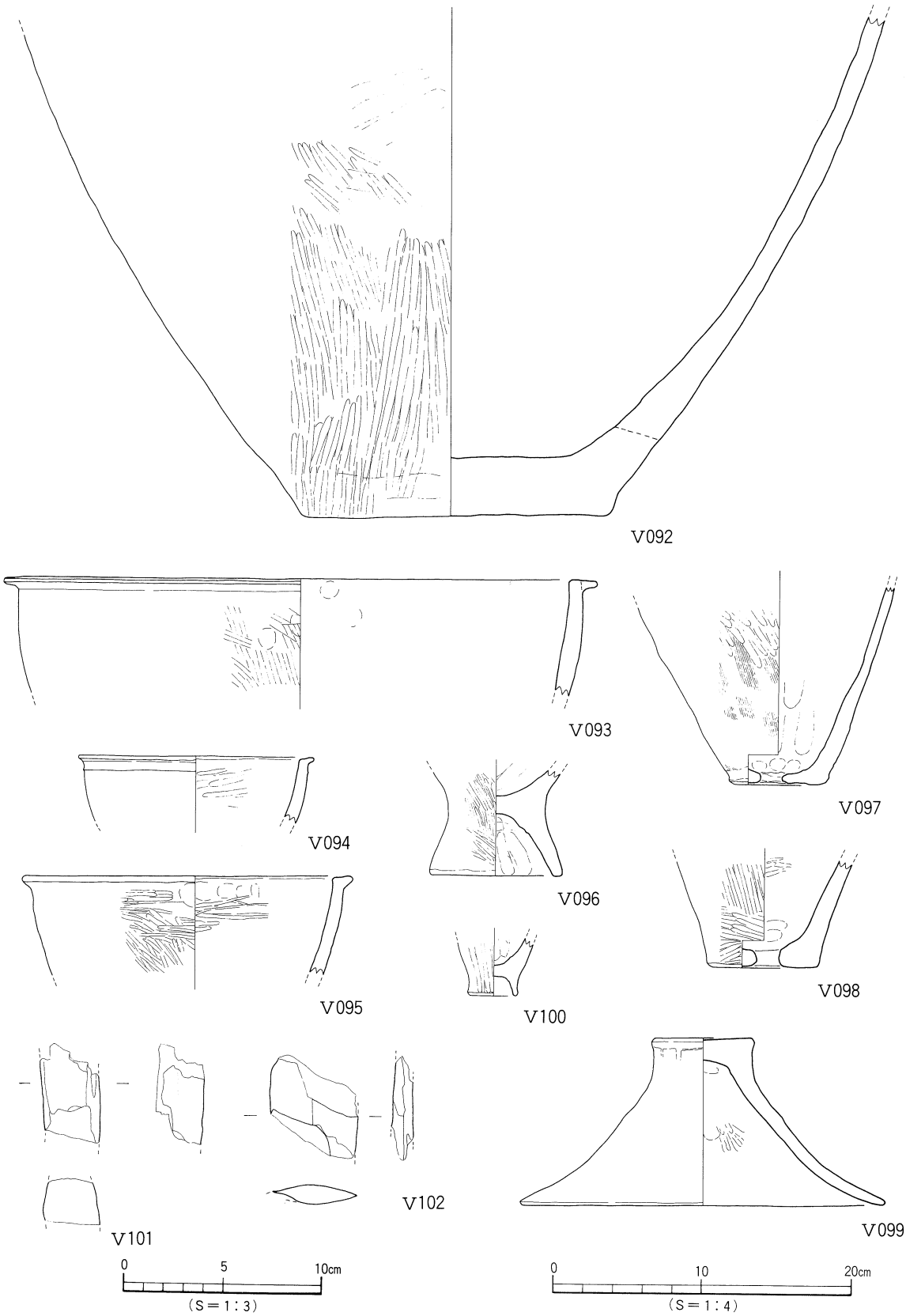
コシキ形土器（V097・098）V097・098は所謂「コシキ」の転用品である。甕形土器の底部を、焼成後に穿孔したものである。



第89図　ＳＤＶ202中層出土遺物実測図(2)



第90図　ＳＤＶ202中層出土遺物実測図(3)



第91図　ＳＤＶ202中層出土遺物実測図(4)

蓋形土器（V099）V099は蓋形土器である。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く仕上げる。天井部はわずかに中央部が凹む。口縁部内面に煤が付着する。

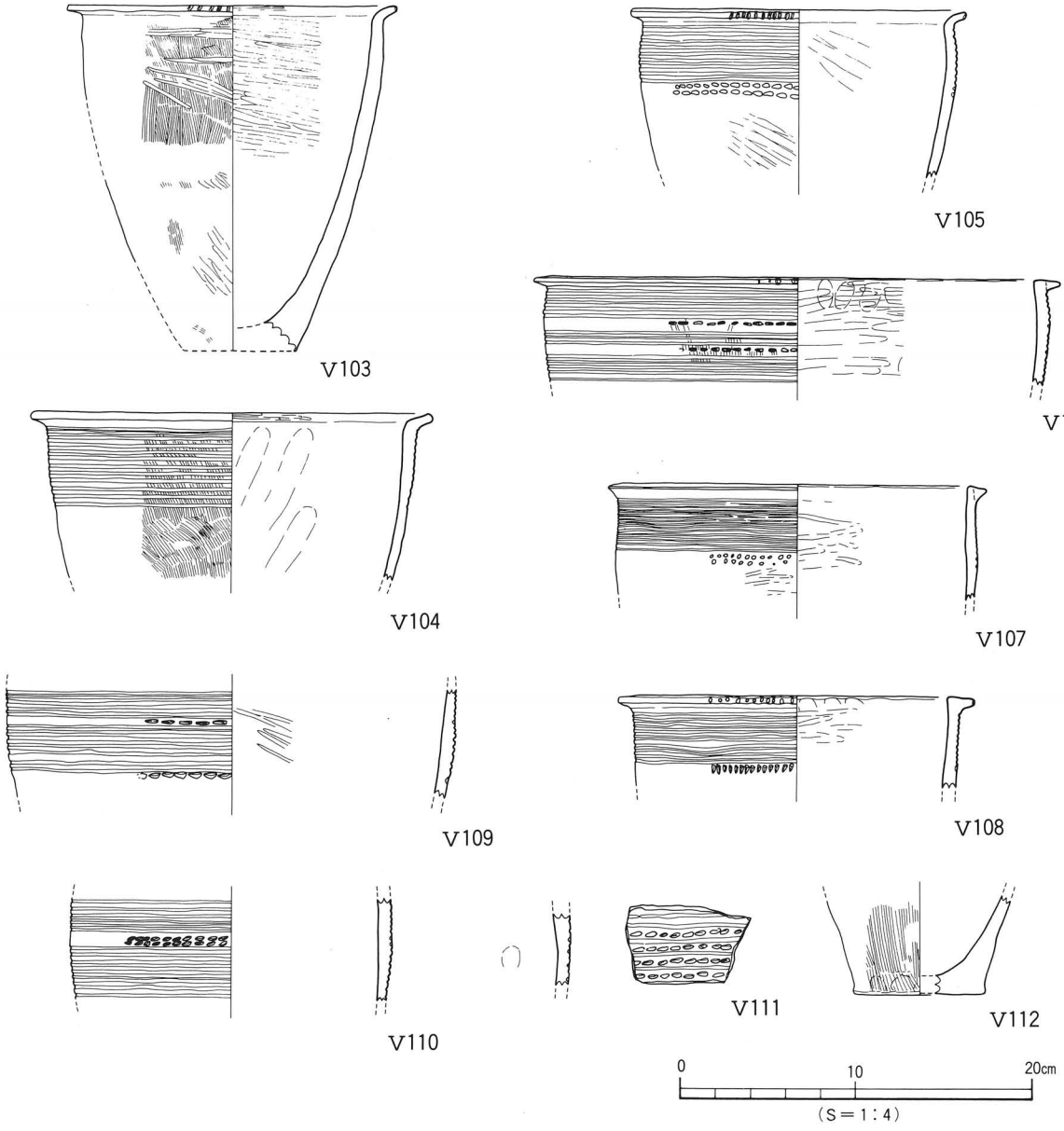
ミニチュア品（V100）V100はミニチュア品である。上げ底で、甕形土器のミニチュア品か。

石斧（V101）V101は柱状片刃石斧である。刃部・基部共に欠損している。緑色片岩製。

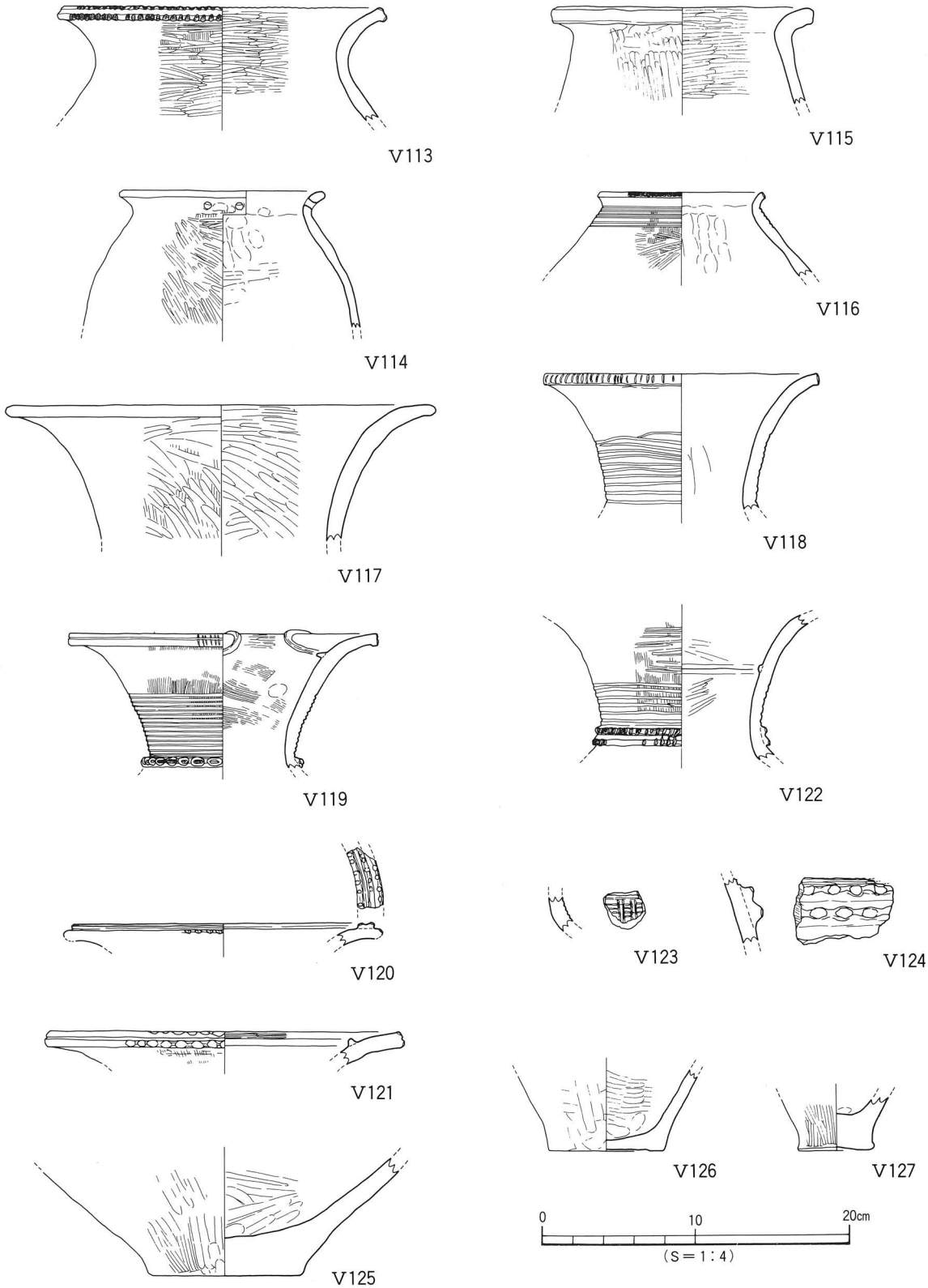
石剣（V102）V102は層界岩製の磨製石剣である。断面形態はひし形を呈し、表面に鎬が認められるが裏面にはない。松山平野で出土している有柄式磨製石剣と同様の石材で、外来系の石材であることから、搬入品と思われる。

ＳＤＶ202上層出土遺物〔第92～94図（V103～135）、図版48〕

ＳＤＶ202上層からは、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、ミニチュア品の他、柱状片刃石斧が１点出土している。



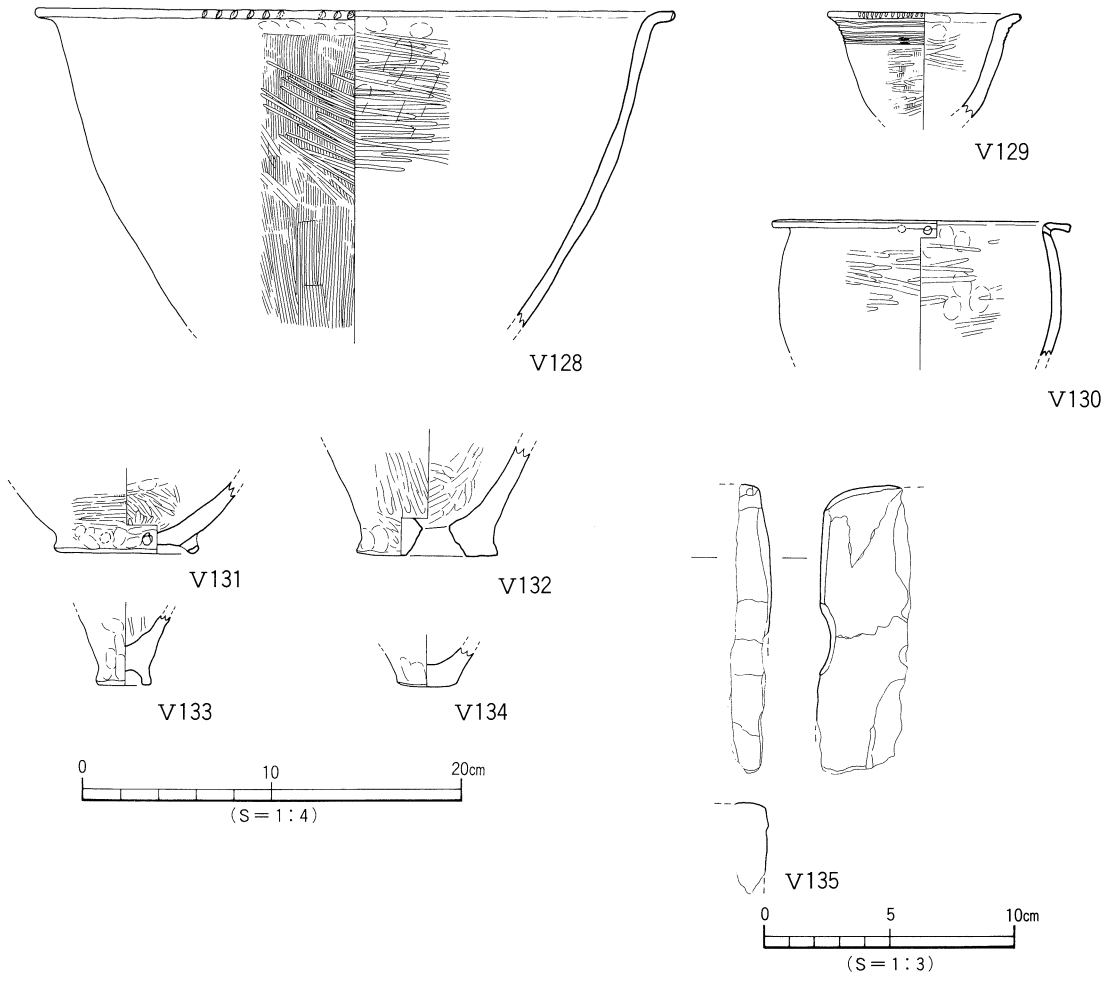
第92図　ＳＤＶ202上層出土遺物実測図(1)



第93図　ＳＤＶ202上層出土遺物実測図(2)

甕形土器（V103～112）V103～105は折り曲げにより口縁部を成形するものである。口縁端面には刻目をもつもの（V103・105）と、刻目をもたないもの（V104）とがある。胴部文様は無文のもの（V103）、沈線文だけのもの（V104）、沈線文と刺突文が組み合うもの（V105）の3種類がある。V106～108は粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形するものである。口縁部の断面形態は三角形状を呈する。V106・108は口縁端面に刻目をもつ。胴部文様は、沈線文と刺突文が組み合うものであるが、V106は2条1組の工具による沈線文を施す。また、V107はクシ描き沈線文（5条1組）を施す。V109～111は胴部片である。沈線文と刺突文を施すものである。V112は底部片で、平底となる。

壺形土器（V113～127）V113～116は短く外反する口頸部をもつ。V113は口縁端面の上下端に工具による押圧を施す。V114は径5㎜大の円孔が2ヶ穿孔される（焼成前）。V116は頸部直下に2条1組の沈線文帯を3組施す（外来系）。V117～121は外傾する長い口頸部をもつ。V119～122は口縁内面に凸帯をもち、V120は凸帯上にヘラ描き沈線文と押圧を施す。V119は全周せず、一部が注口状になる。頸部には沈線文を施すもの（V118）、沈線文と凸帯文（連鎖状刻目文）を施すもの（V119）がある。口縁端面には刻目を施すもの（V118・120）、ヘラ描き沈線文と刻目を施すもの（V119）、沈線文と押圧を施すもの（V121）がある。V122は頸部片である。内面に凸帯をもち、外面には沈線文と凸帯を施し、凸帯上には刻目を施す。V123・124は胴部片で、V123はヨコ沈線文とタテ沈線文が組み合い、V124は凸帯（指頭押圧）と沈線文を施す。V125～127は底部片で、V125は平底、V126・127は上げ底となる。



第94図　ＳＤＶ202上層出土遺物実測図(3)

鉢形土器（V128～131）V128は口径30cmを越える法量の大きいものである。口縁部は緩やかに外反し、口縁端面には刻目を施す。V129は小型品で、胴部に沈線文（２条１組）、口縁端面に刻目を施す。V130は口縁部が逆「L」字状を呈するもので、口縁下端に径4mm大の孔が２ヶ穿孔される（焼成前）。V131は底部片である。上げ底で、底部下端には径５mm大の孔が穿孔される（焼成前）。

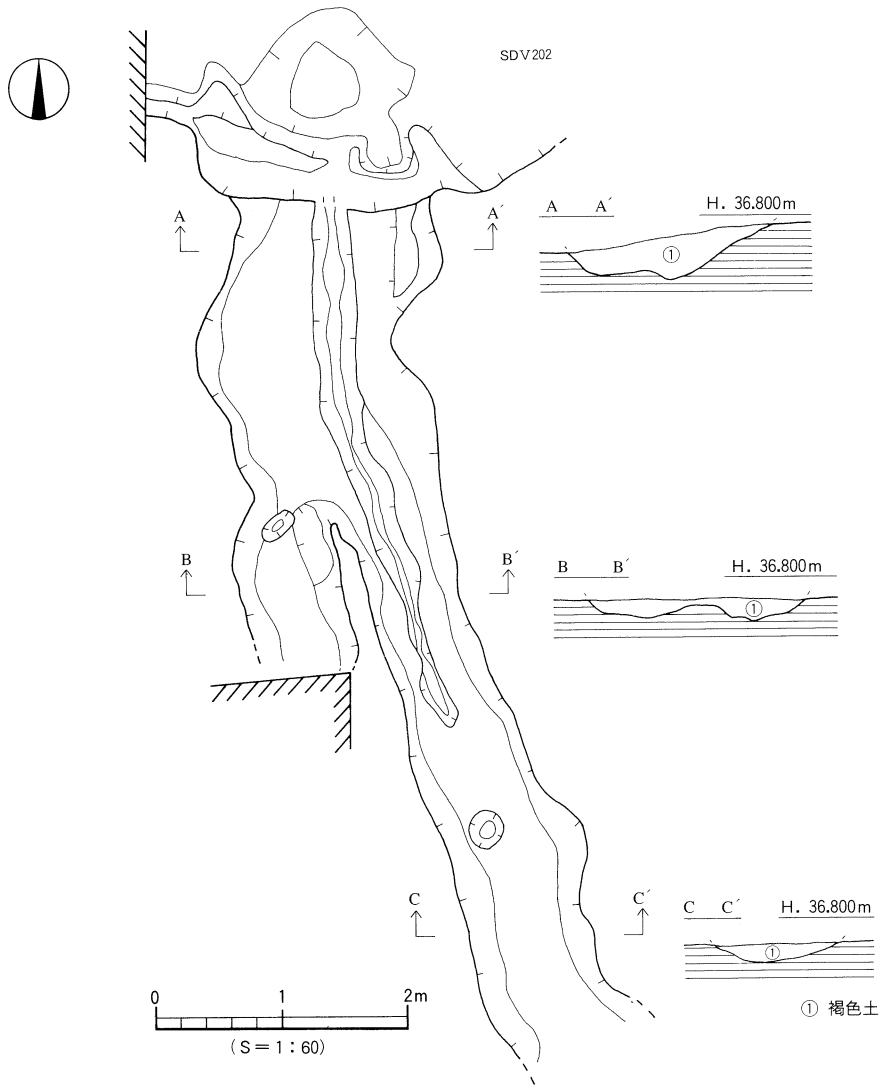
コシキ形土器（V132）V132は所謂「コシキ」への転用品である。壺形土器の底部を、焼成後に穿孔したものである。

ミニチュア品（V133・134）V133は上げ底、V134は丸味のある平底となる。

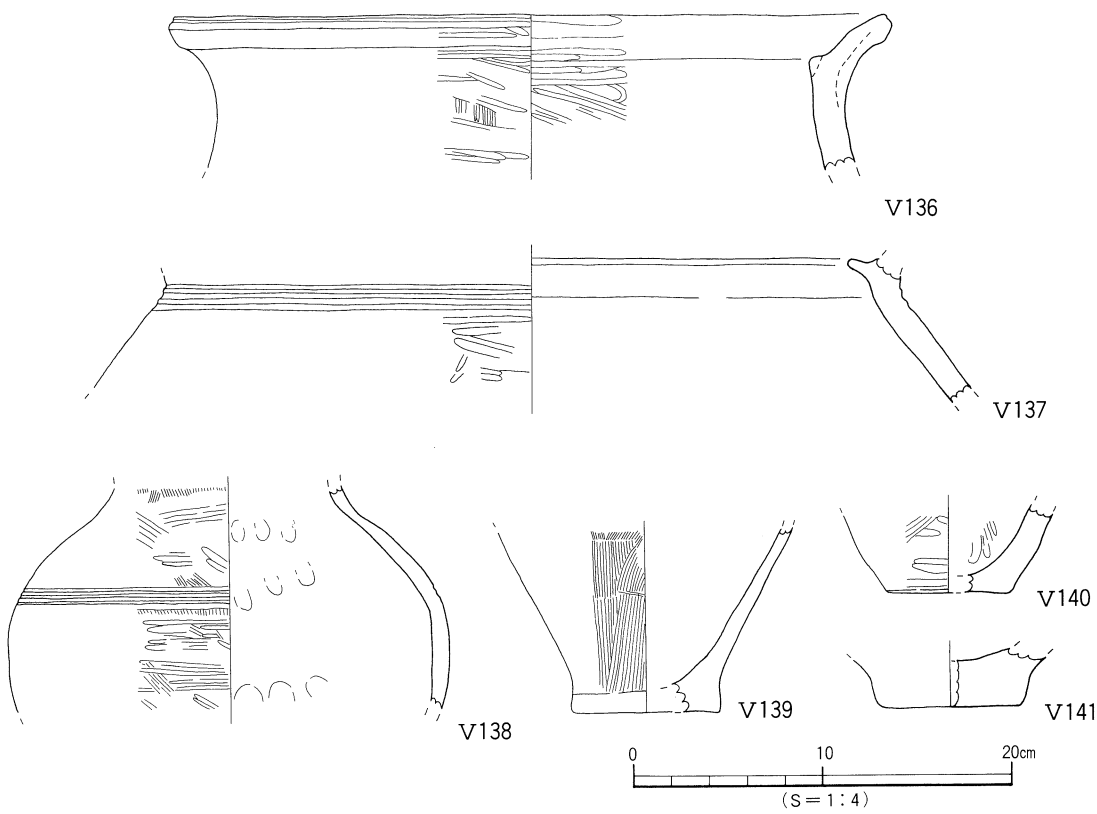
石斧（V135）V135は抉入りの柱状片刃石斧である。刃部は剥落しており、研ぎ分けは認められない。背部は丁寧な面取りを施す。抉りは丸味を帯びる。緑色片岩製。

ＳＤＶ203（第95図、図版39）

第２地区南西部、Ｄ６～７区に位置する。溝北端はＳＤＶ202と合流し、南端は調査区外に続く。規模は幅0.90～1.80m、検出長7.0m、深さ10～40cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐色



第95図　ＳＤＶ203測量図



第96図　ＳＤＶ203出土遺物実測図

(7.5ＹＲ4/3) 土に砂が混入する。溝底は南側から北側に向け低くなる（比高差６㎝)。ＳＤＶ203は中央部付近で分岐しており、分岐部分は幅が40～60㎝になる。溝の北端はＳＤＶ202と合流するが、ＳＤＶ202の壁体及び基底面の状況をみると、ＳＤＶ203から水の流れ落ちた様子がうかがわれる。つまり、ＳＤＶ203はＳＤＶ202の構築と同時に掘られたものになり、その用途は、ＳＤＶ202への取水路とみられる。遺物は埋土中にて弥生土器片が数点出土している。

出土遺物（第96図）

Ｖ136は口径35㎝を越える大型壺の口縁部である。口縁部内面には凸帯を貼り付け、口縁端面にはヘラ描き沈線文を１条施す。内外面共にミガキ調整を施す。Ｖ137は頸部片。凸帯とヘラ描き沈線文３条を施す。Ｖ138は壺形土器の胴部片。胴部中位にヘラ描き沈線文を４条施す。Ｖ139は甕形土器の底部、Ｖ140・141は壺形土器の底部である。Ｖ139は突出部をもち、わずかに上げ底となる。

(2) 土　　坑

Ｖ区で検出した弥生時代前期末～中期初頭の土坑は100基である。内訳は第２地区で21基、第３地区で18基、第４地区で61基となる。なお、第１地区では、土坑は未検出であった（表14)。

土坑を平面形態で分類すると、円形28基、楕円形43基、方形13基、長方形14基、不定形２基となる。断面形態では７種類に分けられ、逆台形状55基、皿状24基、舟底状７基、袋状６基、筒状４基、擂鉢状２基、フラスコ状２基である。また、堆積状況では単一層で埋まるもの（単一堆積）79基、２層以上の土層が水平に堆積するもの（水平堆積）12基、放物線を描くように堆積するもの（放物線型凹堆積）6基、土層が盛り上がるもの（凸堆積）１基、舟底状に堆積するもの（舟底型凹堆積）１基、斜

め方向から堆積するもの（斜堆積）１基の６種類に分類される。

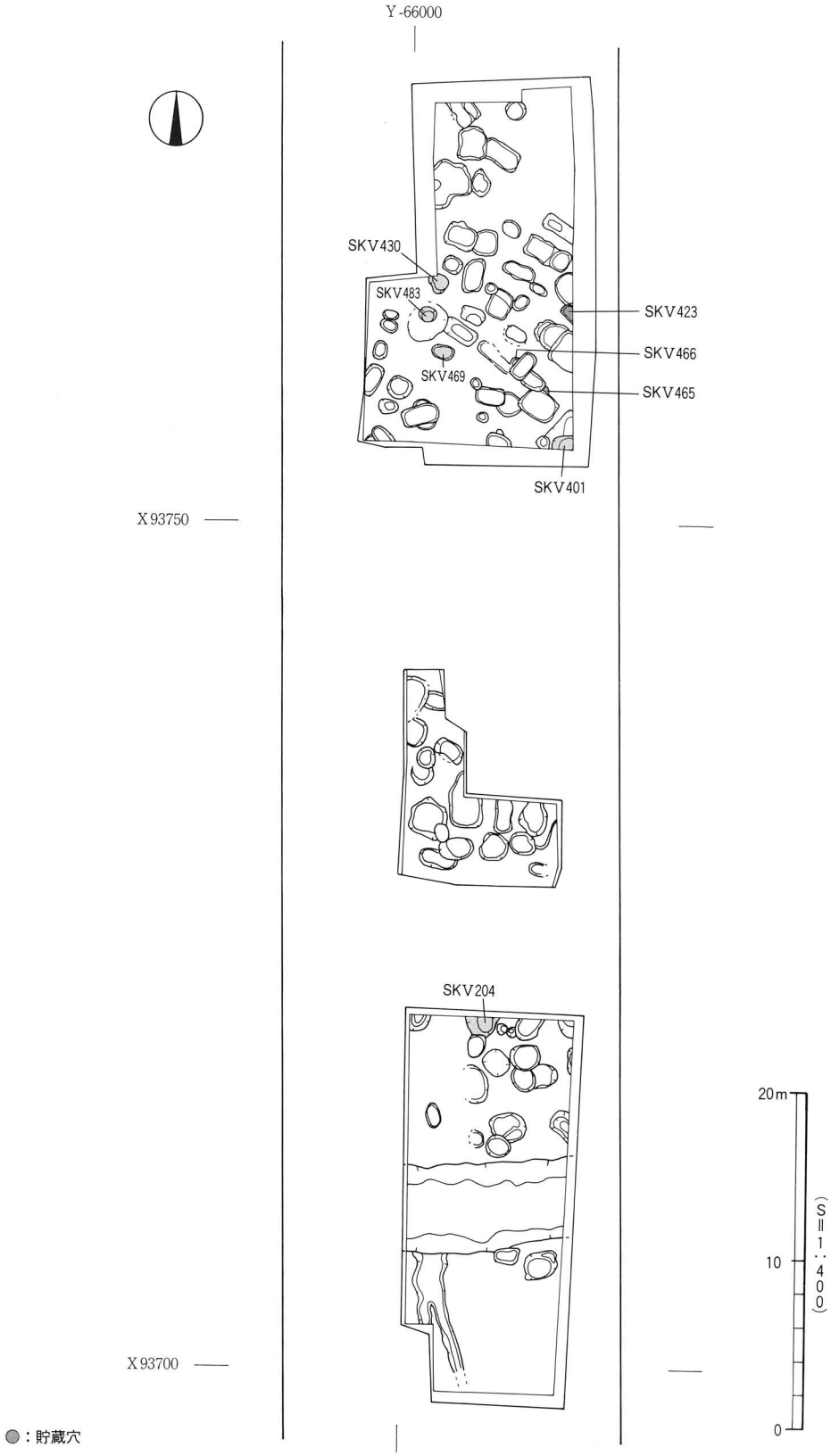
埋土は表14のとおりに大きく６種類に分類される。ここでは、埋土Ａの土坑を「土坑Ａ」、埋土Ｂの土坑を「土坑Ｂ」のように呼称する。発掘調査時ではこれらの埋土をもつ土坑の新旧関係は切り合いより、時期の古いものから順に土坑Ｆ→土坑Ｅ→土坑Ｄ→土坑Ｃ→土坑Ｂ→土坑Ａとなり、土坑Ａが最も新しい時期（段階）の土坑と判断した。ただし、２基以上の重複がみられる土坑や、土坑の基底面から別の土坑を検出した場合などもあり、出土した遺物は取り上げの際に混在している可能性が高い。前節で説明した溝ＳＤＶ202とこれらの土坑との関係は、土坑Ｃ（ＳＫＶ221）と溝とが切り合う。ＳＤＶ202下層部分をＳＫＶ221が切っていることから、少なくともＳＤＶ202下層堆積後にＳＫＶ221は構築されたものである。つまり、土坑Ｆ～土坑Ｄは、溝が構築される以前、もしくは存在している間に掘削されたものと推測される。

本稿では発掘調査時の状況を考慮し、埋土別に土坑Ｆから土坑Ａの順で、遺構と遺物の説明を行うことにする。記述に際しては、埋土別に古いものから説明する。さらに、はじめに壁体がフラスコ状や筒状を呈する、いわゆる貯蔵穴の形態をなす土坑を『貯蔵穴』としてとりあげ、それ以外のものは性格の特定できないものとして、単に「土坑」として報告している。土坑は平面形態別に、円形・楕円形・方形・長方形の順で測量図と遺物実測図を掲載している。

表14　埋土別土坑一覧

埋土	色　　調	土　質	検　出　個　数（基）			
			第２地区	第３地区	第４地区	計
A	黒褐色（7.5ＹＲ3/2）＋明黄褐色（10ＹＲ6/8）	粘質土	0	0	4	4
B	褐色（7.5ＹＲ4/3）	粘質土	4	5	15	24
C	オリーブ褐色(2.5Y4/4)＋明黄褐色(10YR6/8)	粘質土	6	7	18	31
D	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	粘質土	10	6	11	27
E	灰オリーブ色（5Y5/2）＋明黄褐色(10YR6/8)	粘質土	0	0	6	6
F	灰オリーブ色（5Y5/2）	粘質土	1	0	7	8
合　　計			21	18	61	100

※第１地区では土坑を検出していない。



第97図　V区　土坑F分布図

表15　土坑Ｆ一覧

ＳＫ番号	平面形態	断面形態	堆積状況	遺構測量図	遺物実測図	グリット	備　考
ＳＫＶ204	方形	逆台形	単一	○	○	C9~D10	
ＳＫＶ401	楕円形	逆台形	単一			C16·17	
ＳＫＶ423	楕円形	筒（一部フラスコ）	水平	○		C18	貯蔵穴
ＳＫＶ430	楕円形	逆台形	単一		○	D18	
ＳＫＶ465	円形	筒（一部逆台形）	舟底型凹	○	○	C17	貯蔵穴
ＳＫＶ466	楕円形	皿	単一		○	C17	
ＳＫＶ469	楕円形	逆台形	単一		○	D17·18	
ＳＫＶ483	方形	逆台形	単一		○	D18	

1）土　坑　Ｆ（第97図、表15）

土坑Ｆは８基ある。第２地区では１基、第４地区では７基を検出した。すべて第Ⅶ層上面での検出である。平面形態では円形１基、楕円形５基、方形２基となり、断面形態では逆台形状５基、筒状２基、皿状１基となる。また、堆積状況では、水平堆積及び舟底型凹堆積をなすものがそれぞれ１基あり、他の６基はすべて単一堆積である。報告は8基の土坑のうち、３基の測量図と６基から出土した遺物の実測図を掲載している。このうち、ＳＫＶ423とＳＫＶ465は袋状土坑で、貯蔵穴の形態をなすものである。

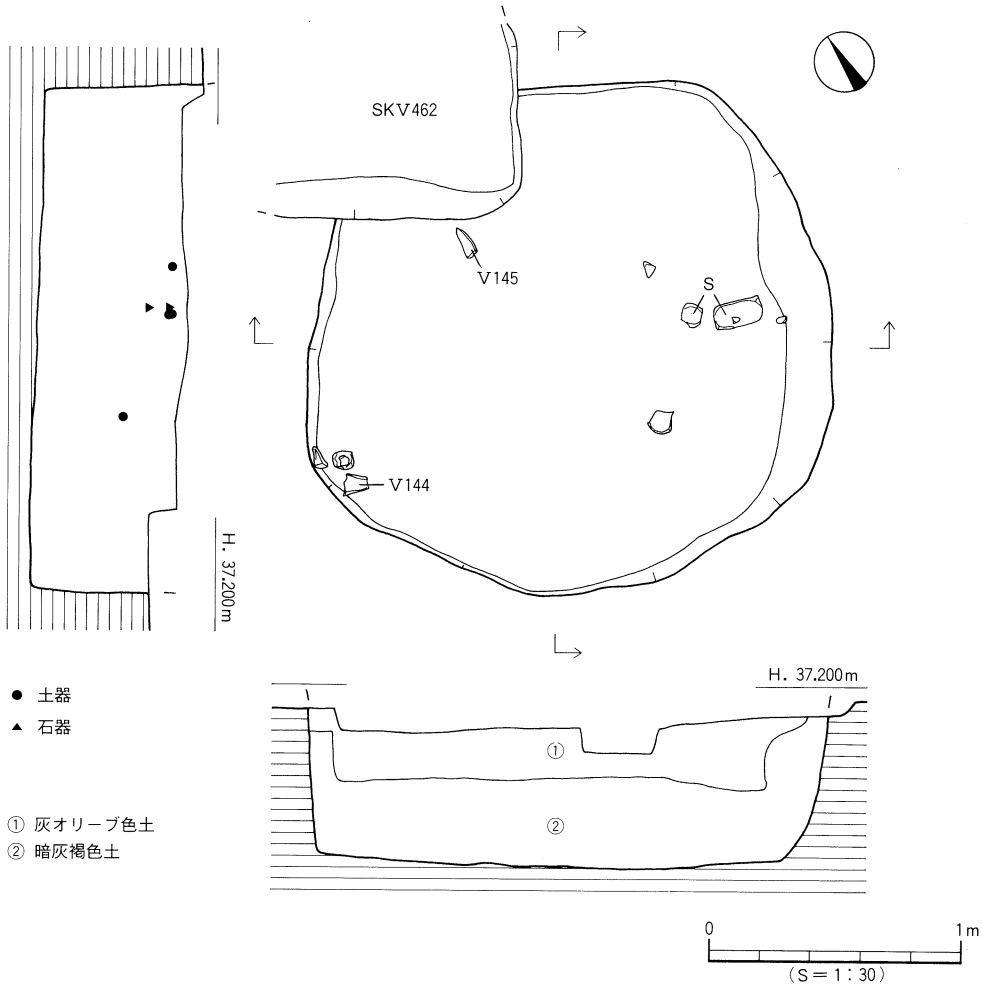
①　貯蔵穴

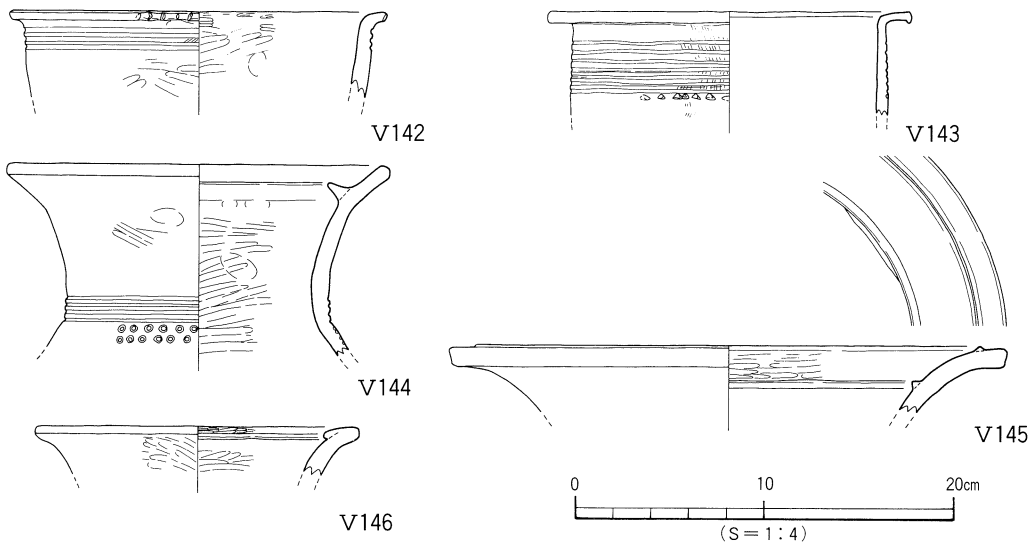
ＳＫＶ465（第98図）

第４地区の南東隅、Ｃ17区に位置する。遺構上面にはＳＫＶ461（土坑Ｃ）があり、北側はＳＫＶ462（土坑Ｄ）に切られている。平面形態は円形を呈し、規模は径2.0m、深さ60cmを測る。断面形態は筒状を呈するが、東壁は壁体が比較的緩やかに立ち上がる。掘り方最終面は第Ⅶ層である。埋土は上下２層（①・②層）に分層され、①層は灰オリーブ色土、②層は暗灰褐色土である。堆積状況は①層が舟底型凹堆積をなしている。基底面は北から南に向けてやや傾斜をなし、遺構中央部がわずかに凹む。壁際との比高差は６cmである。遺物は、ほとんどが①層中からの出土である。出土した弥生土器は、口縁部や胴部などの小片ばかりである。このうち東北部九州からの搬入品とみられる土器片が１点出土している（Ｖ146）。また、東側壁体付近には径10×20cm、厚さ８cmの扁平な礫と、径10cm、厚さ５cmの円礫が出土している。

出土遺物

Ｖ142・143は甕形土器で、折り曲げにより口縁部を成形する。Ｖ142は口縁端面に刻目を施す。胴部文様は、Ｖ142は沈線文３条、Ｖ143は沈線文７条（３条１組）と刺突文が組み合うものである。Ｖ144～146は壺形土器。口縁部内面に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。Ｖ144は頸部に沈線文４条と竹管文２列が施文される。Ｖ146は口縁端面内側に丸味のある凸帯を貼り付ける。外来系（東北部九州地方）。





第98図　ＳＫＶ465測量図・出土遺物実測図

ＳＫＶ423（第99図）

第４地区東壁中央部南寄り、Ｃ18区に位置する。遺構北東隅はＳＫＶ424（土坑Ｄ）に切られ、南東部は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、規模は検出長径1.40m、短径0.90m、深さ38cmを測る。断面形態は筒状を呈するが、東壁のみ立ち上がりは内傾し、フラスコ状を呈する。埋土は上下２層（①・②層）に分層され、②層は①層よりやや色調の明るい灰オリーブ色土である。基底面は中央部付近がやや凹み、壁際との比高差６cmを測る。

遺物はほとんどが①層中からの出土である。弥生土器片と、径10～15cm大の扁平な石が数点出土したが、図化しうるものはない。

② その他の土坑

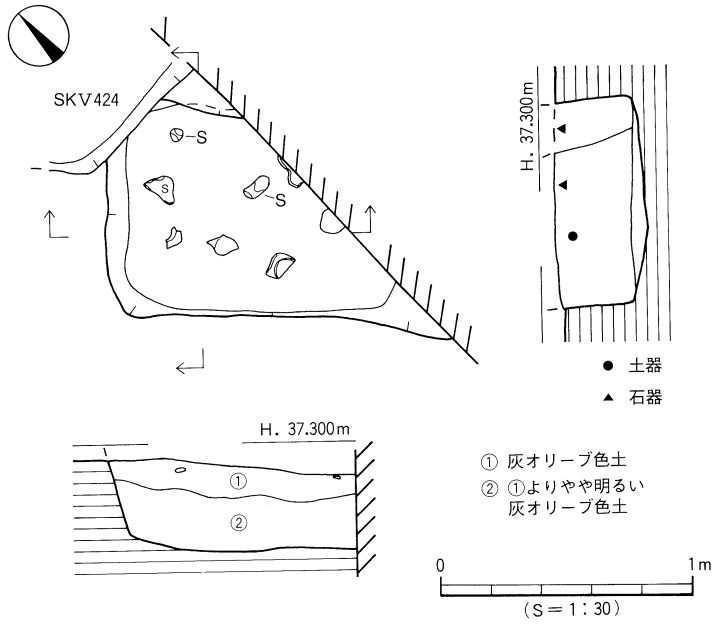
ｉ）方形土坑

ＳＫＶ204（第100図）

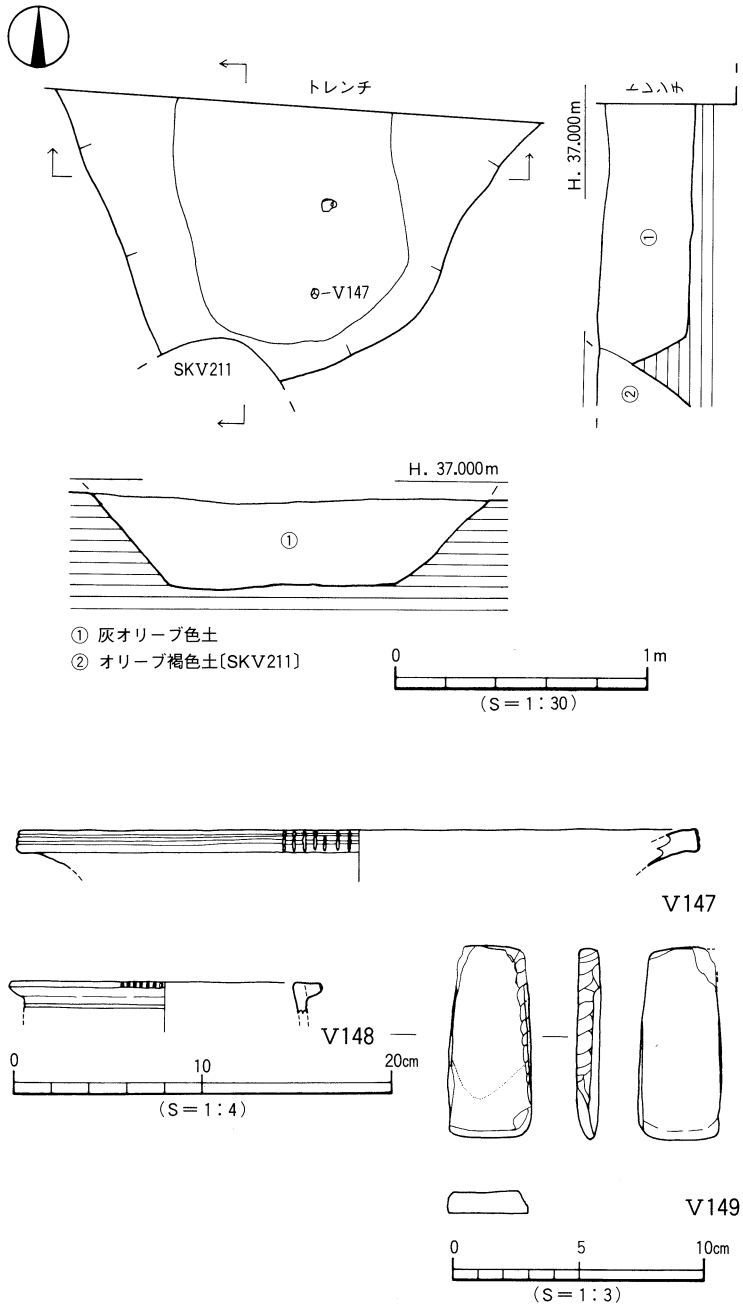
第２地区の北壁中央部、Ｃ９～Ｄ10区に位置する。遺構南側はＳＫＶ211（土坑Ｄ）に切られ、北側は調査区外に続く。平面形態は方形を呈するものとみられ、規模は北東－南西1.74m、北西－南東1.42m、深さ32cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。埋土中に炭化物が少量混入するが、壁体や基底面に焼けた痕跡はない。掘り方最終面は第Ⅶ層である。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より弥生土器小片数点と、石斧が１点出土している。

出土遺物

Ｖ147は壺形土器。口縁端面には沈線文2条と刻目を施す。Ｖ148は甕形土器の口縁部片。貼り付けにより口縁部を成形する。口縁端面には刻目、胴部には沈線文を施す。Ｖ149はほぼ完形の扁平片刃石斧である。平面形態は刃部側がやや幅広の長方形になる。断面形態は身膨れした長方形状となり、刃部と基部との区別はあいまいである。左側面は研磨が入念に施され、右側面はあまり研磨が施されていない。製作途中で右側面は割れ、そのまま研磨して仕上げたものと推測される。緑色片岩製。



第99図　ＳＫＶ423測量図



第100図　ＳＫＶ204測量図・出土遺物実測図

土坑Ｆ出土遺物（第101図）

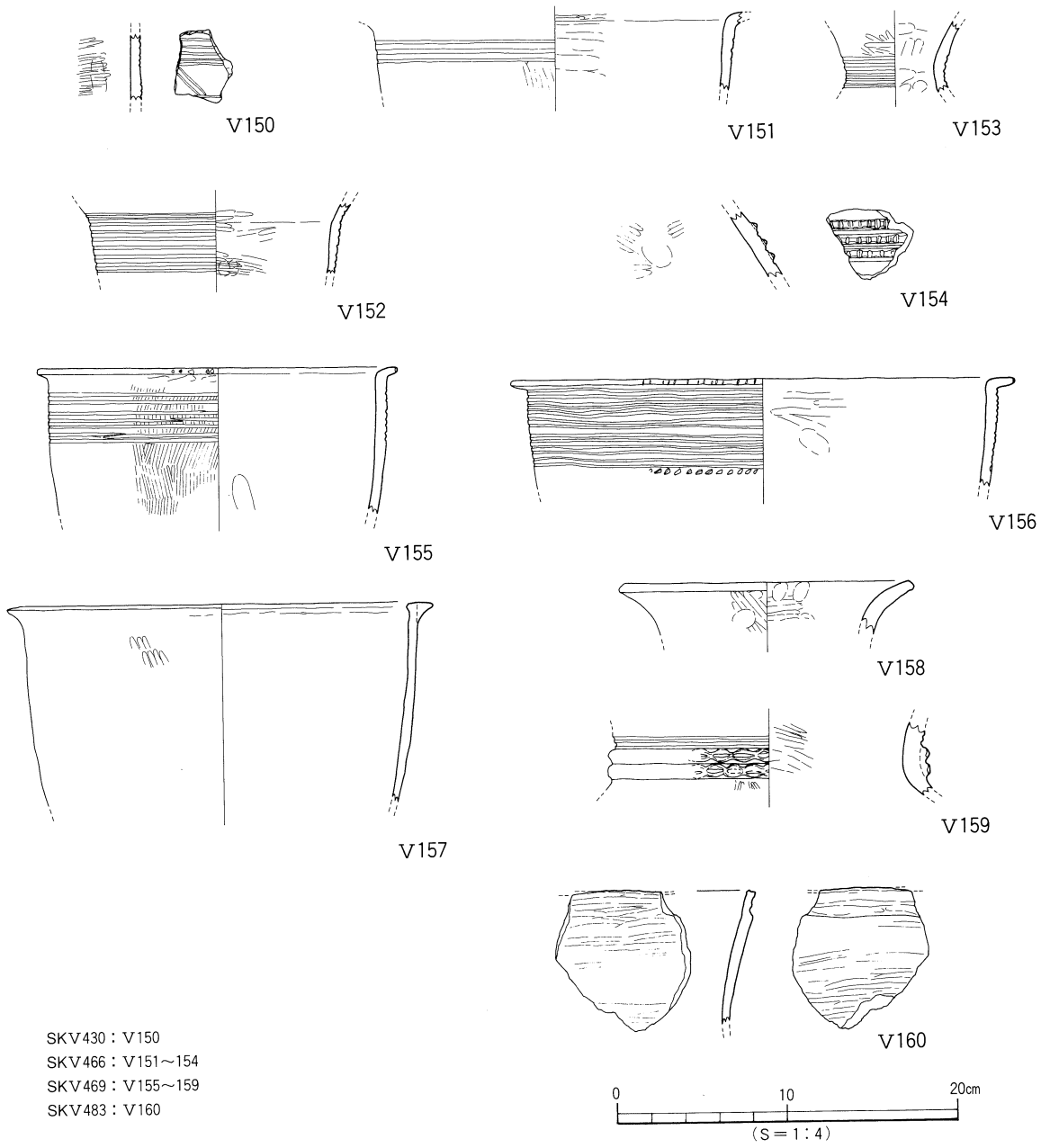
前述の３基以外に、土坑Ｆから出土した遺物のうち11点を第101図に掲載した。平面形態が楕円形を呈するもの（ＳＫＶ430・466・469）と、方形を呈するもの（ＳＫＶ483）からの出土品である。このうちＳＫＶ483からは縄文時代晩期の深鉢片が弥生土器片と共に出土している。

ⅰ）ＳＫＶ430出土遺物（Ｖ150）Ｖ150は甕形土器の胴部片で、沈線文と山形文（２条１組）を施す。

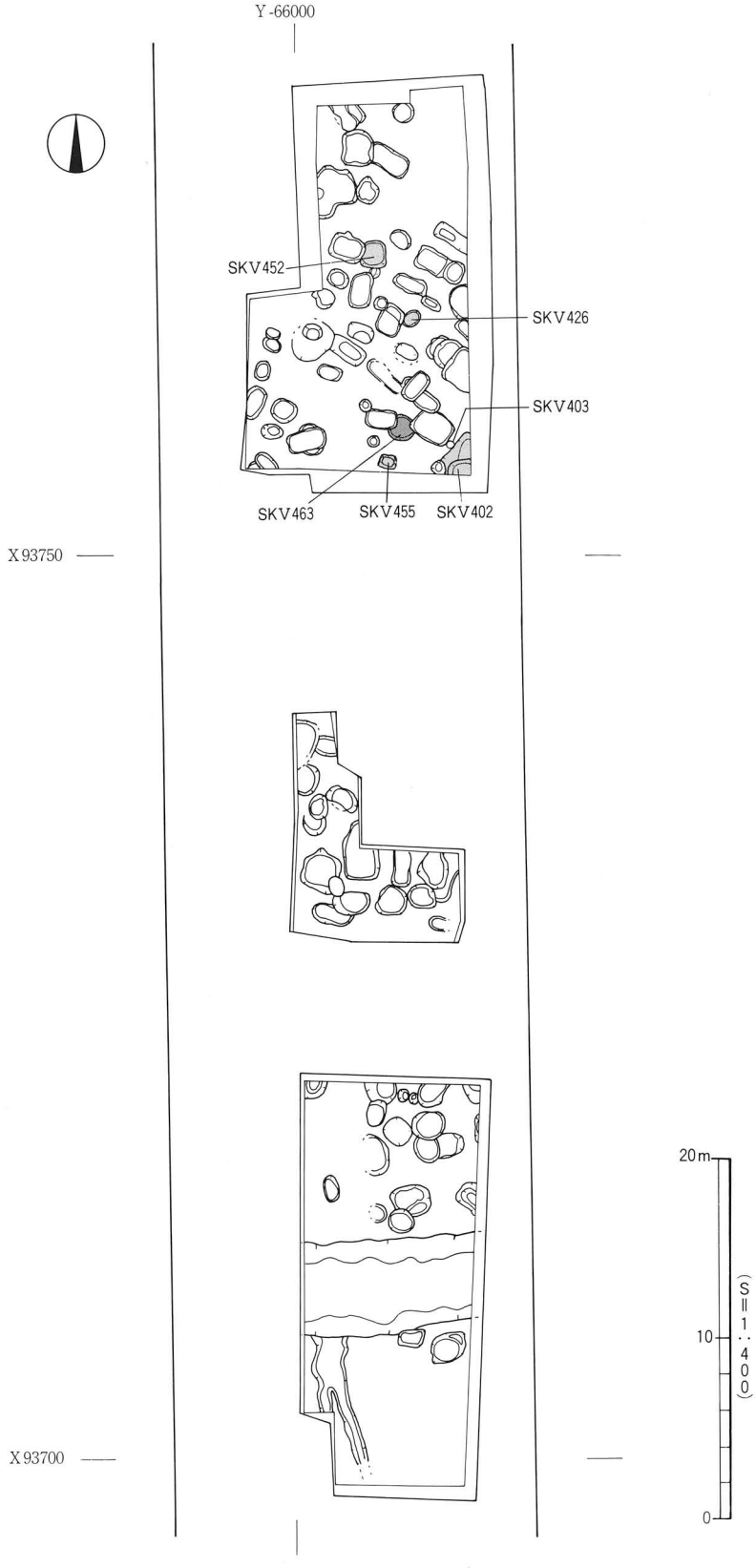
ⅱ）ＳＫＶ466出土遺物（Ｖ151～154）Ｖ151・152は甕形土器の胴部片で、沈線文を施す。Ｖ153・154は壺形土器である。Ｖ153は頸部に沈線文、Ｖ154は凸帯を３条貼り付け、凸帯上に刻目を施す。

ⅲ）ＳＫＶ469出土遺物（Ｖ155～159）Ｖ155～157は甕形土器で、Ｖ155は胴部に沈線文、Ｖ156は沈線文と刺突文を施す。Ｖ158・159は壺形土器である。Ｖ159は頸部にＭ字状の凸帯を貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文を施す。

ⅳ）ＳＫＶ483出土遺物（Ｖ160）Ｖ160は縄文時代晩期の深鉢片である。外面に条痕が残る。



第101図　土坑Ｆ出土遺物実測図



●：貯蔵穴

第102図　V区　土坑E分布図

表16　土坑Ｅ一覧

ＳＫ番号	平面形態	断面形態	堆積状況	遺構測量図	遺物実測図	グリット	備　考
ＳＫＶ402	方形	逆台形	放物線型凹			C17	
ＳＫＶ403	円形	皿	単一			C17	
ＳＫＶ426	楕円形	逆台形	水平	○	○	C18	
ＳＫＶ452	円形	皿	単一			D18･19	
ＳＫＶ455	方形	皿	単一			C7	
ＳＫＶ463	円形	袋(一部逆台形)	単一	○	○	C17	貯蔵穴

2）土　坑　E（第102図）

土坑Ｅは６基ある。すべてＶ区の北側、第４地区で検出されたものである。各土坑の平面形態、断面形態及び堆積状況は表16に記している。平面形態には円形３基、楕円形１基、方形２基、断面形態には逆台形状２基、皿状３基、袋状１基がある。また、堆積状況では単一堆積をなすものが４基で、放物線型凹堆積及び水平堆積をなすものがそれぞれ１基ある。報告は６基のうち、２基の測量図と同出土遺物実測図を掲載した。このうち、ＳＫＶ463は袋状土坑で、貯蔵穴の形態をなす土坑である。

①　貯蔵穴

ＳＫＶ463（第103図）

第４地区南東隅、Ｃ17区に位置する。遺構の東側はＳＫＶ461（土坑Ｃ）とＳＰＶ016に、西側はＳＫＶ411（土坑Ｂ）に切られている。平面形態は円形を呈し、規模は径1.44～1.66m、深さ56cmを測る。断面形態は袋状を呈するが、西側壁体はやや逆台形状となり、単一層で埋まる。掘り方最終面は第Ⅶ層である。基底面は遺構南西部がやや凹み、壁際との比高差６cmを測る。

遺物は埋土中より弥生土器の小片が数点出土した。このうち図化しうるものを２点掲載している。

出土遺物

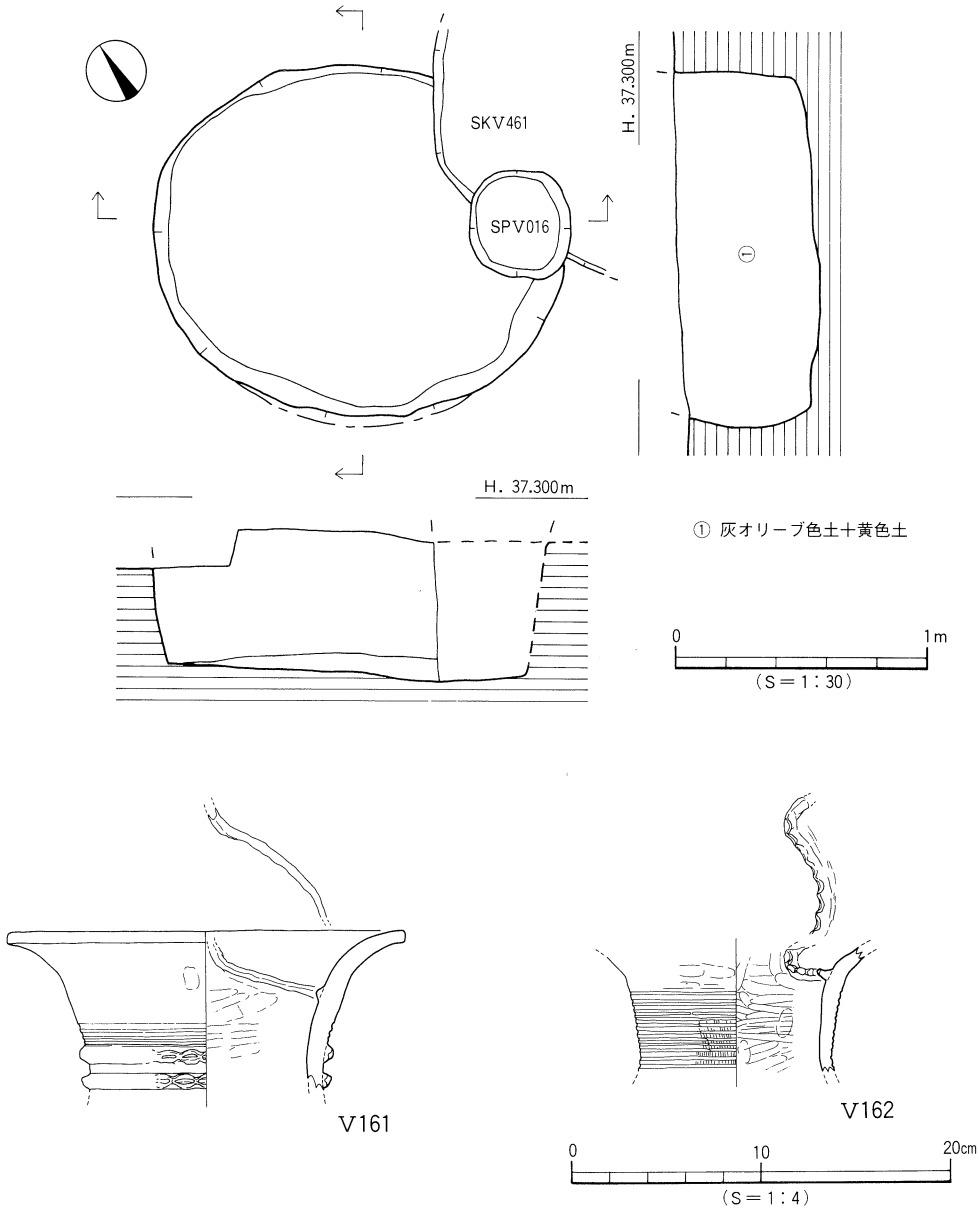
Ｖ161・162は壺形土器。口縁部内面に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。頸部には、Ｖ161は沈線文４条と凸帯文２条（連鎖状刻目文）、Ｖ162は沈線文を施す。なお、Ｖ162は凸帯上に押圧を施す。

②　その他の土坑

ｉ）楕円形土坑

ＳＫＶ426（第104図）

第４地区ほぼ中央部、Ｃ18区に位置する。遺構の南西隅はＳＫＶ227（土坑Ｄ）に切られている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.10m、短径0.84m、深さ40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は上下２層（①・②層）に分層され、②層は暗灰褐色土である。



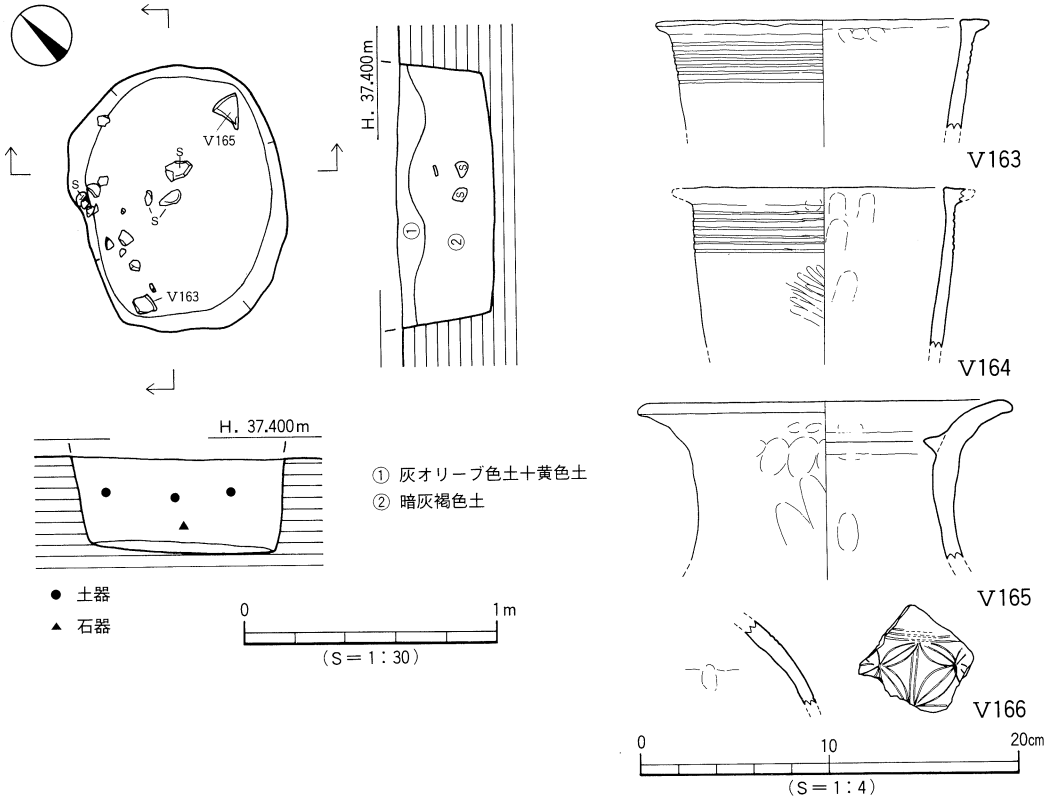
第103図　ＳＫＶ463測量図・出土遺物実測図

掘り方最終面は第Ⅶ層である。基底面は北から南に向けてわずかに傾斜をなし（比高差２㎝）、遺構中央部がやや凹む。

遺物は大半が②層中からの出土である。弥生土器は口縁部や胴部の小片が数点出土している。なお、径10～15㎝、厚さ５㎝程度の丸味のある石が遺構中央部にて３個検出された。出土遺物のうち、土器4点の実測図を掲載している。

出土遺物

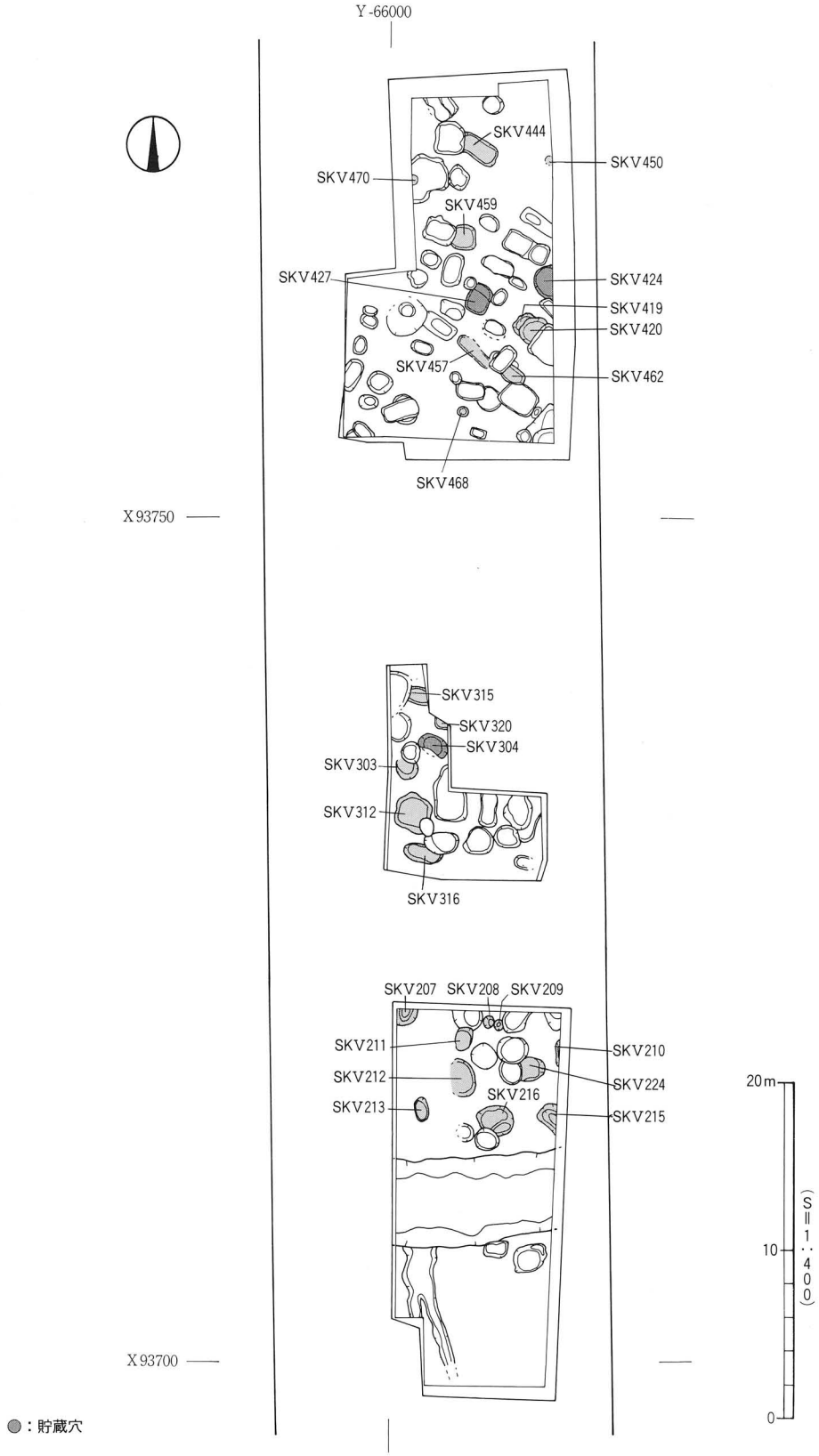
Ｖ163・164は甕形土器の口縁部片で、貼り付けにより口縁部を成形するものである。胴部には沈線文を施す。Ｖ165は壺形土器の口頸部片。口縁内面に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。Ｖ166は肩部片で、沈線文と木葉文が施文される。



第104図　ＳＫＶ426測量図・出土遺物実測図

3）土　坑　D（第105図）

土坑Ｄは27基ある。内訳は第２地区で10基、第３地区で６基、第４地区で11基となる。各土坑の平面形態、断面形態、堆積状況は表17に記している。平面形態には円形８基、楕円形12基、方形３基、長方形３基、不定形１基がある。断面形態には全体の約６割（15基）を逆台形状の土坑が占め、皿状５基、舟底状３基、筒状３基、擂鉢状１基となる。また、堆積状況では単一堆積をなすものが24基あり、水平堆積をなすもの２基、放物線型凹堆積をなすもの１基がある。27基のうち12基の測量図と、12基から出土した遺物の実測図を掲載している。このうち、ＳＫＶ304、ＳＫＶ424、ＳＫＶ427は貯蔵穴の形態をなす土坑である。



第105図　V区　土坑D分布図

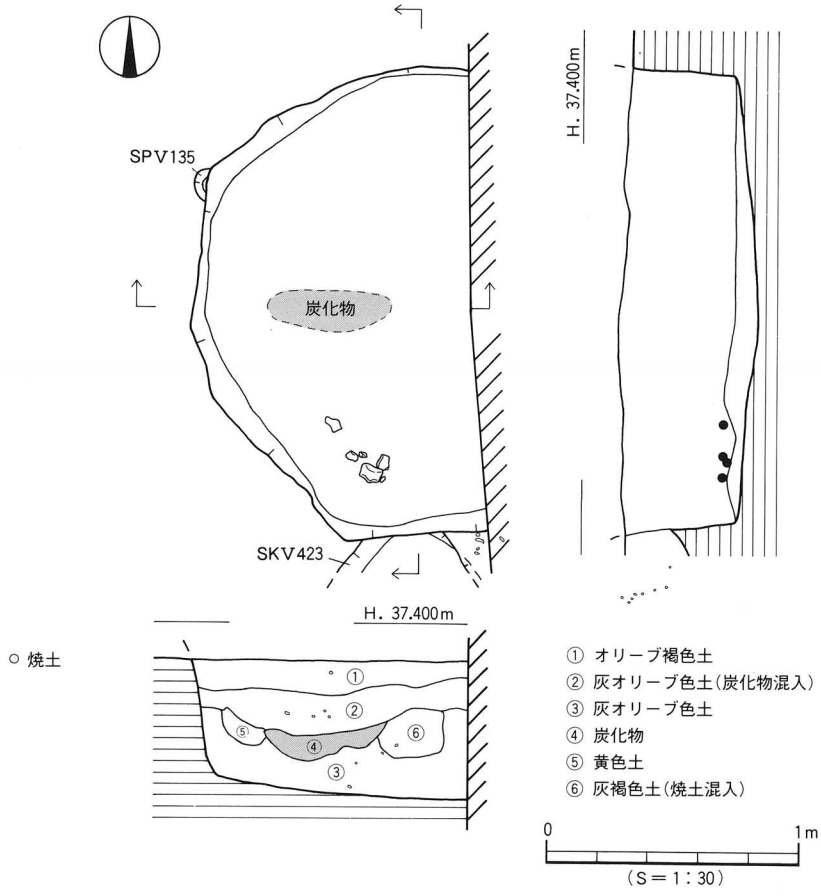
表17　土坑Ｄ一覧

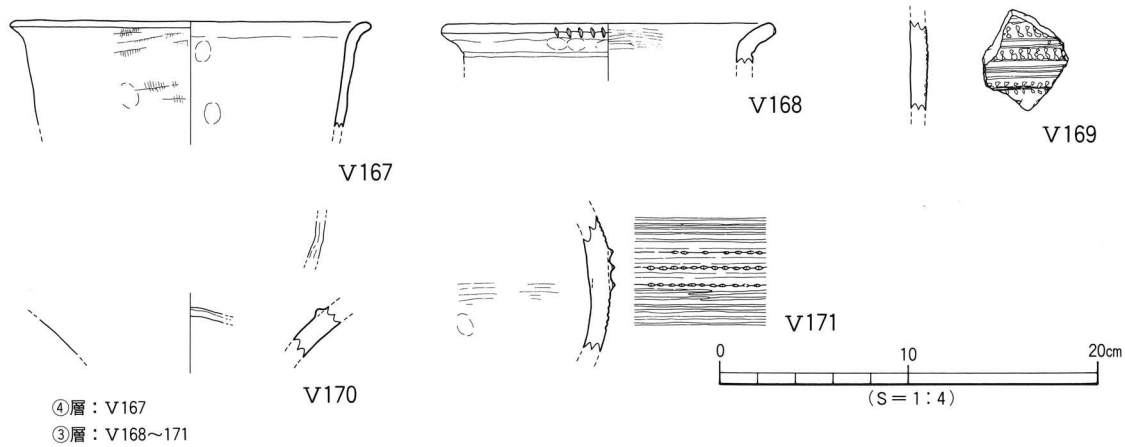
ＳＫ番号	平面形態	断面形態	堆積状況	遺構測量図	遺物実測図	グリット	備　考
ＳＫＶ207	楕円形	逆台形	単一	○	○	D9･10	
ＳＫＶ208	円形	逆台形	単一			C9･10	
ＳＫＶ209	方形	擂鉢	単一			C9･10	
ＳＫＶ210	楕円形	逆台形	単一	○	○	B･C9	
ＳＫＶ211	不整楕円形	逆台形	単一	○	○	C･D9	
ＳＫＶ212	楕円形	皿	単一	○	○	C･D9	
ＳＫＶ213	楕円形	皿	単一			D8･9	
ＳＫＶ215	不整楕円形	逆台形	単一	○	○	C8･9	
ＳＫＶ216	楕円形	逆台形	単一	○		C8･9	
ＳＫＶ224	円形	逆台形	単一			C10	
ＳＫＶ303	楕円形	逆台形	単一	○		D12･13	
ＳＫＶ304	楕円形	袋(東壁逆台形)	単一	○	○	D13	貯蔵穴
ＳＫＶ312	円形	逆台形	単一			D12	
ＳＫＶ315	円形	皿	単一			D13	
ＳＫＶ316	楕円形	逆台形	単一			D11･12	
ＳＫＶ320	方形	逆台形	単一			D13	
ＳＫＶ419	円形	逆台形	単一			C18	
ＳＫＶ420	円形	舟底	放物線型凹		○	C18	
ＳＫＶ424	円形	筒(西壁逆台形)	水平	○	○	C18	貯蔵穴
ＳＫＶ427	楕円形	筒	水平	○	○	C･D18	貯蔵穴
ＳＫＶ444	不定形	逆台形	単一		○	C･D20	
ＳＫＶ450	円形	舟底	単一			C21	
ＳＫＶ457	長方形	皿	単一	○	○	C17~D18	
ＳＫＶ459	長方形	皿	単一			D19	
ＳＫＶ462	長方形	逆台形	単一	○	○	C17	
ＳＫＶ468	方形	舟底	単一			D18	
ＳＫＶ470	楕円形	逆台形	単一			D21	

①　貯蔵穴

ＳＫＶ424（第106図）

第４地区の東壁中央部やや南寄り、Ｃ18区に位置する。遺構の南側はＳＫＶ423（土坑Ｆ）を切り、東側は調査区外へ続く。平面形態は円形を呈するものとみられ、規模は南北長1.90ｍ、東西検出長





第106図　ＳＫＶ424測量図・出土遺物実測図

0.90m、深さ60cmを測る。断面形態は筒状を呈するが、西側壁体はやや逆台形状を呈する。基底面は遺構中央部が凹み、壁際との比高差は8cmを測る。埋土は大きく3層に分層され（①・②・③層）、②・③層は灰オリーブ色土（5Y5/2）が堆積する。

このうち、②層中には炭化物が混入する。また、土層の断面観察では、③層上面にて焼土・炭及び黄色土がブロック状になって検出された（平面的な広がりは記録できなかった）。壁面には火を受けた痕跡が認められないことから、投げ込みによる堆積土とみられる。

遺物は、③層下部より弥生土器片が数点出土した。また、炭化物④内より甕形土器の口縁部片（V167）が出土している。図化しうるものを5点掲載した。

出土遺物

V167は炭化物④内出土品、V168～171は③層からの出土品である。V167・168は甕形土器の口縁部片。折り曲げにより口縁部を成形するものである。V168は口縁端面に刻目、胴部に沈線文を施す。V169は胴部片で、沈線文と刺突文が組み合うものである。V170は壺形土器の口頸部片、V171は胴部片である。V170は口縁部内面に丸味のある断面三角形状の凸帯を貼り付ける。V171は沈線文と刻目凸帯文とが組み合うものである。

ＳＫＶ427（第107図、図版40）

第4地区ほぼ中央部、Ｃ・Ｄ18区に位置する。遺構の北東隅はＳＫＶ426（土坑Ｅ）を切り、北西隅はＳＰＶ008、北壁中央部及び北側はＳＰＶ043、ＳＰＶ044に切られている。平面形態は楕円形状を呈し、規模は長径1.62m、短径1.44m、深さ48cmを測る。断面形態は、壁体が垂直に立ち上がる筒状となる。ただし、遺構北側には幅40cmのテラス状の平坦面がみられる。埋土は3層に分層され（①・②・③層）、②層は黄色土が斑点状に混入する。テラス状部分の壁体から基底面にかけて、黄色土（③層）の堆積がみられる。これは、袋状もしくはフラスコ状となる壁体部分の一部が、北壁から基底面にかけて崩落したものとみられる。基底面は中央部がわずかに凹み、壁際との比高差は3cmを測る。掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は遺構北東部のテラス状部分の基底面にて、完形の甕形土器（V173）がその場で割れた状態で出土した。その他、弥生土器小片や5～10cm大の小礫が数点、①層中から出土している。

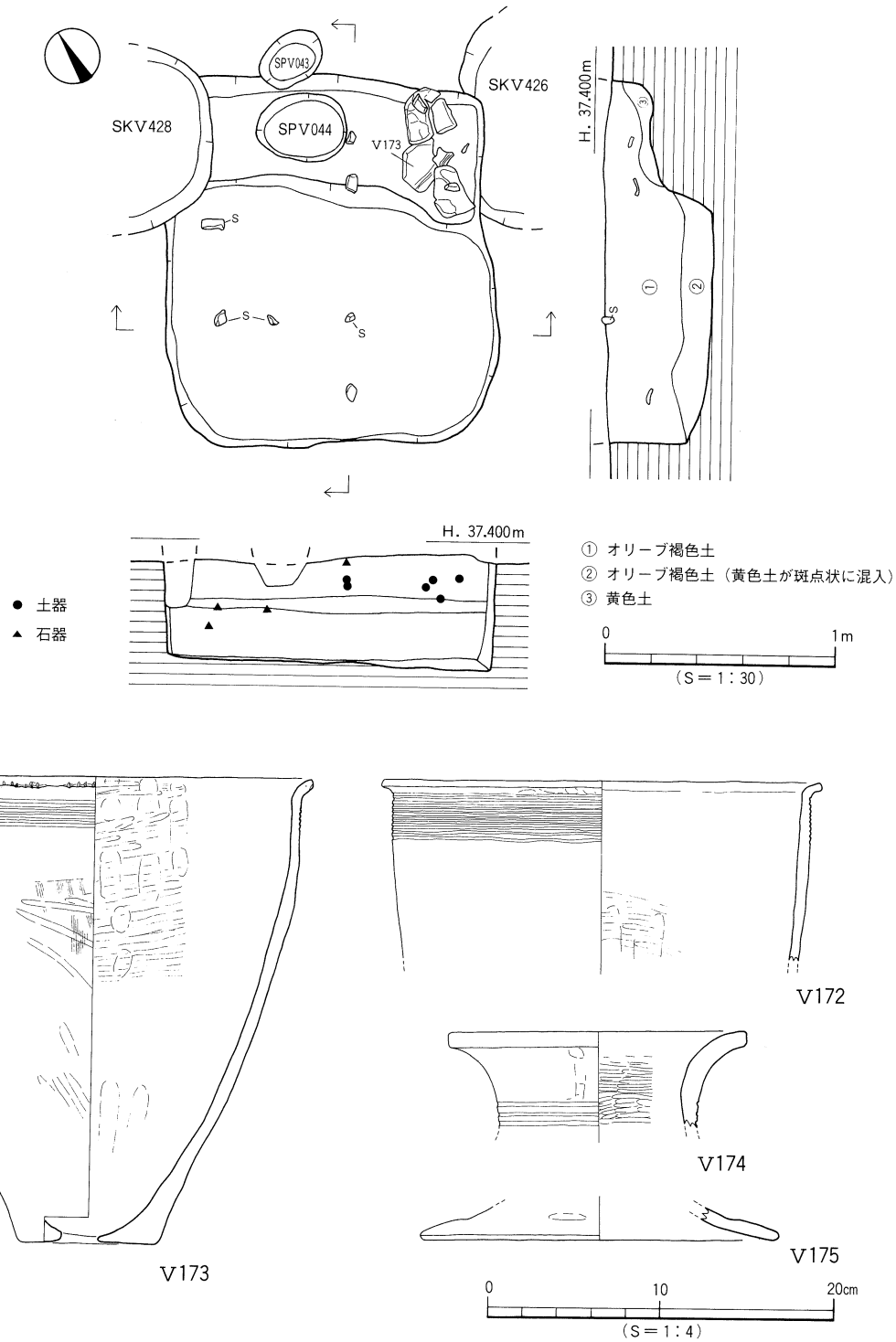
出土遺物

V172は甕形土器。折り曲げにより口縁部を成形するものである。胴部に沈線文10条（5条1組）を施す。V173は甕形土器で、所謂「コシキ」への転用品である。底部に径2.1cm大の孔を穿つ（焼成後穿孔）。口縁部は折り曲げにより成形され、口縁端面に刻目、胴部に沈線文5条を施す。胴部外面には焼成ハクリの痕跡が認められる。V174は壺形土器の口縁部片。頸部に沈線文を施す。V175は蓋形土器。口縁部はやや膨らみをもち、端部は丸くおさめる。口縁部内面に煤が付着する。

ＳＫＶ304（第108図）

第3地区中央部北西寄り、Ｄ13区に位置する。遺構の西側はわずかにＳＫＶ302（土坑Ｃ）と重複しているが、切り合い関係は判断できなかった。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.82m、短径1.08m、深さ93cmを測る。北・南・東側壁体は逆台形状を呈するが、西側壁体のみ袋状となる。単一層で埋まることから、人為的に埋め立てられたものと考えられる。基底面は中央部がやや凹み、壁際

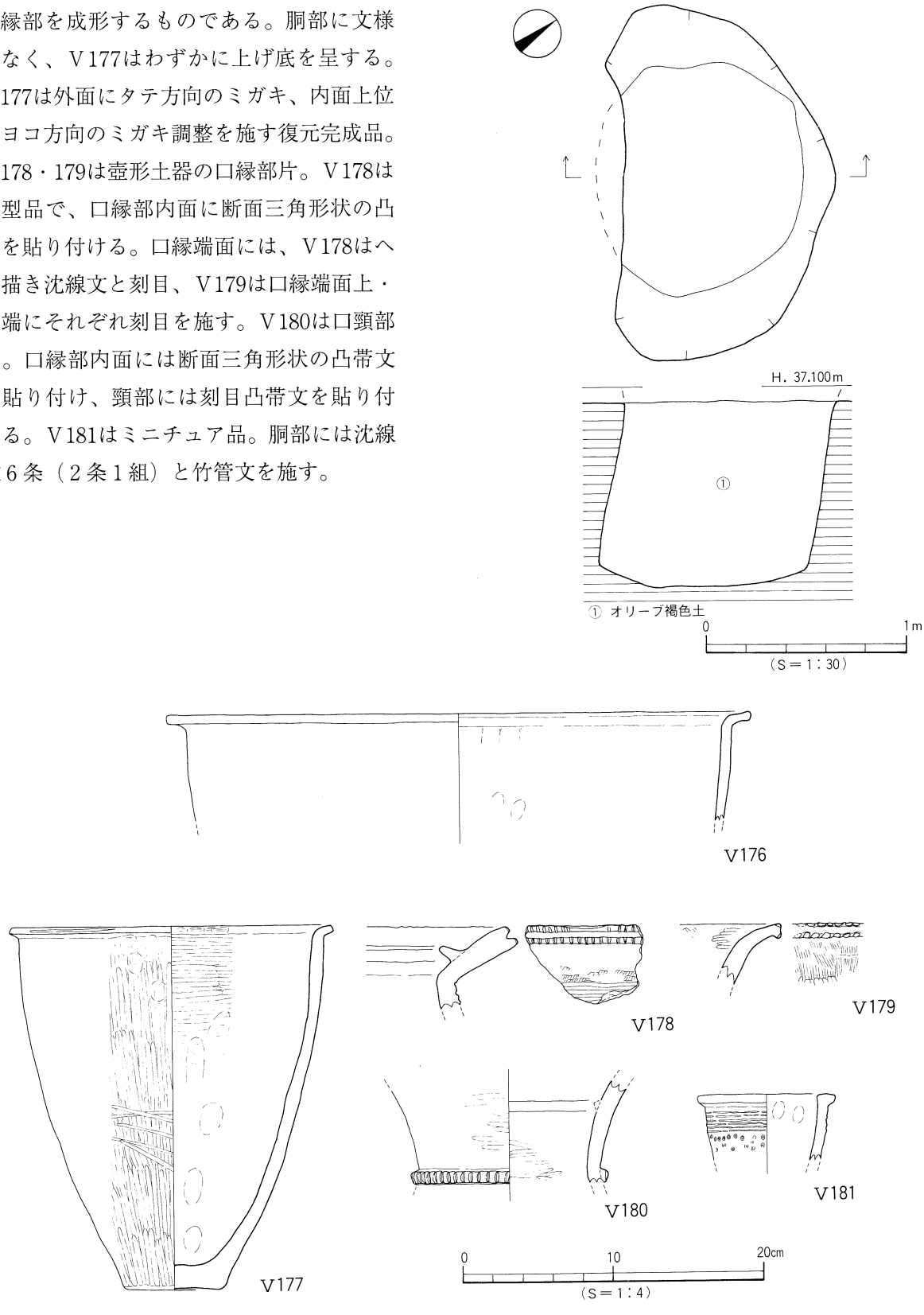
との比高差は10cmを測る。掘り方最終面は第Ⅶ層である。遺物は埋土中に散在して出土した。ほとんどが破片であるが、復元するとほぼ完形品になる土器片がある。



第107図　ＳＫＶ427測量図・出土遺物実測図

出土遺物

Ⅴ176・177は甕形土器。折り曲げにより口縁部を成形するものである。胴部に文様はなく、Ⅴ177はわずかに上げ底を呈する。Ⅴ177は外面にタテ方向のミガキ、内面上位にヨコ方向のミガキ調整を施す復元完成品。Ⅴ178・179は壺形土器の口縁部片。Ⅴ178は大型品で、口縁部内面に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。口縁端面には、Ⅴ178はヘラ描き沈線文と刻目、Ⅴ179は口縁端面上・下端にそれぞれ刻目を施す。Ⅴ180は口頸部片。口縁部内面には断面三角形状の凸帯文を貼り付け、頸部には刻目凸帯文を貼り付ける。Ⅴ181はミニチュア品。胴部には沈線文6条（2条1組）と竹管文を施す。



第108図　ＳＫⅤ304測量図・出土遺物実測図

② その他の土坑

ｉ）楕円形土坑

ＳＫＶ207（第109図）

第２地区北西隅、Ｄ９・10区に位置する。遺構の東側は溝ＳＤＶ201（古代）に切られ、北側及び西側は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、規模は東西検出長1.14m、南北検出長1.06m、深さは30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、西側はテラス状の平坦面をもつ。基底面は中央部が凹み、壁際の比高差は４cmを測る。掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土中より、弥生土器小片が少量出土した。図化しうるもののうち１点の実測図を掲載した。

出土遺物（第110図）

Ｖ182は甕形土器の口縁部片。貼り付けにより口縁部を成形するもので、口縁端面に刻目、胴部に２条１組の工具による沈線文６条を施す。

ＳＫＶ210（第109図）

第２地区東壁北側、Ｂ・Ｃ９区に位置する。遺構の東半部は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、規模は南北検出長1.64m、東西検出長0.30m、深さは43cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、南側壁体は北側壁体に比べて緩やかに立ち上がる。単一層で埋まることから、人為的に埋め立てられたものとみられる。基底面は南から北へ向けて緩やかに傾斜し、比高差は４cmを測る。掘り方最終面は第Ⅶ層である。遺物は、遺構中央南寄りの埋土中位付近から、大型の鉢形土器片（Ｖ183）と径６×12cm、厚さ６cmの丸石１点が出土した。

出土遺物（第110図）

Ｖ183は口径50cmを越える大型の鉢形土器である。貼り付けにより口縁部を成形するもので、胴上部外面には扁平な断面三角形状の把手を１ヶ貼り付ける。胴部外面には斜め方向のミガキ調整を施し、内面には指頭痕が顕著に残る。

ＳＫＶ211（第109図）

第２地区北側、Ｃ・Ｄ９区に位置する。遺構の西側は溝ＳＤＶ201（古代）に切られる。平面形態は不整の楕円形を呈し、規模は南北長1.48m、東西検出長1.00m、深さ31cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。掘り方最終面は第Ⅶ層である。基底面にはやや凹凸がみられる。

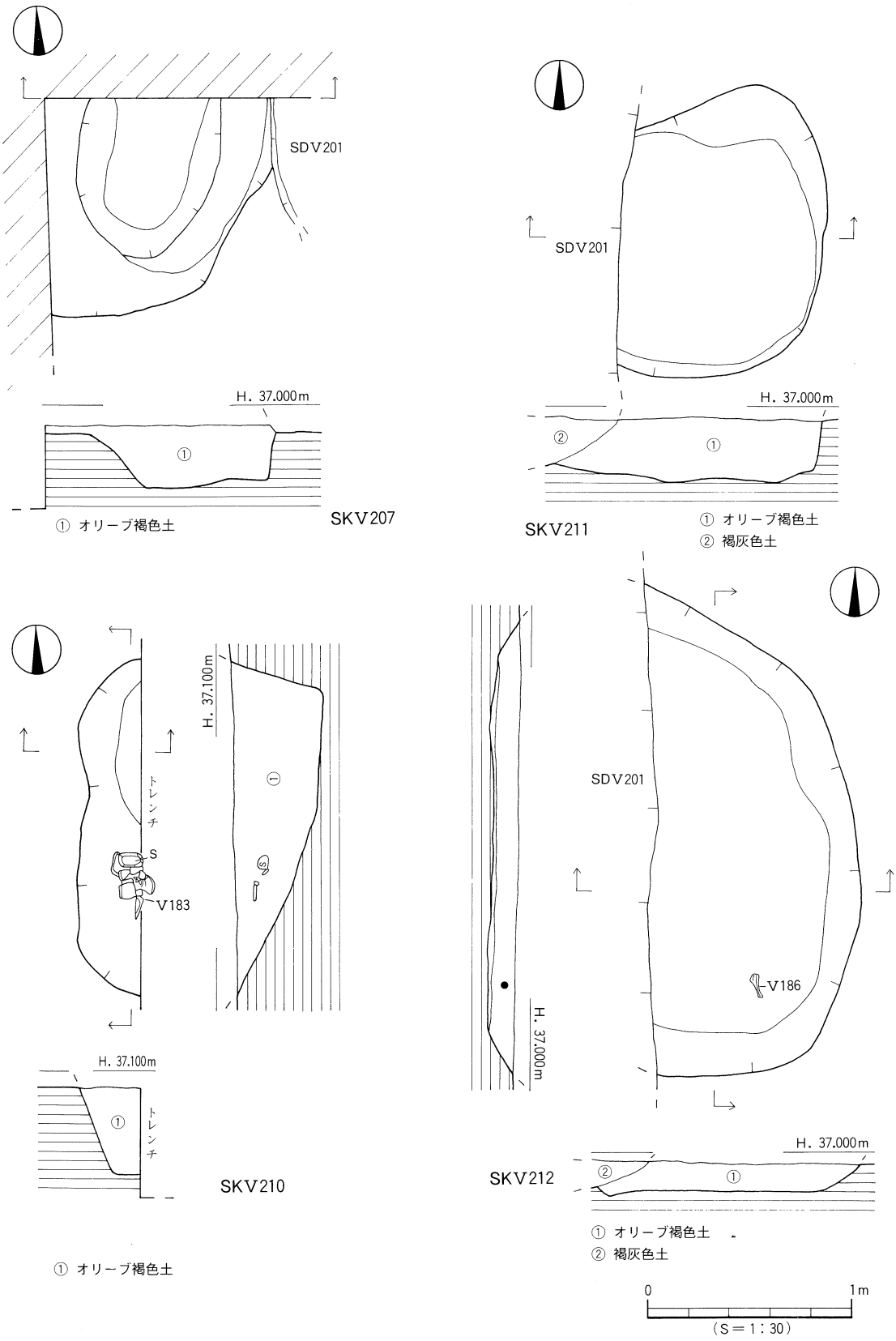
遺物は埋土下位より、大型の鉢形土器片が出土した。

出土遺物（第110図）

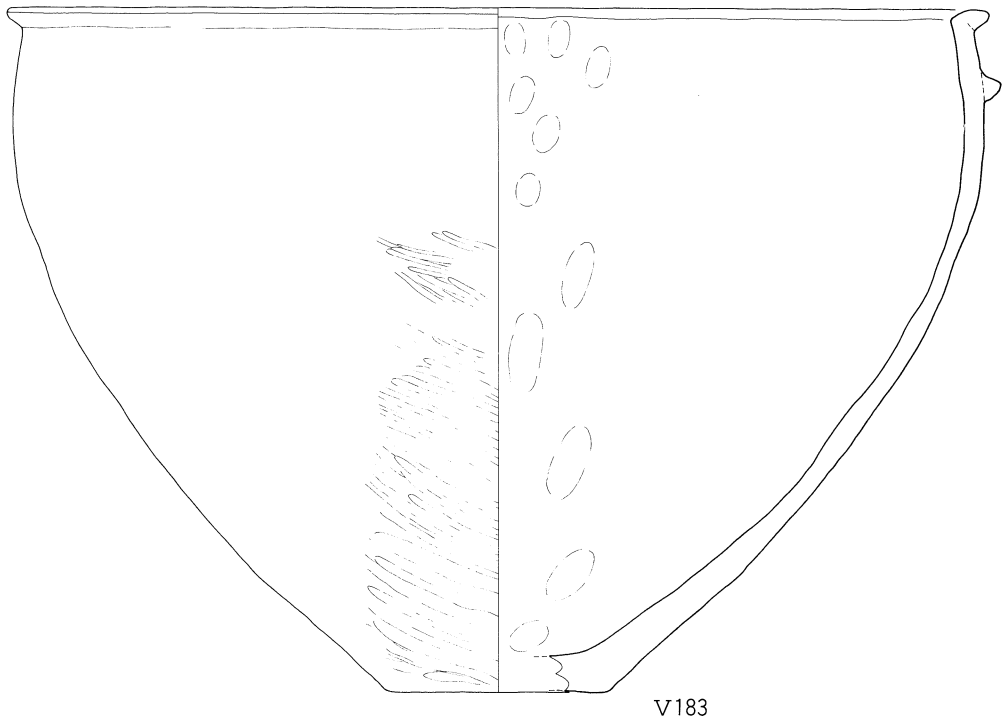
Ｖ184は口径40cmを越える大型の鉢形土器である。貼り付けにより口縁部を成形するもので、口縁部直下の外面には指頭痕が顕著に残る。

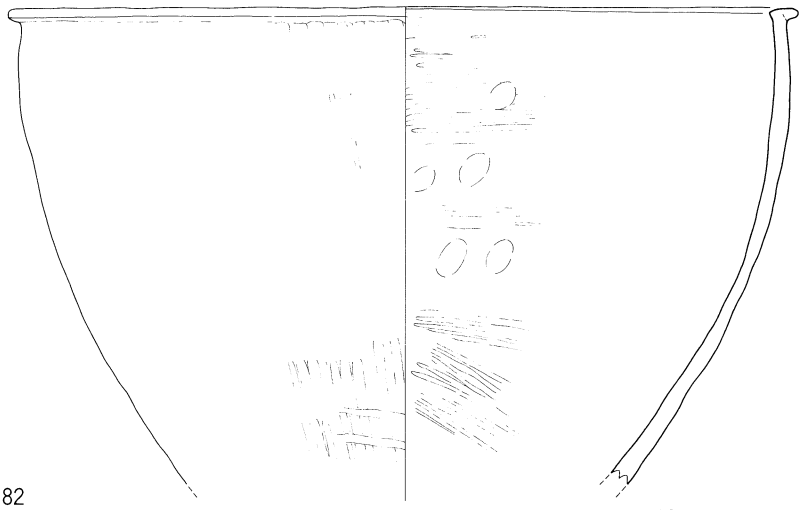
ＳＫＶ212（第109図）

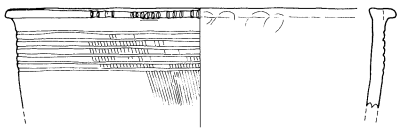
第２地区北側、Ｃ・Ｄ９区に位置する。遺構の西半部は溝ＳＤＶ201（古代）に切られている。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、規模は南北検出長2.42m、東西検出長1.06m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、単一層で埋まる。基底面はほぼ平坦である。掘り方最終面は第Ⅶ層である。遺物は、埋土中位付近より弥生土器小片が数点出土した。

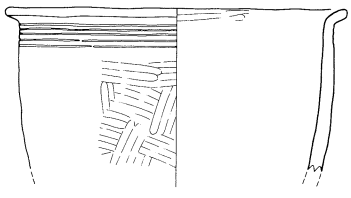


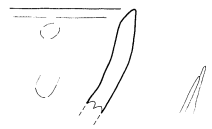
第109図　ＳＫＶ207･210～212測量図

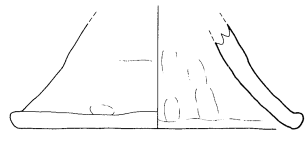


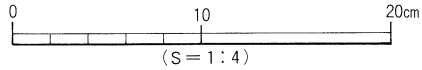












SKV207：V182
SKV210：V183
SKV211：V184
SKV212：V185～187

第110図　ＳＫＶ207･210～212出土遺物実測図

出土遺物（第110図）

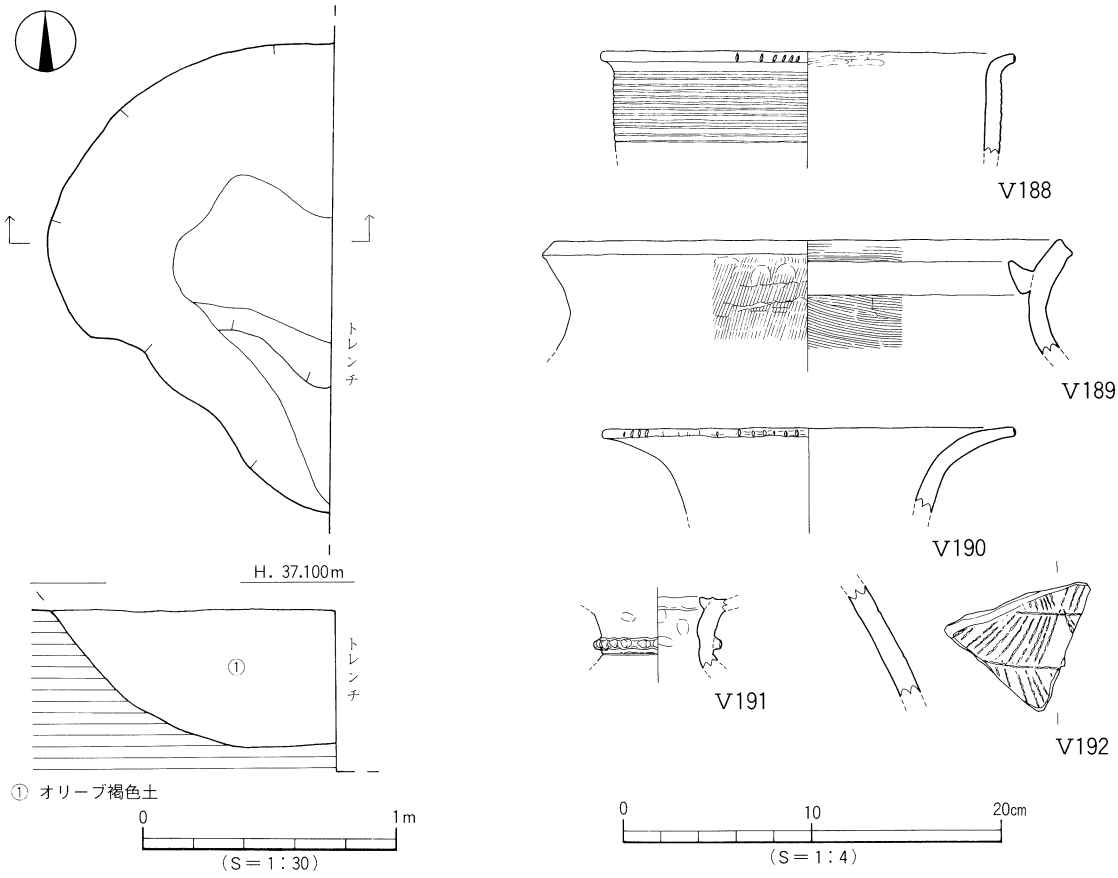
Ｖ185は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。胴部外面に沈線文５条を施す。Ｖ186は直口口縁の鉢形土器。口縁端部は内傾する。Ｖ187は蓋形土器である。

ＳＫＶ215（第111図）

第２地区東壁中央北寄り、Ｃ８・９区に位置する。遺構の東半部は調査区外に続く。平面形態は不整の楕円形を呈するものとみられ、規模は南北検出長1.88ｍ、東西検出長1.13ｍ、深さ53㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体はやや内湾気味に立ち上がる。遺構南側にはテラス状の平坦面がみられる。単一層で埋まることから、人為的に埋め立てられたものとみられる。掘り方最終面は第Ⅶ層である。遺物は埋土中に散在して出土したが、その大半は口縁部や胴部の小破片ばかりである。

出土遺物（図版82）

Ｖ188は甕形土器。口縁端面には刻目、胴部には沈線文12条（４条１組）を施す。Ｖ189・190は壺形土器の口縁部片。Ｖ189は口縁部内面に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。Ｖ190は口縁端面に刻目を施す。Ｖ191は口頸部、Ｖ192は肩部片である。Ｖ191は口縁部内面に丸味のある断面三角形状の凸帯を貼り付け、頸部に沈線文と刻目凸帯文を施す。Ｖ192は沈線文と貝殻腹縁による羽状文を施す。搬入品（山口地方）。



第111図　ＳＫＶ215測量図・出土遺物実測図

ＳＫＶ216（第112図）

第２地区中央やや北寄り、Ｃ８・９区に位置する。遺構の南西部はＳＫＶ217（土坑Ｂ）に切られる。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は長径1.92m、短径1.70m、深さ48cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、遺構南東部にテラス状の平坦面がみられる。単一層で埋まるが、重複している土坑2基の可能性がある。基底面は中央部がやや凹み、壁際との比高差は5cmを測る。
遺構北西隅の基底面にて径26×30cm、深さ５cmのピット１基（ＳＰ①）を検出した。ピット埋土は土坑埋土と類似したものである。掘り方最終面は第Ⅶ層である。土坑内からの遺物の出土はない。

ＳＫＶ303（第113図）

第３地区中央部やや北西寄り、Ｄ12・13区に位置する。遺構の北側はＳＫＶ301（弥生後期）とＳＫＶ302（土坑Ｃ）に切られている。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、規模は南北検出長1.32m、東西長1.32m、深さ40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、二段掘構造になっている。単一層で埋まってはいるが、２基の土坑の重複、もしくは複合（式）土坑の可能性もある。基底面はわずかに東から西へ緩傾斜をなす（比高差３cm）。掘り方最終面は第Ⅶ層である。遺物は埋土中にて弥生土器小片が少量出土したが、図化しうるものはない。

ii）長方形土坑

ＳＫＶ457（第114図）

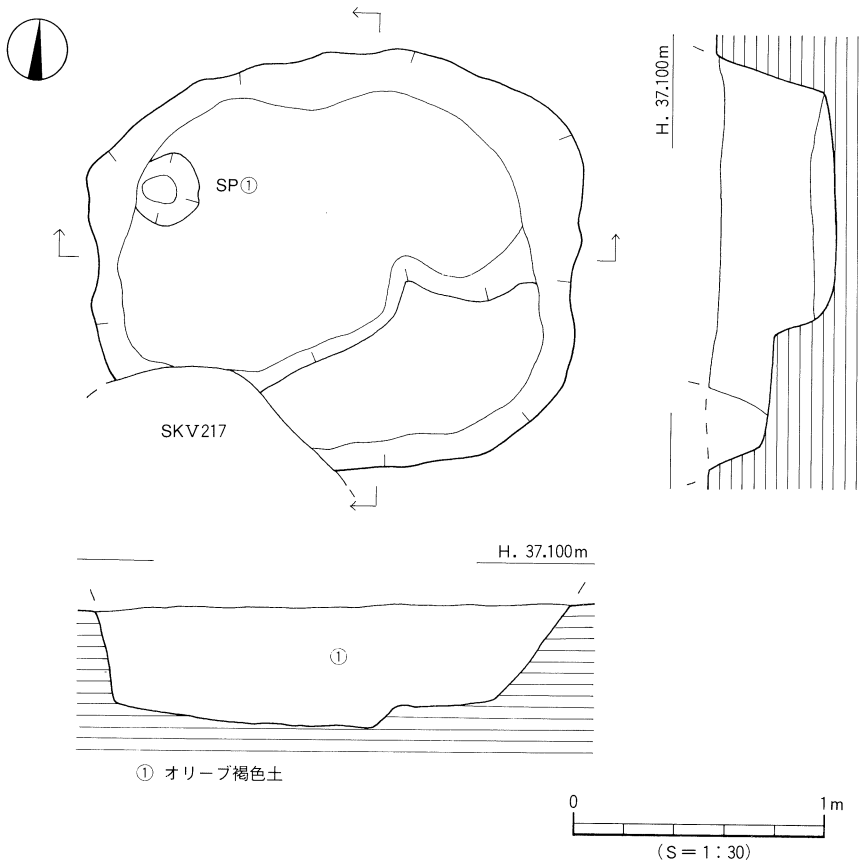
第４地区南東部、Ｃ17～Ｄ18区に位置する。遺構の東壁はＳＫＶ456（弥生後期）、北壁はＳＫＶ413（古墳時代）、南壁はＳＫＶ436（土坑Ｂ）、西壁はＳＰＶ027にそれぞれ切られている。平面形態は、遺構西側がやや幅広となる長方形状を呈するものとみられ、規模は東西検出長2.54m、幅0.80m、深さ20cmを測る。断面形態は皿状を呈し、単一層で埋まる。基底面は東から西に向けてわずかに傾斜をなし、比高差は３cmを測る。掘り方最終面は第Ⅶ層である。
遺物は埋土中より、弥生土器小片が数点出土した。図化しうるものを２点第115図に掲載している。

出土遺物（第115図－Ｖ193・194、図版49）

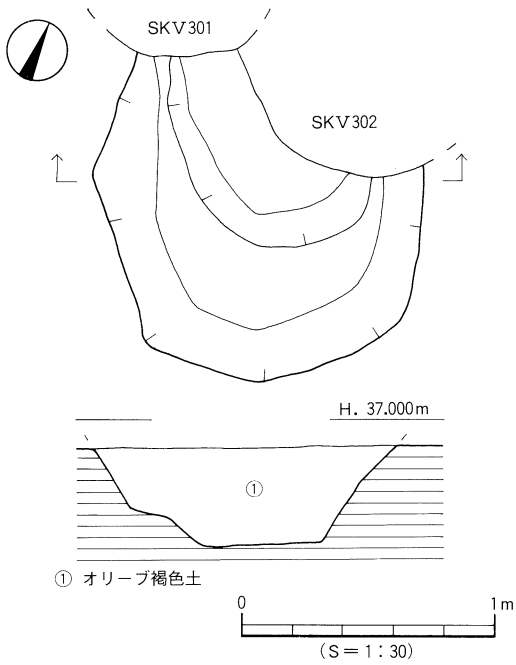
Ｖ193は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。胴部には沈線文６条と山形文（２条１組）４条を施す。Ｖ194は壺形土器の口縁部片。口縁端面はナデ凹む。

ＳＫＶ462（第114図）

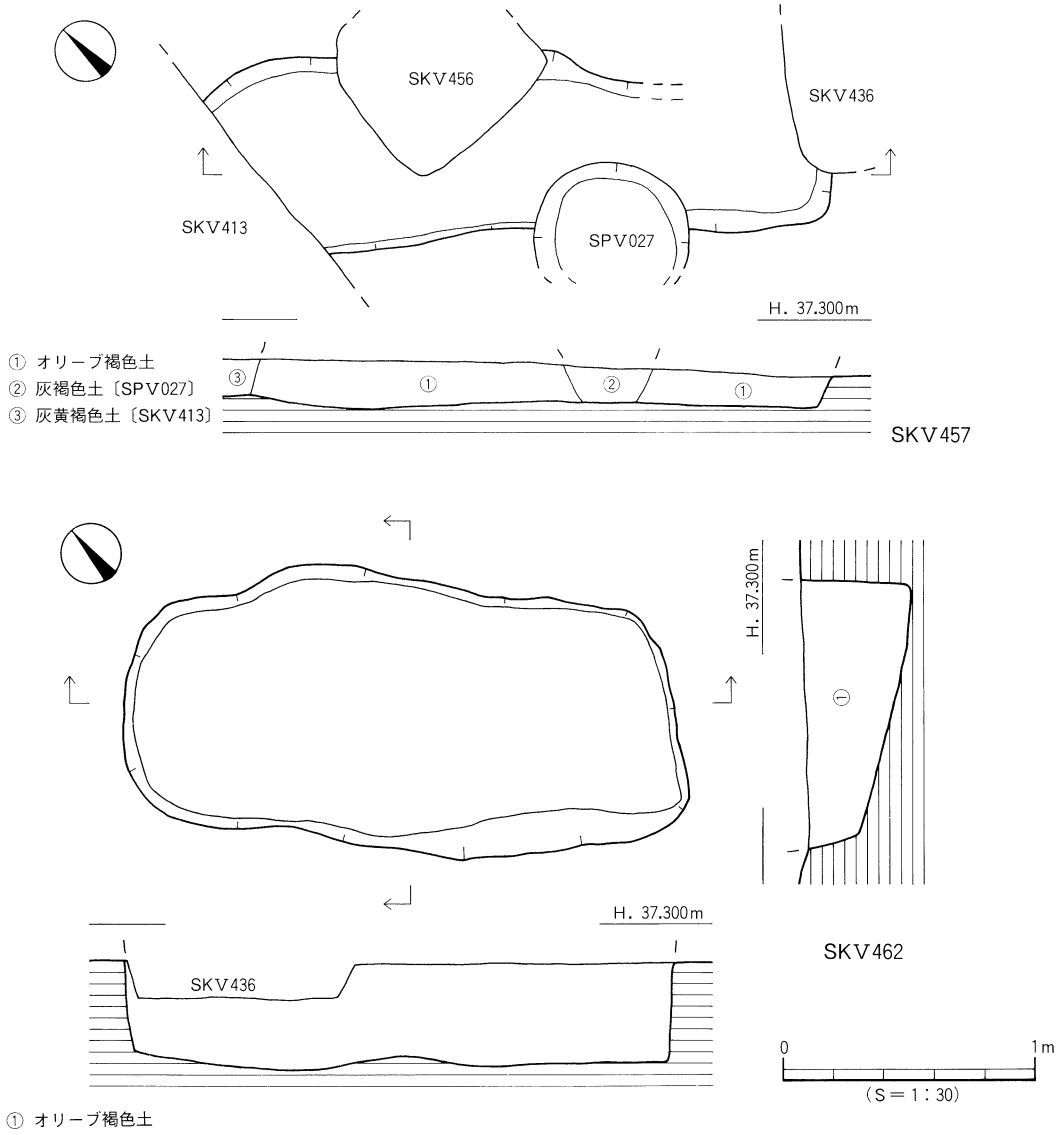
第４地区南東部、Ｃ17区に位置する。遺構の西壁はＳＫＶ436（土坑Ｂ）に切られる。平面形態は隅丸の長方形を呈し、規模は長さ2.30m、幅1.06m、深さ44cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。単一層で埋まることから、人為的に埋め立てされたものとみられた。基底面は起伏があり、南側から北側へ向けて傾斜をなす（比高差18cm）。掘り方最終面は第Ⅶ層である。
遺物は埋土中に散在しており、弥生土器片と、携帯用の小型砥石が１点出土している。



第112図　ＳＫＶ216測量図



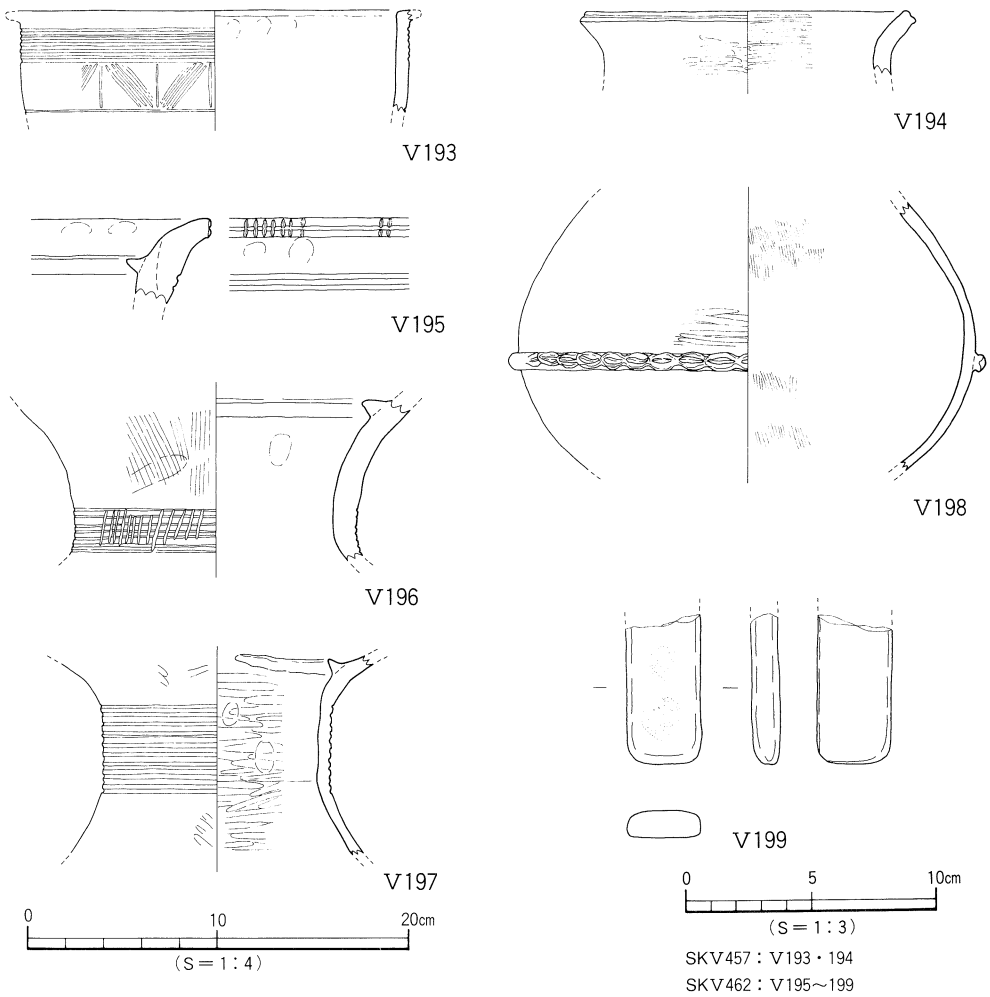
第113図　ＳＫＶ303測量図



第114図　ＳＫＶ457･462測量図

出土遺物（第115図－Ｖ195～199、図版49）

Ｖ195は大型の壺形土器。口縁部内面には断面三角形状の凸帯を貼り付け、口縁端面にはヘラ描き沈線文と刻目を施す。Ｖ196・197は頸部、Ｖ198は胴部片。Ｖ198の胴部中位には凸帯を貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文を施す。凸帯下には１条の沈線文が巡る。Ｖ199は携帯用の砥石である。砂岩系の石材を使用し、基部は欠損する。４面の研磨面をもつ。重量は33.681ｇを測る。



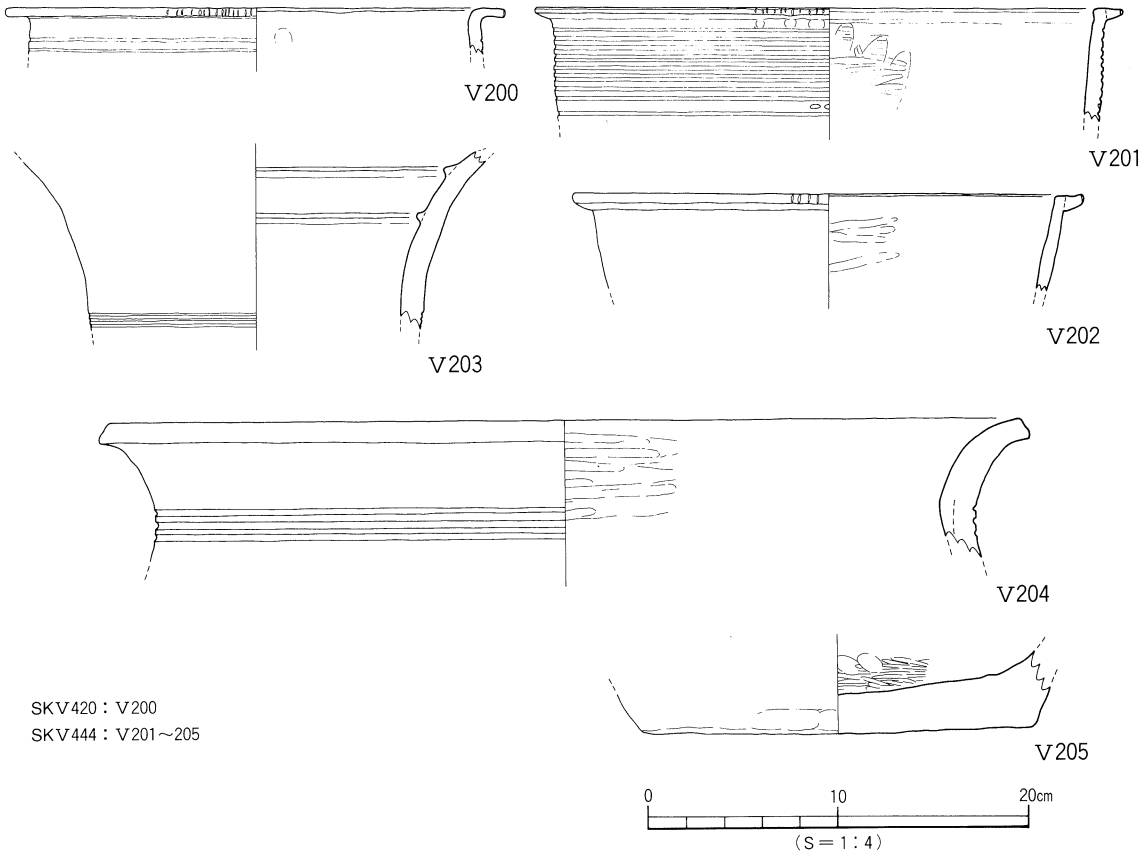
第115図　ＳＫＶ457・462出土遺物実測図

土坑Ｄ出土遺物（第116図）

前述の12基の土坑以外に、土坑Ｄから出土した遺物を６点第116図に掲載した。円形を呈する土坑ＳＫＶ420と不定形を呈する土坑ＳＫＶ444から出土した土器である。

ｉ）ＳＫＶ420出土遺物（Ｖ200）Ｖ200は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。胴部には沈線文2条、口縁端部には刻目を施す。

ii）ＳＫＶ444出土遺物（Ｖ201～205）Ｖ201・202は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。Ｖ201は胴部に沈線文と刺突文を施す。Ｖ201・202共に口縁端面には刻目を施す。Ｖ203～205は壺形土器である。Ｖ203は口縁部内面に２条の凸帯を貼り付け、頸部に沈線文3条を施す。Ｖ204は口径45㎝を越える大型壺で、頸部に沈線文３条を施す。Ｖ205は大型壺の底部で、平底となる。



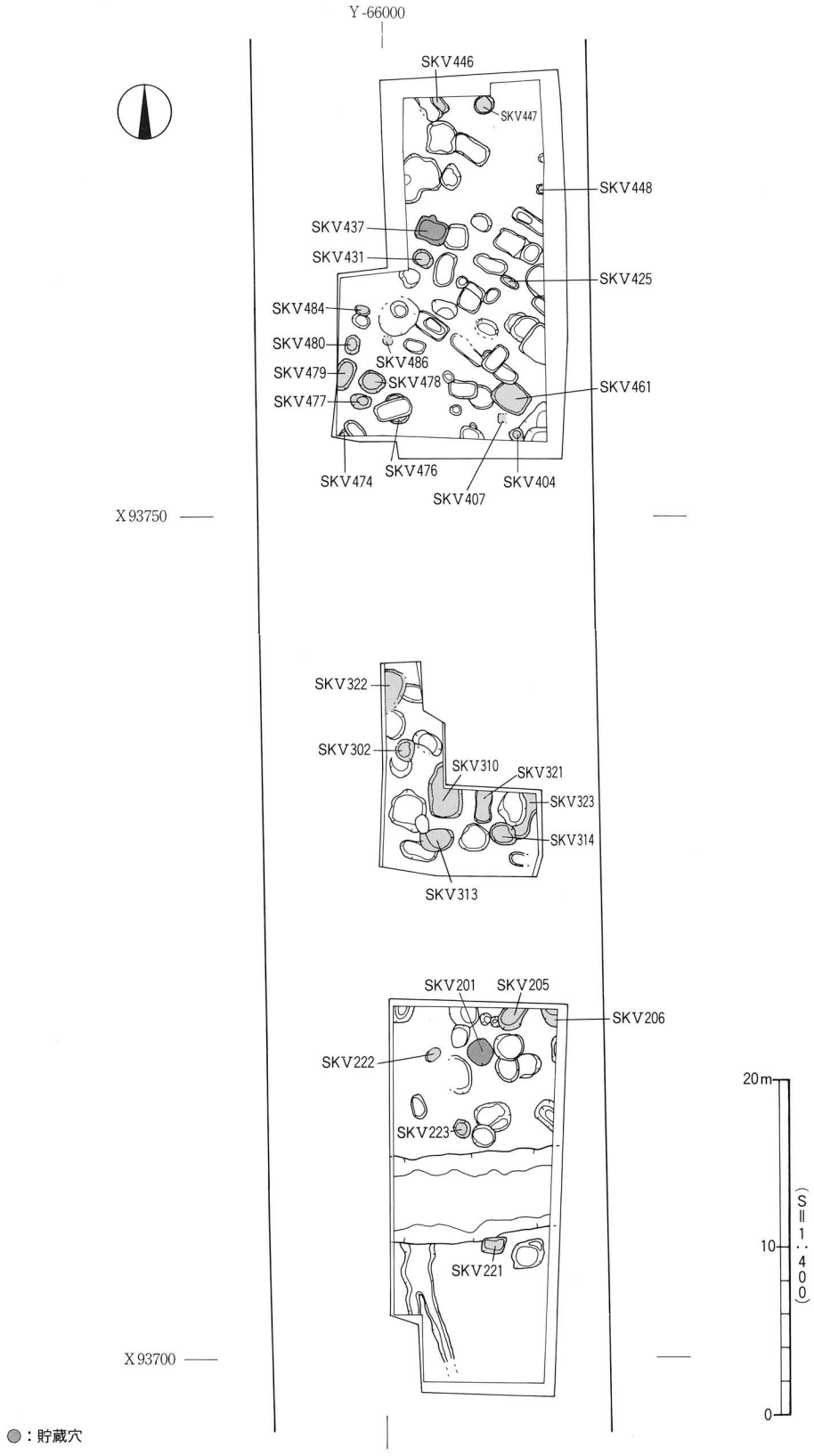
第116図　ＳＫＶ420･444出土遺物実測図

4）土　坑　C（第117図）

土坑Cは31基ある。内訳は第2地区では6基、第3地区では7基、第4地区では18基を検出した。各土坑の平面形態、断面形態、堆積状況は表18に記している。

平面形態では円形11基、楕円形16基、方形3基、長方形1基となり、断面形態では全体の約7割（18基）を逆台形状の土坑が占め、皿状が8基、筒状と舟底状がそれぞれ2基、擂鉢状が1基となる。また、堆積状況では全体の約8割（24基）が単一堆積をなし、水平堆積が5基、放物線型凹堆積と凸堆積をなすものがそれぞれ1基みられる。

報告は31基の土坑のうち、13基の測量図と出土遺物実測図を掲載している。このうち、ＳＫＶ201とＳＫＶ437は貯蔵穴の形態をなす土坑である。



第117図　Ⅴ区　土坑Ｃ分布図

表18　土坑Ｃ一覧

ＳＫ番号	平面形態	断面形態	堆積状況	遺構測量図	遺物実測図	グリット	備　考
ＳＫＶ201	円形	筒(一部フラスコ)	凸	○	○	C9	貯蔵穴
ＳＫＶ205	不整楕円形	舟底	水平			C9･10	
ＳＫＶ206	円形	逆台形	単一			B9～C10	
ＳＫＶ221	不整楕円形	逆台形	水平	○	○	C7	
ＳＫＶ222	楕円形	逆台形	単一	○	○	D9	
ＳＫＶ223	円形	逆台形	単一	○	○	C･D8	
ＳＫＶ302	円形	逆台形	単一	○	○	D13	
ＳＫＶ310	楕円形	皿	単一	○	○	D12･13	
ＳＫＶ313	不整楕円形	逆台形	単一			D12	
ＳＫＶ314	不整円形	逆台形	単一	○	○	C12	
ＳＫＶ321	長方形	皿	単一			C12	
ＳＫＶ322	方形	逆台形	単一			D13･14	
ＳＫＶ323	楕円形	逆台形	単一			C12	
ＳＫＶ404	楕円形	皿	単一			C16･17	
ＳＫＶ407	方形	皿	単一			C17	
ＳＫＶ425	楕円形	逆台形	単一	○	○	C18	
ＳＫＶ431	円形	逆台形	水平			D18･19	
ＳＫＶ437	楕円形	筒(一部フラスコ)	放物線型凹	○	○	D19	貯蔵穴
ＳＫＶ446	楕円形	逆台形	水平			D20	
ＳＫＶ447	円形	逆台形	水平			C20	
ＳＫＶ448	楕円形	逆台形	単一	○	○	C20	
ＳＫＶ461	方形	皿	単一		○	C17	
ＳＫＶ464	不整楕円形	擂鉢	単一	○	○	D18	
ＳＫＶ474	円形	逆台形	単一			E16	
ＳＫＶ476	円形	逆台形	単一			D17	
ＳＫＶ477	楕円形	逆台形	単一			E17	
ＳＫＶ478	円形	皿	単一	○		D･E17	
ＳＫＶ479	楕円形	舟底	単一	○	○	E17	
ＳＫＶ480	楕円形	皿	単一			E17･18	
ＳＫＶ484	円形	皿	単一			E18	
ＳＫＶ486	楕円形	逆台形	単一			D18	

① 貯蔵穴

ＳＫＶ201（第118図、図版40）

第２地区北側、Ｃ９区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径1.62～1.64ｍ、深さ50㎝を測る。断面形態は筒状を呈するが、遺構の東半部はフラスコ状となる。埋土は大きく３層に分層される（①・②・③層）。①層に比べ②層は黄色土が班点状に混入し、③層は黄色土の混入が①層に比べて少ない土壌である。堆積状況をみると、基底面中央部の③層上面が盛り上がる箇所があり、②層は遺構西側からの流入がみられる。土坑中央基底面にはいわゆる凸堆積がみられることから、貯蔵穴の下部が遺存していたようである。基底面は中央やや南東側が低くなり、壁際との比高差は12㎝を測る。掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は③層からの出土はなく、①・②層中から弥生土器片が数点と、石斧及び５～10㎝大の扁平石や丸石が散在して出土した。

出土遺物

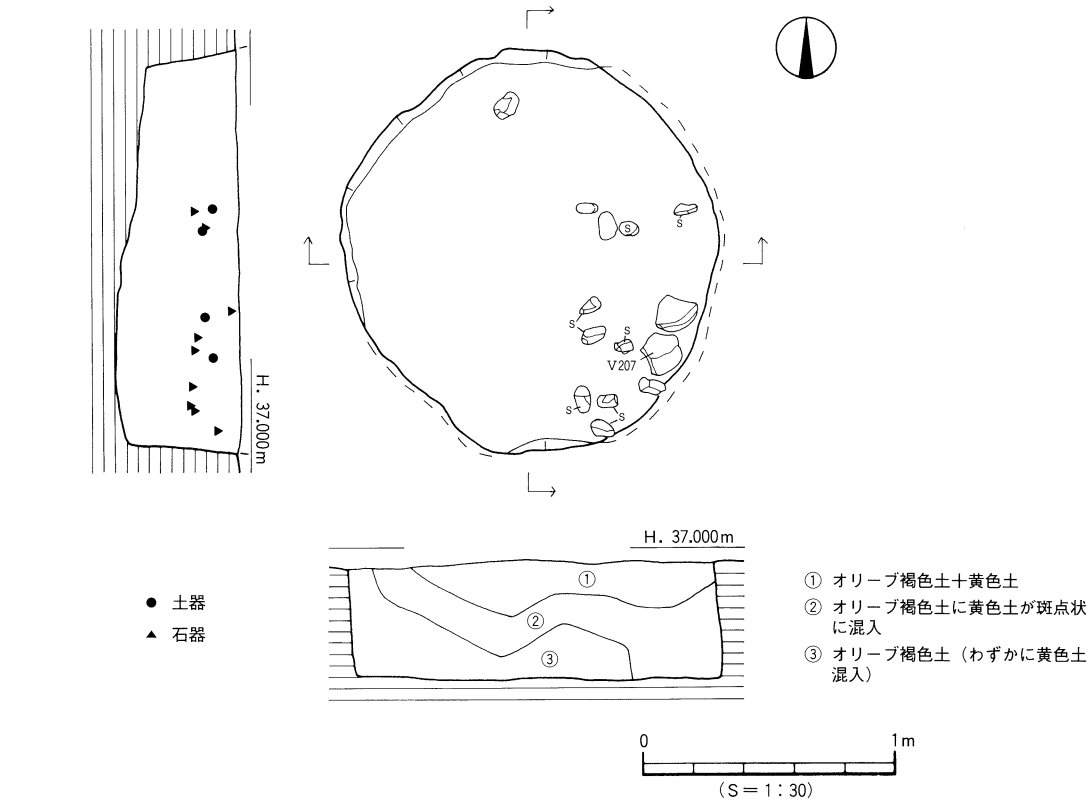
Ｖ206～208は甕形土器。Ｖ206・207は折り曲げ、Ｖ208は貼り付けにより口縁部を成形するものである。胴部文様は、沈線文だけのもの（Ｖ206）、沈線文と刺突文が組み合うもの（Ｖ207）、無文のもの（Ｖ208）がある。Ｖ209・210は壺形土器。Ｖ209は口縁部内面に凸帯を貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文２列を施す。Ｖ210は胴部片。沈線文と斜格子目文を施す。Ｖ211は扁平片刃石斧である。基部及び両側部は欠損する。刃部と基部の境はあいまいである。ａ面には粗い研磨がみられる。ｂ面には刃部がわずかに残り、中央部付近に敲打痕を残す。緑色片岩製。

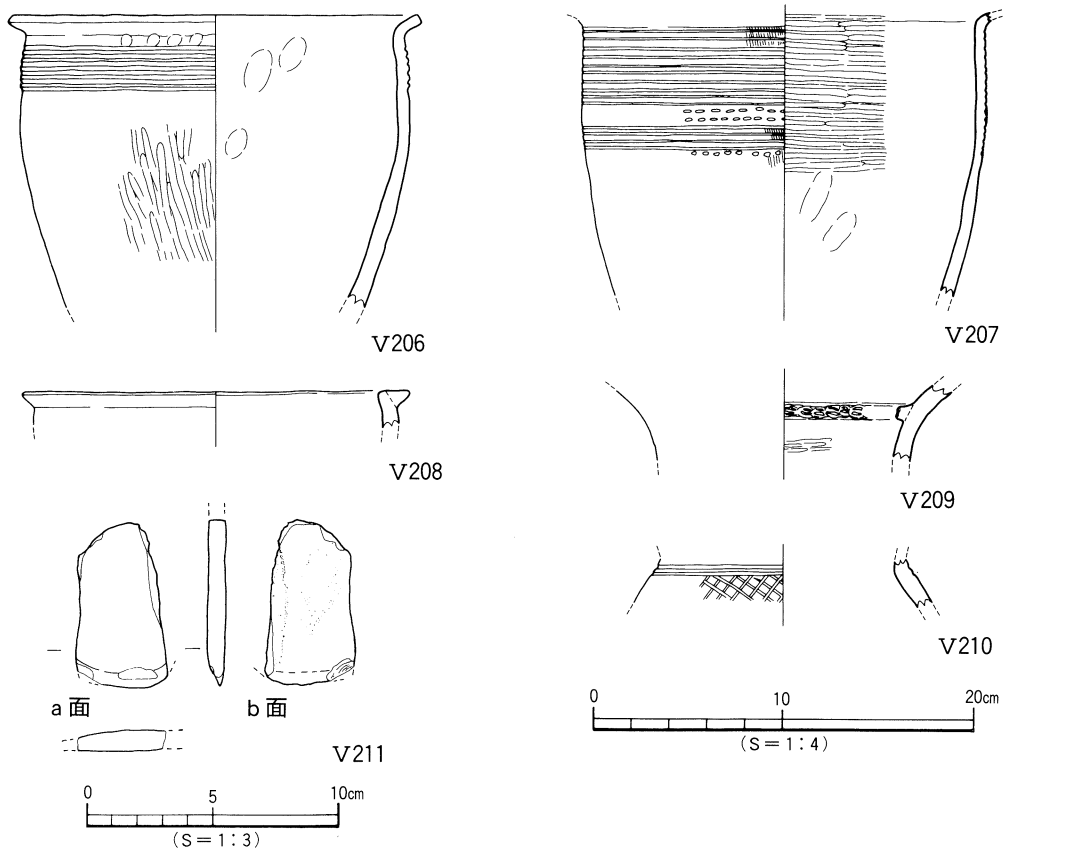
ＳＫＶ437（第119図、図版40・41）

第４地区中央部やや北西寄り、Ｄ19区に位置する。遺構の南側はＳＰＶ061、北西隅はＳＰＶ063に切られている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.80ｍ、短径1.46ｍ、深さ85㎝を測る。断面形態は筒状を呈するが、北西部壁体のみフラスコ状となる。土坑南側には幅20～25㎝の緩やかな傾斜面がある。また、北壁中央部付近には半円状に直径48㎝、深さ20㎝の突出部がある。埋土は９層（①～⑨）に分層される。⑥層中には土器片、炭化物、焼土がブロック状に点在することから、土坑以外の場所から投げ込まれたものとみられた。断面観察では、ピットが⑥層上面から掘り込まれていたことがわかる。ピットの規模は径25～40㎝、深さ50㎝を測る。つまり⑥層上面にて土坑の底面が再利用されたことになる。③層の説明は困難であるが、①・②・④・⑤層はほぼ斜堆積をなしており、自然に埋まったものと判断され、突出部の埋土は⑤層と類似していた。また、基底面北東部にて長さ28㎝、幅16㎝、深さ３㎝の溝状の凹み（ＳＤ①）を検出した。ＳＤ①は⑦層で埋まる。

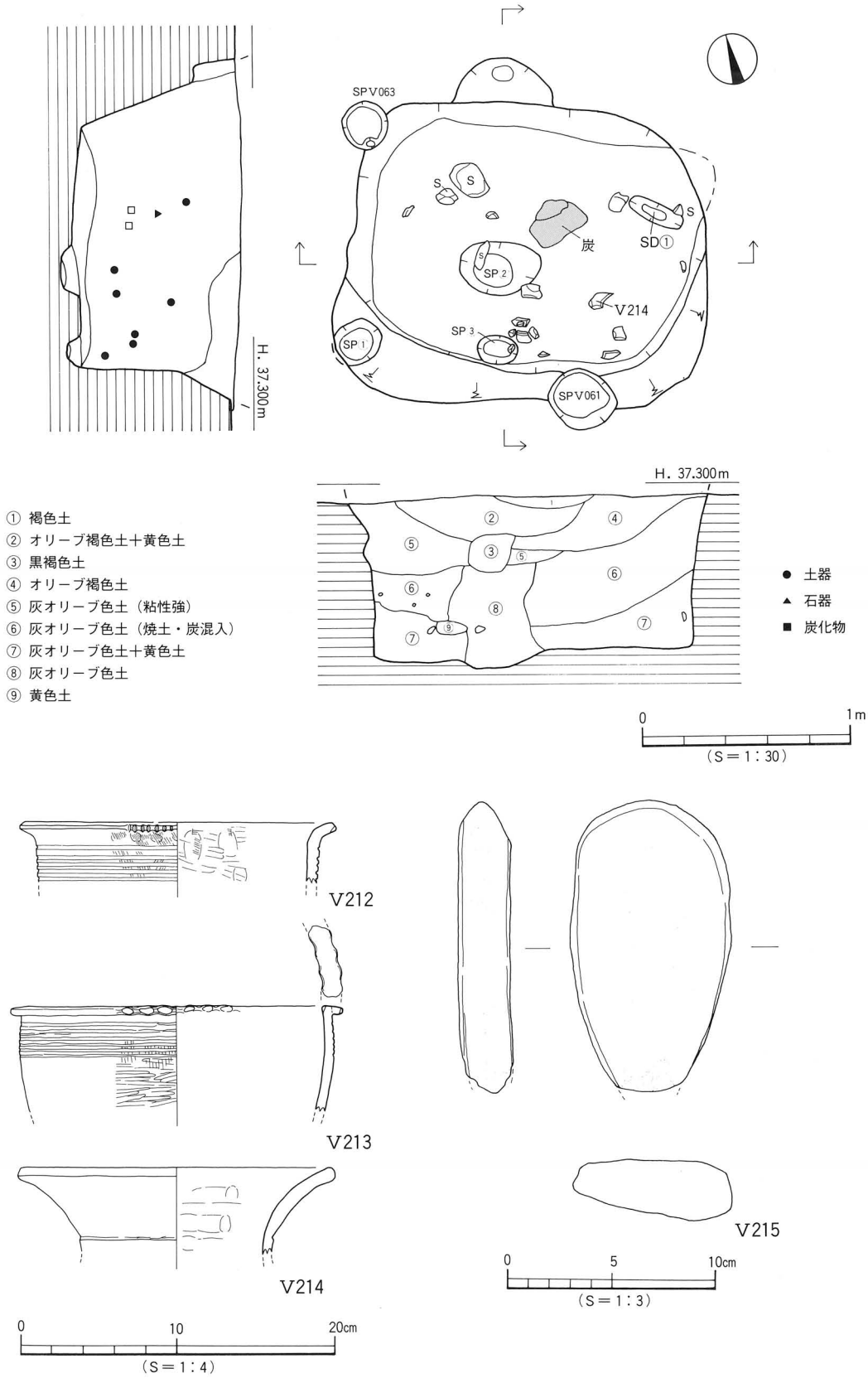
基底面はわずかに東から西へ向けて緩傾斜をなし、比高差は６㎝を測る。基底面中央付近にて径20～40㎝、深さ８㎝の小ピット（ＳＰ②）を検出している。ピット埋土は⑧層である。また、基底面南壁中央部に径10～20㎝、深さ５㎝の小ピット（ＳＰ③）を検出した。ピット埋土は⑦層に類似する。そのほか、遺構南西隅の口辺部傾斜面にて径20～24㎝、深さ10㎝のピット（ＳＰ①）を検出した。ＳＰ①は傾斜面にほぼ直交するように掘られている。ピット埋土は⑤層に類似する。土坑掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物はほとんどが⑥層中からの出土であり、弥生土器小片と石器素材が１点出土している。





第118図　ＳＫＶ201測量図・出土遺物実測図



第119図　ＳＫＶ437測量図・出土遺物実測図

出土遺物

V212・213は甕形土器。V212は折り曲げ、V213は貼り付けにより口縁部を成形するものである。胴部には沈線文を施す。V212は口縁端面に刻目、V213は口縁端部内外面に押圧を施すものである。V214は壺形土器。頸部には削り出し状の段がみられる。V215は石器素材。扁平な円礫の表面中央部が磨かれて滑らかになる。先端部と側面に一部、敲打痕を残す。緑色片岩製。

② その他の土坑

ⅰ）円形土坑

ＳＫV223（第120図）

第２地区中央部やや北寄り、Ｃ・Ｄ８区に位置する。遺構の西側は溝ＳＤV201（古代）に切られている。平面形態は円形を呈し、規模は径1.09～1.20m、深さ31cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。基底面は西から東へやや傾斜をなし、比高差は４cmを測る。掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土中より、弥生土器小片が数点出土した。図化しうるものを１点第121図に掲載している。

出土遺物（第121図－V216）

V216は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。胴部に沈線文４条を施す。

ＳＫV302（第120図）

第３地区北西部、D13区に位置する。遺構の西壁はＳＫV301（弥生中～後期）に切られている。平面形態は円形を呈し、規模は径1.00～1.26m、深さ39cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東側壁体は緩やかに内湾気味に立ち上がる。基底面は東から西に向けてわずかに傾斜をなす。掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを１点第121図に掲載している。

出土遺物（第121図－V217）

V217は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。胴部には沈線文７条、口縁端部内外面に刻目を施す。

ＳＫV314（第120図）

第３地区南東部、C12区に位置する。遺構の東側はＳＰV005に切られている。平面形態は南東部がやや張り出す不整の円形を呈し、規模は径1.20～1.38m、深さ28cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。基底面はほぼ平坦である。掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土中より、口縁部２分の１遺存の蓋形土器（V219）や土器小片が出土した。図化しうるものを２点第121図に掲載している。

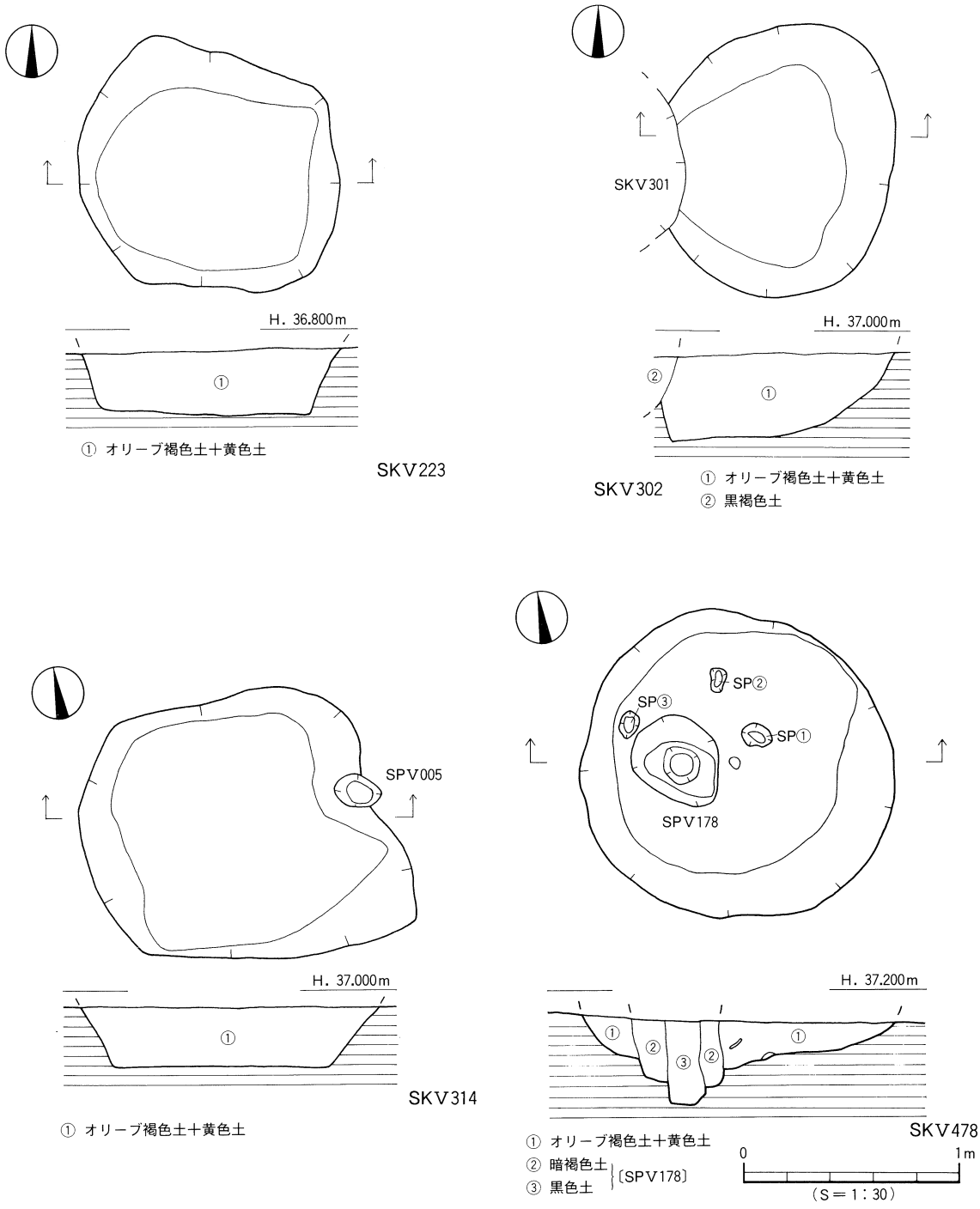
出土遺物（第121図－V218・219）

V218は壺形土器の口縁部片。口縁端面上・下端にそれぞれ刻目を施す。V219は蓋形土器。つまみ中央部はやや凹む。

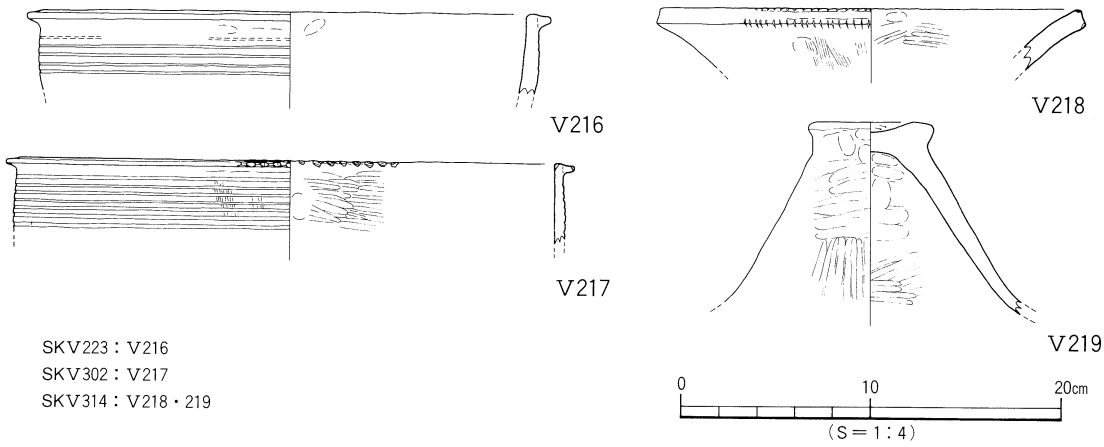
ＳＫＶ478（第120図）

第４地区南西部、Ｄ・Ｅ17区に位置する。土坑中央やや西寄りはＳＰＶ178に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は径1.48m、深さ22cmを測る。断面形態は皿状を呈し、壁体は内湾気味に立ち上がる。基底面はやや中央部が凹み、壁際との比高差は５cmを測る。基底面中央部と北西部にそれぞれ径８～12cm、深さ５cmの小ピット３基（ＳＰ①～③）を検出した。ピット埋土は、すべて土坑埋土に類似する。

遺物は埋土中位付近より、弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。



第120図　ＳＫＶ223・302・314・478測量図



第121図　ＳＫＶ223・302・314出土遺物実測図

ii）楕円形土坑

ＳＫＶ221（第122図、図版41）

第２地区中央部やや南東寄り、Ｃ７区に位置する。遺構の北西隅は、溝ＳＤＶ202南側壁体（下層）を切っている。平面形態は、北東部がやや突出する不整の楕円形を呈し、規模は長径1.32ｍ、短径0.94ｍ、深さ72㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は上下２層に分層され（①・②層）、②層は黄色土が斑点状に混入する。堆積状況は水平堆積であり、①層の堆積は40㎝を測る。②層は自然混入により、土砂が堆積したものとみられるが、①層は層厚から人為的に埋め立てされたものと判断される。掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は、大半が②層及び基底面付近からの出土である。基底面中央部からは、底部を欠損した甕形土器（Ｖ220）がその場で折り重なるような状態で出土した。そのほか径10×30㎝、厚さ５㎝の角礫が②層中より２点出土している。

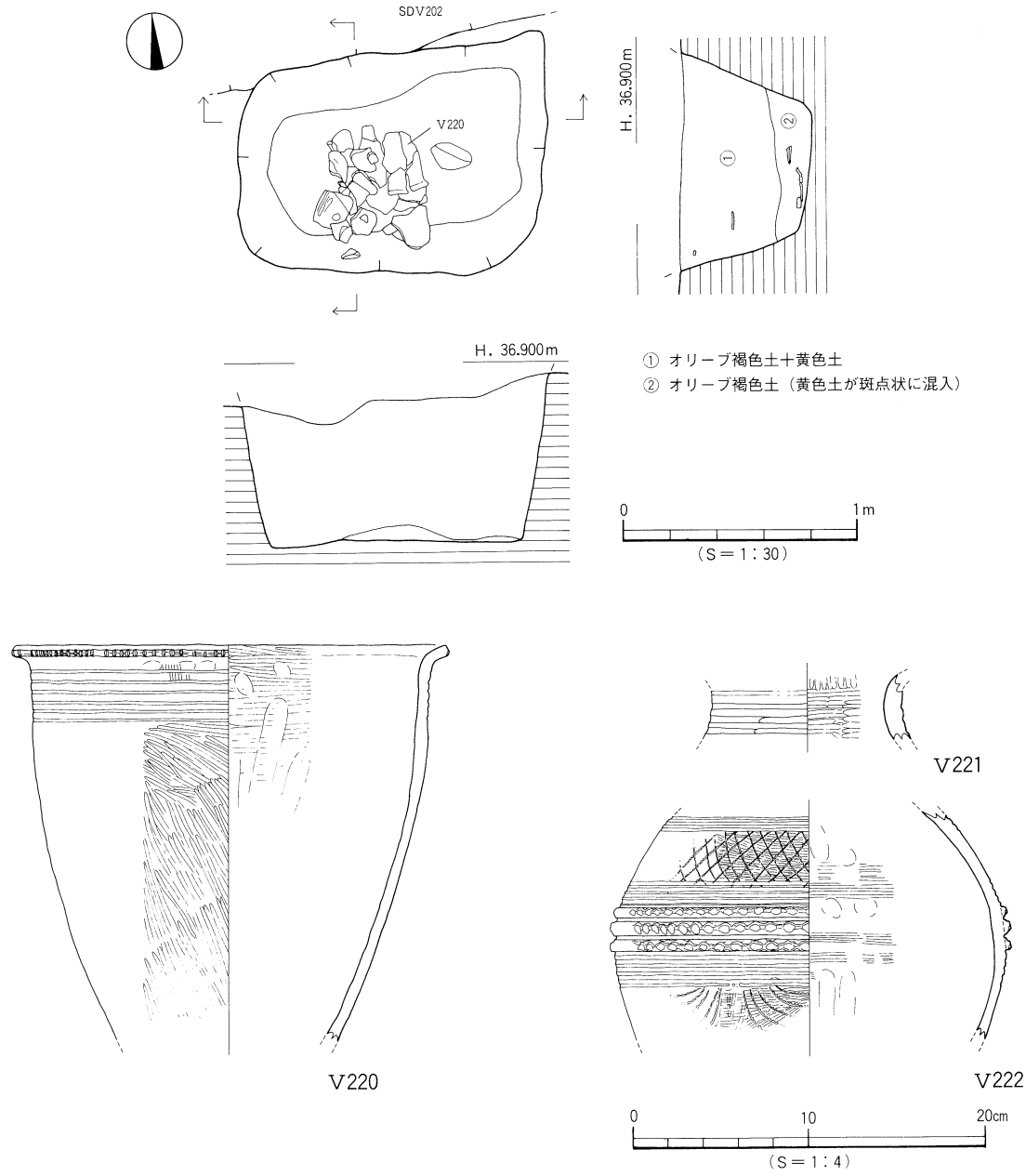
出土遺物（図版49）

Ｖ220は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。胴部に沈線文６条（６条１組か）を施す。Ｖ221・222は壺形土器。Ｖ222は沈線文と刻目凸帯文、および貝殻腹縁による斜格子目文と重弧文を施す。

ＳＫＶ425（第123図、図版41）

第４地区中央部やや東寄り、Ｃ18区に位置する。遺構の北西隅はＳＫＶ432（土坑Ｂ）、南東隅はＳＰＶ048にそれぞれ切られている。平面形態はわずかに西側が幅広になる楕円形を呈し、規模は長径1.24ｍ、短径0.66ｍ、深さ33㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。なお、埋土中に少量ではあるが、炭化物が混入している。基底面は中央部が凹み、壁際との比高差は６㎝を測る。掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土上位より、底部を欠損した甕形土器の破片（Ｖ223）が、外面を上にして重なり合うように出土した。このほか埋土中より、石鏃が１点出土している。



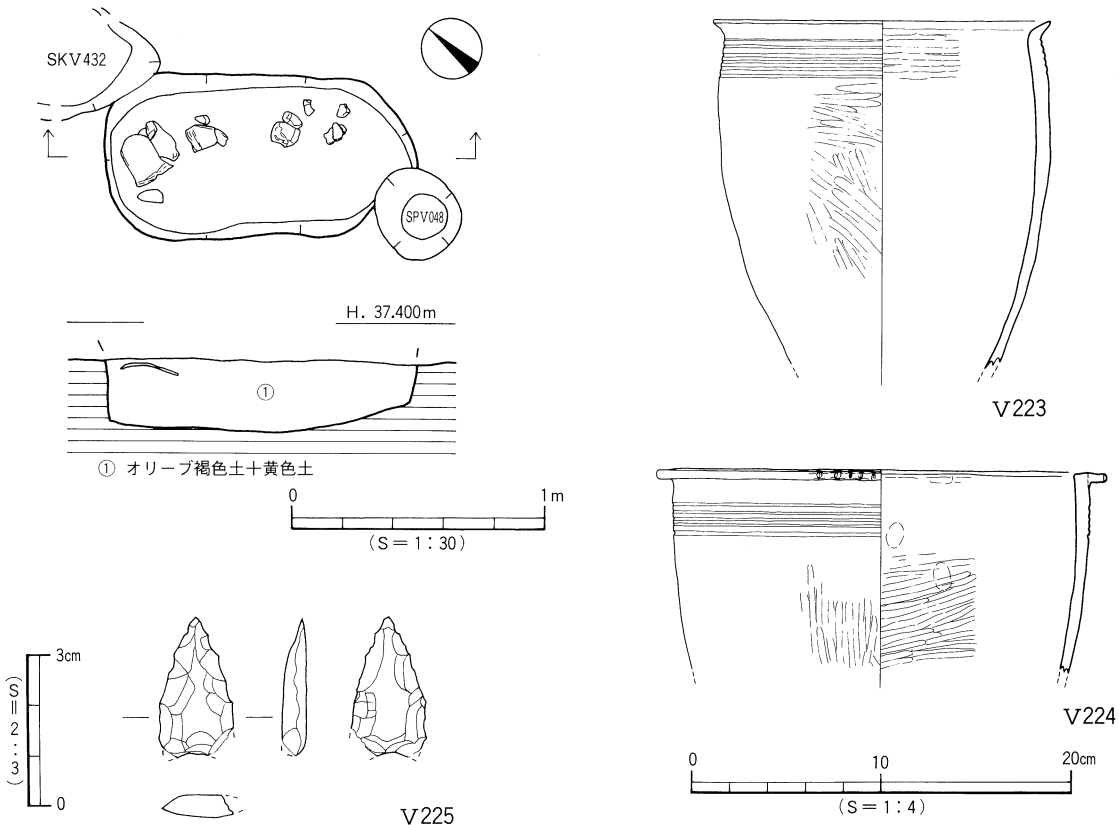
第122図　ＳＫＶ221測量図・出土遺物実測図

出土遺物（図版49）

Ｖ223は折り曲げ、Ｖ224は貼り付け口縁の甕形土器。胴部には沈線文を施す。Ｖ225はサヌカイト製の凹基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。表裏面共に、初剥離面を残す。

ＳＫＶ222（第124図）

第２地区北西部、Ｄ９区に位置する。遺構上面はＳＤＶ201（古代）に削平されている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.63m、短径1.25m、深さ38cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。基底面は南側から北側に向けて傾斜をなし、比高差は５cmを測る。



第123図　ＳＫＶ425測量図・出土遺物実測図

遺物は埋土中にて、弥生土器小片が数点出土している。

出土遺物（第125図－Ｖ226）

Ｖ226はＳＫＶ222出土の甕形土器である。折り曲げにより口縁部は成形され、胴部には沈線文、口縁端面には刻目を施す。

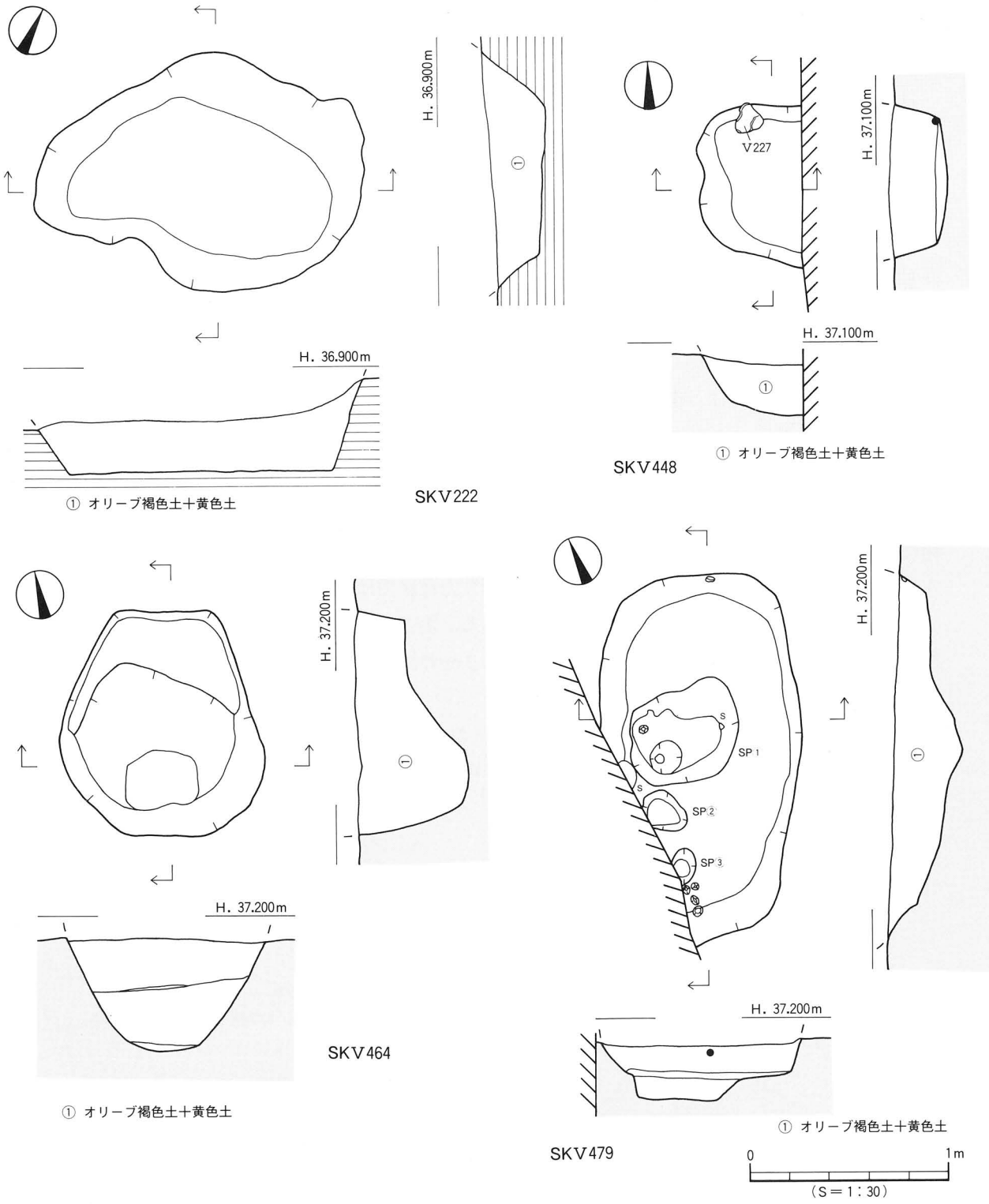
ＳＫＶ448（第124図）

第４地区東壁中央部やや北寄り、Ｃ19区に位置する。遺構上面にはＳＫＶ440（古代）があり、東半部は調査区外に続く。平面形態は円もしくは楕円形を呈するものとみられ、規模は東西検出長0.50ｍ、南北検出長0.80ｍ、深さ30㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。基底面は中央部が凹み、壁際との比高差は6㎝を測る。掘り方最終面は第Ⅷ層に及ぶ。

遺物は遺構北西部基底面にて、口縁部をわずかに欠損した蓋形土器（Ｖ227）が横倒しの状態で出土した。

出土遺物（第125図－Ｖ227、図版49）

Ｖ227は蓋形土器。つまみ中央部はやや凹む。内外面共にヨコ方向のミガキ調整を施す。口縁部内外面に煤が付着する。



第124図　ＳＫＶ222･448･464･479測量図

ＳＫＶ464（第124図）

第４地区中央やや南寄り、Ｄ18区に位置する。遺構上面にはＳＫＶ413（古墳時代）がある。平面形態は北側がやや突出する不整の楕円形を呈し、規模は長径1.10m、短径1.0m、深さ57cmを測る。断面形態は擂鉢状を呈するが、遺構北側には幅10～30cmのテラス状の平坦面がみられる。基底面は中央部が凹む。掘り方最終面は第Ⅷ層に及ぶ。

遺物は埋土中にて弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを１点第125図に掲載している。

出土遺物（第125図－Ｖ228、図版50）

Ｖ228は蓋形土器である。天井部に突起状の高まり（つまみ）が２ヶ所あり、口縁部には径4.5㎜大の円孔が２個施される（焼成前穿孔）。

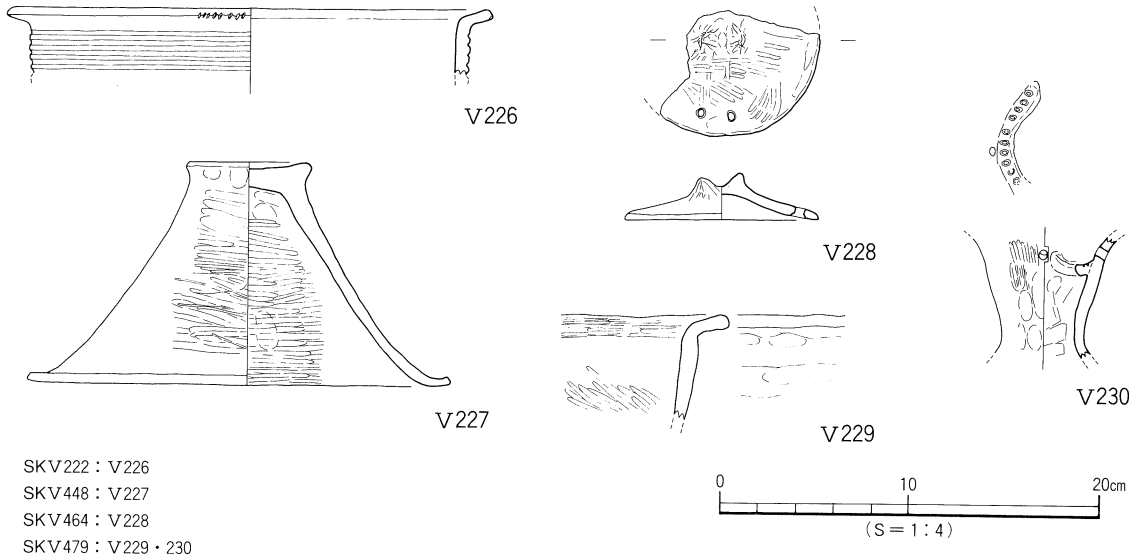
ＳＫＶ479（第124図）

第４地区南西部、Ｅ17区に位置する。遺構の南西部は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、規模は長径1.88m、短径1.00m、深さは18～36cmを測る。断面形態は舟底状を呈し、単一層で埋まる。壁体は、南壁側では緩やかに立ち上がる。基底面にて３基のピット（ＳＰ①～③）を検出した。ＳＰ①は平面形態が楕円形状を呈し、規模は長径58cm、短径48cm、深さ12cmを測る。埋土は土坑埋土と類似する。ＳＰ①底面では柱痕とみられる小ピットを検出した。小ピットは径14～18cm、深さ10cmを測る。埋土はピット埋土と同様であるが、やや粘性が強い。ＳＰ②・③は平面形態が楕円形を呈し、規模はＳＰ②が長径26cm、短径18cm、深さ５cm、ＳＰ③は長径20cm、短径14cm、深さ４cmを測る。埋土は土坑埋土と類似する。土坑掘り方最終面は第Ⅷ層に及ぶ。

遺物は、埋土上位と基底面付近からの出土である。埋土上位からは弥生土器の小片が数点、基底面付近からは５cm大の小石２点と径10～15cm、厚さ３cmの円礫が1点出土している。

出土遺物（第125図－Ｖ229・230、図版50）

Ｖ229は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。Ｖ230は壺形土器であり、口縁部内面には凸帯を貼り付け、凸帯上には竹管文を施す。頸部には円孔を穿つ（焼成前穿孔）。



第125図　ＳＫＶ222・448・464・479出土遺物実測図

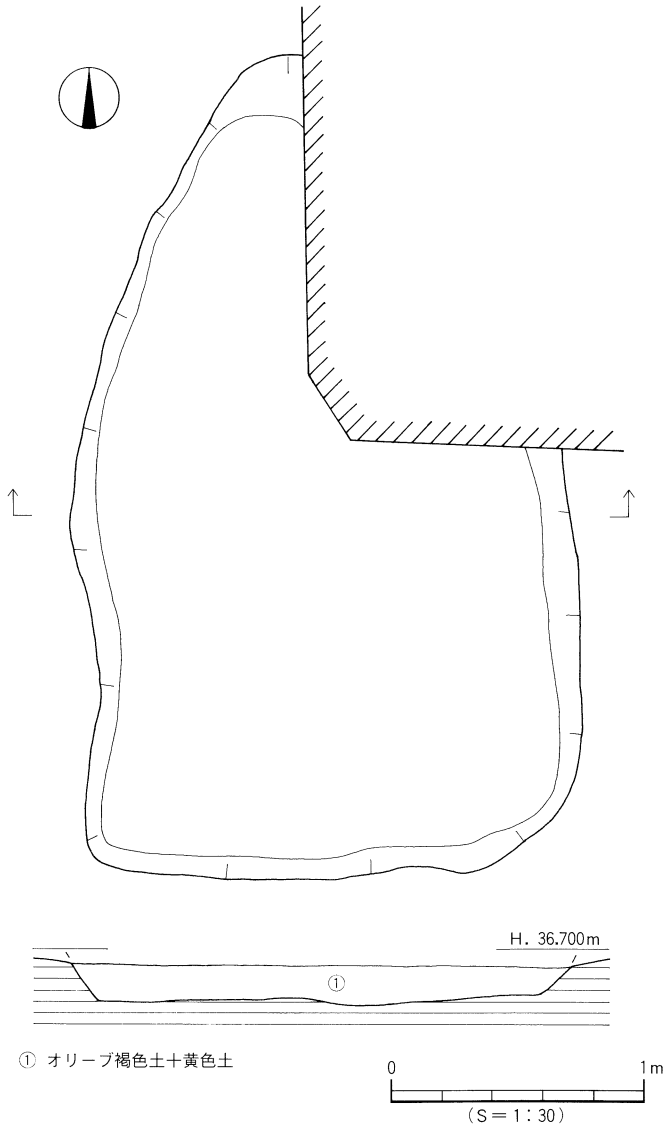
ＳＫＶ310（第126図）

第３地区中央部、Ｄ12・13区に位置する。遺構の北東部は調査区外に続く。平面形態は遺構南側がやや幅広の楕円形を呈するものとみられ、規模は長径3.34ｍ、短径2.00ｍ、深さ14㎝を測る。推定床面積3.66㎡を測る大型の土坑である。断面形態は皿状を呈し、単一層で埋まる。基底面は遺構中央部がわずかに凹み、壁際との比高差は４㎝を測る。掘り方最終面は第Ⅶ層である。

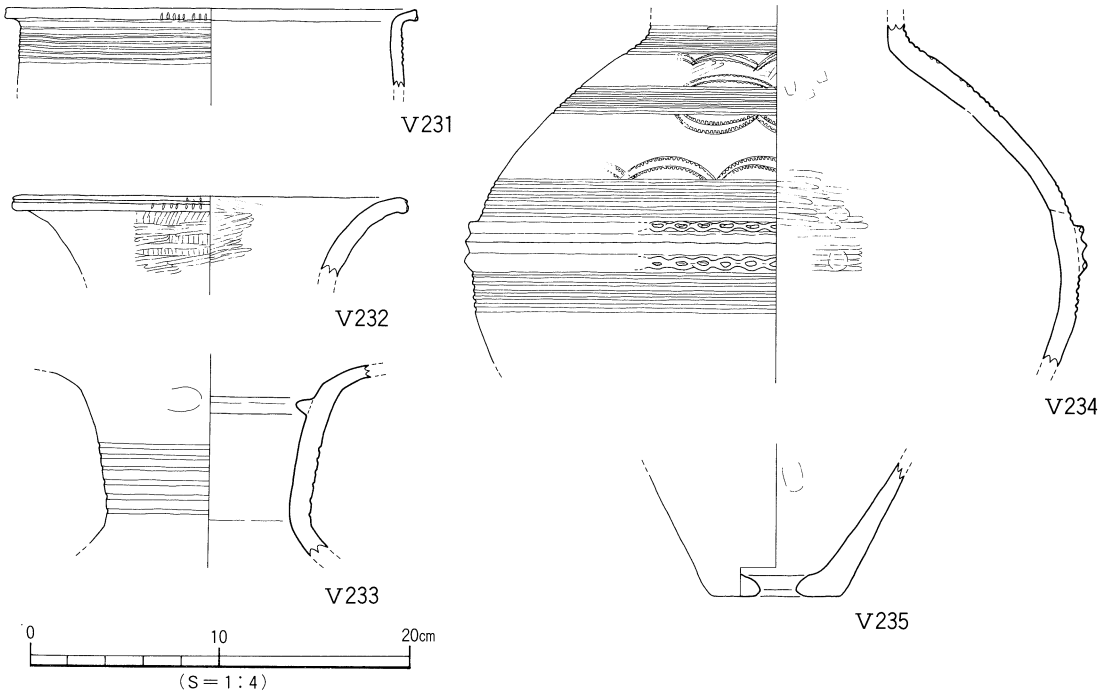
遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを５点第127図に掲載している。

出土遺物（第127図、図版50）

Ｖ231は甕形土器で、折り曲げにより口縁部を成形する。口縁端面には刻目、胴部には沈線文７条を施す。Ｖ232～234は壺形土器。Ｖ232は口縁端面にヘラ描き沈線文１条と刻目を施す。Ｖ233は口縁部内面に断面三角形状の凸帯が巡り、頸部には沈線文６条を施す。Ｖ234は沈線文と貝殻腹縁による弧文、および凸帯文を施すものである。凸帯はM字状を呈し、上段と下段には凸帯上に連鎖状刻目文を施す。Ｖ235は所謂「コシキ」への転用品である。甕形土器の底部に径1.8㎝大の孔を穿つ（焼成後穿孔）。



第126図　ＳＫＶ310測量図

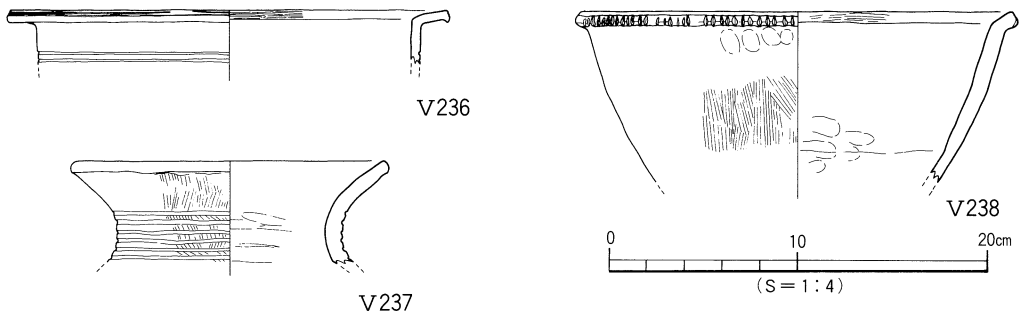


第127図　ＳＫＶ310出土遺物実測図

土坑Ｃ出土遺物（第128図）

前述の14基のほかに、方形を呈する土坑ＳＫＶ461から出土した遺物を第128図に掲載した。

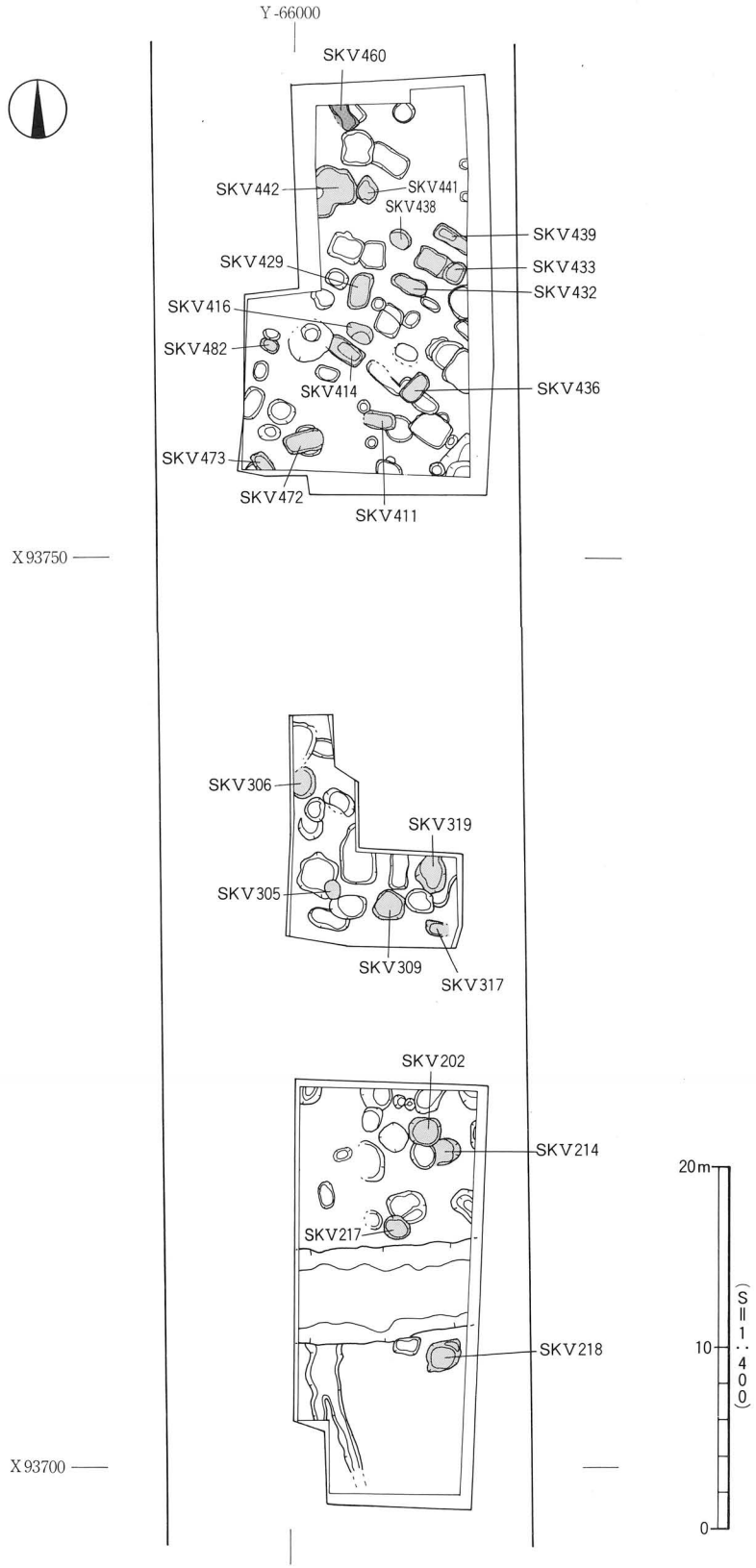
Ｖ236は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。胴部には沈線文２条施す。Ｖ237は壺形土器。頸部には沈線文６条を施す。Ｖ238は鉢形土器。口縁端面には刻目を施す。



第128図　ＳＫＶ461出土遺物実測図

５）土　坑　Ｂ（第129図）

土坑Ｂは24基ある。内訳は第２地区で４基、第３地区で５基、第４地区で15基を検出した。各土坑の平面形態、断面形態、堆積状況は表19に記す。平面形態では円形５基、楕円形９基、長方形８基、不定形２基となる。土坑Ｂは長方形土坑の割合が、土坑Ｃ～Ｆに比べ多くなっている。断面形態では逆台形状15基、皿状６基、舟底状２基、筒状１基がある。また、堆積状況では単一堆積が19基と多く、水平堆積をなすもの２基、放物線型凹堆積をなすもの２基、斜堆積をなすもの１基がある。24基の土坑のうち、20基の測量図と15基の出土遺物の実測図を掲載した。このうち、ＳＫＶ460は断面形態が一部フラスコ状になり、貯蔵穴の形態をなす土坑である。



第129図　Ⅴ区　土坑Ｂ分布図

表19　土坑Ｂ一覧

ＳＫ番号	平面形態	断面形態	堆積状況	遺構測量図	遺物実測図	グリット	備　考
ＳＫＶ202	円形	逆台形	単一	○	○	C9	
ＳＫＶ214	円形	逆台形	単一		○	C9	
ＳＫＶ217	円形	逆台形	単一	○	○	C8	
ＳＫＶ218	不整楕円形	逆台形	単一	○	○	C7	
ＳＫＶ305	楕円形	皿	単一	○	○	D12	
ＳＫＶ306	円形	逆台形	単一	○	○	D13	
ＳＫＶ309	円形	逆台形	単一	○	○	C･D12	
ＳＫＶ317	不整楕円形	逆台形	単一	○	○	C11･12	
ＳＫＶ319	不整楕円形	逆台形	単一	○	○	C12	
ＳＫＶ411	不整長方形	皿	単一	○	○	C･D17	
ＳＫＶ414	長方形	逆台形	水平	○		D18	
ＳＫＶ416	楕円形	舟底	放物線型凹	○	○	D18	
ＳＫＶ429	不整楕円形	皿	単一			D18･19	
ＳＫＶ432	不整長方形	逆台形	単一	○	○	C18･19	
ＳＫＶ433	長方形	逆台形	水平	○	○	C18･19	
ＳＫＶ436	長方形	逆台形	単一	○		C17	
ＳＫＶ438	楕円形	逆台形	放物線型凹	○		C19	
ＳＫＶ439	長方形	皿	単一	○		C19	
ＳＫＶ441	不整楕円形	舟底	斜→水平	○	○	D19･20	
ＳＫＶ442	不定形	皿	単一			D19･20	
ＳＫＶ460	不整楕円形	筒(一部フラスコ)	単一	○	○	D20	貯蔵穴
ＳＫＶ472	不整長方形	逆台形	単一	○		D･E17	
ＳＫＶ473	不整長方形	皿	単一	○		E16･17	
ＳＫＶ482	楕円形	逆台形	単一			E18	

① 貯蔵穴

ＳＫＶ460（第130図）

第４地区北壁中央部、Ｄ20区に位置する。平面形態は遺構中央部がやや内側に凹む不整の楕円形を呈し、規模は南北検出長1.68ｍ、東西長0.60ｍ、深さ50㎝を測る。土坑の長軸方向は真北より西に35°振っている。断面形態は筒状を呈するが、西壁中央部から南西コーナー付近までは壁体がフラスコ状になる。基底面は遺構中央部がわずかに凹み、壁際との比高差は３㎝を測る。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土中位から下位にかけて出土した。遺構の北東部では甕形土器の破片がまとまって出土し、炭化物もわずかながら検出された。そのほか、径５㎝大の石が散在して出土した。また、詳細な地点は不明であるが、埋土中からは長さ６㎝、幅３㎝、厚さ４㎝の粘土塊が２点出土した。

遺物の出土状況や土層の堆積状況などから、土器を投棄し、埋め立てたものと判断される。

出土遺物

Ｖ239・240は甕形土器。Ｖ239は貼り付け、Ｖ240は折り曲げにより口縁部を成形するものである。Ｖ239は胴部に沈線文７条を施す。Ｖ241～243は壺形土器。Ｖ241は短い口頸部をもつもので、頸部には削り出し状の沈線文３条を施す。Ｖ242・243は長い口頸部をもつもので、口縁部内面には断面三角形状の凸帯を貼り付ける。Ｖ242は頸部にＭ字状の凸帯を貼り付け、凸帯上には連鎖状刻目文２列を施す。Ｖ243は口縁端面にヘラ描き沈線文１条と刻目を施す。Ｖ244～246は底部片。Ｖ244・245は甕形土器、Ｖ246は壺形土器の底部である。Ｖ244はくびれをもつ上げ底、Ｖ245は平底となる。このうち、Ｖ244は東北部九州地方でみられるものに形状が類似している（外来系）。

② その他の土坑

ｉ）円形土坑

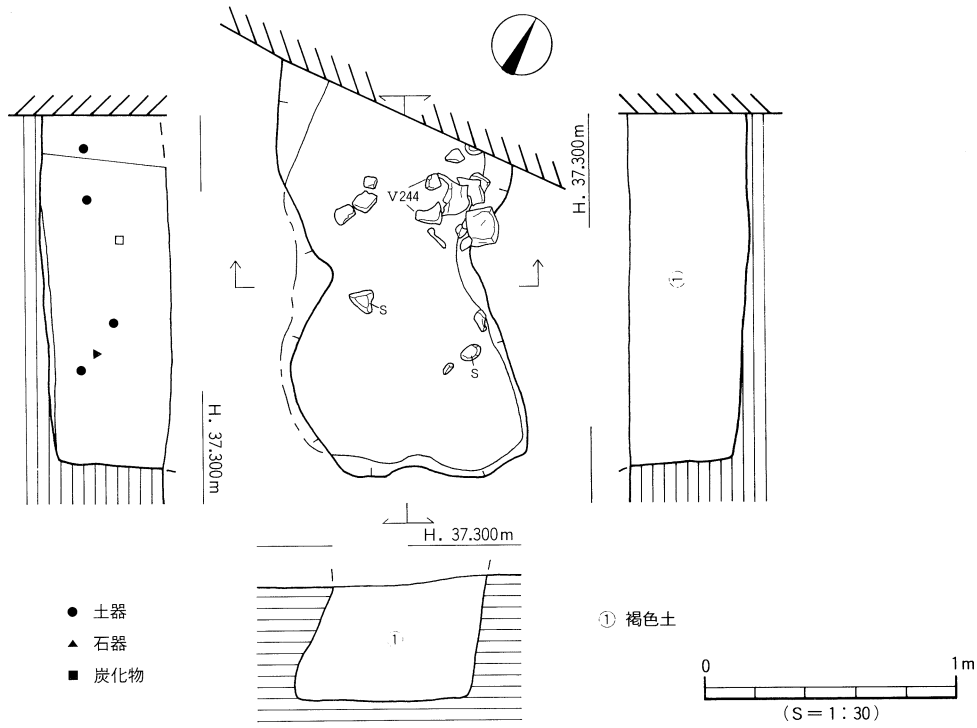
ＳＫＶ202（第131図）

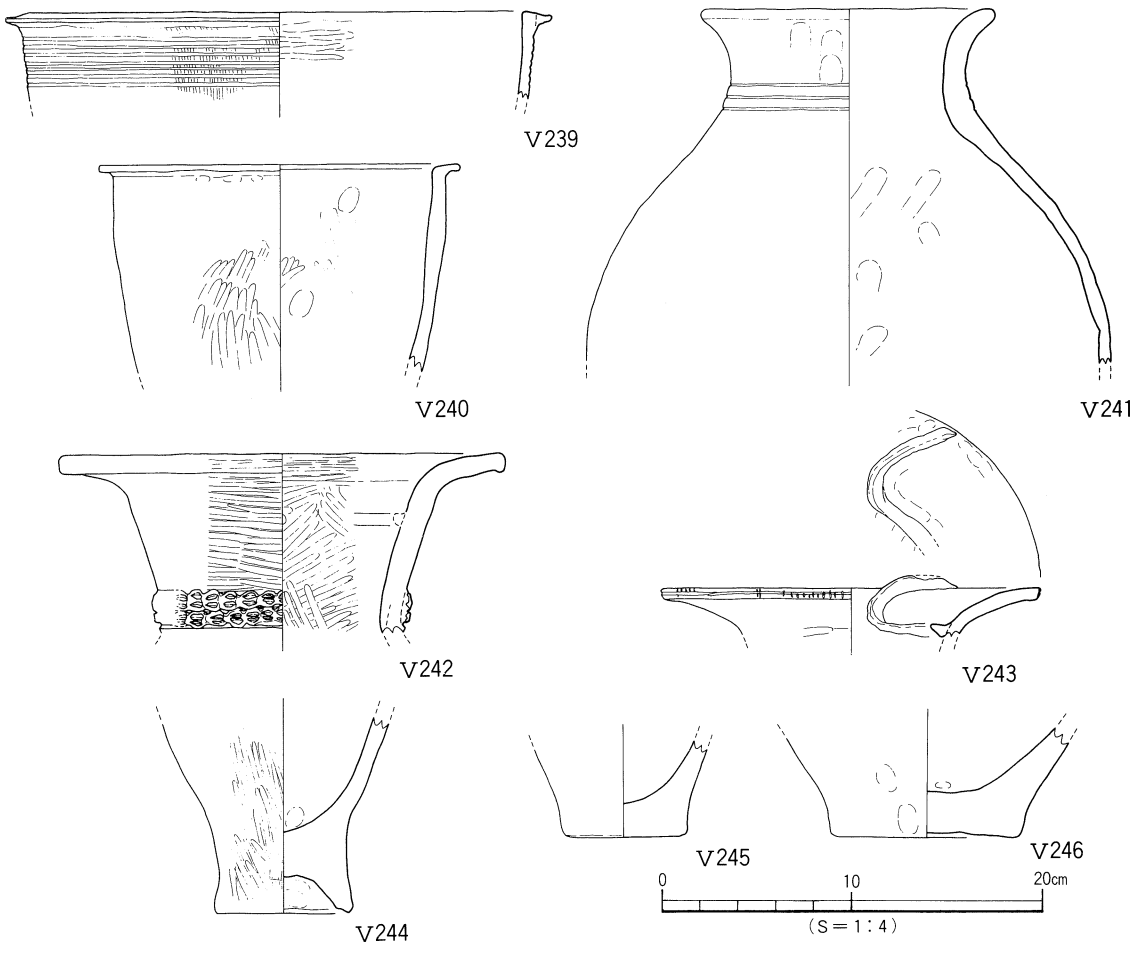
第２地区北東部、Ｃ９区に位置する。遺構の南東部はＳＫＶ214（土坑Ｂ）と接し、ＳＰＶ005に切られている。平面形態は円形を呈し、規模は径1.60～1.70ｍ、深さ33㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、北側壁体は南側壁体に比べ緩やかに立ち上がる。基底面は遺構北西部から南東部に向けて緩やかな傾斜をなす（比高差３㎝）。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土中位付近からの出土である。南西部の壁体付近からは完形の甕形土器（Ｖ249）の破片が不規則に折り重なって出土した。このほか、径５～10㎝、厚さ３～５㎝の小礫が散在して出土している。

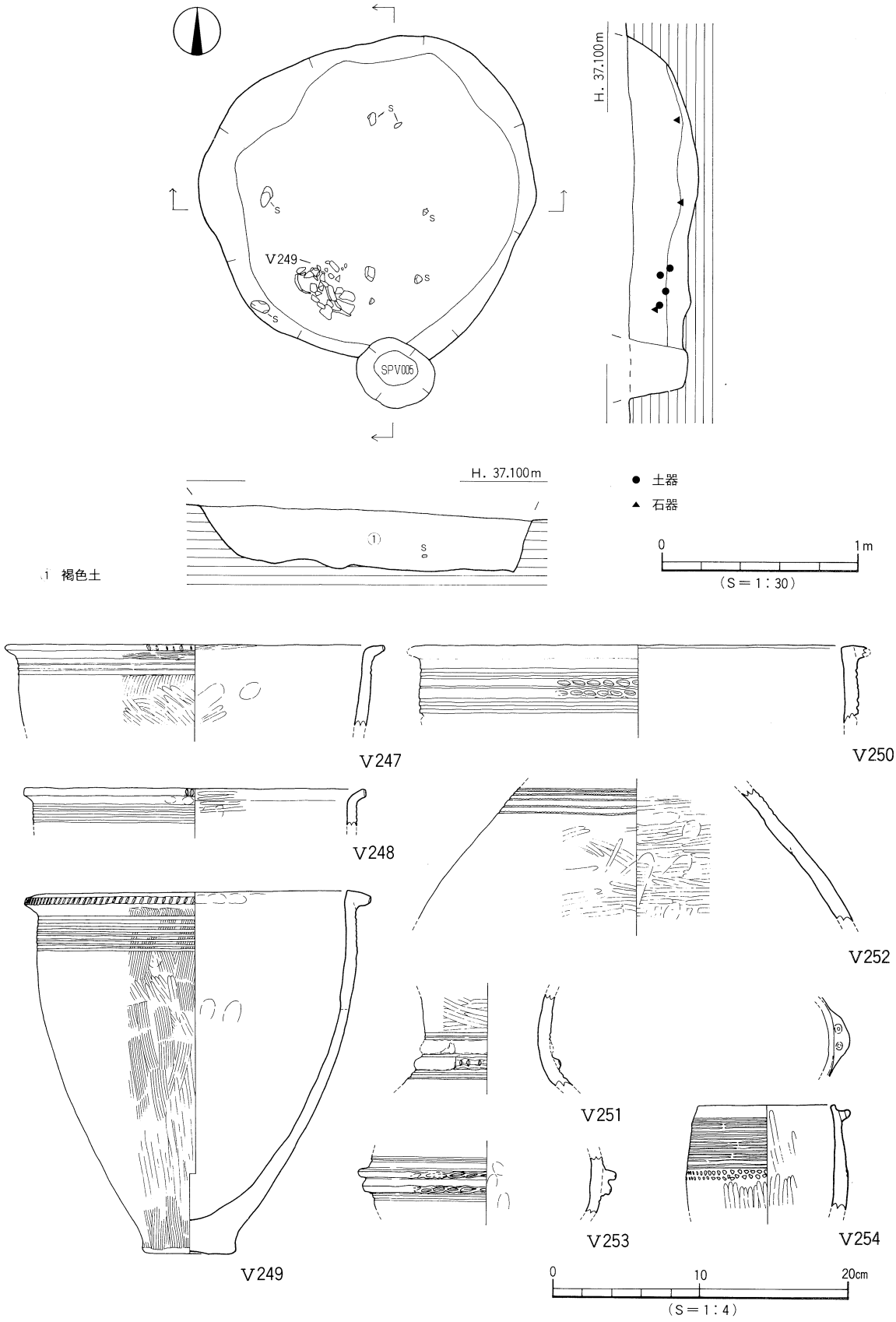
出土遺物

Ｖ247～250は甕形土器。Ｖ247・248は折り曲げ、Ｖ249・250は貼り付けにより口縁部を成形するものである。Ｖ247～249は口縁端面に刻目を施す。胴部文様は沈線文だけのもの（Ｖ247～249）、沈線文と刺突文が組み合うもの（Ｖ250）がある。Ｖ249は底部の中央部がやや凹む上げ底となる。Ｖ251～253は壺形土器。Ｖ251は頸部に刻目凸帯文を２条貼り付ける。Ｖ252・253は胴部片。Ｖ252の頸部付近には貝殻腹縁による直線文５条を施す。Ｖ253は沈線文とＭ字状の凸帯文（連鎖状刻目文）を施すものである。Ｖ254は鉢形土器。２条１組の工具による沈線文16条と刺突文２列を施す。口縁直下には耳状の把手が付き、0.5㎝大の円孔を２ヶ穿つ（焼成前穿孔）。





第130図　ＳＫＶ460測量図・出土遺物実測図



第131図　ＳＫＶ202測量図・出土遺物実測図

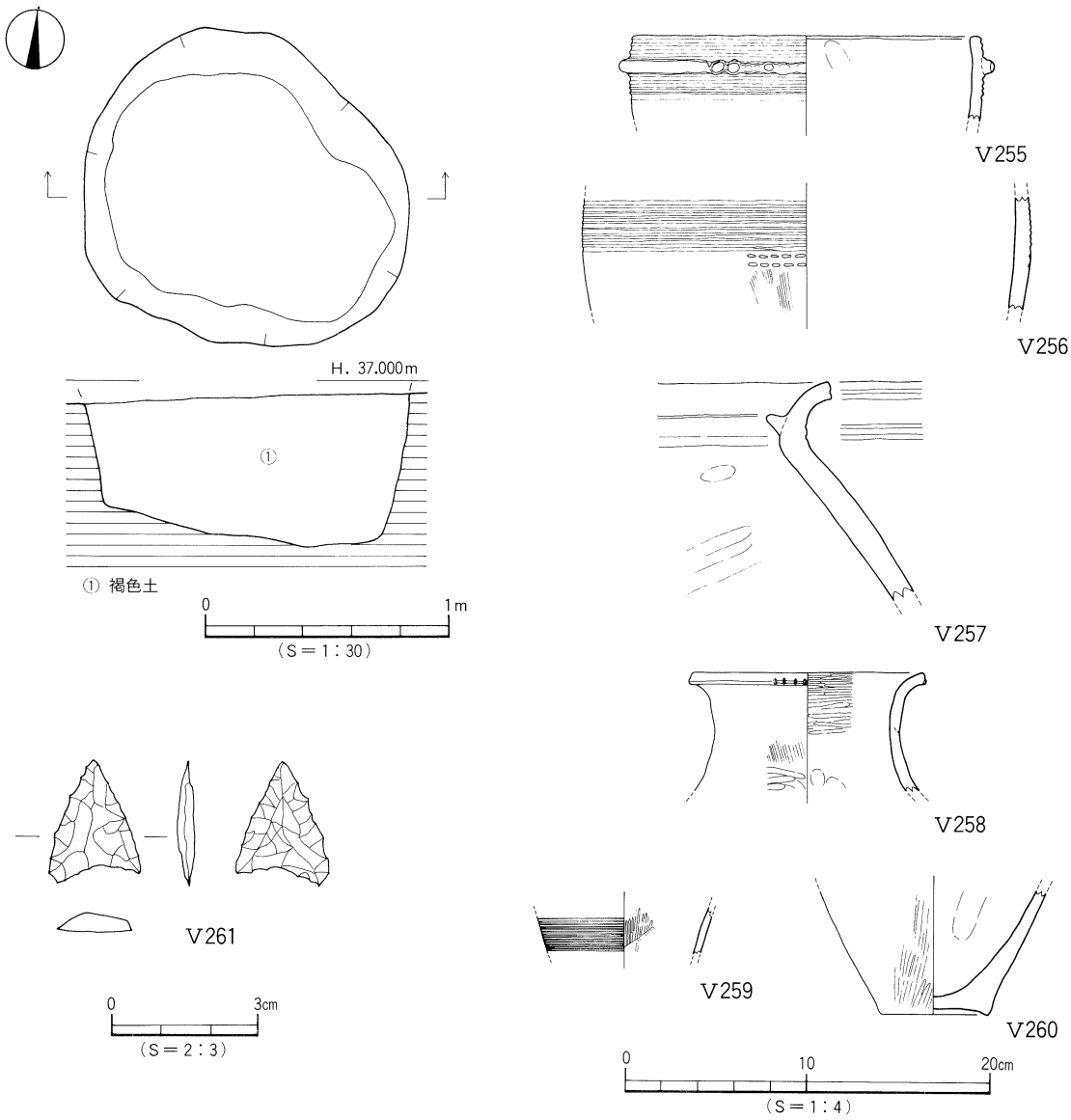
ＳＫＶ217（第132図）

第２地区中央やや北寄り、Ｃ８区に位置する。遺構の北側はＳＫＶ216（土坑Ｄ）を切っている。平面形態は円形を呈し、規模は径1.30～1.40m、深さ60cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。遺構の深さから判断すると、自然堆積ではなく、人為的に埋めたてられた可能性がある。基底面は南東部が凹み、壁際との比高差は16cmを測る。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土中に散在して出土した。弥生土器の破片と石鏃が1点出土している。

出土遺物

Ｖ255・256・260は甕形土器。Ｖ255は口縁端部より下がった位置に、断面三角形状の凸帯を貼り付けることで口縁部を成形する。凸帯上には押圧が加えられる。口縁端部は平坦面をなす。Ｖ256は胴部片。沈線文と刺突文２列を施す。Ｖ257～259は壺形土器。Ｖ257は大型品で、口縁部内面に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。Ｖ258は短い頸部をもつもので、口縁端面下端に刻目を施す。Ｖ259は頸部片。クシ状工具による沈線文16条以上を施す。弥生時代後期末。混入品。Ｖ260は甕形土器の底部



第132図　ＳＫＶ217測量図・出土遺物実測図

で、やや上げ底を呈する。V261はサヌカイト製の凹基無茎石鏃である。平面形態は正三角形に近い形態をなす。

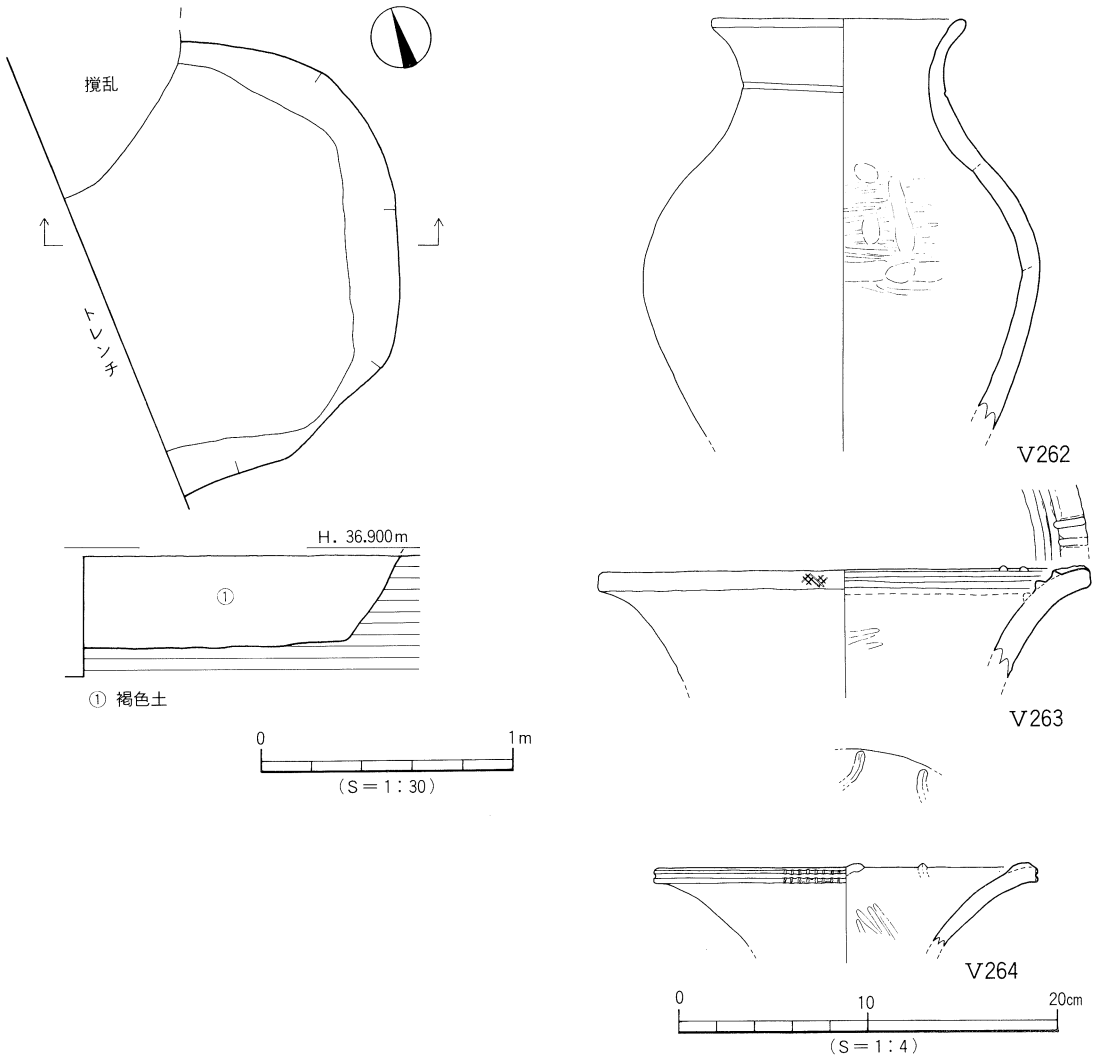
ＳＫＶ306（第133図）

第３地区北東部、D13区に位置する。遺構の北側は近現代の撹乱により削平され、西側は調査区外に続く。平面形態は円形を呈するものとみられ、規模は南北長1.80m、東西検出長1.40m、深さ37cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東側壁体は比較的緩やかに立ち上がる。基底面はほぼ平坦である。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。このなかには、口縁部の一部と底部の欠損した壺形土器（V262）の破片が出土している。

出土遺物

V262は短い口頸部をもつもので、頸部にはヘラ描き沈線文１条を施す。V263・264は頸部が長くなるもので、V263は口縁部内面に凸帯文3条と棒状の浮文を２ヶ貼り付ける。口縁端面には斜格子目文を施す。V264は一部が注口状になる凸帯を貼り付け、口縁端面にはヘラ描き沈線文と刻目を施す。



第133図　ＳＫＶ306測量図・出土遺物実測図

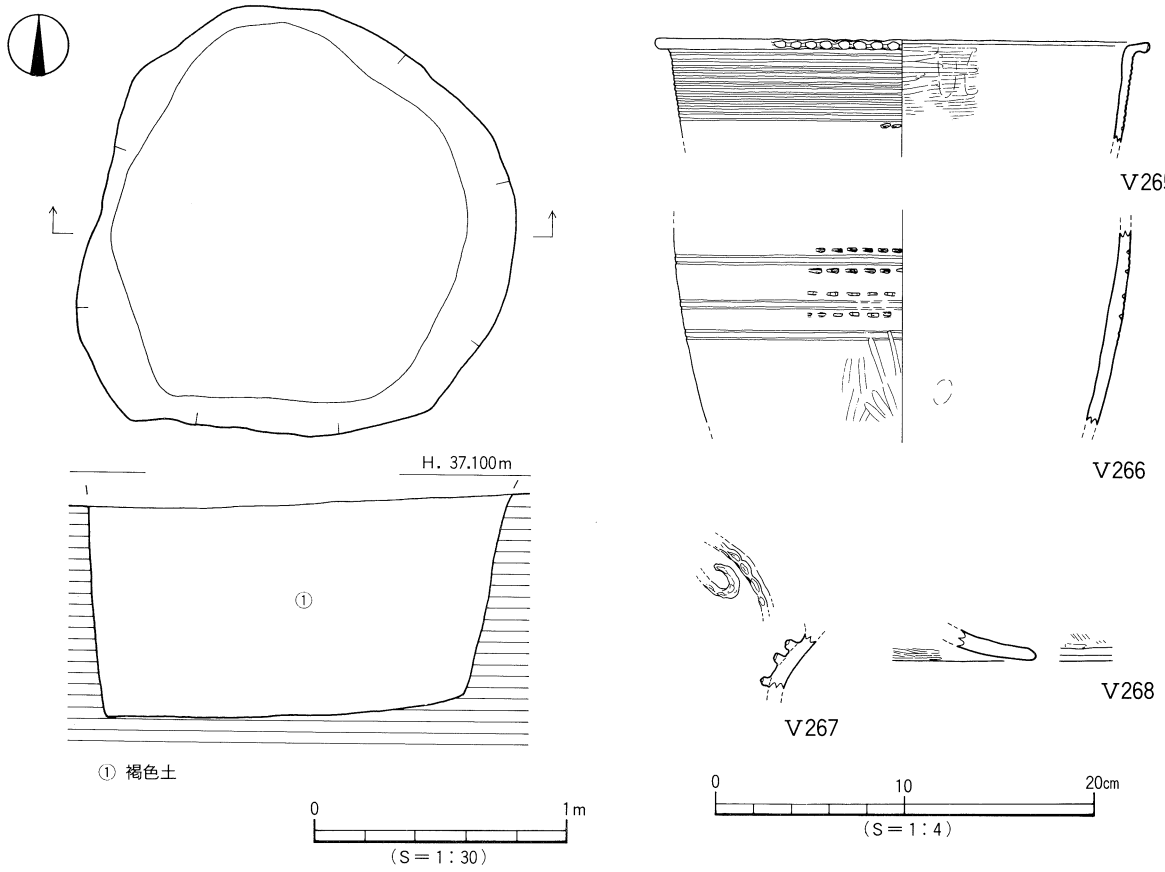
ＳＫＶ309（第134図）

第３地区南東部、Ｃ・Ｄ12区に位置する。平面形態はやや北側が突出する円形を呈し、規模は径1.74～1.84ｍ、深さ83㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。堆積状況から判断すると、人為的に埋め立てられた可能性がある。基底面は、北東部から南西部に向けてやや傾斜をなし、比高差は８㎝を測る。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土中より、弥生土器片が出土したほか、表面の焼けた骨片が１点出土した。分析の結果、鹿の骨であることが判明している。部位は不明。

出土遺物

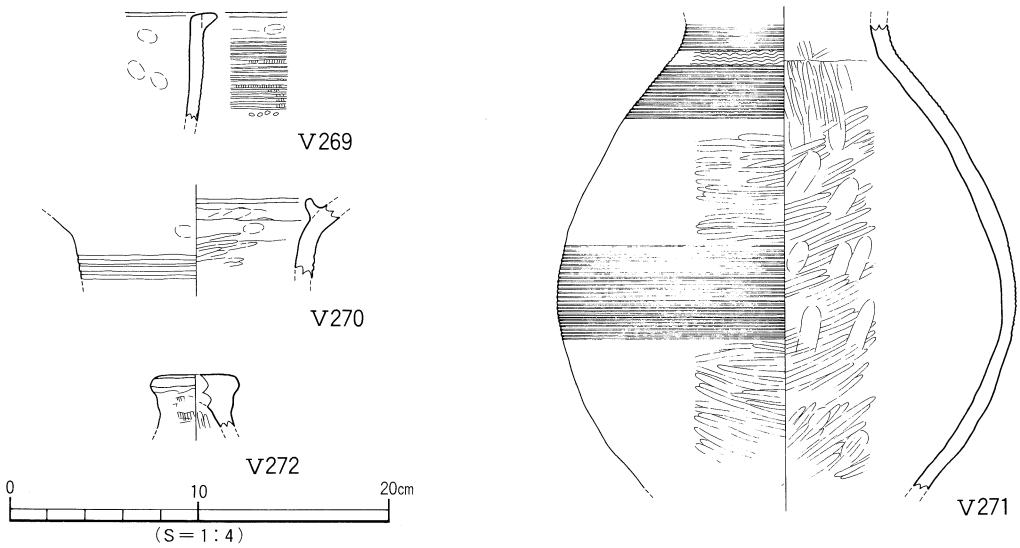
Ｖ265・266は甕形土器。Ｖ266は胴部片で、沈線文と刺突文が交互に組み合う。Ｖ267は壺形土器の口縁部小片。渦巻き状の凸帯を貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文を施す。Ｖ268は蓋形土器の口縁部片である。口縁端部は丸くおさめる。



第134図　ＳＫＶ309測量図・出土遺物実測図

ＳＫＶ214出土遺物（第135図）

Ｖ269～272は第２地区検出のＳＫＶ214出土品である。土坑の平面形態は円形を呈し、断面形態は逆台形状を呈する（遺構図は未掲載）。Ｖ269は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。胴部にクシ描き沈線文15条（５条１組）と刺突文を施す。Ｖ270・271は壺形土器。Ｖ271はクシ描き沈線文と波状文（６条１組）を施す。Ｖ272は蓋形土器のつまみ部分である。



第135図　ＳＫＶ214出土遺物実測図

ii）楕円形土坑

ＳＫＶ218（第136図）

第２地区中央部南東寄り、Ｃ７区に位置する。遺構の北東部はＳＰＶ048に切られている。平面形態は遺構南西部に突出部をもつ不整の楕円形を呈し、規模は長径2.20m、短径1.64m、深さ89cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、北東部には幅20～30cmのテラス状の緩やかな傾斜面がある。南西部には長さ25cm、幅20cm、深さ10cmの三角形状の張り出し部をもつ。埋土が土坑埋土と同様であるため、土坑に伴うものとみられるが、性格は不明である。単一層で埋まることや、遺構の深さなどから判断すると人為的に埋め立てられた可能性がある。基底面は遺構中央部やや東寄りが凹み、壁際との比高差は8cmを測る。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土上位から、弥生土器片が散在して出土した。ただし、そのほとんどは、口縁部や底部などの破片である。

出土遺物（第137図）

Ｖ273～275は甕形土器。Ｖ273は貼り付け、Ｖ274は折り曲げにより口縁部を成形するものである。胴部には沈線文、Ｖ273は口縁端面に刻目を施す。Ｖ276～281は壺形土器。Ｖ276・277は短い口頸部をもつもので、頸部に沈線文を施す。Ｖ278～280は頸部が長くなるものである。Ｖ278は口縁部内面上端に凸帯文を貼り付けるもので、形状や胎土から東北部九州地方からの搬入品とみられる。Ｖ279は口縁部内面に凸帯文（押圧）、頸部に凸帯文（連鎖状刻目文２列）と沈線文４条を施す。Ｖ281は胴部片で、沈線文と貝殻腹縁による縦方向の直線文、斜格子目文及び木葉文を施す。Ｖ282は口径40cmを越える大型の鉢形土器である。貼り付けにより口縁部を成形するものである（外来系）。Ｖ283～288は底部片。Ｖ283・284は甕形土器、Ｖ285～287は壺形土器。Ｖ283・284はわずかに上げ底、Ｖ285はわずかにくびれる上げ底を呈するもので、Ｖ285はコシキの可能性もある。Ｖ286・287は中央部が凹む上げ底である。Ｖ288は所謂「コシキ」への転用品。壺形土器の底部に径1.3cm大の孔を穿つ（焼成後穿孔）。

ＳＫＶ305（第138図）

第３地区中央部やや西寄り、Ｄ12区に位置する。平面形態は遺構の南東部がやや広がる楕円形を呈し、規模は長径1.04ｍ、短径0.74ｍ、深さ９㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、単一層で埋まる。埋土中には、炭化物が少量混入する。基底面はほぼ平坦である。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。

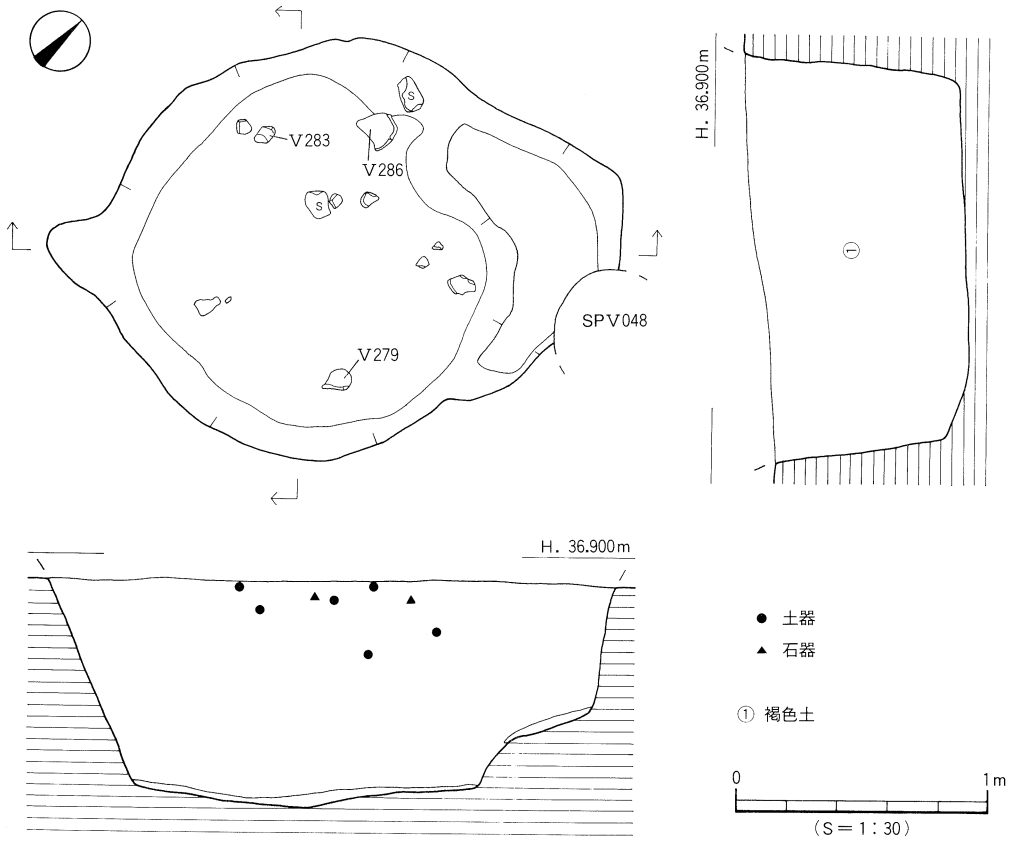
遺物は北東部の埋土中に集中し、弥生土器片が重なり合うように出土した。このなかには、底部と胴部の一部が欠損する甕形土器（Ｖ289）や、ミニチュア品（Ｖ293）の出土もある。

出土遺物

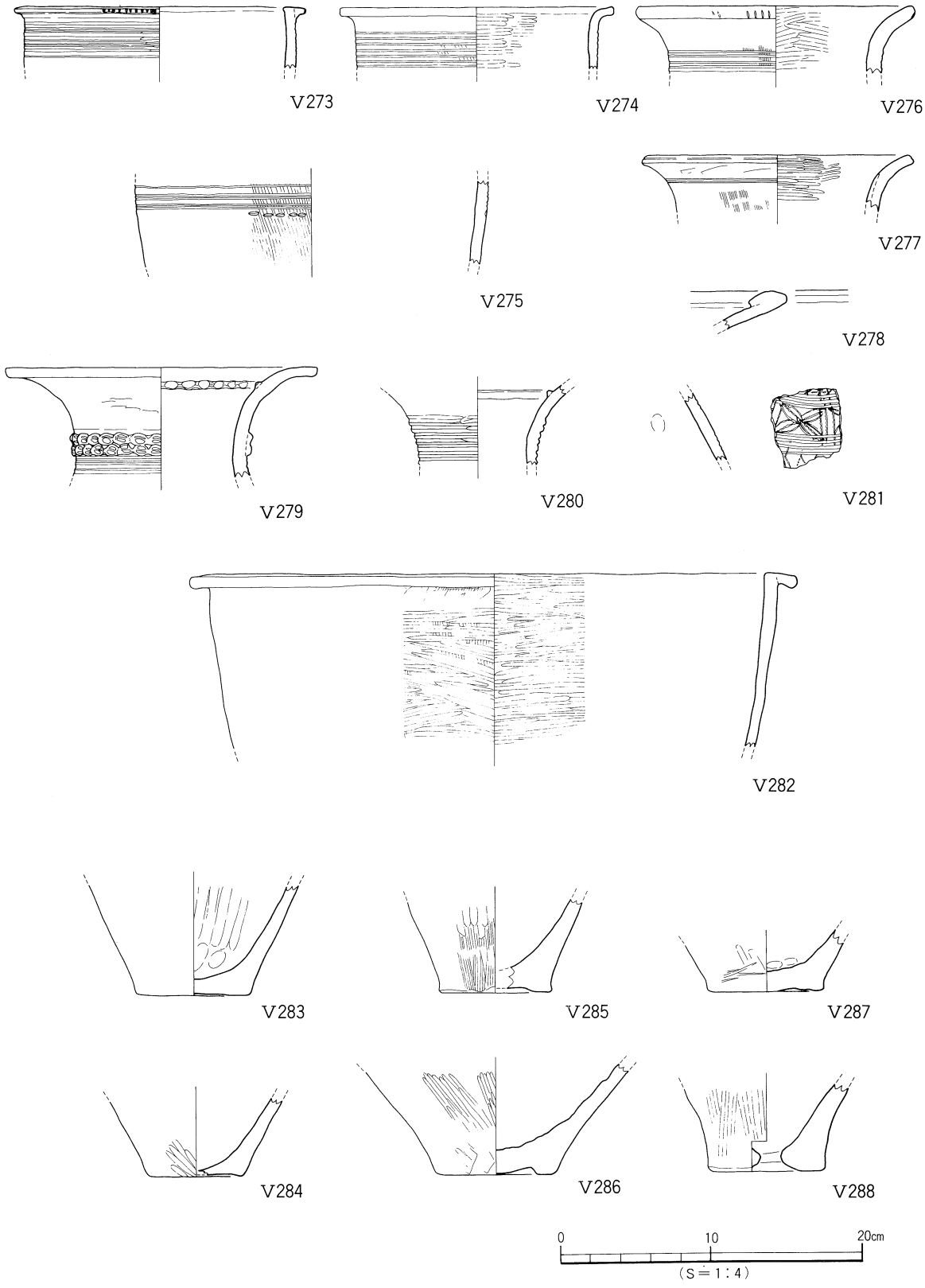
Ｖ289～292は甕形土器。折り曲げにより口縁部を成形するものである。口縁端面には刻目を施すもの（Ｖ289・290・292）と、施さないもの（Ｖ291）とがある。胴部文様は沈線文だけのもの（Ｖ289・290・292）と、沈線文と刺突文が組み合うもの（Ｖ291）とがある。なお、Ｖ289は５条１組の工具による沈線文を施す。いずれも胴部外面にはハケメ調整を施すものである。Ｖ293はミニチュア品。くびれをもつ平底になる。

ＳＫＶ319（第139図）

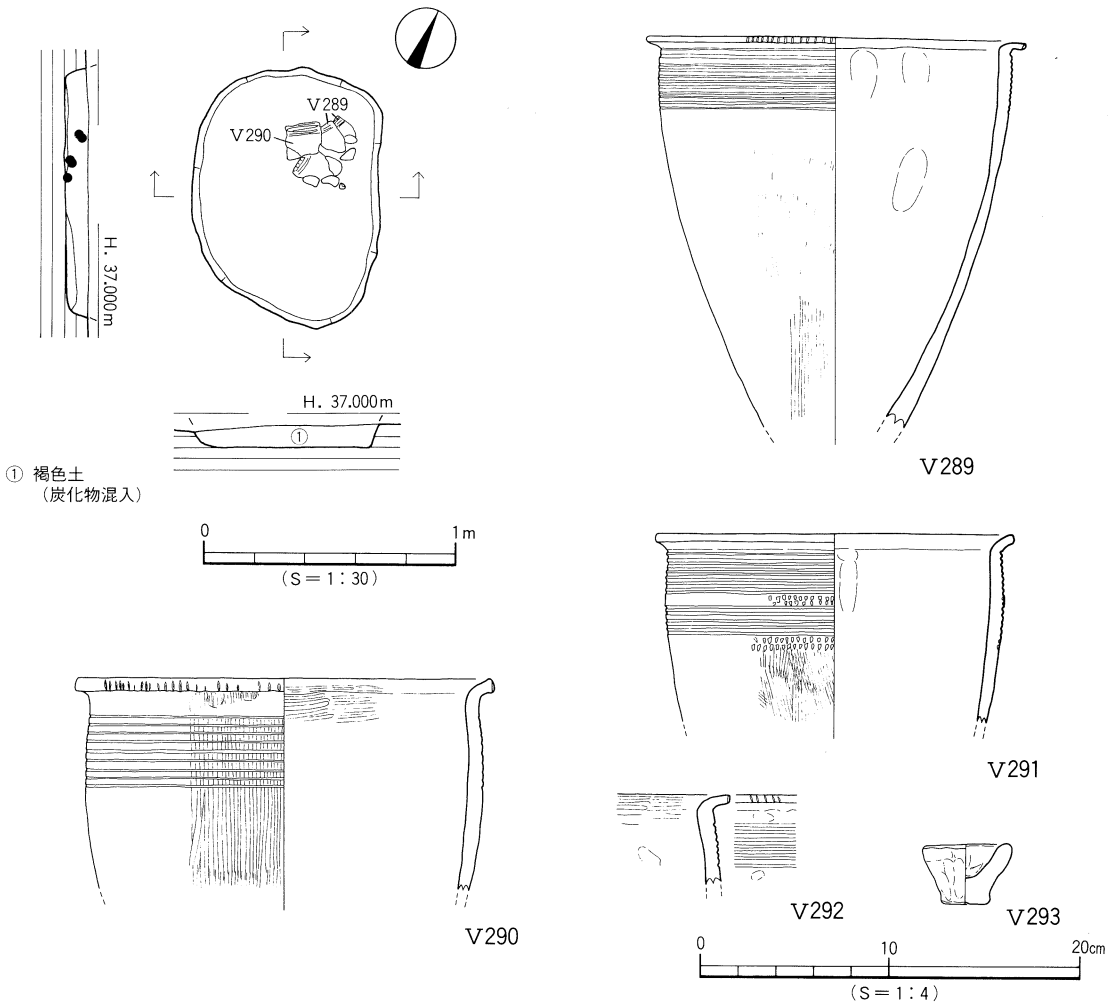
第３地区中央部東寄り、Ｃ12区に位置する。遺構の北側は調査区外に続く。平面形態は南東部がやや突出する不整の楕円形を呈し、規模は南北検出長1.84ｍ、東西長1.62ｍ、深さ84㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、南側壁体は二段掘り構造になっている。



第136図　ＳＫＶ218測量図



第137図　ＳＫＶ218出土遺物実測図



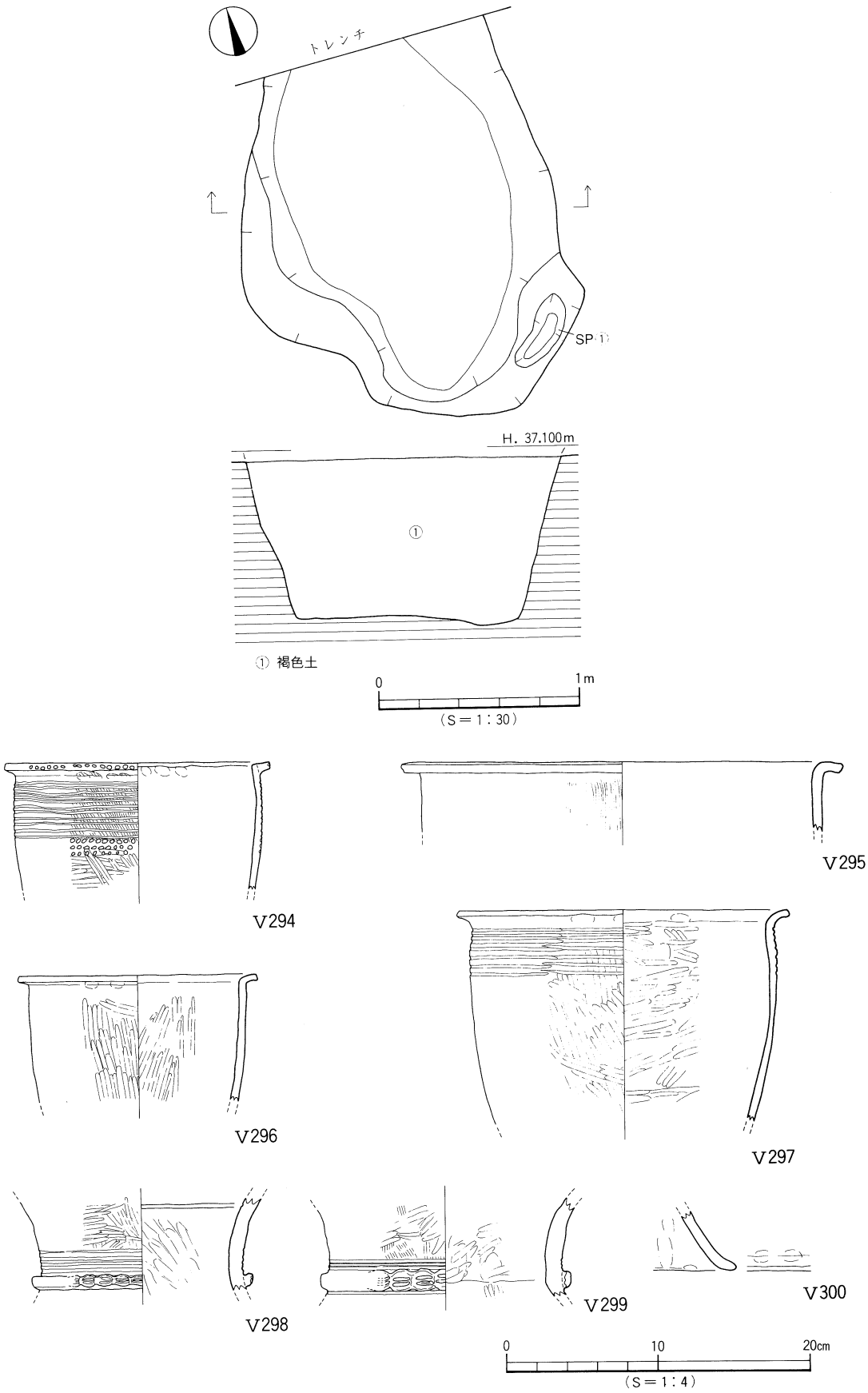
第138図　ＳＫＶ305測量図・出土遺物実測図

また、南東部の壁体斜面部では長径40cm、短径15cm、深さ５cmの小ピット（ＳＰ①）を検出した。ピット埋土は土坑埋土と同様であるため、土坑に伴うものとみられるが、性格は不明である。単一層で埋まることや、土坑の深さから判断すると、人為的に埋め立てられた可能性がある。基底面は南東部が凹み、壁際との比高差は８cmを測る。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土中より、弥生土器片が散在して出土した。いずれも口縁部や頸部などの小片である。

出土遺物

Ｖ294～297は甕形土器。Ｖ294は貼り付け、Ｖ295～297は折り曲げにより口縁部を成形するものである。口縁端面には刺突文を施すもの（Ｖ294）がある。胴部文様は無文のもの（Ｖ295・296）、沈線文だけのもの（Ｖ297）、沈線文と刺突文が組み合うもの（Ｖ294）の3種類がある。胴部外面はハケメ調整を施すもの（Ｖ295）と、ミガキ調整を施すもの（Ｖ294・296・297）とがある。Ｖ298・299は壺形土器。頸部には沈線文と凸帯文（連鎖状刻目文2列）を施す。Ｖ300は蓋形土器。口縁端部は丸くおさめる。



第139図　ＳＫＶ319測量図・出土遺物実測図

ＳＫＶ317（第140図）

第３地区南東隅、Ｃ11・12区に位置する。遺構の東側はＳＫＶ318（中世）、南側はＳＤＶ301（中世）にそれぞれ切られている。平面形態は不整の楕円形を呈するものとみられ、規模は東西検出長1.00ｍ、南北検出長0.66ｍ、深さ46㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。基底面は平坦であり、掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを１点第141図に掲載している。

出土遺物（第141図－Ｖ301）

Ｖ301は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。口縁端面に刻目を施す。胴部にはクシ描き沈線文を施す。内外面共に、丁寧なミガキ調整を施す。

ＳＫＶ416（第140図）

第４地区中央部やや南寄り、Ｄ18区に位置する。遺構の南壁中央部はＳＰＶ037に切られている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.56ｍ、短径1.00ｍ、深さ30㎝を測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は上下２層に分層される（①・②層）。②層は、①層土に黄色土が斑点状に混入するものである。堆積状況はほぼ水平堆積をなしていることから、自然流入土で埋まった可能性が高い。

基底面南西部において、長径1.00ｍ、短径0.60ｍ、深さ10㎝の楕円形状の掘り込みを検出した。埋土は②層と同一である。また、北西隅の壁体付近の基底面にて径10～18㎝、深さ３㎝の小ピット（ＳＰ①）を検出した。ピット埋土は②層に類似する。

遺物は②層中より、弥生土器小片数点と、石器１点が出土した。

出土遺物（第141図－Ｖ302）

Ｖ302はＳＫＶ416出土の石庖丁である。平面形態は杏仁形を呈するものとみられる。鏑は甘く、刃部は一部剝落している。ａ面の刃部寄りに、一部敲打痕を残す。結晶片岩製。

ＳＫＶ438（第140図）

第４地区中央部やや北東寄り、Ｃ19区に位置する。遺構の東壁中央部及び南壁は、それぞれＳＰＶ065とＳＰＶ068に切られている。平面形態は北側がやや幅広の楕円形を呈し、規模は長径1.30ｍ、短径1.10ｍ、深さ60㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は4層（①～④層）に分層される。②層は①層に黄色土が斑点状に混入するものである。③層は、①層と色調は同じであるが、土壌中に砂が混入する。最下層の④層は①層に比べ、色調はやや明るい褐色（7.5ＹＲ4/4）土である。堆積状況は、④層の中央部がやや盛り上がることや、厚さが30㎝の堆積であることから、自然の堆積とは考え難く、人為的に埋め戻された可能性をもつ。埋土上部は放物線型凹堆積である。

基底面は中央部がやや凹み、壁際との比高差は５㎝を測る。掘り方最終面は第Ⅷ層に及ぶ。

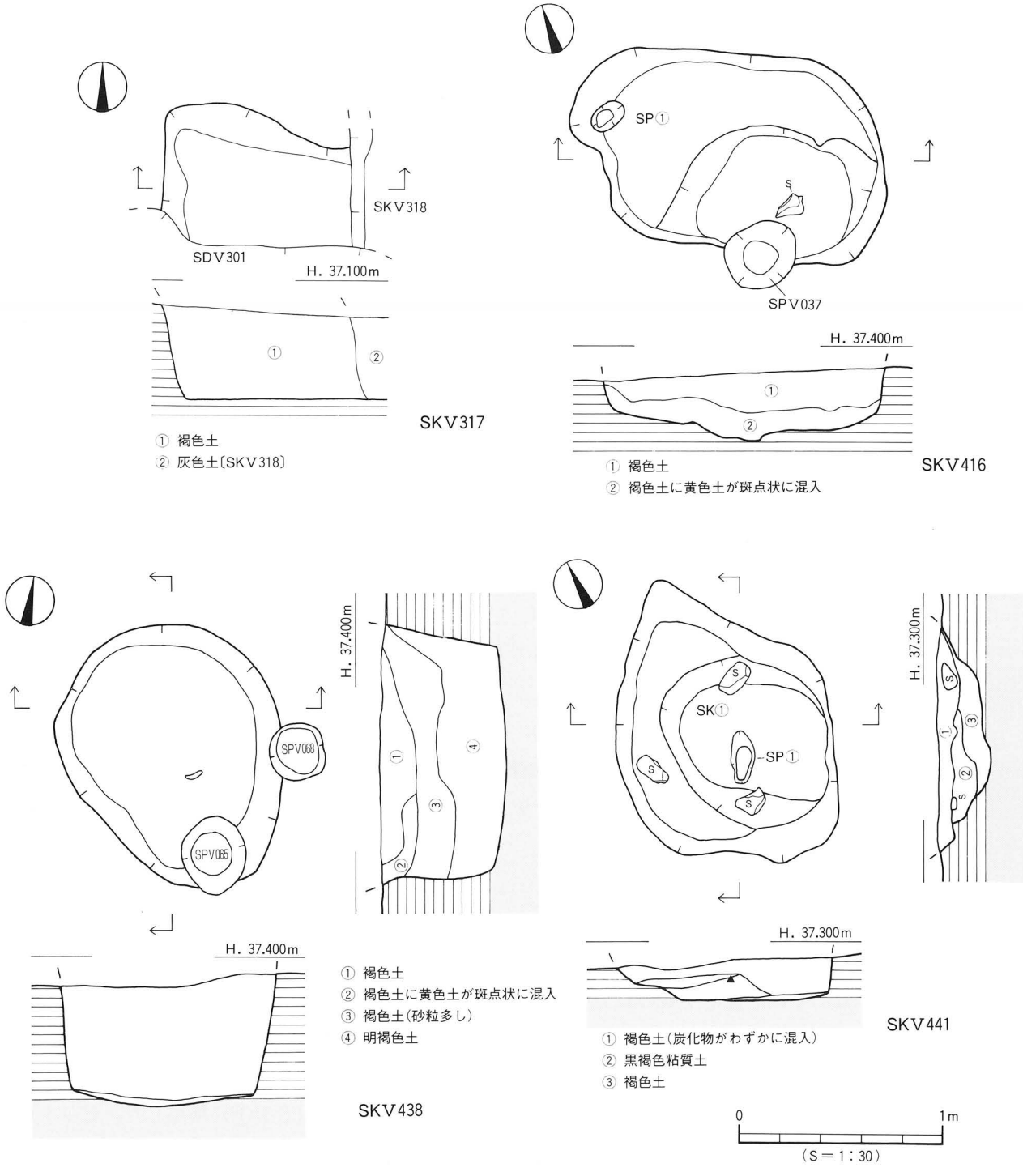
遺物は埋土中より、弥生土器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

ＳＫＶ441（第140図）

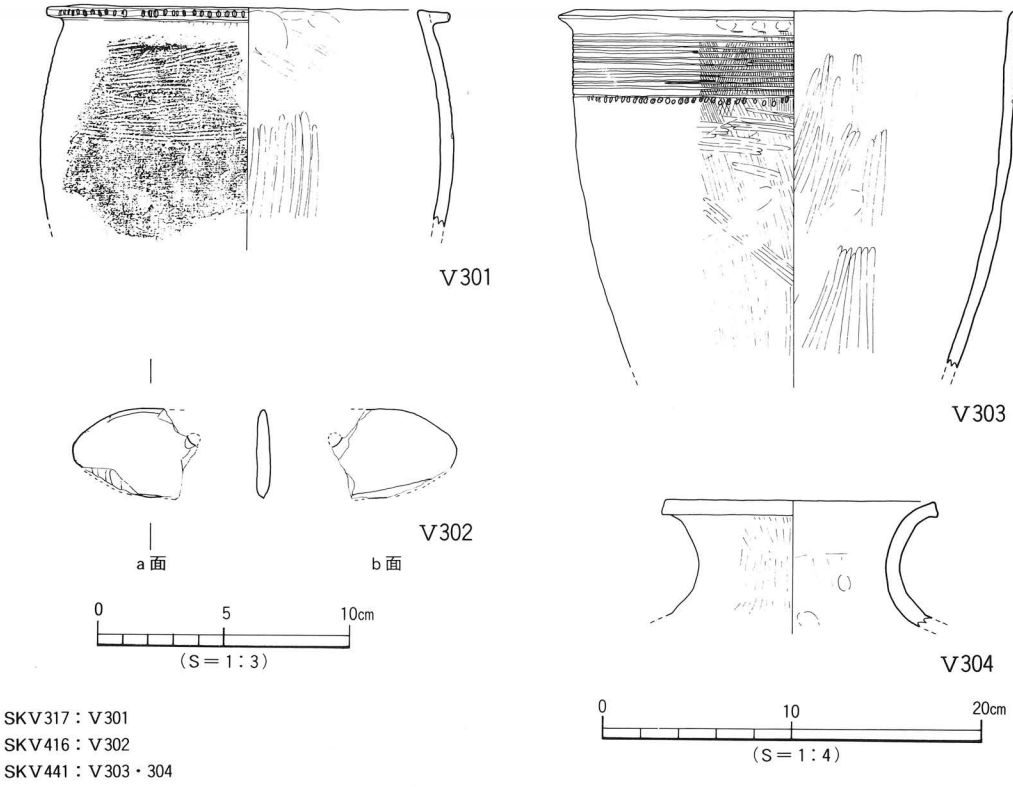
第４地区中央部北寄り、Ｄ19・20区に位置する。平面形態は遺構の北側がやや突出する不整の楕円形を呈し、規模は長径1.64ｍ、短径1.25ｍ、深さ18㎝を測る。断面形態はやや舟底状を呈するが、東側壁体はほぼ垂直に立ち上がる。基底面にて径75～90㎝、深さ10㎝の土坑（ＳＫ①）を検出した。

埋土は３層（①～③層）に分層され、①層は埋土中にわずかに炭化物が混入するものである。②層は黒褐色（7.5ＹＲ3/2）土で粘性の強い土壌であり、③層は褐色（7.5ＹＲ4/3）土である。堆積状況は②・③層は斜堆積をなし、①層は放物線型凹堆積になる。

前述した基底面検出の土坑ＳＫ①は③層で埋まる。③層は遺構の上場部分から堆積していることから、ＳＫ①は本土坑に伴うものとみられる。ＳＫ①の中央部にて長さ25cm、幅10cm、深さ４cmの小ピット（ＳＰ①）を検出した。ＳＰ①は③層で埋まる。土坑掘り方最終面は第Ⅷ層に及ぶ。



第140図　ＳＫＶ317･416･438･441測量図



第141図　ＳＫＶ317･416･441出土遺物実測図

遺物は、①層からの出土が大半である。弥生土器では、甕形土器や壺形土器の口縁部片が出土したほか、径10×20cm、厚さ５～６cmの角礫３点が、三角形状の配置をなして、①層下面付近から出土した。①層からはわずかに炭化物を検出していることや、①層下面がほぼ水平であることから、この面は再利用された可能性が高い。

出土遺物（第141図－Ｖ303・304）

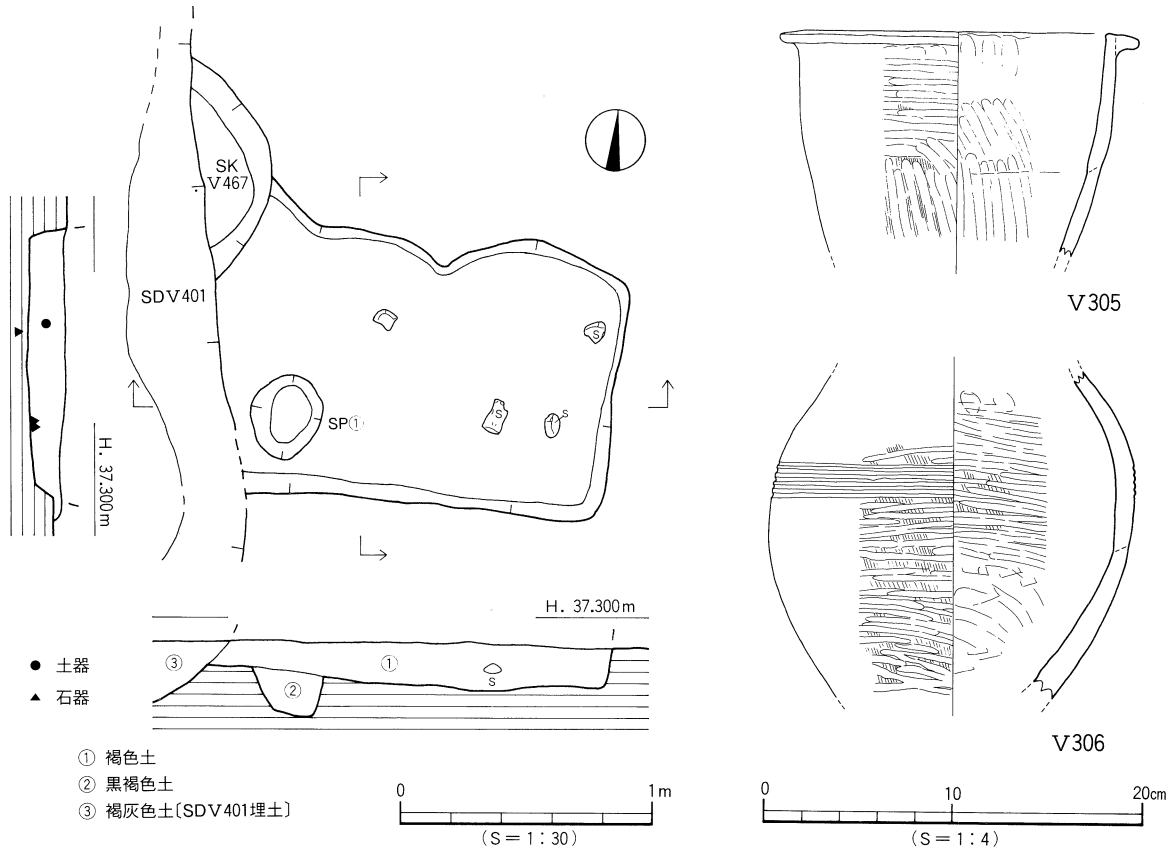
Ｖ303は貼り付け口縁の甕形土器。胴部にクシ描き沈線文（５条１組）と刺突文を施す。Ｖ304は短い口頸部をもつ壺形土器である。口縁端部はナデくぼむ。

iii）長方形土坑

ＳＫＶ411（第142図）

第４地区南側、Ｃ・Ｄ17区に位置する。遺構の西壁はＳＫＶ467（弥生後期）とＳＤＶ401（古代）に切られている。平面形態は不整の長方形を呈するものとみられ、検出長1.64m、検出幅1.25m、深さ18cmを測る。土坑の長軸方向は真北方向にほぼ直交する。断面形態は皿状を呈し、単一層で埋まる。基底面は遺構中央部がやや凹み、壁際との比高差は４cmを測る。

基底面南西部にて径28×35cm、深さ16cmの楕円形状のピットを１基（ＳＰ①）検出した。ピット埋土は黒褐色（7.5ＹＲ3/2）土である。本土坑に伴うものかは不明である。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。



第142図　ＳＫＶ411測量図・出土遺物実測図

遺物は埋土中に散在して出土した。弥生土器には底部を欠損した甕形土器や、口縁部及び底部を欠損した壺形土器が出土している。このほか、径10cm前後の小礫が数点出土している。図化しうるものを２点掲載している。

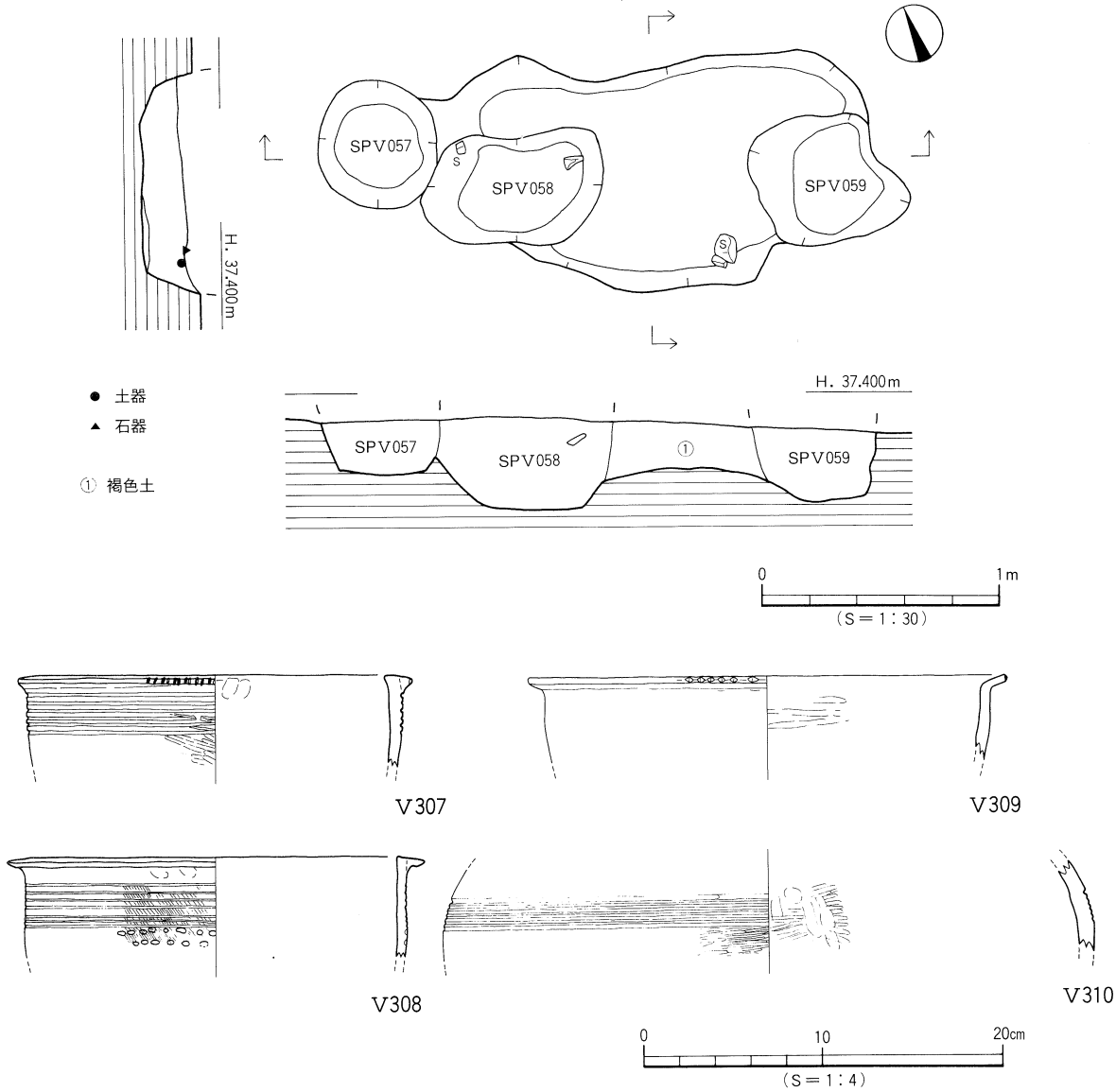
出土遺物

Ｖ305は甕形土器。貼り付けにより口縁部を成形するものである。胴部外面は上半部はヨコ方向、下半部はタテ方向のミガキ調整を施す。Ｖ306は壺形土器。短い口頸部をもつもので、胴中位に沈線文5条を施す。内外面共にハケメ調整を施した後、ヨコ方向のミガキ調整を施す。

ＳＫＶ432（第143図）

第４地区中央やや北東寄り、Ｃ18・19区に位置する。遺構の東壁はＳＰＶ059に、西壁はＳＰＶ057とＳＰＶ058にそれぞれ切られている。平面形態は不整の長方形を呈するものとみられ、規模は検出長1.82m、幅0.94m、深さ22cmを測る。土坑の長軸方向は真北より65°西に振っている。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。基底面は壁体沿いが低く、中央部が壁体付近よりやや高くなっている。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土上位付近から、弥生土器の口縁部や胴部小片が数点出土したほか、径10cmの角礫が１点出土した。図化しうるものを４点掲載している。



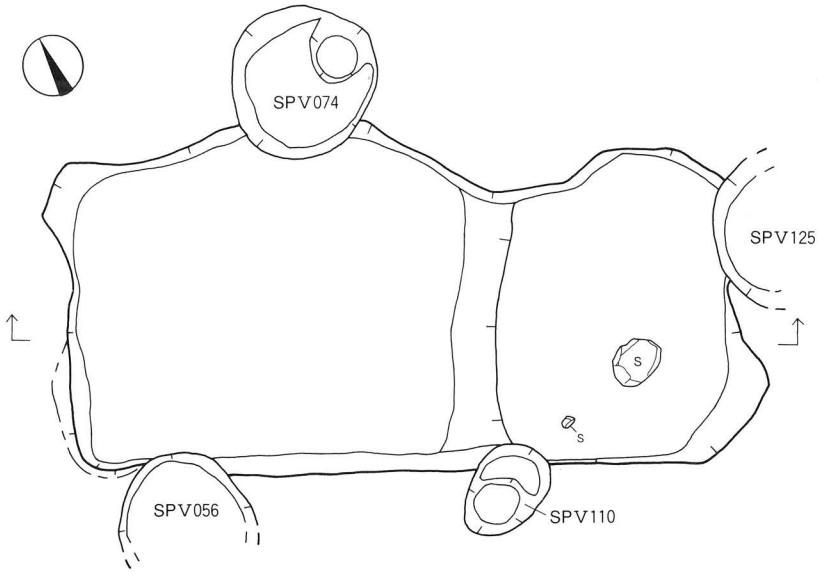
第143図　ＳＫＶ432測量図・出土遺物実測図

出土遺物

Ｖ307～309は甕形土器。Ｖ307・308は貼り付け、Ｖ309は折り曲げにより口縁部を成形するものである。Ｖ307・309は口縁端面に刻目を施す。胴部文様は無文のもの（Ｖ309）、沈線文（３条１組）だけのもの（Ｖ307）、沈線文と刺突文が組み合うもの（Ｖ308）の三種類がある。Ｖ310は壺形土器の胴部片で、沈線文６条を施す。

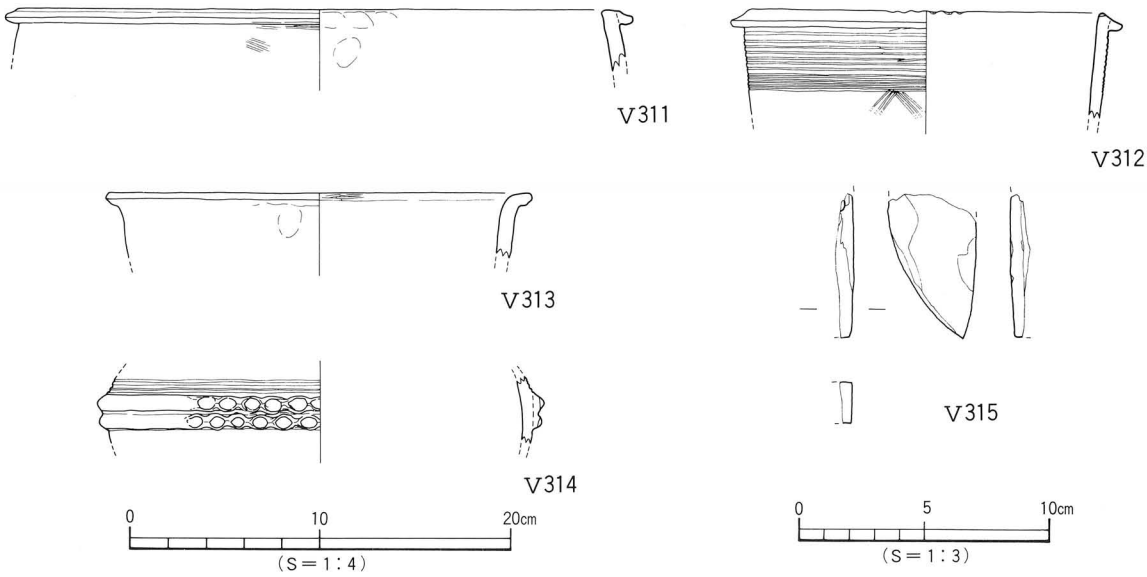
ＳＫＶ433（第144図、図版42）

第４地区中央やや東寄り、Ｃ18・19区に位置する。遺構の北壁はＳＰＶ074、北東隅はＳＰＶ125、南壁はＳＰＶ056・Ｖ110にそれぞれ切られている。平面形態は長方形を呈するものとみられ、規模は長さ2.86m、幅1.40m、深さ46cmを測る。土坑の長軸方向は真北より58°西に振っている。断面形態は逆台形状を呈する。基底面は東側に平坦面をもつ二段掘り構造になっており、基底面の比高差は20cmを測る。埋土は上下２層（①・②層）に分層される。



① 褐色土(炭化物混入)
② 明褐色土
③ 黄色土

0 1m
(S＝1：30)



第144図　ＳＫＶ433測量図・出土遺物実測図

①層は黄色土のブロックや炭化物が混入するものである。②層は①層よりやや色調の明るい褐色（7.5ＹＲ4/3）土であり、少量の炭化物が混入する。西半部は②層のみで埋まることや、断面形状が東半部と異なることから、土坑２基の重複の可能性が高い。本土坑の掘り方最終面は第Ⅷ層に及ぶ。

遺物は①層からの出土が大半である。弥生土器は、甕形土器と壺形土器の口縁部片や胴部片が少量出土している。基底面東半部付近からは径18～22㎝、厚さ10㎝の石が１点出土した。そのほか、詳細な地点は不明であるが、柱状片刃石斧の刃部片が1点出土している。

出土遺物

Ｖ311～313は甕形土器。Ｖ311・312は貼り付け、Ｖ313は折り曲げにより口縁部を成形するものである。Ｖ312は胴部に沈線文12条（５条１組）と山形文（３条１組）、口縁上端面に刻目を施す。Ｖ314は壺形土器の胴部片で、沈線文とM字状の凸帯文（指頭押圧）を施すものである。Ｖ315は変成岩製の柱状片刃石斧である。側面及び表面の大部分は剝落している。

ＳＫＶ414（第145図、図版42）

第４地区中央部やや南寄り、Ｄ18区に位置する。遺構の北壁はＳＫＶ415（土坑Ａ）に、南壁はＳＫＶ413（古墳）にそれぞれ切られている。平面形態は長方形を呈するものとみられ、規模は検出長1.78m、幅1.06m、深さ24㎝を測る。土坑の長軸方向は真北より53°西に振っている。断面形態は逆台形状を呈する。土坑の埋土は２層（①・②層）に分層され、②層は①層に黄色土が斑点状に混入するものである。基底面にて長さ1.14m、幅0.80m、深さ８㎝の長方形の掘り込み（ＳＫ①）を検出した。ＳＫ①は断面観察と検出状況、及び②層で埋まることから、本土坑とは別の遺構の可能性もある。このほか、基底面東壁中央部及び南壁中央部基底面付近にて、径10～12㎝、深さ10㎝の小ピットを１基ずつ検出した（ＳＰ①・②）。ピットは②層で埋まる。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は①層からの出土で、弥生土器の小片や径３㎝大の小石が数点出土したが、図化しうるものはない。

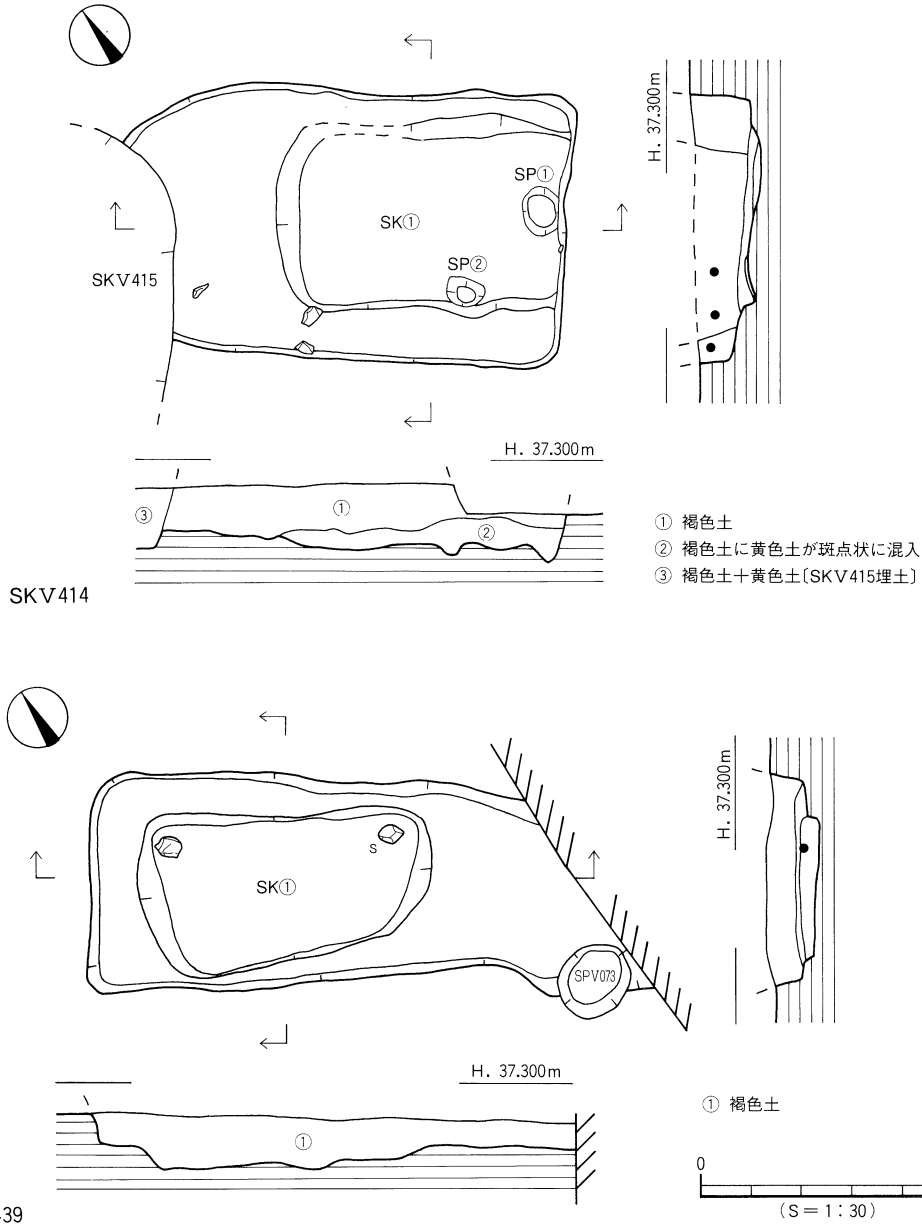
ＳＫＶ439（第145図、図版42）

第４地区東壁中央部やや北寄り、Ｃ19区に位置する。遺構の東壁は調査区外に続き、南壁はＳＰＶ073に一部切られている。平面形態は長方形を呈するものとみられ、規模は検出長2.30m、幅0.88m、深さ20㎝を測る。土坑の長軸方向は真北より西に55°振っている。断面形態は皿状を呈し、単一層で埋まる。基底面にて長さ1.20m、幅0.65m、深さ10㎝の長方形状の掘り込み（ＳＫ①）を検出した。埋土は土坑埋土と同様であることから、ＳＫ①は本土坑に伴うものであろう。ＳＫ①の基底面は凹凸が著しいが、土坑自体の基底面はほぼ平坦である。

遺物はＳＫ①を除く埋土中から出土した。弥生土器片が数点と、径10㎝大の小礫が１点出土しているが、図化しうるものはない。

ＳＫＶ472（第146図）

第４地区南西部、Ｄ・Ｅ17区に位置する。平面形態は遺構の北壁側がやや膨らむ不整の長方形を呈し、規模は長さ2.18m、幅1.32m、深さ24㎝を測る。南東隅及び北西コーナー付近に幅10㎝の半円状の突出部をもつ。土坑の長軸方向は真北方向にほぼ直交する。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で



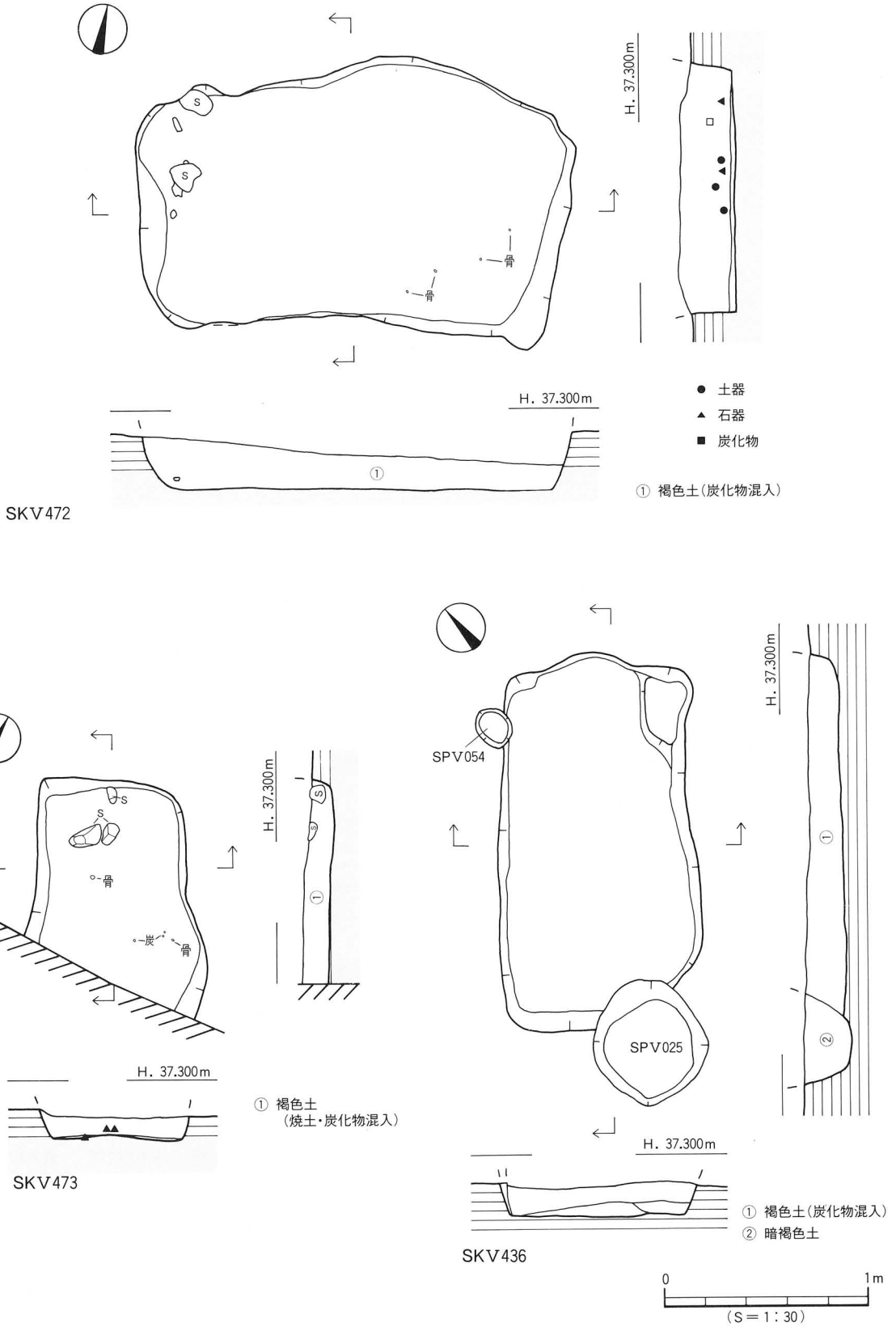
第145図　ＳＫＶ414･439測量図

埋まる。西側壁体沿いの埋土中にて炭化物がブロック状に検出された。基底面は比較的平坦であり、土坑の掘り方最終面は第Ⅷ層に及ぶ。

遺物は北西壁コーナー付近の埋土下位にて径10×15cm、厚さ５cmの丸石が２個出土したほか、弥生土器小片が数点出土している。図化しうるものはない。そのほか南東部の埋土下位にて、骨の小片が４ヶ所で検出されている。骨の種別や部位は不明である。

ＳＫＶ473（第146図）

第４地区南西隅、Ｅ16・17区に位置する。遺構の南半部は調査区外に続く。平面形態は北壁中央部がやや膨らむ不整の長方形を呈し、規模は検出長1.20m、検出幅0.90m、深さ16cmを測る。土坑の長軸方向は真北より23°西に振っている。断面形態は皿状を呈し、単一層で埋まる。



第146図　ＳＫＶ436・472・473測量図

基底面は中央部がやや盛り上がり、壁際に向かって緩傾斜をなす。遺物は北壁沿いの埋土上位より径10～15cm、厚さ５～８cm大の円石が「Ｌ」字状に並んで検出された。また、埋土中位にて炭や焼土が少量検出された。土坑の掘り方最終面は第Ⅷ層に及ぶ。

遺物は埋土上位より、少量の弥生土器片が出土したが、図化しうるものはない。そのほか、骨の小片が中央部と南東部の埋土中位付近から出土した。分析の結果、鹿もしくは猪の頭蓋骨であることが判明している。

ＳＫＶ436（第146図）

第４地区中央部南東寄り、Ｃ17区に位置する。ＳＫＶ462（土坑Ｂ）と重複し、遺構の南東隅はＳＰＶ025に切られ、北西コーナー付近はＳＰＶ054に切られている。平面形態は南側がやや幅広の長方形を呈し、規模は長さ1.85m、幅1.00m、深さ20cmを測る。土坑の長軸方向は真北より40°東に振っている。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。

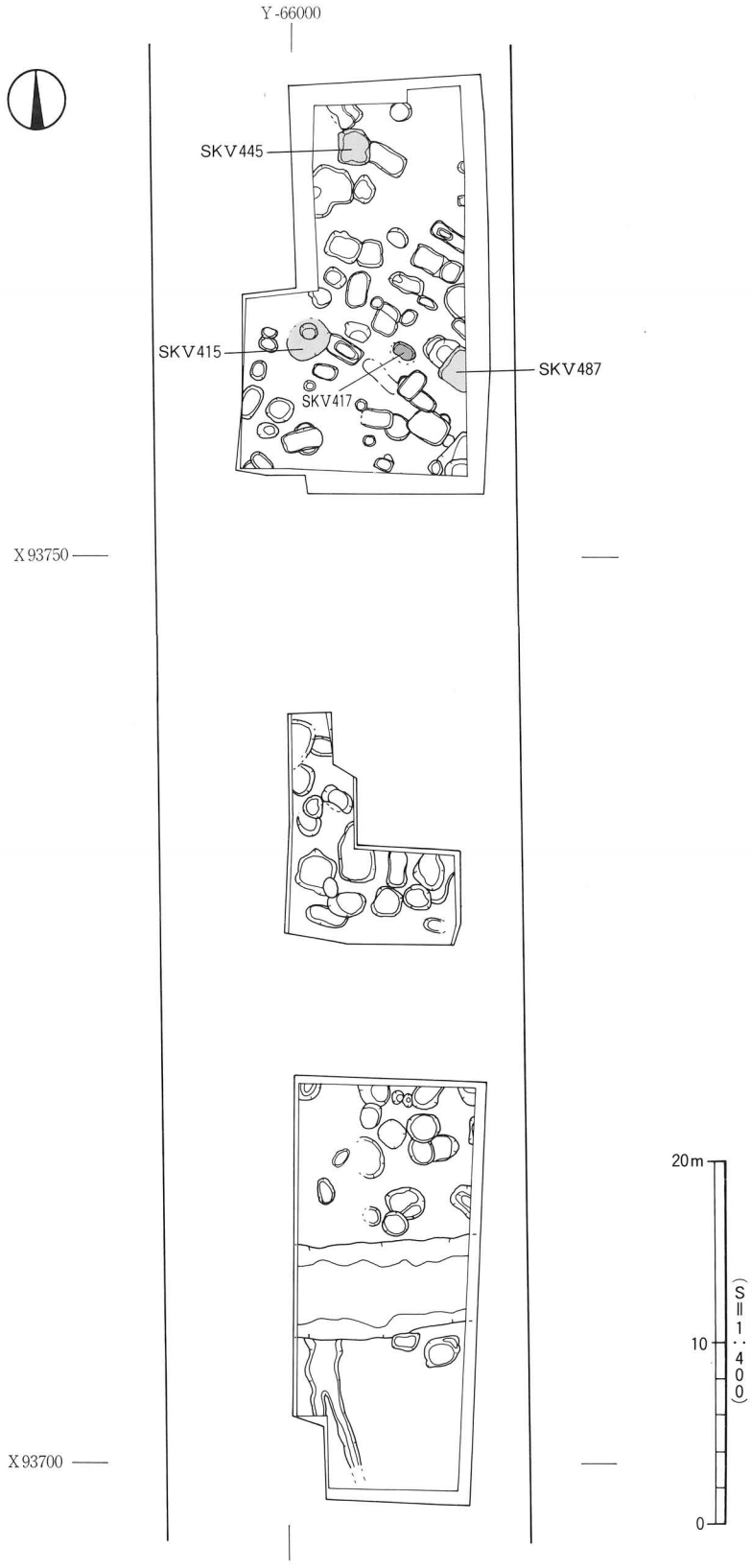
北東隅には幅22～25cm、長さ40cmのテラス状の平坦面があり、基底面との比高差は10cmを測る。基底面は北から南に向けてやや傾斜をなし、比高差は５cmを測る。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。土坑内からは、弥生土器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

６）土　坑　Ａ（第147図、表20）

土坑Ａは４基あり、すべて第４地区で検出されたものである。平面形態では楕円形３基、方形１基、断面形態では逆台形状１基、皿状１基、袋状１基、筒状１基となる。堆積状況では単一堆積をなすもの２基、水平及び放物線型凹堆積をなすものがそれぞれ１基ずつある。４基の土坑のうち、３基の測量図と２基の出土遺物実測図を掲載している。このうち、ＳＫＶ417は断面形態が袋状になり、貯蔵穴の形態をなす土坑である。

表20　土坑Ａ一覧

ＳＫ番号	平面形態	断面形態	堆積状況	遺構測量図	遺物実測図	グリット	備　考
ＳＫＶ415	不整方形	皿	単一			D18	
ＳＫＶ417	楕円形	袋	単一	○		C18	貯蔵穴
ＳＫＶ445	不整楕円形	逆台形	放物線型凹	○	○	D20	
ＳＫＶ487	楕円形	逆台形	水平	○	○	C17･18	



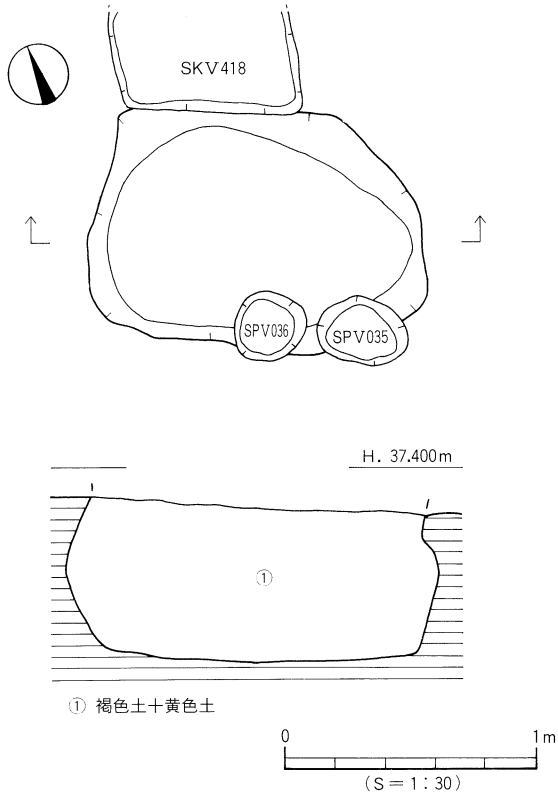
第147図　V区　土坑A分布図

①　貯蔵穴

ＳＫＶ417（第148図）

第４地区中央部やや南東寄り、Ｃ18区に位置する。北壁はＳＫＶ418（古墳時代）、南壁はＳＰＶ035・036にそれぞれ切られている。平面形態は不整の楕円形を呈し、規模は長径1.34ｍ、短径0.90ｍ、深さ66㎝を測る。基底面の規模は長径1.50ｍ、短径1.10ｍ、底面積1.12㎡である。断面形態は壁体全面が袋状を呈し、単一層で埋まる。基底面は遺構中央部がやや凹み、壁際との比高差は３㎝を測る。基底面では、ピットや溝などの施設は検出されなかった。

遺物は埋土中にて、弥生土器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。堆積状況や遺構の深さなどから判断すると、本土坑は人為的に埋め立てられた可能性が高い。



第148図　ＳＫＶ417測量図

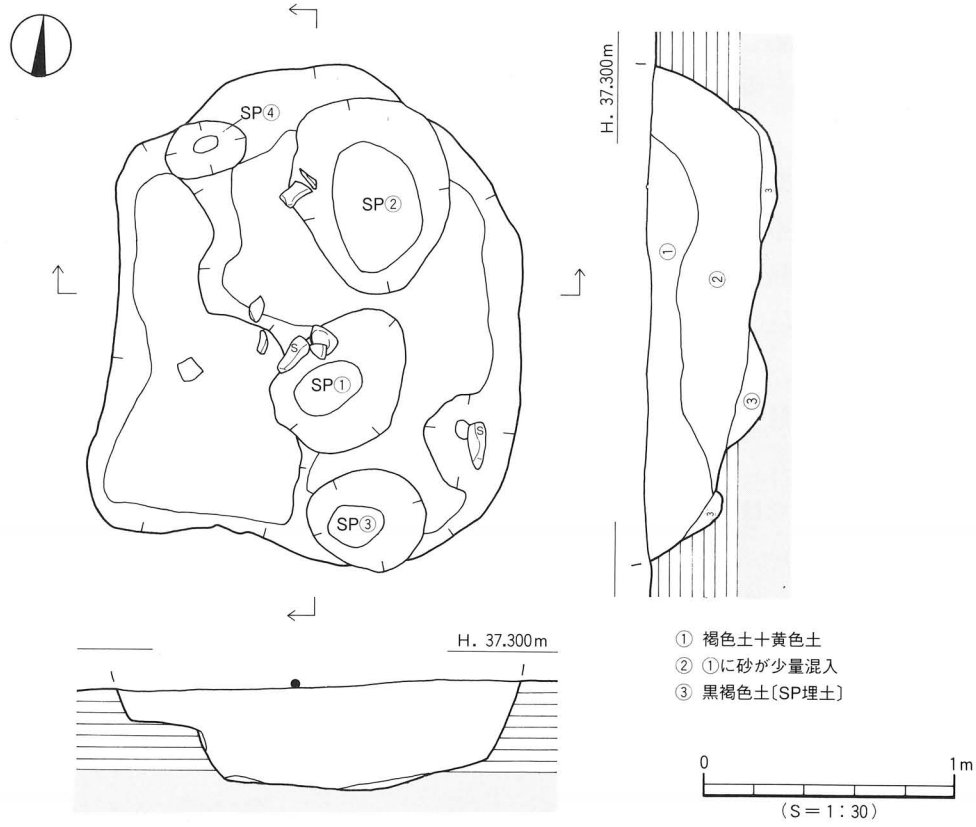
②　その他の土坑

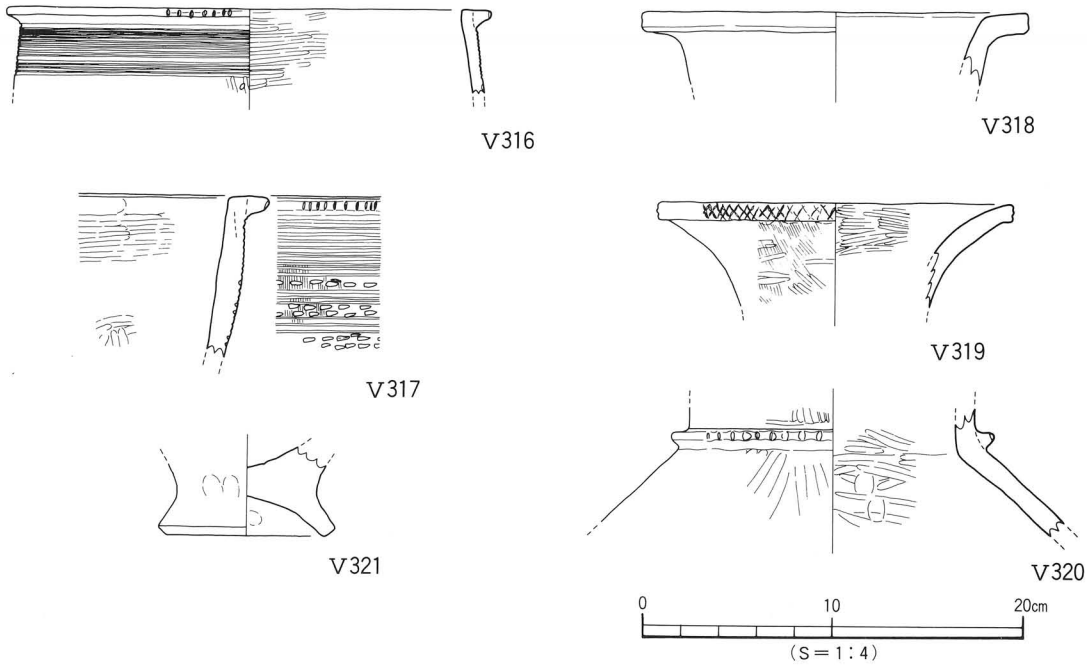
ＳＫＶ445（第149図）

第４地区北側、Ｄ20区に位置する。平面形態は、遺構の南西部がやや突出する不整の楕円形を呈する。規模は長径2.00ｍ、短径1.60ｍ、深さ45㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、南西部には幅25～77㎝のテラス状の平坦面があり、基底面との比高差は20㎝を測る。埋土は上下２層（①・②層）に分層され、②層は砂が混入するものである。基底面は遺構中央部から北東部にかけて傾斜をなし、比高差は10㎝を測る。掘り方最終面は第Ⅷ層に及ぶ。

基底面中央部にて径40～62㎝、深さ10㎝の楕円形ピット（ＳＰ①）を、北側壁体沿いに径65～80㎝、深さ６㎝の楕円形ピット（ＳＰ②）を、南側壁体沿いに径40～45㎝、深さ６㎝の楕円形ピット（ＳＰ③）を、北西側壁体沿いに径20～32㎝、深さ５㎝の円形ピット（ＳＰ④）をそれぞれ検出した。いずれもピット埋土は黒褐色（7.5ＹＲ3/2）土である。

遺物は①層及び②層の中位付近から出土した。特に、径５～10㎝大の円石が北半部の中央にまとまって出土したほか、弥生土器片が散在している。





第149図　ＳＫＶ445測量図・出土遺物実測図

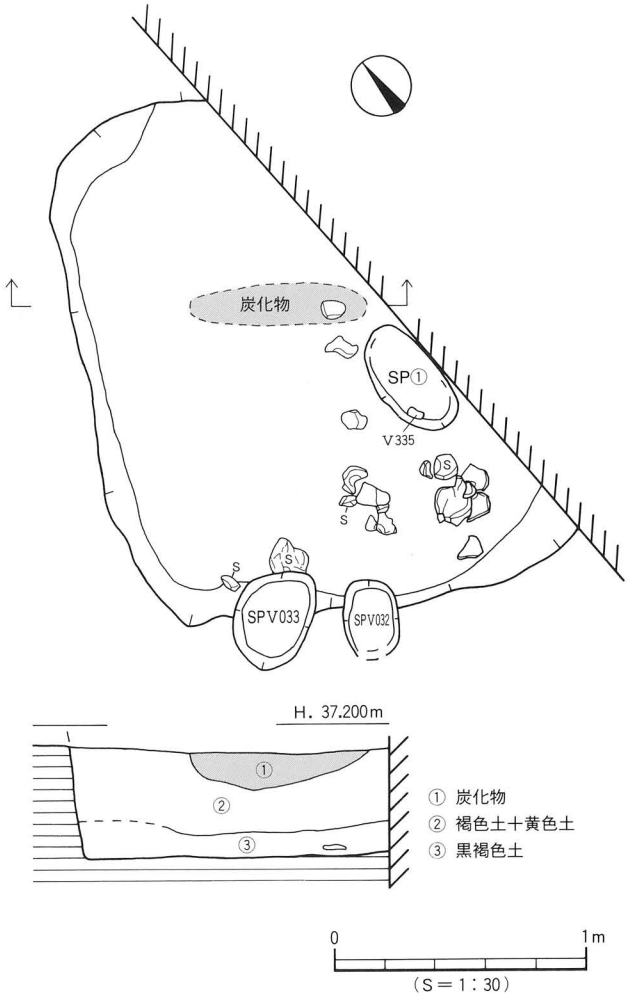
出土遺物

V316・317は甕形土器。貼り付けにより口縁部を成形するものである。口縁端面には刻目を施す。胴部文様は、V316は4条1組のクシ状工具による沈線文と刺突文、V317は沈線文（3条1組）と刺突文が組み合うものである。V318～320は壺形土器。V318は口縁部がほぼ水平に屈曲し、口縁内面に弱い稜をもつ。口縁部の形状より、東北部九州地方に類例を求めることができる（外来系）。V319は口縁端面に斜格子目文を施す。V320は頸胴部片。頸部に刻目凸帯文を貼り付ける。V321は台付鉢の底部か。くびれをもつ上げ底である。

ＳＫＶ487（第150図、図版43）

第4地区東壁中央南寄り、C17・18区に位置する。遺構の西側はＳＫＶ420（土坑Ｄ）を切り、南側はＳＰＶ032・033に切られている。遺構の東側は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、規模は南北検出長2.10m、東西検出長1.80m、深さ42cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、壁体は垂直に近い状態で立ち上がる。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。

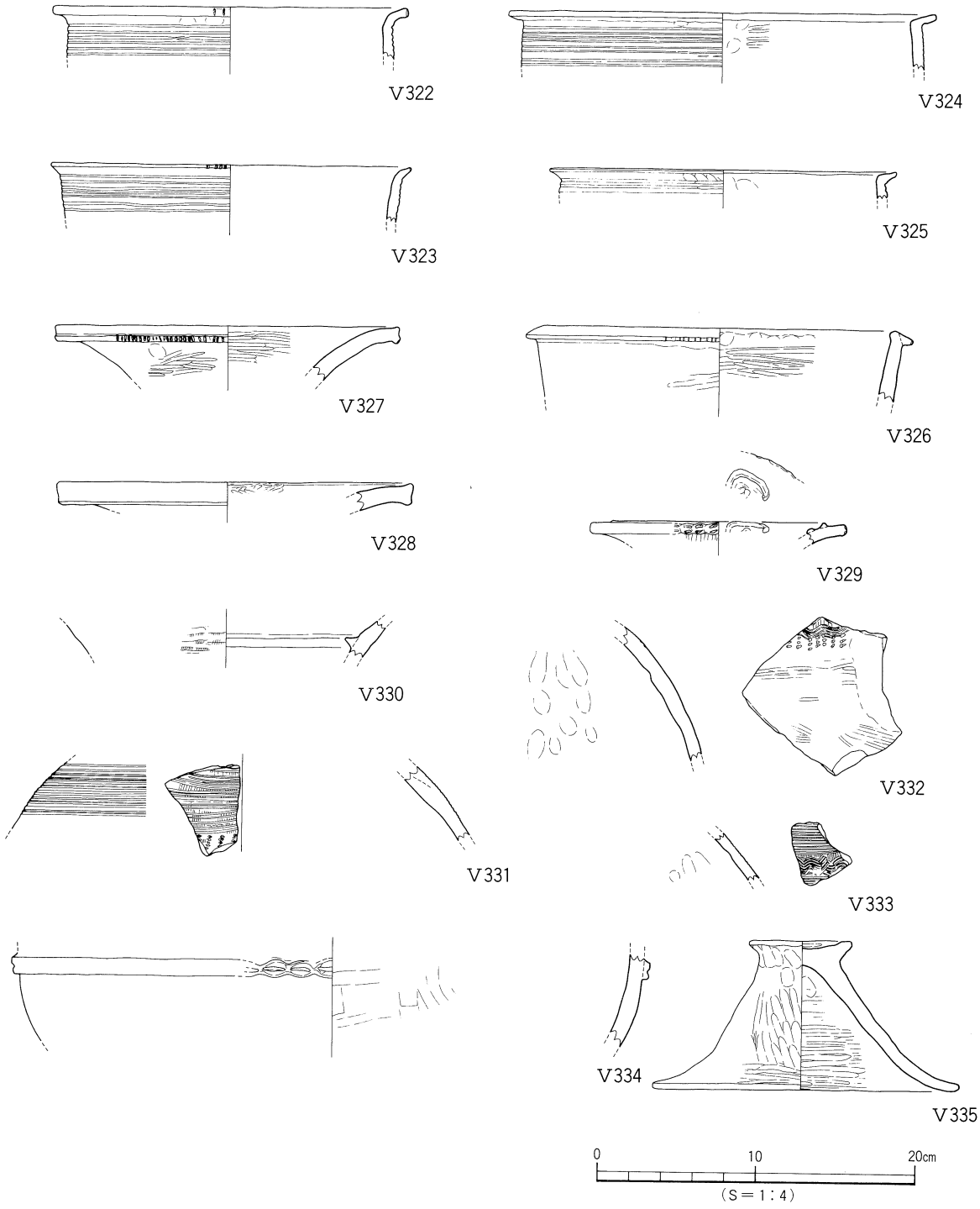
埋土は3層（①～③層）に分層され、③層は黒褐色（7.5ＹＲ3/2）土で、厚さ10cmの堆積となる。②層は厚さ30cmの堆積であり、②層上位に炭化物層（①層）の堆積がみられる。①層は炭化物がブロック状にまとまっており、本土坑上面にて焚火等が行われた可能性がある。



第150図　ＳＫＶ487測量図

基底面は比較的平坦である。基底面中央部やや東寄りに径22～50cm、深さ５cmの楕円形状のピット（ＳＰ①）を検出した。ピット埋土は土坑埋土③層と同様である。

遺物は③層からの出土が大半である。このうち弥生土器小片が南東部にまとまって出土している。ＳＰ①内からは、口縁部が一部欠損した蓋形土器（Ｖ335）が出土した。このほか径５cm、厚さ２～５cm大の小石が数点、③層中に散在していた。



第151図　ＳＫＶ487出土遺物実測図

出土遺物（第151図）

Ｖ322～326は甕形土器。Ｖ322～324は折り曲げ、Ｖ325・326は貼り付けにより口縁部を成形するものである。口縁端面には刻目を施すもの（Ｖ322・323・326）と、施さないもの（Ｖ324・325）とがある。胴部文様は沈線文を施すもの（Ｖ322～325）と、無文のもの（Ｖ326）とがある。なお、Ｖ324はクシ状工具（６条１組）による沈線文を施す。Ｖ327～334は壺形土器。Ｖ327～330は頸部が長くなるもので、Ｖ329・330は口縁部内面に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。Ｖ329の凸帯は渦巻状を呈し、口縁端面には連鎖状刻目文2列を施す。Ｖ331～334は胴部片。Ｖ331～333はクシ状工具による沈線文を施すもので、Ｖ332・333は沈線文と波状文が組み合うものである。Ｖ334は凸帯上に連鎖状刻目文を施す。Ｖ335は蓋形土器。つまみ中央部は凹み、口縁端部は丸くおさめる。

(3) 土器溜まり（第79・80図）

Ｖ区の調査では、第Ⅵ層掘り下げ時に遺物の集中する地点が第２・３・４地区において９ヶ所みられた。ここでは土器溜まり（ＳＸ）として扱い、出土した遺物を掲載した。

１）第２地区

第２地区では、３箇所の土器溜まりを検出した。いずれもＳＤＶ202検出の際に、ＳＤＶ202上面付近で確認したもので、本来はＳＤＶ202に伴う可能性が高い。ＳＸＶ201はＳＤＶ202東半部、ＳＸＶ202は中央部、ＳＸＶ203は西半部に２×２ｍの範囲で検出した土器溜まりである。

ⅰ）ＳＸＶ201出土遺物（第152図－Ｖ336～340）

Ｖ336～338は甕形土器。Ｖ336・337は折り曲げ、Ｖ338は貼り付けにより口縁部を成形する。口縁端面には刻目を施し、Ｖ338はヘラ描き沈線文1条を加える。胴部文様は沈線文だけのもの（Ｖ337）と沈線文と刺突文が組み合うもの（Ｖ338）、無文のもの（Ｖ336）がある。Ｖ339は壺形土器の口頸部片で、口縁部内面に凸帯を貼り付け、竹管文2列を施す。頸部には沈線文（２条１組）とＭ字状の凸帯文（刻目）を施す。Ｖ340はサヌカイト製の凹基無茎石鏃。先端部は一部欠損する。平面形態は正三角形状となる。

ⅱ）ＳＸＶ202出土遺物（第152図－Ｖ341・342）

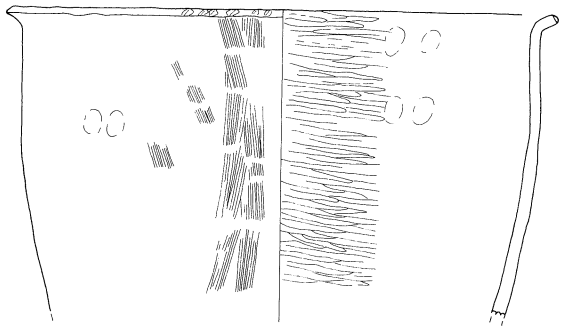
Ｖ341は壺形土器の口縁部、Ｖ342は高坏形土器の脚部片である。Ｖ342は柱部に沈線文を施す（弥生中期後半）。

ⅲ）ＳＸＶ203出土遺物（第152図－Ｖ343～345）

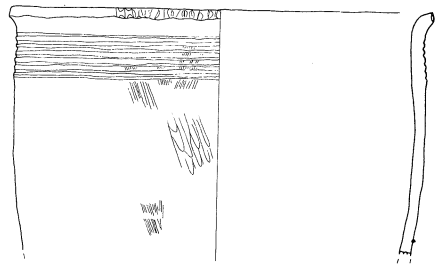
Ｖ343は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。口縁端面には刻目を施す。Ｖ344は壺形土器の口縁部片で、口縁端面に刻目を施す。Ｖ345は安山岩製の伐採斧である。基部は欠損し、ほぼ1/2の残存である。刃部と基部の境は明瞭で、全面に丁寧な研磨を施す。

２）第３地区

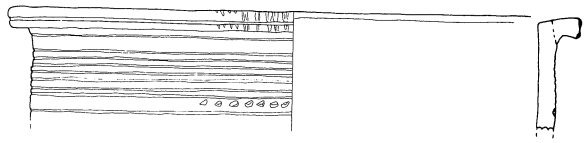
第３地区では、５箇所の土器溜まりを検出した。第Ⅵ層掘り下げ時に確認したもので、いずれも１×１ｍの範囲に遺物がまとまって出土している。しかしながら、土器溜まりの下面ではほとんどの地点で土坑が検出されており、これらの土坑に伴う可能性が高い。ＳＸＶ301下面には、ＳＫＶ309（土坑Ｂ）とＳＫＶ314（土坑Ｃ）、ＳＸＶ302はＳＫＶ310（土坑Ｃ）、ＳＸＶ303はＳＫＶ312（土坑Ｄ）、ＳＸＶ304はＳＫＶ302（土坑Ｃ）とＳＫＶ304（土坑Ｄ）、ＳＸＶ305はＳＫＶ305（土坑Ｂ）とＳＫＶ322（土坑Ｃ）がある。



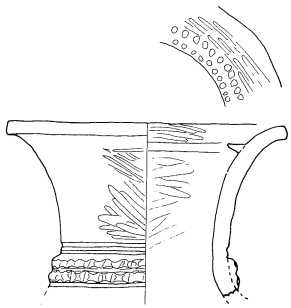
V336



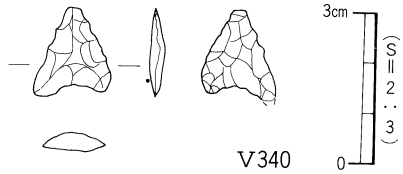
V337



V338

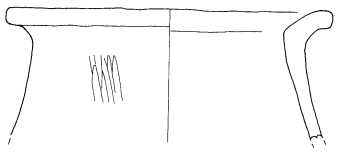


V339

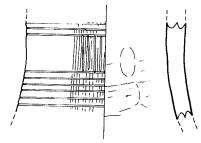


V340

SXV201



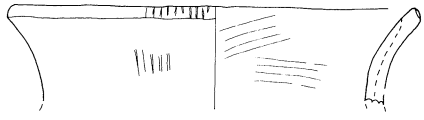
V341



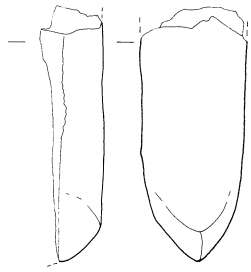
V342

SXV202

V343

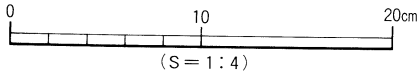


V344

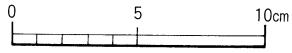


V345

SXV203



（S＝1：4）



（S＝1：3）

第152図　ＳＸＶ201～203出土遺物実測図

ⅰ）ＳＸＶ301出土遺物（第153図－Ｖ346～353）

Ｖ346は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。胴部には沈線文５条、口縁端面にはヘラ描き沈線文1条と刻目を施す。Ｖ347～350は壺形土器。Ｖ347・348は短い口頸部、Ｖ349・350は長い口頸部をもつ。Ｖ350は口縁部内面に一部が注口状となる凸帯を貼り付ける。Ｖ351～353は鉢形土器。Ｖ351は上外方にのびる断面三角形状の粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形しており、胴部には沈線文３条と刺突文を施す（外来系）。Ｖ353は丸味のある断面長方形状の粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形する。口縁部よりやや下がる位置に、径６㎜大の孔をもつ耳状の把手を1ヶ貼り付ける。形状や胎土より、山口地方からの搬入品とする。

ⅱ）ＳＸＶ302出土遺物（第153図－Ｖ354・355）

Ｖ354は甕形土器の底部で、平底となる。Ｖ355はミニチュア品で、くびれをもつ上げ底となる。

ⅲ）ＳＸＶ303出土遺物（第153－Ｖ356・357）

Ｖ356はノミ形石斧で、刃部は欠損する。平面形態は長方形状を呈し、断面形態は身膨れした長方形状となる。Ｖ357は扁平片刃石斧。平面形態は刃部側がやや広い長方形となる。側面及び表面は剥落し、刃部と基部の境はあいまいである。緑色片岩製。

ⅳ）ＳＸ304出土遺物（第153図－Ｖ358）

Ｖ358は抉入りの柱状片刃石斧。刃部は欠損するが、平面形態は刃部側がやや広い長方形状になるものとみられる。断面形態は身膨れした長方形となる。全面に丁寧な研磨を施す。緑色片岩製。

ⅴ）ＳＸＶ305出土遺物（第154図－Ｖ359～373）

Ｖ359～362は甕形土器。Ｖ359・360は折り曲げ、Ｖ361・362は貼り付けにより口縁部を成形するものである。Ｖ359～361は口縁端面には刻目、胴部には沈線文を施す。Ｖ362は沈線文と刺突文とが組み合う。Ｖ363～368は壺形土器。Ｖ363は短い口頸部、Ｖ364・365は長い口頸部をもつものである。Ｖ364・365は口縁部内面に断面三角形状の凸帯を貼り付け、Ｖ364は凸帯上に刻目を施す。Ｖ366・367は頸部片。Ｖ366は凸帯上にヨコ方向の沈線文を施した後、刻目を加える。Ｖ368は底部片。わずかに上げ底を呈する。Ｖ369は口径40㎝を越える大型の鉢形土器で、貼り付けにより口縁部を成形するものである。Ｖ370は蓋形土器。口縁部付近に径4㎜大の円孔を２ヶ穿つ（焼成前穿孔）。Ｖ371は器種不明品。Ｖ372は縄文時代晩期の深鉢である。Ｖ373は緑色片岩製の石庖丁である。刃部に使用痕が残る。鏑はあいまいである。

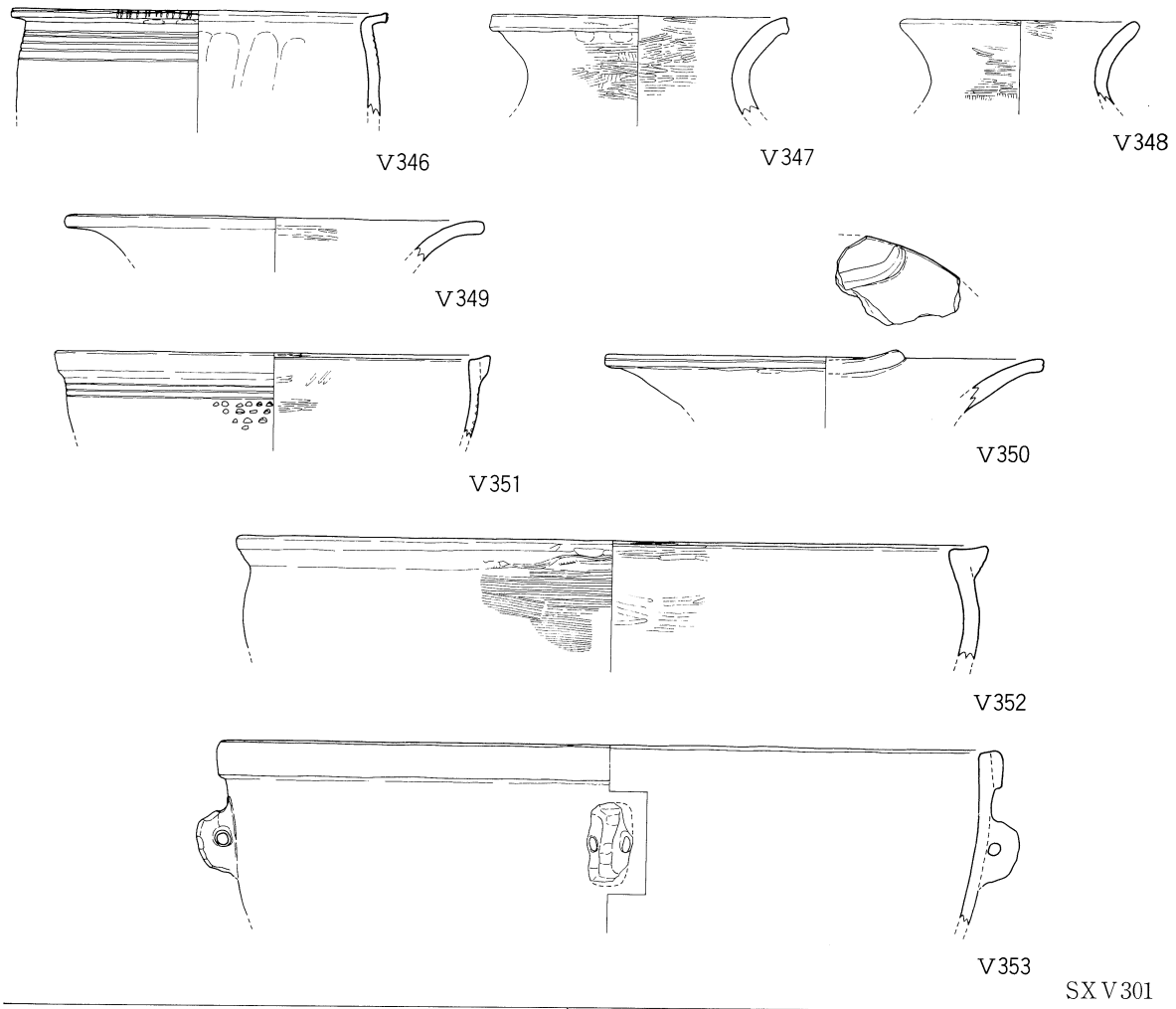
３）第４地区

第４地区では、２箇所の土器溜まりを検出した。ＳＸＶ401は第４地区北側、ＳＫＶ445（土坑Ａ）上面、ＳＸＶ402は同じく第４地区北側、ＳＫＶ444（土坑Ｃ）上面付近にて確認したものである。およそ、径１×１ｍ範囲に土器が密集している。

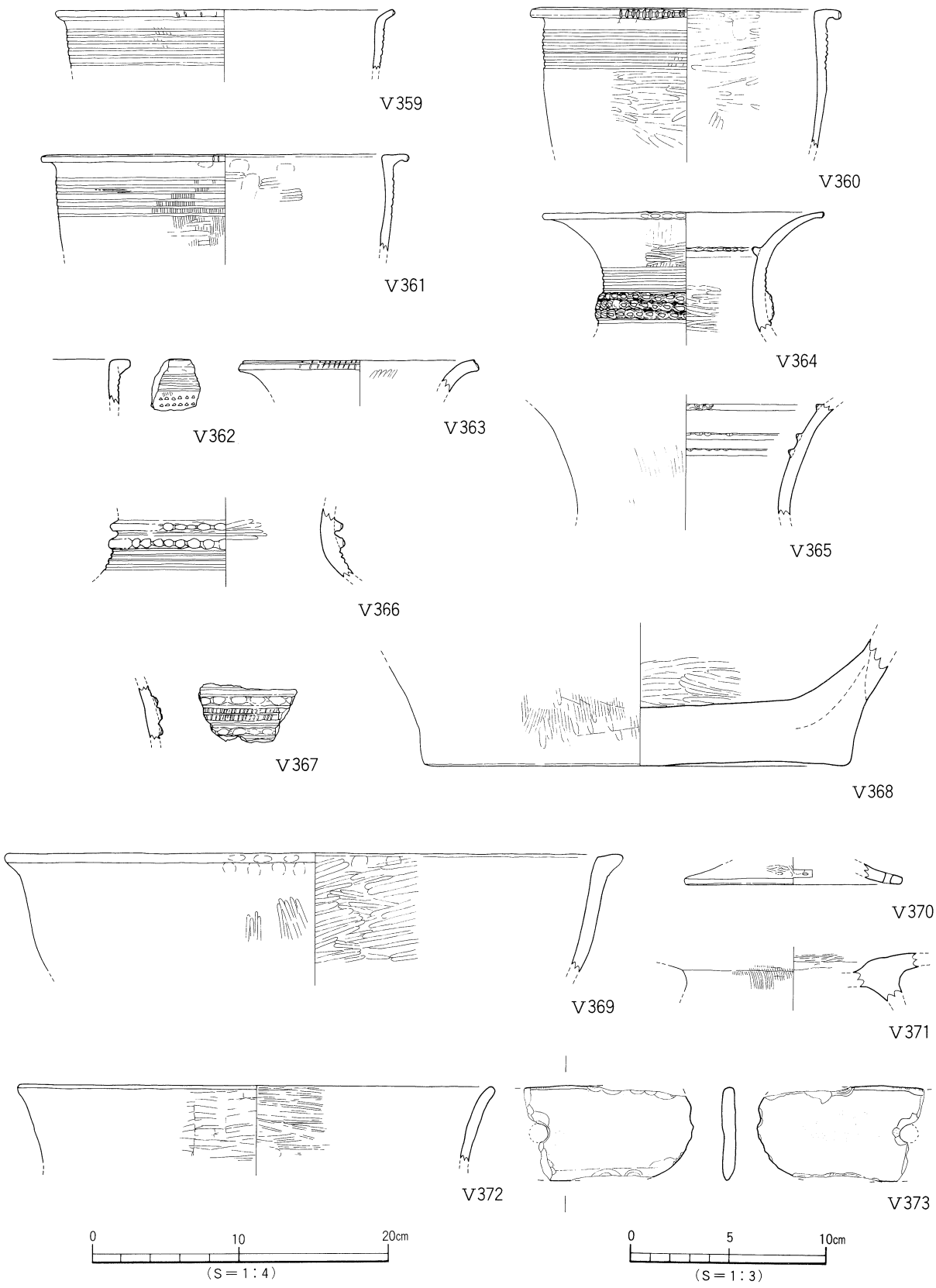
このほか、第４地区の北東部にて土器がまとまって出土している箇所がみられた。この地点は、近現代のカクランがおよんでおり、遺構や包含層に伴うものか判断できなかった。ここでは土器溜まりＳＸＶ403とし、遺物を掲載している。

ⅰ）ＳＸＶ401出土遺物（第155図－Ｖ374～378）

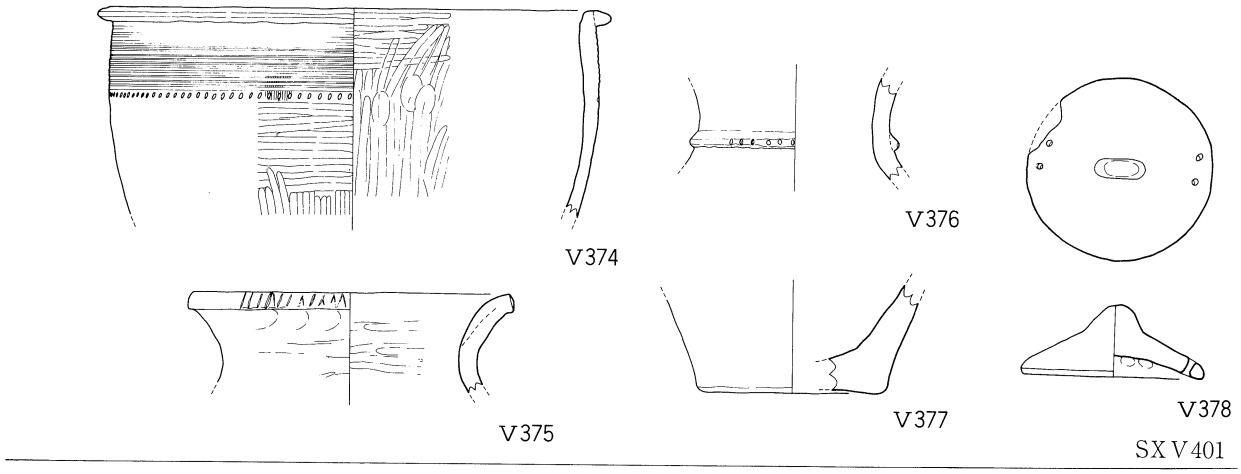
Ｖ374は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。胴部にクシ描き沈線文（６～７条１組）と刺突文を施す。Ｖ375～377は壺形土器。Ｖ375は口縁端面に「ハ」の字状文を施す。Ｖ378は蓋形土器で、

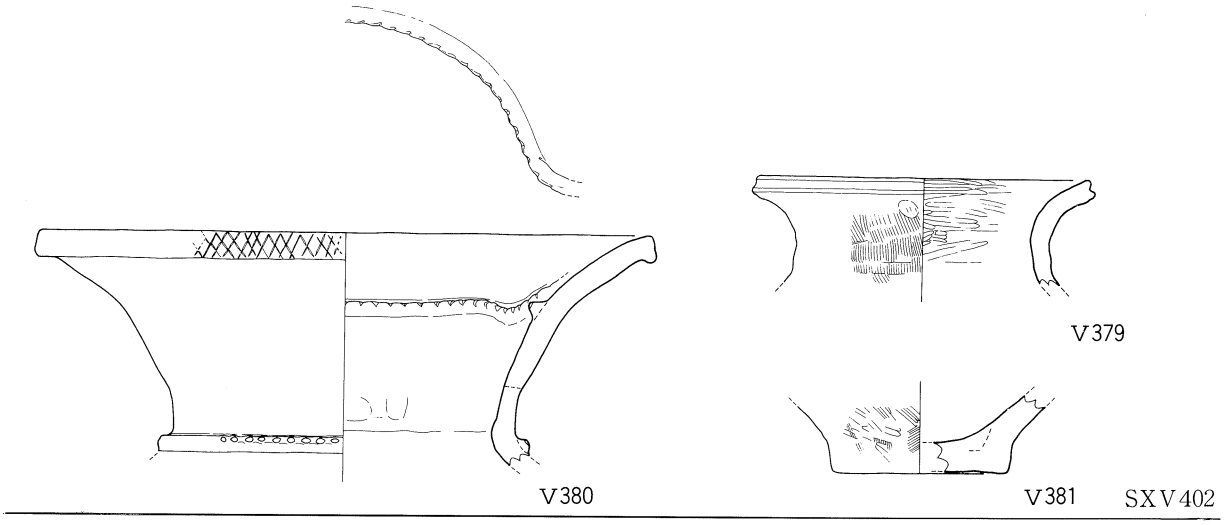


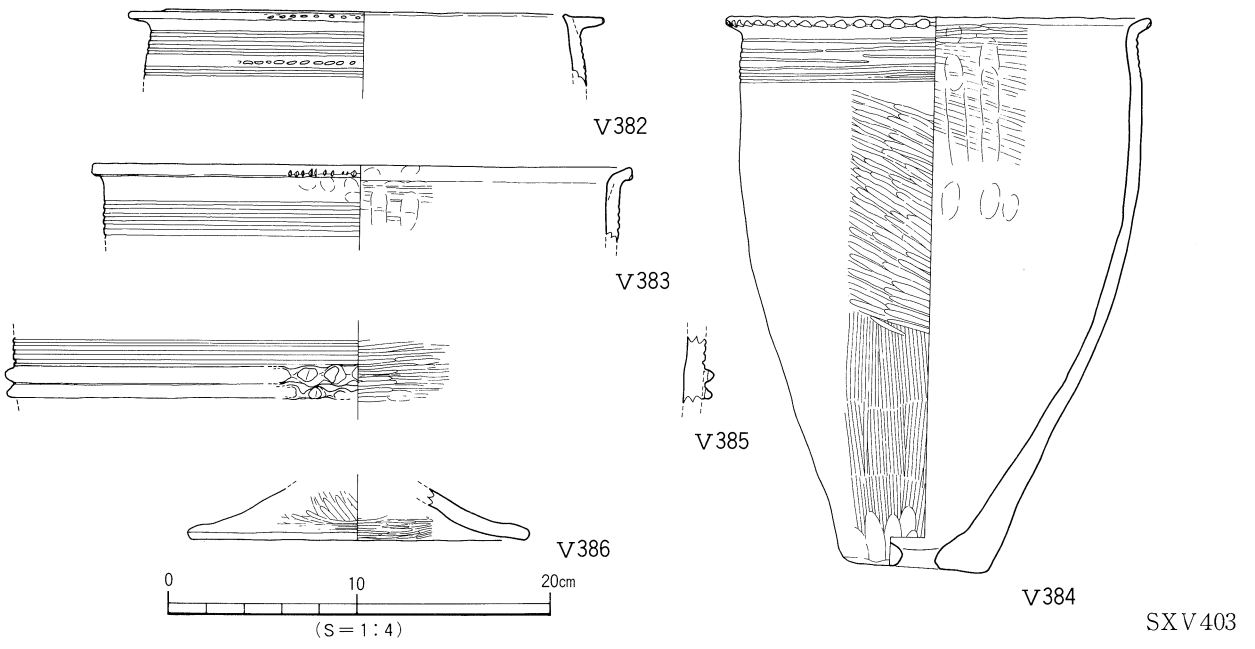
第153図　ＳＸＶ301～304出土遺物実測図



第154図　ＳＸＶ305出土遺物実測図







第155図　ＳＸＶ401～403出土遺物実測図

口縁部に径３㎜大の孔を２ヶ穿つ（焼成前穿孔）。

ⅰ）**ＳＸＶ402出土遺物**（第155図－Ｖ379～381）

Ｖ379～381は壺形土器。Ｖ380は口縁部内面には断面三角形状の凸帯文を貼り付け、凸帯上に刻目、口縁端面には斜格子目文を施す。

ⅱ）**ＳＸＶ403出土遺物**（第155図－Ｖ382～386）

Ｖ382～384は甕形土器。Ｖ382は貼り付け、Ｖ383・384は折り曲げにより口縁部を成形するものである。口縁端面には刻目を施すもの（Ｖ382・383）と、指頭押圧を加えるもの（Ｖ384）とがある。胴部文様は沈線文（２条１組）だけのもの（Ｖ383・384）と、沈線文と刺突文が組み合うもの（Ｖ382）とがある。Ｖ384は所謂「コシキ」への転用品である。平底の底部には径1.8㎝大の孔を穿つ（焼成後穿孔）。外面の胴部上半部はナナメ方向のミガキ調整、胴下半部はタテ方向のハケメ調整を施す。完形品。Ｖ385は壺形土器の胴部片。沈線文とＭ字状の凸帯文（指頭押圧）を施し、凸帯の中にはヘラ描き沈線文１条を施す。Ｖ386は蓋形土器。口縁端部は丸くおさめる。

(4) ピット

Ｖ区では、弥生時代前期末～中期初頭の遺物を出土したピットが７基ある。いずれもＶ区の北側、第４地区で検出したものである。このうちＳＰＶ108からは、遺物がまとまって出土している。

１）ＳＰＶ108（第156図）

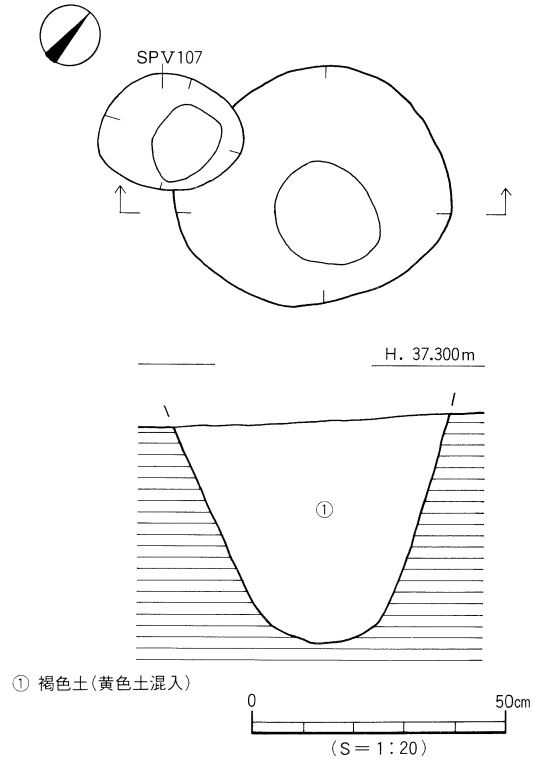
第４地区の北側、Ｄ21区に位置する。ＳＫＶ446（土坑Ｃ）と切り合い関係にあり、ＳＰＶ108がわずかに切っている。ピット西側はＳＰＶ107〔埋土：黒褐色（7.5ＹＲ3/2）〕に切られている。

平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.78ｍ、短径0.68ｍ、深さ60㎝を測る。埋土は土坑Ａと同様で、褐色土に黄色土が混入するものである。

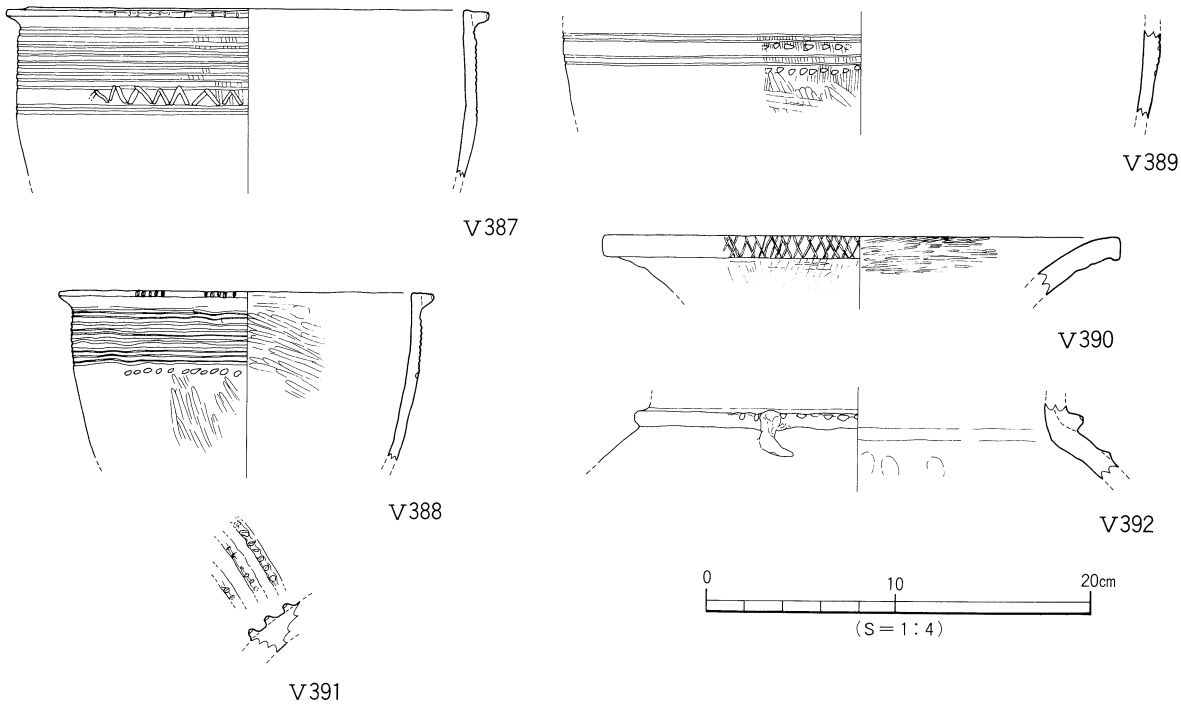
遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを６点掲載している。

出土遺物（第157図）

Ｖ387～389は甕形土器。Ｖ387・388は貼り付けにより口縁部を成形するもので、口縁端面に刻目を施す。胴部にはＶ387は沈線文（２条１組）と山形文、Ｖ388はクシ描き沈線文12条（４条１組）と刺突文が施される。Ｖ389は胴部片。沈線文（２条１組）と刺突文が交互に施文される。Ｖ390～392は壺形土器。Ｖ390は口縁端面に斜格子目文を施す。Ｖ391は口縁部内面に３条の刻目凸帯文を貼り付ける。Ｖ392は頸部に刻目凸帯文と棒状の浮文を１ヶ貼り付ける。



第156図　ＳＰＶ108測量図



第157図　ＳＰＶ108出土遺物実測図

2）その他のピット出土遺物（第158図）

ＳＰＶ108のほか、弥生時代前期末～中期初頭の遺物が出土したピットが７基ある。出土した遺物のうち、図化しうるもの10点を第158図に掲載している。

ⅰ）**ＳＰＶ019出土遺物**（Ｖ393・394）：Ｖ393は壺形土器の胴部片で、沈線文（２条１組）と山形文を施す。Ｖ394は甕形土器の底部で、わずかに上げ底となる。

ⅱ）**ＳＰＶ057出土遺物**（Ｖ395）Ｖ395は蓋形土器で、つまみ上部端は平坦である。口縁部内面に煤が付着する。

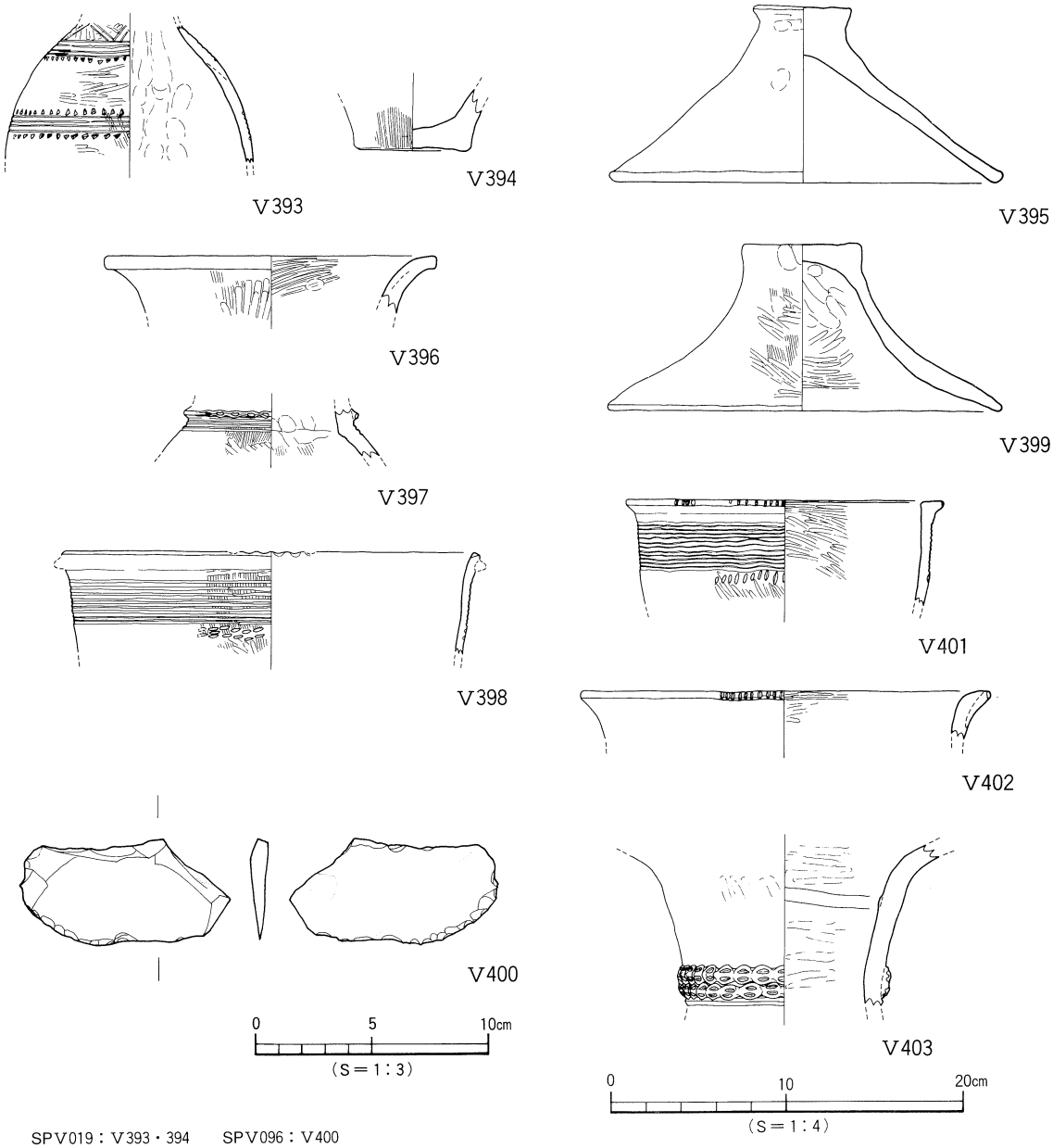
ⅲ）**ＳＰＶ085出土遺物**（Ｖ396・397）Ｖ396・397は壺形土器。Ｖ397は沈線文（３条１組）と凸帯文（連鎖状刻目文）を施す。

ⅳ）**ＳＰＶ091出土遺物**（Ｖ398・399）Ｖ398は粘土紐を貼り付けることにより、口縁部を成形する甕形土器。胴部に沈線文９条（３条１組）と刺突文２列を施す。口唇部には押圧を加える。Ｖ399は蓋形土器で、つまみ上端はわずかに凹む。口縁部内面に煤が付着する。

ⅴ）**ＳＰＶ096出土遺物**（Ｖ400）Ｖ400はサヌカイト製のスクレイパーである。刃部はやや弧状となり、両面に初期剥離が残る。

ⅵ）**ＳＰＶ106出土遺物**（Ｖ401）Ｖ401は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。胴部にはクシ描き沈線文12条（４条１組）と刺突文、口縁端面には刻目を施す。

ⅶ）**ＳＰＶ109出土遺物**（Ｖ402・403）Ｖ402・403は壺形土器。Ｖ402は口縁端面に刻目を施す。Ｖ403は口縁部内面に凸帯を貼り付け、頸部にはＭ字状の凸帯を貼り付けた後、凸帯上に連鎖状刻目文２列を施す。



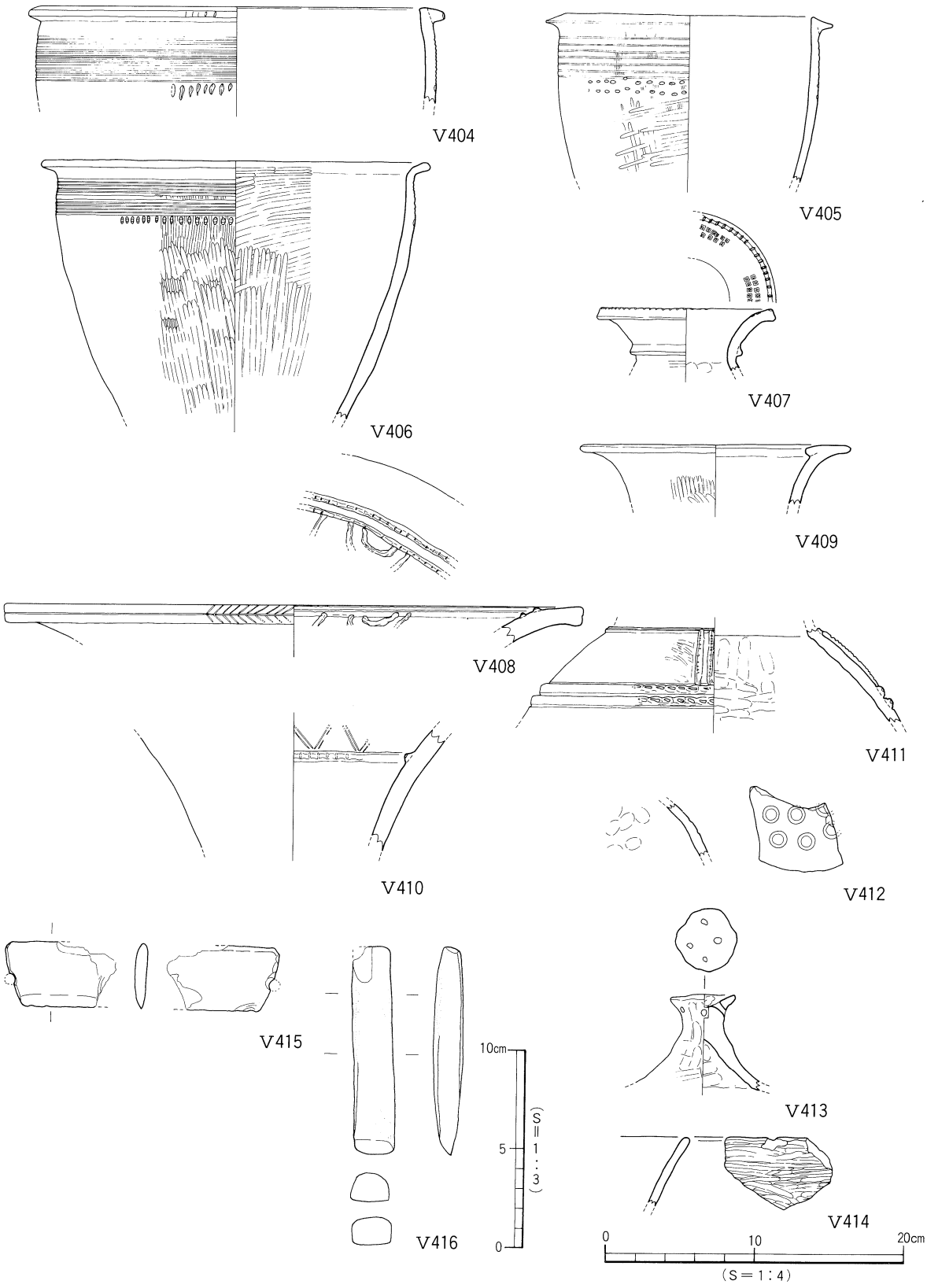
SPV019：V393・394　SPV096：V400
SPV057：V395　SPV106：V401
SPV085：V396・397　SPV109：V402・403
SPV091：V398・399

第158図　ＳＰ出土遺物実測図

(5) 第Ⅵ層出土遺物（第159図）

Ｖ区では、第Ｖ・Ⅵ層中より弥生時代前期末から後期の遺物が多量に出土した。発掘調査時は第Ｖ層と第Ⅵ層との区別が難しく、遺物が誤って取り上げられた可能性がある。ただし、第Ⅵ層中からは、概ね弥生時代前期末から中期初頭の遺物が出土している。本稿では第Ⅵ層出土遺物として取り上げた遺物のうち13点を第159図に掲載している。なお、取り上げ時の状況より、縄文土器や弥生時代中～後期に時期比定される土器も含まれている。

Ｖ404～406は甕形土器。Ｖ404・405は貼り付け、Ｖ406は折り曲げにより口縁部を成形する。Ｖ404は口縁端面に刻目を施す。胴部文様はＶ404・406はクシ描き沈線文（５条１組）と刺突文が組み合う。



第159図　第Ⅵ層出土遺物実測図

V405は沈線文７条と刺突文２列を施す。V407～412は壺形土器。V407は口縁部内面に半截竹管文を２列、口縁上端面に刻目を施す。V408は長い口頸部をもつもので、口縁部内面に断面三角形状の刻目凸帯が２条巡り、半円状の凸帯を２列貼り付ける。口縁端面には有軸の羽状文を施す。V409は口縁端部内面に丸味のある断面三角形状の凸帯を貼り付ける。形態や胎土から東北部九州地方からの搬入品である。V410は口縁部内面に刻目凸帯を貼り付け、凸帯よりやや上がった位置に２条１組の山形文を施す。V411・412は頸胴部片。V411は頸部に１条、胴部にM字状の凸帯を貼り付け、凸帯上には連鎖状刻目文を施す。凸帯間には棒状の浮文を２ヶ貼り付け、浮文上端部には刻目を施す。V412は径1.1cm大の竹管文が６ヶ看取される。弥生中期後半～後期。V413は蓋形土器。つまみ中央部は凹む。つまみ側部に径２㎜大の円孔を４ヶ穿つ（焼成前穿孔）。V414は縄文時代晩期の深鉢である。内外面共に条痕が残る。V415は緑色片岩製の石庖丁である。刃部は欠損している。背部は丸味をもち研磨を施す。穿孔が施されている側面は研磨されており、再加工したものとみられる。V416は柱状片刃石斧である。基部は欠損している。刃部と基部との区別はあいまいである。緑色片岩製。

４．弥生時代中期～後期の遺構と遺物

V区では、弥生時代中～後期の遺構は土坑10基を検出し、第V層中からは当該期の遺物が出土している。遺構はすべて第Ⅶ層上面での検出である。

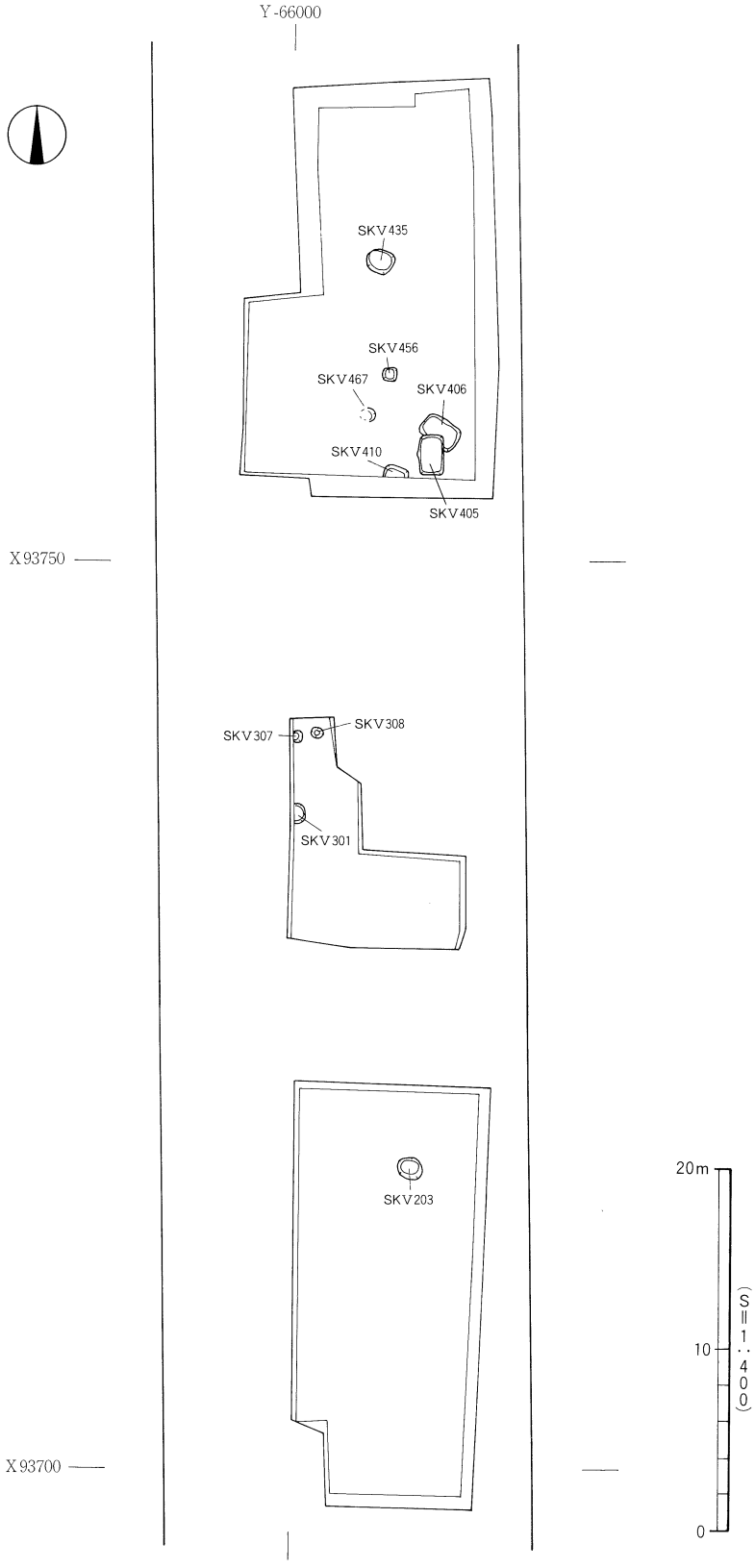
(1) 土　　坑（第160図、表21）

V区で検出した弥生時代中期～後期の土坑は10基である。内訳は第２地区で１基、第３地区で３基、第４地区で６基であり、第１地区では未検出である。土坑埋土はいずれも黒褐色（10YR2/2）土である。各土坑内から出土した遺物から判断すると、第２地区検出のSKV203は中期後半、第４地区検出のSKV405・435・467は後期後半、他の6基は明確な時代判断はしかねるが、検出状況や埋土などから、弥生中期後半～後期の土坑と考えられる。

これら10基の土坑のうち、５基の測量図と３基の出土遺物実測図を掲載する。

表21　ＳＫ〔弥生中～後期〕一覧

ＳＫ番号	平面形態	断面形態	堆積状況	遺構測量図	遺物実測図	グリット
ＳＫV203	楕円形	逆台形	単一	○	○	C9
ＳＫV301	楕円形	逆台形	単一	○		D13
ＳＫV307	楕円形	擂鉢	単一			D13･14
ＳＫV308	円形	逆台形	単一			D14
ＳＫV405	長方形	逆台形	斜	○	○	C16･17
ＳＫV406	長方形	皿	単一	○		C17
ＳＫV410	不整楕円形	皿	単一			C16~D17
ＳＫV435	楕円形	皿	単一	○	○	D19
ＳＫV456	方形	皿	単一			C17
ＳＫV467	円形	逆台形	単一			D17



第160図　Ⅴ区〔弥生時代中期～後期〕遺構配置図

① 楕円形土坑

ＳＫＶ203（第161図）

第２地区中央部やや北東より、Ｃ９区に位置する。遺構の東半部はＳＫＶ214（土坑Ｄ）を切っている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.40m、短径1.18m、深さ28cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。壁体は、南東部が比較的緩やかに立ち上がる。基底面はやや凹凸がみられ、西側から東側に向けてやや傾斜なす。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は南東部の埋土上位にまとまって出土した。凹線文期の壺形土器の口縁部や、径５～10cm大の石が数点出土している。図化しうるものを３点掲載した。

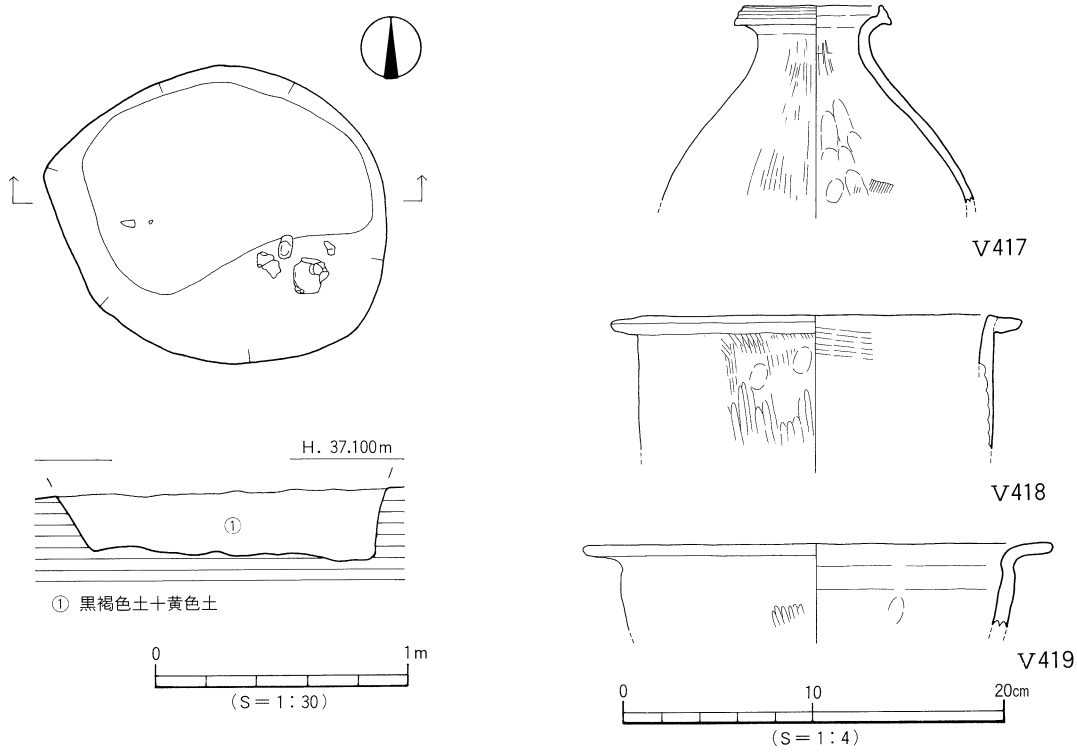
出土遺物

Ｖ417は壺形土器。口縁端部は上下方に拡張され、凹線文２条を施す。弥生時代中期後半。Ｖ418は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。Ｖ419は折り曲げ口縁の鉢形土器。弥生前期末～中期初頭。

時期：出土遺物には多少の時期差がみられるが、Ｖ417の壺形土器の形態より、ＳＫＶ203は弥生時代中期後半の遺構とする。

ＳＫＶ301（第162図）

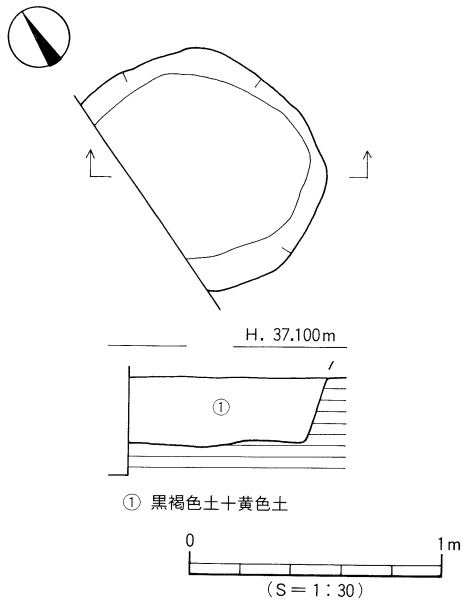
第３地区西壁中央部やや北寄り、Ｄ13区に位置する。遺構の東半部はＳＫＶ302（土坑Ｃ）、ＳＫＶ303（土坑Ｄ）をそれぞれ切っており、西側は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、規模は南北長0.90m、東西検出長1.0m、深さ26cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。



第161図　ＳＫＶ203測量図・出土遺物実測図

基底面は中央部がわずかに凹み、壁際との比高差は２㎝を測る。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。土坑内からは、弥生土器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

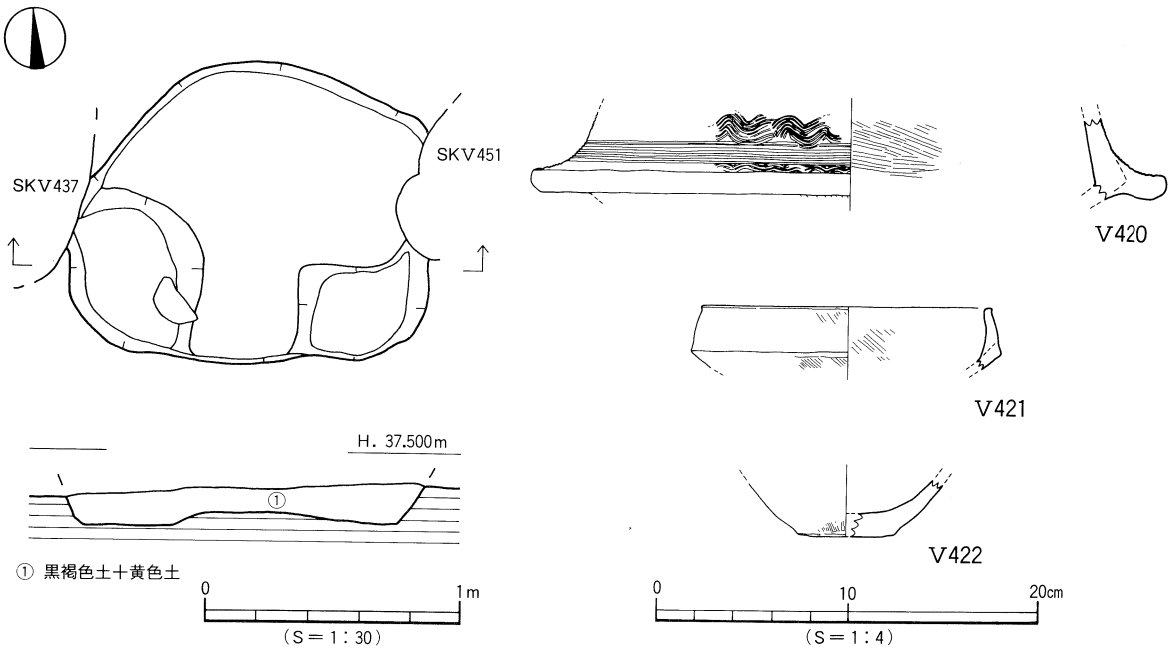
時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねるが、埋土や検出状況などから、ＳＫＶ301は弥生時代中～後期の遺構とする。



第162図　ＳＫＶ301測量図

ＳＫＶ435（第163図）

第４地区ほぼ中央部、D19区に位置する。遺構の西側はＳＫＶ437（土坑Ｃ）と重複し、東側はＳＫＶ451（古墳）に切られている。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、規模は東西検出長1.43ｍ、南北長1.22ｍ、深さ12㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、単一層で埋まる。南東部及び南西部にそれぞれピット状の凹みがみられる。埋土は土坑埋土と同様である。基底面はほぼ平坦であり、掘り方最終面は第Ⅶ層である。



第163図　ＳＫＶ435測量図・出土遺物実測図

遺物は埋土中にて弥生土器片が数点と、径10×20cm、厚さ５cm大の石が遺構南西部の埋土上面付近から出土した。図化しうるものを３点掲載した。

出土遺物

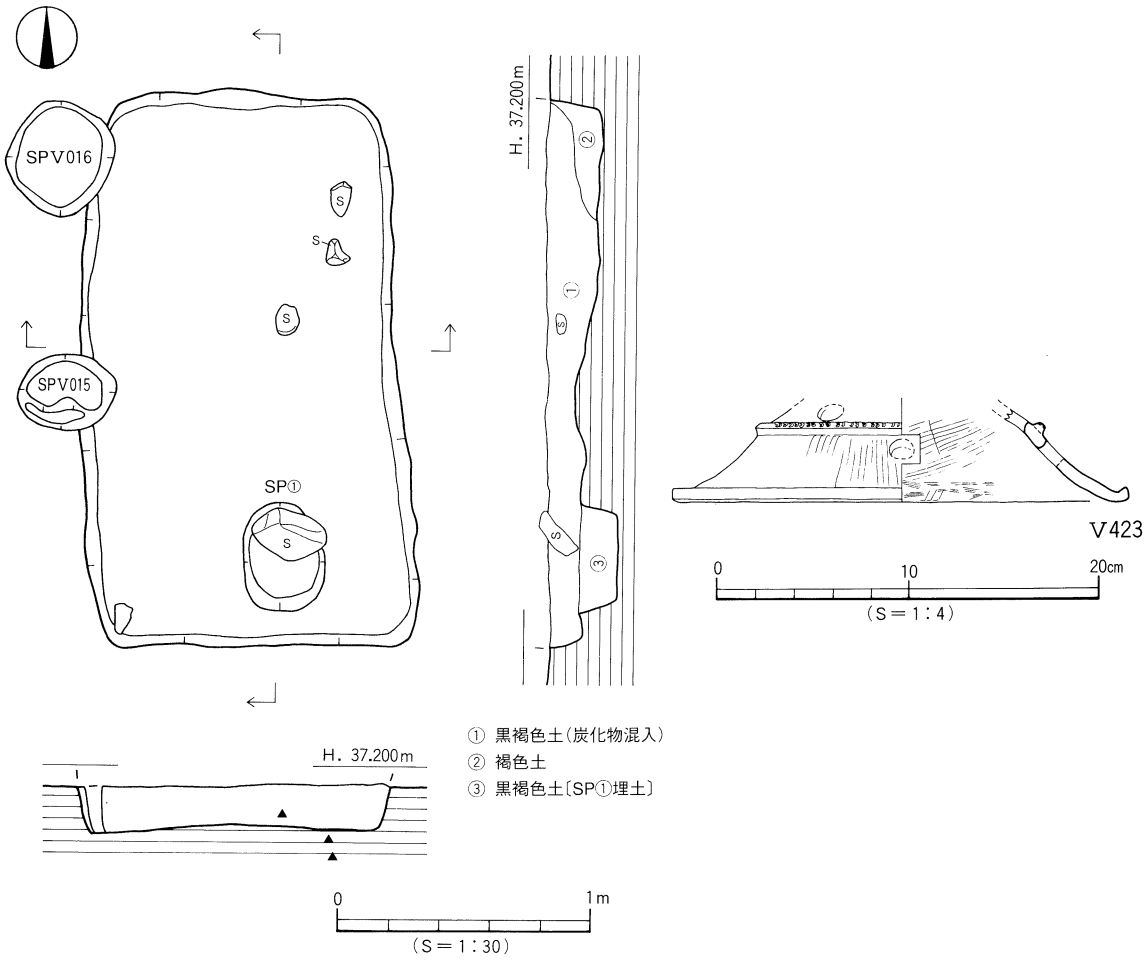
Ｖ420・421は複合口縁壺。Ｖ420は沈線文と波状文を施す。Ｖ422は壺形土器の底部で平底となる。

時期：出土した遺物が弥生時代後期後半の特徴を示している。よって、本土坑の時期も弥生時代後期後半とする。

② 長方形土坑

ＳＫＶ405（第164図）

第４地区南東隅、Ｃ16・17区に位置する。遺構の西壁はＳＰＶ015・016にそれぞれ切られている。平面形態は南側がやや幅広の長方形を呈し、規模は長さ2.26m、幅1.30m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、土坑の長軸方向はほぼ真北方向をなす。埋土は上下２層（①・②層）に分層され、②層は褐色（7.5ＹＲ4/3）土である。基底面は遺構中央部やや南寄りが高く、北側に向けて傾斜をなし、比高差は10cmを測る。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。南側基底面にて径30×45cm、深さ８cmの楕円形ピット（ＳＰ①）を検出した。ピット埋土は土坑埋土①層と同様である。



第164図　ＳＫＶ405測量図・出土遺物実測図

遺物は①層中より弥生土器片が数点出土したほか、北半部の基底面付近より径５～15cm、厚さ５cmの石が３点出土している。また、ＳＰ①内より径20～30cm、厚さ６cmの石が１点、埋土上位より出土した。土坑の形状や土坑内より石が出土していることから、土壙墓の可能性がある。

出土遺物

Ｖ423は高坏形土器。脚部は外反し、脚中位に凸帯を貼り付け、凸帯上に半截竹管文を施す。脚裾部に径1.4cm大の孔を２ヶ穿つ。

時期：出土した遺物が僅少で明確な時期判断はしかねる。Ｖ423が弥生時代後期後半の特徴を示していることから、本土坑の時期も弥生時代後期後半とする。

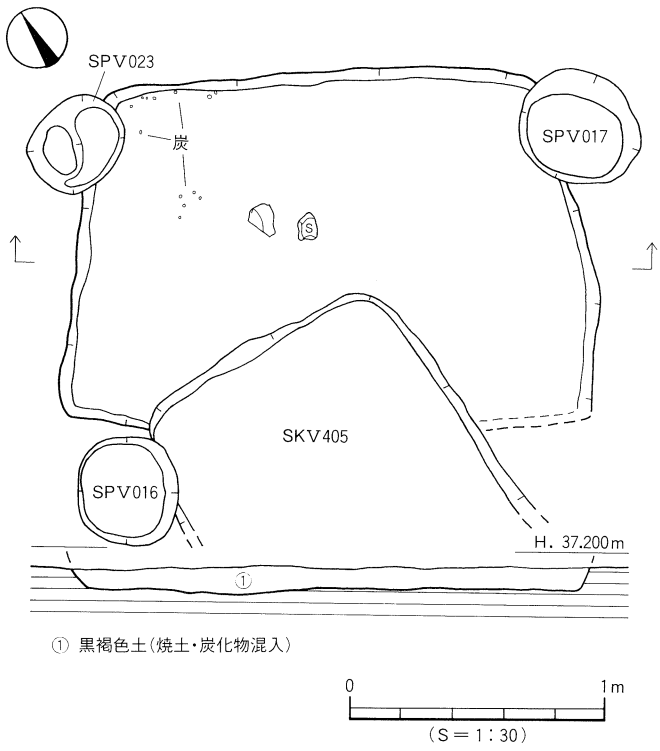
ＳＫＶ406（第165図）

第４地区南東隅、Ｃ17区に位置する。遺構の南壁はＳＫＶ405に、北西及び北東隅はそれぞれＳＰＶ023・017に切られている。平面形態は長方形を呈するものとみられ、規模は長さ2.00m、幅1.35m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、単一層で埋まる。土坑の長軸方向は真北より57°西に振っている。

基底面は中央部やや北西寄りがわずかに凹み、壁際との比高差は３cmを測る。掘り方最終面は第Ⅶ層である。遺構北西隅の埋土中にて、炭化物や焼土が点在して検出された。

遺物は、遺構中央部の埋土上位から少量の弥生土器片と、径10～15cm、厚さ５cmの石２点が出土した。弥生土器は小片のため図化しうるものはない。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。弥生時代後期後半のＳＫＶ405に切られることから、ＳＫＶ406は弥生時代後期後半以前の土坑となる。

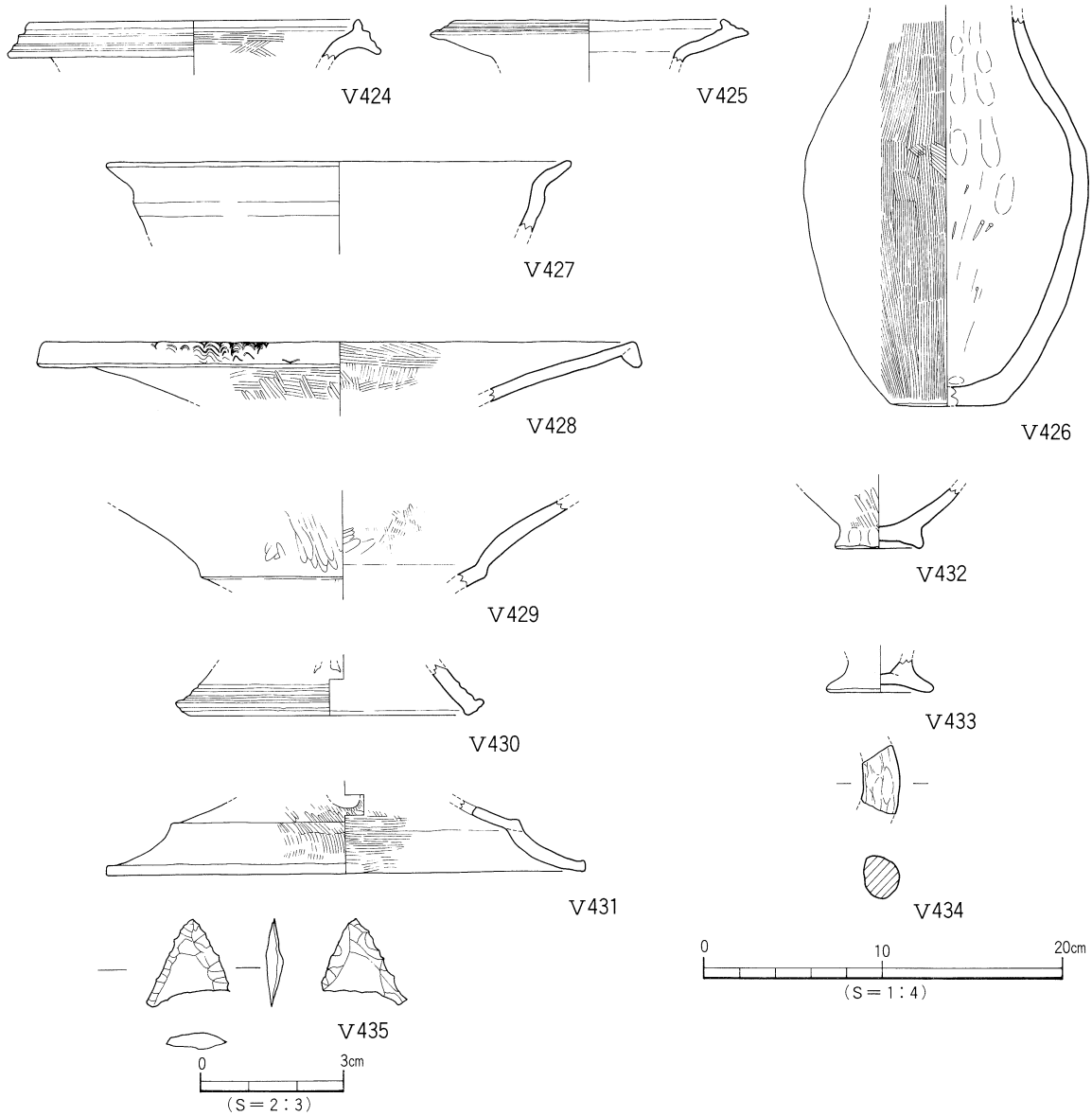


第165図　ＳＫＶ406測量図

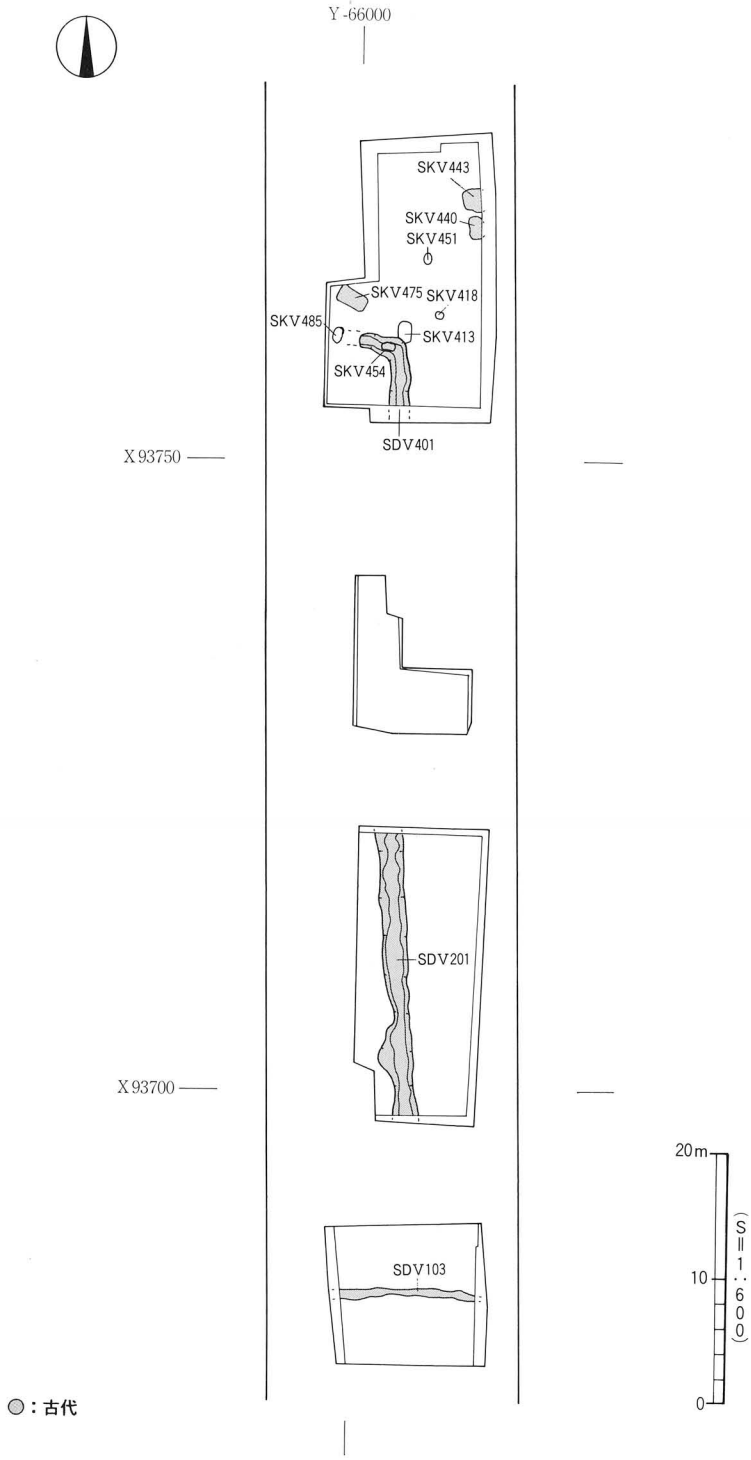
(2) 第Ⅴ層出土遺物（第166図）

Ⅴ区では、第Ⅴ層中より主に弥生時代中期～後期の遺物が出土した。第Ⅵ層と同様、発掘調査時はⅤ層とⅥ層の区別が難しく、遺物を誤って取り上げた可能性もある。本稿では調査時の状況を重視し、第Ⅴ層出土遺物として取り上げた遺物のうち15点を第166図に掲載している。

Ⅴ424～426は壺形土器。Ⅴ424・425は口縁端部を上下方に拡張し、凹線文を３条施す。弥生中期後半。Ⅴ426は壺形土器の胴～底部である。外面にハケメ調整を施す。弥生後期後半。Ⅴ427・432・433は鉢形土器。Ⅴ427は折り曲げにより口縁部を成形するもので、胴上位に沈線状の段をもつ。形態が在地のものとは異なるが、類例を求めることができない。外来系。Ⅴ432・433は底部片。上げ底となる。Ⅴ428～431は高坏形土器。Ⅴ428・429は同一個体とみられる。Ⅴ428は口縁端部が下方に垂下し、口縁端面に波状文を施す。弥生後期末。Ⅴ430は脚部に凹線文3条、脚端面に凹線文２条を施す。弥生中期後半。Ⅴ431は脚部片。屈曲部をもち、屈曲部よりやや上がる位置に径1.7㎝大の円孔１ヶ看取する。弥生後期後半。Ⅴ434はジョッキ形土器の把手。断面形態は楕円形となる。弥生中期中葉。Ⅴ435はサヌカイト製の凹基無茎石鏃である。基部の一部は欠損する。平面形態は正三角形状を呈する。



第166図　第Ⅴ層出土遺物実測図



第167図　V区〔古墳時代～古代〕遺構配置図

5．古墳時代～古代の遺構と遺物

Ｖ区では、古墳時代から古代までの遺構と遺物を多数検出した。

古代の遺構は、第１地区では溝１条（ＳＤＶ103）、第２地区では溝１条（ＳＤＶ201）、第４地区では溝１条（ＳＤＶ401）と土坑４基（ＳＫＶ440・443・454・485）を検出した。

古墳時代の遺構は、第４地区では土坑４基（ＳＫＶ413・418・451・475）を検出している。

遺物はこれらの遺構から出土したほか、第Ⅲ層及び第Ⅳ層中から６世紀から11世紀までの遺物が出土した。このうち、第１・２地区で検出した第Ⅲ層中からは、灰釉陶器や緑釉陶器が出土している。

(1) 溝

Ｖ区では、古代に時期比定される溝３条を検出した。このうち、第２地区で検出した溝ＳＤＶ201と第４地区で検出した溝ＳＤＶ401は埋土や形状、出土遺物が類似することから、同一の溝の可能性がある。なお、第２地区と第４地区の中間、第３地区ではこれらに該当する溝は検出されなかったが、重機で表土を掘削している最中に、二つの溝の延長箇所付近で、古代の遺物がまとまって出土している。

ＳＤＶ201（第168図、図版44・46）

第２地区中央部やや西寄り、Ｃ5～Ｄ10区に検出した南北方向に延びる溝である。第Ⅶ層上面での検出であるが、土層観察により第Ⅲ層上面から掘り込まれていたことを確認している。溝の北側は、弥生時代前期末～中期初頭の土坑６基（ＳＫＶ204・207・211～213・223）を切り、中央部では溝ＳＤＶ202、南側では溝ＳＤＶ203を切っている。また、溝北側の基底面からは、弥生時代前期末～中期初頭の土坑１基（ＳＫＶ222）を検出している。溝の北端及び南側はそれぞれ調査区外に続く。ただし、第２地区の南側、第１地区ではＳＤＶ201に対応する溝や遺物は検出されておらず、途中で消滅するか、もしくは屈曲しているものと推測される。

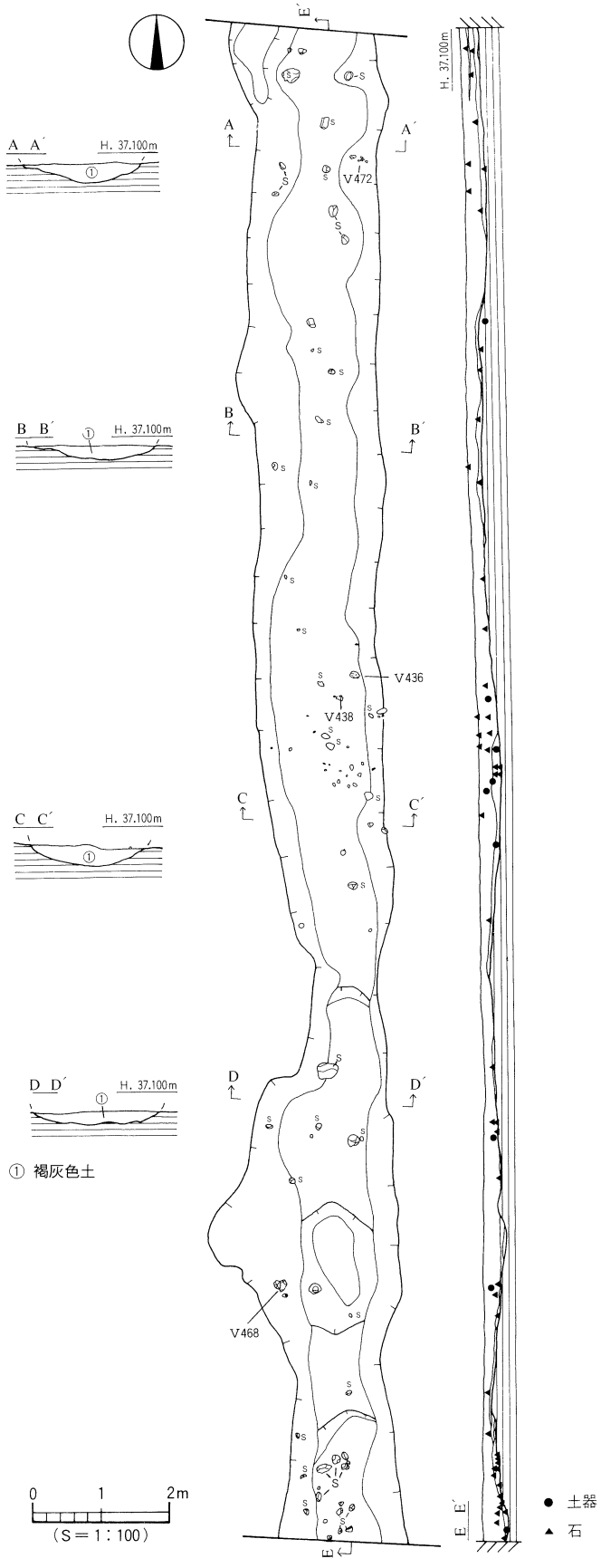
規模は検出長22.70m、最大幅2.80m、最小幅1.00m、深さは第Ⅶ層検出面下16～30cmを測る。断面形態は浅い「Ｕ」字状を呈し、埋土は褐灰色（10ＹＲ5/1）土単層である。溝は真北方向より４°西に方位を振っている。基底面は凹凸がみられ、溝の北側、Ｄ９区とＤ10区の境界付近、溝の中央部やや南寄り、Ｄ７区とＤ８区の境界付近及び、溝の南端、Ｄ６区とＤ７区の境界付近でやや溝底が高くなっている。溝の形状は北端、Ｄ11区と南側、Ｄ７区で溝幅がやや広くなり、壁体が緩やかに傾斜する箇所がみられる。

遺物は土師器と須恵器が出土し、径10～20cm大の石が埋土中及び基底面付近に散在していた。土製品は、７世紀中葉と８世紀中葉～後葉までに時期比定されるが、両者は混在して出土している。また、溝内からは弥生時代の遺物が出土したが、溝の北側基底面で検出した土坑（ＳＫＶ222）が存在するように、ＳＤＶ201以前に構築された遺構に帰属する遺物である。

土師器では坏蓋、坏、皿、高坏などが出土している。このなかには、赤色塗彩を施すもの２点（Ｖ462・463）や、暗文を施すもの11点（Ｖ451・452・454～459・464～466）が含まれ、暗文を施す土器には畿内産の土師器とみられるものが２点（Ｖ451・465）ある。なお、甕や鍋などの調理具は少ない。

須恵器では坏蓋や坏（身）が大半を占め、わずかに甕の口縁部片が数点出土している。また、硯（円面硯）の小片が１点出土している。

土師器や須恵器のほか、弥生土器や石器類も出土している。前述したように、これらの遺物は本来ＳＤＶ201に伴うものではないが、本稿では参考品としてＳＤＶ201出土遺物として取り扱っている。



第168図　ＳＤＶ201測量図

ＳＤＶ201出土遺物（第169～172図、図版50）

須恵器（Ｖ436～448）

Ｖ436～442は坏蓋である。つまみは扁平なもの（Ｖ436・440・442）、中央部が凹むもの（Ｖ437）、中央部が突出するもの（Ｖ438・439）がある。Ｖ441はつまみの有無は不明。口縁部は下方に垂下するもの（Ｖ436～438）、下外方に下がるもの（Ｖ441）がある。Ｖ442は天井部に径５～６㎜大の円孔が４ヶ穿たれる。Ｖ443～446は坏である。いずれも高台が付くもので、高台は短く外方に開くもの（Ｖ443～445）と、やや長く外方に開くもの（Ｖ446）とがある。Ｖ447は円面硯である。外提はわずかに上外方にのび、内堤は直立気味に立ち上がる。内堤端部は平坦面をなす。台脚部は、一部が残存するにすぎないが、スカシが看取される。小片。Ｖ448は甕である。緩やかに外反する口縁部は、口縁端部が外傾する。

土師器（Ｖ449～468）

Ｖ449～452は坏である。Ｖ450は口縁端部を丸くおさめ、端部内面に段をもつ。Ｖ451は底部内面に暗文がみられるもので、内面内側にはラセン文、外側には放射状暗文を施す。底部外面はヘラミガキ調整を施す。調整方法や暗文手法から畿内産土師器とみられるもので、平城Ⅰ式の坏Ａ形態に相当するものであろう。Ｖ452は底部内面にラセン状暗文が部分的にみられる。外面は回転ヘラケズリ調整を施す。

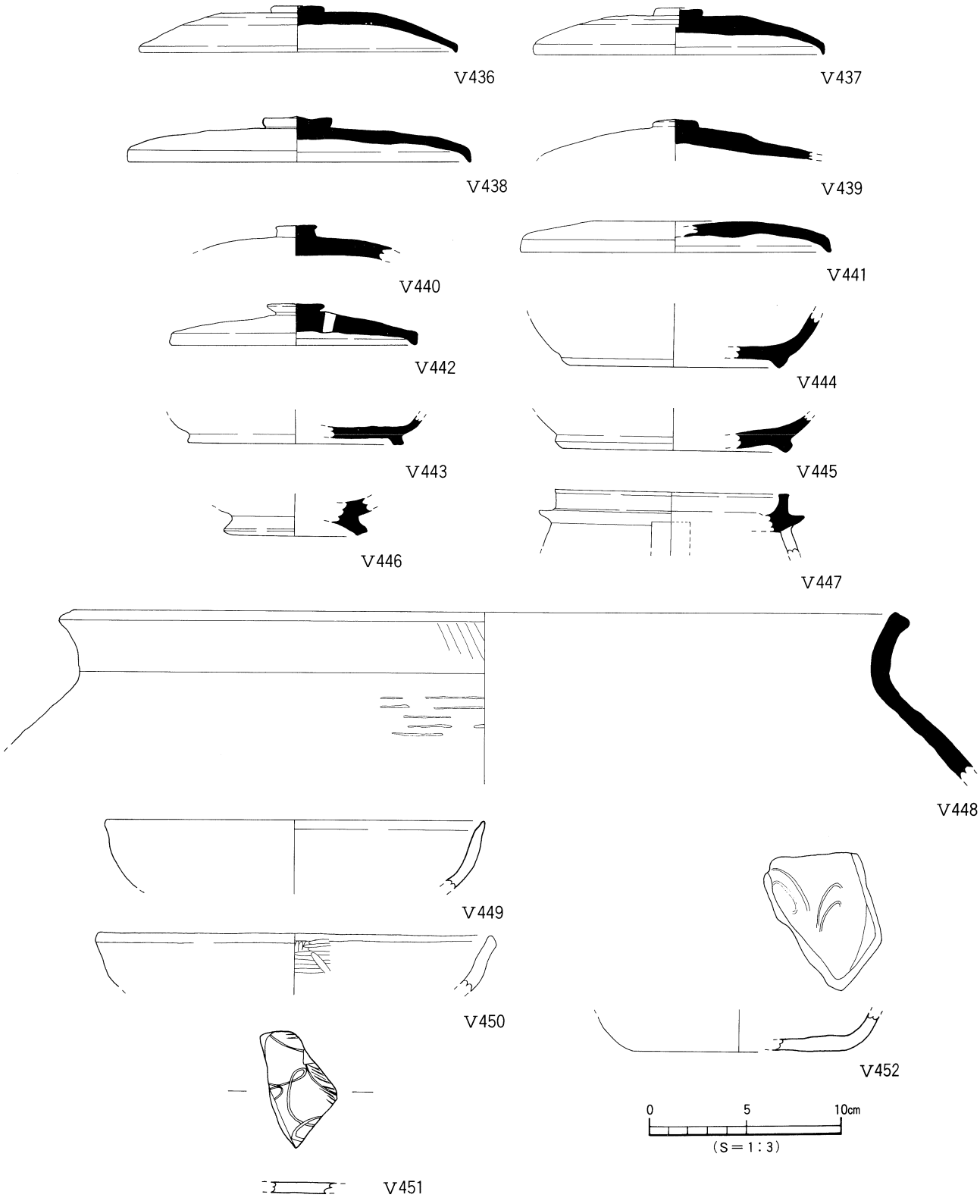
Ｖ453～460は高台の付く坏である。Ｖ457～460は底径が18㎝を越えるやや大型のもので、台付皿とも言えるが、ここでは坏として取り扱っている。このうち底部内面に暗文を施すものが６点ある。ラセン状の暗文１条を施すもの４点（Ｖ454～457）、２条施すもの２点（Ｖ458・459）がある。ただし、Ｖ457は浅い沈線状のもので、暗文と呼べるかはやや疑問が残る。高台はいずれも底体部境界付近に付く。「ハ」の字状に開くもの（Ｖ453～457・460）と、外方に屈曲するもの（Ｖ458・459）とがある。底部外面はいずれも回転ヘラケズリ調整を施す。体部外面はミガキ調整を施すもの（Ｖ453・454）と、ヨコナデ調整を施すもの（Ｖ455・456）とがある。色調は内外面共に赤味を帯びる茶褐色で、Ｖ457のみ乳黄色を呈する。

Ｖ461～463は皿である。Ｖ461・462は口縁部の残存状況と比較的高い高台をもつことから、台付皿と判断した。両者共に体部及び底部外面には、丁寧なヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。色調はすべて乳黄褐色を呈し、Ｖ462・463は赤色塗彩を施している。

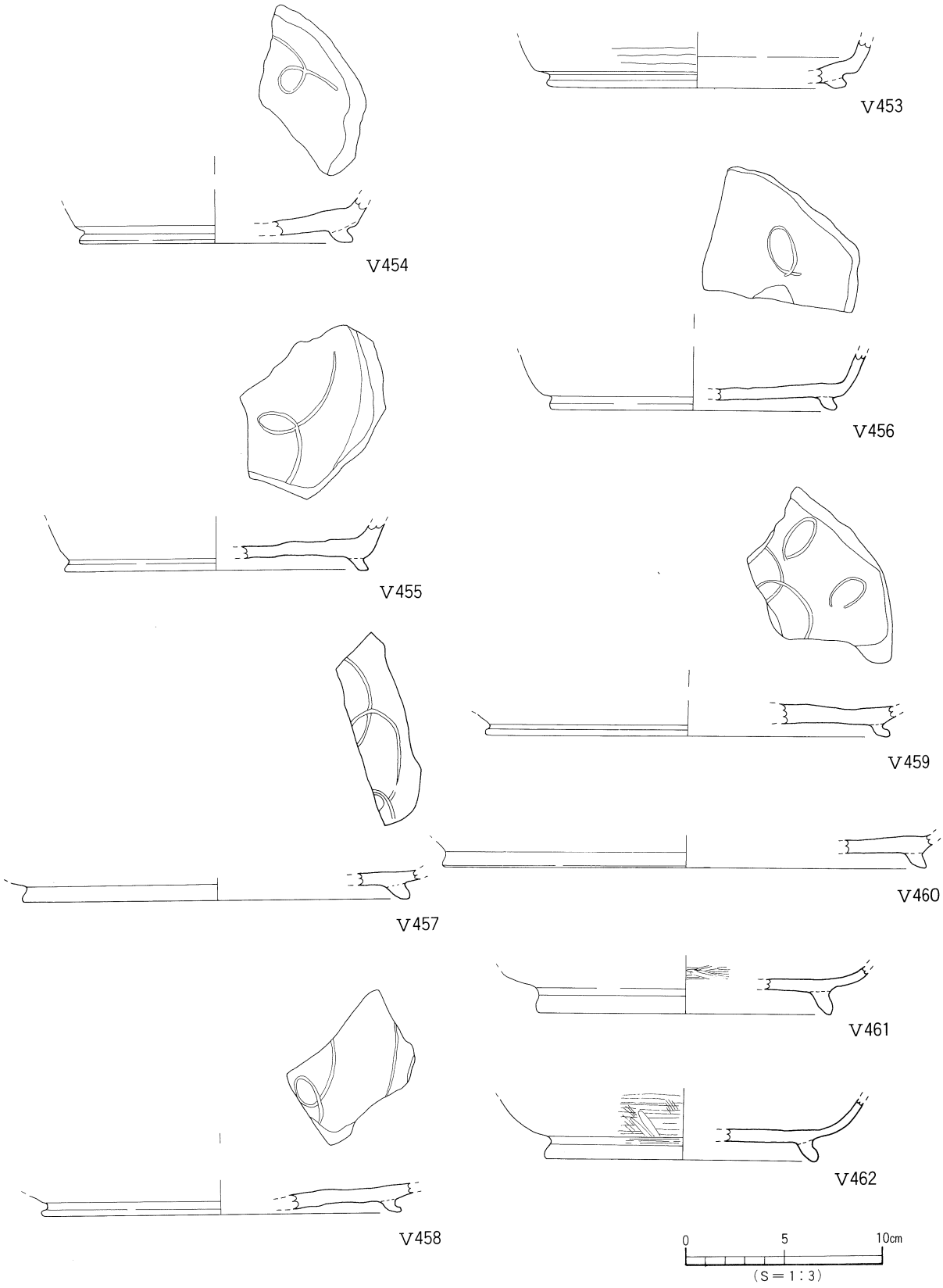
Ｖ464～466は高坏である。Ｖ464・465は坏部片で、口縁端部は丸くおさめ、口縁端部内面には段をもつ。Ｖ464は口縁端面がわずかながら面取りされる。Ｖ464の内面には斜格子状の暗文を施す。色調は乳橙色を呈する。Ｖ465は放射状暗文と連弧状暗文とが組み合うもので、外面にはヨコ方向のミガキ調整を施す。Ｖ465は、形態や暗文手法より、畿内産土師器とみられるもので平城Ⅲ式に相当するものであろう。Ｖ466は脚部片である。柱部はタテ方向に削られ、11面に面取りされる。各面の幅は0.9～1.5㎝と一定ではない。坏部内面には部分的にラセン状の暗文が看取される。色調は、坏部内外面及び柱部外面は乳黄色を呈するが、柱部内面は黒褐色を呈する。

Ｖ467は蓋である。口縁部は下方に垂下し、口縁端部は丸くおさめる。外面はヘラミガキ調整を施しているが、内面は磨滅のため不明である。

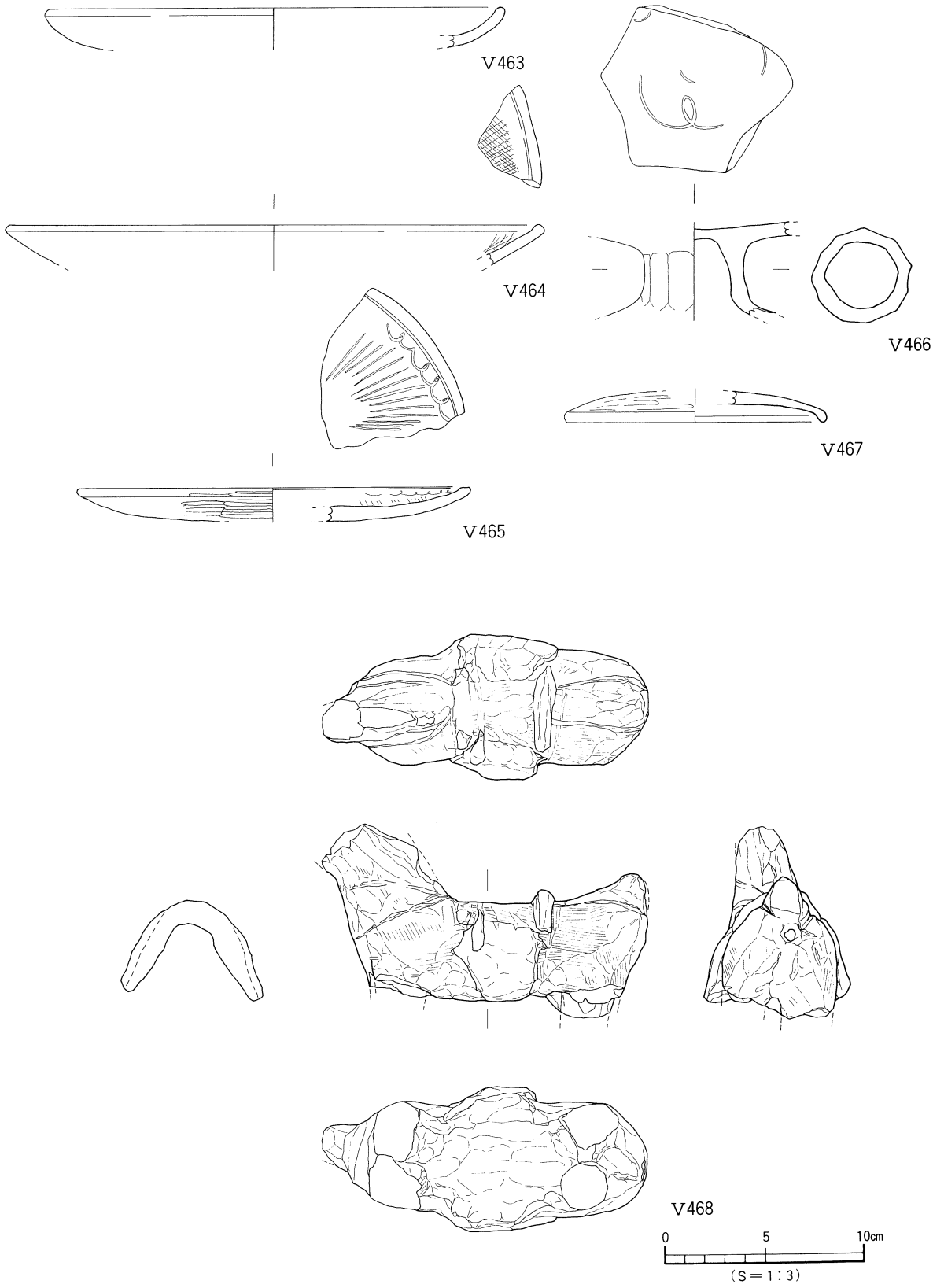
Ｖ468は土師質の土馬である。溝南西部の壁体基底面付近に横倒しの状態で出土した。残存長15.9㎝、残存高9.7㎝、胴部残存厚7.3㎝を測る。頭部、四脚及び尾を欠損する。胴部断面形態は半円形を



第169図　ＳＤＶ201出土遺物実測図(1)



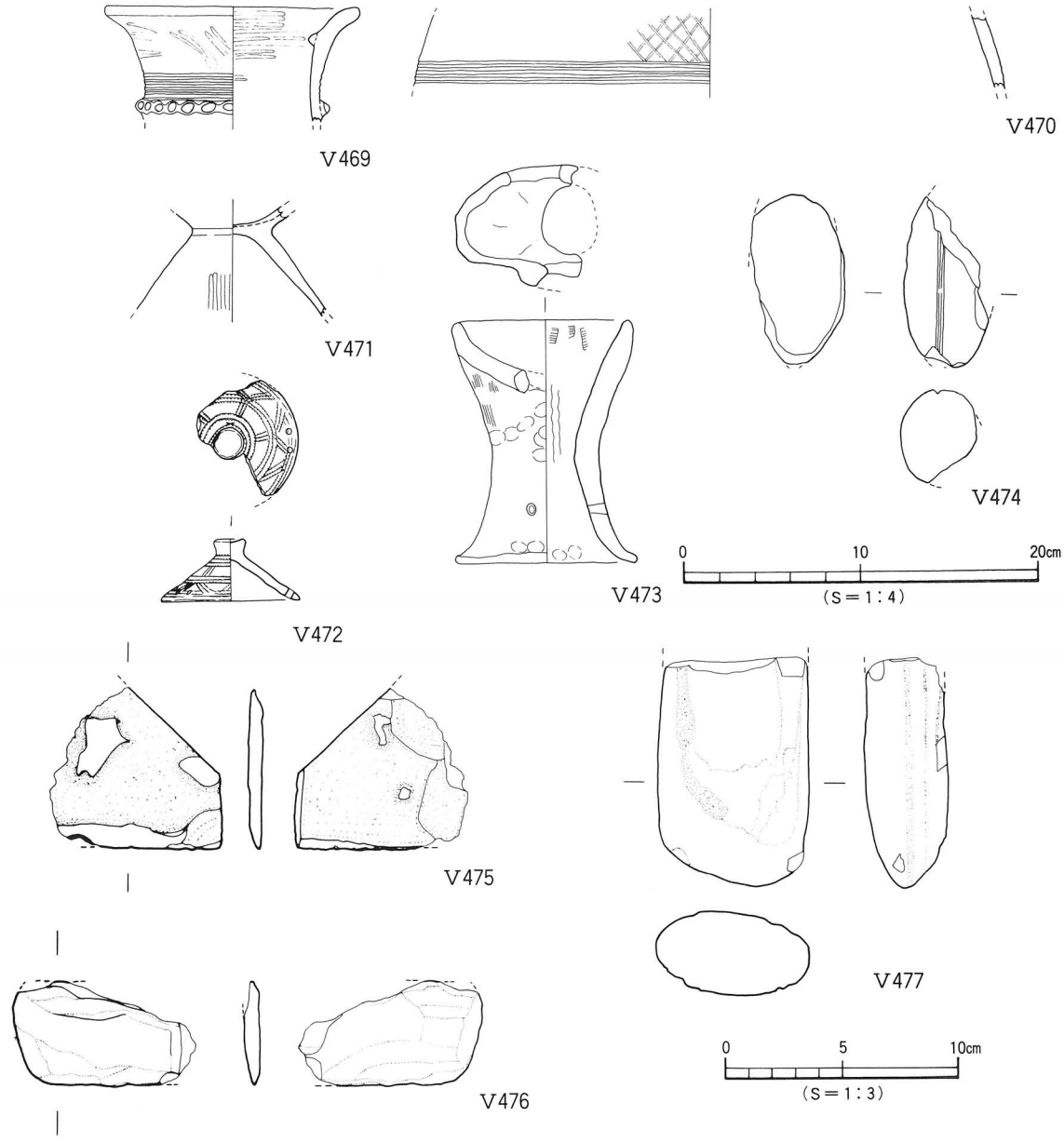
第170図　ＳＤＶ201出土遺物実測図(2)



第171図　ＳＤＶ201出土遺物実測図(3)

呈し、中空となる。色調は乳灰褐色を呈し、片側に黒斑が残る。胎土は１～３㎜大の石英や長石を比較的多く含む。たてがみ、手綱、胸繋、鞍、鞍橋、尾繋などを表現した飾馬である。たてがみと鞍橋は幅１㎝前後の粘土紐を貼り付けることで表現されている。また、鞍は幅４㎝前後の粘土を指オサエにより厚さ３㎜程度に貼り付けている。鞍の上面の片側には下膨らみの粘土紐、反対側には粘土紐を貼り付けた痕跡が残っており、鐙を表現したものかと思われる。手綱、胸繋、尾繋は幅２～３㎜の沈線により表現されている。手綱を表現する沈線は、胸繋や尾繋のものに比べ、幅がやや狭く、沈線の掘り込みもやや浅くなっている。尾部には直径６㎜大の孔が貫通し、肛門を表現しているものと考えられる。また、股間にわずかではあるが径２㎜大の孔があり、雌馬を表現したものと推測される。外面は鞍の部分を除き丁寧なナデで仕上げた後、ハケメ調整を施している。内面はナデ仕上げである。

時期：溝内から出土した遺物には多少の時期幅が認められる。少なくとも溝の埋没時期は、出土遺



第172図　ＳＤＶ201出土遺物実測図(4)

物より8世紀中葉～後半頃とする。

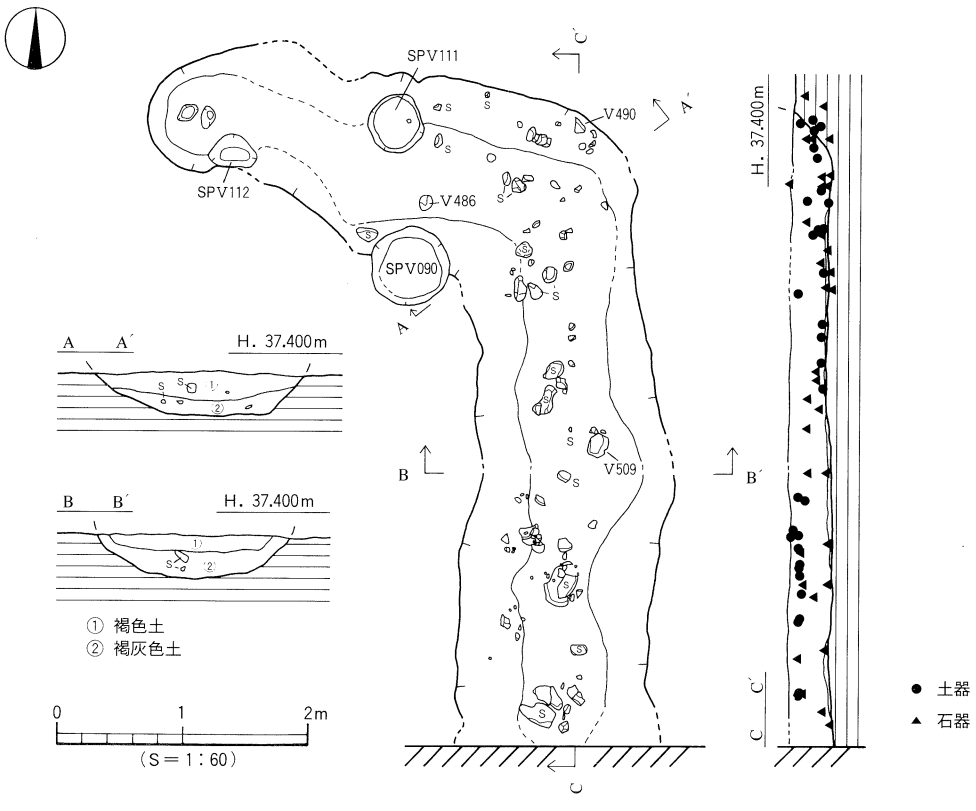
ＳＤＶ201出土の弥生土器・石器：ここでは、ＳＤＶ201出土の特徴ある弥生土器と石器を取り上げておく。

Ｖ469・470は壺形土器。Ｖ469は口縁部内面に凸帯を貼り付け、頸部に沈線文５条と凸帯文（指頭押圧）を施す。Ｖ470は胴部片で、斜格子目文と沈線文４条を施す。弥生前期。Ｖ471は高坏形土器の脚部片。弥生後期。Ｖ472は蓋形土器で、外面に貝殻腹縁によるタテ方向と、ヨコ方向の沈線文及び重孤文を施す。口縁端部付近には径３㎜大の円孔を２ヶ穿つ（焼成前穿孔）。弥生前期。Ｖ473は支脚形土器。受部は斜めにカットされ、脚部に径５㎜大の孔を穿つ（焼成前穿孔）。弥生後期。Ｖ474は長軸方向に幅４㎜大、深さ１㎜の溝をもつ有溝土錘。平面形態は楕円形を呈し、溝の断面形態は「Ｕ」字状である。

Ｖ475・476は石庖丁である。Ｖ475は刃部は直線的に作られ、上端部には礫面を残す。緑色片岩製。Ｖ476は石庖丁の未製品である。打裂が終了し、研磨に移行した段階のものである。打裂により剥離した面には研磨が及ばず、剥離面がそのまま残る。緑色片岩製。Ｖ477は伐採斧で、基部を欠損する。横断面形態は楕円形を呈する。緑色片岩製。

ＳＤＶ401（第173図、図版45・46）

第４地区南西部、Ｄ16・17区に位置する溝で、溝北側は「Ｌ」字状に屈曲する。第Ⅶ層上面の検出であるが、土層観察により第Ⅳ層上面から掘り込まれた溝であることを確認した。弥生時代前期末～



第173図　ＳＤＶ401測量図

中期初頭の土坑3基（ＳＫＶ411・469・486）、弥生時代後期の土坑1基（ＳＫＶ467）、古墳時代の土坑１基（ＳＫＶ413）を切り、３基のピットＳＰＶ090・111・112に切られている。溝の南端は調査区外に続く。溝の北端は途中で消失しているが、調査区西壁にＳＤＶ401の延長とみられる落ち込みがあり、調査区外に続くものと判断した。

規模は検出長7.80ｍ、最大幅1.60ｍ、最小幅1.40ｍ、深さ32～36㎝（第Ⅶ層検出面下）を測る。断面形態は「Ｕ」字状を呈する。埋土は上下２層（①・②層）に分層される。②層は第２地区ＳＤＶ201埋土と同様の褐灰色（10ＹＲ5/1）土である。このうち、①層は第Ⅳ層よりやや明るい褐色（7.5Ｙ4/1）土になる。基底面は北側から南側に向け、わずかに傾斜をなし、比高差は５㎝を測る。

遺物は、土師器と須恵器が埋土中にそれぞれ点在していた。このほか、径５～10㎝大の石と径20㎝大の石が数点出土している。

須恵器では坏蓋・坏（身）の出土が大半を占め、大甕の口縁部片が１点出土している。ただし、須恵器類はいずれも小片である。これら以外に、瓦質の甕の口縁部片が１点出土している。

土師器では坏蓋・坏・皿の出土が多く、鍋・甑がそれぞれ１点ずつある。このうちＳＤＶ201と同様に、赤色塗彩を施したものが７点（Ｖ494・495・497・498・500・502・503）出土している。特に、502の坏は外面が黒褐色を呈し、内面は他のものと異なり暗赤褐色を呈している。

ＳＤＶ401出土遺物（第174・175図、図版51）

須恵器（Ｖ478～490）

Ｖ478～485は坏蓋。Ｖ478は中央部が突出するつまみが付く。口縁部の形態は下内方に下がるもの（Ｖ478）、下方に垂下するもの（Ｖ479～482）、下外方に下がるもの（Ｖ483～485）がある。なお、Ｖ484・485は口縁端面が凹面をなす。Ｖ486～489は坏。Ｖ486は体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。高台は直立気味なもの（Ｖ486・487）と、やや外方に開くもの（Ｖ488・489）とがある。いずれも高台は底体部境界付近に付く。Ｖ490は甕である。口縁端部はやや内側に肥厚し、口縁端面はやや凹む。胴部外面に回転カキメ調整を施す。

瓦質土器（Ｖ491）

Ｖ491は瓦質の甕である。口縁部は中位付近でわずかに膨らみ、口縁端部は凹面をなす。

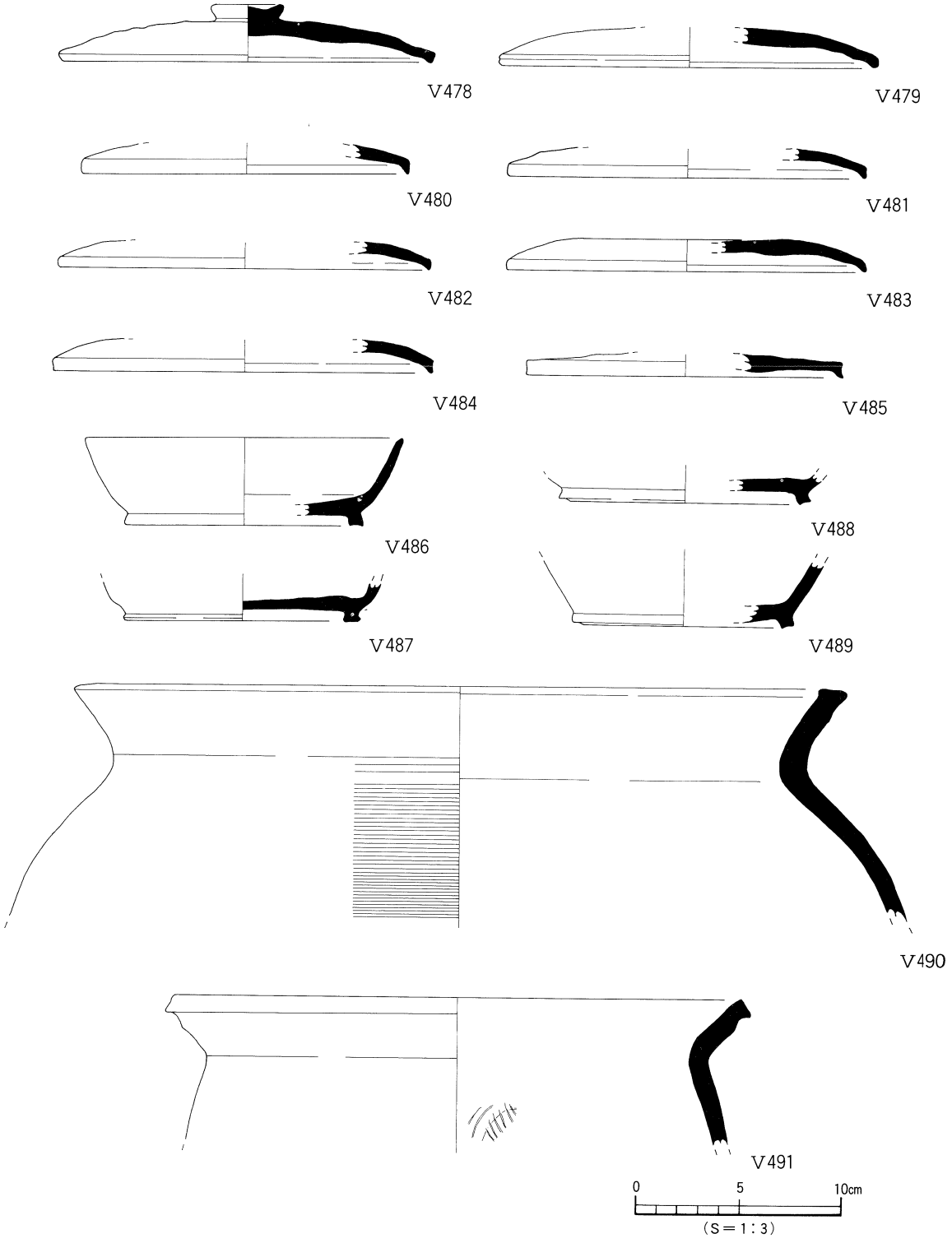
土師器（Ｖ492～510）

Ｖ492～494は坏蓋。Ｖ492は口縁部は下外方に下がり、口縁端面は凹面をなす。内外面共にミガキ調整を施す。Ｖ493・494は中央部が凹むつまみである。Ｖ495～504は坏。Ｖ495～500は無台、Ｖ501～504は高台の付く坏である。前者は口縁端部の形態が内傾するもの（Ｖ495）、丸くおさめるもの（Ｖ496）、内側に丸く巻き込むもの（Ｖ497～500）がある。なお、口縁内面に不明瞭な凹線状の凹みがみられるもの（Ｖ498・500）がある。調整方法は体部外面にミガキ調整を施すもの（Ｖ496・497）と、ヨコナデを施すもの（Ｖ498～500）とがある。後者の高台の付く坏は、高台が直立気味なもの（Ｖ504）と、やや外方に開くもの（Ｖ501～503）とがある。Ｖ501は口縁端部は内側に丸く巻き込む形状となる。調整方法は、底部外面に回転ヘラケズリ調整を施すもの（Ｖ504）と、ヨコナデ調整を施すもの（Ｖ501～503）とがある。

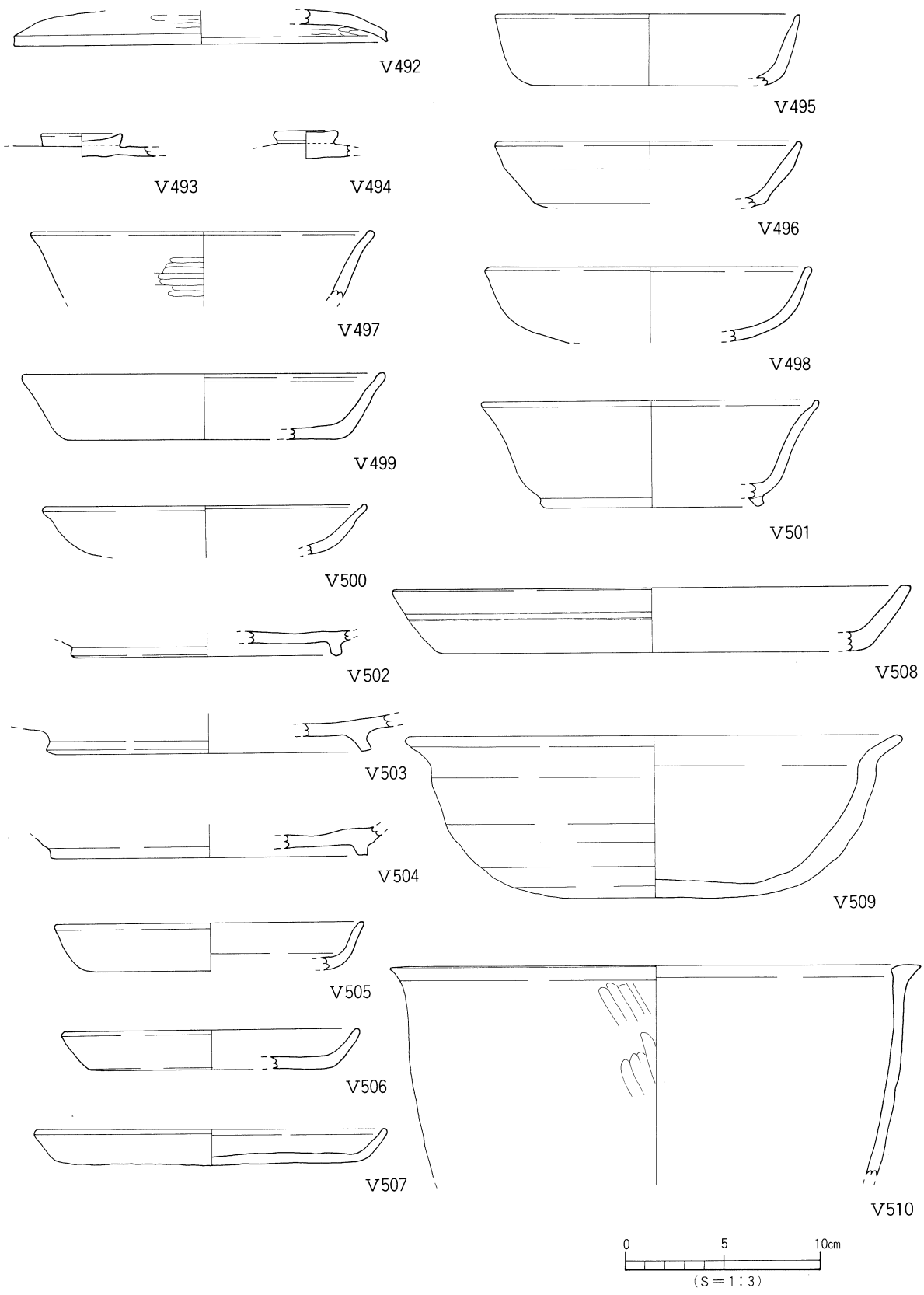
Ｖ505～508は皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、Ｖ505のみ口縁部がやや外反する。口縁端部は丸く仕上げるもの（Ｖ505・506）、内側にやや巻き込むもの（Ｖ507）、外傾するもの（Ｖ508）がある。Ｖ507の底部外面に回転ヘラケズリ調整がみられる。Ｖ509は鍋。口縁部は緩やかに外反し、口

縁内面に弱い稜をもつ。底部は平底で、外面に回転ヘラケズリ調整を施す。V510は甑か？。口縁端部はやや内側に肥厚する。口縁外面にはミガキ調整を施す。

時期：ＳＤＶ201と同様に、出土した遺物には多少の時期幅が認められる。ＳＤＶ201と同じく、8世紀中葉～後半頃までに埋没した溝である。



第174図　ＳＤＶ401出土遺物実測図(1)

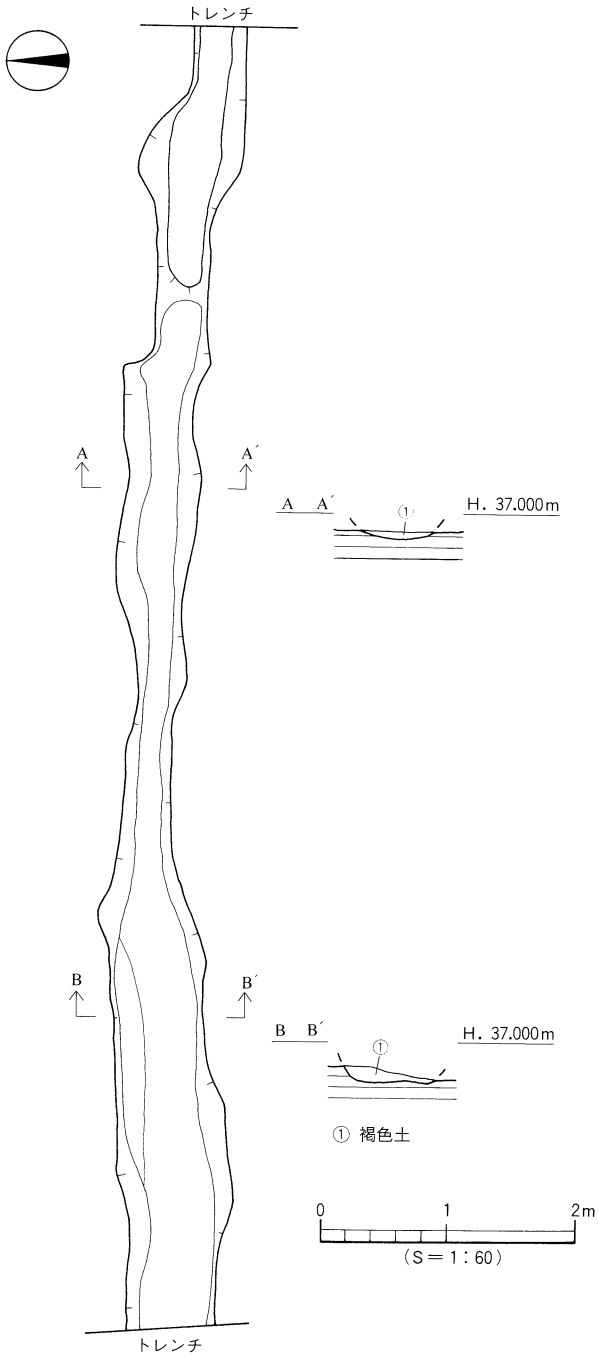


第175図　ＳＤＶ401出土遺物実測図(2)

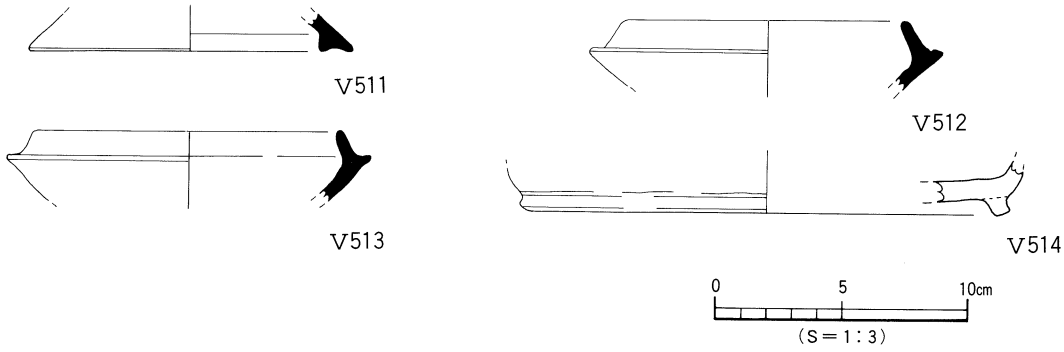
ＳＤＶ103（第176図）

第１地区中央部南寄り、Ｃ～Ｅ２区に検出した東西方向に延びる溝である。第Ⅲ層掘り下げ中に検出した。溝の東及び西端は調査区外に続く。規模は検出長10.38ｍ、最大幅0.90ｍ、最小幅0.30ｍ、深さは検出面下６～10㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色（5Ｙ4/6）土単層である。基底面は平坦で、比高差はほとんどない。

遺物は埋土中より、土師器と須恵器の小片が数点出土した。このうち図化しうるものを４点第177図に掲載した。



第176図　ＳＤＶ103測量図



第177図　ＳＤＶ103出土遺物実測図

出土遺物（第177図）

Ｖ511は須恵器坏蓋。身受けのかえりをもつもので、端部は尖る。Ｖ512・513は須恵器坏身。たちあがりは内傾し、端部は丸くおさめる。Ｖ514は土師器の坏。高台は体底部境界付近に付き、やや外方に開き、内端面で接地する。

時期：出土した遺物には多少の時期差が認められる。Ｖ514の特徴より、ＳＤＶ103は８世紀代に埋没した溝とする。

(2) 土　　坑

Ｖ区で検出した古墳時代から古代までの土坑は８基である。いずれも第４地区で検出した。このうち、古墳時代は４基（ＳＫＶ413・418・451・475）、古代は４基（ＳＫＶ440・443・454・485）となる。埋土は、古墳時代の土坑が灰黄褐色（10ＹＲ4/2）土で、古代の土坑は褐色（10ＹＲ4/6）土である。

ＳＫＶ418（第178図）

第４地区中央部南東より、Ｃ18区に位置する。遺構の南側はＳＫＶ417（土坑Ａ）を切っている。平面形態は南東部がやや突出する不整の楕円形を呈し、規模は長径0.70ｍ、短径0.55ｍ、深さ40㎝を測る。断面形態はやや舟底状を呈し、単一層で埋まる。基底面は北側から南側に向けて傾斜をなす（比高差20㎝）。掘り方最終面は第Ⅶ層である。

遺物は埋土中より、土師器と須恵器の小片が数点出土した。

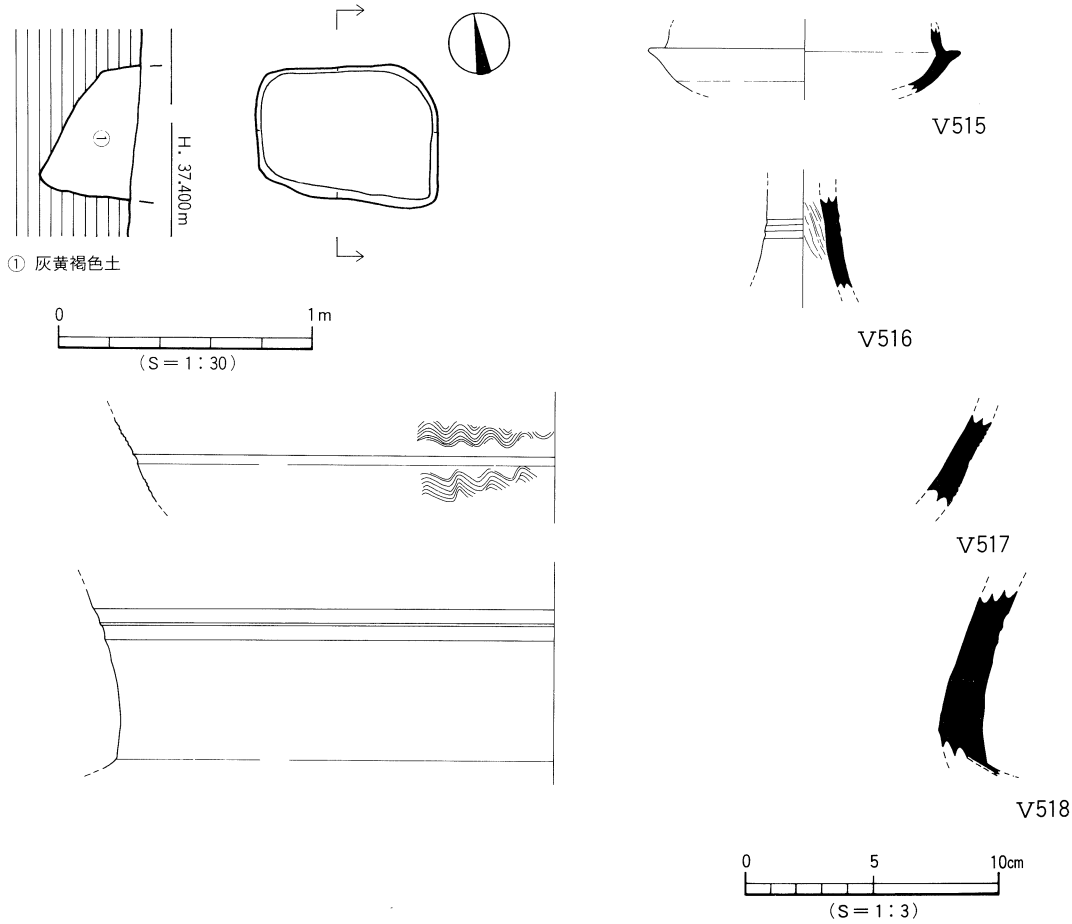
出土遺物

Ｖ515は須恵器坏身片で、たちあがり端部は欠損する。Ｖ516は須恵器高坏の脚部片で、中位に沈線３条を施す。外面に自然釉が付着する。Ｖ517・518は須恵器甕で、Ｖ517には頸部に沈線文と波状文、Ｖ518には沈線文を施す。

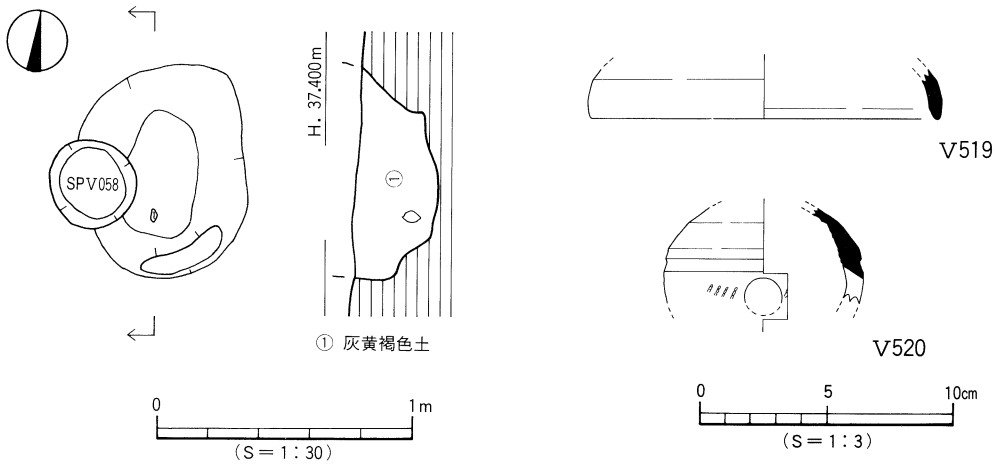
時期：出土遺物が僅少で、明確な時期判断しかねるが、埋土と遺物の特徴より、ＳＫＶ418は古墳時代後期、６～７世紀代の遺構とする。

ＳＫＶ451（第179図）

第４地区ほぼ中央部、Ｃ19区に位置する。遺構の西側はＳＰＶ058に切られている。平面形態は不整の楕円形を呈し、規模は長径0.88ｍ、短径0.66ｍ、深さ0.32㎝を測る。断面形態は舟底状を呈し、単一層で埋まる。南側壁体には幅10㎝前後のテラス状の平坦面をもつ。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。遺物は埋土中位付近より、須恵器片が数点出土した。図化しうるもの２点を掲載した。



第178図　ＳＫＶ418測量図・出土遺物実測図



第179図　ＳＫＶ451測量図・出土遺物実測図

出土遺物

Ｖ519は須恵器坏蓋片である。口縁部の小片で天井部と口縁部を分ける稜は消失している。Ｖ520は須恵器甕の胴部小片で、胴中位に径1.2～1.3cm大の円孔を穿つ。胴上位には沈線１条、胴中位には刺突列点文を施す。

時期：出土した遺物がわずかで、明確な時期判断はしかねるが、埋土と遺物の特徴より、ＳＫＶ451は古墳時代後期、６～７世紀代の遺構とする。

ＳＫＶ413（第180図）

第４地区中央部南寄り、Ｄ17・18区に位置する。遺構の南西隅は溝ＳＤＶ401に切られている。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.55m、幅1.14m、深さ16cmを測る。断面形態は皿状を呈し、単一層で埋まる。基底面は遺構中央部がやや凹み、壁際との比高差は３cmを測る。土坑の掘り方最終面は第Ⅶ層である。遺物は埋土中にて、土師器と須恵器の小片が数点と、基底面付近より径８cm大の石が２点出土した。図化しうる遺物はない。

時期：出土遺物の特徴や、土坑埋土及びＳＤＶ201（８世紀中～後半）に切られていることから、ＳＫＶ413は古墳時代後期、６～７世紀代の遺構とする。

ＳＫＶ475（第181図）

第４地区中央部西寄り、Ｄ・Ｅ18区に位置する。遺構の東壁はＳＰＶ160、南壁はＳＰＶ159及びＳＰＶ170、北西隅はＳＰＶ166にそれぞれ切られている。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.60m、幅1.60m、深さ50cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は上下２層（①・②層）に分層され、②層は①層に比べ黄色土がブロック状に混入するものである。掘り方最終面は第Ⅶ層である。基底面は遺構中央やや南寄りがやや凹み、壁際との比高差６cmを測る。基底面にて４基の小ピット（ＳＰ①～④）を検出した。径15～40cmを測る楕円形状のピットで、深さは３～５cmを測る。埋土はいずれも灰黄褐色（10ＹＲ4/6）土である。このうちＳＰ②は柱痕らしきものを検出している。

遺物は埋土中にて、土師器と須恵器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土した遺物は僅少で、時期決定はしかねる。土坑埋土や出土した遺物より、ＳＫＶ475は古墳時代後期、６～７世紀代の遺構とする。

ＳＫＶ440（第182図）

第４地区東壁中央部やや北寄り、Ｃ19区に位置する。土坑の西側はＳＰＶ081に切られ、東側は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈し、規模は南北長2.20m、東西検出長0.96m、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、褐色土の単一層で埋まる。掘り方最終面は第Ⅷ層に及ぶ。

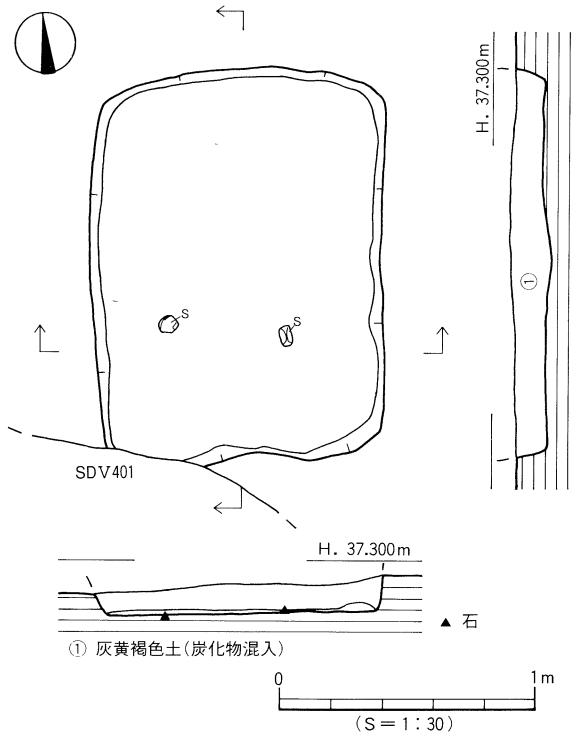
基底面は西側から東側に向けて緩やかに傾斜をなし、壁際と基底面中央部との比高差は15cmを測る。

遺物は埋土中にて土師器と須恵器の小片が数点出土した。図化しうるものを２点掲載している。

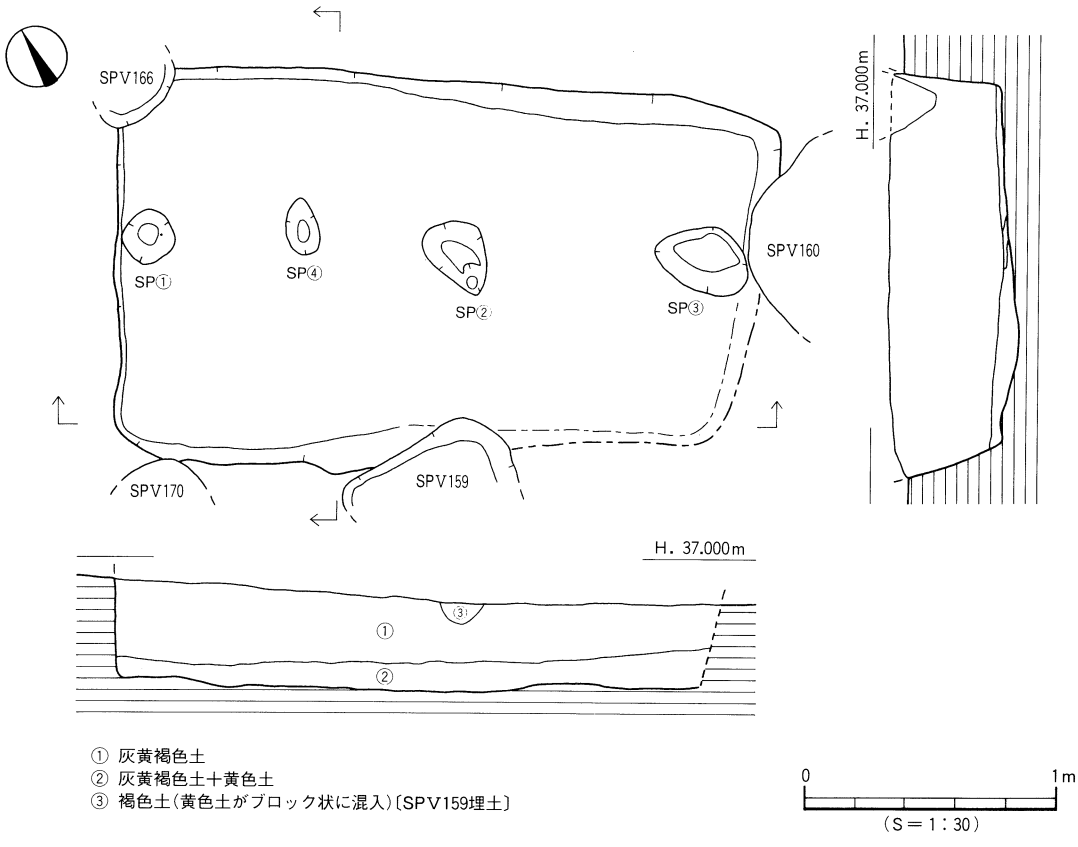
出土遺物

Ｖ521は須恵器坏で、口縁端部は段をなしてやや内方に屈曲する。Ｖ522は土師器の坏で、赤色塗彩を施している。高台は「ハ」の字状で、高台接地面はやや凹む。底部外面は回転ヘラケズリを施す。

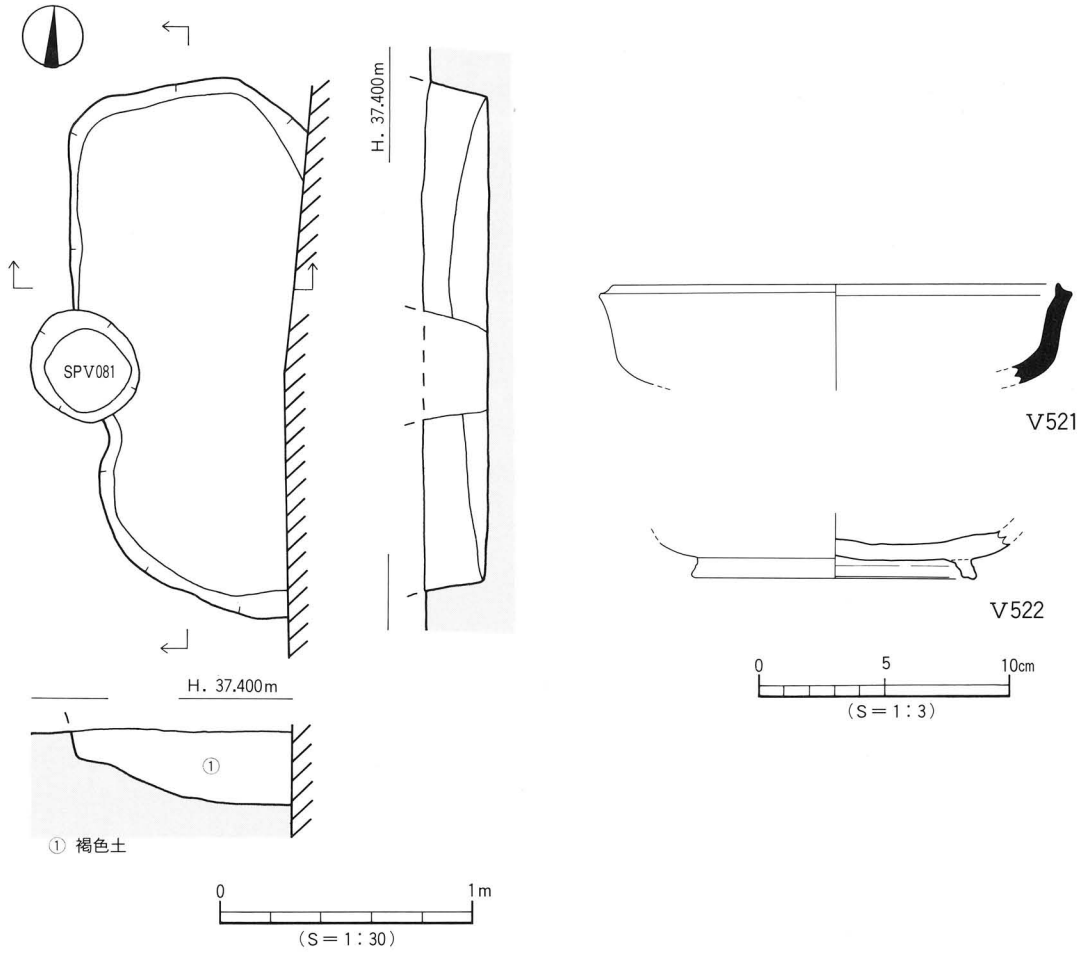
時期：出土した遺物の特徴より、ＳＫＶ440は８世紀前半頃の遺構とする。



第180図　ＳＫＶ413測量図



第181図　ＳＫＶ475測量図



第182図　ＳＫＶ440測量図・出土遺物実測図

ＳＫＶ443（第183図）

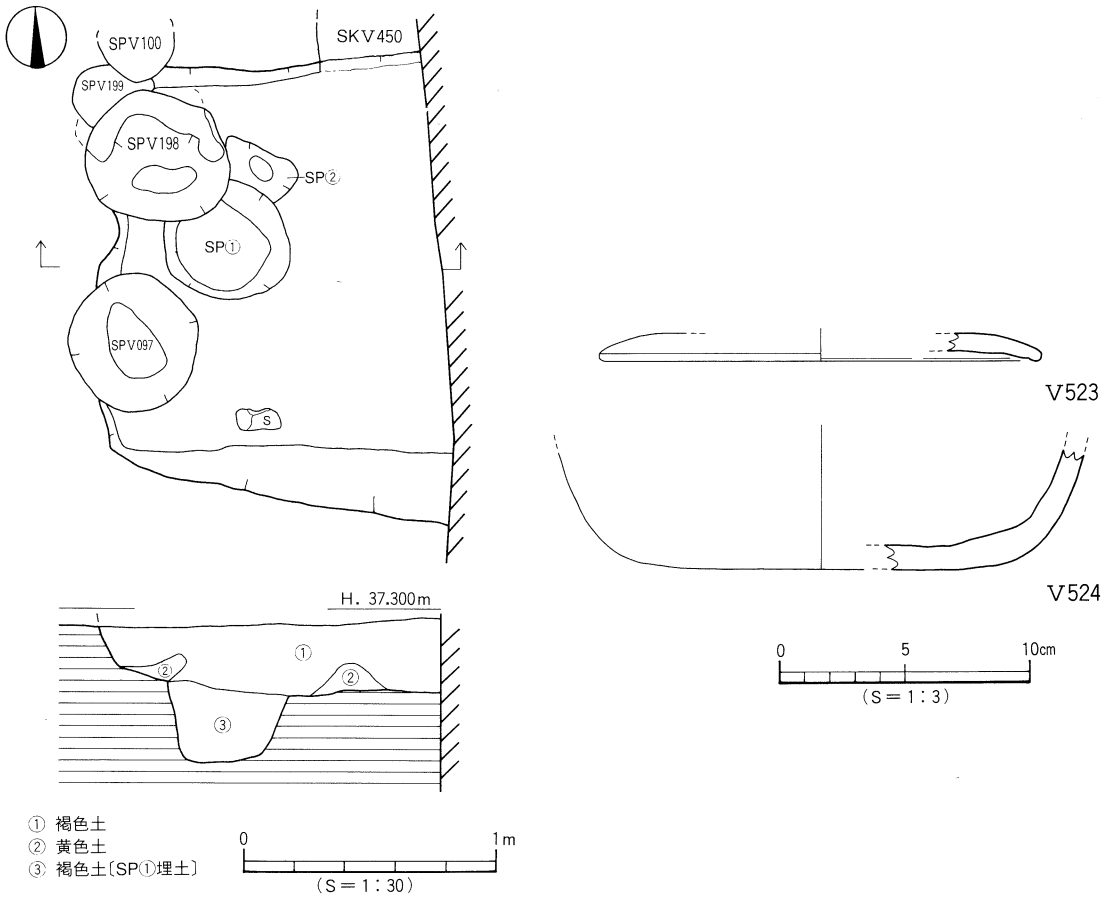
第４地区東壁中央北寄り、Ｃ20区に位置する。土坑北側はＳＫＶ450（土坑Ｄ）を切り、西側は４基のピット（ＳＰＶ097・100・198・199）に切られている。東側は調査区外に続く。平面形態は方形を呈するものとみられ、規模は南北長1.90ｍ、東西検出長1.38ｍ、深さは50㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、南側壁体は比較的緩やかに立ち上がる。埋土中に黄色土がブロック状に混入する。基底面は遺構南東部が低く、壁際との比高差は８㎝を測る。基底面にて径50㎝前後の楕円形ピット（ＳＰ①）と不定形状ピット（ＳＰ②）を検出した。ピット埋土は褐色（5Ｙ4/6）土である。

遺物は埋土中にて、土師器片が数点出土したほか、南側基底面付近から径10×20㎝、厚さ５㎝の長方形状の石が1点出土している。図化しうるものを２点掲載した。

出土遺物

Ｖ523は土師器の蓋であり、赤色塗彩を施している。口縁部はやや内方に屈曲し、口縁端部は丸く仕上げる。天井部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。Ｖ524は土師器の鍋である。底部は平底で、外面には回転ヘラケズリ調整を施す。

時期：出土した遺物の特徴より、ＳＫＶ443は８世紀代の遺構とする。



第183図　ＳＫＶ443測量図・出土遺物実測図

(3) 包含層出土遺物

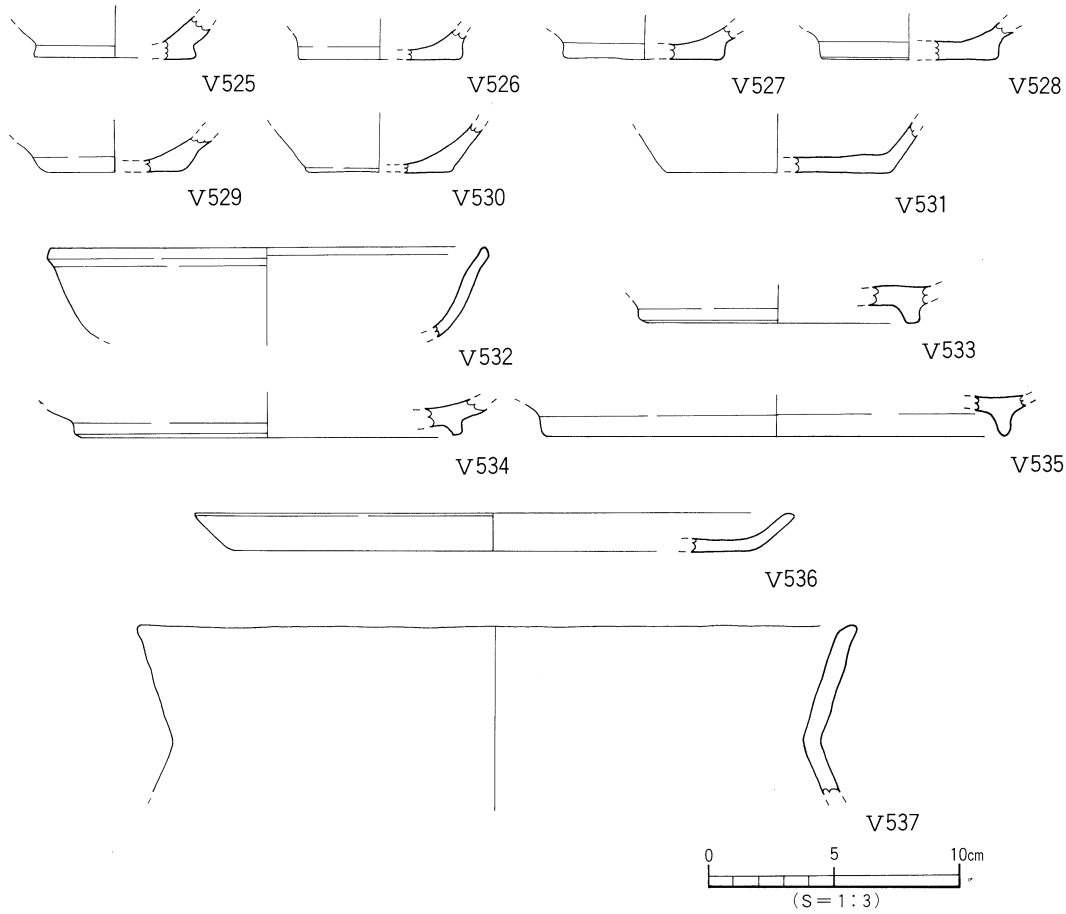
Ｖ区では、第Ⅲ層及び第Ⅳ層中より、古墳時代から古代の遺物が出土した。第Ⅲ層中からは主に古代、第Ⅳ層中からは古墳時代の遺物が出土している。このうち、第Ⅲ層中からは、灰釉陶器と緑釉陶器が出土している。緑釉陶器は４点出土したが、１点のみを図化し、残りの３点は写真図版に掲載した（巻頭図版３、Ａ・Ｂ・Ｃ）。

１）第Ⅲ層出土遺物（第184・185図－Ｖ525～544、図版52）

Ｖ525～544は第１地区出土品である。

土師器（Ｖ525～537）：Ｖ525～535は坏である。Ｖ525～531は平安時代中期以降に時期比定されるものである。Ｖ525～529は円盤高台を有する坏の底部である。高台は張り出し気味に突出するもの（Ｖ525・526）、直下に突出するもの（Ｖ527・528）、窄まりながら突出するもの（Ｖ529）がある。底部の切り離しは、いずれも磨滅のため不明である。Ｖ530・531は平底の底部である。

Ｖ532～537は奈良時代に時期比定されるものである。Ｖ532～535は坏で、Ｖ532は口縁端部を内側に小さく巻き込む。Ｖ533～535は高台の付く坏。口縁部は欠損するが、高台は底体部境付近に付く。



第184図　第Ⅲ層出土遺物実測図(1)

V536は皿で、口縁端部は内傾気味に丸くおさめる。V537は甕で、口縁部は「く」の字状にやや内湾し、口縁端部は内傾する。

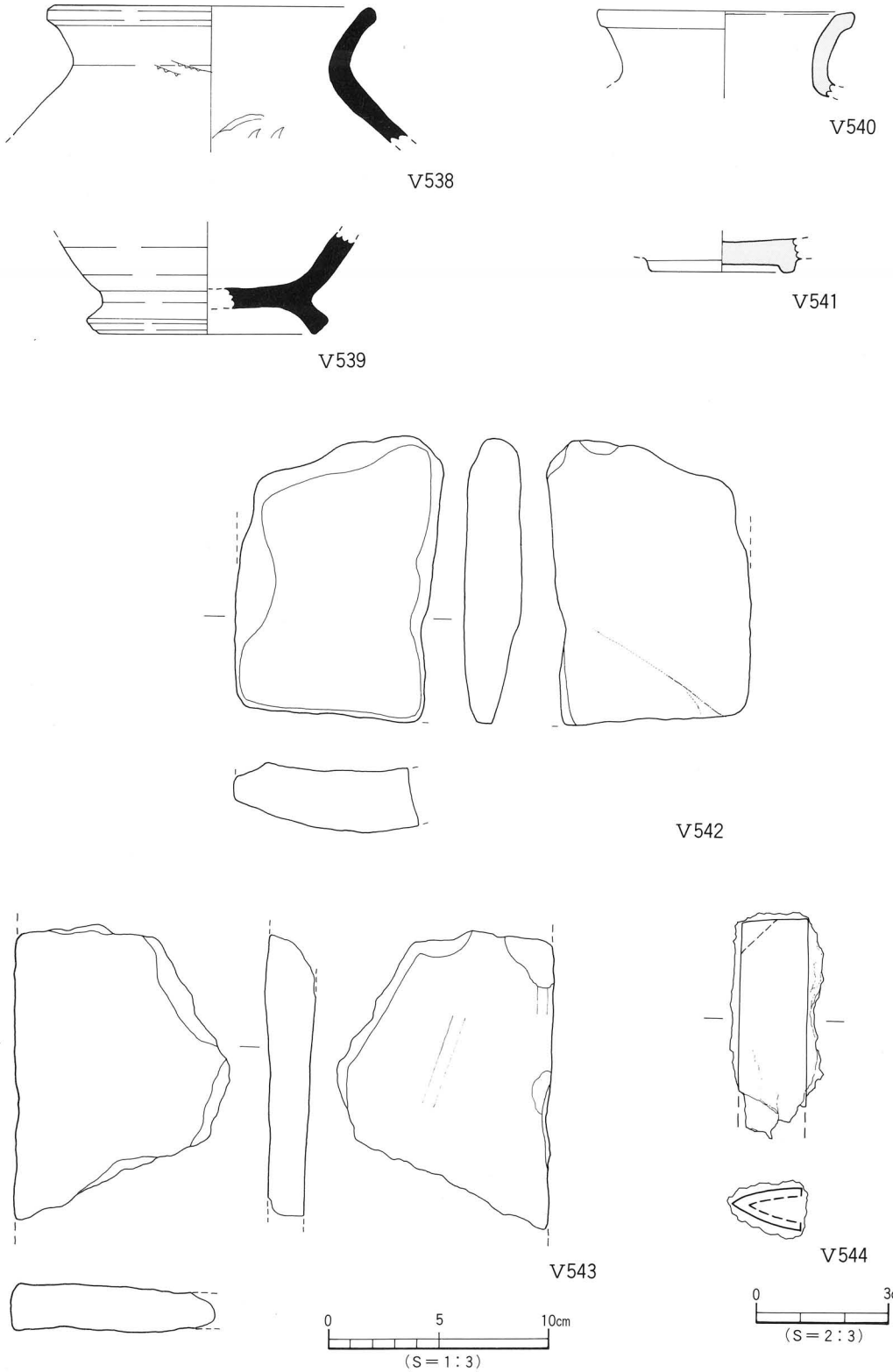
須恵器（V538・539）：V538・539は壺である。V539は脚付壺の底部で、高台は「ハ」の字に開き、内端面で接地する。

灰釉陶器（V540）：V540は灰釉陶器の壺である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部内面はわずかに凹む。色調は灰白色を呈し、胎土はややザラザラ感のある粗いものである。9世紀後半。

緑釉陶器（V541）：V541は緑釉陶器の椀の底部である。削り出しによる低い高台をもつ。胎土は灰色の硬質のもので、釉調は深緑色を呈する。京都産。9世紀後半。

瓦（V542・543）：V542・543は平瓦である。V542は凹面に細縄のタタキを施すものである。V543は磨滅のため不明。凹面はV543はナデを施すが、V542は磨滅のため不明である。平安時代。

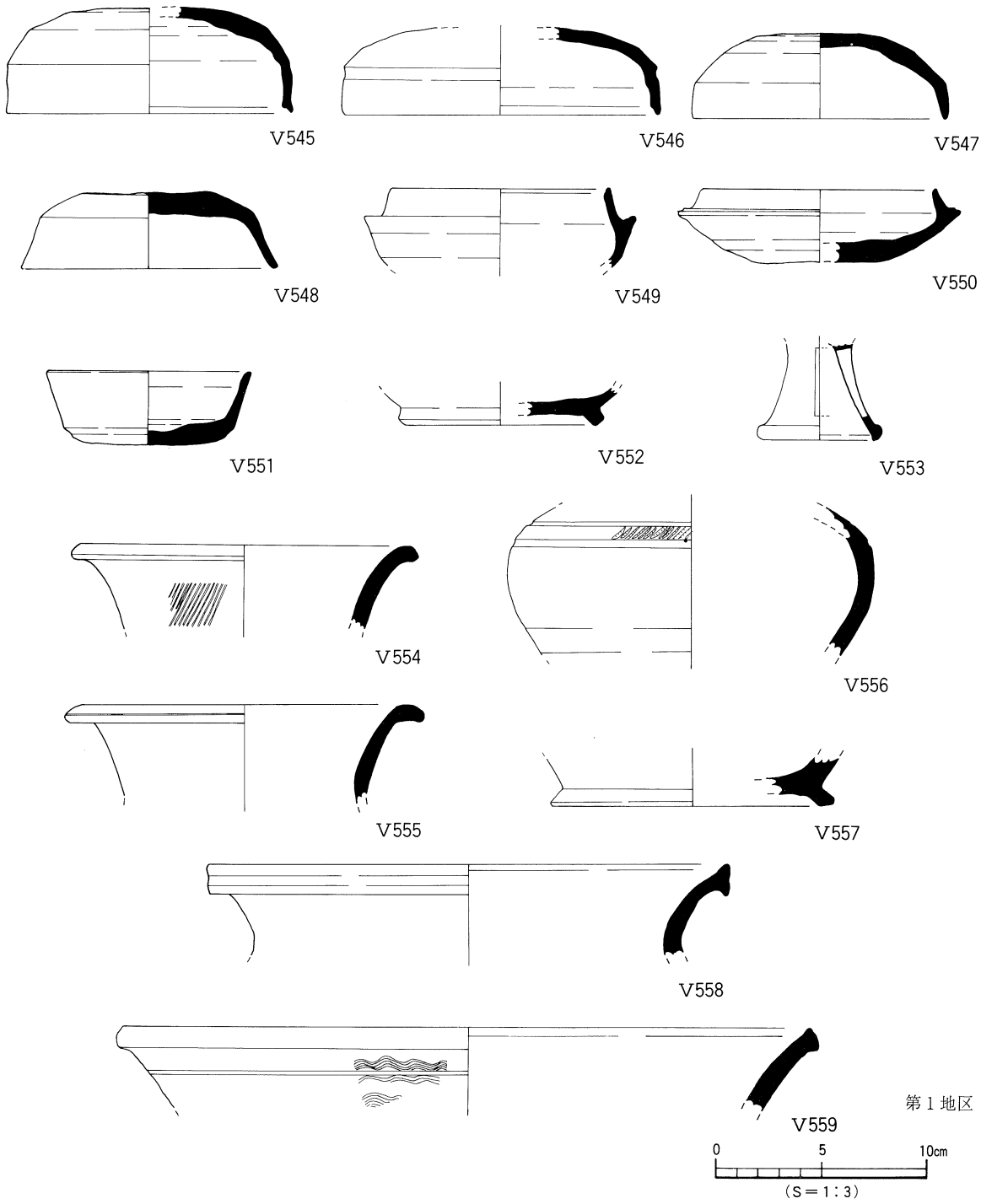
鉄製品（V544）：V544は小型の「U」字型鋤先の先端部と考えられるものである。現存長4.7～4.8cm、幅1.5～1.6cm、重量17.777ｇである。錆は薄く付着し、破断面の観察により断面形態は三角形状を呈する。



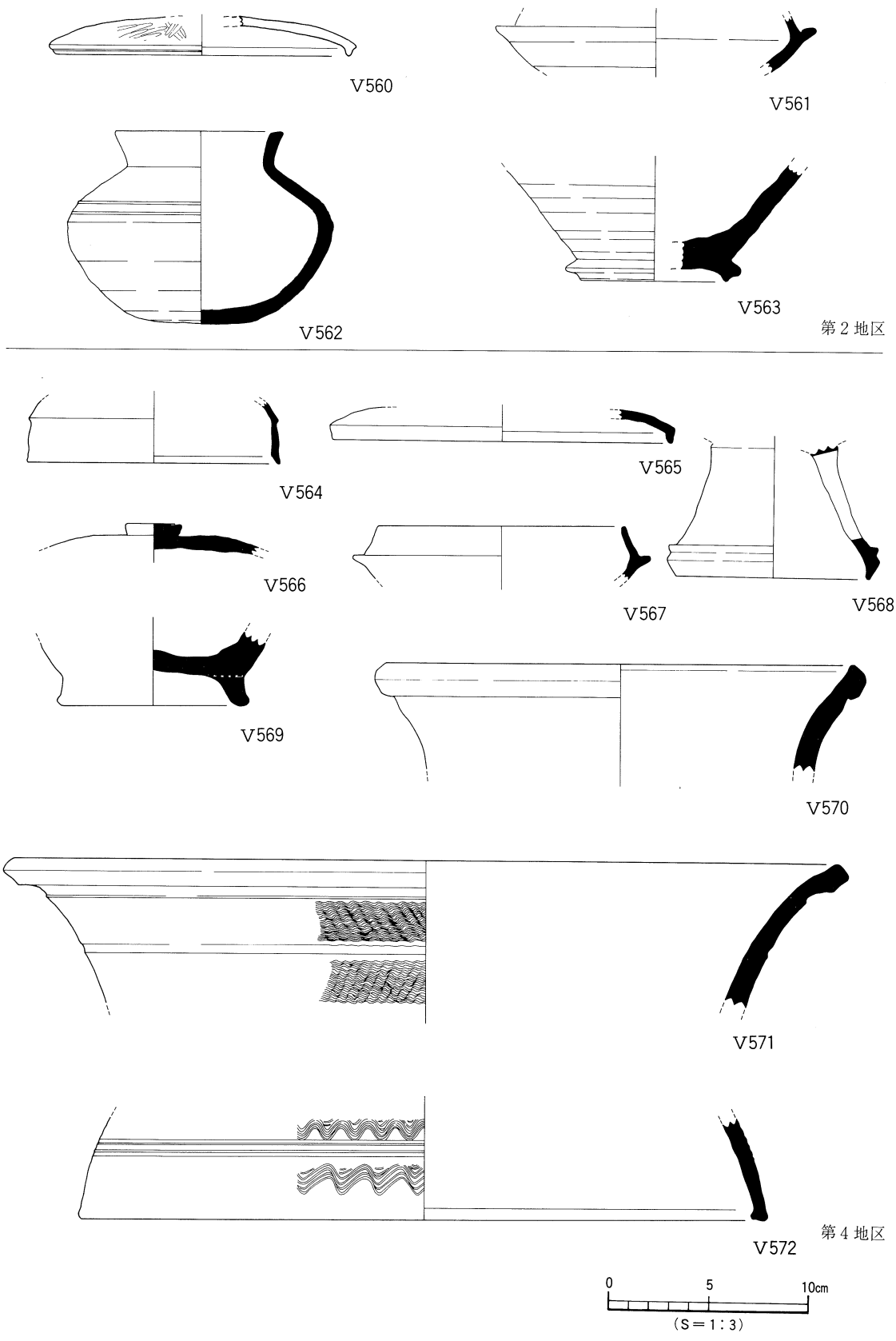
第185図　第Ⅲ層出土遺物実測図(2)

2）**第Ⅳ層出土遺物**（第186・187図、図版52）

V545～559は第1地区、V560～563は第2地区、V564～572は第4地区検出の第Ⅳ層出土品である。第1地区出土品：V545～548は須恵器坏蓋で、V545・546は天井部と口縁部を分ける稜をもち、口縁端部は内傾する。6世紀前半。V547・548は稜は消失し、口縁端部は丸い。V547は6世紀後半～7世紀前半、V548は7世紀前半。V549・550は坏身、V551・552は坏である。V549はたちあがりは長く内傾し、端部は内傾する。6世紀前半。V550はたちあがりは低く内傾し、端部は丸い。7世紀前半。



第186図　第Ⅳ層出土遺物実測図(1)



第187図　第Ⅳ層出土遺物実測図(2)

V551は無台の坏。体部は直線的に立ち上がり、底部は平底で、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。7世紀中葉～後半。V552は高台の付く坏。高台は底体部境よりわずかに内側に付く。8世紀前半。V553は高坏の脚部で、脚端部は下内方に屈曲し、四方向に透かしを看取する。6世紀前半。V554～557は壺。V554・555は緩やかに外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。6世紀後半。V556は長頸壺の胴部片。沈線文間に列点文を施す。7世紀。V557は台付壺。高台は低く、外方にふんばる。高台接地面はやや凹む。7世紀。V558・559は甕。口縁端部は上下方に拡張され、V559は沈線と波状文を施す。6～7世紀。

第2地区出土品：V560は土師器の坏蓋。口縁部は下内方に屈曲し、口縁端部は凹む。内外面共に丁寧なミガキ調整を施す。8世紀前半。V561は須恵器坏身。6～7世紀前半。V562は須恵器短頸壺で、口縁端面は平坦面をなす。7世紀。V563は台付壺。高台は低く下外方にふんばり、端面は凹む。

第4地区出土品：V564～566は須恵器坏蓋。V564は天井部と口縁部を分ける稜をもち、口縁端部は内傾する。6世紀初頭。V565は口縁部は下内方に屈曲する。V566は中央部がわずかに突出する擬宝珠様つまみが付く。8世紀前半。V567は坏身。たちあがりは内傾し、端部は丸くおさめる。6世紀前半。V568は高坏で、柱部に四方向に透かしを看取。6世紀前半。V569は台付壺。高台は比較的高く、外方にふんばる。7世紀。V570・571は甕で、V571は沈線と波状文を施す。7世紀。V572は器台で、沈線文と波状文を施す。6世紀。

6．中世の遺構と遺物

V区で検出した中世の遺構は溝3条、土坑4基である。第1地区では溝2条（SDV101・102）と土坑2基（SKV101・102）を、第3地区では溝1条（SDV301）と土坑2基（SKV311・318）を検出した。遺物は、遺構内及び第Ⅱ層中から出土している。

(1) 溝

SDV101（第188図）

第1地区南側、C1～E1区で検出した東西方向に延びる溝である。第Ⅱ層上面で検出した。溝の南側及び東端、西端は調査区外に続く。規模は検出長10.56m、最大検出幅0.72m、最小検出幅0.10m、深さ20～40cmを測る。溝の方向はほぼ真北方向に直交する。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は灰色（5Y6/1）の砂質土である。掘り方最終面は第Ⅲ層である。溝基底面は平坦である。

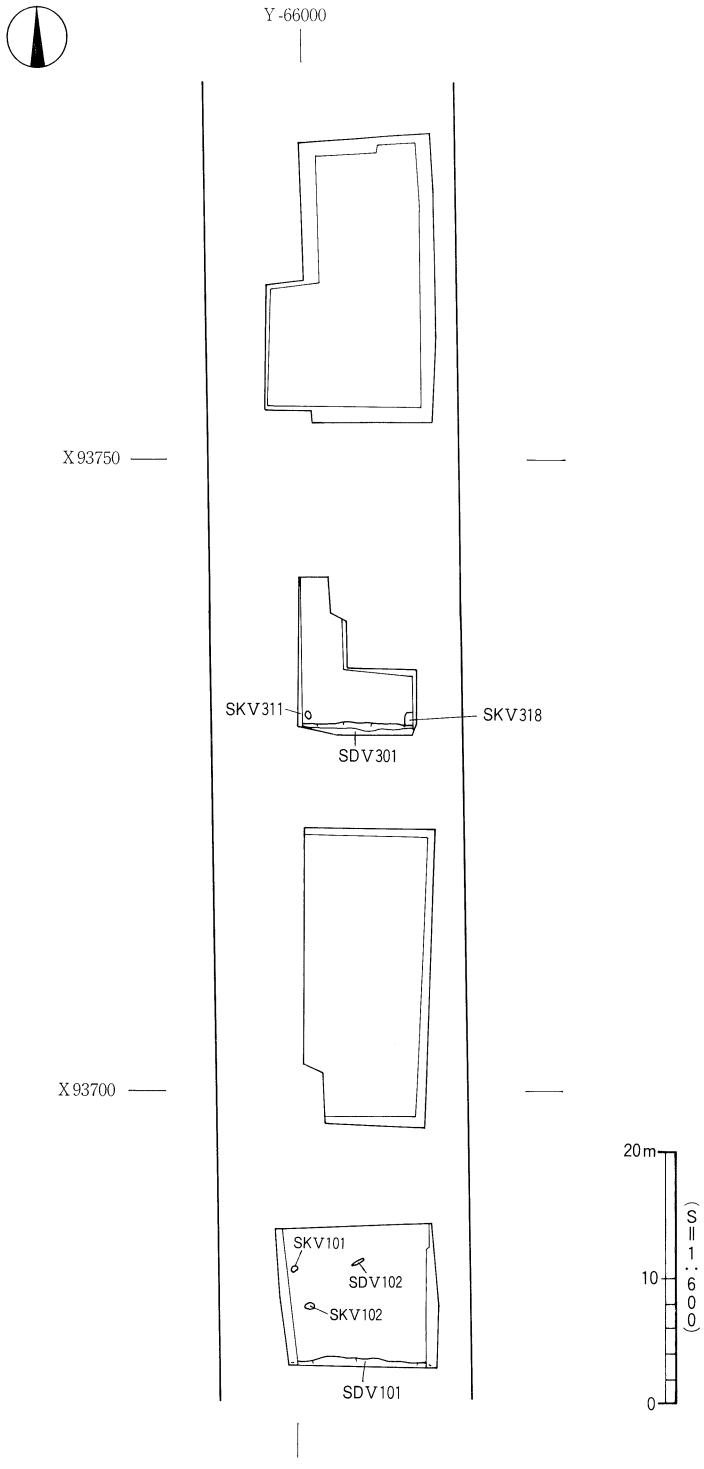
遺物は埋土中より土師器の小片が数点と、埋土上位より拳～人頭大の石が3個出土した。

時期：出土遺物が僅少で、明確は時期判断はしかねる。第Ⅱ層上面からの掘り込みであることより、SDV101は15世紀以降の溝とする。

SDV102（第188図）

第1地区中央部、D3区で検出した溝である。第Ⅳ層上面での検出である。溝の西側は消失しており、規模は検出長0.95m、幅0.30m、深さ6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はSDV101と同様に、灰色（5Y6/1）の砂質土である。溝基底面はほぼ平坦であり、掘り方最終面は第Ⅳ層である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土した遺物がなく、時期判断はしかねるが、埋土がSDV101と酷似することから、SDV102は15世紀以降の溝となる。



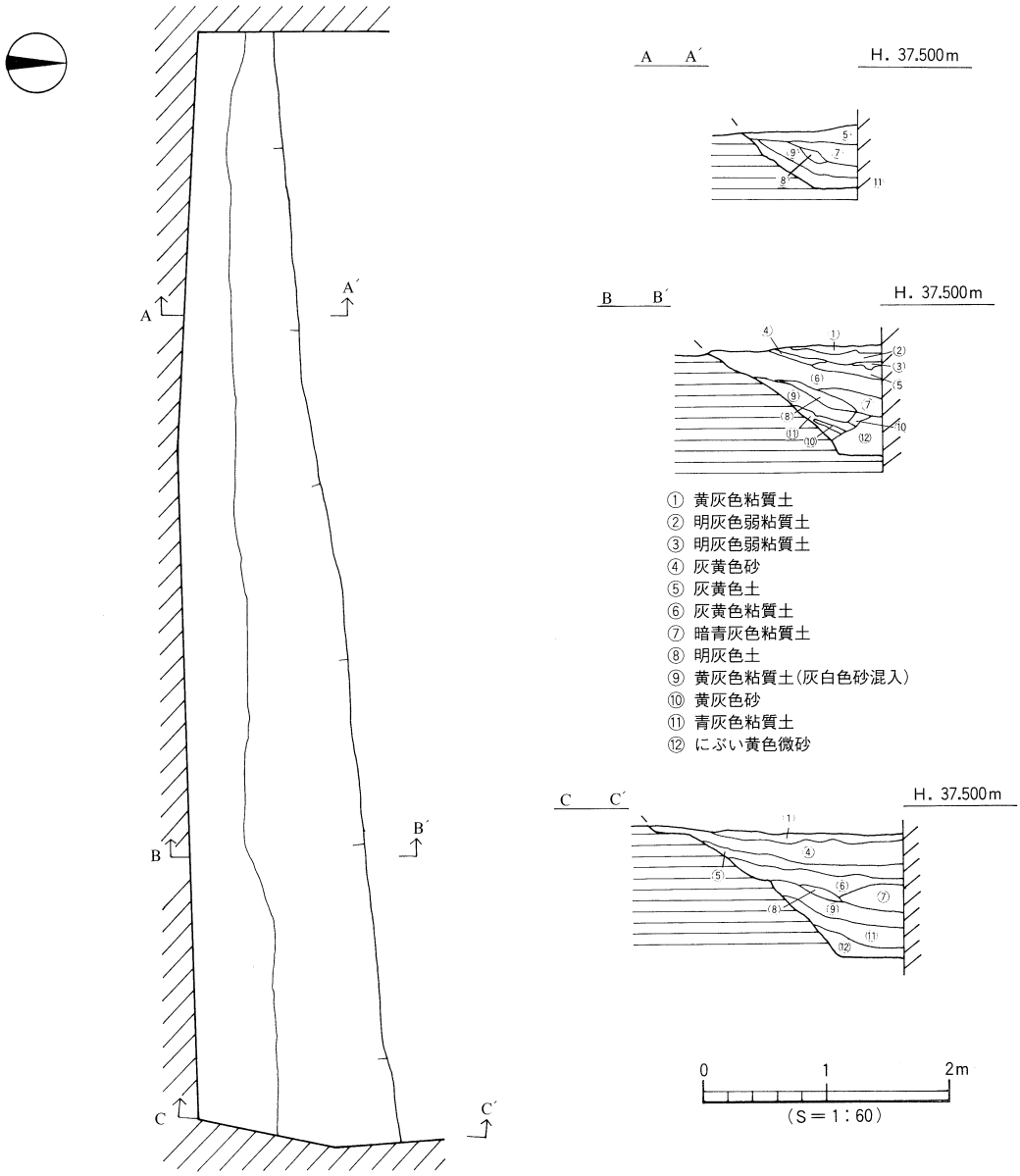
第188図　V区〔中世〕遺構配置図

ＳＤＶ301（第189図）

第３地区南側、Ｃ・Ｄ11区で検出した東西方向に延びる溝である。第Ｖ層上面で検出した。溝の東側はＳＫＶ318と切り合い、東端、西端、南側は調査区外に続く。基底面東側には弥生時代の土坑ＳＫＶ317（土坑Ｄ）を検出している。規模は検出長9.40m、最大検出幅1.40m、最小検出幅0.70m、深さ70～90cmを測る。断面形態は「Ｕ」字状を呈する。埋土は12層（①～⑫）に分層され、①～⑤層は主に灰黄色（2.5Y6/2）の砂質土を基調とし、⑥層は黄灰色（10ＢＧ6/1）で、粘性の強い土壌である。⑥層は水の影響からグライ化を受けており、常時滞水状態であったことがわかる。⑦層以下は粘質土や砂が互層堆積をなす。溝の方向は、真北方向に直交する方向から５°前後南西に振っている。溝基底面はわずかに東から西へ傾斜をなす。掘り方最終面は第Ⅷ層に達する。

遺物は埋土上位付近より、土師器片が数点出土しているが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。埋土がＳＤＶ101やＳＤＶ102に類似することから、ＳＤＶ301は中世、15世紀代の遺構としておく。



第189図　ＳＤＶ301測量図

(2) 土　坑

V区で検出した中世の土坑は４基である。いずれも埋土は灰色（5Y6/1）土である。

ＳＫＶ101（第190図）

第１地区中央やや西寄り、Ｄ２区に位置する。第Ⅲ層上面での検出であり、第ⅡＢ-②層が覆う。平面形態は円形を呈し、規模は径0.68～0.77m、深さ19cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、基底面には径40×50cm、深さ５cmの楕円形状のくぼみがある。

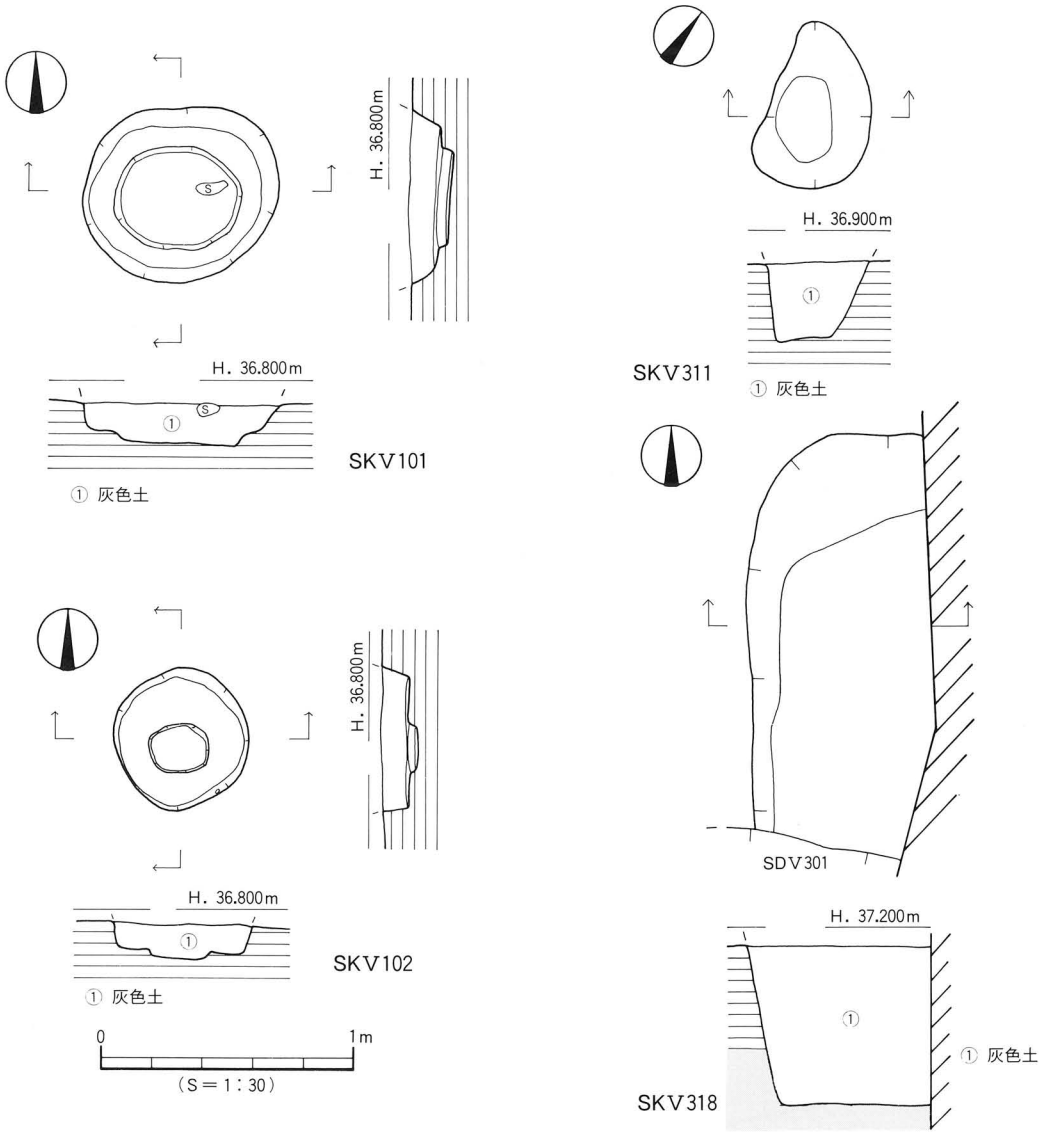
埋土は灰色（5Y6/1）土単層である。基底面はほぼ平坦であり、掘り方最終面は第Ⅳ層である。

遺物は埋土中にて、土師器小片と径６×10cm大の石が１点出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少で、時期判断はしかねるが、検出状況と第ⅡＢ-②層が覆うことから、ＳＫＶ101の下限を14世紀代とする。

ＳＫＶ102（第190図）

第１地区北西部、Ｅ３区に位置する。第Ⅲ層上面での検出であり、第ⅡＢ-②層が覆う。平面形態



第190図　ＳＫＶ101・102・311・318測量図

は円形を呈し、規模は径0.53～0.57m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、基底面には径20×22cm、深さ3cmの楕円形のくぼみがある。埋土は灰色（5Y6/1）土単層である。基底面はほぼ平坦であり、掘り方最終面は第Ⅳ層である。

遺物は土師器小片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物がわずかで、明確な時期判断はしかねる。第ⅡB-②層が覆うことから、ＳＫＶ102の下限を14世紀代とする。

ＳＫＶ311（第190図）

第3地区南西隅、D11・12区に位置する。第Ⅶ層上面での検出である。平面形態は南側が幅広の楕円形を呈し、規模は長径0.66m、短径0.40m、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、灰色（5Y6/1）土単層で埋まる。掘り方最終面は第Ⅶ層である。基底面は西側がやや低く、壁際との比高差は3cmを測る。

遺物は、土師器の小片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：明確な時期確定は困難である。あえて時期を求めるならば、埋土がＳＫＶ101やＶ102と類似することから、ＳＫＶ311は14世紀以前の遺構になる。

ＳＫＶ318（第190図）

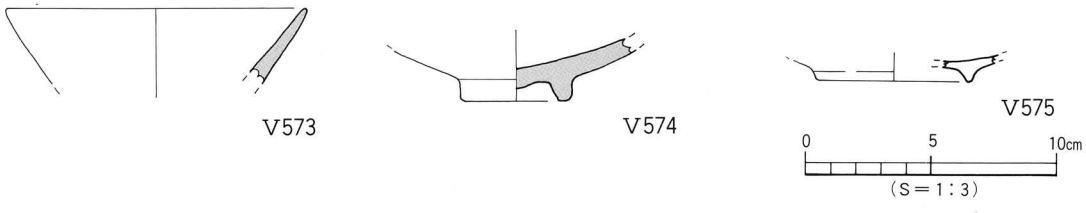
第3地区南東隅、C11・12区に位置する。遺構の南側は溝ＳＤＶ301に切られ、東側は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であるが、東壁の土層観察により、第Ⅴ層以上の層から掘り込まれたことを確認した。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、規模は南北検出長1.70m、東西検出長0.70m、深さ63cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、単一層で埋まる。掘り方最終面は第Ⅷ層である。溝基底面はほぼ平坦である。

遺物は埋土中にて、土師器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：明確な時期断定は困難であるが、埋土やＳＤＶ301に切られることから、ＳＫＶ318は14世紀以前の遺構としておく。

(3) 包含層出土遺物（第191図）

Ｖ区では、第ⅡB-②層中より中世に時期比定される遺物が出土した。このうちの3点を第191図に掲載した。Ｖ573・574は龍泉窯系青磁椀。Ｖ573は口縁部は内湾気味に立ち上がる。Ｖ574は高台畳付部分を除き施釉される。胎土は緻密で、灰色系の色調を呈する。釉調は淡緑色である。Ｖ573は森田・横田分類Ⅰ類、Ｖ574はⅣ類に比定されよう。Ｖ575は和泉型の瓦器椀である。断面三角形状の輪高台をもつ。



第191図　第ⅡB-②層出土遺物実測図

7．その他の遺構と遺物

V区では、ピットを234基検出した。また、出土地点の不明な遺物があり、ここでは「その他の遺構・遺物」として報告する。とりわけ、トレンチ掘削時及び出土地点の不明な石器類10点と玉類2点を第192図に掲載している。

(1) ピット

V区では、溝や土坑以外にピットを234基検出した。内訳は第1地区では22基、第2地区では66基、第3地区では5基、第4地区では141基ある。ピット内からの遺物は僅少で、明確な時期判断はしかねる。

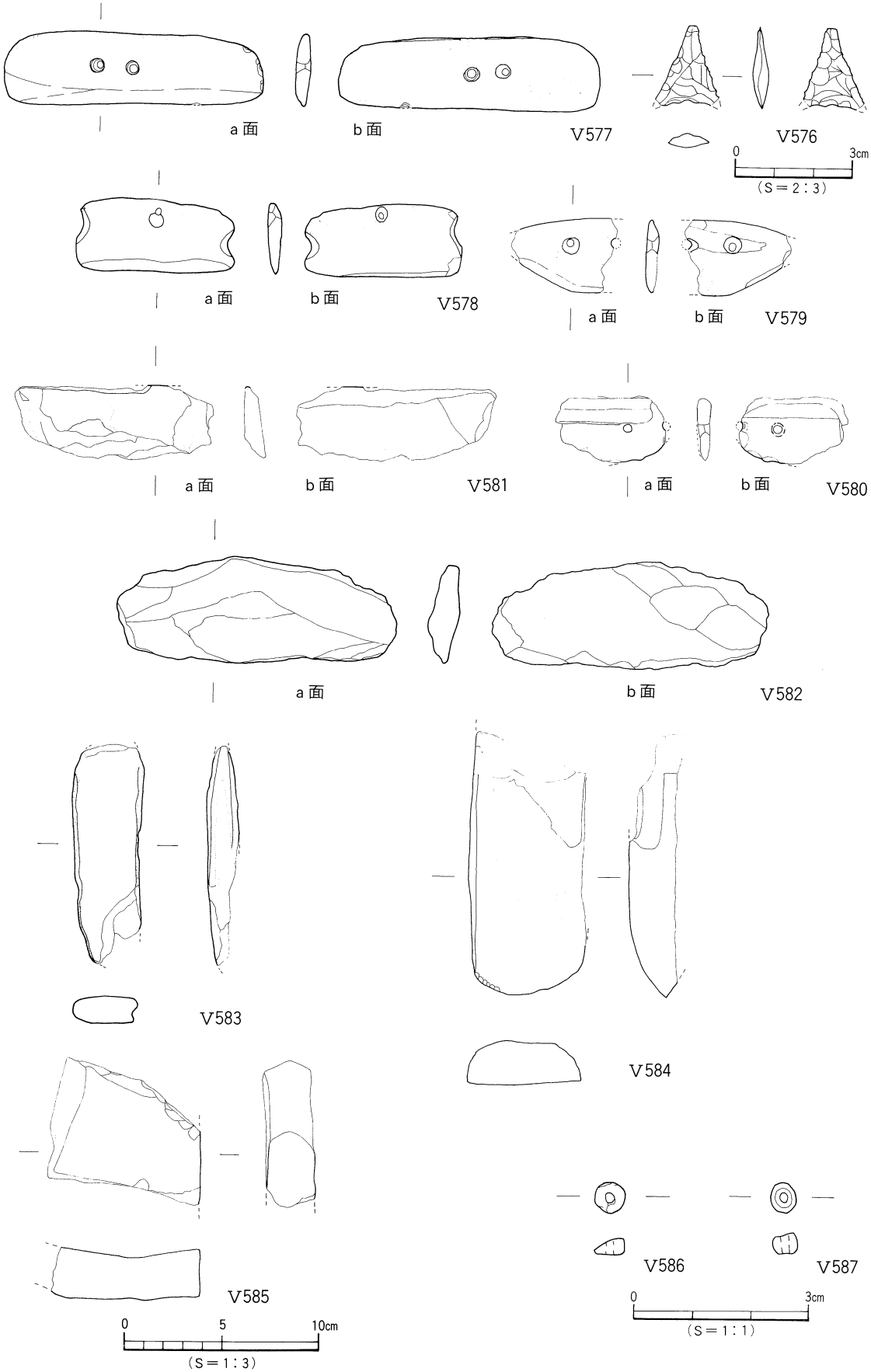
検出したピットは埋土の違いにより、大きく4グループ（A～D類）に分類される。A類は褐色土（黄色土混入）、B類は黒褐色土、C類は褐灰色土、D類は灰色土を埋土にもつピットである。各グループのピット数、平面形態、規模、分布状況、出土遺物は表22にまとめた。

表22　ピット一覧

	検出数（基）	平面形態	規模 長径×短径×深さ(m)	分布状況	出土遺物
A類	68	円～楕円形	0.60～0.90 × 0.20～0.80 × 0.10～0.80	第2地区北半部に集中（14基）、第4地区全域に点在（54基）	弥生・石
B類	72	円～楕円形	0.50～0.90 × 0.20～0.70 × 0.10～0.40	第2地区北半部に点在（20基）、第3地区（2基）、第4地区全域に点在（50基）	弥生
C類	48	円～楕円形	0.40～0.85 × 0.10～0.70 × 0.10～0.70	第1地区北半部に点在（14基）、第2地区南半部に点在（22基）、第4地区北半部に点在（12基）	弥生・土師
D類	46	円　形	0.80×0.10×0.10～0.50	第1地区北半部に点在（8基）、第2地区南半部に点在（10基）、第3地区南半部（3基）、第4地区全域に点在（25基）	土師・須恵

(2) 地点不明出土遺物（第192図、図版52）

V576はサヌカイト製の凹基無茎石鏃である。基部がわずかに欠損している。平面形態は正三角形を呈する。両面共に周縁から細かな調整剥離が加えられ整形されている。V577～582は石庖丁である。V577は平面形態が隅丸の長方形を呈する。刃部は直線的であるが、片刃であり、刃部の鏑はあいまいである。穿孔は両面から施されている。緑色片岩製。V578は側部に丸味のある長方形をなし、両側部に抉りを有する。刃部の鏑は明瞭である。穿孔は両面から施されているが、a面には未貫通の穿孔痕が認められる。結晶片岩製。V579は弧背弧刃形態を呈するもので、背部は面取りされる。刃部の鏑は不明瞭である。両面穿孔により2孔を穿つ。a面の研磨はなく、自然面が一部残る。緑色片岩製。



第192図　地点不明出土遺物実測図

V580は大きく欠損するため、全体形は不明である。両面穿孔により1孔と、別に穿孔痕が1ヶ所に残る。b面には自然面が残る。V581・582は石庖丁の未製品である。V581は打裂が終了し、研磨に移行した段階である。打裂段階で剥離した面には研磨が及ばず、剥離面がそのまま残る。V582は打裂段階で製作が中断されている。a面には大きく自然面が、b面には素材面が残る。結晶片岩製。V583は扁平片刃石斧の未製品である。刃部は欠損している。研磨の段階で廃棄されたものであろう。V584は伐採斧である。基部は欠損している。片面には自然面が残る。横断面形はやや楕円形状を呈する。前・後主面の研磨は全面に及ばず、刃部付近に限られる。結晶片岩製。V585は石英粗面岩製の砥石である。側面は片方が欠損する。砥研面は表面と側面の2面あり、裏面は自然面が残る。表面には細線条痕が一部に観察される。V586は滑石製の臼玉である。径0.5cm、厚さ0.29cm、孔径0.15cm、重さ0.109gを測る。V587はガラス製の小玉である。径0.5cm、厚さ0.35cm、孔径0.12cm、重さ0.093gである。色調は不透明な淡緑色を呈する。

8．小　　結

V区の調査では、基本層位の第Ⅰ層から第Ⅸ層までのすべての土層を検出した。遺構は、弥生時代前期が最も古く、中世の遺構が最も新しいものになる。このうち、弥生時代前期末～中期初頭の遺構が9割以上を占めている。遺物は縄文後期が最古のものになる。このうち、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される溝や土坑と、古代に時期比定される溝が特筆すべき遺構である。以下、層位と各時代の遺構、遺物についてまとめをする。

(1) 層　　位

V区では第Ⅰ層から第Ⅸ層までのすべての土層を確認した。

V区の中央部南寄り、第2地区では最下部にて第Ⅸ層である石手川の洪積礫層を検出した。第Ⅸ層上面の標高を測量すると35.2mを測り、Ⅰ・Ⅱ区で検出した礫層よりも標高が1.2m高くなっている。

第Ⅷ層は、石手川の氾濫によって堆積した砂礫層と考えられるものである。粗砂や微砂、砂礫から構成され、本層上面はⅣ区に比べ50cm程度高くなっている。第Ⅷ層上面は起伏に富んでおり、第2地区から第4地区の南半部がやや凹んでいる。この箇所に第Ⅶ層である明黄褐色シルトが堆積している。

第Ⅶ層は文京遺跡や松山大学構内遺跡などで検出されている黄色シルトと、色調や土質が非常に類似している。岩崎遺跡で検出した第Ⅶ層は、黄色シルトとほぼ同時期に堆積したものと考えられ、縄文後期前半以降に堆積した土壌といえる。

第Ⅶ層上面には、弥生時代前期末～中期初頭の遺物包含層である第Ⅵ層や、弥生時代中期～後期の遺物包含層である第Ⅴ層が部分的に堆積をなしている。第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層上面は第2地区から第4地区にかけて高くなっており、V区の北半部は微高地を形成している。

第Ⅴ層上面では、第1地区全域、第2地区と第4地区の一部で第Ⅳ層を検出した。第1地区ではⅣ区からの堆積が続いており、層厚50cmを測る。第Ⅳ層上面には、V区のほぼ全域で古代の遺物包含層である第Ⅲ層を検出した。第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層と同様に、第Ⅲ層上面もⅣ区に比べやや高くなっている。

第Ⅱ層は、主に14～15世紀代の遺物を含む包含層であるが、第1地区と第4地区に検出が限られる。層厚10cm程度の堆積であり、近現代の造成により削平された可能性が高い。第Ⅰ層上面、つまり現在の地表面は第2地区から第4地区にかけてやや高くなっている。

以上のことから、第Ⅰ層から第Ⅷ層までの堆積状況をみると、第Ⅷ層上面の状況に呼応して、第Ⅶ層から第Ⅰ層までの土層が堆積をなしている。Ⅴ区の南側Ⅳ区では、第Ⅷ層上面がやや下がる傾向にあるのに対して、Ⅴ区では北半部がⅥ区に向けて高くなっている。つまり、Ⅴ区は他の区に比べて地表面がやや高く、微高地を形成しているわけである。

⑵　遺構・遺物

Ⅴ区では、縄文時代後期から中世までの遺構と遺物を確認した。

１）縄文時代後～晩期

縄文時代の遺構は未検出であるが、当該期の遺物が弥生時代の遺構内より出土している。このうち、ＳＤＶ202下層からは、縄文時代後期の深鉢片が出土した。また、岩崎遺跡内で検出した遺構のうち、初現と考えられる埋土Ｆ（弥生時代前期末）をもつ土坑ＳＫＶ483内や第Ⅵ層中からは、縄文時代晩期の深鉢片がそれぞれ１点ずつ出土している。

２）弥生時代前期末～中期初頭

弥生時代前期末～中期初頭の遺構は溝２条と土坑85基がある。

① 溝：溝は、ＳＤＶ202が特筆すべき遺構である。ＳＤＶ202は検出幅5.0ｍ前後、深さ1.3～1.4ｍを測る大型の溝で、溝内からは当該期の遺物が多量に出土している。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は上・中・下層に分層でき、下層中には砂や小礫を含む。堆積状況から、下層堆積時は滞水状態であったことがうかがえる。また、土層観察の結果、溝は下層堆積時に再掘削されている。

ところで、下層及び中層堆積時には炭化物が溝の中央部付近に広い範囲（厚さ１～３㎝）で検出されている。炭化物上面付近から遺物が出土したことから、溝内にて何らかの祭祀が行われた可能性もある。一方、中層・上層の遺物は散在して出土しており、投棄された状況がみてとれる。

「第８章Ⅵ区の調査」で説明するが、ＳＤＶ202はⅥ区検出の溝ＳＤⅥ104と断面形態や埋土、堆積状況が非常に類似することから、同一の溝と判断される。両者が同一の溝とすると、円形状につながるものになり、ＳＤＶ202とＳＤⅥ104は環壕の可能性が高くなる。その場合、両溝の内径は約100ｍを測る。ＳＤＶ202に関連する遺構に、溝ＳＤＶ203がある。ＳＤＶ203はＳＤＶ202の南壁体に接続している。接続部分のＳＤＶ202壁体から基底面にかけては、水が流れ落ちた状況がみられることから、ＳＤＶ203はＳＤＶ202に水を取り入れるための取水用の溝と考えられる。

ＳＤＶ202から出土した遺物をみると、埋土は上・中・下層に分層されるが、土器の形態的にはあまり違いは認められず、一様式の中に収まるものと判断される。つまり、ＳＤＶ202は短期間、概ね30～40年のうちに埋没したものと考えている。

注目すべき点は、溝から出土した土器の施文方法である。従来、クシ描きによる沈線文の出現期が土器編年を考えるうえで問題となっているが、今回の溝出土土器のうち下層、特に溝基底面付近からは、ヘラ描きによるもの（Ｖ012）と２条１組の工具によるもの（Ｖ016）の両者が並んで出土している。出土状況から両者は混入品とは考えがたく、施文工具の異なる二種が同時期に併存しているものと考えられる。今回の資料は土器編年を考えていくうえで貴重な資料になる。

② 土坑：次に、土坑である。埋土の違いにより、６種類の土坑（土坑Ａ～Ｆ）を検出した。発掘調査時には、土坑Ｆから土坑Ａの順で切り合いが確認され、土坑Ｆが最も古い段階のものとなる。土坑内からの出土遺物をみると、溝ＳＤＶ202とほぼ同時期のものが存在しており、溝と同様に、土坑

も短期間に存在していたものといえる。

さらに、「第８章Ⅵ区の調査」で説明するが、土坑Ａ以外はＳＤＶ202が存在している間に、同時期に併存していたものと判断される。

各土坑の数や分布状況は、古い時期からみていくと、土坑Ｆは８基、土坑Ｅは６基を検出し、全体の１割にも満たない。分布は、そのほとんどが第４地区に点在している。土坑Ｄは27基あり、全体の３割程度にのぼり、第２地区から第４地区にかけて広く分布するようになる。土坑Ｃは31基あり、土坑Ｄとほぼ同様の分布状況をなす。土坑Ｂは24基あり、土坑Ｃ・Ｄと同様に全域に点在するが、第４地区に集中する傾向をもつ。最も新しい時期の土坑Ａは、Ｖ区で検出した土坑のうち最も少なく４基であり、第４地区に分布が限られている。

平面形態では、円～楕円形の土坑が74基あり、全体の７割を占める。次いで長方形土坑が12基、方形土坑が11基となる。土坑Ｂのうち長方形土坑は８基あり、全体の４割弱を占め、他の埋土の土坑と比べると、その割合は多くなっている。

土坑の規模は、円～楕円形のものは径１～1.5ｍを測り、それらが大半を占めるが、中には径２ｍを越えるものも数基ある。方～長方形のものは大きく２種類に分けられ、大きいものでは長さ２～2.5ｍ、幅１～1.5ｍを測り、小さいものでは長さ１～1.5ｍ、幅0.5～１ｍを測る。深さは、円～楕円形の土坑では20～50㎝のものが大半を占める。中には１ｍを越えるものもある。一方、方～長方形の土坑は深さが10～40㎝で、円～楕円形の土坑に比べ、浅い掘り方のものが多い。

断面形態では、逆台形状を呈するものが全体の５割を占める。袋状や筒状を呈するもの、いわゆる貯蔵穴の形態をなすものは10基みられるが、遺構全体が袋状を呈するものはわずかに２基〔ＳＫＶ417（土坑Ａ）、ＳＫＶ463（土坑Ｅ）〕にとどまり、その他は壁体の一部がフラスコ状もしくは逆台形状を呈するものである。

埋土の堆積状況では、単一土壌で埋没する土坑が全体の８割を占めている。厚さ50㎝前後の土壌が単一層で埋没していることから、自然の堆積とは考えがたく、人為的に埋め立てられたものと推測される。くわえて、土坑内には炭化物や焼土が層をなして堆積しているものもあり、土坑の基底面を貼床として数回使用した痕跡も認められる。

遺物の出土状況や遺存状況は様々である。完形の土器が押しつぶされた状態で出土した土坑、完形品や未製品が出土した土坑、骨片が出土した土坑が各々数基ある。破片のみが点在して埋土中から出土した土坑は34基で、遺物が全く出土しなかった土坑は38基である。

土器の中には周防灘周辺、山口県や東北部九州地方からの搬入品がみられる。これは弥生時代前期末から中期初頭における道後地区と他地域との交流を考えるうえで、好資料となる。

獣骨は、ＳＤＶ202や土坑内から猪や鹿の歯が出土しており、これらの資料は当時の食生活の一端を示すものである。

２）弥生時代中期～後期

弥生時代中期～後期の遺構には、土坑がある。土坑は10基検出されており、円～楕円形のもの７基、方～長方形のもの３基である。ほとんどが単一土壌で埋没している。長方形土坑のうち、拳大～人頭大の礫が出土したものがあり、性格は断定できないが、土壙墓の可能性もある。土坑内からは、主に弥生時代中期後半から後期後半に時期比定される遺物が出土している。

遺物は、第Ⅴ層中から中期中葉から後期後半までの土器や石器が出土した。

3）古墳時代～古代

古墳時代の遺構は土坑4基があり、すべて第4地区で検出したものである。楕円形と長方形の土坑がそれぞれ2基ずつあり、このうち長方形土坑ＳＫＶ475の基底面からはピットを確認しており、屋根をもつ建物であった可能性がある。土坑内からは主に古墳時代後期、6世紀後半から7世紀前半に時期比定される遺物が出土している。

このほか、第Ⅳ層中からは6世紀前半から7世紀前半頃の遺物が出土している。

古代では、溝ＳＤＶ201とＳＤＶ401が特筆すべき遺構である。断面形態や埋土、検出状況から両者は同一の溝と判断される。第4地区で検出したＳＤＶ401は、溝北端で西側へ向けて「Ｌ」字状に折れ曲がる。ＳＤＶ201の南側第1地区では、溝は検出されておらず、北端と同様、南端も折れ曲がっている可能性が高い。その場合、溝の内径は62～65ｍを測る。

溝内からは7世紀後半から8世紀中～後半の須恵器と土師器が出土している。とりわけ蓋坏の出土量が多く、甕や壺は極めて少ない。土師器の中には畿内産とみられる坏Ａ（平城Ⅰ式相当）や高坏（平城Ⅲ式相当）のほか、暗文を施したものが多い。特筆されるものでは、須恵器の円面硯の破片が1点と、土製の馬（土馬）1点がＳＤＶ201内から出土している。ＳＤＶ201とＳＤＶ401は出土した遺物の特徴や検出状況などから、区画溝の可能性があり、岩崎遺跡一帯には、古代において、官衙もしくは寺院に関連する遺構が存在することを示唆する資料である。

第Ⅳ層中からは、主に8世紀から11世紀に時期比定される遺物が出土している。このなかには、9世紀後半に時期比定される京都産の灰釉陶器、緑釉陶器のほか、平安期の瓦なども含まれている。

4）中　　世

中世の遺構は、溝3条と土坑4基がある。

このうち、溝ＳＤＶ101とＳＤＶ301は真北方向に直交する東西方向の溝になる。両溝は、現在の生活道路とほぼ同じ位置に掘られている。2つの溝の性格は判断しえないが、当時の区画溝、又は地割りのための溝の可能性がある。

遺物は、第Ⅱ層中より13～14世紀に比定される土師器と瓦器のほか、青磁や白磁が出土している。

第８章

Ⅵ区の調査

第8章　Ⅵ区の調査

1．調査の経緯（第193図、図版53）

Ⅵ区は調査地の北部に位置し、調査以前は既存宅地であった。調査対象地は、松山市岩崎町２丁目10－10から12－9までの間、幅18m、長さ84m、調査対象面積1,440㎡である。国土座標はX93780～93860、Y-65988～-66006の地域になる。調査区内には、調査中も東西方向に生活道路が横断しており、それらの道路や宅地の境界を利用して調査地区を設定した。調査区は南から北に向かって第１地区、第２地区、第３地区に小区分した。第１地区は、弥生時代前期から中世までの遺物包含層が良好な状態で残っており、特に第Ⅴ層（弥生中期～後期）は層厚0.6～１mを測る。遺物包含層は人力で掘り下げ、引き続き遺構検出を行った。そのため、３回の遺構検出を行うことになり、調査は９ヶ月間を費やした。第３地区は家屋の立ち退きが遅れたため、平成10年５月から約１ヶ月間で調査を実施した。以下、調査工程を略記する。なお、各地区の調査面積と調査期間は、表23のとおりである。

〔調査工程〕

① 調査は第１地区、第２地区、第３地区の順で行った。第１地区は第Ⅳ層までを重機を使用して除去し、第Ⅴ・Ⅵ層の遺物包含層は人力で掘り下げを行った。その結果、第Ⅴ層上面にて中世の掘立柱建物址や土坑、ピットを検出した。また、第Ⅵ層上面では、弥生時代中～後期の竪穴式住居址や溝、土坑を検出し、最終の遺構検出面である第Ⅶ層上面では、弥生時代前期末～中期初頭の溝や土坑を検出した。各遺構面毎に測量、写真などの記録をとった。

② 平成10年２月21日に、Ⅴ区とⅥ区第１地区を主体とした、一般市民対象の第２回現場説明会を行った。

③ 調査区の中央部に南北方向の深掘りトレンチを設定して、第Ⅶ層以下の土層観察を行う。

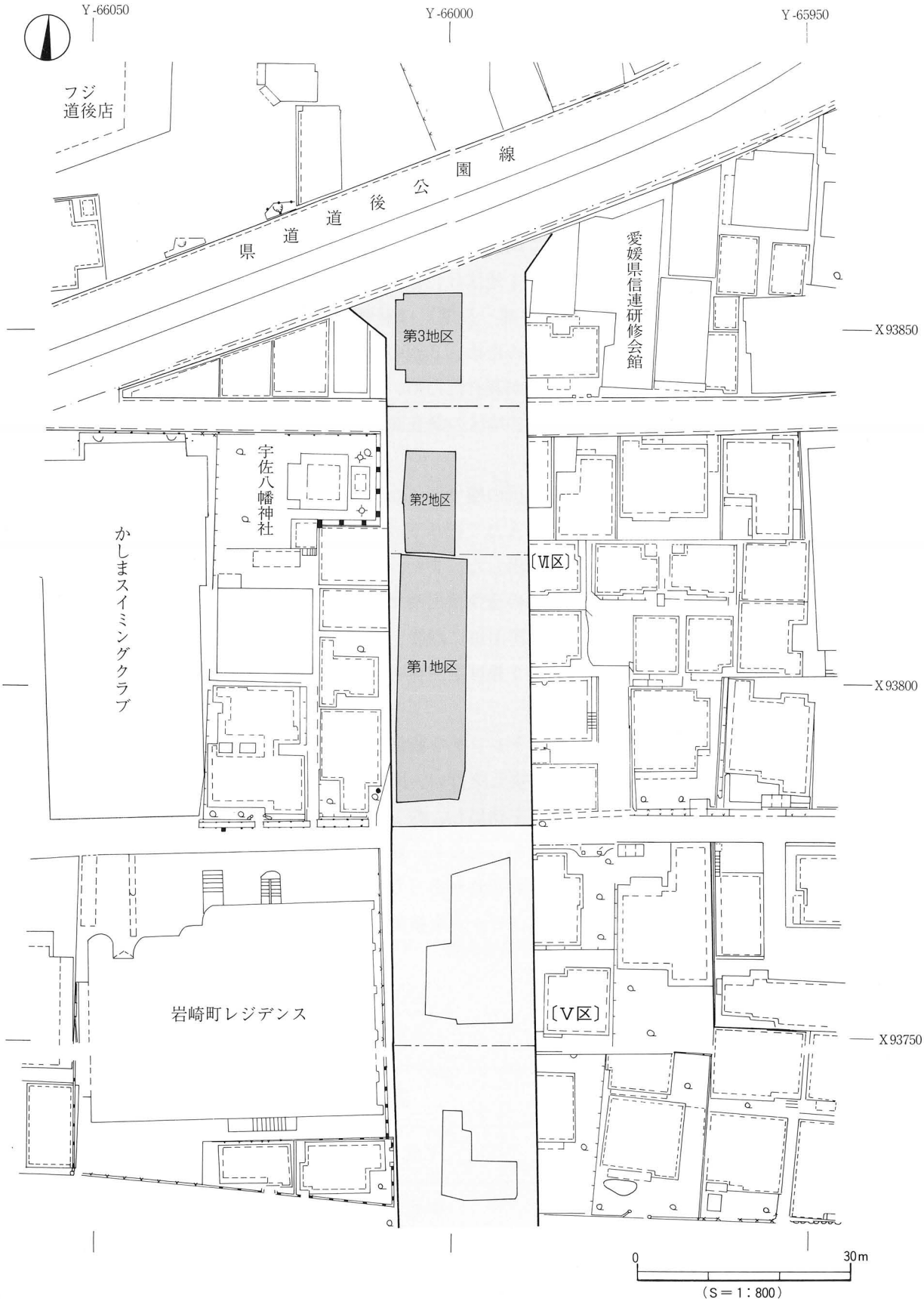
④ 第１地区の調査が終了した後、埋め戻しを行い、同時に第２地区の掘削を行う。

⑤ 第２地区からは土坑、溝などの遺構を検出し、約１ヶ月で調査を終了する。

⑥ 第３地区は、調査以前は既存宅地であったため、建物基礎のコンクリートが残っていた。それを除去することで、遺構を破壊するおそれがあったため、調査はコンクリートを残した状態で実施した。第３地区からは溝や土坑、ピットを検出した。

表23　調査地区一覧

地　区	対象面積（㎡）	調　査　期　間
1	720	平成９年７月14日～平成10年３月９日
2	306	平成10年２月27日～平成10年３月24日
3	414	平成10年５月１日～平成10年５月31日


Y-66050
Y-66000
Y-65950
フジ
道後店
県道道後公園線
愛媛県信連研修会館
第3地区
X 93850
宇佐八幡神社
第2地区
かしまスイミングクラブ
〔Ⅵ区〕
第1地区
X 93800
岩崎町レジデンス
〔Ⅴ区〕
X 93750
0
30m
（S＝1：800）

第193図　Ⅵ区測量図

2．層　　位（第194図、図版54・55）

(1) 基本層位

Ⅵ区は、第１・２・３地区共に調査以前は既存宅地であった。現況では第１地区の標高が最も高く、第３地区に向かって緩傾斜をなし、第１地区南端は38,000m、第３地区北端は37.700mになる。

基本層位は第Ⅰ層から第Ⅸ層までを検出した。第Ⅰ層は近現代の造成土や農耕にかかわる客土である。第Ⅱ層は灰黄～灰黄褐色土で、主に中世の遺物を含む包含層である。第２章で説明した第ⅡＢ層に相当する。第Ⅲ層は褐灰色土で、主に古代の遺物を含む包含層である。第Ⅳ層は灰オリーブ色土で、主に６世紀から８世紀までの遺物を含む。第Ⅴ層は黒褐色土で、弥生時代中～後期の遺物を含む包含層である。第Ⅵ層は黒褐色土＋明黄褐色土で、弥生時代前期末～中期初頭の遺物を含む包含層である。第Ⅶ層は砂粒混入の有無で２層に分層される。第Ⅶ①層は明黄褐色（10ＹＲ6/8）シルト、第Ⅶ②層は土壌中に砂を含む。第Ⅷ層は灰～灰白色の砂礫層で、石手川の氾濫によって運ばれた堆積物である。第Ⅸ層は洪積礫層になる。なお、第Ⅶ層以下は、第１地区では調査区の中央部、第２地区では東壁、第３地区では西壁にそれぞれ幅１m前後の深掘りトレンチを設定し、土層観察を行った。各トレンチの深さは、第Ⅶ層直下より２mの地点を基準に掘削をした。ただし、地区毎で周辺状況が異なることから、危険を伴う箇所もあり、必ずしもすべてのトレンチが同じ深さではない。

第Ⅰ層－近現代の造成や農耕に伴う客土である。第１地区は層厚50cm、第２地区は層厚79cm、第３地区は層厚55cmを測る。

第Ⅱ層－Ⅳ・Ⅴ区で検出した第ⅡＢ-②層にあたる。灰黄褐色（10Ｙ6/2）土で、第３地区を除くほぼ全域で検出した。層厚10～15cmを測る。

第Ⅲ層－褐灰色（7.5ＹＲ4/1）土で、第１地区西半部に堆積する。層厚10～30cmを測る。本層中からは、主に古代に時期比定される遺物が出土している。

第Ⅳ層－灰オリーブ色（5Ｙ5/3）土で、第１地区の南部と第２地区で検出した。第１地区は層厚20cm、第２地区は層厚10cmを測る。第１地区は水平堆積、第２地区は北東から南西に向かってやや傾斜堆積をなす。

第Ⅴ層－黒褐色（10ＹＲ2/2）土で、第１地区、第３地区ほぼ全域と第２地区の南部で検出した。第１地区は層厚40cm、第２地区は層厚15cm、第３地区は層厚40cmを測る。本層中からは弥生土器（中～後期）、分銅形土製品、紡錘車、石斧などが出土した。

第Ⅵ層－第Ⅴ層に黄色土が混入するもので、第１地区の南部から中央部、第２地区の南西部で検出した。第１地区は層厚20cm、第２地区は層厚10cmを測る。第１地区は北から南に傾斜堆積をなす。遺物は弥生土器（前期末～中期初頭）、石庖丁、石斧が出土した。

第Ⅶ層－明黄褐色（10ＹＲ6/8）シルトで、Ⅵ区ほぼ全域に堆積する。第Ⅶ層は砂粒の混入の有無で、２層に分層される。

第Ⅶ①層－明黄褐色シルトで、比較的粘性の強い土壌である。Ⅵ区全域で検出する。第１地区は層厚45cm、第２地区は層厚90cm、第３地区は層厚50cmを測る。

第Ⅶ②層－第Ⅶ①層と色調は同じであるが、土壌内に砂を含む。第１地区の南部と中央部、第２地区の中央部で検出した。第１地区、第２地区共に層厚35cmを測る。

第Ⅷ層－灰～灰白色を呈する砂や砂礫層である。第１地区では、調査区中央部に設定したトレンチ、第２、第３地区では、東壁及び西壁沿いに設けたトレンチで確認したものである。堆積状況からは、石手川の氾濫による河川氾濫堆積物と考えられる。本層中からの遺物の出土はない。堆積物や堆積状況の違いから、大きく３種類に分けられる（ⅧＣ-①・ⅧＣ-②・ⅧＣ-④層）。なお、ⅧＣ-①層とⅧＣ-②層は、Ｖ区検出のⅧＣ-①層、ⅧＣ-②層に対応するものであるが、Ⅵ区ではＶ区で検出したⅧＣ-③層は検出されなかった。

ⅧＣ-①層：Ⅵ区全域にみられるもので、上面は第Ⅶ層が覆う。灰色（7.5Ｙ8/1）～オリーブ色（5Ｙ5/4）微砂と径５～10cmの円礫からなる。本層上面は第１地区南端が最も低く、第３地区に向かって徐々に高くなる（比高差30cm）。層厚は40～70cmを測る。

ⅧＣ-②層：Ⅵ区第１地区南半部のみにみられるもので、灰白色（5Ｙ8/1）の砂礫層からなる。礫は最大径10×20cm、最小径３×５cmで、径５×10cm大の礫が大半を占める。礫と礫の間には灰色の砂と小礫が混入する。本層下面は未検出であるが、現況では層厚１m前後となる。

ⅧＣ-④層：Ⅵ区第１地区北半部と第２・第３地区でみられるもので、灰白色（5Ｙ8/1）の砂礫層からなる。径５×10cm大の円礫が密集し、礫と礫の間には灰色の粗砂が混入する。層厚30～80cmを測る。

第Ⅸ層－第１・２地区の最下部でみられる石手川の洪積礫層である。本層上面は地表下約2.0m、標高36.0m前後であり、径20×30cm大の円礫が密集している。第Ⅸ層上位には黒化したクサリ礫が層厚10～15cmの堆積をなす。

(2)　検出遺構・遺物（第195・196図、図版56・57）

Ⅵ区の調査では、縄文時代後期から中世までの遺構と遺物を検出した。

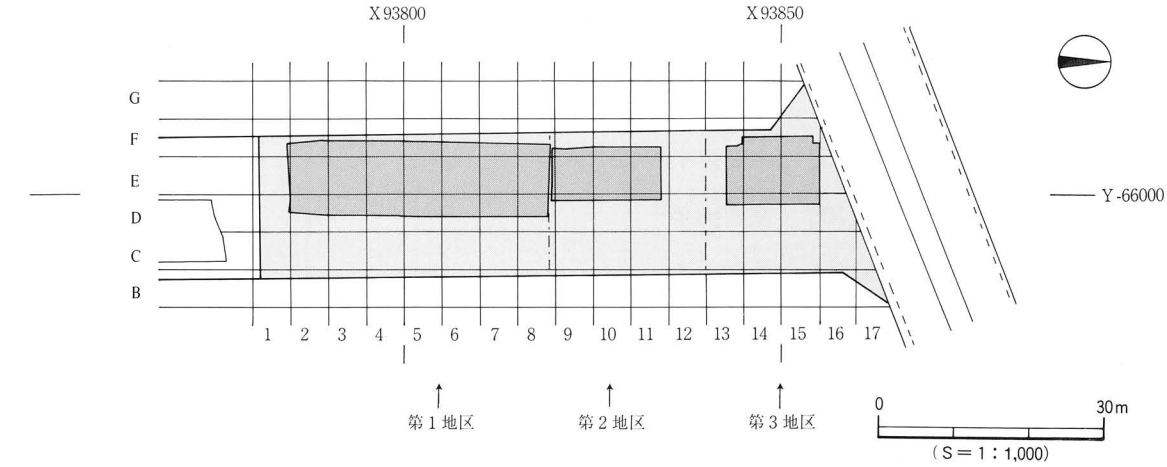
縄文時代の遺構は未検出である。遺物は、弥生時代前期末～中期初頭の土坑や、第Ⅵ層中からは縄文時代後期、溝ＳＤⅥ104や土坑内からは縄文時代晩期に時期比定される浅鉢片や深鉢片が数点出土している。

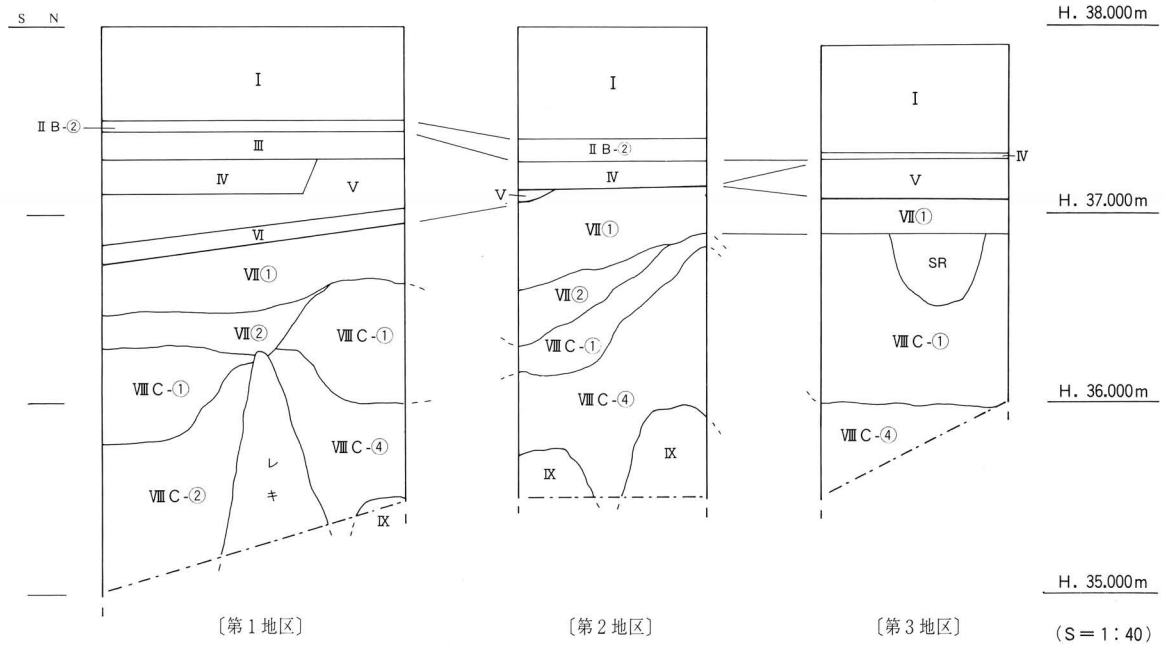
弥生時代では、弥生時代前期末から中期初頭の遺構は溝２条と土坑85基とがある。弥生時代中～後期の遺構は竪穴式住居址３棟、溝３条、土坑４基がある。

古墳時代の遺構は、溝１条と土坑３基、古代は溝１条と土坑７基、中世では掘立柱建物址３棟、溝５条、土坑８基がある。

各地区で検出した遺構は表24にまとめた。このうち、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される土坑は検出数が多く、個別の遺構番号は掲載せず、検出個数のみを記している。

なお、調査にあたり、調査区内を５m四方のグリットに分けた。調査区の東から西へ、Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ、南から北へ、１・２・３……17とし、Ｂ１～Ｇ17といったグリット名を付した（第194図）。

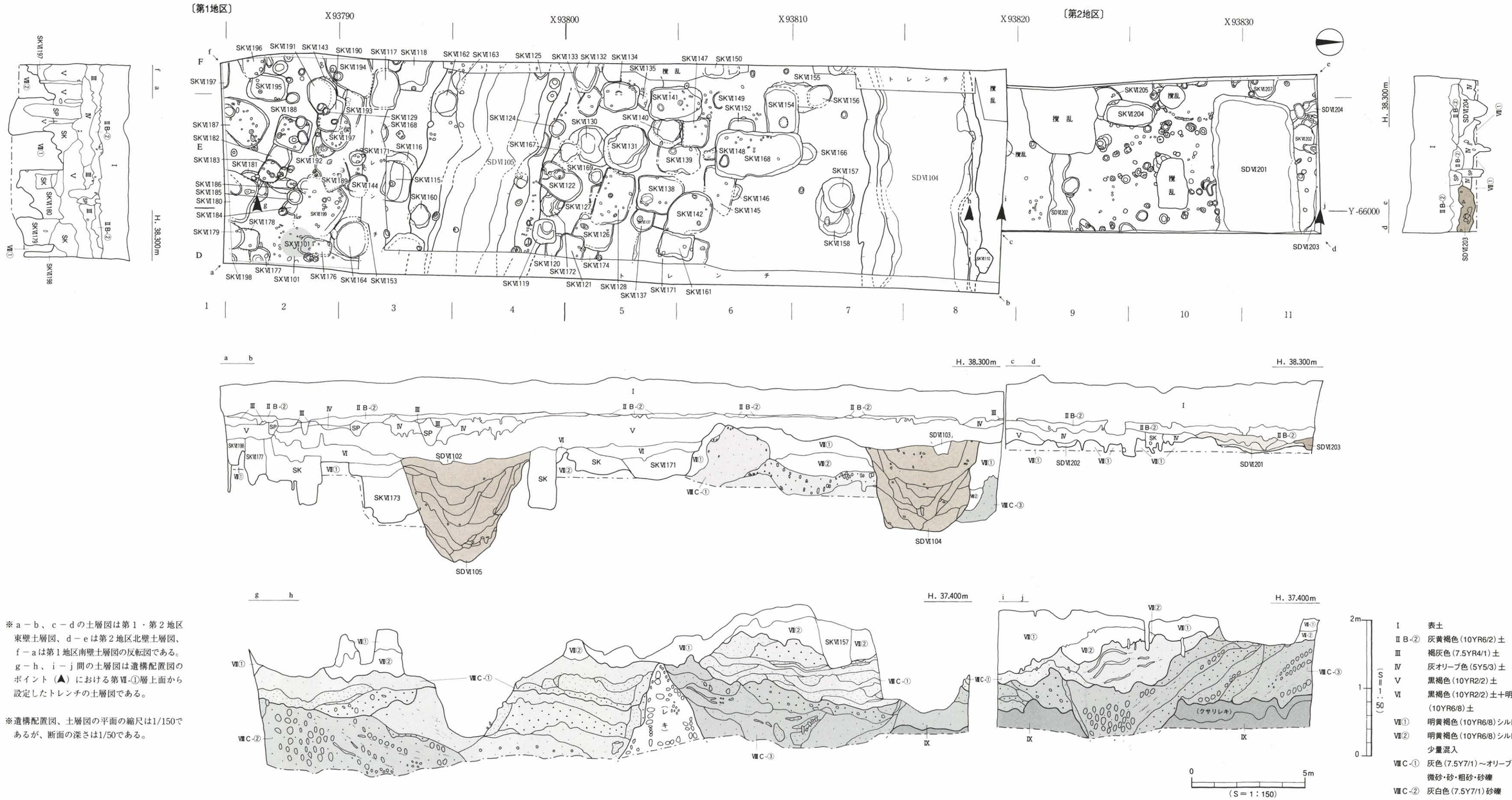




第194図　Ⅵ区区割図・土層模式図

表24　Ⅵ区遺構一覧

地区 / 時代	第 1 地 区	第 2 地 区	第 3 地 区
弥生時代前期末～中期初頭	ＳＤⅥ104　ＳＤⅥ105 ＳＫ（79基）	ＳＫ（4基）	ＳＫ（2基）
弥生時代中期～後期	ＳＢⅥ101（後期前半） ＳＢⅥ102（中期後半） ＳＢⅥ103（後期後半） ＳＤⅥ101（後期前半） ＳＤⅥ102（後期中葉） ＳＤⅥ103（中期中葉） ＳＫⅥ115（中期後半） ＳＫⅥ159（後期） ＳＫⅥ168（中～後期）	ＳＫⅥ207(中期後半～後期)	
古墳時代	ＳＫⅥ112（古墳） ＳＫⅥ161（古墳）	ＳＤⅥ202（古墳）	ＳＫⅥ307（6世紀）
古　代	ＳＫⅥ105（古代） ＳＫⅥ107（古代） ＳＫⅥ108（古代） ＳＫⅥ109（古代） ＳＫⅥ110（古代） ＳＫⅥ111（古代） ＳＫⅥ113（古代）		ＳＤⅥ303（8世紀）
中　世	掘立Ⅵ101（13世紀） 掘立Ⅵ102（13世紀） 掘立Ⅵ103（13世紀） ＳＫⅥ101（13世紀） ＳＫⅥ102（13世紀） ＳＫⅥ103（13世紀）	ＳＤⅥ201（14世紀） ＳＤⅥ203（14世紀） ＳＤⅥ204（14世紀）	ＳＤⅥ301（13世紀） ＳＤⅥ302（13世紀） ＳＫⅥ301（13世紀） ＳＫⅥ302（13世紀） ＳＫⅥ303（13世紀） ＳＫⅥ304（15世紀） ＳＫⅥ306（13世紀）

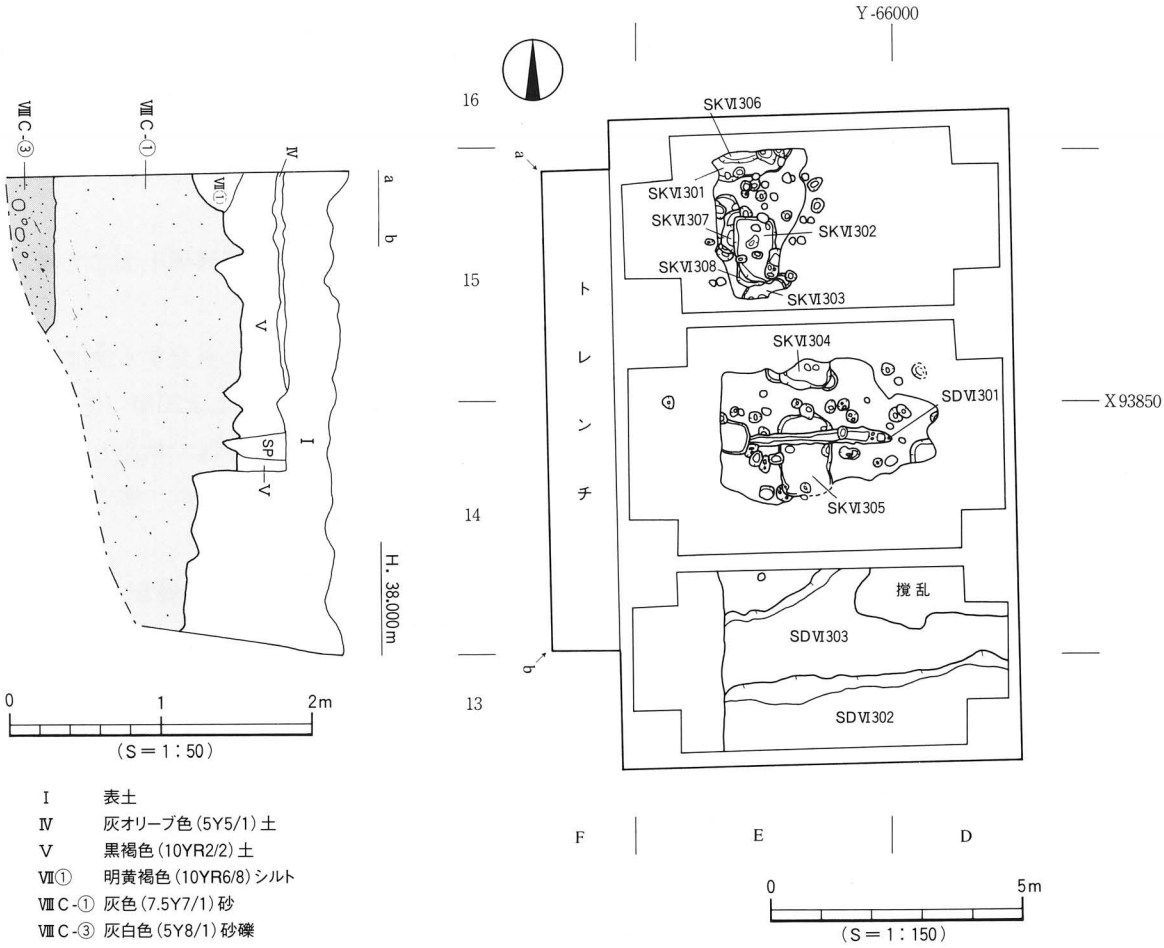


※ａ－ｂ、ｃ－ｄの土層図は第１・第２地区東壁土層図、ｄ－ｅは第２地区北壁土層図、ｆ－ａは第１地区南壁土層図の反転図である。ｇ－ｈ、ｉ－ｊ間の土層図は遺構配置図のポイント（▲）における第Ⅶ-①層上面から設定したトレンチの土層図である。

※遺構配置図、土層図の平面の縮尺は1/150であるが、断面の深さは1/50である。

Ⅰ	表土
ⅡB-②	灰黄褐色（10YR6/2）土
Ⅲ	褐灰色（7.5YR4/1）土
Ⅳ	灰オリーブ色（5Y5/3）土
Ⅴ	黒褐色（10YR2/2）土
Ⅵ	黒褐色（10YR2/2）土＋明黄褐色（10YR6/8）土
Ⅶ①	明黄褐色（10YR6/8）シルト
Ⅶ②	明黄褐色（10YR6/8）シルトに砂が少量混入
ⅧC-①	灰色（7.5Y7/1）～オリーブ色（5Y5/4）微砂・砂・粗砂・砂礫
ⅧC-②	灰白色（7.5Y7/1）砂礫
ⅧC-③	灰白色（5Y8/1）砂礫
Ⅸ	洪積礫層

第195図　Ⅵ区〔第１地区・第２地区〕遺構配置図・土層図



Ⅰ　表土
Ⅳ　灰オリーブ色(5Y5/1)土
Ⅴ　黒褐色(10YR2/2)土
Ⅶ①　明黄褐色(10YR6/8)シルト
Ⅷ C-①　灰色(7.5Y7/1)砂
Ⅷ C-③　灰白色(5Y8/1)砂礫

第196図　Ⅵ区〔第3地区〕遺構配置図・土層図

3．弥生時代前期末～中期初頭の遺構と遺物

Ⅵ区の調査では、弥生時代前期末～中期初頭の遺構は溝２条、土坑85基、土器溜まり１基がある。このほか、第Ⅵ層中より当該期の遺物が出土している。

(1) 溝

ＳＤⅥ104（第197・198図、図版58～60）

第１地区の北側、Ｄ７～Ｆ８区で検出した溝である。第Ⅶ層上面での検出であり、第Ⅵ層が一部覆う。ここでは、発掘調査時の工程をふまえて、溝の構造や溝内から出土した遺物の説明を行う。

①　調査工程

調査では、弥生時代中～後期の遺物包含層である第Ⅴ層を人力で掘り下げ、第Ⅶ層上面にて溝の平面プランを確認した。

まず、調査区東西壁沿いに幅50cmのトレンチと、溝のほぼ中央部付近に、溝に直交する南北方向の幅１ｍのトレンチを設定した。東西壁及びトレンチの土層観察の結果、溝の埋土を25層（①～㉕層）に細分した。また、堆積状況をみると、土層の不整合面がみられたことから、Ⅴ区で検出した溝ＳＤ202と同様、二次的な掘削（再掘削）が行われたものと判断した。これらのことから、埋土を以下のように大きく３層に大別した。

大別した土層名は、再掘削以前に堆積した土層を「下層」、再掘削後に堆積した土層を「中層」、溝が埋没する最終段階の土層を「上層」とした。調査は各層で掘り下げをし、遺物の取り上げを行った。掘り下げでは、溝の中央部に、東西及び南北方向に直交するように、幅50cmのベルトを設定し、土層を観察しながら調査を進めた。

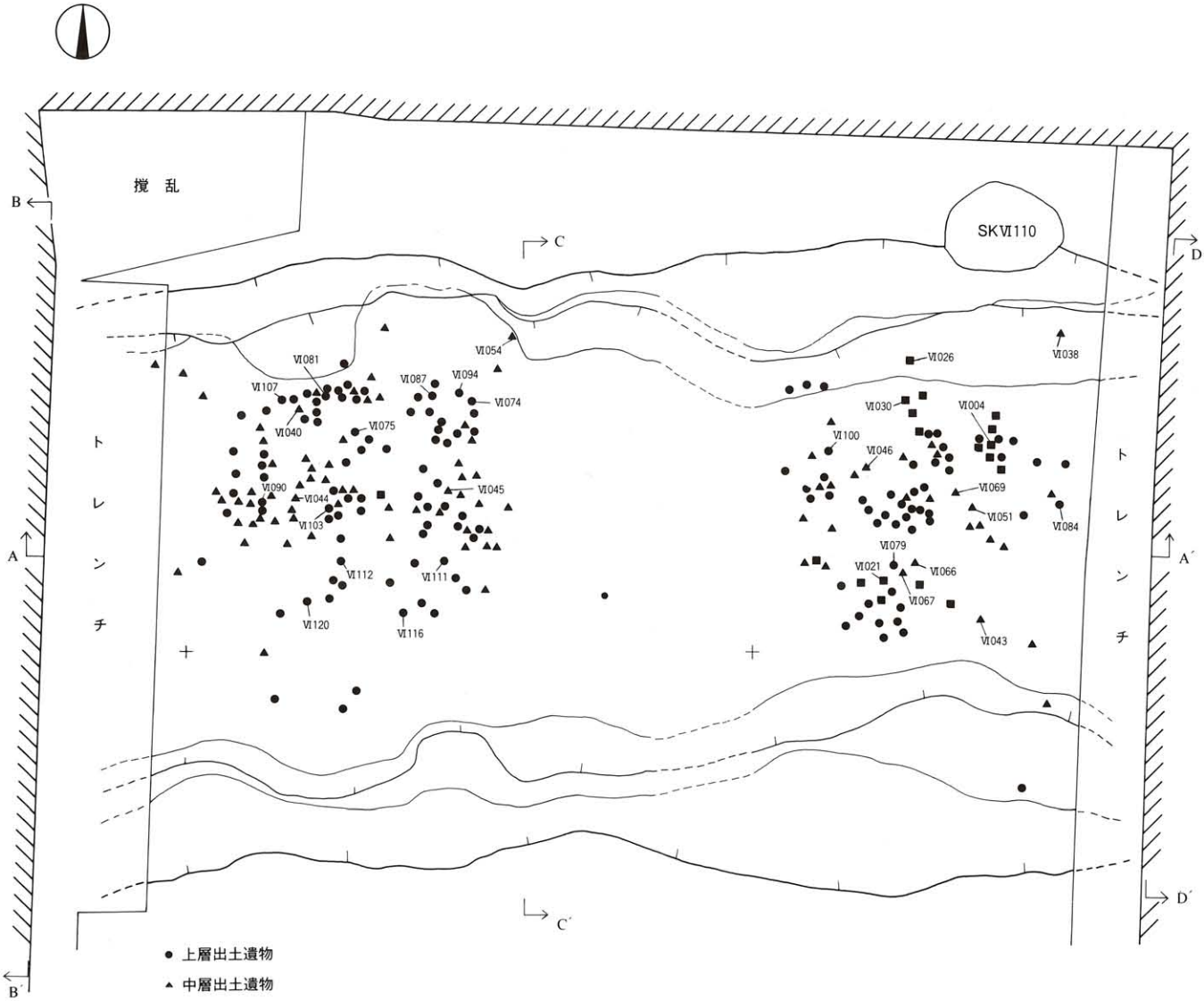
上層は厚さ30～60cmの堆積であり、遺物は溝北側にまとまって出土したが、大半は破片であった。上層部分の掘り下げを終了し、中層の上面を検出した。中層は厚さ20～40cmを測る。中層からは大型の土器片が多く、溝の北西部に集中して出土した。中層部分の掘り下げを終了し、下層上面を検出した。下層は、溝の壁面及び基底面にかけて堆積がみられた。下層の堆積状況をみると、埋没当初は溝の南側から土砂が流入している。下層からは、大小の土器片が散在して出土した。下層の掘り下げを終了し、溝の壁体と基底面を検出した。溝の壁体中位付近から基底面にかけては、第Ⅷ層を検出した。

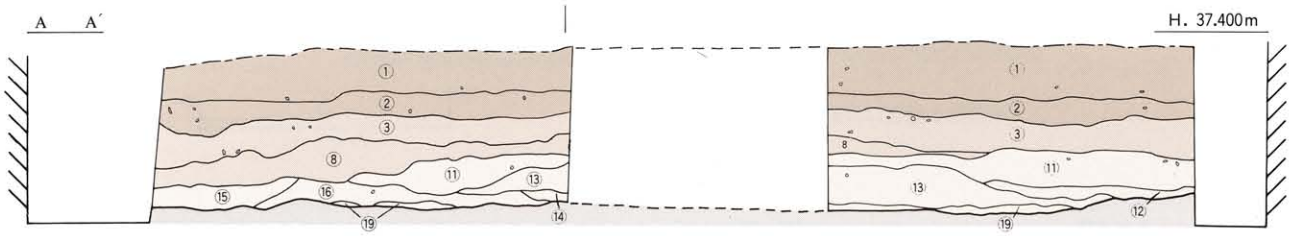
溝を完掘し、測量の後、高所作業車により完掘状況写真を撮影した。その後、（株）古環境研究所に溝埋土のサンプル採取と、土壌分析を依頼した。

②　概　　略

ＳＤⅥ104検出時の平面形状は、やや南側へ向けて湾曲する。規模は最大幅5.50ｍ、最小幅4.80ｍ、深さは検出面下1.2～1.3ｍである。溝の壁体下位及び基底面は第Ⅷ層に及んでいる。断面形態は緩やかな逆台形状を呈する。壁面の傾斜は、溝南側が北側に比べやや緩やかになり、北壁側では傾斜角60～70°、南壁側では40～50°となる。壁体の一部は水流によりオーバーハングし、くぼんでいる。溝基底面は東から西へやや傾斜し、比高差は10cmを測る。

溝の埋土は、前述したとおり25層（①～㉕層）に細分される。このうち、①・②層は「上層」、③～⑧層は「中層」、⑨～㉕層は「下層」として、遺物の取り上げや土層の掘り下げを行った。

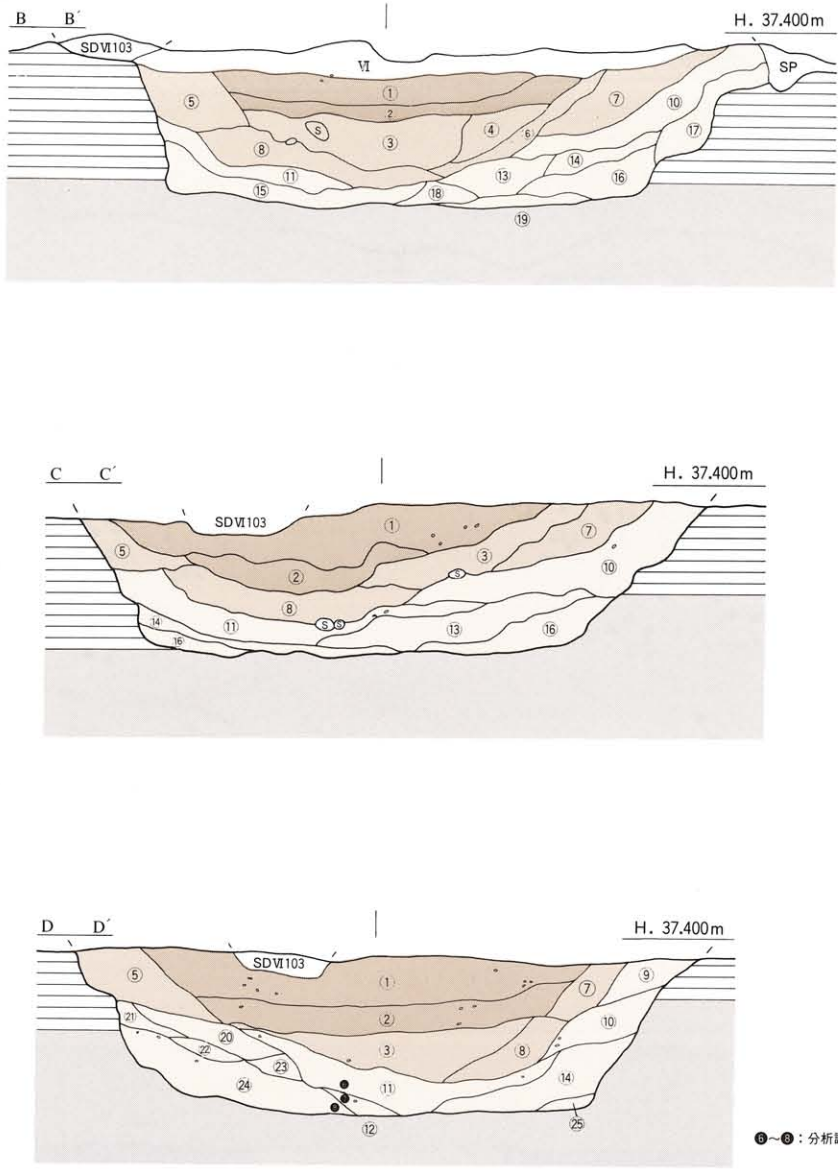




【上　層】
① 黒褐色土〔7.5YR3/2〕土
② 黒褐色土〔7.5YR3/2〕土＋明黄褐色土
【中　層】
③ 褐色〔7.5YR4/6〕土
⑧ 明黄褐色〔10YR8/6〕土
【下　層】
⑪ 浅黄色〔2.5Y7/4〕微砂
⑫ 灰黄色〔2.5Y7/2〕微砂
⑬ 灰褐色〔7.5YR5/2〕土(小レキ混入)
⑭ 灰黄色〔2.5Y6/2〕土(砂混入)
⑮ 灰黄色〔2.5Y7/2〕土
⑯ 浅黄色〔2.5Y8/3〕微砂
⑲ 浅黄色〔2.5Y8/3〕砂

0　1　2m
(S＝1：60)

第197図　ＳＤⅥ104測量図・ベルト土層図



【上　層】
① 黒褐色〔7.5YR3/2〕土
② 黒褐色〔7.5YR3/2〕土＋明黄褐色土
【中　層】
③ 褐色〔7.5YR4/6〕土
④ 暗灰黄色〔2.5Y5/2〕土
⑤ オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕土
⑥ オリーブ色〔5Y5/4〕土
⑦ 暗オリーブ色〔5Y4/4〕土
⑧ 明黄褐色〔10YR8/6〕土

【下　層】
⑨ オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕土
⑩ 黄褐色〔2.5Y5/3〕粘質土
⑪ 浅黄色〔2.5Y7/4〕微砂
⑫ 灰黄色〔2.5Y7/2〕微砂
⑬ 灰褐色〔7.5YR5/2〕土（小レキ混入）
⑭ 灰黄色〔2.5Y6/2〕土（砂混入）
⑮ 灰黄色〔2.5Y7/2〕土
⑯ 浅黄色〔2.5Y8/3〕微砂
⑰ 黄褐色〔2.5Y5/6〕土
⑱ 黄褐色〔2.5Y5/4〕土
⑲ 浅黄色〔2.5Y8/3〕微砂
⑳ 灰オリーブ色〔5Y5/3〕土
㉑ 灰オリーブ色〔5Y5/4〕土
㉒ 灰白色〔2.5Y8/1〕微砂
㉓ 灰白色〔2.5Y8/1〕砂
㉔ 灰白色〔5Y8/1〕土（小レキ混入）
㉕ 灰色〔2.5Y8/1〕粗砂

第198図　ＳＤⅥ104土層図〔上：西壁、中：ベルト、下：東壁〕

上層は、色調が黒褐色を呈し、粘性の強い土壌である。堆積状況は、上層上面で検出幅2.9～3.8mを測り、溝の壁体に沿って堆積している。中層は、色調が褐色～オリーブ褐色を呈し、粘性の強い土壌と明黄褐色土からなる。とりわけ明黄褐色土（⑧層）は、溝の南東部から北西部に向けてほぼ直線状に堆積する。下層は、灰黄色～灰白色を呈し、下層上位はやや粘性の強い土壌で、下位は微砂や粗砂を含む。

溝の堆積状況は、埋没当初は溝の南側壁体から土砂が堆積し、その後、両壁体側から傾斜堆積をなしている。特に、下層中には微砂や粗砂を含むことから、下層堆積時は溝の内部は滞水状態であったことがうかがわれる。

遺物は上・中・下層より、それぞれ土製品や石器が出土した。土器は、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定されるもので、溝内から出土した土器を観察すると、上・中・下層で時期差はあまり認められない。土器の器種構成は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、高坏形土器、ミニチュア土器がある。器種構成比は、甕形土器46%、壺形土器32%、鉢形土器16%、蓋形土器４%、高坏形土器１%、その他１%となる。壺形土器には、貝殻施文を施した土器が数点ある。また、外来系土器（東北部九州地方）が１点出土している。石器は、サヌカイト製の石鏃、緑色片岩製の柱状片刃石斧、伐採斧が出土している。なお、上層中から縄文時代晩期の深鉢片が１点出土している。

ＳＤⅥ104下層出土遺物（第199～201図－Ⅵ001～035、図版73）

ＳＤⅥ104下層からは、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、ミニチュア品と、石鏃が１点出土した。甕形土器（Ⅵ001～016）Ⅵ001～008は折り曲げにより口縁部を成形する。折り曲げが弱いもの（Ⅵ001～006）と、折り曲げが強く逆「Ｌ」字状を呈するもの（Ⅵ007・008）とがある。口縁端面には刻目を施さないもの（Ⅵ001・006）、刻目を施すもの（Ⅵ002・003・007・008）、刺突文を施すもの（Ⅵ004・005）がある。胴部文様は無文のもの（Ⅵ001）、沈線文だけのもの（Ⅵ002・008）、沈線文と刺突文が組み合うもの（Ⅵ003～005）、沈線文と凸帯文が組み合うもの（Ⅵ007）、沈線文と山形文、凸帯文が組み合うもの（Ⅵ006）の五種類がある。このうち、Ⅵ002～005の沈線文とⅥ006の山形文は２条１組の工具による。なお、Ⅵ006は凸帯上に連鎖状刻目文、Ⅵ007は指頭押圧を施す。

Ⅵ009・010は粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形する。口縁端面は刻目をもち、胴部には沈線文を施す。Ⅵ011～013は胴部片で、Ⅵ011は沈線文間に竹管文、Ⅵ012は沈線文間に刺突文と山形文（２条１組）を施す。Ⅵ013は凸帯を貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文を施す。Ⅵ014は小型品。折り曲げにより口縁部を成形する。底部は突出部をもつ平底になる。胴部内面に煤が付着する。Ⅵ015・016は底部片。Ⅵ015は平底で、底部外面に籾圧痕が残る。Ⅵ016は上げ底で、器壁は厚いものであり、東北部九州地方に同じ形態がみられる（外来系）。

壺形土器（Ⅵ017～028）Ⅵ017・018は口径が40cmを越える大型品である。短く外反する口縁部をもつ。口縁内面には凸帯をもち、頸部外面には沈線文を施す。口縁端面には沈線文を施し、Ⅵ018はさらにタテ方向の刻目を施す。Ⅵ019～021は短く外反する口縁部をもつもので、沈線文が頸部上位まで施される。Ⅵ021は小型品。口縁内面に凸帯をもち、頸部に凸帯を貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文2列を施す。Ⅵ022・023は外傾する長い口頸部をもつ。口縁内面に凸帯をもち、Ⅵ022は凸帯上に指頭押圧を加え、Ⅵ023は刻目を施す。口縁端面にはⅥ022はヘラ描き沈線文と刻目を施し、Ⅵ023は連鎖状刻目文2列を施す。Ⅵ023の口縁端面及び内面凸帯部分に赤色顔料（肉眼観察）が付着する。

Ⅵ024は口頸部片である。口縁内面に凸帯をもち、頸部には沈線文（２条１組）を施す。Ⅵ025は頸胴部片で、頸部にヘラ描き沈線文４条を施す。Ⅵ026は頸胴部～底部片で、頸部と胴部に沈線文を施す。

Ⅵ027は胴部片、Ⅵ028は底部片で、同一個体と考えられるものである。頸部にはヘラ描き沈線文４条、胴部には胴上位に凸帯を２条貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文を施す。胴上位から下位までには、ヘラ描き沈線文間に貝殻腹縁による弧文とタテ方向の直線文が施される。

鉢形土器（Ⅵ029～032）Ⅵ029・030は口径35cm前後となり、法量の大きなものである。Ⅵ029は折り曲げ、Ⅵ030は貼り付けにより口縁部を成形する。Ⅵ031は折り曲げにより口縁部を成形する。Ⅵ032は直口口縁のもので、把手が付くものと考えられる。口縁部には径２㎜大の孔が４ヶ看取される（焼成前穿孔）。

コシキ形土器（Ⅵ033）Ⅵ033は所謂「コシキ」への転用品である。甕形土器の底部を焼成後に穿孔したものである。

ミニチュア品（Ⅵ034）Ⅵ034はミニチュア品。底部は平底で、指頭痕が顕著に残る。

石鏃（Ⅵ035）Ⅵ035は平基無茎石鏃。平面形態は二等辺三角形を呈する。完形品。サヌカイト製。

ＳＤⅥ104中層出土遺物（第202～204図－Ⅵ036～070）

ＳＤⅥ104中層からは甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器と石斧が出土した。

甕形土器（Ⅵ036～046）Ⅵ036は折り曲げ、Ⅵ037～040は粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形する。口縁端面には刻目を施すもの（Ⅵ037・040）と、刻目を施さないもの（Ⅵ036・038・039）とがある。胴部文様は無文のもの（Ⅵ036・039）、沈線文を施すもの（Ⅵ038）、沈線文と刺突文が組み合うもの（Ⅵ037・040）の三種類がある。Ⅵ041・042は胴部片で、沈線文と刺突文を施す。Ⅵ043～046は底部片で、Ⅵ043は上げ底、Ⅵ044・045はやや上げ底、Ⅵ046は平底になる。

壺形土器（Ⅵ047～060）Ⅵ047・048は短く外反する口縁部をもつもので、頸部には沈線文を施すもの（Ⅵ047）と、削り出し凸帯をもつもの（Ⅵ048）とがある。Ⅵ049～053は外傾、外反する長い口頸部をもつ。いずれも口縁部内面に凸帯をもつ。Ⅵ049・050は凸帯は全周せず、Ⅵ049は一部が注口状になる。Ⅵ049・053は凸帯上に押圧を施し、Ⅵ050・052は刻目を施す。Ⅵ051は凸帯上面に竹管文を３列施す。Ⅵ054は頸部片で、刻目凸帯を２条貼り付ける。Ⅵ055～057は胴部片で、Ⅵ055はヘラ描き沈線文、Ⅵ056は凸帯文、Ⅵ057は沈線文と凸帯が組み合う。なお、Ⅵ057は凸帯上に連鎖状刻目文２列を施す。Ⅵ058～060は底部片で、Ⅵ058・059はわずかに上げ底、Ⅵ060は上げ底になる。

鉢形土器（Ⅵ061～065）Ⅵ061は口縁部が緩やかに外反し、口縁端面に刻目を施す。Ⅵ062は貼り付けにより口縁部を成形する。Ⅵ063・064は直口口縁のものである。Ⅵ064は口縁端面に押圧を施す。Ⅵ065は底部片で、突出部をもつ平底となる。

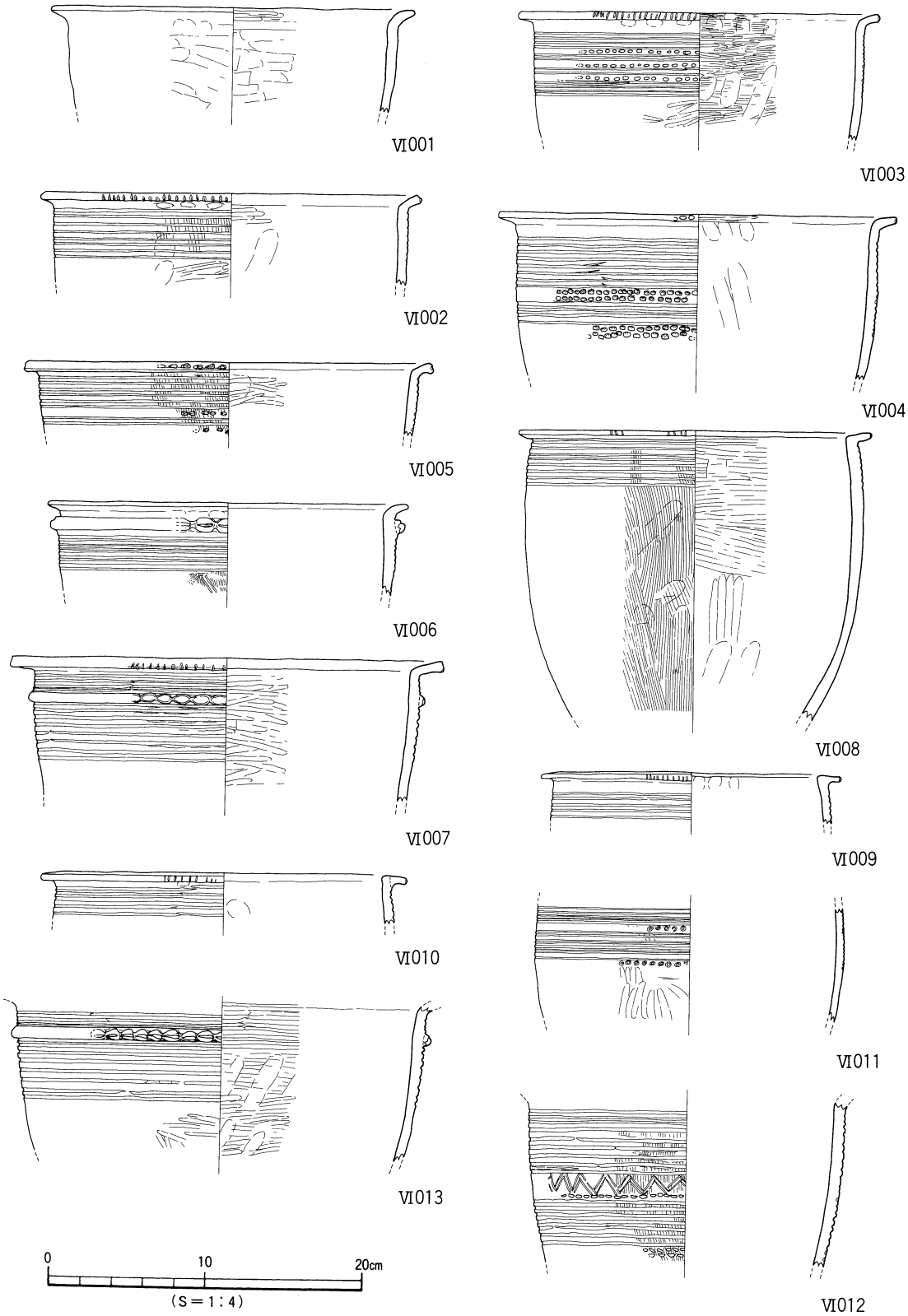
高坏形土器（Ⅵ066）Ⅵ066は高坏形土器の坏部片。坏部上位と脚部は欠損する。

蓋形土器（Ⅵ067）口縁部は緩やかに開き、口縁端部は丸く仕上げる。口縁内面に煤が付着する。

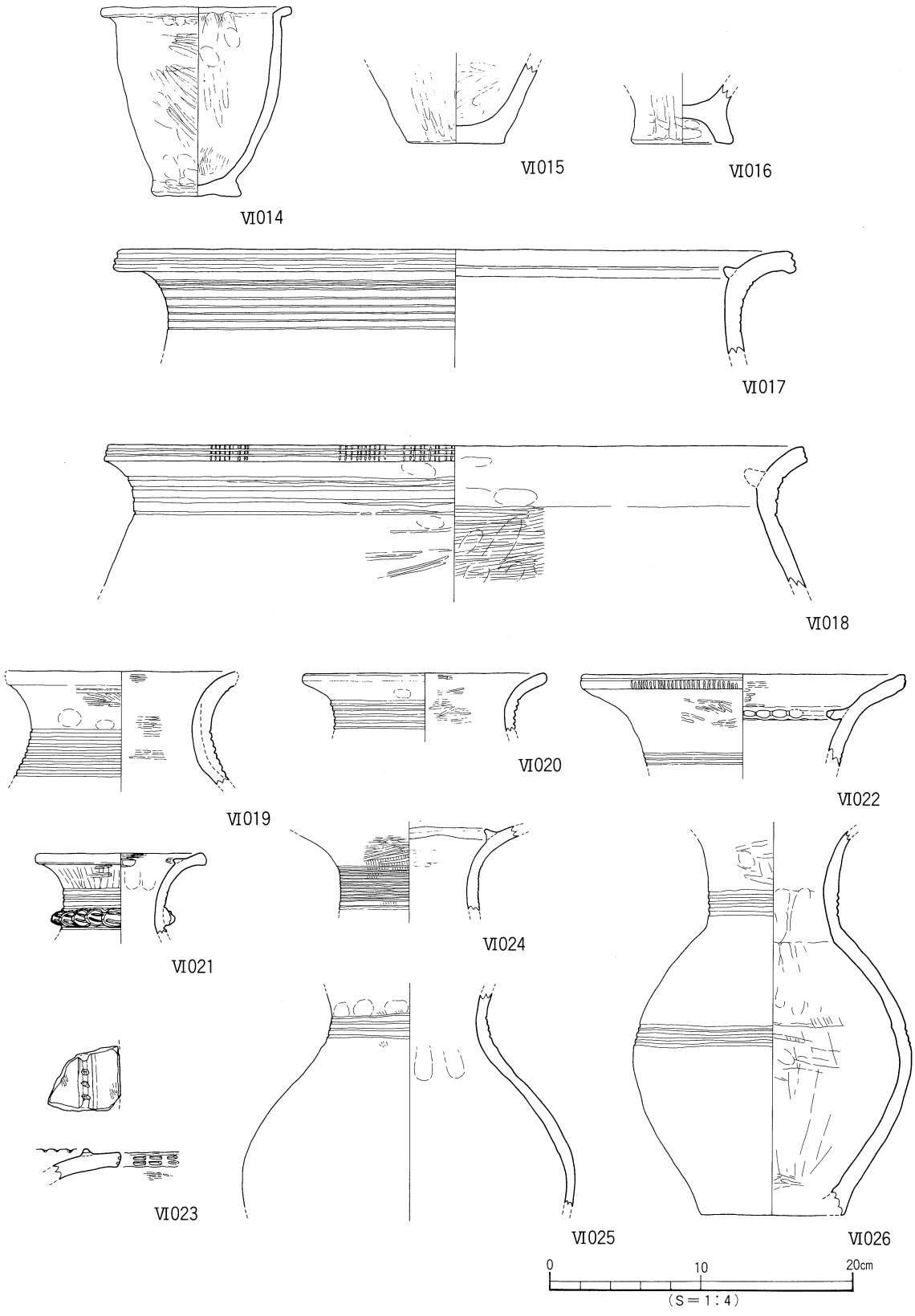
柱状片刃石斧（Ⅵ068）Ⅵ068は緑色片岩製の柱状片刃石斧である。刃部は欠損している。断面形態は身膨れした長方形となる。側面に敲打痕を残す。

伐採斧（Ⅵ069）Ⅵ069は安山岩製の伐採斧である。基部は欠損している。断面形態は楕円形を呈する。全面に研磨を施し、側面に一部、敲打痕を残す。

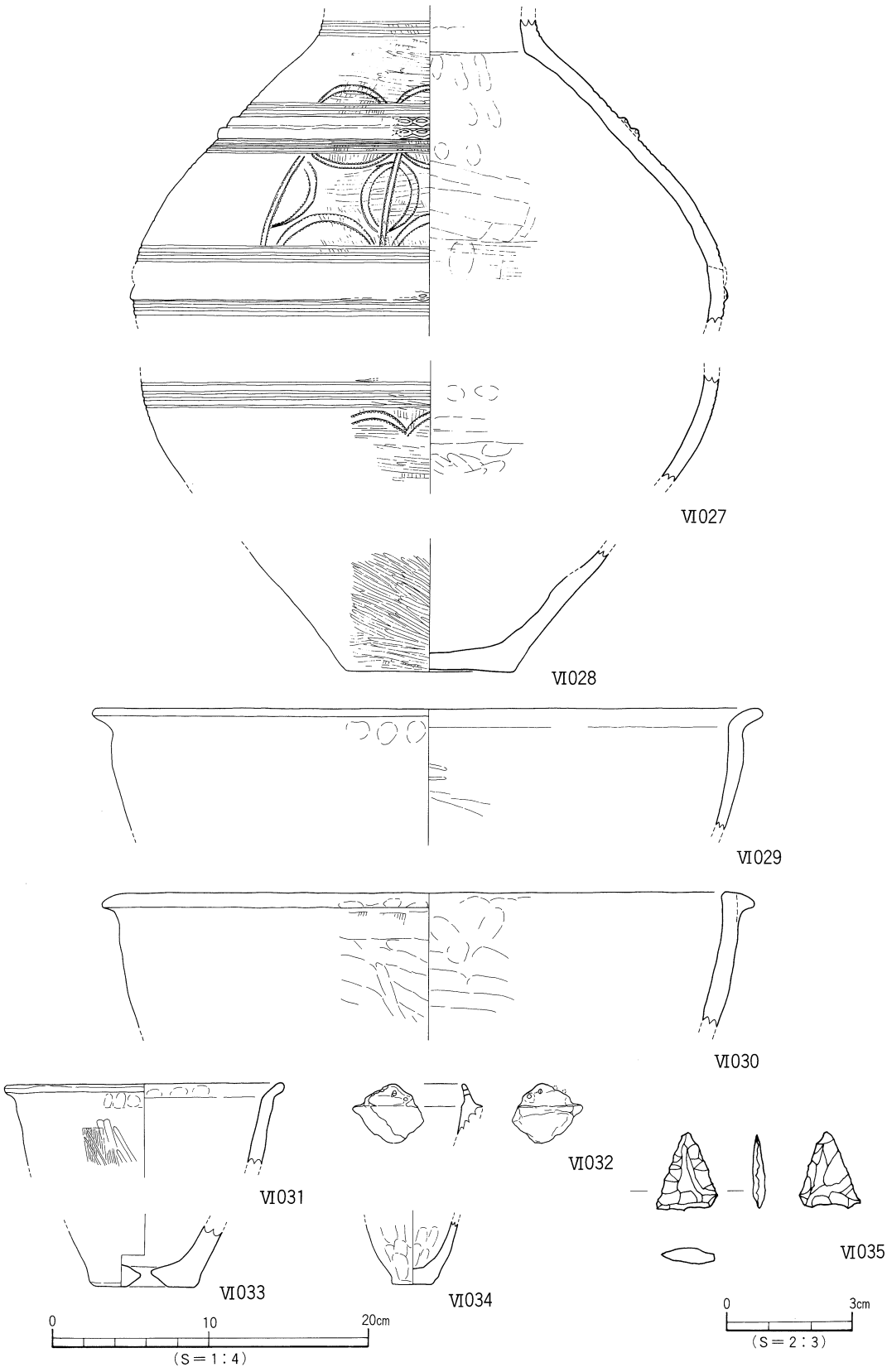
器種不明品（Ⅵ070）Ⅵ070は用途不明品である。自然面を残し、一部研磨を施す。



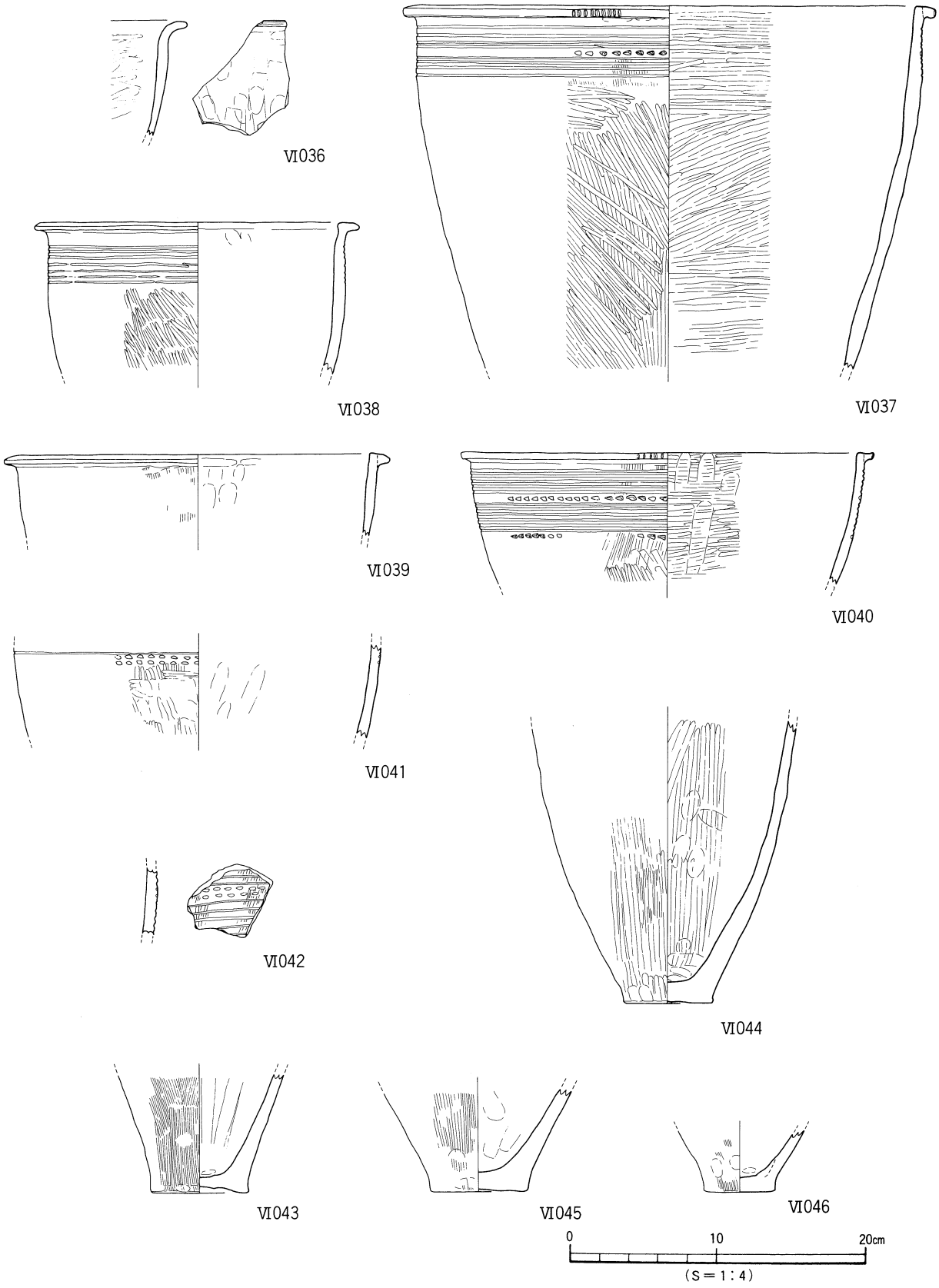
第199図　ＳＤⅥ104下層出土遺物実測図(1)



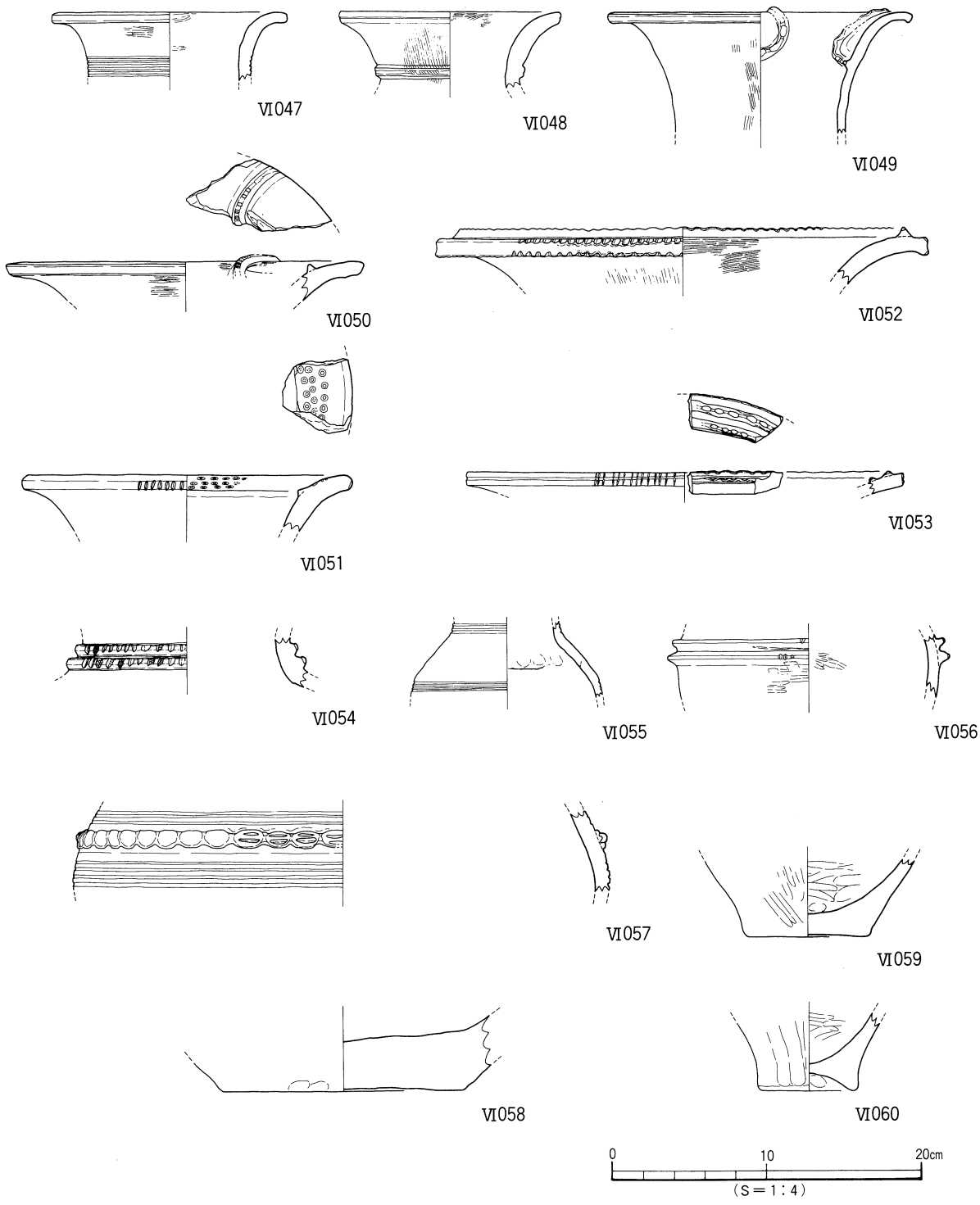
第200図　ＳＤⅥ104下層出土遺物実測図(2)



第201図　ＳＤⅥ104下層出土遺物実測図(3)



第202図　ＳＤⅥ104中層出土遺物実測図(1)



第203図　ＳＤⅥ104中層出土遺物実測図(2)